



Karl Marx, Friedrich Engels, Vladimir Lenin, Joseph Stalin, Enver Hoxha

5 Classics of Marxism

Comintern (Stalinist-Hoxhaists)

<http://ciml.250x.com>



GEORGIA

Georgian Section
www.joseph-stalin.net

SHMG Press

Karl Marx Press of the Georgian section of
Comintern (SH) – Stalinist-Hoxhaists Movement of Georgia

イ・スターリン

レーニン主義の
諸問題

萬國の労働者團結せよ！

イ・スターリン

レーニン主義の 諸問題



外 國 語 圖 書 出 版 所
一 九 五 三 年 ・ モ ス ク ワ



U. G. amu

出版所より

イ・ヴェ・スタールソンの勞作
「レーニン主義の諸問題」の日本
語版は、最新刊（第十一版）のロ
シア語版（國立政治圖書出版所）
によつたものである。

目次

序

レーニン主義の基礎（スヴェルドロフ大學において行われた講演）……………二一

一、レーニン主義の歴史的根源……………二四

二、方法……………三一

三、理論……………四〇

四、プロレタリアートの獨裁……………六〇

五、農民問題……………七六

六、民族問題……………九一

七、戦略と戦術……………一〇二

八、黨……………一二二

九、活動の様式……………一三九

十月革命とロシア共産主義者の戦術（著書「十月革命への途上」の序文）……………一四三

一、十月革命の國外的並に國內的情勢……………一四三

二、十月革命の二つの特殊性について、または、十月革命とトロツキーの「永 續」革命論……………	一四七
三、十月革命の準備期におけるボルシエヴィキ戦術の若干の特殊性について……	一六七
四、世界革命の端緒及び前提としての十月革命……………	一八三
レーニン主義の諸問題について……………	一八九
一、レーニン主義の定義……………	一八九
二、レーニン主義の主眼點……………	一九二
三、「永續」革命についての問題……………	一九五
四、プロレタリア革命とプロレタリアートの獨裁……………	一九九
五、プロレタリアート獨裁の體系内における黨と労働者階級……………	二一二
六、一國における社會主義の勝利についての問題……………	二四五
七、社會主義建設の勝利をめざす闘争……………	二六三
農民問題に關する黨の三つの基本的スローガンについて（ヤン——スキーへの 回答）……………	二八〇
十月革命の準備期におけるプロレタリアートと貧農との獨裁のスローガンについて （エス・ボクロフスキーへの回答）……………	二九七

十月革命の國際的性格（十月革命十周年に際して）……………	三一二
穀物戰線において（一九二八年五月二十八日に行われた、赤色教授養成所、共產主義	
學士院、スヴェルドロフ大學の學生達との會談からの抜萃）……………	三二三
中農との同盟についての問題とレーニン（同志エス…への回答）……………	三四〇
ソ同盟共產黨（ボルシエヴィキ）内における右翼的危險について（一九二八年十月十	
九日のモスクワの黨委員會並にモスクワの黨統制委員會の總會における演説）……………	三五七
ソ同盟共產黨（ボルシエヴィキ）内の右翼的偏向について（一九二九年四月のソ同盟	
共產黨（ボルシエヴィキ）中央委員會並に中央統制委員會の總會における演説）……………	三七五
一、階級的諸變動と吾々の間の意見の不一致……………	三七五
二、コミンテルンの方針についての意見の不一致……………	三八五
三、國內政策の方針に關しての意見の不一致……………	三九三
（イ）階級闘争について……………	三九四
（ロ）階級闘争の尖鋭化について……………	四〇二
（ハ）農民について……………	四〇七
（ニ）ネツプ（新經濟政策）と市場關係とについて……………	四一一
（ホ）工業發展のテンポと結合の新形態とについて……………	四一七

(ハ) 理論家としてのプハリン	四三〇
(ト) 五カ年計畫か二カ年計畫か	四四四
(チ) 播種面積についての問題	四四八
(リ) 穀物調達について	四五一
四、右翼的偏向に對する鬭争について	四五八
偉大なる轉換の年(十月革命第十二周年記念日に際して)	四六二
一、労働生産能力の領域において	四六三
二、工業建設の領域において	四六五
三、農業建設の領域において	四六九
結論	四八〇
ツ同盟における農業政策の問題について(一九二九年十二月二十七日におけるマルクス主義者・農業問題専門家の會議における演説)	四八一
一、「均衡」論	四八三
二、社會主義建設における「自然發展」論	四八七
三、小農經營の「安定性」についての理論	四八九
四、都市と農村	四九七

五、	コルホーズの本質について……………	五〇二
六、	階級變動と黨政策上の轉換……………	五〇七
七、	結論……………	五一二
	階級としてのクラーク絶滅の政策に關する問題について……………	五一五
	成功による眩惑（コルホーズ化運動の問題について）……………	五二一
	同志コルホーズ員達への回答……………	五三一
	經營家の任務について（一九三一年二月四日の社會主義工業の働き手達の第一回全同盟會議における演説）……………	五六一
	新情勢と經濟建設上の新任務（一九三一年六月二十三日の經營家の協議會で行われた演説）……………	五七六
一、	勞働力……………	五七七
二、	勞働者の賃銀……………	五八〇
三、	勞働の組織……………	五八六
四、	勞働者階級の生産・技術上のインテリゲンチヤについての問題……………	五九一
五、	生産・技術における舊インテリゲンチヤ間の轉換徴候……………	五九五
六、	獨立採算制について……………	五九九

七、新しい方法で仕事をし、新しい方法で指導すること……………	六〇三
ボルシエヴイズムの歴史上における二——三の問題について（『プロレタルスカヤ・レヴオリユーチヤ』誌編集局宛の手紙）……………	六〇八
第一次五カ年計畫實現の總結果（一九三三年一月七日のソ同盟共產黨（ボルシエヴイキ）中央委員會と中央統制委員會との合同總會での報告演説）……………	六二八
一、五カ年計畫の國際的意義……………	六二八
二、五カ年計畫の基本的任務とその實現の道……………	六四一
三、工業の領域における五カ年計畫を四カ年に遂行した總結果……………	六四八
四、農業の領域における五カ年計畫を四カ年に遂行した總結果……………	六五九
五、労働者並に農民の物質的狀態改善の領域において五カ年計畫を四カ年に遂行した總結果……………	六六七
六、都市と農村間の商品流通領域における五カ年計畫を四カ年に遂行した總結果……………	六七三
七、敵對的諸階級殘存分子との闘争の領域において五カ年計畫を四カ年に遂行した總結果……………	六七八

八、一般的結論……………	六八三
農村における活動について（ソ同盟共産黨（ボルシエヴィキ）中央委員會及び中央統 制委員會の合同總會において一九三三年一月十一日に行われた演説）……………	六八七
コルホーズ員・突撃作業班員達の第一回全同盟大會における演説（一九三三年二月十 九日）……………	七〇七
一、コルホーズの道は唯一の正しい道である……………	七〇七
二、われわれの當面の任務は全コルホーズ員を裕福にすることである……………	七一七
三、個々の注意事項……………	七二二
ソヴェト同盟共産黨（ボルシエヴィキ）中央委員會の活動に関する第十七回黨大會へ の報告演説（一九三四年一月二十六日）……………	七二九
一、世界資本主義のひき續く恐慌とソヴェト同盟の對外的地位……………	七二九
一、資本主義諸國における經濟恐慌の動き……………	七三一
二、資本主義諸國における政治情勢の尖鋭化……………	七三八
三、ソ同盟と資本主義諸國家との關係……………	七四七
二、ソ同盟國民經濟のひき續く高揚と國內情勢……………	七五三
一、工業の高揚……………	七五六

二、農業の高揚……………	七六五
三、勤勞者の物質状態及び文化の高揚……………	七八一
四、商品取引の高揚及び輸送……………	七八七
三、黨……………	七九三
一、思想的・政治的指導の諸問題……………	七九四
二、組織的指導の諸問題……………	八一〇
結語のかわりに……………	八二五
クレムリン宮殿における赤軍大學卒業式において行われた演説（一九三五年五月四日）……………	八二六
スタハーノフ運動者第一回全同盟會議における演説（一九三五年十一月十七日）……………	八三五
一、スタハーノフ運動の意義……………	八三五
二、スタハーノフ運動の根源……………	八四一
三、新しい人々——新しい技術的規準定量……………	八四七
四、當面の任務……………	八五一
五、數言……………	八五四
ソ同盟憲法草案について（一九三六年十一月二十五日第八回臨時全同盟ソヴェト大會における報告演説）……………	八五六

一、憲法制定委員會の形成とその任務……………	八五六
二、一九二四年から一九三六年に至るまでの期間中においてソ同盟生活上に生じた諸變化……………	八五八
三、憲法草案の基本的特質……………	八六七
四、憲法草案に對するブルジョアの批判……………	八七三
五、憲法草案に對する修正案並に追加案……………	八八二
六、ソ同盟新憲法の意義……………	八九六
辯證法的及び史的唯物論について（一九三八年九月）……………	八九八
ソ同盟共產黨（ボルシエヅイキ）中央委員會の活動に關する第十八回黨大會における報告演說（一九三九年三月十日）……………	九三九
一、ソヴェト同盟の國際的地位……………	九三九
一、資本主義諸國における新經濟恐慌、販賣市場、原料資源、世界新再分割をめざす鬭争の尖鋭化……………	九四〇
二、國際政治情勢の尖鋭化、平和條約の戰後體制の崩壞、新帝國主義戰爭の開始……………	九四五
三、ソヴェト同盟と資本主義諸國……………	九五三

二、ソヴェト同盟の國內情勢……………	九五六
一、工業と農業との一層の高揚……………	九五七
二、國民の物質的並に文化的狀態の一層の向上……………	九七二
三、ソヴェト制度の一層の鞏固化……………	九七八
三、ソ同盟共産黨（ボルシエヴィキ）の一層の強化……………	九八二
一、黨成員の改善策。組織の細分。指導機關の下部活動への一層の接近……………	九八三
二、カードルの選抜、かれらの昇進、かれらの配置……………	九八六
三、黨の宣傳。黨員並に黨カードルのマルクス主義・レーニン主義的教育……………	九九〇
四、理論についての若干の問題……………	九九四
註解……………	〇一一

序

この「レーニン主義の諸問題」の第十一版は、多少とも目下の情勢に關連する次の新しい諸勞作が含まれている點で第十版とちがつている。

- 一、「クレムリン宮殿における赤軍大學卒業式において行われた演説」(一九三五年五月四日)
- 二、「スタハーノフ運動者第一回全同盟會議における演説」(一九三五年十一月十七日)
- 三、「ソ同盟憲法草案について」(一九三六年十一月二十五日第八回臨時全同盟ソヴェト大會における報告演説)

四、「辯證法的及び史的唯物論について」(一九三八年九月「ソヴェト同盟共產黨(ボルシエヅイキ)歴史・小教程」のために同志スターリンによつて書かれた勞作)

五、ソ同盟共産黨（ボルシエヴィキ）中央委員會の活動に關する第十八回黨大會における報告演説（一九三九年三月十日）

「レーニン主義の諸問題」のこの版では、從來の本の厚さを保つために第十版に收められた「第一回アメリカ労働者代表との會談」、第十六回ソ同盟共産黨（ボルシエヴィキ）大會における中央委員會の報告演説」と「英國作家——エイチ・ヂ・ヴェルズとの會談」ははぶいた。

これらの變改は著者の同意をえて行われたのである。

レーニン主義の 諸問題

レーニン主義の基礎

スヴェルドロフ大學において行われた講演

レーニン記念黨員募集によつて
入黨した同志達にささぐ

イ・スターリン

レーニン主義の基礎——これは大きな題目である。この題目をあますところなく説明するために、一卷の大冊が必要である。それどころか、數卷の大冊が必要である。で、私の講演がレーニン主義を説明しつづけたものであり得ないのは當然である。それは、せいせいレーニン主義の基礎を略述した綱要であるに過ぎない。それにも拘らず、私は、レーニン主義を充分よく研究するために必要な若干の根本的出發點とするために、この綱要を叙述することが有益であると考える。

レーニン主義の基礎を説明することは、レーニンの世界觀の基礎を説明することになるわけではない。レーニンの世界觀とレーニン主義の基礎とは、その容積からいって、同一なものではない。レーニンはマルクス主義者であり、したがつて、彼の世界觀の基礎はもちろん、マルクス主義である。だが、それだからといつて、レーニン主義の叙述は、マルクス主義の基礎の叙述から始められなければならない、ということには決してならない。レーニン主義を説明することは、レーニンがマルク

ス主義の全般的寶庫に寄與し、當然彼の名前と結びついているレーニンの勞作中の、特殊な、新しいものを説明することを意味する。この意味でのみ、私は自分の講演で、レーニン主義の基礎について述べるつもりである。

しからば、レーニン主義とは何か？

ある者はいう——レーニン主義とはロシアの情勢の獨特な諸條件に、マルクス主義を適用したものであると。この定義には一分の眞理は含まれているが、まだまだすべての眞理をいいつくしてはいない。實際、レーニンはマルクス主義をロシアの現實に適用し、しかもこれを巧みに適用した。だが、もしレーニン主義がロシアの獨特な情勢に對するマルクス主義の適用にすぎないならば、その場合には、レーニン主義は純粹に民族的な、そしてただ民族的なだけの、純粹にロシア的な、そしてただロシア的なだけの現象であつただろう。しかるに吾々は、レーニン主義が、あらゆる國際的發展にその根をもつている國際的現象であり、ロシアのみの現象ではないことを知つてゐる。だからこそ、私はこの定義が一面的であるという缺點を持つてゐるといふのである。

他の者はこういふ——レーニン主義は、穩和な非革命的なものとなつたかのようにいわれてゐる。後年のマルクス主義とは違つて、十九世紀の四十年代におけるマルクス主義の革命的要素の復活である。マルクスの教義を二つの部分、すなわち革命的な部分と穩和な部分とに分けるこの愚劣な、また俗惡な分類のやり方を問題外とするならば、この全く不十分な、不満足な定義の中にさえ、一分の眞理があることを認めなければならぬ。その一部の眞理は、レーニンが第二インターナショナルの日和見主義者によつて生理にされたマルクス主義の革命的内容を、實際に復活させたという點にある。だが、これはただ一分の眞理にすぎない。レーニン主義に關する全眞理は、レーニン主義が單にマル

クス主義を復活させたばかりでなく、資本主義およびプロレタリアートの階級闘争の新しい諸条件の下において、マルクス主義を一層發展させつつ、それが更に一步前進したという點にある。

しからは、レーニン主義とは結局何か？

レーニン主義は、帝國主義及びプロレタリア革命時代のマルクス主義である。もつと正確にいうならば、レーニン主義とは、一般的にはプロレタリア革命の理論と戦術であり、特殊的にはプロレタリアート獨裁の理論と戦術である。マルクス及びエンゲルスは、發展した帝國主義がまだなかつた革命前（われわれはプロレタリア革命のことをいつているのである）の時期に、すなわちプロレタリアを革命のために訓練する時期に、プロレタリア革命がまだ直接實踐的に必然的なものでなかつた時期に、活動したのであつた。しかるに、マルクス及びエンゲルスの弟子としてのレーニンは、發展した帝國主義の時期に、言いかえれば、プロレタリア革命がすでに一國において勝利し、ブルジョア民主主義を粉碎し、プロレタリア民主主義の時代、ソヴェト時代を開いたところの、プロレタリア革命の展開期に活動したのである。

これが、レーニン主義はマルクス主義の一層の發展なりという所以である。

通常、レーニン主義の殊に戰闘的な、殊に革命的な性質が指摘されている。これは全く正しい。だがレーニン主義のこの特殊性は、二つのことが原因となつてゐる。すなわち第一には、レーニン主義がプロレタリア革命の胎内から生れたものであつて、その刻印を常に身につけざるを得ないということ、第二には、レーニン主義が、第二インターナショナルの日和見主義——これとの闘争は資本主義との闘争に成功するために必要不可欠の事である——と、また現にそうである——との闘争において成長し、強化したということである。一方にはマルクス及びエンゲルス、他方には

レーニン、この間には、第二インターナショナルの日和見主義が完全に支配していた一つの時代が横たわっており、この日和見主義との假借ない闘争が、レーニン主義の最も重要な任務の一つとならざるを得なかつた、ということをおぼえてはならない。

一、レーニン主義の歴史的根源

レーニン主義は、資本主義の矛盾が極點に達し、プロレタリア革命が直接實踐の問題となり、労働者階級を革命のために訓練する古い時期が、資本主義に對する直接襲撃の新時期に到達し、成長轉化したところの、帝國主義の諸情勢の下に成長し、形成された。

レーニンは、帝國主義を「死滅しつつある資本主義」と呼んだ。何故か？ なせならば、帝國主義は、資本主義の矛盾を最後の點まで、すなわち一步そこを越えれば革命が始まるという極限まで、持つてゆくからである。これらの矛盾のうちで次の三つの矛盾を最も重要なものと見なさなければならぬ。

第一の矛盾——これは、労働と資本との間の矛盾である。帝國主義とは、工業諸國における獨占的トラストとシンジケート、銀行と金融團の全能ということである。この全能に對する闘争において、労働者階級の普通の方法——労働組合と協同組合、議會政黨と議會闘争——は、全く不充分であることがわかつた。資本の恩恵に身を委ねて、昔のままに惨めな生活をつづけ、益々窮乏におちいつてゆくか、それとも新しい武器をとるか——帝國主義は、幾百萬のプロレタリア大衆の前に、こう問題を提出する。帝國主義は、労働者階級を革命に赴かしめるのである。

第二の矛盾——これは、原料産地や他國の領土獲得のための鬭争における各種金融グループ間及び帝國主義列強間の矛盾である。帝國主義は原料産地への資本の輸出であり、これらの原料産地の獨占的領有のための狂的な鬭争であり、すでに分割された世界の再分割のための鬭争であり、「日あたりのよい場所」を探し求めて新しい金融グループと諸列強が、すでに獲得したものにがむじやらにかじりついてゐる古いグループと諸列強に反對して、特別な兇暴さで遂行する鬭争である。色々の資本家グループ間のこの狂的な鬭争は、その不可避的な要素として、帝國主義戦争、すなわち他國の領土強奪のための戦争を、それ自身の中に含んでゐるという點で注目し値する。だがこの事情は、今度はそれが帝國主義者を相互に弱らせ、一般に資本主義の地位を弱め、プロレタリア革命の時期を近づけ、この革命をして實踐的に必須ならしめるという點で、また注目に値する。

第三の矛盾——これは、極く少數の支配的な「文明」民族と、世界の幾億萬という植民地並に隷屬國民との間の矛盾である。帝國主義は、龐大な植民地及び隷屬國の幾億萬という住民に對する最も破廉恥極まる搾取であり、最も非人間的な抑壓である。超過利潤を搾り出すこと、これがこの搾取と抑壓の目的である。だが、これらの國を搾取すると同時に、帝國主義はこれらの國に鐵道を敷設し、工場を建て、工業並に商業の中心地を建設しなくてはならない。プロレタリア階級の出現、その土地のインテリゲンチヤの發生、民族意識の覺醒、解放運動の強化——これらが、この「政策」の必然的な結果である。例外なくすべての植民地並に隷屬國において革命運動が強化しつつあるということ、明白に以上のことを立證してゐる。この事情は、それが植民地並に隷屬國を帝國主義の豫備隊からプロレタリア革命の豫備隊に轉化させることによつて、資本主義の地位を根底から掘り崩してゐるという點において、プロレタリアートにとつて重要である。

以上が、大體において、古い、「榮え行く」資本主義を死滅しつつある資本主義に轉化させた、帝國主義の主要な矛盾である。

十年前に勃發した帝國主義戰爭の意義は、なかんずく、この戰爭がすべてこれらの矛盾を一つの結び目に結合し、これを秤皿に投じて、プロレタリアートの革命的戰闘を促進し、かつ容易ならしめたという點にある。

換言すれば、帝國主義は、革命を實踐的に不可避なものたらしめたのみでなく、資本主義の城塞を直接襲撃するための、有利な諸條件をつくるに至らしめたのである。

右がレーニン主義を生んだ國際情勢である。

ある者はこういうかも知れない——それは、みんな結構なことだ。だが、ロシアは一體それとどんな關係があるか？ ロシアは帝國主義の典型的な國ではなかつたし、またその様な國ではあり得なかつたではないか？ 主としてロシアにおいて、またロシアのために活動したレーニンは、一體それとどんな關係があるか？ なせ特にロシアが、レーニン主義の根源地となり、プロレタリア革命の理論と戰術の出生地となつたのか？ と。

なせならば、ロシアは、すべてこれらの、帝國主義の矛盾の結集點であつたからである。

なせならば、ロシアは、他のいかなる國よりもつと、革命を孕んでいたからであり、その結果として、ただロシアのみがこれらの矛盾を革命的方法によつて解決することができたからである。

まず、ツァー・ロシアは、最も非人間的な、野蠻な形態をもつ、あらゆる種類の抑壓——資本主義的並に植地的並に軍事的抑壓——の根源地であつたということからはじまる。ロシアにおいては資本の全能がツァー制の暴政と融合し、ロシア民族主義の侵略的性質が非ロシア民族に對するツァー

制の殘忍非道さと融合し、廣汎な地域——トルコ、ベルシヤ、中國——に對する擄取が、ツアー制によるこれらの地域の強奪や強奪のための戦争と融合していたことを、知らぬものがあるか？ ツアー制は「軍事的・封建的帝國主義である」と、レーニンがいつたのは正しかった。ツアー制は、帝國主義の最惡な方面を自乗したものの集中點であつた。

更に、ツアー・ロシアは、燃料工業や冶金工業のような、ロシア國民經濟の決定的部門をその手に握つていた外國資本に對して、自由な侵入を許したという意味においてばかりでなく、また西歐の帝國主義者のために幾百萬という兵士を提供することができた意味においても、西歐帝國主義の最大の豫備隊であつた。英佛資本家に、法外に龐大な利潤を保證するために、帝國主義戦線で血を流した千四百萬を數えるロシアの軍隊を想起して見よ。

更に、ツアー制は、東ヨーロッパにおける帝國主義の番犬であつたばかりでなく、パリやロンドン、ベルリンやブラッセルにおいて、ツアー制のために支出された借款に對する幾億の利子を、住民から絞りとるための西歐帝國主義の手先でもあつた。

最後に、ツアー制は、トルコ、ベルシヤ、中國等々の分割のための西歐帝國主義の最も忠實な同盟者であつた。帝國主義戦争がツアー制によつて、連合國の帝國主義者と結托して遂行されたこと、ロシアがこの戦争の本質的な一要素であつたことを、知らぬものがあるか？

だからこそ、ツアー制と西歐帝國主義の利益とは互にからみ合つており、結局、帝國主義の利益の一つの糸束に巻き合わされたのである。

西歐の帝國主義が、ツアー制を擁護し、保持することを目的として、ロシアにおける革命と必死の闘争を遂行するためにその全力を傾注することなく、昔の、ツアーの支配する、ブルジョア・ロシ

アの如き東方におけるかかる強力な支柱と、力と富とのかくも豊かな貯藏所を失うことに甘んずることが出来たであろうか？ 勿論出来ないことであつた！

しかして以上のことから、ツァー制を打破しようとする者は、不可避的に帝國主義に對して手をふり上げることがを要し、ツァー制に對して蜂起した者はまた、帝國主義に對しても蜂起せざるを得なかつた、ということになる。何故ならば、ツァー制を倒した者は、もし彼が實際に、ツァー制を粉碎するばかりでなく、これを痕跡をもとどめぬまで粉碎しつくそうと考へたならば、帝國主義をも倒さなければならなかつたからである。かようにして、ツァー制に對する革命は、帝國主義に對する革命に、プロレタリア革命に接近したのであり、これに成長轉化せざるを得なかつたのである。

とかくするうちに、ロシアにおいては極めて偉大な人民革命が起り、その先頭には、ロシアの革命的農民のような重要な同盟者を持つていた、世界で最も革命的なプロレタリアートが立つていた。かかる革命が中途で止り得なかつたこと、その革命が成功の暁には、帝國主義に對する蜂起の旗幟をかかげて、更に前進せざるを得なかつたことを、論證する必要があるだろうか？

だからこそ、ロシアは帝國主義の矛盾が、その特に醜惡な、特に堪え難い性質のために、ロシアにおいてこそ最も容易に暴露せられたという意味においてばかりでなく、またロシアが西歐の金融資本と東洋の植民地とを結びつけている、西歐帝國主義の最も重要な支柱であつたためばかりでなく、帝國主義の矛盾を革命的方法によつて解決することができた現實的力が、ただロシアにのみ存在していたという意味でも、帝國主義の矛盾の結集點とならざるを得なかつたのである。

しかして以上のことから、ロシアにおける革命がプロレタリア革命とならざるを得なかつたという事、この革命はその發展の最初から國際的性質を帯びざるを得なかつたということ、かようにし

て、この革命は世界帝國主義の基礎そのものを搖り動かさざるを得なかつたといふことになる。

かかる事態の下にあつて、ロシアの共産主義者は、ロシア革命の狭い民族的範圍内にその活動を局限することができたであろうか？ もちろんできなかった！ 否、反對に、國內情勢（深刻な革命的危機）にせよ、また國外情勢（戦争）にせよ、あらゆる情勢は、萬國のプロレタリアのために資本主義打倒の大業を容易ならしめるため、この範圍を越えて活動し、鬭争を國際的舞台に移し、帝國主義の癌を暴露し、資本主義崩壞の必然性を證明し、社會排外主義及び社會平和主義を粉碎し、最後に、自國において資本主義を打倒し、プロレタリアートのために鬭争用の新しい武器、すなわち、プロレタリア革命の理論と戦術とを鍛え上げさせるように彼らを驅りたてたのである。ロシアの共産主義者は、これと異つた行動をとることはできなかったのである。なせならば、ただこの道によつてのみ、ロシアをブルジョアの秩序の復古から保證できるところの、國際情勢における一定の變更を期待することができたからである。

それだからこそ、ロシアはレーニン主義の根源地となり、ロシア共産主義者の指導者であるレーニンはその創造者となつたのである。

この點において、ロシア及びレーニンについて「起つた」事情は、前世紀の四十年代にドイツとマルクス、エンゲルスに關して起つた事情と大體同一である。當時、ドイツは、二十世紀の當初におけるロシアと同じく、ブルジョア革命を孕んでいた。當時マルクスは、「共産黨宣言」の中に、次のように書いた――

「共産主義者はドイツに對してその主要な注意を向ける。なせならば、ドイツは、ブルジョア革命の前夜にあるからであり、またドイツは十七世紀のイギリス及び十八世紀のフランスに比

して一般にヨーロッパ文明の更に進歩した状態の下に、はるかに發展したプロレタリアートを擁して、この變革をなすとげるだろうからである。従つてドイツのプロレタリア革命は、ただプロレタリア革命の直接の序曲たり得るのみであらう」。

換言すれば、革命運動の中心は、ドイツに移りつつあつたのである。

右の引用句の中でマルクスによつて指摘されているこの事情こそが、正にドイツが科學的社會主義の出生地となり、ドイツ・プロレタリアートの指導者であるマルクス、エンゲルスがその創造者となつた事實の、おそらく間違いない原因であつたといふことは、疑い得ないことではないか。

二十世紀初頭のロシアについても、同じことを、しかももつと大きな程度においていわなければならぬ。この時期のロシアは、ブルジョア革命の前夜にあり、十九世紀の四十年代のドイツに比して（イギリス、フランスについては、すでにいうまでもなく）、ヨーロッパにおける更に進歩した情勢のもとに、また、はるかに進んだプロレタリアートを擁して、この革命を成就しなければならなかつた。しかもこの際、すべての事情は、この革命がプロレタリア革命の酵母となり、序曲とならなければならなかつたことを物語つていた。

レーニンが早くも一九〇二年、ロシア革命がまだ芽生えはじめたばかりの時に、彼の小冊子「何をなすべきか？」の中で、次のような豫言的な言葉を書いた事實を偶然と見なしてはならない——

「歴史は今や、われわれへすなわち、ロシアのマルクス主義者——イ・スターリン、註——の前に、一つの緊急任務を提起した。それは如何なる國のプロレタリアートも直面する全緊急任務のうちでも、最も革命的な任務である」……

「この任務の實現、すなわち、ヨーロッパのみならず、アジアの反動の（われわれは今こゝにいえる）、最も強力な支柱の破壊は、ロシアのプロレタリアートを革命的國際プロレタリアートの前衛となすであらう」。――（レーニン全集、ロシア語版、第四卷、三八二頁）

換言すれば、革命運動の中心は、ロシアに移らなければならなかつた。

ロシアにおける革命の進行が、レーニンのこの豫言を十二分に實證したことは、周知のことである。

これでも、なお、かかる革命を遂行し、かかるプロレタリアートを持つてゐる國が、プロレタリア革命の理論及び戰術の出生地となつたことは、不思議であらうか？

ロシアのプロレタリアートの指導者レーニンが、同時にこの理論及び戰術の創造者となり、國際プロレタリアートの指導者となつたことは、不思議であらうか？

二、方法

さきに私は、一方にはマルクスとエンゲルス、他方にはレーニン、この間には、第二インターナショナルの日和見主義が支配してゐた一つの時代が横わつてゐると述べた。正確を期するために、私は、この場合、日和見主義の形式上の支配をいつてゐるのではなく、その實際的な支配のみをいつてゐることを附け加えねばならぬ。形式の上では、第二インターナショナルの先頭には、「正教派」マルクス主義者、すなわち、カウツキーその他の様な「正統派」が立つてゐた。しかしながら、實際に

おいては、第二インターナショナルの基本的な活動は、日和見主義の方針によつて實行されていたのである。日和見主義者らはその順應性をもつた、小ブルジョアの性質によつて、ブルジョアジーに順應し——一方「正統派」もまた、日和見主義者との「統一を維持」するため、「党内平和」のために、日和見主義者に順應した。その結果、日和見主義者が支配するに至つた。何となれば、ブルジョアジーの政策と「正統派」の政策との間の鎖は、右のようにして繋ぎ合わされていたからである。

これは資本主義の比較的平和な發展の時期、いわば、戦争前の時期であつた、すなわち帝國主義の破局的な矛盾がまだ完全にはつきりとバクローされず、労働者の經濟的ストライキと労働組合とが多かれ少なかれ「正常的」に發展し、選挙闘争や議會内議員團が「眼がくらむほど」の成功を収めて、合法的闘争諸形態が非常にもてはやされ、合法的手段で資本主義を「打ち殺そう」と考えていた時期——一言でいえば、第二インターナショナルの諸黨がブクブクに肥えふとり、革命について、プロレタリアートの獨裁について、また大衆の革命的教育について、眞面目に考えようと欲しなかつた時期であつた。

完全無缺な革命的理論の代りに、大衆の生々とした革命闘争とは切りはなされ、朽ちてボロボロになつたドグマに轉化したところの、たがいに矛盾する理論的命題や理論の斷片が持ち出された。勿論、體裁をつくるためにマルクスの理論を想い起しはしたが、それは、この理論から生々とした革命的精神を去勢するためであつた。

革命的政策の代りに、そこにあつたものは、干からびた俗物主義と勘定高い政治屋氣質、議會的
外交と議會的かけひきとであつた。勿論、ていさいをつくるために、「革命的」決議やスローガンが採用されはした。だがそれは、これらの決議やスローガンを握りつぶしておくためであつた。

自己の誤謬の批判によつて正しい革命的戦術で黨を教育し、教えこむかわりに、焦眉の問題は用心ぶかく回避され、うやむやにされ、抹殺された。勿論、ていさいをつくるために、面倒な問題について少々話し合うことを拒みはしなかつたが、それは、何らかの「伸縮自在」な決議によつて問題を片付けてしまつたためであつた。

以上が、第二インターナショナルの相貌であり、その活動の方法であり、その武器庫であつた。とかくするうちに、帝國主義戦争とプロレタリアートの革命闘争の新時代が近ずいて來た。古い闘争の方法は、金融資本の全能の前には明白に不充分であり、無力なものとなつた。

第二インターナショナルのすべての活動、そのすべての活動方法を再検討し、俗物性、偏狭性、政治屋氣質、變節性、社會排外主義、社會平和主義などを驅逐することが必要であつた。第二インターナショナルの武器庫を全部點檢し、錆ついたもの、腐朽したものをすべておつぱりだし、新式の武器を鍛えあげることが、必要であつた。かような豫備活動なしに、資本主義との戦争に出陣するなどということは無益なことであつた。このことなしにはプロレタリアートは充分に武装せずに、あるいは全く武装せずに、新しい革命的闘争に當面せねばならぬ危険があつた。

第二インターナショナルのオーヂアスのうまやの總點檢と大掃除をやるというこの名譽は、レーニン主義に歸したのである。

實にかような情勢の中で、レーニン主義の方法は生れ、鍛え上げられたのであつた。この方法の要求するところは、何に歸着するか？

第一に、第二インターナショナルの理論的ドグマを大衆の革命闘争の焰の中で、生々した實踐の焰の中で、點檢すること、すなわち理論と實踐との破壊された統一を復活させ、兩者の間の決裂を

根絶することに歸着する。なせならば、かくすることによつてのみ、革命的理論によつて武装された、眞にプロレタリア的な黨を創設することができるからである。

第二に、それは、第二インターナショナルの諸黨の政策を、そのスローガンや決議（これらを信するわけには行かぬ）によつてではなく、彼等の活動、彼等の行動によつて點檢することに歸着する。何故ならば、ただかくすることによつてのみ、プロレタリア大衆の信頼を獲得し、その信頼をうけることができるからである。

第三に、それは、大衆を革命的闘争精神のもとに教育し、準備するよう、すべての黨活動を新しく革命的基調に建て直すことに歸着する。何故ならば、かくすることによつてのみ、大衆をプロレタリア革命のために準備することができるからである。

第四に、それは、プロレタリア諸黨の自己批判に、自身の誤謬の批判にもとずいてこれらの黨を訓練し、教育することに歸着する。何故ならば、かくすることによつてのみ、黨の眞のカードルと眞の指導者とを教育することができるからである。

以上が、レーニン主義の方法の基礎であり、本質である。

しからは、この方法は實踐上いかに適用されたか？

第二インターナショナルの日和見主義者は、幾多の理論的ドグマを有している。彼らは、それを後生大事にしていて、常にそこから出發する。そのうちの二、三を取り出してみよう。

第一のドグマ——プロレタリアートによる權力獲得の諸條件について。日和見主義者達はこう主張する——プロレタリアートは、それ自身國內において多數を占めていない場合には、權力を掌握する事が出来ないし、また掌握してはならぬ、と。だが、これに對する何等の論證もない。なせなら

ば、理論的にも、實踐的にもこの道理の合はぬ命題を正當する可能性はないからである。第二インターナショナルの紳士諸君に答えて、レーニンはこういう——かりにそうだとしよう、とところで、人口中の少数をなしているプロレタリアートが、自己の周圍に勤勞大衆の龐大な多數を結集する可能性をもつような歴史的情勢（戦争、農業恐慌、等々）が起つたような場合に、プロレタリアートは權力を掌握してはなせいけないのか？ プロレタリアートは資本の戦線を突破し、終局の目的の達成を促進するためには有利な國際的ならびに國內的情勢をなせ利用してはいけないのか？ マルクスはすでに前世紀の五十年代に、もし——いわば——「農民戦争の再版」によつてプロレタリア革命に支持を與えることができたならば、ドイツにおけるプロレタリア革命の大業は「素晴らしい」ものとなり得たであろう、と語つたではないか？ 當時ドイツにおけるプロレタリアが、例えば一九一七年におけるロシアと比べて、相對的に少なかつたことは、萬人周知のことではないか？ ロシアのプロレタリア革命の實踐は、第二インターナショナルの連中のお氣に入りのこのドグマが、プロレタリアートにとつて何等切實な意義をもつていないことを示したではないか？ 大衆の革命闘争の實踐が、このくさつたドグマを粉砕しており、また打ち破つてゐることは、明かではないか？

第二のドグマ——プロレタリアートは、もしそれが國家統治を調整する能力を持つてゐるところの、文化及び行政方面の出來上つたカードルを充分な人数だけ持つていない場合には、權力を保持することはできない、すなわち、まず最初に資本主義の條件下で、これらのカードルを養成し、しかる後に權力を獲得しなければならぬ、と。これにレーニンは答えていう——かりにそうだとしよう、だが、まず最初に權力を獲得し、プロレタリアートの發展に有利な諸條件をつくり、それから勤勞大衆の文化水準を引き上げ、勞働者の中から指導者たり、行政家たり得る多數のカードルを養成するため

に急速な歩調をもつて前進するというように、逆にしてはなせいけないのか？ ロシアの實踐は、労働者出身の指導者たちが資本の権力の下においてよりもプロレタリア権力の下において、百倍も急速にかつより徹底的に、成長しつつあることを示したではないか？ 大衆の革命的闘争の實踐が、日和見主義者のこの理論的ドグマをも容赦なく打ち破っていることは、あきらかではないか？

第三のドグマ——政治的ゼネストの方法は、プロレタリアートにとつては適用され得ないものである。何故ならば、それは理論的には破産しており（エンゲルスの批判を見よ）、實踐的には危険であり（國の經濟生活の正常的な進行を亂し、労働組合の金庫をからつぽにするかも知れぬ）、プロレタリアートの階級闘争の主要形態たる議會闘争形態に代えることができないからである、と。これにレーニン主義者は答えていう——よろしい、だが、第一に、エンゲルスはゼネスト一般を批判したのではなく、ただ一定のゼネスト、すなわち、プロレタリアートの政治闘争の代りとして無政府主義者によつてかつぎ出された、無政府主義者の經濟的ゼネストを批判したのである——それが政治的ゼネストの方法と一體何の關係があるか？ 第二に、議會闘争形態が、プロレタリアートの主要な闘争形態であるとは、誰が、どこで論證したか？ 議會闘争はただプロレタリアートの議會外闘争を組織するための學校であり、補助手段であるにすぎず、また資本主義の下では労働運動の基本的な問題は、力づくで、プロレタリア大衆の直接闘争によつて、彼らのゼネストによつて、彼等の蜂起によつて解決されるということ、革命運動の歴史が示しているではないか？ 第三に、政治的ゼネストの方法をもつて議會闘争に代えるという問題は、どこから取つてきたのか？ どこで、また何時、政治的ゼネストの支持者らが、議會外の闘争形態をもつて議會闘争形態に代えようと試みたか？ 第四にロシアにおける革命は、政治的ゼネストがプロレタリア革命の最も偉大な學校であり、資本主義の城

寒に對する襲撃の前夜において、極めて廣汎なプロレタリア大衆を動員し、組織するための、何ものによつても代え得ない手段であることを示したではないか？ 經濟生活の正常の進行が亂される云、労働組合の金庫云々の俗物的流言は、一體これと何の關係があるか？ 革命闘争の實踐が日和見主義者のこのドグマをも破碎していることは、あきらかではないか？

その他等々。

だからこそ、レーニンは「革命的理論はドグマではない」、それは「眞に大衆的な、眞に革命的な運動の實踐と緊密に結びつてのみ、終局的に形成される」（『小兒病』）と語つたのである。何故ならば、理論は實踐に役立たなければならぬからであり、「理論は實踐によつて提起される問題に答えなければならぬ」（『人民の友』）からであり、理論は實踐から得た事實によつて點檢されなければならぬからである。

第二インターナショナルの諸黨の政治的スローガン及び政治的決議については、自己の反革命的行動を堂々たる革命的スローガンや決議をもつて掩ひ隠している、これらの諸黨の政治的實踐のあらゆる虚偽とあらゆる腐敗とを理解するために「戦争に對する戦争」のスローガンについての歴史を回想すれば充分である。もし帝國主義者が戦争の開始を決するならば、蜂起のあらゆる惨事をもつて答えると帝國主義者に向つて威嚇し、「戦争に對する戦争」という物凄いスローガンをかかげた第二インターナショナルの、バーゼル大會における堂々たるデモンストレーションは、すべての人が記憶しているところである。ところがその後しばらくして、戦争勃發の直前、バーゼルの決議は握りつぶされ、資本主義祖國の光榮のために、たがいに殺し合えという新しいスローガンが労働者に與えられたことを記憶しないものがあるか？ 革命的スローガンや決議は、もしそれが行動によつて裏すけさ

れないならば、三文の價值もないということ、明かではないか？ 日和見主義の政治屋共のあらゆる凡庸さとレーニン主義の方法のあらゆる偉大さを理解するためには、帝國主義戦争を國內戦争に轉化するというレーニンの政策を、戦時における第二インターナショナルの裏切政策と對照すれば充分である。

私は、諸黨をその行動によつてではなく、紙に書かれたスローガンや文書によつて判断する、第二インターナショナルの指導者カー・カウツキーの日和見主義的な試みを痛烈に攻撃しているレーニンの著書『プロレタリア革命と變節者カウツキー』から、次の一節をここに引用せざるを得ない——

「カウツキーは、スローガンを掲げさえすれば、それだけで事態が變更されるかのごとく……空想して、典型的な小ブル的、俗物的政策を遂行している。ブルジョア民主主義の全歴史は、この錯覺を暴露している。すなわち人民を欺瞞するために、ブルジョア民主主義者はすぎ勝手な「スローガン」を常に掲げて來たし、また常に掲げている。肝要なことは、彼らの誠實さを點檢し、言葉と行動を對照させ、觀念論的もしくは山師的の文句をもつて満足せずに、階級的内容をもつて行動に移すところまで徹底させることである」。 (レーニン全集、ロシア語版、第二三卷、三七七頁)

第二インターナショナルの諸黨の自己批判に對する恐怖や、自身の誤謬をかくし、面倒な問題をいいかげんにし、すべてよじといたふうな欺瞞的なこけおどし——これは潑らつたる思想をにぶらせ、自身の誤謬の批判にもとすいて黨を革命的に教育することを妨げている——で自己の缺陷をおおいかくす彼らの常套手段、レーニンによつて嘲笑され、またさらしものにされた常套手段についても

はやのべない。レーニンは、彼の小冊子「小兒病」の中で、プロレタリア黨の自己批判について、次のように書いた——

「自己の誤謬に對する政黨の態度は、黨の眞劍さと、また政黨が自己の階級ならびに勤勞大衆に對し、實踐において、その義務を果すか否かを測定する最も重要にして、最も確實な規準の一つである。公然と誤謬を認め、その原因をあばき出し、その誤謬を生んだ情勢を分析し、誤謬をあらためるための手段を慎重に討議すること——これこそが、眞劍なる政黨の目じるしであり、これこそが、その黨が自己の義務を遂行することであり、これこそが、階級を、ついでは大衆をも教育し、訓練する所以である」。(レーニン全集、ロシア語版、第二五卷、二〇〇頁)

ある者はこういう——自身の誤謬をあばき出すことや自己批判は黨にとつて危険である。何故ならば、それは敵によつて、プロレタリア黨反對に利用され得るかも知れないからである、と。レーニンはこうした反駁を眞面目なものではなく、全く正しくないものと見なした。このことについて、レーニンはすでに一九〇四年、わが黨がまだ弱く微々たるものであつた時代に、その小冊子「一歩前進」の中で、次のように言つている——

「彼らへすなわちマルクス主義者の敵。——イ・スタトリン註——は、われらの論争を觀察してはくそえみ、また顔をしかめてみせる。彼らは、もちろん、わが黨の缺陷や不充分を論じた私の小冊子から自己の目的のために、個々の章句を引きぬこうとつとめるであらう。だが、ロシアの社會民主主義者は、すでに充分砲火の洗禮を受けているから、こんなつねられたぐらいでは煩

わされず、そんなことにはおかまいなく、自己批判と自己の弱點の假借なきバクロの活動をつずけて行くだろう。そしてこれらの弱點は、ゼヒとも必然的に労働運動の成長によつてはるかに補われるであろう」。(レーニン全集、ロシア語版、第六卷、一六一頁)

以上が、だいたいにおいて、レーニン主義の方法の特徴點である。

レーニンの方法の中に與えられているものは、基本的には、マルクスの言葉にしたがえば「本質において批判的であり、革命的である」ところのマルクスの學說の中にすでにあつたものである。正に、この批判的にして革命的な精神こそが、レーニンの方法を終始一貫しているものである。だがレーニンの方法は、マルクスによつて與えられたものの單なる復活と考えることは、正しくないであろう。實際のところ、レーニンの方法は、マルクスの批判的にして革命的な方法の、すなわち彼の唯物辯證法の、單なる復活ではなくしてその具體化であり、その一層の發展である。

三、理論

この題目のうちから、私は次の三つの問題をとろう。

(イ) プロレタリア運動のための理論の意義について

(ロ) 自然成長性の「理論」の批判について

(ハ) プロレタリア革命の理論について。

一、理論の意義について。あるものは、こういうふうに見える——レーニン主義における主要なものはマルクス主義の命題を行動に移すことであり、これらの命題の「實行」である、という意味において、レーニン主義は理論にたいする實踐の優位であり、理論はどうかというに、これに關しては、レーニン主義はかなり無頓着なようである、と。ブレハーンが度々、理論、特に哲學に對するレーニンの「無頓着」をひやかしたことは、周知のことである。また現在の多くの實踐家・レーニン主義者が、特に現在の情勢のために背負わざるを得ない無数の實踐的活動のために、理論をあまり可愛がらないということもまた周知のことである。だが、レーニン及びレーニン主義に關するこの奇怪というも足りないほどの意見が全然正しくなく、實際とは全く異なっていること、理論を無視する實踐家達のこの傾向が、レーニン主義の全精神にもとるものであり、大業にとつて大きな危険をはらんでいゝるものであることを、私は斷言しなければならぬ。

理論は、その一般的形態において見たところの、すべての國の勞働運動の經驗である。もちろん、理論は、もしそれが革命的實踐と結合していかないならば、實質のないものとなる。これと全く同じく、實踐も、もしそれが革命的理論によつてその途を照されないならば、盲目となる。だが理論は、もしそれが革命的實踐と引き離し難いほどに結合して組み立てられるならば、勞働運動における極めて偉大な力に轉化され得る。何となれば、理論が、じかり理論のみが、確信と、方向を決定する力と、周圍の諸事件の内的關連の理解とを運動にあたえうるからであり、何となれば理論、じかり理論のみが、實踐を助けて、現在諸階級が如何に、また如何なる方向に動いているかということばかりではなく、近い將來において諸階級が如何に、また如何なる方向に進むはずであるかを理解せしめうるからである。餘人ならぬレーニンこそが——

「革命的理論なくして、革命的運動はあり得ない*」（レーニン全集、ロシア語版、第四卷、三八〇頁）

という周知の命題を語り、かつ何十回となくこれをくり返したのである。

レーニンは、特に、わが黨が國際プロレタリアートの前衛闘士たる役割を課せられていることにかんがみ、またわが黨をとりまいてる國內的ならびに國際的情勢の複雑さにかんがみて、わが黨のごとき黨にとつての理論の重要な意義を、誰よりもよく理解していた。すでに一九〇二年、わが黨のこの特殊な役割を予見して、彼はその當時――

「前衛的理論によつて指導される黨のみが、前衛闘士の役割を果すことができる」。――（レーニン全集、ロシア語版、第四卷、三八〇頁）

ということを、想起せしめることが必要であるとすでに考えたのである。

わが黨の役割についてのレーニンの予言がすでに實現された今日、レーニンのこの命題が特別の力と特別の意義とを獲得していることは、恐らく論證する必要はあるまい。

餘人ならぬレーニンこそが、エンゲルスからレーニンにいたる時期に科學の成就したもののうち、最も重要なものを唯物論的哲學によつて一般化し、マルクス主義者の間にある反唯物論的諸潮流を全面的に批判するという極めて重大な任務の遂行を引き受けた事實は、おそらく、レーニンが理論に與えたかの深遠な意義の、最も顯著な表現と見なすべきであらう。エンゲルスは「唯物論は新たな

* 傍點は私による。――イ・スターリン

大發見毎に、新たな相貌を帯びなければならぬ」と語った。餘人ならぬレーニンこそが、彼の名著「唯物論と經驗批判論」において、自己の時代のために、この任務を果たしたことは周知の通りである。哲學に對するレーニンの「無頓着」を好んでひやかしたブレハーノフが、かかる任務の遂行に眞劍に着手することさえ決意しなかつたのは、周知のことである。

二、自然成長性の「理論」の批判、もしくは運動における前衛の役割について。自然成長性の「理論」は日和見主義の理論であり、労働運動の自然成長性崇拜の理論であり、労働者階級の前衛の、すなわち労働者階級の黨の指導的役割を事實上否定する理論である。

自然成長性崇拜の理論は、労働運動が革命的性質をもつことに斷乎として反對である。それは、運動が資本主義の基礎に反對する闘争の線に向けられることに反對する。それは、運動が、もつぱら、資本主義にとつて「實行され得る」、「受け容れ得られる」要求の線に沿うてのみ進むことを主張する。それは、徹頭徹尾、「最小抵抗線」を主張する。自然成長性の理論は、トレード・ユニオン主義のイデオロギーである。

自然成長性崇拜の理論は、自然成長的運動に意識的、計畫的性質を附與することに斷然反對する。それは、黨が労働者階級の前線に立つて進み、黨が大衆を目的意識性の水準まで引き上げまた黨が運動を指導することに反對する。——それは、運動が自己の道に沿うて進むことを運動の自覺的分子が妨害しないことを主張する。それは、黨がただ自然成長的運動に耳を傾けて、それに追隨することを主張する。自然成長性の理論は、運動における自覺的分子の役割を過少視する理論であり、「追隨主義」のイデオロギーであり、あらゆる日和見主義の論理的基礎である。

すでにロシアにおける第一革命前に現れたこの理論は、實踐的には、その追隨者たるいわゆる「經濟主義者」が、ロシアにおける獨立の労働者黨の必要を否定し、ツァーリ制打倒のための労働者階級の革命闘争に反對し、運動内においてトレード・ユニオン主義の政策を説教し、一般に労働運動を自由主義ブルジョアジーのヘゲモニーの下に引渡すまでにいたつた。

舊「イスクラ」の闘争と、レーニンの小冊子「何を爲すべきか？」の中で「追隨主義」の理論に對して行われたすばらしい批判とは、いわゆる「經濟主義」を粉碎したばかりでなく、さらにロシア労働者階級の眞に革命的な運動の理論的基礎を創造した。

この闘争なくしては、ロシアにおける獨立の労働者黨の創立も、革命におけるこの黨の指導的役割も到底考えられなかつたであらう。

だが自然成長性崇拜の理論は、ひとりロシアだけの現象ではない。それは、多少異なつた形態においてではあるが、第二インターナショナルのすべての黨に、例外なく非常に廣く普及していた。私が念頭においているのは、第二インターナショナルの指導者達によつて俗悪化されたいわゆる「生産力」の理論、すなわち、あらゆるものを正常化し、あらゆる人々を和解させ、事實がすべての人にあきあきする位になつてからこれらの事實を確認し、説明し、しかも事實を確認することだけで安心してしまふ理論である。マルクスは、唯物論は世界を説明するだけにとどまることはできない。それは、さらに世界を變更せねばならぬといつた。だがマルクスのいつたことは、カウツキーやその仲間にはどうでもいいのだ。彼らはむしろ、マルクスの定義すけの最初の部分にとどまつていることを好んでいる。

この「理論」の適用についての多くの例の中の一つをここに挙げよう。すなわち、第二インターナショナルの諸黨は、帝國主義戦争前には、もし帝國主義者たちが戦争をはじめの場合には、「戦争に對する戦争」を宣言するとおどかしたといわれている。開戦直前にこれらの諸黨はこの「戦争に對する戦争」のスローガンをどこかへしまいこみ、正反對のスローガン、すなわち「帝國主義祖國のための戦争」というスローガンを實行したということだ。そして、このスローガンの取替えの結果幾百萬の労働者が犠牲になった、といわれている。だがこのことについて責を負うべき者がいるとか、誰かが労働者階級に逆したとか、もしくは労働者階級を裏切ったとか、考えるのは誤りであろう。否、斷じてそんなことはない！すべてはなるべきようになったのだ。第一に、インターナショナルは「平和の用具」であつて、戦争の用具ではないからである。第二には、その當時あつた「生産力の水準」の下では、これ以外のことをやることはできなかつたからだ。「罪」は「生産力」にあるのだ。このことをカウツキー氏の「生産力の理論」が、正確に「われわれに」説明している。そしてこの「理論」を信じないものは、マルクス主義者ではない。黨の役割はどうしたのだ？ 運動における黨の意義はどうか？ だが、「生産力の水準」のようなかかる決定的な要因に對して、黨に一たい何ができようか？……と。

かようなマルクス主義の偽造の例は、いくらでも引用することが出来るだろう。

日和見主義の裸體を覆いかくす使命を有している、この偽造された「マルクス主義」が、すでに第一ロシア革命前にレーニンが闘争した「追隨主義」の理論そのもののヨーロッパ式變種に過ぎないことは、おそらく論證する必要があるまい。

この理論的偽造を粉碎することこそが、西欧において眞に革命的な諸黨を創建するための豫備的條件であることは、おそらく論證する必要があるまい。

三、プロレタリア革命の理論。レーニンのプロレタリア革命の理論は、次の三つの基本的論題から出發している。

第一の論題。先進資本主義諸國における金融資本の支配、金融資本の最も重要な業務の一つとしての有價證券の發行、帝國主義の基礎の一つとしての原料産地への資本輸出、金融資本の支配の結果としての金融閥の全能——すべてこれらは、獨占資本主義のロコツに寄生的な性質を暴露し、資本主義的トラスト及びシンジケートの壓迫を百倍もヨリ痛切に感じさせ、資本主義の基礎に對する労働者階級の憤激を著しく増大させ、大衆を唯一の救いとしてのプロレタリア革命へ導いて行く。(レーニン著「帝國主義論」參照)

ここから、第一の結論が生れる。すなわち、資本主義諸國の内部に革命的危機が激化すること、「本國」の國內戰線即ちプロレタリア戰線における爆發の諸要素が増大することである。

第二の論題。植民地及び隷屬國への資本輸出の激増、全地球を包括するにいたるまでの、「勢力範圍」及び植民地的領有の擴張、極く少數の「先進」國による地球人口の壓倒的大多數の金融的奴隸化及び植民地的抑壓の全世界體系への資本主義の轉化——すべてこれらは一方においては、個々の民族的經濟及び民族的領域を世界經濟と稱せられる單一の鎖の環に轉化させ、他方においては、地球上の人口を二つの陣營に、すなわちその一つは廣大なる植民地ならびに隷屬國を擯取し、抑壓している極く少數の「先進」資本主義國と、なお一つは帝國主義的抑壓から解放されるために闘争せざるを得なくなっている、植民地ならびに隷屬國の尨大な多數とに分裂させた。(「帝國主義論」參照)

ここから、第二の結論が生れる。すなわち植民地諸國に革命的危機が激化すること、國外戦線すなわち植民地戦線における、帝國主義に反對する憤激の諸要素が増大することである。

第三の論題。「勢力範圍」及び植民地の獨占的領有、すでに領土を占據している諸國と、自分の「分け前」を得たいと望んでいる諸國との間の、世界再分割のための狂的な鬭争に導くところの、資本主義諸國の不均等な發展、破壊された「均衡」を復活させる唯一の手段としての帝國主義戦争——すべてこれらは、第三の戦線、すなわち資本主義諸國間の戦線の激化に導き、これは、帝國主義を弱め、さきに舉げた二つの反帝國主義戦線、すなわち革命的プロレタリア戦線と植民地解放戦線との結合を容易ならしめる。（「帝國主義論」參照）

ここから、第三の結論が生れる。すなわち帝國主義の下では戦争が避けられないこと、およびヨーロッパにおけるプロレタリア革命と東洋における植民地革命とが、帝國主義の世界戦線に反對する革命の統一的世界戦線へ連合することが必然的なことである。

すべてこれらの結論を、レーニンは、「帝國主義は社會主義革命の前夜である。」（レーニン全集、ロシア語版、第一九卷、七一頁）という一つの總括的結論に結合している。

プロレタリア革命、革命の性質、その大きさ、その深さの問題に對する態度そのものすなわち革命一般の方略は、またこれに従つて變化する。

従來は、通常それぞれの國の經濟状態という見地から、プロレタリア革命の前提條件の分析を行つた。だが現在においては、この態度はもはや不十分である。現在においては、すべての國もしくは

* 傍點は私による。——イ・スタヴリン、

大多數の國の經濟狀態という見地から世界經濟狀態の見地から問題を取扱わなければならない。何故ならば、個々の國及び個々の民族經濟は、自立的な一單位たることをやめて、世界經濟といわれる單一の鎖の環に轉化したからであり、古い「文化的」資本主義は帝國主義に成長轉化し、しかも帝國主義は、極く少數の「先進」諸國による、地球人口の壓倒的大多數の金融的奴隸化と植民地的抑壓との全世界的體系だからである。

從來は、それぞれの國、或はもつと正確にいうならば、それぞれ發展した國に、プロレタリア革命の客觀的條件が存在するか、存在しないかについて云々するのが常であつた。だが、現在では、この見地はすでに不充足である。現在では、單一的な全體としての世界帝國主義經濟の全體系に、革命の客觀的條件が存在することについて語らなければならない。そうして、この際、この體系の構成要素の中に、工業的にはまだ充分發展していない若干の國々が存在することは、もしその體系が全體としてすでに革命のために成熟しているならば、或は一層正確に言えば、體系が全體としてすでに革命のために成熟しているのであるから、革命を起すための克服しえない障礙とはなり得ない。

從來は、それぞれの發展した國におけるプロレタリア革命については、この革命を、その對照物としての、個々の民族的資本戰線に對立させられているところの、別々な自立的なものとして語るのが常であつた。だが現在では、この見地はすでに不充足である。現在では、世界プロレタリア革命について語らなければならない。何故ならば、個々の民族的資本戰線は、帝國主義的世界的戰線といわれる單一の鎖の環に轉化したからであり、この鎖に對しては、あらゆる國の革命運動の全般的戰線が對立せしめられなければならないからである。

從來は、もつばら當該國の國內的發展の結果としてのみ、プロレタリア革命をみていた。だが、現在では、この見地はすでに不充分である。今日では先ず第一に、プロレタリア革命を、帝國主義の世界體系における矛盾的發展の結果として、それぞれの國における世界帝國主義戰線の鎖の切斷の結果として、見なければならぬ。

革命はどこで始まるか、どこで先ず第一に資本の戰線は突破されるか、どの國で？

どこよりも工業がよく發展しており、プロレタリアートが多數を占め、文化程度が高く、民主主義のよく發達したところというように、從來は普通こう答えていた。

レーニンの革命的理論は、これを反駁する——いやそうではない、必ずしも工業がヨリよく發展し、その他等々の條件のあるところでないければならぬことはいない。資本戰線は、帝國主義の鎖が他よりも弱いところで斷ち切られる。何故ならば、プロレタリア革命は、世界帝國主義戰線の鎖のもつとも弱い場所においてそれが斷ち切られた結果であり、その際、革命をはじめた國、資本戰線を突破した國が、もつと發展はしているが、なお資本主義のわく内にとどまつている他の諸國よりも、資本主義的には發展の程度が低いということがあり得るからである。

一九一七年には、帝國主義世界戰線の鎖は、他の國にくらべてロシアで弱かつた。そして鎖はまさに、ロシアで斷ち切られ、かくして、プロレタリア革命を現出させた。何故か？ なせならば、ロシアにおいてはきわめて偉大な人民革命が展開し、地主に抑壓され搾取されていた幾百萬という農民の如き、非常に重要な同盟者を持つていた革命的プロレタリアートが、この革命の先頭に立つて進んだからである。なせならば、ロシアでは革命に反對して、一切の精神的威信をなくし、一般人民から總體的憎惡をうけるに値していたツァー制の如き、帝國主義の醜惡な代表者が立つていたからである。ロ

シアは、資本主義的には、たとえばフランスもしくはドイツ、イギリスもしくはアメリカよりも發達の程度が低かつたにせよ、鎖はロシアにおいて弱かつたのである。

近い將來には、どこで鎖が切れるであろうか？　こんども同じく、その鎖の他にくらべて弱いところにおいてである。たとえば、インドにおいて鎖が切れるということも、ないとはいえない。なぜか？　なぜなら、インドには民族解放運動の如き同盟者——疑いもなく大きな、疑いもなく重要な同盟者——を持つ、若い戰鬪的な、革命的プロレタリアートがいるからである。なぜならば、インドにおいては、精神的信用をなくし、インドの被壓迫、被搾取大衆から總體的憎惡を受けている外國帝國主義の如き、何人にも周知の敵が革命に反對して立つていからである。

鎖がドイツにおいて斷ち切られるということも、まったくあり得ることである。何故か？　なぜならば、例えば、インドにおいて作用している諸要因が、ドイツにおいてもまた作用し始めているからである。ただし、インドとドイツの間に存在する發展水準のはなはだしい相違が、ドイツにおける革命の進行と結果とに、その痕跡を残さざるを得ないということは分りきつたことである。

だからこそ、レーニンは次のように言つているのである——

「西歐の資本主義諸國の社會主義への發展は、………これらの國における社會主義の均等な「成熟」によつてではなく、ある諸國家による他の諸國家の搾取によつて、全東洋の搾取と結びつけられた、帝國主義戰爭で敗北した國家の中の第一の國家の搾取によつて完成されるであろう。しかるに他方東洋は、正にこの第一次帝國主義戰爭によつて、終局的に革命運動の中に入り込み、終局的に全世界革命運動の全般的なうすまきの中に引き込まれた」。 (レーニン全集、ロシア語版、第二七卷、四一五——四一六頁)

要するに、帝國主義戰線の鎖は、常則としては、鎖の環が他にくらべて弱いところで切れるはずであり、しかしていすれにしても、資本主義がヨリ一層發展しており、プロレタリアートが何割、農民が何割存在すること、その他等々の條件の備わつてゐる國で必ずしも切れるというわけではない。

それだからこそ、個々の國の人口においてプロレタリアートが占める割合についての統計的計算は、プロレタリア革命の問題を決定するに當つては、帝國主義を理解せず、革命をベストのように恐れている第二インターナショナルの物識り振つた連中が、好んでそれに附與したような、特別の意義を失つてゐるのである。

更に進もう。第二インターナショナルの連中は次のように斷言した（そして現在も斷言しつづけている）、すなわち、一方ブルジョア民主主義革命と他方プロレタリア革命との間には、兩者を多かれ少なかれ、長い中間期間によつて引き離してゐる一つの深淵、もしくはいすれにしても、萬里の長城が存在してゐる。そして、この期間に權力の地位についたブルジョアジーは資本主義を發展させ、一方プロレタリアートは勢力を蓄積して、資本主義に對する「決定的鬭争」のために準備するといつてゐる。この中間期間は、通常少くとも數十年と考へられてゐる。この萬里の長城の「理論」が、帝國主義の情勢下において、何らの科學的意義を有してゐないこと、この理論がブルジョアジーの反革命的熱望の掩蔽、粉飾に他ならず、またそうならざるを得ないことは、恐らく論證する必要があるまい。衝突と戦争をはらんでゐる帝國主義の情勢下において、「社會主義革命の前夜」の情勢下においては、「築え行く」資本主義が「死滅しつつある」資本主義に轉化し（レーニン）、革命運動が世界のすべての國において成長し、帝國主義がツアー制及び農奴制に到るまで例外なくすべての反動的勢力と結合し、そのこと自身によつて西歐におけるプロレタリア運動から東洋における民族解放運動にいたるまで

の、あらゆる革命的勢力の連合を必要ならしめ、封建的・農奴制的制度の殘滓の倒壊が帝國主義との革命的鬭争なしには不可能となつてゐる時——多かれ少なかれ發展した國におけるブルジョア民主主義革命が、かかる條件の下で、プロレタリア革命に接近せざるを得ないこと、前者が後者に成長轉化せざるを得ないことは、恐らく論證する必要はあるまい。ロシアにおける革命の歴史は、この命題の正しいこと、その争う餘地のないことを明白に證明した。レーニンが早くも一九〇五年、ロシアの第一次革命の前夜に、彼の小冊子「二つの戦術」の中で、ブルジョア民主主義革命と社會主義變革とを、一つの鎖をなしている二つの環として、ロシア革命の發展規模の統一的な、まとまつた繪畫として描いたことは、理由のないことではない。

「プロレタリアートは、力づくで專政制度の抵抗を壓殺し、ブルジョアジートの不安定性を癱瘓させるために、農民の大衆を味方に引きつけて、民主主義的變革を最後まで遂行しなければならぬ。プロレタリアートは、力づくでブルジョアジートの抵抗を打破し、農民及び小ブルジョアジートの不安定性を癱瘓させるために、人口中の半プロレタリア的分子の大衆を味方に引きつけて、社會主義的變革を成就しなければならぬ。これが、プロレタリアートの任務であつて、新イストラ派は、革命の發展規模に關する彼らのあらゆる議論や決議の中で、それを非常にきゆうくつに表示してゐる」。 (レーニン全集、ロシア語版、第八卷、九六頁)

私は、ブルジョア革命のプロレタリア革命への成長轉化の理念が、レーニンの革命理論の礎石の一つとして「二つの戦術」の中におけるよりも一層浮彫的にあらわれてゐるところの、レーニンの他の、後期の諸勞作については、もう述べない。

ところが、次のように考えている同志もある——すなわちレーニンは、やつと一九一六年にいたつて、この理念に到達したのであつて、その時までには、彼は、ロシアにおける革命が、ブルジョア革命の範囲にとどまり、したがつて権力が、プロレタリアートと農民との獨裁の機關の手からブルジョアジーの手に移り、プロレタリアートの手には移らないであらうと考えていたようであると。この斷言がわが共產主義的出版物の中にさえはいりこんでいたといわれている。私は、この斷言は全然まちがつており、全く實際と一致していないことを、いわなければならぬ。

私は、プロレタリアートと農民との獨裁、すなわち民主主義的革命的勝利を「「治安」の組織」としてではなく「戦争の組織」として性格付けている、第三回黨大會（一九〇五年）における周知のレーニンの演説を引證することができる。（レーニン全集、ロシア語版、第七卷、二六四頁）

更に、私は、レーニンの周知の諸論文「臨時政府について」（一九〇五年）を引證することができる。同書でレーニンはロシア革命の展開の見透しを描いて「ロシア革命が數カ月の運動でなくて、多年の運動となり、それが権力者側からのただ小さな讓歩だけに導くのではなく、これら権力者の完全なてんぶくに導くにいたらしめる」任務を黨に課し、さらにこの見透しを展開して、これをヨーロッパにおける革命と結びつけつつ、言葉をつすけて次のように言つてゐる——

「もしも、これが達成されたなら——その時……そのときこそ、革命の巨火は、ヨーロッパを燃え上らせ、ブルジョアの反動の下でおおううしてゐるヨーロッパの労働者も、こんどは立ち上つて、「いかにこれをなすべきか？」をわれわれに示すであらう。そのときこそ、ヨーロッパの革命的高揚はロシアにその反作用を及ぼし、革命的數年の時代を革命的な數十年の時代とするであらう……」。〔前掲書、一九一頁〕

さらに私は一九一五年十一月に發表されたレーニンの周知の論文を引證することができる。この論文の中で、彼は次のように書いてゐる——

「プロレタリアートは權力獲得のために、共和制のために、土地沒收のために……軍事的・封建的「帝國主義」(すなわちツァー制)からのブルジョアの解放に「非プロレタリア人民大衆」を参加させるために闘争しており、また將來もけん身的に闘争するであろう。そして、ツァー制からの、地主の土地權力からのブルジョアのこの解放を、農村労働者と戦闘してゐる富裕な農民を助けるためではなく、ヨーロッパのプロレタリアと同盟して、社會主義革命を成就するために、プロレタリアートは、直ちに*利用するであろう」(レーニン全集、ロシア語版、第一八卷、三一八頁)。

最後に私は、レーニンの小冊子「プロレタリア革命と變節者カウツキー」の中の周知の箇所を引證することができる。その箇所でレーニンは、前に引用した「二つの戦術」**の中のロシア革命の發展規模にかんする箇所を引證して、次のような結論に到達してゐる——

「丁度われわれが言つていた通りになつた。革命の進行は、われわれの考察の正しいことを確證した。はじめは「すべての」農民と共に君主制に反對し、地主に反對し、中世紀的な制度に反對しておこなわれる(そして、その限りにおいては、革命はまだブルジョア革命であり、ブル

* 傍點は私による。——イ・スターリン

** 本書五二頁参照

ジョア民主主義革命である)。そして次に、貧農と共に、半プロレタリアートと共に、すべての被搾取者達と共に、農村の金持ちたるクラーク（註参照）や閣商人をも含む資本主義に反対して、おこなわれる。そして、この限りにおいては、革命は社會主義革命となる。前者と後者との間に人為的な萬里の長城を築き、プロレタリアートの準備の程度とその貧農との結合の程度以外の、なんらかのものによつて兩者を切り離そうとくわだてることはマルクス主義のもつとも大なる曲解であり、その俗悪化であり、自由主義ととり代えることである」。〔レーニン全集、ロシア語版、第二三卷、三九一頁〕

これで、もう十分だと思ふ。

よろしい、だが、もしそうだとすれば、何故レーニンは「永續（連續）革命」の理念に反対して闘争したのであるか？——と、われわれにいう者があるだろう。

何故ならばレーニンは、ツァー制を完全に絶滅するために、プロレタリア革命へ移行するため、農民の革命的能力を「汲みつくし」、農民の革命的エネルギーを徹底的に利用しようとして提議したのに、一方「永續革命」の支持者らは、ロシア革命における農民の重大な役割を理解せず、農民の革命的エネルギーを過少評價し、農民を指導するロシア・プロレタリアートの力と能力とを過少評價し、かくして農民をブルジョアジーのえいきよう下から解放するという任務を、プロレタリアートの周圍に農民を結集するという任務を、困難ならしめたからである。

何故ならば、レーニンは、革命の大業をプロレタリアートへの権力の移行によつて、完成しようとして提議したのに、一方「永續」革命の支持者らは、いきなりプロレタリアートの権力からはじめようと考え、それによつて、彼らが農奴制の殘滓のごとき「小さなこと」に眼をとじていることを理解

せず、ロシアの農民の如き重大な力を考慮にいれていないことを理解せず、かかる政策が農民をプロレタリアートの味方に獲得することを妨害し得るのみであることを理解しなかつたからである。

従つて、レーニン自身が連続的革命の見地に立つていたのであるから、レーニンは連続性の問題について、「永續」革命の支持者らと闘争したのではなく、彼らがプロレタリアートの最大の豫備隊たる農民の役割を過少評價したがために、彼らがプロレタリアートのヘゲモニーの理念を理解しなかつたがために、彼等と闘争したのである。

「永續」革命の理念を新しい思想と見なすことはできない。マルクスは四〇年代の終りにその有名な「共産主義者同盟」への「檄」(一八五〇年)の中で、はじめてこれを提唱した。連続革命の理念はわが國の「永續革命論者」によつてこの文書からとつてこられたものである。わが國の「永續革命論者ら」が、マルクスからこの理念をとり、それを若干變形し、かつ、その形を變えるにあつたこれを「毀損」し、これを實用に適さないものにしてしまつた、ということを指摘しなければならぬ。この誤謬を訂正し、マルクスの連続革命の理念をその本當の形で把握し、これを自己の革命理論の礎石の一つとなすためには、レーニンの經驗をつんだ手腕が必要であつた。

マルクスは、彼の「檄」のなかで、いくたの革命的民主主義的要求を列挙し、共産主義者に向つてこれらの要求を貫徹するように呼びかけてから、連続(永續)革命について次のように言つている——

「民主主義的小ブルジョアは上記の要求を出来るだけ多數實現させて、最もすみやかに革命を終結させようと欲しているが、われわれの利益とわれわれの任務とは、多かれ少なかれ財産を所有している階級すべてが支配からまだ押し除けられず、プロレタリアートが國家權力をまだ獲得せず、一國においてのみならず、世界の支配的な國のすべてにおいて、プロレタリアートの連

合は、これらの國のプロレタリア間の競争が終りを告げるほどには、まだ發展せず、少なくとも決定的な生産力がプロレタリアの手に集中されないであろう間は、革命を連續ならしめることである」。

言いかえれば――

(イ)マルクスは、わがロシアの「永續革命論者」の計畫とは反對に、五〇年代のドイツにおける革命の大業を、プロレタリア権力からいきなりはじめようとは決して提議しなかつた。

(ロ)マルクスは、プロレタリアートによる権力獲得後、ついですべての國に革命を燃え上らしめるために、一步一步ブルジョアジーの分派を順次に権力の地位からおし除けつつ、プロレタリア國家権力の樹立によつて革命の大業を完成することを提議しただけである。すなわち、これは、レーニンが教え、またレーニンが帝國主義の情勢の下における自己のプロレタリア革命の理論に従つて、わが國の革命の進行中に實現したすべてのことと完全に一致しているところである。

かくて、わがロシアの「永續革命論者」は、ロシア革命における農民の役割とプロレタリアートのヘゲモニーの思想の意義とを過少評價したばかりでなく、更に「永續」革命のマルクスの思想をも(悪く)變形させ、これを實踐に役立たないものとした、ということになるのである。

だからこそレーニンは、わが國の「永續革命論者」の理論を嘲笑し、これを「珍奇」なもの「素晴しい」ものと名付け、そして彼等は、「如何なる理由によつて、まる十年の間、實生活がこの素晴しい理論に一顧もあたえずに過ぎ去つたかを考える」ことを欲しないといつて、彼等を非難したのである(レーニンの論文は、ロシアに「永續革命論者」の理論があらわれてから十年を経た、一九一五年に書かれた、――レーニン全集、ロシア語版、第一八卷、三一七頁)。

それだからこそ、レーニンは、この理論は『ボルシェヴィキからは、プロレタリアートの斷乎たる革命的闘争とプロレタリアートによる政權獲得への呼びかけを取り、メンシェヴィキからは、農民の役割の「否定」をとつて來ている』（前掲書、レーニンの論文『革命の二つの線について』参照）と語つて、この理論を半メンシェヴィキ的であると見なしたのである。

以上が、ブルジョア民主主義革命がプロレタリア革命へ成長轉化することに關する、またプロレタリア革命へ『即時』移行するために、ブルジョア革命を利用することに關するレーニンの思想である。

さらに進もう。従來は、ブルジョアジーに對して勝利するためには、すべての先進國、あるいは少なくとも、その大多數の國のプロレタリアの共同進出が必須であると考えて、一國における革命の勝利は不可能であるとみなしていた。だが、現在においては、この見地はもはや實際とは合致しない。現在では、かかる勝利が可能であるということから出發しなければならない。何故ならば、帝國主義の情勢の下における資本主義諸國の發展の不均等にして飛躍的な性質、不可避的な戦争に導く帝國主義内部の破局的矛盾の發展、世界のすべての國における革命運動の成長——すべてこれらのことは、個々の國におけるプロレタリアートの勝利が可能であるという結論に導くばかりでなく、またそれが必至的だという結論に導くからである。ロシアにおける革命の歴史は、これについての明白な證明である。ただ、この場合、ブルジョアジーの打倒は、若干の、全く必要缺くべからざる條件が存在する場合にのみ、成功的に遂行され得るということ、それなくしては、プロレタリアートによる權力獲得などは考えられもしないということ、記憶しておくことが必要である。

これらの條件について、レーニンはその小冊子「小兒病」の中で、次のように言っている――

「すべての革命、特に二十世紀における三つのロシア革命によつて確證された革命の根本法則は、實に次の點にある。すなわち、革命のためには、被搾取・被壓迫大衆が古い方法で生活することはできないということを意識して、變更を要求するというだけでは不十分である。革命のためには、搾取者が古い方法で生活し、統治することができなくなるということが必要である。「下層」が古い方法を欲せず、そして「上層」が古い方法でやり得なくなつた場合にのみ、かかるときにのみ、革命は勝利できる。換言すれば、この眞理は、革命は全國民的（被搾取者も搾取者をも捲きこんだ）危機なくしては起り得ない* という言葉によつて表現される。要するに、革命のためには、先ず第一に、労働者の大多數が（もしくは少なくとも意識的な、思想をもつ政治的に積極的な大多數の労働者が）完全に變革の必要を理解し、この變革のためには死をも辭さないところまで行くこと、第二には、支配階級が政府の危機におちいり、この危機が最もおくれた大衆をさえ政治に引き入れ……政府を弱らせ、革命家が政府をすみやかに倒壊することを可能ならしめることである」（レーニン全集、ロシア語版、第二五卷、二二二頁）。

だが、一國內でブルジョアジーの権力を打倒し、プロレタリアートの権力を樹立することは、まだ、社會主義の完全な勝利を保障することを意味しない。自己の権力を堅固にし、農民を指導しつゝ、勝利した國のプロレタリアートは、社會主義社會の建設を完成することができると、また完成しなければならぬ。だがこのことは、その國のプロレタリアートが、それによつて社會主義の完全な、

* 傍點は私による。——イ・ス・スターリン、

終局的な勝利を達成するということ、すなわちプロレタリアートが、ただ一國のみの力をもつて終局的に社會主義を固め、完全にその國を武力干渉から、従つて、また復古からも保障することが出来るということの意味するであろうか？ 否、意味しない。そのためには、少なくとも、數カ國における革命の勝利が必要である。それ故に、他の諸國における革命を發展させ、支持することは、勝利した革命の本質的任務である。それ故に、勝利した國の革命は自己を自立的なものとして見なすべきではなく、すべての國々におけるプロレタリアートの勝利を促進させるための援助として、手段として見なさなければならない。

レーニンは、勝利した革命の任務は、「すべて、國における革命を發展させ、支持し、奮起させるために、一國において實行可能な最大限」を遂行することであると語つて、簡潔にこの思想を言ひあらわした（レーニン全集、ロシア語版、第二三卷、三八五頁）。

以上が、大體において、レーニンのプロレタリア革命理論の特徴的な諸點である。

四、プロレタリアートの獨裁

この題目から、私は次の三つの基本的問題をとらう——

- (イ) プロレタリア革命の用具としてのプロレタリアートの獨裁
- (ロ) ブルジョアジーに對するプロレタリアートの支配としてのプロレタリアートの獨裁
- (ハ) プロレタリアートの獨裁の國家形態としてのソヴェト權力。

一、プロレタリア革命の用具としてのプロレタリアートの獨裁。プロレタリア獨裁にかんする問題は、何よりもまず、プロレタリア革命の基本的内容にかんする問題である。プロレタリア革命、その運動、その發展規模、その成果は、プロレタリアートの獨裁を通じてのみ、肉をつけ、血をかよわせうるのである。プロレタリアートの獨裁は、第一には、打倒された搾取者の反抗を壓しつぶし、自己の成果を固め、第二には、プロレタリア革命を最後までやりとげ、革命を社會主義の完全な勝利に到達させるために生れたところのプロレタリア革命の用具であり、その最も重要な據點である。革命は、プロレタリアートの獨裁なしでも、ブルジョアジーに打ち勝ち、その權力を倒すことができるであろう。だが、もし、革命がその發展の一定の段階において、自己の基本的な城塞として、プロレタリアート獨裁の形で特殊の機關をつくらなかつたならば、ブルジョアジーの反抗を壓しつぶし、勝利を保全し、社會主義の終局の勝利まで前進することは、もはや出来ないことである。

「權力に關する問題は、あらゆる革命の基本的な問題である」(レ、ニ、ン)。これは、問題が權力を獲得し、これを奪取することだけに限られていようことを意味するだろうか？ いや、意味しない。權力を獲得すること、それは、ただ大業の端緒にすぎない。一國において打倒されたブルジョアジーは、幾多の原因のために、まだ永い間、これを倒したプロレタリアートよりも強いままである。それ故に、肝要なことは、權力を維持し、これを強化し、これを打破しがたいものにするのである。この目的を達成するためには、何が必要であるか？ そのためには、少くとも、勝利の「すぐ翌日」にプロレタリアートの獨裁の前に立つ、次の三つの主要任務を果さなければならぬ——

(イ)革命によつて打倒され、收奪された地主及び資本家の反抗をうちこわし、資本の権力を再興せんとする彼らのあらゆる企圖を根絶すること。

(ロ)すべての勤勞者をプロレタリアートのまわりに結集させるように、建設事業を組織し、かつこの活動を、諸階級の絶滅、根絶を準備する方向にむかつて導いて行くこと。

(ハ)革命を武装すること、すなわち外敵との闘争のために、帝國主義との闘争のために、革命の軍隊を組織すること。

プロレタリアートの獨裁は、これらの任務を遂行し、果すために必要なのである。

レーニンは次のように言つてゐる——

「資本主義から共産主義への過渡は、歴史上の一時代である。この時代が終結しない間は、搾取者には、必然的に復古の希望がのこされている。そしてこの希望は復古の企圖に轉化する。しかして最初の重大な敗北の後には、自己の打倒を豫期せず、その打倒を信せず、またそれについて考えようとさえしなかつた、打倒された搾取者共は十倍の精力をもつて、狂的な熱情をもつて、百倍にも増大した憎惡をもつて、奪いとられた「樂園」をとりもどすために、過去においては非常に樂な生活をしてきたが、今や「平民の野郎共」によつて没落と貧窮（もじく）は「普通」の勞働……に落されたその家族のために、戦闘に身を投ずる。そして、この搾取者・資本家共の背後に、小ブルジョアジーの廣はんな大衆がついて行くのである。この小ブルジョアジーについては、すべての國の數十年にわたる歴史的经验が證明してゐる如く、彼らは動搖し、躊躇し、今日はプロレタリアートに従い、明日は變革の困難さに恐れをなし、勞働者の最初の敗北、もじく、

は中半の敗北によつて大狼狽し、神經過敏となり、いらいらし、悲鳴をあげ、轉々として一つの陣營から他の陣營に移るのである」。(レーニン全集、ロシア語版、第二三卷、三五五頁)

ブルジョアジーは復古を企圖するためには自身の根據をもつてゐる。というのはブルジョアジーは、打倒された後もなおながい間、これを打倒したプロレタリアートよりも強いままでゐるからである。

レーニンはこういつてゐる——

「若し搾取者がただ一國で撃破された場合には——しかも、もちろん、これが典型的な場合である。何故ならば、幾多の國に同時に革命がおこるといふことはきわめて稀な例外のことだからである——搾取者は依然として被搾取者よりも強いままでゐる」(前掲書、三五四頁)。

打倒されたブルジョアジーの力は何處にあるか？

第一に、それは、「國際資本の力に、ブルジョアジーの國際的連絡の力とその鞏固なこととにある」(レーニン全集、ロシア語版、第二五卷、一七三頁)。

第二に、それは、「搾取者共が、變革の後もなおながい間、必然的に、幾多の非常に大きな事實上の優越を保持していることにある。すなわち彼らには貨幣(貨幣を即時に絶滅することはできない)や、何等かの、往々かなり多額の動産が残つており、連絡や、組織及び行政の經驗や、行政のあらゆる「秘訣」(慣習、手續、手段、可能性)の智識が残つており、より高い教養、高級の技術家たち(ブルジョアの的に生活し、ブルジョアの考えを持つてゐる)との近親關係が残つており、軍事問題に對する計り知れぬほどの大きな經驗(これは非常に重要なことだ)が残つてゐる、等々」(レーニン全集、ロシア語版、第二三卷、三五四頁)。

第三に、それは、「習慣の力に、小規模生産の力にある。なせならば、小規模生産はいかんながらまだ世の中に非常に多数残つており、しかも小規模生産は、資本主義とブルジョアジーとを不斷に、毎日、毎時間、自然發生的に、大量的に生み出しているからである」。……何となれば、「階級を絶滅することは、單に地主や資本家を驅逐することを意味するだけではない——これをわれわれは比較的容易にやりとげた——これは、また、小商品生産者を絶滅すること、を意味する。だが、彼らを驅逐することはできない。彼らを押さつておすことはできない。彼らとは、平和に暮さなければならぬ。彼らをただ非常にながい間の、漸進的な、慎重な、組織的活動によつてのみ作り換え、再教育することができる（またそうしなければならぬ）」からである（レーニン全集、ロシア語版、第二五卷、一七三頁及び一八九頁）。

だからこそレーニンは、次のようにいつていたのである——

「プロレタリアートの獨裁は、ヨリ、強力な敵に對する、打倒されたためにその抵抗を十倍も加えたところのブルジョアジーにたいする新しい階級の、最も獻身的な最も假借なき戦争である」

「プロレタリアートの獨裁は、舊社會の諸勢力と傳統とにたいする流血的な、また非流血的な、暴力的な、また平和的な、軍事的な、また經濟的な、教育的な、また行政的な、頑強な闘争である」（前掲書、一七三頁及び一九〇頁）。

これらの任務を短期間に遂行し、これらすべてを數年間に成就させるなど、決してできないことは、恐らく論證する必要はあるまい。それ故にプロレタリアートの獨裁、すなわち、資本主義から共

産主義への過渡は、一連の「最も革命的な」法令や布告の形であらわれたほんの瞬間的な時間とみなすべきでなく、國內戦争や對外的衝突、頑強な組織的活動や經濟的建設、攻撃や退却、勝利や敗北にみられた歴史上の一時代と見なさなければならぬ。この歴史的時代は、社會主義の完全な勝利のための經濟的並に文化的前提條件を創造するためだけではなく、またプロレタリアートに、まず第一には國を統治する能力をもつた力として、自分自らを教育し、鍛えあげる可能性を與え、第二には小ブルジョア層を社會主義的生産の組織を保證する方向に再教育し、作り直す可能性を與えるためにも必要である。

マルクスは、労働者に次のように語つた——

「諸君は國內戦争や國際的戰鬪の十五年、二十年、五十年を經過しなければならぬ。それは、現存する諸關係を變更するただけでなく、また諸君自身を變更させ、諸君が政治支配の能力を持つようになるためでもある。」（カール・マルクス——エフ・エンゲルス全集、ロシア語版第八卷、五〇六頁）

レーニンは、マルクスの思想をけい承し、更に發展させつつ、次のように書いている——

「プロレタリアートの獨裁の下で數百萬の農民や小經營者、數十萬の事務員、官吏、ブルジョア・インテリゲンチヤを再教育し、彼ら全部をプロレタリア國家及びプロレタリアの指導の下に服従させ、彼らの中にあるブルジョア的習慣や傳統を克服しなければならぬであらう」また「……即時にはなく、奇蹟によつてではなく、聖母マリヤの教えによつてではなく、スローガンや決議や布告の如き指令的手段によつてではなく、大量の、小ブルジョア的諸影響とのなが

い間の困難な大衆闘争によつてのみ、自分自身の、小ブルジョアの偏見から解放されえるプロレタリア自身をも、プロレタリアート獨裁の下での、長期にわたる闘争裡に……再教育すること」も同様に必要であらう（レーニン全集、ロシア語版、第二五卷、二四八頁及び二四七頁）。

二、ブルジョアジエにたいするプロレタリアートの支配としてのプロレタリアートの獨裁。以上ののべたところから見て、プロレタリアートの獨裁が、古い、經濟的並に政治的的制度を、不可侵なるものとしてそのままにして置く、政府關員の單なる更迭、「内閣」の更迭、その他等々でないことは、もはや明かである。獨裁を火のように恐れ、恐怖の餘り、獨裁の概念を「權力獲得」の概念ですりかえている、すべての國のメンシェヴィキや日和見主義者等は、「通常『權力獲得』を『内閣』の更迭に歸し、シャイデマンやノスケ、マクドナルドやヘンダーソンの如き連中で組織された新内閣が、政權につくことに歸着させている。これらの、またこれらに類似した内閣の更迭が、プロレタリアートの獨裁と、すなわち眞のプロレタリアートによる實際の權力獲得と、何等の共通點をもたない」とは、恐らく説明する必要があるまい。ブルジョア舊制度をそのままにして政權についているマクドナルド輩やシャイデマン輩、彼らのいわゆる政府は、ブルジョアジエの手中にある御用機關以外の、帝國主義の潰瘍を隠蔽するもの以外の、また被壓迫並に被搾取大衆の革命運動に反對するために、ブルジョアジエの手中にある用具以外の、何物でもあり得ない。彼ら、すなわちこれらの政府は、むき出しに大衆を壓迫し、搾取することが不便であり、不利益であり、困難であるとき、その煙幕として資本にとつて必要なのである。もちろん、こういう政府があらわれたということとは、「彼らのところでは」(すなわち資本家のところでは)、「シブカ丘で」(註参照)形勢がおだやかでないということの兆候である。にもかかわらず、こういう種類の政府は、不可避的に、依然として表面を塗り代えられただけ

の資本の政府である。マクドナルドもしくはシャイデマンの政府とプロレタリアートによる権力の獲得との間には天地の差がある。プロレタリアートの獨裁は内閣の更迭ではなく、中央及び地方に新しい権力機關をもつ、新しい國家であり、古い國家すなわちブルジョアジーの國家の廢墟の上に生じたプロレタリアートの國家である。

プロレタリアートの獨裁は、ブルジョア的制度の基礎の上に發生するのではなく、ブルジョアジーの打倒後、そのブルジョア的制度の破壊過程において、地主や資本家の財産を收奪する過程において、基本的な生産用具と手段との社會化の過程において、プロレタリアートの暴力による革命の過程において、生れるのである。プロレタリアートの獨裁とは、ブルジョアジーにたいする暴力に立脚している革命的権力である。

國家は、自己の階級敵の抵抗をおしつぶすため、支配している階級の手の中にある機關である。このかんけいにおいては、プロレタリアートの獨裁は、本質上、あらゆる他の階級の獨裁と何らことなっていない。何故ならば、プロレタリア國家はブルジョアジーをおしつぶすための機關だからである。だがそこには、一つの本質的な相違がある。この相違は、これまで存在してきたすべての階級國家が、多數被搾取者にたいする少數搾取者の獨裁であつたのに反して、プロレタリアートの獨裁は、少數搾取者にたいする多數被搾取者の獨裁である、という點にある。

要約すれば、プロレタリアートの獨裁は、法律によつて制限せられず、暴力に立脚しかつ勤勞者および被搾取大衆の同情と支持とを得ているところの、ブルジョアジーにたいするプロレタリアートの支配である。(レーニン「國家と革命」)

このことから、次の二つの基本的な結論が生れる。

第一の結論。プロレタリアートの獨裁は、「完全なる」民主主義、すなわち、すべてのための、富者のためにも貧者のためにもなる民主主義ではあり得ない——プロレタリアートの獨裁は、「(プロレタリア及び一般に無産者のための)新式の民主主義的國家であり、(ブルジョアに反對する)新式の獨裁的國家でなければならぬ……」(レーニン全集、ロシア語版、第二一卷、三九三頁)。全般の平等、「純粹」の民主主義、「完全なる」民主主義、その他等々についてのカウツキーとその仲間のおしやべりは、被搾取者と搾取者との平等は不可能であるという、かのうたがない事實をブルジョア的にいんべいするものである。「純粹」民主主義の理論は、帝國主義的掠奪者らによつて馴らされ、少しばかり餘計に餌をあてがわれた労働者階級の上層分子の理論である。この理論は、資本主義の潰瘍をおおいかくし、帝國主義を粉飾し、被搾取大衆にたいする鬭争において、帝國主義に精神的な力を附與するために考え出された理論である。資本主義のもとでは「自由」を行使するために必要缺くべからざる會堂や印刷所や用紙の倉庫等々が、搾取者の特權に屬するということからいっても、被搾取者のためには、實際の「自由」はないし、またあり得ないのである。資本主義の下では、たとえ資本主義の條件下で最も民主主義的な制度でさえ、政府は人民によつて作られるのではなく、ロスチャイルドやステインネス、ロツクフェラーやモルガン等によつて作られるという理由からいっても、被搾取大衆が國の統治に實際に参加するということはないし、またあり得ない。資本主義の下における民主主義は、資本主義的民主主義であり、多數者たる被搾取者の權利の制限に基礎を置き、かつこの多數者に反對して向けられたところの少數搾取者の民主主義である。ただプロレタリア獨裁の下での

*傍點は私による。——イ・スターリン、

み、被搾取者のための實際の自由と、國の統治へのプロレタリア及び農民の實際の參加が可能である。プロレタリアートの獨裁の下における民主主義は、プロレタリア民主主義であり、少數搾取者の權利の制限に基礎をおき、かつこの少數者に反對して向けられたところの多數者たる被搾取者の民主主義である。

第二の結論。プロレタリアートの獨裁は、ブルジョア社會及びブルジョア民主主義の平和的發展の結果として生れることは出来ない。——それは、ただブルジョア國家機關、ブルジョア軍隊、ブルジョア官僚機關、ブルジョア警察の破壊の結果としてのみ生れることができる。

マルクス及びエンゲルスは、『共產黨宣言』の序文で次のように言っている——

「勞働者階級は、單純に、すでに出來上つてゐる國家機關を占有して、これを自分自身の目的のために運用することはできない」。更に——プロレタリア革命は、「……これまで行われてきた如く、官僚的・軍事的機關を甲の手から乙の手に引渡すのではなく、これを打ちこわすこと……」でなければならぬし、「——かくの如きが、大陸におけるあらゆる眞の人民革命の豫備條件である。」と、マルクスは一八七一年、クーゲルマン宛の手紙の中で、言つてゐる。

大陸に關するマルクスのこの制限的な一句は、それによつてマルクスが、ブルジョア・民主主義のプロレタリア・民主主義への平和的發展の可能性を、少なくとも、ヨーロッパ大陸に屬さない若干の國（イギリス、アメリカ）に對して容認したのであるといつてわめきたてる口實を、すべての國の日和見主義者およびメンシエヴィキ共に與えたのである。事實マルクスは、かかる可能性を容認した。彼は、當時まだ獨占資本主義が存在せず、帝國主義が存在せず、これらの國々の發展の特殊な條件の

ために、そこにはまだ發展した軍閥及び官僚主義がなかつたところの、前世紀の七十年代のイギリス及びアメリカにたいしてかく容認すべき根據をもつていた。發展した帝國主義の出現前には事情は右の如くであつた。だが、その後三十年——四十年を經過して、これらの諸國の事態が根本的に變化した時、帝國主義が發展して、これが例外なくすべて資本主義諸國を捉えた時、軍閥及び官僚主義がイギリスにもアメリカにも出現した時、イギリス及びアメリカにおける平和的發展の特殊の諸條件が消滅した時——これらの國に關する制限はおのずからなくならざるを得なかつたのである。

レーニンは次のように言つてゐる——

「一九一七年の今日、第一次帝國主義大戰時代には、マルクスのこの制限はなくなつてゐる。そして軍閥と官僚主義が存在しないという意味でのアングロ・サクソンの「自由」の最大にして、最後の——全世界での——代表國たるイギリスもアメリカもすべてを自己に従屬させ、すべてを自ら抑壓してゐる官僚的・軍事的諸制度の全ヨーロッパ的な汚穢な、血にまみれた、泥沼の中に全くすべりこんでしまつた。今日、イギリスでも、アメリカでも「すでに出來上つてゐる」(これらの國において一九一四年——一九一七年の間に「ヨーロッパ的」な、一般帝國主義的な完成を遂げている)「國家機關」を打ちこわし、破壊することが「あらゆる眞の人民革命の豫備條件」である」(レーニン全集、ロシア語版、第二一卷、三九五頁)。

換言すれば、プロレタリアートの暴力革命に關する法則、すなわちかかる革命の豫備條件として、ブルジョア國家機關を打ちこわすことに關する法則は、世界の帝國主義諸國の革命運動の不可避的な法則である。

もちろん、遠い将来において、もしプロレタリアートが最も重要な資本主義諸國において勝利し、そして現在の資本主義による圍繞が社會主義による圍繞によつてとつて代わられるならば、その國の資本家が、「不利」な國際情勢のために、「自發的に」プロレタリアートに對して重大な讓歩をすることを得策と考ふる若干の資本主義國では、「平和的」な發展の道は全く可能である。だが、かかる豫想は、僅かに、遠い、ないとも限らぬ將來にのみ關してである。近い將來についていえば、この豫想は何らの、全く何らの根據をも持つていない。

それ故に、レーニンが次の如く言つてゐるのは正しい——

「プロレタリア革命は、ブルジョア國家機關を暴力的に破壊し、これを新しい機關に代えることとなくしては、不可能である」(レーニン全集、ロシア語版、第二三卷、三四二頁)。

三、プロレタリアートの獨裁の國家形態としてのソヴェト權力。プロレタリアート獨裁の勝利は、ブルジョアジーを彈壓し、ブルジョア國家機關を打ちこわし、プロレタリア民主主義をもつてブルジョア民主主義に代えることを意味する。これは明かなことである。だが如何なる組織の援助によつて、この巨大な事業が遂行され得るであろうか？ブルジョア議會政治の基礎の上に成長してきたところのプロレタリアートの古い組織形態が、かかる事業にとつて不十分であるということ——このことについては、恐らく疑いはあり得まい。ではブルジョア國家機關の墓掘人たる役目を果すことができ、この機關を打ちこわすのみでなく、かつブルジョア民主主義をプロレタリア民主主義におき代へるのみでなく、プロレタリア國家權力の基礎となり得る、プロレタリアートの新しい組織形態とはいかなるものであるか？

プロレタリアートのこの新しい組織形態とは、すなわちソヴェトである。

古い組織形態と比較して、ソヴェトの力は何處にあるか？

それは、ソヴェトがプロレタリアートの最も廣はんな、すべてを包括する大衆的組織である、という點にある。なせならば、ソヴェトが、然りソヴェトのみが例外なくすべての労働者を包括するからである。

それは、ソヴェトがあらゆる壓迫されているものと搾取されているもの、労働者と農民、兵士と水兵を結合し、それがために、大衆の前衛による、プロレタリアートによる大衆闘争の政治的指導がそこで最も容易に、かつ最も完全に實現され得る唯一の大衆組織である、という點にある。

それは、ソヴェトが大衆の革命闘争、大衆の政治的進出、大衆の蜂起の最も強力な機關であり、金融資本及びその政治的附加物の全能を打ちこわさうる機關である、という點にある。

それは、ソヴェトが大衆そのものの直接的組織、すなわち最も民主主義的な組織であり、したがって、大衆のために新國家の建設及びその統治への参加を最大限に容易ならしめ、かつ古い制度の破壊の闘争において、新しいプロレタリア的制度の確立の闘争において、大衆の革命的精力、發意性、創造的能力を最大限に發揮させるところの、最も權威ある大衆の組織である、という點にある。

ソヴェト權力は、地方諸ソヴェトを一つの總體的な國家組織へ、すなわち壓迫され搾取されている大衆の前衛としての、また支配階級としてのプロレタリアートの國家組織へ結合し、形成するものであり、すなわちソヴェト共和國へ結合するものである。

ソヴェト權力の本質は、資本家及び地主によつて抑壓されていた階級、實に、その階級の最も大衆的な最も革命的な諸組織が、今や「全國家權力の、全國家機關の恒常的かつ唯一の基礎」であるという點にあり、また「最も民主主義的なブルジョア共和國でさえ」、法律上は平等の權利を與えられてはいるが、「實際には、幾千の工夫や策略によつて、政治生活に参加し、民主主義的權利と自由とを行使する可能性を與えられていない大衆、實にその大衆が、今や國家の民主主義的統治に、恒常的に、また必須的に、しかも決定權をもつて参加するように引き寄せられている」*という點にある。(レーニン全集、ロシア語版、第二四卷、一三頁)

これこそ、ソヴェト權力が、古い、ブルジョア民主主義的、議會的形態とは原則的に相違している國家組織の新しい形態であり、かつ勤勞大衆を搾取し、抑壓する任務に適應させられたものではなく、勤勞大衆をあらゆる抑壓と搾取から完全に解放する任務に、プロレタリアートの獨裁の任務に、適應させられた國家のあたらしい型であるというゆえんなのである。

レーニンがソヴェト權力の出現と共に「ブルジョア民主主義的議會政治の時代は、終りを告げて、全世界史の新しい章、すなわちプロレタリア獨裁の時代が始まった」といつているのは、正しい。

では、ソヴェト權力の特徴的な諸點は何處にあるか？

それは、ソヴェト權力が、諸階級が存在している條件の下において可能なすべての國家組織の中、最も大衆的な、最も民主主義的な國家組織である、という點にある。なせならばソヴェト權力

* 傍點はすべて私による。——イ・スタヴリン

は、搾取者に對する闘争において労働者と搾取されている農民との結合と協力の舞台であり、その自己の活動においてこの結合とこの協力に立脚しており、それによつて、小數者に對する人口の大多數の權力であり、この大多數者の國家であり、この大多數者の獨裁の表現だからである。

それは、ソヴェト權力が階級ある社會のすべての國家組織の中で、最も國際主義的なものである、という點にある。なせならば、ソヴェト權力は、あらゆる民族的抑壓を打破し、さまざまな民族の勤勞大衆の協力に立脚し、それによつて統一した國家同盟へ、これらの大衆を結合することを容易にするからである。

それは、ソヴェト權力がその構成そのものによつて、壓迫され、搾取されている大衆の前衛、即ち、ソヴェトの最も結集され、かつ最も階級意識的な中核としてのプロレタリアートによつて、これらの大衆を指導する事業を容易にする、という點にある。

レーニンは言つている——『あらゆる革命と壓迫されている諸階級のあらゆる運動の經驗、全世界の社會主義運動の經驗は、プロレタリアートのみが、勤勞と搾取されている住民の分散し、おくれた層を結合し、指導しようということとをわれわれに教えている』（レーニン全集、ロシア語版、第二四卷、一四頁）。ソヴェト權力の構成は、この經驗が指示しているところのものを實現することを容易にする。

それは、ソヴェト權力が統一的な國家組織中に立法および行政の權力を結合し、地域的な選挙區を生産單位に、工場單位に代えることによつて、労働者ならびに一般勤勞大衆を國家統治の諸機關と直接結びつけ、彼らに國を統治することを教える、という點にある。

それは、ソヴェト権力のみが軍隊をブルジョアの統帥にたいする服従から免れさせ、ブルジョア制度の下におけるが如き人民抑壓の用具たる軍隊を、自國及び外國のブルジョアジーのキズナから人民を解放するための用具に轉化し得る、という點にある。

それは、『ソヴェト的國家組織のみが古い、すなわちブルジョア的な官僚機構及び司法機構を、眞に一舉に粉碎し、かつ終局的に破壊し得る』という點にある。(前掲書参照)

それは、ソヴェト的國家形態のみが勤勞者と、搾取されているものの大衆的組織を不斷にかつ絶對的に國家統治に参加させ、國家の死滅を準備しうる點にあり、この國家の死滅こそ、將來の國家なき共產主義社會の基本的要素の一つである。

かようにして、ソヴェト共和國は、長い間探され、そして遂に發見された政治形態であり、そのはいい内で、プロレタリアートの經濟的解放が、社會主義の完全な勝利が成就されるべき筈の政治形態である。

バリ・コムニオンは、この形態の萌芽であつた。ソヴェト権力は、その發展であり、完成である。だからこそ、レーニンは次のように言つていたのである——

「勞働者・兵士・農民代表ソヴェトの共和國は、民主主義制度のうちでもずつと高級な型の形態であるばかりでなく、……また社會主義への最も無難な移行を保證し得る唯一の*形態である」(レーニン全集、ロシア語版、第二二卷、一三二頁)。

* 傍點は私による。——イ・スタールン、

五、農民問題

この題目から、私は次の四つの問題を取ろう――

(イ) 問題の提起

(ロ) ブルジョア民主主義革命時における農民

(ハ) プロレタリア革命時における農民

(ニ) ソヴェト権力の鞏固化後における農民。

一、問題の提起。ある者は次のように考える――レーニン主義における基本的なものは農民問題であり、レーニン主義の發足點は、農民、その役割、その比重についての問題である、と。これは全然正しくない。レーニン主義における基本的な問題、その發足點は、農民問題ではなくてプロレタリアート獨裁についての問題であり、その獲得の諸條件、その強化の諸條件の問題である。權力獲得のためのプロレタリアートの闘争におけるプロレタリアートの同盟者の問題として、農民問題は派生的な問題である。

しかしながら、この事情は、農民問題がプロレタリア革命にとつて、疑いもなく有している重大な、緊切な意義をすこしも奪うものではない。ロシアのマルクス主義者の間で、農民問題の眞剣な深い研究が、實に第一次革命の前夜において（一九〇五年）、すなわちツァー制打倒の問題とプロレタリアートのヘゲモニー實現の問題とが、全幅的に黨の前にあらわれ、しかも來るべきブルジョア革命におけるプロレタリアートの同盟者の問題が、緊切な性質を帯びて來たときにはじめられたということは、周知の通りである。ロシアにおける農民問題がプロレタリアートの獨裁、その獲得及び維持

の問題が来るべきプロレタリア革命におけるプロレタリアートの同盟者の問題を提出したプロレタリア革命の時に、更に一層切實な性質を帯びるに至つたということも、また周知の通りである。權力獲得に進み、その準備をしつつあるものが、自己の眞の同盟者の問題に關心を持たざるを得ないことは、分りきつたことである。

この意味において、農民問題はプロレタリアートの獨裁の全般的問題の一部分であり、また、かかるものとして、レーニン主義の最も緊切な問題の一つである。

第二インターナショナル諸黨の農民問題に關心する無關心な、時としては、全然否定的な態度は、西歐における特殊な發展條件だけでは説明されない。それは、何よりもまずこれらの諸黨がプロレタリア獨裁を信せず、革命を恐れてプロレタリアートを權力につかせようと考へないことで説明される。革命を恐れるもの、プロレタリアートを權力につかせようと考へないものは、革命におけるプロレタリアートの同盟者の問題に關心を持ちえない。——彼らにとつては同盟者に關心する問題はとうでもない、切實でない問題である。農民問題に對する第二インターナショナルの連中の嘲笑的態度は、彼らにあつてはお上品なしるしであり、「真正正銘」のマルクス主義のしるしであると認められている。だが、實際のところ、そこにはマルクス主義が毫末もないのである。なせならば、農民問題の如き重大な問題にたいする無關心ということとは、プロレタリア革命の前夜においては、プロレタリアートの獨裁否定の一反面であり、マルクス主義にたいする眞向からの反逆としての疑なき印だからである。

問題はこうである。すなわち農民の特定の生活條件の結果として、農民の中にひそんでいる革命的可能性は、すでに汲みつくされてしまつたか、どうか、そしてもし汲みつくされていないならば、こ

これらの可能性をプロレタリア革命のために利用し、西歐におけるブルジョア革命の時にはブルジョアジーの豫備隊であつたし、現在においても依然としてそうである農民を、その搾取されている大多數を、ブルジョアジーの豫備隊からプロレタリアートの豫備隊に、その同盟者に轉化させる希望、根據があるか、どうか？

レーニン主義は、この問題にたいして肯定的に、すなわち農民の大多數の中に革命的能力があることを認め、これをプロレタリア獨裁のために利用する可能性がある、というふうに答える。

ロシアにおける三つの革命の歴史は、この點に關するレーニン主義の結論を完全に確證している。

この理由から、隷屬と搾取にたいする勤勞農民大衆の闘争において、抑壓と貧窮とから解放されるための彼らの闘争において、これら勤勞農民大衆を支持しなければならぬという實踐的結論が出てくる。このことは、もちろん、プロレタリアートは、あらゆる農民運動を支持しなければならぬということではない。ここでは、問題は、直接もしくは間接にプロレタリアートの解放運動を容易ならしめ、どんなふうにかプロレタリア革命の進行をたすけ、農民を勞働者階級の豫備隊ならびに同盟者へ轉化することを助けるような農民の運動と闘争とを支持することについてである。

二、ブルジョア民主主義革命時における農民。この時期は、ロシア第一革命（一九〇五年）から第二革命（一九一七年二月）をも含むまでの期間を包括する。この時期の特徴的な點は、農民が自由主義的ブルジョアジーの影響から解放され、農民がカデット（註参照）から離れ、農民がプロレタリアートの側に、ボルシエヴィキ黨の側に轉換したことである。この時期の歴史は、カデット（自由主義的ブルジョアジー）とボルシエヴィキ（プロレタリアート）の間の農民獲得闘争の歴史である。國會の時

期が、この闘争の運命を決定した。何となれば、四つの國會の時期は、農民にとつては、實物的教訓として役立つ、しかも、この教訓は、農民がカデットの手からは土地も自由も得ることができないこと、ツアーが完全に地主の味方であり、またカデットがツアーを支持していること、そして援助を期待できる唯一の力が、都市の労働者、すなわちプロレタリアートであることを、農民にはつきりと示したからである。帝國主義戦争は、ブルジョアジーから農民の離脱を完成し、自由主義的ブルジョアジーの孤立化を完成して、國會の時期の教訓を確證しただけであつた。なせならば、戦争の數年間は、ツアーとその同盟者たるブルジョアジーから平和を得ようとする期待がすべて空しいものであること、それが全くあてにならないものであることを示したからである。國會の時期の實物的教訓なくしては、プロレタリアートのヘゲモニーは、不可能であつたであらう。

かようにして、ブルジョア民主主義革命における労働者と農民の同盟は形成されたのである。かようにして、ツアー制打倒のための共通の闘争におけるプロレタリアートのヘゲモニー、一九一七年の二月革命に導いたヘゲモニーは、形成されたのである。

西歐（イギリス、フランス、ドイツ、オーストリア）のブルジョア革命は、周知の如く、これとは違つた道をたどつた。ここでは、革命におけるヘゲモニーは、その力の弱いために獨立の政治的勢力となつておらず、またなり得なかつたプロレタリアートに屬したのではなく、自由主義ブルジョアジーに屬していた。ここでは、農民は農奴制度からの解放を、數も少く、組織されてもいなかつたプロレタリアートの手からではなく、ブルジョアジーの手から獲得した。ここでは、農民は自由主義ブルジョアジーと共に舊制度に反對して戦つた。ここでは、農民はブルジョアジーの豫備隊であつた。そのためにここでは、革命はブルジョアジーの政治的重みを非常に強めるにいたつたのである。

これと反對に、ロシアにおいては、ブルジョア革命は、正反對の結果をもたらした。ロシアにおける革命は、政治的勢力としてのブルジョアジーの強化ではなくて、その弱体化に導き、またその政治的豫備隊の増大ではなくて、その基本的豫備隊の喪失に、すなわち農民の喪失に導いた。ロシアにおけるブルジョア革命は、革命的プロレタリアートの周圍に幾百萬の農民を結集させて、自由主義ブルジョアジーではなく、革命的プロレタリアートを最前面に押し出したのである。

ロシアにおけるブルジョア革命が、比較的短期間にプロレタリア革命に成長轉化した事實もまた、特に、このことによつて説明される。プロレタリアートのヘゲモニーは、プロレタリアート獨裁の萌芽であり、またそれへの過渡的段階であつた。

西歐のブルジョア革命の歴史にその先例を有しない、このロシア革命の獨特な現象は何によつて説明されるか？ この獨特性は何處から來たのか？

このことは、次の事情によつて説明される。すなわち、ロシアにおいてはブルジョア革命が、西歐におけるよりもつと階級闘争が發展した條件の下に展開したこと、ロシアのプロレタリアートは既にこの時期に獨立の政治的勢力に轉化し得たが、これに反して、自由主義ブルジョアジーはプロレタリアートの革命的であることに驚き恐れて、革命的であるというあらゆるみせかけをも失い（特に一九〇五年の教訓の後）、革命に反對し、労働者農民に反對して、ツアーと地主との同盟に向つたということである。

ロシアのブルジョア革命の獨特性を確定した次の事情に注意を拂うべきである——

(イ) 革命の前夜におけるロシア工業の未曾有の集中。例えば北米合衆國の如き發展した國においてさえ、五百人以上の労働者をもつ企業に全労働者の三割三分が働いていたのに對して、ロシアで

は同様の企業に全労働者の五割四分が働いていたのは、周知のことである。ボルシエヴィキ黨の如き革命的黨が存在する際には、この一つの事情だけでも、ロシアの労働者階級を、國の政治生活における極めて偉大な勢力に轉化させたことを、論證する必要はおそらくあるまい。

(ロ)企業における暴虐きわまる搾取形態と加うるにツアーの酷吏による堪えがたい警察政治——これらの事情が、労働者のそれぞれの重要なストライキを非常に大きな政治的行動に轉化させ、徹底的に革命的な勢力として労働者階級を鍛え上げたのである。

(ハ)一九〇五年の革命後、ツアー制にたいする追従とロコツな反革命に轉化したロシア・ブルジョアジの政治的無氣力。これはロシアのブルジョアジをツアー制のふところに追い込んだロシア・プロレタリアートの革命的性質によつてばかりでなく、ロシアのブルジョアジが政府の注文に直接依存していたことによつても説明される。

(ニ)農村における暴虐この上なき、これ以上たえがたい農奴制度の殘滓の存在、これは地主の全能によつて一層ひどくされた。——この事情が、農民を革命のふところにとび込ませたのである。

(ホ)生きとし生けるものすべてを壓迫し、その專横によつて資本家・地主の抑壓を強めたツアー制——この事情が、労働者及び農民の鬪争を單一な革命の激流に合流させた。

(ヘ)ロシアの政治的生活のこれらすべての矛盾を深刻な革命的危機に融合させ、革命に信じがたいほどの突撃力を與えた帝國主義戰爭。

かかる條件の下にあつて、農民は、どこに向つて行くべきであつたか？ 地主の全能に對し、ツアーの專横にたいし、彼らの經營を破産させた破壊的戰爭にたいして、誰に支援を求むべきであつたか？ 自由主義ブルジョアジにか？ だがそれは敵であつた——このことは、すべて四つの國會全

部の長年にわたる経験が物語つていた。エス・エル黨にか？ もちろん、エス・エル黨は、カデツト黨「よりはましである」。そして彼らの綱領は「相當」なもので、ほとんど農民的な綱領であつた。だがエス・エルは農民だけにたよろうと思つており、そして何よりも先ず敵がその勢力を求め得ている都市において弱かつた。このエス・エルは一體何をあたえることが出来るであらうか？ 農村においても都市においても、何者の前にもじり込みせず、ツアー及び地主との闘争において勇敢に第一線に立つて進み、農民を助けて隷屬から、土地をもたぬ状態から、壓迫から、戦争から脱せしめ得る新しい力は何處にあるか？ ロシアには一體右のような力があつたか？ しかり、確かにあつた。それは、その力を、最後まで闘いうるその技能を、その勇氣を、その革命的性質を、すでに一九〇五年に示したロシアのプロレタリアートであつた。

いずれにしても、他にこういう力はなかつたし、またどこからもそれをとつて來ようもなかつた。

それだからこそ、農民はカデツトからはなれて、エス・エルについたが、それと同時にロシアのプロレタリアートの如き、勇敢な革命の首領の指導の下に屬する必要を認めるに至つたのである。

ロシアのブルジョア革命の獨特性を確定した事情は、以上の如くであつた。

三、プロレタリア革命の時期における農民。この時期は、二月革命（一九一七年）から十月革命（一九一七年）に至るまでの期間を包括する。この時期はわずかに八カ月であつて、比較的長くないが、この八カ月は、大衆の政治的啓蒙と革命的教育という見地から見れば、平時の憲政的發展の數十年とあえて對等においても差支えないのである。なせならば、この八カ月は、革命の八カ月であるからである。この時期の特徴點は、農民のヨリ一その革命化、農民のエス・エルに對する幻滅、

農民のエス・エルからの離脱、國に平和をもたらさうる唯一の、徹底的に革命的な力としてのプロレタリアートの周圍に、直接結集する方向への農民の新しい轉換であつた。この時期の歴史は、農民獲得のための、農民の大多數を獲得するためのエス・エル（小ブルジョア・デモクラシー）とボルシエヴィキ（プロレタリア・デモクラシー）との間の闘争の歴史である。連立政府の時期、すなわちケレンスキー政権の時期、地主の土地沒收に對するエス・エル及びメンシエヴィキの拒否、戦争けいぞくのためのエス・エル及びメンシエヴィキの闘争、六月に戦線で行われた攻勢、兵士にたいする死刑、コルニロフの叛亂がこの闘争の運命を決した。

さきには、すなわち従前の時期には、ツアーと地主の権力との打倒が革命の基本的問題であつたとすれば、今やツアーはすでになく、何時終るとも知れぬ戦争が農民を全く零落させて、國の經濟を衰微の極に達せしめた二月革命以後の時期においては、戦争の解消ということが革命の基本的問題となつた。重心は明かに、純粹な國內的性質をもつた諸問題から、基本的な問題、すなわち戦争の問題に移つた。「戦争を止めろ」、「戦争から脱出せよ」——これが、疲弊しきつた國中の、そして何よりもまず農民の、共通した叫びであつた。

だが戦争から脱出するためには、臨時政府を倒すことが必要であり、ブルジョアジーの権力を倒すことが必要であり、エス・エルとメンシエヴィキの権力を倒すことが必要であつた。何故ならば、彼らが、そして彼らのみが戦争を「最後の勝利」まで長びかせていたからである。ブルジョアジーの打倒による以外には、戦争から脱出する道は、實際にはなかつたのである。

これは、新しい革命すなわちプロレタリア革命であつた。なせならば、この革命は、新しいプロレタリア権力、すなわちソヴェト権力を樹立するために、革命的プロレタリアートの黨、すなわちボ

ルシエヴィキの黨を、帝國主義戰爭に反たいし、民主主義的平和をめざして革命鬭争を遂行する黨を權力につかせるために、帝國主義ブルジョアジーの最後の、極左翼の分派、すなわちエス・エルとメンシエヴィキの黨を權力の地位からつき落したからである。農民の大多數は、平和のためとソヴェト權力のための労働者の鬭争を支援した。

農民にとつてはこれ以外の活路はなかつた。また、これ以外の活路はありうるはずもなかつた。

かくの如く、ケレンスキ政府の時期は、勤勞農民大衆にとつては極めて偉大な實物的教訓であつた。何となれば、この時期はエス・エル及びメンシエヴィキの權力の下では、國を戰爭から脱出させることは出来ないし、農民は土地も、自由も得ることができないこと、メンシエヴィキとエス・エルとは、ただ甘言や欺瞞的な約束をする點だけでカデットと異なるが、實際においては同じ帝國主義的・カデットの政策を遂行していること、國を正しい道に導きうる唯一の權力は、ソヴェト權力をにおいて外にあり得ないことを、一目瞭然と示したからである。戰爭が更にもつと長引かされたことは、ただこの教訓の正しいことを裏書き、革命に拍車をかけ、幾百萬の農民及び兵士を驅つてプロレタリア革命のまわりに直接結集せしめるに至つた。エス・エルとメンシエヴィキの孤立化は、確乎不易の事實となつた。連立政府の時期の實物的教訓なくしては、プロレタリアートの獨裁は不可能であつたであらう。

以上が、ブルジョア革命のプロレタリア革命への成長轉化の過程を容易ならしめた事情であつた。ロシアにおけるプロレタリアートの獨裁は、かようにして形成されたのである。

四、ソヴェト權力の強化後における農民。從來、すなわち革命の第一期においては、問題は主としてツァー制の打倒であり、ついで二月革命後には、問題は何よりもまず、ブルジョアジーの打倒

によつて帝國主義戦争から脱出することであつたのにたいし、今や國內戦争が根絶され、ソヴェト權力が鞏固化された後においては、經濟建設の諸問題が最前面に登場して来た。國有化された工業を強化し、發展させること、このために、國家によつて統制される商業を通じて工業を農民經營と結合すること、餘剩糧食收集制を現物税によつてかえること、そして漸次現物税の量を減らしつつ、工業製品と農民經營の生産物との交換へ至らしめること、商業を活潑ならしめ、協同組合を發展せしめて、これに幾百萬の農民を引き入れること——かように、レーニンは、社會主義的經濟の基礎の建設完成に至る途上における經濟建設の當面の諸任務を描いたのである。

ロシアのような農民國にとつては、この任務は重荷すぎるだろう、という者がある。若干の懷疑論者たちは、かかる任務は單に空想的な、實行することのできないものである、なせならば、農民は結局農民である——彼らは小規模生産者で構成されている、従つて社會主義的生産の基礎を築きあげのために、彼らを利用しえないからである、とさえいつている。

だが懷疑論者達は間違つてゐる。何となれば彼らは、この場合において決定的な意義をもつ若干の事情を考慮してゐないからである。これらの事情のうち、主要なものを考察してみよう。

第一に、ソヴェト同盟の農民を西歐の農民と混同してはならぬ。三つの革命の試練を経て、プロレタリアートと共に、プロレタリアートを先頭として、ツアーとブルジョア權力にたいして闘争した農民、プロレタリア革命によつて土地と平和とを得、それ故にプロレタリアートの豫備隊となつた農民——この農民は、ブルジョア革命の時に自由主義ブルジョアを先頭に立てて闘い、このブルジョアジーによつて土地を得、それ故にブルジョアジーの豫備隊となつた農民とは異ならざるを得ない。プロレタリアートとの政治的親睦と政治的協力とを尊重することになれており、この親睦とこの

協力のおかげでその自由を得たところのソヴェト農民がプロレタリアートとの経済的協力のための極めて好都合な材料たらざるを得ないということは、おそらく論證する必要はあるまい。

エンゲルスは、「社会主義黨による政權の獲得は、近い將來の問題となつた」、「政權を獲得するためには、黨は先ず都市から農村にいつて、農村で有力とならなければならぬ」（エンゲルスの「農民問題」、一九二二年版参照）と言つた。彼は、西歐の農民を念頭において、前世紀の九十年代にこのことを書いたのである。三つの革命の間に、この點について巨大な仕事をやつたロシアの共產主義者達が、わが西歐の同志達が夢想さえないような勢力と支柱とを、農村においてすでにくり得ていたということを證明する必要があるだろうか？ この事情が、ロシアにおける労働者階級と農民との経済的協力を組織する事業を根本的に容易ならしめざるを得ないということを、どうして否定し得るであろうか？

懷疑論者達は、小農について、それは社会主義的建設とは一致しない要素であると、くり返し言つてゐる。だが西歐の小農について、エンゲルスが何をいつてゐるかをききたまえ——

「われわれは、斷然小農の味方である。われわれは、彼等の生活をもつと樂にするために、彼らが協同經營に移ることを決心する場合には、これを容易ならしめるために、できるだけのことをするであろう。もし彼らが、まだこの決心をするに至らない場合には、われわれはこの問題について、彼らが自己のちつぽけな土地の上で考える時間をできるだけ多くあたえるように努めるであろう。われわれがかような態度をとるのは、自作小農民のわれわれの側への移行が可能であると考えるからばかりでなく、また黨の直接の利益からでもある。プロレタリアになつてしまふまで

放任しておかずに、農民のままでわれわれの味方に引きつけうる農民の数が多ければ多いだけ、**社會的改造は急速に**、また容易に完成されるであろう。資本主義的生産が到るところでその最極點まで發達し、小職人や小農民の最後の一人までが、資本主義的大生産の犠牲として零落してしまふまで、この改造を待つことは、われわれにとつて無益なことであろう。この意味で社會的資金から農民のためにはらわねばならぬ物質的犠牲は、資本主義經濟の見地から見れば、捨金のように見えるかも知れない。しかしながらそれは、とりもなおさず立派な投資である。なせならば、それは全體としての社會改造のための出費において、おそらく十倍もの金額を節約しうるからである。従つてこの意味において、われわれは農民にたいして非常に氣前よくやつていいのである」(前掲書参照)。

西歐の農民を念頭において、エンゲルスはかように言つたのである。しかししてエンゲルスの言つたものが、プロレタリアート獨裁の國におけるほど容易に、完全に實現されるところはどこにもないといふことは、明かなことではないか？ ただソヴェト・ロシアにおいてのみ、今すぐにしかも完全に、「自作小農民のわれわれの側への移行」と、このために必要な「農民にたいする氣前よさ」とを實現し得ること、農民のためのこれらの、またこれに類似の方策が既にロシアにおいて實行されつつあることは、あきらかではないか？ この事情がまた一方では、ソヴェト國の經濟建設事業を容易ならしめ、促進せざるを得ないことを、どうして否定し得るであらうか？

第二に、ロシアの農業を西歐の農業と混同してはならぬ。西歐では、農業の發展は資本主義の普通の道をたどつて進んでいる。すなわち、一方の極には大領地と私營資本主義の大農場、他方の極には

貧窮と貧困と賃銀奴隷、という農民の深刻な分化事情の下で行われている。西歐ではこのために、崩壊と腐敗とは全く當然である。だがロシアではそうではない。わが國においては、農業の發展はソヴェト權力の存在と主要な生産用具及び手段の國有化とが、以上のような發展を許さないことから、つても、かような道をたどることは出来ない。ロシアにおいては、農業の發展は他の道をたどつて、すなわち幾百萬の小農と中農の協同組合化の道をたどつて、特典的信用貸付けの制度によつて國家から援助されているところの、大衆的協同組合を農村において發展させるといふ道によつて進まなければならぬ。レーニンは協同組合に關する諸論文の中で、農業の發展は、わが國では必ず新しい道をとつて、即ち農民の大多數を協同組合を通じて社會主義的建設に引き入れるといふ道によつて、初めは農業生産物の販賣の領域で、ついで農業生産物の生産の領域で、集團主義の原則を農業の中に漸次に植えつけるといふ道によつて進まなければならぬと、正しく指摘した。

この點において極めて興味のあるのは、農業協同組合の活動と關連した、農村における若干の新しい現象である。セルスコソユーズ（農業協同組合中央連合——譯者）内に農業の部門別による、すなわち亞麻、バレイ薯、タバコその他の部門別による、有望な將來を有する新しい大きな組織が創られたのは周知の事である。これらのうち、例えばリノツェントル（全露亞麻栽培協同組合中央連合——譯者）は、亞麻栽培農民の生産組合網全體を結合している。リノツェントルは、農民に種子や生産用具を供給し、次いで同じ農民からその亞麻生産物の全部を買上げ、これを大規模に市場に賣りさばき、農民が利益を得られるように保證し、かようにして農民の經營を、農業協同組合中央連合を通じて國營工業と結合させている。かかる生産の組織形態をなんと名づくべきであろうか？ 私の意見では、それ

は農業の分野における大規模の國家社會主義的生産の家内の制度である。私はこゝで、例えば手工業者が、資本家から原料と用具を受けとり、その全生産物を資本家に提供し、實際においては自分の家で働いている半雇傭労働者であつた紡績生産における資本主義の家内工業制度からの類推によつて、國家社會主義的生産の家内の制度といふのである。これは農業の發展が、わが國においていかなる道をたどらなければならぬかを示している多くの指標のうちの一つである。私は、こゝでは農業の他の部門における同じような種類の他の指標についてはもはや述べない。

農民の最大多数が、私營資本主義の大農場と賃銀奴隷との道、貧困と零落の道を打ちすて、喜んでこの新しい發展の道をとるのであらうことは、恐らく論證する必要はあるまい。

わが國の農業發展の道について、レーニンは次のように言つている——

「すべての大なる生産手段にたいする國家權力、プロレタリアートの手中にある國家權力、このプロレタリアートと幾百萬の小農及び極小農との同盟、農民にたいする指導をこのプロレタリアートのために確保すること等々——これらは、われわれがかつては小商人的であるとしてけいべつし、またある點から見れば、現在ネツプの下においても、かゝるものとしてけいべつする權利を持つているところの協同組合から、しかりひとり協同組合のみから出發して、完全な社會主義社會の建設を完成するために必要なすべてのもの、必要缺くべからざるすべてのものではないか？ これはまだ社會主義社會建設の完成ではないが、しかしそれは、この建設を完成するために必要にして十分なすべてのものである」(レーニン全集、ロシア語版、第二七卷、三九二頁)。

プロレタリアート獨裁の下における「住民の組織の新しい原則」としての、また新しい「社會制度」としての、協同組合にたいする財政上及びその他の援助の必要について更に述べながら、レーニンは言葉をつずけて、次のように言っている――

「あらゆる社會制度は、一定の階級の財政的援助の下においてのみ、生れるのである。「自由」な資本主義の誕生のために費された幾億萬ルーブルについては思い出すまでもない。われわれが普通以上に支持しなければならぬ社會制度は、現在においては協同組合制度であるといふことを今やわれわれは認識し、かつこれを實際化させなければならぬ。しかしてこの制度をその言葉の本當の意味で支持しなければならぬ。すなわちこの支持を、任意の協同組合の商業取引の支持と理解しては不十分である。この支持を眞の住民大衆が眞に参加するような協同組合の商業取引の支持と理解しなければならぬ」(前掲書、三九三頁)。

すべてこれらの事情は何を物語っているか？

それは懷疑論者達が正しくないことを物語っている。

それは、勤勞農民大衆を、プロレタリアートの豫備隊と見なすレーニン主義が正しいことを物語っている。

それは、權力を握っているプロレタリアートが、工業と農業とを結合し、社會主義建設を高揚せしめ、それなくしては社會主義的經濟への移行が不可能であるところの、ゼヒ必要な基礎をプロレタリアートの獨裁にあたえるために、この豫備隊を利用することができるとし、また利用しなければならぬことを物語っているのである。

六、民族問題

この題目から、私は、次の二つの主要問題をとろう。

(イ) 問題の提起

(ロ) 被壓迫民族の解放運動とプロレタリア革命。

一、問題の提起。最近の二十年間に、民族問題は幾多の極めて重大な變化を受けた。第二インターナショナルの時期における民族問題と、レーニン主義の時期における民族問題とは決して同一のものではない。これらの二つは、その範圍からばかりでなく、その内的性質からいつても、甚しい相違がある。

従來、民族問題は通常、主として、「文明」民族に關する問題のせまい範圍にとじ込められていた。アイルランド人、ハンガリア人、ポーランド人、フィンランド人、セルビヤ人及びその他若干のヨーロッパ民族——これが第二インターナショナルの連中がその運命に關心を持つていたところの、完全な權利を享有していなかった民族の範圍であつた。最も亂暴にして殘虐な形態での民族的抑壓をたえ忍んでいる幾千萬、幾億萬のアジア及びアフリカの民族は、通常、視野の外におかれていた。第二インターナショナルの連中は白人と黒人、「文明人」と「非文明人」を同列におく決心がつかかなかつた。植民地の解放問題を注意深く回避している内容のない二三の生ぬるい決議——これが第二インターナショナルの活動家たちが自慢することのできたすべてのものであつた。今日においては、民族問題におけるこの二元性と中途半端さとは、清算されているものと見なされなければならない。レーニン主義は、このけしからぬ支離滅裂さを暴露し、白人と黒人、ヨーロッパ人とアジア人、帝國主義の

「文明的」奴隷と「非文明的」奴隷との間の障壁を破壊し、かようにして、民族問題を植民地問題と結びつけた。それによつて民族問題は、部分的な一國內の問題から、一般的な、國際的な問題に、すなわち帝國主義の桎梏からの、隷屬國ならびに植民地の被壓迫民族の解放という世界的問題に轉化させられたのである。

從來、民族自決の原則は、通常、不正當に解釋され、しばしば民族の自治權にまでせめられていた。第二インターナショナルの若干の指導者の如きは、自決權を文化的自治の權利に、すなわちすべての政權は、支配している民族の手にそのままに残しておいて、被壓迫民族が、自己の文化的施設を持ち得る權利に、轉化させてしまふまでにさえいたつた。この事情は、自決の思想が併合に對する鬭争の武器から、併合を正當化するための武器に轉化されるおそれがあるような結果に導いた。今日においては、この混同は克服されたものと見なさなければならぬ。レーニン主義は自決の概念を擴張して、それを隷ぞく國ならびに植民地の被壓迫民族の完全なる分離の權利として、獨立の國家的存在に對する民族の權利として解釋した。これによつて、自決權を自治權と解釋して併合を正當化するような可能性は除かれた。かようにして帝國主義戦争の時期においては、社會排外主義者の手に握られて疑いもなく大衆欺瞞の用具であつた自決の原則そのものが、この大衆欺瞞の用具から、ありとあらゆる帝國主義的欲望と排外主義的奸計とをバクロするための用具に、國際主義の精神をもつて大衆を政治的に啓蒙するための用具に、轉化されたのである。

從來、被壓迫民族の問題は、通常、純粹な法の問題として見なされていた。「民族平等の權利」のおごそかな宣言や「民族平等」にかんする無数の聲明——これこそは、一つの民族グループ(少數)が、他の民族グループを搾取することによつて生活している帝國主義のもとにおいては「民族の平

等」は被壓迫民族にたいする嘲弄であるという事實を抹殺している第二インターナショナルの諸黨が、これによつて生活の糧を得ていたものである。今日においては、民族問題におけるこのブルジョアジーの法見解は、バクロされてしまつてゐるものとみなさなければならぬ。レーニン主義は、被壓迫民族の解放闘争にたいするプロレタリア諸黨側からの直接の支援によつて裏づけされていない「民族平等」の聲明は、空虚な、虚偽の聲明であると斷言し、民族問題をもつたいぶつた聲明の高所から地上に引きずりおろした。これによつて被壓迫民族にかんする問題は、眞の民族平等のための、被壓迫民族が獨立國家として存在するための、帝國主義に反たいする彼らの闘争において、これらの民族を支援するという問題に、實際に、不斷に援助するという問題になつた。

從來、民族問題は、資本の權力、帝國主義の打倒、プロレタリア革命にかんする全般的問題から切り離された別の、獨立した問題として、改良主義的に考察されてきた。ヨーロッパにおけるプロレタリアートの勝利は、植民地における解放運動との直接の同盟なしにでも可能であり、民族・植民地問題の解決は、プロレタリア革命の大道からはなれて帝國主義にたいする革命的闘争なしにも、平穩のうちに「ひとりで」遂行されえるものと暗黙のうちに豫想されていた。今日においては、この反革命的見地はバクロされてゐるものとみなさなければならぬ。民族問題はプロレタリア革命と結びつてのみ、またその土台の上においてのみ、解決されうること、西歐における革命の勝利の道は、帝國主義に反たいする植民地ならびに隷ぞく國の解放運動との革命的同盟に通じていることを、レーニン主義は證明し、帝國主義戦争とロシアにおける革命とは、またこれを確證したのである。民族問題は、プロレタリア革命の全般的問題の一部分であり、プロレタリアート獨裁の問題の一部である。

問題はこう立てられる——被壓迫國の革命的解放運動の内部に存在して、革命的な可能性は、すでにいみつくされてしまつたか否か、もしくみつくされていないとすれば、これらの可能性をプロレタリア革命のために利用し、隷ぞく國ならびに植民地諸國を帝國主義ブルジョアジーの豫備隊たることから、革命的プロレタリアートの豫備隊に、プロレタリアートの同盟者に轉化させる希望、根據があるかどうか？

レーニン主義は、この問題にたいして肯定的に、すなわち被壓迫諸國の民族解放運動の内部には、革命的能力があることを認めるというふうになり、またこれらの能力を共通の敵を打倒するために、すなわち帝國主義を打倒するために、利用し得るといふふうに答えている。帝國主義發展のからくり、帝國主義戦争及びロシアにおける革命は、この點に關するレーニン主義の諸結論を完全に實證している。

このことから被壓迫並に隷屬民族の民族解放運動を「列強」民族のプロレタリアート側から支持する必要が生じ、斷乎として、かつ積極的に支持する必要が生ずるのである。

このことは、もちろん、プロレタリアートが到るところで、また何時でも、個々の具體的な場合のすべてにおいて、あらゆる民族運動を支持しなければならぬ、ということを意味しない。問題は、帝國主義を弱め、これを打倒する方向に向けられた民族運動を支持することであつて、帝國主義を強化し、維持する方向に向けられた民族運動を支持することではない。個々の被壓迫國の民族運動が、プロレタリア運動發展のための利益と衝突する場合がある。かゝる場合には支持が問題にさへなり得ないことは、分りきつたことである。民族の權利についての問題は、孤立した、自立的な問題ではなく、全體に従ぞくさせられ、全體的視角から考察されることを要求するところの、プロレタリ

ア革命の全般的問題の部分である。マルクスは、前世紀の四十年代に、ポーランド人及びハンガリア人の民族運動に味方し、チエツコ人及び南部スラヴ人の民族運動に反たいた。なせか？ なせならば、チエツコ人及び南部スラヴ人は、當時「反動的民族」であり、ヨーロッパにおける「ロシアの前哨」であり、專政制度の前哨であつたが、これに反して、當時ポーランド人及びハンガリア人は、專政制度に反対して鬪争していたところの「革命的民族」であつたからである。何となれば、チエツコ人及び南部スラヴ人の民族運動を支持することは、當時にあつては、ヨーロッパにおける革命運動の最も危険な敵であつたツァー制を間接に支持することを意味したからである。

レーニンは次のように言つている——

「民主主義の個々の要求——自決権を含めた——は絶たいたなものではなく、一般民主主義的（現在では一般社會主義的）世界運動の一小部分である。個々の具體的な場合には、一小部分が一般と矛盾することがありえる。この時には、この一小部分を拒否しなければならぬ」（レーニン全集、ロシア語版、第一九卷、二五七——二五八頁）。

もちろん形式的見地からではなく、また抽象的權利の見地からではなく、具體的に、革命運動の利益の見地から評價するならば、個々の民族運動の、これらの運動のありうべき反動性の問題については、事態は以上の如くである。

民族運動一般の革命的性質についても、同じことを言わなければならぬ。民族運動の最大多数の疑いもない革命性は、若干の、一部民族運動のありうべき反動性が相対的であり、特殊であると同一程度に、相対的であり、特殊である。帝國主義の抑壓の情勢下における民族運動の革命的性質

は、運動の中にプロレタリア的要素が必ず存在せねばならぬとか、革命的なものは共和的な運動綱領が存在すること、運動の民主主義的基礎が存在することを、少しも前提しない。アフガニスタン獨立のためのアフガニスタンのエミールの闘争は、エミール及びその同輩の見解が君主主義的なものであるにも拘らず、客観的には革命的な闘争である。なせならば、この闘争は、帝國主義を弱め、壊廢させ、むしばむからである。これに反して、例えばケレンスキー及びツエレトリ、レノーデル及びシャイデマン、チエルノフ及びダン、ヘンダーソン及びクラインスの如き「猛烈」な民主主義者及び「社會主義者」、「革命家」及び共和論者の帝國主義戦争時における闘争は、反動的な闘争であつた。なんとすれば、この闘争は、帝國主義を美化し、強化し、それに勝利をもたらすという結果になつたからである。これと同じ理由からエジプトの商人及びブルジョア・インテリゲンチヤのエジプト獨立のための闘争は、エジプトの民族運動の指導者たちのブルジョア出身とブルジョアの地位にもかかわらず、また彼らが社會主義に反對しているにも拘らず、客観的には、革命的な闘争である。しかるに、これに反してエジプトの隷屬的地位を保持せんがための英國「労働」黨政府の闘争は、同じ理由から、この政府の關員のプロレタリア出身とプロレタリア的地位にもかかわらず、また彼らが社會主義に「賛成」しているにもかかわらず、反動的な闘争である。私はインド及び中國の如き、もつと大きな他の植民地並にれいぞく國の民族運動についてはもはやのべない。これらの國の解放に向う一步、一步は、たとえ、それが形式的の民主主義の要求にそむくものであるとしても、それは帝國主義にたいする蒸氣ハンマーの打げきであり、言いかえれば、疑いもなく革命的な一步である。

レーニンが、被壓迫諸國の民族運動は、形式的民主主義の見地からではなく、帝國主義に對する闘争の一般的釣合における實際的結果という見地から、すなわち「孤立的」ではなく、世界的規模に

において」(レーニン全集、ロシア語版、第一九卷、二五七頁参照) 評價せねばならぬといつてゐるのは正しい。

二、被壓迫民族の解放運動とプロレタリア革命。民族問題の解決に當つて、レーニン主義は次の命題から出發する——

(イ) 世界は二つの陣營に、すなわち金融資本を占有し、地球人口の大多數を搾取している極く少數の文明民族の陣營と、この大多數を構成している植民地並にれいぞく國の被壓迫及び被搾取民族の陣營とに分れてゐる。

(ロ) 金融資本によつて壓迫され、搾取されている植民地ならびにれいぞく國は、帝國主義の最大の豫備隊であり、その最も重大な力の源泉である。

(ハ) れいぞく國ならびに植民地諸國の被壓迫民族の帝國主義に反對する革命闘争は、抑壓と搾取から彼らを解放する唯一の道である。

(ニ) 最も重要な植民地並にれいぞく國は、すでに民族解放運動の途上に乗り出した。この運動は、世界資本主義の危機に導かざるを得ない。

(ホ) 發達した國々におけるプロレタリア運動と植民地における民族・解放運動との利害關係は、この二つの種類の革命運動が、共通の敵、すなわち帝國主義に反對する共通の戦線に結合されることを要求してゐる。

(ヘ) 發達した國々における労働者階級の勝利と、帝國主義の抑壓からの被壓迫民族の解放とは、共通の革命的戦線の形成と強化なくしては不可能である。

(ト) 共通の革命的戦線の形成は、「本國」の帝國主義に反對する被壓迫民族の解放運動に對して、壓迫している民族のプロレタリアート側からの、直接の、斷乎たる支持なくしては不可能である。何となれば「他民族を壓迫する民族は、自由になり得ない」(エンゲルス)からである。

(チ) この支持は、分離に對する、すなわち獨立の國家としての民族の存在に對する權利というスローガンを固守し、擁護し、實行することを意味する。

(リ) このスローガンを實行することなくしては、全世界における社會主義の勝利の物質的基礎を構成するところの、單一的世界經濟内における諸民族の結合と協力とを調整することは不可能である。(ヌ) この結合は、諸民族の相互的信賴と同胞的相互關係とを基礎として生じた自由意志的結合でしかあり得ない。

ここから、民族問題における二つの方面、二つの傾向が生ずる——すなわち帝國主義的抑壓と植民地的搾取ともとずいて生じた、帝國主義のきずなからの政治的解放及び獨立の民族國家形成の傾向、並に世界市場及び世界經濟の形成と關連して生じた諸民族の經濟的接近の傾向がこれである。

レーニンは次のように言っている——

『發展しつつある資本主義は、民族問題において二つの歴史的傾向を有している。第一の傾向は、民族生活と民族運動の覺醒、あらゆる民族的抑壓に反對する鬭争、民族國家の樹立である。第二の傾向は、諸民族間の種々雑多な關係の發展と頻繁化、民族的障壁の破壊、資本、經濟生活一般、政治、科學、その他等々の國際的統一の創造である。』

この二つの傾向は、資本主義の世界的法則である。第一の傾向は、資本主義の發展の初期において優位を占め、第二の傾向は、成熟し、社會主義社會への轉化に向つて進んでいる資本主義を特徴づけるものである」(レーニン全集、ロシア語版、第一七卷、一三九——一四〇頁)。

帝國主義にとつては、この二つの傾向は、調和され得ない矛盾である。なせならば、帝國主義は、植民地を擄取し、この植民地を「統一的全體」のわく内に暴力的に押しこめておくことなしには、生存し得ないからであり、また併合と植民地的占領なしには一般的にいつて、考え得られない帝國主義は、またこの併合と植民地占領の方法によつてのみ諸民族を接近せしめるものだからである。

これに反し共產主義にとつては、これらの傾向は、一つの大業、すなわち帝國主義の抑壓から、被壓迫諸民族を解放する大業の、兩面にすぎない。何故ならば、共產主義は、統一的世界經濟の中における民族の結合が、相互の信頼と自由意志による協定の原則にもとずいてのみ、可能であるということ、諸民族の自由意志による結合形成の道が、「統一的」帝國主義的「全體」からの植民地の分離を通じ、これら植民地の獨立國家への轉化を通じて、横たわつていることを理解しているからである。

ここから自國の帝國主義政府に對して鬭争することを欲せず、「彼らの」植民地の被壓迫民族が抑壓から解放されるための、國家として分離するための鬭争を支持することを欲しない支配民族（イギリス、フランス、アメリカ、イタリア、日本その他）の「社會主義者」が有する大強國的排外主義に對する、執拗な、不斷の、斷乎たる鬭争の必要が生ずるのである。

かような鬭争なくしては、眞の國際主義の精神で、れいぞく國及び植民地の勤勞大衆と接近するという精神で、プロレタリア革命を眞に準備するという精神で、支配民族の勞働者階級を教育することとは考えられもしない。もし、ロシアのプロレタリアートが、舊ロシア帝國の被壓迫民族からの同情と支持とを有していなかつたならば、ロシアにおける革命は勝利し得なかつたであらうし、コルチャックとデニキンも撃破されなかつたであらう。だが、これらの民族の同情と支持とを獲得するために、ロシアのプロレタリアートは、何よりもまず、ロシア帝國主義の鐵鎖を斷ち切り、これらの民族を民族的壓迫から解放しなければならなかつたのである。

これなくしてソヴェト権力を強化し、眞の國際主義を植え付け、そこにソヴェト社會主義共和國同盟と稱され、統一的世界經濟の中における諸民族の將來の結合の生きた原型となつてゐる、諸民族の協力のすばらしい機構をつくることは、不可能であつたであらう。

ここから、自己の狹隘な民族的視野の範圍以上に出ようとせず、自國の解放運動と支配國のプロレタリア運動との結びつきを理解しない、被壓迫國の社會主義者たちの民族的閉鎖性と偏狹さと孤立性とに對する鬭争の必要が生ずるのである。

かような鬭争なくしては、共通の敵を打倒するための鬭争において、すなわち帝國主義を打倒するための鬭争において、被壓迫民族のプロレタリアートの獨立的政策と支配國のプロレタリアートに對する彼等の階級的連帶性とを固守することは、考えられもしない。

かような鬭争なくしては、國際主義は不可能なことである。

以上が革命的國際主義の精神で支配民族ならびに被壓迫民族の勤勞大衆を教育する道である。

國際主義の精神にもとずく勞働者教育の分野における共產主義のこの二方面的活動についてレーニンは、次のように言つてゐる——

「この教育は……大きな壓迫民族においても、また小さな被壓迫民族においても、併合民族においても、また被併合民族においても具體的に同一なものであり得るだらうか？

明かに同一ではあり得ない。共通の目的、すなわちすべての民族の完全な同權への、それらの最も緊密な接近ならびに爾後の融合への道は、あきらかにこの場合、異つた具體的な道をとつてゐる——それはあたかも、例えばある一つの頁の中央にある一點に達する道は、一つの

端からは左に向つて進み、反對の端からは右に向つて進んでゐると全くおなじである。もしも大きな、壓迫し、併合してゐる民族の社會民主主義者が、一般に民族の融合に對して賛同し、それを主張しながら「彼の」ニコライ二世、「彼の」ヴァイルヘルム、ジョージ、ポアンカレー等々もまた小民族との融合（併合による）に賛成である——ニコライ二世は、ガリシャとの「融合」に賛成であり、ヴァイルヘルム二世はベルギーとの「融合」に賛成である等々——ということをして、ただの一分間にせよ忘れるならば、この種の社會民主主義者は、理論においては笑うべき空論家であり、實踐においては帝國主義の補助者であらう。

壓迫國における勞働者の國際主義的教育の重點は、ゼヒとも、壓迫されてゐる國の分離の自由を壓迫國の勞働者が説き、またそれを固守するということになければならぬ。これなくしては、國際主義はありえない。われわれは、このような宣傳をしない。壓迫民族のあらゆる社會民主主義者を、帝國主義者として、また惡黨として輕蔑する權利をもつており、またそれを義務とするものである。たとえ分離という機會が、社會主義がまだ成功せぬ中は千の中わずかに一つの場合に可能であり、「實現され」得るものにせよ、このことは無條件的な要求である……

これとは反對に、小民族の社會民主主義者は、そのアジテーションの重點をわれわれの一般定義の第二の言葉、すなわち諸民族の「自由意志による結合」におかなければならぬ。彼らは國際主義者としてのその義務に違反することなく、自己の民族の政治的獨立にも、また自國を隣國甲、乙、丙等々に編入させることにも賛成することができぬ。だがいずれの場合においても、彼らは、小民族的偏狭、閉鎖性、孤立性に反對して、全體と全般とを考慮し、部分の利益を一般の利益に従屬させるために鬭争しなければならぬ。

この問題を深く考えなかつた人々は、壓迫民族の社會民主主義者が「分離の自由」を主張し、被壓迫民族の社會民主主義者が「結合の自由」を主張するのは「矛盾」であると思つてゐる。だが少しよく考えるならば、國際主義と諸民族の融合への他の道は、現在の情勢から出發して、この目的に達する他の道は、存在しないし、また存在できないことが分るのであろう（レーニン全集、ロシア語版、第一九卷、二六一—二六二頁）。

七、戰略と戰術

この題目から、私は六つの問題を取ろう。

(イ) プロレタリアートの階級闘争指導の科學としての戰略と戰術

(ロ) 革命の諸段階と戰略

(ハ) 運動の干満と戰術

(ニ) 戰略的指導

(ホ) 戰術的指導

(ヘ) 改良主義と革命主義。

一、プロレタリアートの階級闘争指導の科學としての戰略と戰術。第二インターナショナルの支配してゐた時期は主として多かれ少なかれ平和的發展の情勢の下におけるプロレタリアの政治的軍隊の編成と訓練の時期であつた。それは、階級闘争の主要な形態としての、議會活動の時期であつた。偉大な階級衝突、革命的戰闘のためのプロレタリアートの訓練、プロレタリアートの獨裁獲得の道

に關する問題は、當時日程にのぼつていないかに見えた。任務は、プロレタリアート軍を編成し、訓練するために、合法的發展の一切の道を利用すること、プロレタリアートが反政府黨の地位にとどまつていたし、またとどまつていなければならなかつたような諸條件に適應して議會活動を利用することに歸着した。かような時期において、また、プロレタリアートの任務をかく理解するに際しては、完璧な戰略も、緻密な戰術もあり得なかつたことは、おそらく論證する必要はあるまい。戰術や戰略に關する斷片、これに關する個々の意見はあつたが、戰術や戰略はなかつたのである。

第二インターナショナルの致命的な罪惡は、第二インターナショナルがその當時議會鬭爭の諸形態を利用する戰術を遂行したということにあるのではなく、第二インターナショナルがそれをあたかも唯一の鬭爭形態でもあるかの如く考へて、これらの鬭爭形態の意義を過重評價し、そして公然たる革命的鬭爭の時期がやつて來て、議會外の鬭爭形態の問題が日程の第一にのぼつた時に、第二インターナショナルの諸黨が新しい任務に背をむけてこれらを採用しなかつたことにあるのである。

次の時期、すなわちプロレタリアートの公然たる進出の時期、プロレタリア革命の時期、ブルジョアジーの打倒の問題が直接的實踐の問題となつたとき、プロレタリアートの豫備隊の問題（戰略）が最も緊切な問題の一つとなつた時、鬭爭と組織のあらゆる形態——議會的形式も議會外的形式も（戰術）——が完全な明確さで登場して來た時——この時期に至つて、はじめてプロレタリアートの鬭爭の完璧した戰略と緻密な戰術とが作成できたのである。第二インターナショナルの日和見主義者によつて生き埋めにされていた、戰術と戰略とに關するマルクス及びエンゲルスの天才的な思想は、正にこの時期にレーニンによつて日の目を見るにいたつたのである。だがレーニンは、マルクス

及びエンゲルスの個々の戰術的命題を復活させただけにとどまらなかつた。彼は、これらの命題を更に發展させ、新しい諸思想と命題とによつてこれらを補充し、これらすべてをプロレタリアートの階級闘争指導の規則と指導原則との體系に結合した。「何を爲すべきか?」、「二つの戰術」、「帝國主義論」、「國家と革命」、「プロレタリア革命と變節者カウツキー」、「左翼」小兒病」の如きレーニンの小冊子は、疑いもなく、最も貴重な寄與として、マルクス主義の一般的寶庫の中に、その革命的武器庫の中にはいるであらう。レーニン主義の戰略と戰術とは、プロレタリアートの革命闘争の指導に關する科學である。

二、革命の諸段階と戰略。戰略とは、革命の當該段階に基くプロレタリアートの主要打撃の方向の決定であり、革命的諸勢力（主要豫備隊及び副豫備隊）のこれに相應した配置の計畫の作成であり、革命の當該段階の全期間を通じてこの計畫を遂行するための闘争である。

わが國の革命は、既に二つの段階を経過し、十月變革の後に第三の段階に入つた。これに相應して、戰略は變更した。

第一の段階。一九〇三年——一九一七年二月。目的——ツァー制を打倒し、中世紀の殘滓を完全に絶滅すること。革命の基本的勢力——プロレタリアート。最も近い豫備隊——農民。基本的打撃の方向——農民を獲得し、ツァー制との協調によつて革命を絶滅しようとする自由主義的・君主主義的ブルジョアジーを孤立化すること。勢力配置の計畫——労働者階級と農民との同盟。「プロレタリアートは、力すくで專政制度の抵抗を壓殺し、ブルジョアジーの不安定性を癩瘡させるために、農民の大衆を味方に引きつけて、民主主義的變革を最後まで遂行しなければならぬ」（レーニン全集、ロシア語版、第八卷、九六頁）。

第二の段階。一九一七年三月——一九一七年十月。目的——ロシアにおける帝國主義を打倒し、帝國主義戦争から脱け出すこと。革命の基本的勢力——プロレタリアート。最も近い豫備隊——貧農。勘定に入れ得る豫備隊としての、隣接諸國のプロレタリアート。有利な機会としての、長びいた戦争と帝國主義の危機。基本的打撃の方向——勤勞農民大衆を獲得し、帝國主義との協調によつて革命を終結させようと努力している、小ブルジョアの民主黨（メンシエヴィキ、エス・エル）の孤立化。勢力配置の計畫——プロレタリアートと貧農との同盟。「プロレタリアートは、力ずくでブルジョアジーの抵抗を打破し、農民及び小ブルジョアジーの不安定性を痲痺させるために、人口中の半プロレタリア的分子の大衆を味方に引きつけて、社會主義的變革を成就しなければならぬ」（前掲書参照）。

第三の段階。この段階は、十月變革の後に始まつた。目的——一國におけるプロレタリアートの獨裁を、すべての國における帝國主義克服のための據點として利用しつつ、この獨裁を鞏固化すること。革命は、一國の範圍を越え、世界革命の時代がはじまつた。革命の基本的勢力——一國におけるプロレタリアートの獨裁、すべての國におけるプロレタリアートの革命運動。主要豫備隊——發達した諸國における半プロレタリア大衆と小農大衆、植民地並に隷屬國における解放運動。基本的打撃の方向——小ブルジョア民主黨の孤立化、帝國主義との協調政策の主要支柱をなしている第二インターナショナル諸黨の孤立化。勢力配置の計畫——プロレタリア革命と植民地ならびに隷屬國の解放運動との同盟。

戰略は革命の基本的勢力とその豫備隊とを對象とする。戰略は一つの段階から他の段階へと革命が移行することと關連して變化し、當該段階の全期間を通じては、大體において不變である。

三、運動の干満と戦術。戦術とは運動の満潮もしくは干潮、革命の高揚もしくは衰退の比較的短期間内のプロレタリアートの行動方針の決定であり、闘争及び組織の古い形態を新しい形態によつて、古いスローガンを新しいスローガンによつて代えることにより、またこれらの形態を組み合せること等々によつて、この方針を遂行するための闘争である。もし戦術が、例えば、ツアー制もしくはブルジョアジーに對する戦争に勝利し、ツアー制もしくはブルジョアジーに對する闘争を最後まで遂行することをその目的とするものであるとすれば、戦術はそれほど本質的ではない目的を持つてゐる。なせならば、戦術は、戦争全體に勝利を占めることではなくして、個々の會戦、個々の戦闘に勝利を占め、革命の當該の高揚もしくは衰退の時期における具體的情勢に相應するところの、個々のカンパニヤ、個々の行動において勝利することに努力してゐるからである。戦術は、戦略に従屬させられ、戦略に奉仕するところの、戦略の部分である。

戦術は、運動の干満に従つて變化する。革命の第一段階の期間中（一九〇三年——一九一七年二月）、戦略的計畫は不變のままであつたが、戦術はこの期間中に數回變更された。一九〇三年——一九〇五年の時期には、黨の戦術は攻撃的であつた。何となれば、革命の満潮があり、運動は高く高揚し、しかして戦術も、またこの事實から出發しなければならなかつたからである。これと呼應して、闘争の形態もまた、革命の満潮の要求に應ずる革命的なものであつた。地方的な政治的ストライキ、政治的デモンストレーション、政治的ゼネスト、國會のボイコット、蜂起、革命的戦闘的スローガン——これらが、この期間において相互に交替して行われた闘争の形態であつた。闘争の形態と關連して、當時、組織の諸形態もまた變化した。工場委員會、農民革命委員會、ストライキ委員會、労働者代表ソヴエト、ある程度公然たる労働者黨——以上が、この時期における組織の諸形態であつた。

一九〇七年——一九一二年の時期には、黨は退却戦術に移ることを餘儀なくされた。なんとなれば、われわれは、當時革命運動の衰退、革命の干潮に遭遇しており、戦術もまたこの事實を考慮せざるを得なかつたからである。これと呼應して、鬭争の形態も、また同じく組織の形態も變化した。國會のボイコットの代りに國會への参加、公然たる國會外の革命的行動の代りに、國會における演壇利用の鬭争と國會内の活動、政治的ゼネストの代りに部分的な經濟的ストライキ、あるいは單なる靜穩状態であつた。黨がこの時期に地下に入らなければならず、大衆的で革命的な諸組織も、文化・啓蒙、協同組合、保險等々、法律によつて許されている組織と置き代えられたことは當然である。

革命の第二及び第三段階についても、同じことをいわなければならぬ。これらの段階の全期間を通じて、戰略的計畫は不變のままであつたが、戦術は何十回となく變更された。

戦術は、プロレタリアートの鬭争形態と組織形態、その交替、その組合せを對象とする。革命の當該段階にもとずき、戦術は、革命の満潮もしくは干潮、高揚もしくは衰退によつて、幾回も變更し得るものである。

四、戰略的指導。革命の豫備隊には次のようなものがある。

直接の豫備隊——(イ)農民及び一般に自國の中間的諸層、(ロ)隣接諸國のプロレタリアート、(ハ)植民地並に隷屬國における革命運動、(ニ)プロレタリアートの獨裁が勝つて得たものと收得したものの——プロレタリアートは、自己のために優勢を確保して、強力な敵を買収し、息つぎを得るために、これらの一部を一時放棄することができる。

間接の豫備隊——(イ)敵を弱らせ、自己の豫備隊を強めるために、プロレタリアートが利用し得る、自國の非プロレタリア諸階級間の矛盾と紛争、(ロ)攻撃に際し、もしくは退却を餘儀なくさ

れた場合における機動に當つて、プロレタリアートが利用し得るプロレタリア國家に敵對的なブルジョア諸國家間の矛盾、紛争及び戦争（例えば帝國主義戦争）。

第一種類の豫備隊については、その意義がすべての人々に分つてゐるから、詳しく説明するにはあたらぬ。その意義が必ずしも常に明かでない第二種類の豫備隊についていえば、これらの豫備隊は、革命の進行にとつて時として第一義的な意義を持つてゐるということを通じておこななければならぬ。例えば、第一革命の當時およびその後において、小ブルジョア民主黨（エス・エル）と自由主義・君主主義的ブルジョアジー（カデット）との間に起つた紛争の非常に大きな意義は、恐らく否定することはできない。この紛争は疑いもなく、農民をブルジョアジーの影響下から解放するというための、役立つたのである。いわんや十月變革の時期において、帝國主義者の主要グループの間には必死の戦争が行われていたという事實の巨大な意義を否定すべき根據はもつと少ないのである。この期間において、おたがいの間の戦争に忙しかつた帝國主義者は、若いソヴェト權力に反對して力を集中する可能性を持たなかつたが、プロレタリアートは、正にこれがために、全力をあげて自己の勢力を組織し、自己の權力を強化することに従事し、そしてコルチャック及びデニキンのせん滅を準備するための可能性を得たのである。帝國主義的グループ間の矛盾が益々深刻化し、彼らの間の新しい戦争が不可避的なものとなりつつある今日、かかる種類の豫備隊は、プロレタリアートにとつて益々重大な意義を持つてであろう、と考へなければならぬ。

戦略的指導の任務は、革命の當該發展段階において、革命の基本的な目的を達成するために、すべてこれらの豫備隊を正しく利用することにある。

豫備隊の正しい利用とは、どういふことか？

それは、若干必要かくべからざる條件を遂行することである。そのうち、次のものを主要な條件と見なさなければならぬ。

第一、革命が既に成熟し、攻撃が全力を以て行われ、蜂起が既に玄關口まで迫っており、豫備隊を前衛に引きつけることが成功の決定的な條件となつてゐる決定的な瞬間に、敵の最大の弱點に向つて革命の主要勢力を集中することである。一九一七年四月——十月の時期の敵の最大の弱點が、かかる性質の豫備隊の利用を示す例として見なすことができる。この時期における敵の最大の弱點が、戦争であつたことは、疑いのないことである。基本的なものとして、正にこの問題を中心に、黨が最も廣汎な人民大衆をプロレタリアの前衛の周圍に糾合したことは、疑いのないところである。この時期における黨の戦略は、示威運動による街頭進出を前衛に教え、それと同時に、銃後においてはソヴエトを通じて、戦線においては兵士委員會を通じて豫備隊を前衛の方に引きつける、ということに歸着した。革命の結果は、豫備隊の用い方が正しかつたことを示した。

マルクス及びエンゲルスの蜂起に關する有名な命題を別な言葉で説明しつつレーニンは、革命の諸勢力の戦略的利用のこの條件について、實に次のように述べてゐる——

「一、決して蜂起をもてあそんではいならぬ。しかして一旦蜂起を始めたらば、最後まで進むべきだといふことを、しつかりと知つていなければならぬ。

二、決定的な場所に、決定的な瞬間に、非常に優勢な勢力を集結することが必要である。なせならば、もしそうでない場合には、ヨリすぐれた準備と組織とを持つてゐる敵は、蜂起せるものを全滅させてしまふからである。

三、一旦蜂起を始めた以上、最大の斷乎さを以つて行動し、どんなことがあつても、かならず攻撃に移らなければならぬ。「防禦的態度は、武装蜂起の死を意味する」。

四、敵に不意打ちをくわせ、敵の軍隊がまだ分散している間に、好機を捉えなければならぬ。

五、たとえ小さな成功にせよ、これを毎日毎日（もし一都市についていうならば、一時間毎に、といつてもいい）獲得し、どんなことがあつても、「精神的優勢」を保持していなければならぬ（レーニン全集、ロシア語版、第二一卷、三一九—三二〇頁）。

第二、危機が最高潮に達し、最後まで闘おうとする前衛の覺悟、前衛を支持する豫備隊の用意と敵の陣營内における最大の狼狽とが、すでに存在するということを計算し、決定的打撃の瞬間の、蜂起開始の瞬間の、選擇。

レーニンはこういつている——

もし、「一、われわれに敵對するすべての階級的諸勢力が十分に混亂し、お互に十分に闘争しつくし、その力に餘つた闘争のために自分自身を十分に弱めてしまつた」ならば、もし、「二、ブルジョアジーとはちがつて動搖している、ぐらぐらしている、不安定な中間的諸分子全部、すなわち小ブルジョアジーや小ブルジョア民主主義者が、民衆の前に十分にその正體をバクロし、彼らの實踐上の破綻によつて充分に面目を失墜した」ならば、もし、「三、プロレタリアートの中に、ブルジョアジーに對する最も斷乎たる、あくまでも勇敢な、革命的行動を支援せんとする大衆的氣分がおこり、かつ勢よく高まり始めた」ならば、決定的な戦闘は完全に成熟したものと見るこ

とができる。「この時こそ、革命は熟したのであり、その時こそ、もしわれわれが前記のすべての……條件を正しく考慮し、かつ正しく時機をえらぶならば、われわれの勝利は保證されているのである」(レーニン全集、ロシア語版、第二五卷、二二九頁)。

十月蜂起の遂行は、かゝる戦略の模範として見なすことができる。

この條件に違反することは、「テンポの喪失」とよばれる危険な誤謬に導き、黨は運動の進行から取り残されるか、もしくは餘り先きばしりすぎるかして失敗の危険をつくることとなる。かような「テンポの喪失」の例として、またそうあつてはならぬ蜂起の時機のえらび方の例と見なさなければならぬものは、ソヴェトにまだ動搖逡巡が感ぜられ、軍隊が、戦線でまだ岐路に迷つており、豫備隊がまだ前衛に引きつけられていなかった一九一七年九月に、民主會議代表の逮捕をもつて蜂起を開始しようとした一部の同志等の企圖である。

第三、目的達成の途上におけるありとあらゆる困難紛糾を踏み越えて、一旦採用された針路を偏向なく遂行すること——このことは、前衛が闘争の基本的な目標を見失わないため、また大衆がこの目的に向つて進み、かつ前衛の周圍に結合せんと努力するに當つて道に迷わないために必要缺くべからざることである。この條件に違反することは、「針路の喪失」といういい方で海員等によく知られている、大きな誤謬に導くのである。かような「針路の喪失」の例と見なさなければならぬものは、ブレドバラメント(豫備議會)参加に關する決議を採用した、民主會議直後のわが黨の誤つた行動であつた。黨は、この時機に、ブレドバラメントが、國をソヴェトの道からブルジョア議會政治の道へ移そうとするブルジョアジーの企圖であること、かような機關への黨の参加は、全局面を混亂させて「すべての権力をソヴェトへ」というスローガンの下に、革命闘争を遂行しつつある労働

者農民に、行動を迷わせかねないことを忘れたかのようなであつた。この誤謬は、ブレドバールメントからのホルシエヴィキの脱退によって訂正された。

第四、敵が強力である時、退却が避け難い時、敵の挑戦に應ずるのは明かに不利であるとき、當該勢力関係においては、退却が前衛を敵の打撃から救い出し、前衛のため豫備隊を保持するための唯一の手段となつた時に、正しい退却をすることを目標として豫備隊をもつて機動を行うこと。

レーニンはこう述べている――

「革命的諸黨はもつと奥まで學ばなければならぬ。彼らは、攻撃することを學んだ。今や、この科學を、如何にしてもつと正しく退却すべきかという科學によつて補足することが必要だ、ということを理解すべきである。正しい攻撃と正しい退却とを學ばずには勝利することはできない、ということを理解すべきである――そして革命的階級は、自己の苦い經驗によつて、これを理解することを學ぶのである」（レーニン全集、ロシア語版、第二五卷、一七七頁）。
かような戰略の目的は、時間の餘裕をつくり、敵の陣列を崩し、やがて攻撃に移るための力を蓄積することである。

ブレスト媾和の締結は、かような戰略の模範として見なすことができる。この媾和の締結は、黨に時間の餘裕をつくり、帝國主義陣營内における衝突を利用し、敵の勢力を崩し、農民を自己の味方として保持し、ホルチャツク及びデニキンに對する攻撃を準備するために、勢力を蓄積する可能性を與えたのである。

當時レーニンはこう語つた――

「單獨媾和を締結して、われわれは最大の、當該瞬間にとつて可能なる程度で、二つのたがいに相敵對する帝國主義グループから自分を解放し、彼らがわが國に反對して協定することを困難ならしめてゐる彼らの間の不和と戰爭とを利用し、行動の自由を拘束されない一定の期間を得て、社會主義革命を繼續し、これを鞏固にするためにこれを利用するのである」(レーニン全集、ロシア語版、第二二卷、一九八頁)。

レーニンは、ブレストの媾和後三年を経てから、こういつた――

「現在ではどんな大馬鹿でも「ブレストの媾和」がわれわれを強化し、國際帝國主義の諸勢力を細分させた讓歩であつたことを認めてゐる」(レーニン全集、ロシア語版、第二七卷、七頁)。

以上が、戰略的指導の正しさを保證する主要な條件である。

五、戰術的指導。戰術的指導は、戰略的指導の任務と要求とに服従させられてゐる戰略的指導の一部分である。戰術的指導の任務は、當該勢力關係において戰略的成功を準備するために必要な最大限の成果を收めるために、プロレタリアートの闘争及び組織のすべての形態を習得しかつこれらの形態の正しい利用を保證することにある。

プロレタリアートの闘争と組織の諸形態の正しい利用とは、どういふことか？

それは、若干の必要缺くべからざる諸條件を實行することである。そのうち、次のものを主要な條件と認めなければならぬ――

第一、運動の干満の當該諸條件に最もよく適應しつつ、大衆を革命的陣地に接近させ、幾百萬の大衆を革命の戦線に近づけ、彼らを革命の戦線に配置することを容易ならしめ、かつこれを保證し得るような、闘争及び組織のこの諸形態を前面に押し出すこと。

問題は、古い制度を維持することが不可能であり、その倒壊が不可避であることを前衛が意識することにあるのではない。問題は、大衆が、幾百萬の大衆がこの不可避性を理解し、前衛を支持する用意を表明することにある。だが大衆はただ自分自身の経験によつてのみ、このことを理解し得るのである。自分自身の経験によつて古い権力の打倒の不可避性を悟る可能性を幾百萬の大衆に與え、大衆が経験によつて革命的スローガンの正しさを悟ることを容易ならしめるような鬭争方法と、組織形態を前へ押し出すこと——こゝに任務があるのである。

もし黨が、その當時國會に参加することを決定しなかつたならば、もし黨が國會の無用なこと、カデットの約束の欺瞞的であること、ツアー制と協調することが不可能であること、労働者階級と農民の同盟が必然的であることを、大衆が自分自身の経験によつて悟ることを容易ならしめるために、國會内の活動に勢力を集中し、この活動にもとずいて鬭争を展開することを決定しなかつたならば、前衛は労働者階級から切り離され、労働者階級は大衆との結びつきを失つてしまつたであらう。國會の時期における大衆の経験なしには、カデットの暴露とプロレタリアートの指導権とは不可能であつたであらう。

オトゾヴィズム（召還主義）戦術（註参照）の危険は、この戦術が前衛をその幾百萬の豫備隊から切離すというおそれのある點にあつた。

メンシエヴィキ及びエス・エルが、戦争と帝國主義の味方としての自己の正體をまだバクロシキつておらず、大衆が、自分自身の経験によつて、平和、土地、自由についての、メンシエヴィキ及びエス・エルの言辭の欺瞞性をまだ悟り得ていなかった一九一七年四月に、蜂起を呼びかけた「左翼」共産主義者のするとおりに、プロレタリアートが行動していたならば、黨は、労働者階級から切はな

され、また労働者階級は農民及び兵士の廣汎な大衆の中における影響を失つてしまつたであろう。ケレンスキー政府の時代における大衆の経験がなかつたならば、メンシエヴィキ及びエス・エルは孤立されず、プロレタリアートの獨裁は不可能であつたであろう。それ故に、小ブルジョア諸黨の誤謬を「忍耐強く説明し」、ソヴェトの内部で公然たる鬭争を行うという戦術は唯一の正しい戦術であつた。

「左翼」共產主義者の戦術の危険性は、この戦術が黨をプロレタリア革命の指導者であることから、空虚な、根底なき陰謀家の一團に轉化させるおそれがある點にあつた。

レーニンはこういつている——

「前衛だけで勝利することは出来ないことだ。全階級が、廣汎な大衆が前衛を直接に支持するという立場、もしくは少くとも前衛に對して、好意的な中立の立場を……まだとつていないうちに、前衛のみを決定的な鬭争に投じることは、愚かなことであるばかりでなく、また犯罪でもあるだろう。だが眞に全階級が、勤勞者及び資本によつて壓迫されているものの眞に廣汎な大衆が、かような立場をとるに至るためには、ただ宣傳だけでは、アジだけでは、不充分である。これがためには、これらの大衆自身の政治的經驗が必要である。これが、現在稀有な力強さと浮彫のような明瞭さを以て、ロシアばかりではなく、またドイツによつても確證されている、すべての大革命の基本的法則である。獨りロシアの非文化的な、文盲の多い大衆のみでなく、高度に文化的な、一人残らずよみ書きのできるドイツの大衆にとつても、斷乎として共產主義に轉向するためには、第二インターナショナルの騎士たちの政府の極度の無力さ、無性格

さ、極度のたよりなさ、ブルジョアジーに對する極度の奴隸根性、極度の卑劣さ、プロレタリアト獨裁にたいする唯一の對立物としてのもつとも極端な反動家共（ロシアにおけるゴルニコフ、ドイツにおけるカッツおよびその一味）の獨裁がまつたく不可避であるということ、自身で體驗することを要したのであつた』（レーニン全集、ロシア語版、第二五卷、二二八頁）。

第二、當該各瞬間に、その環をつかめば全連鎖を握ることができ、戰略的成功を達成するための諸條件を準備し得るような、過程の連鎖中の特殊の環を見出すこと。

問題は、黨の前に立つてゐる幾多の任務の中から、それを解決することが中心點であり、それを遂行するならば、爾餘の當面の任務の成功的な解決が保證されるような、正にかかる當面の任務を選び出すことである。

この命題の意義は、次の二つの實例によつて説明することができるであらう。その一つはずつと遠い過去（黨形成の時期）から、第二の例はわれわれに最も近い現在（ネツプの時期）から取つて來ることができらる。

黨形成の時期において、無數のサークルや團體が相互にまだ連絡がなかつたとき、手工業的なやり方と狭少なサークル主義とが上から下まで黨に侵蝕し、思想的混亂が、黨の内部生活の特徴であつたとき——この時期においては、當時黨の前に立つていた多くの任務中基本的な任務、連鎖中の基本的な環は、全ロシア的非法新聞の創刊であつた（『イスクラ』紙）。なぜか？ なぜならば、ただ全ロシア的非法新聞によつてのみ、當時の情勢の下では、無數のサークルと團體とを一つに結合させ、思想的及び戰術的統一の條件を準備し、かようにして眞實の黨を形成するための基礎を据え得るところの、堅實な黨中核をつくり出すことが可能であつたからである。

戦争から經濟建設への過渡期において、工業が破壊の爪牙にかかつて衰微の状態にあり、農業が都市製品の不足に苦しんでいた時、國營工業と農民經濟との結合が、成功的な社會主義建設の基本的條件に轉化した時——然りこの時期においては、過程の連鎖における基本的な環、他の多くの任務中における基本的な任務は、商業を發展させることであつた。なせか？ なんとすれば、ネツプの條件下においては、工業と農民經濟との結合は、商業を通ずる以外には不可能であるからであり、ネツプの條件の下での販路のない生産は、工業にとつては死であるからであり、商業の發展による販路の擴大を通じてのみ工業を擴張することが出来るからであり、商業の領域において、われわれの地歩を固めることによつてのみ、商業を占有することによつてのみ、この環を完全につかむことによつてのみ、社會主義經濟の基礎を築き上げるための諸條件をつくるために工業を農民市場と結合することを望むことができ、その他の當面の任務の解決に成功することができるからである。

レーニンはこう言つている——

「一般的に、革命家であり、社會主義の味方であり、もしくは共產主義者であるだけでは、不充分である。……全連鎖を把握し、確實に次の環への推移を準備するために、全力をあげてつかまねばならぬところの連鎖の特殊の環を、それぞれの瞬間に見出すことができなければならぬ」……

「現在の瞬間では……正しい國家の調節（指圖）の下で、國內商業を振興させることが、かかる環である。商業——これこそは、諸事件の歴史的連鎖中の、一九二一——一九二二年におけるわが國の社會主義建設の過渡的諸形態の中の、「これこそ全力を舉げてつかまなければならぬところの」、正にその「環」である……」（レーニン全集、ロシア語版、第二七卷、八二頁）。

以上が、戰術的指導の正しさを保證する主要條件である。

六、改良主義と革命主義。革命的戦術はいかなる点において改良主義的戦術と異なるか？

あるものはこう考えている、レーニン主義は、改良に反対である、一般に妥協及び協調に反対である。これは全然正しくない。ボルシェヴィキは、ある意味においては「下さるものはなんでも結構」ということを、また一定の条件の下においては、一般的には改良、部分的には妥協と協調とが必ず要缺くべからざるものであり、有益なものであるということを、他の何人にも劣らずよく理解しているのである。

レーニンはこういつている——

「國際ブルジョアジーを打倒するための戦争、すなわち普通の國家間の戦争中の最も頑強な戦争よりも百倍も困難な、長期にわたる、複雑な戦争を遂行し、しかもこの際、臨機應變に機動し、敵の間の利害の矛盾（たとえ一時的なものにせよ）を利用することや、可能な同盟者（たとえ一時的な、不確實な、ぐらついた、条件つきなものにせよ）と協調し、妥協することを前もつて拒否することは——これは途方もなくおかしなことではないか？ これは、恰もまた探險されたことのない、近すぎ難い險山への困難なよじのぼりを行うに當つて、ある時にはジグザグ・コースで進み、ある時は後へ引きかえし、一度選んだ進路をやめて種々な進路を試みることを、前もつて拒否することとよく似たことではないだろうか？」（レーニン全集、ロシア語版、第二五卷、二一〇頁）。

問題は、明かに、改良もしくは妥協及び協調ということそのものにあるのではなく、改良や協調を人々が如何に利用するかにあるのである。

改良主義者にとつては、改良がすべてであつて、革命的活動はほんの話題にすぎず、人の眼をゴマ化するためにすぎない。それだから、ブルジョア權力の存在している条件下での改良主義的戦術における改良は、不可避的に、ブルジョア權力を強めるための用具に、革命を崩壊させるための用具に轉化する。

これに反して、革命家にとつては、主要なものは革命的活動であつて改良ではない。革命家にとつて、改良は革命の副産物である。それ故に、ブルジョア權力の存在している条件下での革命的戦術における改良は、當然、この權力を崩壊させるための用具に、革命を強化させる用具に、革命運動の一層の發展のための立脚點に、轉化するのである。

革命家は、合法活動を非合法活動と結合するための補助手段として利用するために、ブルジョアジー打倒に向つて、大衆を革命的に訓練する目的で非合法活動を強化する橋として利用するために、改良を受け容れる。

帝國主義の諸條件の下における改良及び協調の革命的利用の本質は、ここに、ある。

これに反して改良主義者は、あらゆる種類の非合法活動を拒否し、革命に向つて大衆を訓練する大業を掘り崩し「ほどこされた」改良のかけに安息を得るために、改良を受け容れる。

改良主義的戦術の本質は、ここに、ある。

帝國主義の条件下における改良及び協調についての問題は、以上のような状態である。

しかしながら、帝國主義の打倒後、プロレタリアートの獨裁下においては、事情はやや變化する。一定の條件、一定の情勢の下においては、プロレタリア權力は、一時、現秩序の革命的改造の道

から離れて、その漸次的な改革の道、すなわちレーニンが有名な論文「金の意義について」の中で述べているように、「改良主義的な道」を、迂回して進む道を取り、非プロレタリア諸階級を崩し、革命に息つきを與え、力をたくわえ、新しい攻撃のための条件を準備するために、改良とこれらの非プロレタリア階級にたいする譲歩の道をとることを餘儀なくされることがあり得る。この道が、ある意味において「改良主義的な」道であるということを否定することはできない。ただ忘れてはならぬことは、われわれはこの場合、一つの根本的な特異点を持つているということである。この特異点とは、この場合においては改良がプロレタリア権力によつてなされているということ、この改良がプロレタリア権力を強化するということ、それがプロレタリア権力に必要な息つきを與えるということ、それが革命を崩壊させるためではなく、非プロレタリア諸階級を崩壊させることを使命としているということ、これである。

かくして、かかる条件下においては、改良はその反對物に轉化する。

プロレタリア権力側からのかかる政策の遂行は、これに先立つ時期の革命の發展規模が充分に大であつて、かくして、攻撃の戦術を一時的の退却戦術、迂回して進む戦術に替えて、何處へでも退却できるだけ充分廣汎な餘地を與えたからこそ、然り、ただそのためにこそ、可能となるのである。

かようにして、かつてブルジョア権力の下においては、改良は革命の副産物であつたが、いまやプロレタリア獨裁の下にあつては、プロレタリアートの革命的獲得物が、これらの獲得物で成立しているところの、プロレタリアートの手に蓄積された豫備が改良の源泉となつていたのである。

レーニンはこういつている——

「改良の革命にたいする關係は、獨りマルクス主義によつてのみ、正確に、また正しく規定されている。ただしこの場合、マルクスはこの關係をただ一つの方面からのみ、すなわちたとえ一國においてのみにせよ、プロレタリアートの多少ともじつかりした、多少とも長期の、最初の勝利が先行する情勢の下においてのみ、この關係を見ることができたのである。かかる情勢の下においては、改良はプロレタリアートの革命的階級闘争の副産物であるということが、正しい關係の基礎であつた……たとえ一國にせよ、プロレタリアートが勝利した後は、改良の革命にたいする關係の中には、何か新しいものがあらわれる。原則的には問題は從來のままであるが、形式上には變化があらわれる。この變化をマルクス自身は豫見し得なかつたが、それはただマルクス主義の哲學と政策によつてのみ理解し得るのである……勝利の後には、それらは（すなわち改良は——*ハ・スタールン*）（國際的規模においては同じ「副産物」であるが）、勝利が獲得された國にとつて、またその外、力を最大限に緊張させた後に、個々の過程を革命的に遂行するために力が足りないことが感じられる場合に、必要にしてかつ許さるべき息つきである。勝利は、餘儀なくされた退却の場合においてさえ、それをもつて持ちこたえ得る、すなわち物質的意味においても、また精神的意味においても持ちこたえ得るような「力の蓄え」を與えるのである」（レーニン全集、ロシア語版、第二七卷、八四——八五頁）。

八、黨

革命前の時代、言いかえれば、第二インターナショナル諸黨が労働運動における支配的勢力であり、議會的鬭争形態が基本的形態として考えられていた、多かれ少なかれ平和的發展の時代においては——これらの條件下においては、黨は、その後公然たる革命的戦闘の條件において獲得したような、重大かつ決定的な意義を持たなかつたし、また持つことができなかつた。非難される第二インターナショナルを辯護して、カウツキーは次の如く言っている。すなわち第二インターナショナルの諸黨は戦争の用具ではなくて平和の用具である。だからこそ、戦時に、プロレタリアートの革命的進出の時代に、何ら重大なこともなすことができなかったのである、と。これは全く正しい。だが、このことは何を意味するか？ それは、第二インターナショナルの諸黨は、プロレタリアートの革命的鬭争のために役立たないこと、この諸黨は、労働者を権力へ導くところのプロレタリアートの戦闘的黨ではなく、議會選舉と議會鬭争に適應した選舉機關であることを意味する。第二インターナショナルの日和見主義者共が支配した時代には、プロレタリアートの基本的な政治的組織が黨ではなくて、國會議員團であつたという事實は、實際のところ、右の事情によつて説明されるのである。事實上、この時代において、黨は國會議員團の附加物であり、これに奉仕する一要素であつたということ、周知のことである。かかる條件の下で、またかかる黨を先頭としていて、プロレタリアートを革命のために訓練するなど、問題にもなり得なかつたことを、今さら證明する必要があるだろうか。

しかしながら、新しい時代の到来と共に、事態は根本的に變化した。新しい時代とは、諸階級の公然たる衝突の時代であり、プロレタリアートの革命的進出の時代であり、プロレタリア革命の時代で

あり、帝國主義の打倒とプロレタリアートの權力獲得をめざして、勢力を直接に準備する時代である。この時代は、黨の全活動を、新しい革命的基調に建て直し、權力獲得をめざす革命的闘争精神をもつて労働者を教育し、豫備隊を養成してそれを引き寄せ、隣接諸國のプロレタリアートと同盟し、植民地および隷屬國の解放運動と堅固な連けいを確立すること、その他等々についての新しい任務を、プロレタリアートの前に提起する。これらの新しい任務が、議會政治の平和的な諸條件の下に教育された、古い社會民主諸黨の力によつて果され得ると考えることは、自己を絶望的な自暴自棄に、不可避的な敗北に運命づけることと同様である。上記の任務を雙肩に擔いながら、依然として古い諸黨の指導下にとどまつているのは、完全な武装解除の状態におかれていふことと同様である。プロレタリアートが、かかる状態に甘んじ得なかつたことを、今さら證明する必要があるだろうか。

以上のことから、プロレタリアートを權力獲得の闘争に導き得るほど十分果敢な、また革命的情勢の複雑な諸條件を理解し得るほど十分経験のある、そしてまた、目的への途上に横たわるあらゆる暗礁を避け得るほど十分屈伸性のある新しい黨、戦闘的な黨、革命的な黨の必要が生れたのである。かかる黨なくしては、帝國主義の打倒、プロレタリアート獨裁の獲得などは思いもよらぬことである。

この新しい黨こそは、レーニン主義の黨である。

この新しい黨の特殊性とはどういふことか？

一、労働者階級の前衛部隊としての黨。黨は先ず第一に労働者階級の前衛部隊でなければならぬ。黨は、労働者階級のあらゆる最良の分子、彼等の経験、彼らの革命的性質、プロレタリアートの大業に對する彼等の無限の忠誠を自己の中に吸収しなければならぬ。だが眞に、前衛部隊となるた

めには黨は革命的理論によつて、運動の諸法則についての知識によつて、革命的諸法則についての知識によつて武装されていなければならない。これなくしては、黨はプロレタリアートの闘争を指導し、プロレタリアートを率いてゆくことはできない。もし黨が、労働者階級の大衆が體驗し、思惟することを記録するだけにとどまるならば、もし黨が自然成長的運動の尻尾に追隨して行くならば、もし黨が自然成長的運動の停滞性と政治的無頓着さとを克服することをなし得ないならば、もし黨がプロレタリアートのほんの一次的利益ということ以上に自己を引き上げ得ないならば、もし黨が大衆をプロレタリアートの階級的利益を了解する水準まで引き上げ得ないならば、黨は眞實の黨ではあり得ない。黨は労働者階級の先頭に立たねばならない。黨は労働者階級に先んじて將來を見透さなければならぬ。黨は、プロレタリアートを率いて行くべきであつて、自然成長性の尻尾に追隨して行くべきではない。「追隨主義」を説教している第二インターナショナル諸黨は、プロレタリアートをブルジョアジーの手中にある用具としての役割をつとめるように運命づけるところの、ブルジョア政策の傳導者である。プロレタリアート前衛部隊としての自己の役割を自覺し、大衆をプロレタリアートの階級的利益を了解する水準にまで引き上げ得る黨のみが——然り、ただかような黨のみが、労働者階級をトレード・ユニオン主義の道から引き離して、これを獨立的な政治的勢力に轉化し得るのである。

黨は労働者階級の政治的指導者である。

私は先に、労働者階級の闘争の諸困難について、闘争の情勢の複雑なことについて、戦略と戦術について、豫備隊と機動とについて、攻撃と退却とについて述べた。これらの條件は、その複雑さにおいて、戦争の條件と比べて、まさるとも劣ることはない。これらの諸條件を正しく理解し評價し得るものは誰であるか？ また幾百萬のプロレタリア大衆に正しい方針を與えうるものは誰であるか？

戦争ではいかなる軍隊といえども、もし自己を敗北に導くことを欲しないならば、経験ある司令部なしに濟ませることはできない。もしプロレタリアートが自分を自己の不倶戴天の敵の喰物にそなえることを欲しないならば、なおさら、かゝる司令部なしにはすまじ得ないことは、あきらかなことではないか？ だがこの司令部は何處にあるか？ この司令部たり得るものは、ただプロレタリアートの革命黨のみである。革命黨を持たぬ労働者階級、それは司令部をもたぬ軍隊と同様である。

黨はプロレタリアートの戦闘司令部である。

だが、黨はただ前衛部隊たることにとどまり得ない。黨は、それと同時に、階級の一部分、すなわち自己の存在のすべての根底によつて階級と緊密に結合している階級の一部分でなければならぬ。労働者階級の前衛部隊とその大衆との、黨員と非黨員との間の相違は、諸階級が消滅しない間は、プロレタリアートが他の諸階級からの出身者で補足されている間は、全體としての労働者階級が、前衛部隊の水準まで向上する可能性を有しない間は、消滅し得ない。だが、もしこの相違が兩者の決裂に轉化するならば、もし黨が自分自身の中にとじこもつて、非黨員大衆から切り離されるならば、黨は黨でなくなるであらう。もし黨が非黨員大衆と結合されていないならば、もし黨と非黨員大衆との間に結合が保たれていないならば、もしこれらの大衆が黨の指導を受け容れないならば、もし黨が大衆の間で精神的並に政治的信用を得ていないならば、黨は、階級を指導することはできない。

先頃、労働者の間から新黨員が二十萬人わが黨に採用された。この事件で實にすばらしいことは、これらの人々が自分で黨にやつて來たというよりも、むしろ、爾餘のすべての非黨員大衆によつて、黨に送られたということであつて、これら非黨員大衆は新黨員の採用に積極的に参加し、かつ彼等の承認なしには、新黨員は採用されなかつたのである。この事實は、非黨員労働者の廣汎

な大衆が、わが黨を自分の黨、身じかい、親身の黨と考えており、彼等がわが黨の擴大と強化とに切實な關心をもち、自發的に、黨の指導にその運命を託しているということを物語っている。黨と非黨員大衆とを結合しているこの微妙な、精神的な糸がなくしては、黨が自己の階級の決定的な勢力となり得なかつたであらうということは、恐らく論證する必要はあるまい。

黨は、労働者階級の切つても切れぬ部分である。

レーニンはこういつている——

「わが黨は階級の黨である。故に、殆ど全階級（しかして、戦時中や國內戦争時代には完全に全階級）が、わが黨の指導の下に行動し、できるだけびつたりとわが黨について來なければならぬ。だが、資本主義制度の下において、いつの日かに、殆ど全階級が、もしくは全階級が、その前衛部隊、その社會民主黨のもつ意識性と積極性にまで向上することができると考えることは、マニロフ主義（註参照）であり、「追隨主義」に陥ることである。資本主義の下においては、労働組合組織（一層幼稚な、未だ發達しきらない層の意識によつてよりたやすく受け入れられる組織）ですらも、殆どすべてのもしくはすべての労働者階級を包括し得ないということについて、賢明な社會民主主義者は一人としてかつて疑問をいだいたことはなかつた。前衛部隊と、それに惹きつけられている全大衆との間の相違を忘れること、益々擴大されてゆく層を、この前衛的水準に引き上げる、という前衛部隊の不斷の義務を忘れることは、ただ自己を欺き、われわれの任務の巨大小の前に眼を閉じ、これらの任務を狭めようとすることを意味するに他ならぬであらう」（レーニン全集、ロシア語版、第六卷、二〇五—二〇六頁）。

二、労働者階級の組織された部隊としての黨。黨は單に労働者階級の前衛部隊であるのみではない。もし黨が、眞に階級闘争を指導せんと欲するならば、黨は同時に、自己の階級の組織された部隊でなければならぬ。資本主義の諸條件下における黨の任務は、異常に偉大であり、多様である。黨は、國內並に國外の發展の異常に困難な諸條件の下で、プロレタリアートの闘争を指導せねばならぬ。黨は、情勢が攻撃を要求する時には、プロレタリアートを攻撃に導かねばならぬし、情勢が退却を要求するときには、黨はプロレタリアートを強力な敵の打撃の下から救い出さねばならぬ。黨は幾百萬の未組織・非黨員労働者大衆の中に、闘争における規律と計畫の精神、組織と堅忍不拔の精神をつぎ込まなければならぬ。だが黨は、黨自身が規律と組織性の體現であり、黨自身が、プロレタリアートの組織された部隊である場合にのみ、これらの任務を果すことができる。これらの條件なしには、黨による幾百萬のプロレタリアート大衆の眞の指導も問題となり得ない。

黨は労働者階級の組織された部隊である。

組織された全體としての黨に關する思想は、わが黨の規約第一條の、レーニンの有名な定義の中に嚴として規定されている。この第一條の中で、黨は諸組織の總計として、そして黨員達は、黨の一組織の成員と見なされている。はやくも一九〇三年にこの定義に反對したメンシェヴィキは、この代りに、入黨自分勝手「制」、すなわち黨員の「名稱」を、何らかの形で黨を支持はしているが、如何なる黨組織の中にも入つておらず、また入ることを欲しないような、あらゆる「大學教授」や「中學生」やあらゆる「同情者」や「罷業者」に對しても振りまくという「制度」を提案した。この珍奇な「制度」が、もじわが黨内に同着されていたならば、それは不可避的に、黨を大學教授連や中學生で溢れさせ、黨は「同情者」の大海の中で自己を見失ひ、黨と階級との限界を抹殺し、未組織大衆を前衛部

隊の水準にまで引き上げべき黨の任務をくつがえすところの、あいまいな、不定形な、混亂した「物體」に黨を退化させる結果に導いたにちがいないことは、恐らく論證する必要はあるまい。かような日和見主義的「制度」の下にあつては、わが黨は、わが國の革命の進行中に労働者階級の組織化の核心としての役割を果し得なかつたにちがいないことは、いうまでもないところである。

レーニンはこう言つている——

「同志マルトフの見解では、黨の限界は全く不確的のままにとどまることになる。なせならば、「おのおのの罷業者」は「自分の黨員たることを宣言」することができからである。このあいまいさにどんな利益があるか？ それは「稱號」を廣くふりまきうることである。その害惡は——階級と黨との混同という、混亂させる理念を持ち込むことである」(レーニン全集、ロシア語版、第六卷、二一一頁)。

だが、黨は、單に黨組織の總計たるのみでない。黨は、それと同時に、これらの組織の統一的體系であり、上級下級の指導機關をもち、少數は多數に服従し、すべての黨員の必ず履行すべき實踐的諸決定を持つている統一的全體への、これらの組織の正式な結合である。かような條件なくしては、黨は労働者階級の闘争の計畫的な、かつ組織された指導を實現し得る統一的な、組織された全體たることはできない。

レーニンはこう言つている——

「從來、わが黨は形態的に組織された全體ではなくて、ただ個々のグループの總計にすぎなかつた。故に、これらのグループの間には、思想上での働きかけ以外に他の關係はまたあり得な

かつた。現在、われわれは組織された黨となつた。そして、これは、また権力の創造、すなわち思想の權威が權力の權威へ轉化すること、黨の下級機關が上級機關に服従することを意味する」(前掲書、二九一頁)。

少數が多數に服従するという原則、中央部が黨活動を指導するという原則が、不安定な分子からの攻撃、「官僚主義」、「形式主義」等々の非難を呼び起すことは稀ではない。全體としての黨の計畫的活動及び労働者階級の闘争の指導が、これらの原則を遂行することなしには、不可能であつたであろうことは、恐らく論證する必要があるまい。組織問題におけるレーニン主義とは、これらの諸原則を確乎として實行することである。これらの原則に反對する闘争を、レーニンは嘲笑し唾棄すべき「ロシア式虚無主義」及び「貴族的無政府主義」と名づけた。

レーニンはその著書「一步前進」の中で、これらの不安定な分子について正に次のように言つてゐる——

「この貴族的無政府主義は、殊にロシア式虚無主義者に特有なものである。彼らにとつては、黨組織は奇怪な「工場」に見え、全體への部分の服従や、多數への少數の服従は、彼等にとつては「農奴化」のように思われる……、中央部の指導下で仕事を分擔することは、人間を「車輪やネジ」に轉化させるものだとして、これに反對する悲喜劇的な泣言を彼らから發せしめてゐる……、黨の組織規約について語ることは、輕蔑的な澁面をつくらせ、規約なんかなくとも、結構やつてゆけるといふ無視した……小言を吐かせる」。

「惡評高い官僚主義云々の叫びが、中央部の成員に對する不滿の單なる隱蔽であり、被覆であることは明かなことだと思われる……。君は官僚主義者だ、それは、君が僕の意志によらず

に、僕の意志に反対して、大會によつて任命されたからだ、君は形式主義者だ、それは、君が僕の同意によらないで、大會の形式的決議によつてゐるからだ。君の行動は甚だしく機械的だ、それは君が、黨大會の「機械的」多數を楯にとつて、互選されたいという僕の希望をかえりみないからだ。君は専制者だ。それは、君が古い親しい仲間*の手に權力を渡すことを欲しないからだ（レーニン全集、ロシア語版、第六卷、三一〇頁及び二八七頁）。

三、プロレタリアートの階級組織の最高形態としての黨。黨は労働者階級の組織された部隊である。だが黨は労働者階級の唯一の組織ではない。プロレタリアートは、なお幾多の他の組織を持つてゐる。それなくしてはプロレタリアートは資本に對して成功的な闘争を遂行し得ないもの、すなわち、労働組合、協同組合、工場内の諸組織、國會議員團、黨外婦人團體、出版物、文化的・啓蒙的諸組織、青年同盟、革命的軍事諸組織（公然たる革命的出動の時）、國家的組織形態としての代表者ソヴエト（プロレタリアートが權力についてゐるならば）等々である。これらの組織の最大多數は黨外組織であり、ただその中のある部分のみが、直接黨に加盟するか、もしくはその一分枝をなしてゐるものである。すべてこれらの組織は、一定の條件の下においては、労働者階級にとつて、絶對に必要缺くべからざるものである。なせならば、これらの組織なしには、多様な闘争の分野において、プロレタリアートの階級的陣地を固めることが不可能であるからであり、これなくしては、ブルジョアの秩序を社會主義的秩序をもつて置きかえることを使命とする勢力としての、プロレタリアー

*これは第二回大會の決議に服従せず、レーニンに「官僚主義」の罪を着せたアクセルロード、マルトフ、ポトレソフ等々の「仲間」のことをいつてゐるのである——イ・スカトリン

トを鍛えあげることが不可能だからである。だが、かように多數組織の存在の下に、いかにして統一の指導を實現することが出来るか？ 多數の組織の存在が、指導上に不一致をもたらしなないという保證はどこにあるか？ これらの組織の各々は、各々の自己の特殊化された分野で活動を行う。それだから、互に妨害し合う筈はないというかも知れない。これは、勿論正しい。だが、これらすべての組織は、一つの階級、すなわちプロレタリア階級のためのものであるから、それらは同一の方面に向つて活動を遂行しなければならぬということも、また正しい。しからば一體、これらすべての組織が自分の仕事を遂行すべきその方針、その共通の方向は、誰が決定するか？ 必要缺くべからざる経験を有していることによつて、この共通の方針を作成し得るばかりでなく、なおまた、このために十分な權威を持つていることによつて、指導における統一を達成し、行き違ひの生ずることをなくするため、これらの組織全部を激勵して、この方針を實行せしめる可能性をもつている中心的組織は何處にあるか？

かような組織が、プロレタリアートの黨である。

黨は、このためにすべての素質を備えている。なせならば、第一に、黨はプロレタリアートの黨外諸組織と直接の連絡を持ち、かつ頻繁にこれらの組織を指導している、労働者階級の最も優秀な分子の集合点だからである。第二に、黨は、労働者階級の最も優秀な人々の集合点として、自己の階級のあらゆる組織形態を指導する能力を持つている労働者階級の指導者を養成する最良の學校だからである。第三に、黨は、労働者階級指導者の最良の學校として、その經驗と權威の點で、プロレタリアートの闘争の指導を中央集権化し、かようにして労働者階級のありとあらゆる黨外組織を、黨と階級とを結びつける補助機關ならびにベルトに轉化し得る唯一の組織だからである。

黨はプロレタリアートの階級組織の最高形態である。

このことは勿論、黨外組織、労働組合、協同組合その他等々が、形式的に黨の指導に従属していなければならぬ、ということの意味しない。問題は、ただこれらの組織の成員たる黨員が、疑いもなく、影響力を有する人間として、黨外諸組織がその活動においてプロレタリアートの黨に接近し、そして自發的に黨の政治的指導を受けいれるに至るよう、あらゆる説得の方策をとるということである。

だからこそ、レーニンは、黨は「プロレタリアの階級的結合體の最高形態」であり、その政治的指導はプロレタリアートの他のすべての組織形態に及ぼされなければならぬ、といっているのである（レーニン全集、ロシア語版、第二五卷、一九四頁）。

だからこそ、無所屬の國會議員や黨とはつながりをもたぬ言論會の活動家や、狭量な労働組合幹部や俗物化した協同組合幹部を培養しているところの、黨外組織の「獨立性」や「中立性」という日和見主義的理論は、レーニン主義の理論並に實踐と全く相容れないものである。

四、プロレタリアートの獨裁の用具としての黨。黨はプロレタリアートの組織の最高形態である。黨はプロレタリア階級内部の、またこの階級の諸組織の基本的な、指導的要素である。だがそうかといつて、黨を黨のための黨、自立的な力と見なしてよいということにはならない。黨は、單にプロレタリアの階級的結合體の最高形態であるばかりでなく、それと同時に、黨は、獨裁がまだ獲得されていない場合には、獨裁獲得のための、獨裁がすでに獲得された場合には獨裁の強化と擴大のための、プロレタリアートの手中にある用具でもある。もしプロレタリアートが權力の問題に當面していないならば、もし帝國主義の諸條件、戦争の不可避性、危機の存在が、ブルジョアジーを打倒

し、プロレタリアートの獨裁を獲得するために、プロレタリアートのすべての力を一點に集中し、革命運動のすべての糸を一つの場所に集中することを要求していないならば、黨は、その意義をかくも高く引き上げられなかつたであらうし、またプロレタリアートの爾餘の形態の團體すべてを、自己の傘下に庇護し得なかつたであらう。黨は、何よりも先ず、權力の獲得に成功するために必要缺くべからざる自己の戦闘司令部として、プロレタリアートにとつて必要である。自己の周圍にプロレタリアートの大衆的な諸組織を糾合し、鬭争の過程において全運動の指導を中央集權化し得る黨がなかつたならば、ロシアのプロレタリアートが、自己の革命的獨裁を實現し得なかつたにちがいないことは、恐らく論證する必要はあるまい。

だが黨は、單に獨裁を獲得するためにプロレタリアートに必要なのではない。黨は獨裁を維持し、社會主義の完全な勝利のために獨裁を強化し、擴大するために、もつともつとプロレタリアートにとつて必要なのである。

レーニンはこう言つてゐる——

「わが黨の中に最も嚴格な、眞に鐵の規律がなかつたならば、また労働者階級の全大衆からの、すなわちこの階級の中の思想をもつたもの、誠實なもの、自己犠牲的なもの、影響力のあるもの、おくれた層を導きもしくは引きつける能力を持ったもの、これらすべてのものからの、黨に對する最も完全な、獻身的な支持がなかつたならば、ボルシェヴィキは、二カ年半はおろか、二カ月半も權力を持ちこたえることが出来なかつたにちがいないことは、今日では、もはや殆ど各人が知つてゐるところであらう」(レーニン全集、ロシア語版、第二五卷、一七三頁)。

だが獨裁を「維持」し、「擴大」するということは、何を意味するか？ それは、規律と組織性の精神を、幾百萬というプロレタリア大衆の中に持ち込むことを意味する。それは、小ブルジョアの奔流の如き力と、小ブルジョアの習癖との腐つた影響に對する緋金と防壁とを、プロレタリア大衆の中につくることを意味する。それは、小ブルジョア層を教育し直し、作り變えるためのプロレタリアの組織的活動を補強することを意味する。それは、プロレタリア大衆が、階級を絶滅し、社會主義的生産を組織するための諸條件を準備し得る力として、自分自身を教育することを助けることを意味する。だが、これら一切のことを成就するには、その結束性と規律とによつて強力である黨なくしては不可能である。

レーニンはこういつている――

「プロレタリアートの獨裁は、舊社會の勢力と傳統とに對する流血的なまた非流血的な、暴力的なまた平和的な、軍事的なまた經濟的な、教育的なまた行政的な頑強な闘争である。幾百萬、幾千萬の人々の習慣の力は、最も恐ろしい力である。闘争によつて鍛えあげられた鐵の如き黨なくしては、當該階級中のすべての誠實な者の信頼を享有している黨なくしては、大衆の氣持をつねに注視し、これに影響を與えることを心得ている黨なくしては、かかる闘争を成功的に遂行することは不可能である」(レーニン全集、ロシア語版、第二五卷、一九〇頁)。

黨は、獨裁を獲得し、維持するために、プロレタリアートによつて必要である。黨はプロレタリアートの獨裁の用具である。

しかして以上のことから、階級の消滅と共に、プロレタリアートの獨裁の凋落と共に黨もまた凋落する筈であるということになる。

五、分派の存在と兩立しない意志の統一體としての黨。プロレタリアート獨裁の獲得と維持とは、その結束性と鐵の規律とによつて強力である黨なくしては、不可能である。だが黨内における鐵の規律は、全黨員の意志の統一なくしては、全黨員の行動の完全な、絶對的な統一なくしては考え得られない。このことは、勿論、このために黨内部において意見を闘わす可能性が除かれてしまふということの意味しない。反對に、鐵の規律は、黨内部における批判と意見のあらそいとを排せずにかへつてこれを豫想している。ましてこのことは、規律は「盲目的」でなければならぬ、ということではない。反對に、鐵の規律は、服従の意識性と自發性とを排せずにかへつてこれを豫想している。なせならば、意識的な規律のみが、眞に鐵の規律たり得るからである。だが意見の闘争が終り、批判がなし盡され、決定が採用された後には、全黨員の意志の統一と行動の統一とは、必要缺くべからざる條件であつて、これなくしては統一的な黨も、黨内における鐵の規律も考え得られない。

レーニンはこう言つている——

「尖鋭化された現在の國內戦争時代においては、共產黨は、最も中央集權的に組織され、黨内においては軍隊的規律に殆ど近い鐵の規律が支配し、またその黨の中央部が、黨員の一般的信頼を受け、廣汎な權能をもつた、權力のある權威のある機關である場合にのみ、自己の義務を果すことができるのである」(レーニン全集、ロシア語版、第二五卷、二八二——二八三頁)。

獨裁獲得前の闘争の條件下における黨内の規律については、かくの如くである。

獨裁獲得後の黨内の規律についても、同じように、否、もつと高い程度において、同じことを言わなければならない。

レーニンはこう言っている――

「プロレタリアートの黨の鐵の規律をたとえ些かたりとも弱めるものは（特にプロレタリアート獨裁の時期に）事實上プロレタリアートに反對してブルジョアジーを助けるものである」（レーニン全集、ロシア語版、第二五卷、一九〇頁）。

しかししてこのことから、分派の存在は、黨の統一とも、また鐵の規律とも相容れないものだといふことになる。分派の存在は數個の中央部の存在となり、數個の中央部の存在は黨内における共通の中央部の缺如、統一的意志の瓦解、規律の弱化と崩壊、獨裁の弱化と崩壊をもたらすものとなるといふことは恐らく論證する必要はあるまい。勿論、プロレタリアートの獨裁に反對して鬭争し、プロレタリアを權力に導くことを欲しない第二インターナショナルの諸黨は分派の自由というような自由主義を勝手に奉ずることができなであらう。なせならば、これらの諸黨は鐵の規律を全く必要としないからである。だがプロレタリアート獨裁の獲得と強化という任務を土台として、その活動を組立てている共産主義インターナショナルの諸黨は、「自由主義」にも、また分派の自由にも同意することはできない。

黨は、黨内におけるあらゆる分派性と權力の分立とを絶対に排斥するところの、意志の統一體である。

ここから、「黨の統一について」というわが黨の第十回大會の特別決議の中で認證されたレーニンの解説、すなわち「プロレタリアートの獨裁が成功するための基本的條件であるところの黨の統一とプロレタリアートの前衛の統一意志の實現にとつての分派主義の危険」についてのレーニンの解説が生れたわけである。

ここから、「あらゆる分派主義の完全なる絶滅」と「無條件かつ即時の黨からの除名」の威嚇の下に、「あらゆる質の政綱によつて形成されたグループを、例外なく全部即時解散させること」というレーニンの要求が生れたわけである（決議「黨の統一について」参照）。

六、黨は、自己を日和見主義的分子から淨化することによつて強化される。黨内における分派主義の源泉は、黨の日和見主義的分子にある。プロレタリアートは、閉鎖された階級ではない。資本主義の發展に伴いプロレタリア化された農民、小市民、インテリゲンチヤ出身者が絶えずプロレタリアートの中に流れ込んでくる。同時に植民地的超利潤によつてブルジョア階級に飼われている、主として労働組合の幹部及び國會議員からなるプロレタリアート上層部の腐敗過程が行われる。レーニンはいつた——「その生活様式からいつて、その労働賃銀の額からいつて、その世界觀一切からいつて、完全に小市民的なブルジョア化した労働者、もしくは「労働貴族」のこの層は、第二インターナショナルの主要な支柱であり、そして吾々の時代においては、ブルジョア階級の主要な社會的（軍事的ではない）支柱である。なんとすれば、彼らは労働運動におけるブルジョア階級の眞の手先であり、資本家階級の労働者番頭であり、改良主義ならびに排外主義の眞の傳導者だからである」（レーニン全集、ロシア語版、第一九卷、七七頁）。

すべてこれらの小ブルジョアのグループは、何らかの方法で黨内に侵入し、そこに動搖と日和見主義の精神、腐敗と無確信の精神を持ちこんでいる。彼らはまた、主として分派主義と崩壞の源泉であり、黨の紊亂と内部からの爆發の源泉である。後方にかかる「同盟者」を持ちつつ帝國主義と闘うことは、両面から、すなわち前面及び後方から挟み撃にされることを意味する。それ故に、かかる分子との容赦なき闘争、黨からの彼らの驅逐は帝國主義に對する闘争に勝利するための前提條件である。

党内における思想的闘争によつて日和見主義的分子を「克服」するという理論、同一黨の境内でこれらの分子を「片付ける」という理論は、黨をマヒ症と慢性的不快に陥れ、黨を日和見主義の餌食となし、プロレタリアートを革命黨なしにほうつておき、帝國主義に對する闘争における主要な武器をプロレタリアートから奪う虞のある、腐敗した、危険な理論である。もしわが黨がマルトフやタンやポトレンフやアクセルロードの一味を、その陣列内に持つていたならば、わが黨は、廣い道に進出することができなかつたであらうし、また權力を獲得し、プロレタリアートの獨裁を組織することができなかつたであらうし、國內戦争において勝利者となることも出来なかつたであらう。わが黨が内部の統一とその陣列の未曾有の結束性を創り上げることに成功したとすれば、それはまず第一に、黨が適時に日和見主義の汚物をよく清掃しえたからであり、黨から解黨派やメンシエヴィキをよく驅逐し得たからである。プロレタリア諸黨の發展と強化の道は、日和見主義者と改良主義者、社會帝國主義者と社會排外主義者、社會愛國主義者と社會平和主義者等から黨を淨化することである。黨は、自己を日和見主義的分子から淨化することによつて強化される。

レーニンはこう言つている――

「自己の陣列内に改良主義者、メンシエヴィキを有しては、プロレタリア革命に勝利することはできないし、それを保持することもできない。このことは原則的に明白である。これはロシアとハンガリアと兩方の經驗によつて、はつきりと實證される。……ロシアには、困難な状態が幾度もあつた。そのときに、もしメンシエヴィキ、改良主義者、小ブルジョア民主主義者がわが黨内に残つていたならば……間違ひなく、ソヴェト制度は顛覆されていたであらう。……一般の承認するところによれば、イタリアにおいては、事態は國家權力爭奪のため

のプロレタリアート對ブルジョアジーの決戦に向つて進んでいる。かような時期においては、メ
ンシエヴィキ、改良主義者、トウラチ派を黨から放逐することが絶対に必要であるばかりでな
く、さらに改良主義者等との「統一」の方向へ動搖しかねない、また動搖を見せているような共
産主義者——いくら彼らが立派でも——を却けること、すなわち、あらゆる責任ある地位から退
けることも有益でさえあるだろう……。革命の前夜においてまた革命の勝利のための最も激烈
な闘争の瞬間においては、黨内における最小の動搖でさえ、すべてを破滅させ、革命を挫折させ、
權力をプロレタリアートの手からもぎとつてしまひ得るであろう。何となれば、この權力は、ま
だ鞏固になつていないからであり、この權力に對する襲撃はまだまだあまりに強力だからであ
る。もし、動搖している指導者がかかる時に引き下るならば、それは、黨をも、労働運動をも、
革命をも弱めるのではなく、かえつてそれを強めるものである」(レーニン全集、ロシア語版、
第二五卷、四六二、四六三、四六四頁)。

九、活動の様式

これは文學上の様式をいうのではない。私が念頭においているのは、活動の様式、すなわちレ
ニン主義者である働き手という特殊な型を創り出している、レーニン主義の實踐における特殊な
もの、獨特なものである。レーニン主義は、黨及び國家の働き手の特殊な型を創りあげ、特殊なレ
ニンの活動の様式を創造する、理論的並に實踐的學校である。

この様式の特徴點は、どういふことか？その特性とは、どんなものか？

この特性は二つある、すなわち

(イ) ロシア式革命的発展規模と

(ロ) アメリカ式實務的精神である。

レーニン主義の様式は、黨活動と國家活動において、この二つの特性を結合することにある。

ロシア式革命的発展規模は、停滞性、千篇一律、保守主義、思想の沈滞、祖先からの傳統の奴隸的踏襲に對する解毒劑である。ロシア式革命的発展規模——これは、思想を呼び覺まし、前進させ、古きものを破壊し、見透しを與えるところの、生氣を吹き込む力である。これなくしては、いかなる進歩も不可能である。

だがもしこのロシア式發展規模を活動におけるアメリカ式實務的精神と結合しないならば、それは、實踐において、空虚な『革命的』マニロン主義に退化するあらゆる可能性を持つてゐる。かかる退化の例はいくらでもある。布告によつて何でも整え、何でも改造することができるといふ、この布告の力に對する信仰にその根をもつてゐる『革命的』創作狂や『革命的』設計性の病氣を知らぬものがあるか？ ロシアの作家の一人、イ・エレンブルグは、その短篇小説『ウスコムチエル』（完成された共產主義的人間）の中で、この病氣にかつた一人の『ボルシェヴィキ』の型を描き出している。この男は、理想的に完成された人間の定型を見出すことをその目的とし……しかも、この『仕事』に『溺れて』しまつたのである。この小説には大きな誇張があるが、この病氣を正しく把握してゐるといふことは疑いのないところである。だが、恐らくレーニンほど、ひどくかつ容赦なく、かよふ病人を嘲弄したものはないのであろう。『共產主義的うぬばれ』——こんなふうには彼は、創作狂、布告創造病の有するこの病的な信仰をののしつた。

レーニンはこう言っている——

「共産主義的自惚とは、まだ肅清されずに共産党内にいる人間が、自分のすべての任務を共産主義的法令の發布によつて解決できると妄想することを意味する」（レーニン全集、ロシア語版、第二七卷、五〇——五一頁）。

「革命的」大言空語に對してレーニンは通常單純な、日常活動を對立させ、これによつて「革命的」創作狂が眞正レーニン主義の精神にもまたその字義にも相反するものであることを強調したのである。

レーニンはこう言つている——

「華やかな文句をヨリ少く、單純な日常活動をヨリ多くすべきだ」……

「政治的おしやべりをヨリ少く、共産主義的建設事業の、最も單純な、しかし、生々した……諸事實に對する注意をヨリ多くすべきだ……」（レーニン全集、ロシア語版、第二四卷、三四三頁及び三三五頁）。

反對に、アメリカ式實務的精神は、「革命的」マニロフ主義や妄想的創作狂に對する解毒劑である。アメリカ式實務的精神——これは障礙も知らず、またこれを認めず、その實務的な頑強さをもつてありとあらゆる妨害物を押し除けて、一度やりはじめたことは、たとえそれが大きくないことであつても、最後までやり遂げずにはおかないところの、制御し難い力であり、この力なくしては、眞劍な建設活動は考え得られないのである。

だが、このアメリカ式勤奮的精神は、もしこれをロシア式革命的発展規模と結合させないならば、偏狭な、無原則的な實利主義に退化するあらゆる可能性を持つてゐる。若干の「ボルシエヴィキ」をしばしば墮落させ、彼らを革命の大業から離れさせる、偏狭な實踐没頭主義と無原則的な實利主義の病氣を知らぬものがあろうか？ この獨特の病氣は、ベ・ピリニャークの小説『みのらぬ年』の中でそのまま反映されている。すなわち、この小説には意志と實踐的決斷力を豊に持ち、極めて「精力的」に「活動する」が、先の見透しがなく「何がどうなるか」を知らず、これがために革命的活動の道から踏み迷つてしまふロシアの「ボルシエヴィキ」の一つの型が描かれている。レーニンほどこの實利主義的病氣を辛辣に嘲笑した者はない。「偏狭な實踐没頭主義」、「頭腦のない實利主義」——レーニンは、この病氣をかくののじつた。彼は、通常、生々とした革命的活動とわれわれの日常の活動の全般にわたる革命の見透しの必要とをこれに對立させ、かくして無原則的な實利主義が「革命的」創作狂と同じく、眞のレーニン主義に相反するものであることを強調した。

ロシア式革命的発展規模とアメリカ式實務的精神との融合——黨活動と國家活動におけるレーニン主義の本質は、實にここにある。

ただ、かような融合のみが、レーニン主義者である働き手の完成された型を、レーニン主義の活動の様式を、われわれに與えるのである。

十月革命とロシア共產主義者の戦術

——著書「十月革命への途上」の序文——

一、十月革命の國外的並に國內的情勢

ロシアにおけるプロレタリア革命が、帝國主義の鎖を断ち切り、かくしてブルジョアジーの權力を打倒することを比較的容易になしとげえられたのは、國外的性質をもつ三つの事情があつたからである。

第一には、それは二つの基本的な帝國主義グループ、即ち英・佛のグループと獨・墺のグループの間に、死物狂いの鬭争が行われていた時期、即ちこの二つのグループが、互に生死の鬭争に忙殺され、十月革命に對する鬭争に眞剣な注意を拂う時間も手段もなかつた時期に、十月革命が始まつたという事情である。この事情は十月革命にとつて非常に大きな意義をもつていた。というのは、この事情は十月革命に、その勢力を強化し、また組織するために、帝國主義内部の激烈な衝突を利用する可能性を與えたからである。

第二には、それは、帝國主義戦争の進行中に、即ち戦争によつて疲弊困憊し、平和を渴望していた勤勞大衆が、事物の論理に導かれて、プロレタリア革命を戦争からの唯一の出路として見るように

なつた時に、十月革命が始まつたという事情である。この事情は十月革命にとつて極めて重大な意義を持つていた。というのは、この事情は、十月革命の手に平和という強力な武器を興え、ソヴェト的變革と憎惡されている戦争の終結とを結びつける可能性を得ることを容易にし、こうして西歐においては労働者の間に、また東洋においては被壓迫民族の間に十月革命に對する大衆的同情をよび起したからである。

第三には、それは、ヨーロッパに強大な労働運動が存在していたことと、長年にわたる帝國主義戦争の結果として西歐及び東洋において革命的危機が成熟していたという事實とである。この事情は、ロシアにおける革命にとつて評價し難いほどの大きな意義を持つていた。というのは、この事情は革命のために世界帝國主義に對するその鬭争において、ロシアの國外での信頼すべき同盟者を保障したからである。

だが國外的事情のほかに、なお十月革命はその勝利を容易ならしめた幾多の有利な國內的條件をもつていた。

これらの條件のうち、次にあげるものを主要なものとしなければならぬ。

第一には、十月革命が、ロシアの労働者階級の大多數から最も積極的な支持を受けていたこと。

第二には、十月革命が平和と土地とを渴望していた貧農と大多數の兵士から確實な支持を受けていたこと。

第三には、十月革命がその先頭に、指導的勢力として、ボルシエヴィキ黨のような、試練を積んだ黨、その経験や長年の間に鍛えあげられた規律によつてのみならず、勤勞大衆との巨大な結びつきによつても強力である黨をもつていたこと。

第四には、十月革命が多かれ少なかれ弱いロシアのブルジョアジーや農民「一揆」によつてすっかり意氣沮喪した地主階級や戦争中に全く破産した協同的政黨（メンシエヴィキの黨とエス・エルの黨）のような、比較的容易に克服できる敵を相手として有じていたこと。

第五には、十月革命が若い國家の龐大な地域を自己の支配下に有しており、そこで自由に機動をやつたり、事情が退却を必要とした場合によつては退却したり、休息したり、力を結集したりなどすることができたこと。

第六には、十月革命が反革命との闘争において、國內に十分な量の食料や燃料や原料の資源が存在することをあてにすることができたこと。

これらの國外的並に國內的事情の結合が、十月革命の勝利を比較的容易ならしめたところの、あの特殊な情勢をつくり出したのである。

このことは、もちろん、十月革命が内外情勢という意味で、不利な點を持たなかつたということの意味していない。例えば、十月革命がある程度まで孤立状態にあつたこと、その傍にも近隣にも頼みになるべきソヴェト國がなかつたというよう不利な點は、いかに大きな意義を有したことであろうか。將來の革命、たとえば、ドイツにおける革命がこの點でもつと有利な地位におかれるであろうということは、疑いのないことである。というのは、ドイツの革命は、わがソヴェト同盟のような、その強さからいつて重大なソヴェト國を隣邦に持つてゐるからである。プロレタリアートが國內に大多數を占めていなかつたというよう不利な點については、もはや私は述べない。

しかし、これらの不利な點も、上述した十月革命の國內的並に國外的諸條件の特殊性の巨大な意義を一層強調してゐるだけである。

この特殊性を、吾々は一瞬間たりとも忘れてはならない。一九二三年秋ドイツに起つた事件を分析する場合には、特にこの點を記憶していなければならぬ。大ざつばに十月革命とドイツにおける革命との間に類推をやり、ドイツ共産黨が實際に犯した、或は犯しもしなかつた誤謬を責めて、猛烈に同黨を鞭打つてゐるトロツキーは、何よりもまずこのことを記憶しておくべきである。

レーニンはこう言つてゐる——

「一九一七年の具體的な、歴史的に極めて目あたらしい情勢の下で、社會主義革命を始めることは、ロシアにとつて容易であつたが、革命を繼續し、これを最後まで遂行することは、ロシアにとつてはヨーロッパ諸國にとつてよりも困難であらう。私は既に一九一八年の初めに、この事情を指摘したことがあるが、その後二年間の經驗は、かかる考察の正しいことを完全に實證した。次のような特殊な條件、即ち（一）ソヴェト變革と労働者農民を信じ難いほどに疲弊させていた帝國主義戰爭がこの變革によつて終結したこと、この二つを結合する可能性があつたこと、（二）ソヴェトという敵に對抗して團結することができなかつた全世界的に強大な帝國主義的野獸どもの二つのグループ間の生死を賭した闘争を、或る期間利用する可能性があつたこと、（三）部分的には國土の龐大な廣さと交通機關の不備のお蔭で、比較的長期に亘る國內戰爭に持ちこたえる可能性があつたこと、（四）プロレタリアートの黨が、農民の黨（エス・エル、すなわち、その大多數がボルシェヴィズムにはつきりと敵意を示した黨）の革命的諸要求を取り上げ、そして、プロレタリアートが政治權力を獲得したことによつて、これらの要求を即座に實現することができたほど、根底の深いブルジョア民主主義的革命運動が農民の中にあつたこと、——こ

ういつたような特殊な諸條件は、現在西歐にはないし、またこのような、或はこれに似た諸條件は、あまり容易にくり返されるものではない。だからこそ、なかんずく——ほかの色の理由は別としても——西歐で社會主義革命を始めることは、吾々にとつてよりも一層困難なのである」(レーニン全集、第二五卷、二〇五頁)。

レーニンのこれらの言葉を忘れてはならない。

二、十月革命の二つの特殊性について、または 十月革命とトロツキーの「永續」革命論

十月革命の内的意味と歴史的意義とを理解するために、先ず第一に闡明する必要があるこの革命の二つの特殊性が存する。

それはどんな特殊性であるか？

第一に、それは、プロレタリアートの獨裁が、わが國ではプロレタリアートと勤勞農民大衆との同盟を基礎にして、勤勞農民大衆に對するプロレタリアートの指導の下に出現した權力として、生れたという事實である。第二に、それはプロレタリアートの獨裁が、わが國では、資本主義的にヨリ一層發達した他の國々において資本主義が維持されているときに、資本主義的にはあまり發達していない一つの國において、社會主義が勝利した結果として、確立されたという事實である。勿論それだからといって、十月革命にはこれ以外に他の特殊性がないわけではない。だが、吾々にとつては現

在、特にこの二つの特殊性が重要なのである。というのは、この二つの特殊性が、十月革命の本質をハッキリと表現しているからというだけでなく、それらが「永續革命」の理論の日和見主義的本性を見事にあばき出しているからでもある。

以下、簡単にこれらの特殊性を検討して見よう。

都市と農村の小ブルジョア勤勞大衆の問題、これらの大衆をプロレタリアートの味方に獲得するという問題は、プロレタリア革命のごく重要な問題である。權力獲得のための闘争において、都市と農村の勤勞大衆は誰を支持するか、即ちブルジョアジーとプロレタリアートとの、いずれを支持するか、誰の豫備隊となるか、ブルジョアジーの豫備隊となるか、それともプロレタリアートの豫備隊となるか——革命の運命とプロレタリアート獨裁の鞏固さとは、この點にかかつている。フランスにおける一八四八年および一八七一年の革命が破滅したのは、主として、農民の豫備隊がブルジョアジーの味方についたからである。そして十月革命が勝利したのは、十月革命がブルジョアジーから彼等の農民豫備隊を奪い取ることができ、かつこれらの豫備隊をプロレタリアートの味方に獲得できたからであり、そしてプロレタリアートが、この革命における、都市と農村の幾百万勤勞大衆の唯一の指導的勢力であつたからである。

このことを理解しないものは、十月革命の性格をも、プロレタリアート獨裁の本性をも、わがプロレタリア権力の國內政策の特殊性をも、決して理解できないであらう。

プロレタリアートの獨裁は、「經驗ある戰略家」の注意深い手によつて「手際よく」「えらばれ」、住民の何れかの層を「合理的に支柱としている」單なる政府の首脳部ではない。プロレタリアートの獨裁は、資本の打倒と、社會主義の終局的勝利のための、プロレタリアートと勤勞農民大衆

との階級的同盟であり、しかもプロレタリアートがこの同盟の指導的勢力であることを条件とした階級的同盟である。

かようにして、この場合における問題は、今日「永續革命」の或る外交家的な擁護者たちが好んで口にするように、農民運動の革命的可能性を「ほんの少しばかり」過少評價するとか、あるいは「ほんの少しばかり」過大評價するとか、ということにあるのではない。問題は、十月革命の結果として生じた新しいプロレタリア國家の本性についてである。問題は、プロレタリア権力の性格、プロレタリアートの獨裁そのものの諸原則についてである。

レーニンはこう言っている――

「プロレタリアートの獨裁は、プロレタリアート、すなわち勤勞者の前衛と、勤勞者のうちの數多い非プロレタリア的諸層（小ブルジョアジー、小經營者、農民、インテリゲンチヤ、等等）、或は彼等の大多數との間の階級的同盟の特殊な形態であり、資本に反對する同盟、資本を完全に打倒し、ブルジョアジーの抵抗と、彼等の復古に對する企圖を完全に壓し潰すことを目的とする同盟、社會主義を終局的に確立し、鞏固にすることを目的とする同盟の特殊な形態である」。

（レーニン全集、ロシア語版、第二四卷、三一―頁）

さらに進んで、レーニンは言っている――

「プロレタリアートの獨裁というこのラテン語系の、科學的な、歴史的・哲學的術語をもつと單純な言葉に譯するならば、つまり次のようになる。一定の階級、即ち都市の勞働者をして一般に工場勞働者、産業勞働者だけが、資本の桎梏を打倒するための闘争において、またその打倒の過

程において、勝利を維持し、強化するための闘争において、新しい社會主義的社會制度の確立という大業において、諸階級を完全に絶滅してしまつたためのあらゆる闘争において、勤勞大衆並に被搾取大衆全部を指導することができるといふこと、これである」。〔レーニン全集、ロシア語版、第二四卷、三三六頁〕

かくの如きがレーニンによつて與えられた、プロレタリアート獨裁の理論である。

十月革命の特殊性の一つは、この革命が、プロレタリアートの獨裁についてのレーニンの理論の、模範的な實行であるといふ點にある。

或る同志達は、この理論がロシアの實際にだけ關係のある、純粹に「ロシア的」な理論であると考へている。これはまちがつてゐる。これは全然まちがつてゐる。レーニンが、プロレタリアートによつて指導される非プロレタリア諸階級の勤勞大衆について語る場合には、ただロシアの農民だけを念頭に置いてゐるのではなく、近年までまだロシアの植民地であつた、ソヴェト同盟の邊境地方の勤勞的分子をも念頭に置いてゐるのである。これら他の民族大衆との同盟なくしては、ロシアのプロレタリアートは勝利し得ないであろうと、レーニンは倦むことなくくりかへして述べた。民族問題についての諸論文や數次のコミンテルンの世界大會での演説の中で、レーニンは先進諸國のプロレタリアートと奴隸化された植民地の被壓迫民族との革命的同盟、革命的プロツクなくしては、世界革命の勝利が不可能であることを再三再四述べた。だが、この植民地といふのはつまり被壓迫勤勞大衆、そして何よりもまず勤勞農民大衆でないとすれば、一體何であろうか？ 植民地解放の問題が、その本質上、金融資本の抑壓と搾取とから、非プロレタリア諸階級の勤勞大衆を解放する問題であることを、知らぬ者があろうか？

しかして右のことからプロレタリアートの獨裁に關するレーニンの理論は、純粹に「ロシア的」な理論ではなく、すべての國に必ず適用さるべき理論であるということになる。ボルシエヴィズムは單にロシア的な現象ではない。レーニンは言つてゐる——「ボルシエヴィズムはすべての國にとつて、戦術の模範」である、と。(レーニン全集、ロシア語版、第二三卷、三八六頁)

以上が十月革命の第一特殊性の性格的特徴である。

十月革命のこの特殊性の見地から見て、トロツキーの「永續革命」論はどうであるか？

トロツキーが「ツアーナシで労働者の政府をつくれ」というスローガン、即ち農民を抜きにした革命についてのスローガンを掲げて、革命的勢力としての農民を「あつさり」と忘れてしまつた、一九〇五年における彼の見地についてはくわしくは述べないでおこう。ラデックさえ、「永續革命」の外交的な擁護者さえもが現在では、一九〇五年における「永續革命」が、現實から「天空への跳躍」であつたことを承認せざるを得なくなつてゐる。今日では、この「天空への跳躍」にこれ以上かかわりある價値のないことをすべての人が認めてゐると思われる。

吾々はまた、戦争の時期、例えば一九一五年におけるトロツキーの見地についても、くわしくは述べないでおこう。そのとき、トロツキーはその論文「権力獲得のための闘争」の中で、「吾々は帝國主義の時代に生活してゐる」、帝國主義は「ブルジョアの民族を古い支配制度に對立させずに、プロレタリアートをブルジョアの民族に對立させる」ということから論を進めて、農民の革命的役割は低下せざるを得ないし、土地の沒收というスローガンは、従來有してゐたような意義をもはや持つていない、という結論に到達した。當時レーニンは、トロツキーのこの論文を検討批判して、「農民の役割」を「否定する」ものとしてトロツキーを非難し、「トロツキーは、農民の役割を「否定するこ

と」をもつて農民を革命に起ち上らせることを欲しないことだと解しているロシアの自由主義的労働者政治家たちを、事實上援助しているのだ！」（レーニン全集、ロシア語版、第一八卷、三一八頁参照）と述べたのは周知のことである。

吾々は、むしろこの問題についてのトロツキーのもつと後の著作、即ちプロレタリア獨裁がすでにしつかりと根を下し得て、そしてトロツキーが『永續革命』についての自己の理論を實際に照して審査し、自己の誤謬を訂正する可能性を持つていた時期の著作に移ることとしよう。トロツキーが著書『一九〇五年』のために一九二二年に書いた『序文』を例に取つて見よう。トロツキーは『永續革命』について、この『序文』のなかでこう述べている――

「一九〇五年一月九日の事變と十月ストライキとのちようと中間に、『永續革命』論という名稱を與えられたロシアの革命的發展の性質についての見解が著者の腦裏に形成された。この難解な名稱は、ロシア革命が直接にはブルジョア的な目標を目指しているのであるが、しかしこの目標で停まる事はできないだろう、という思想を表現していたのである。プロレタリアートを權力の地位につかせずには、革命はその當面のブルジョアの諸任務を解決することはできないであろう。そしてこのプロレタリアートは、權力を掌中におさめた後、革命においてブルジョアのワク内に自分を局限しておく事はできないであろう。反對に、その勝利を保障するためにこそ、プロレタリア前衛はその支配の最初の間は單に封建的所有制に對してばかりでなく、ブルジョア的所有制に對しても、最も思いきつた干渉をしなければならぬであろう。この場合プロレタリア前衛は、革命的闘争の最初の間において、彼を支持したブルジョアジーの全グループと反目衝突するばかりでなく、プロレタリア前衛の權力獲得に協力した廣汎な農民大衆とも反目衝突する

であろう。農民人口が歴史的な大多数を占めておくれた國における労働政府の地位上の矛盾は、ただ國際的規模においてのみ、プロレタリアートの世界革命の舞台においてのみ、その解決を見出すことができるだろう*。

トロツキーは、その『永續革命』について右のように述べているのである。

右の引用文とプロレタリアートの獨裁についてのレーニンの著作から引用した上掲の文とを比較すれば、直にレーニンのプロレタリアート獨裁の理論とトロツキーの『永續革命』の理論との間には、いかに大きな隔りがあるかを知ることが出来る。

レーニンは、プロレタリアート獨裁の基礎として、プロレタリアートと勤勞農民層との同盟について言っている。然るに、トロツキーの見解では、『プロレタリア前衛』は「廣汎な農民大衆」と『反目衝突』をすることになる。

レーニンは、プロレタリアートが勤勞者並に被搾取大衆を指導することについて語っている。然るに、トロツキーの見解では、『農民人口が歴史的な大多数を占めておくれた國における労働政府の地位上の矛盾』ということになる。

レーニンによれば革命はどこよりもまず、ロシア本國の労働者及び農民の間からその力を汲み出すのである。然るにトロツキーの見解では、ただ「プロレタリアートの世界革命の舞台においてのみ必要な勢力を汲みとることができるといふことになる。

だが、もし國際的革命がおくられてやってくるというふうな事になつたら、どうなるか？ 吾々の革命の前途には何等かの光明があるか？ トロツキーは何等の光明も與えていない。というのは、

* 傍點は私による。——イ・スタールン

「労働政府の地位上の矛盾は……ただ、プロレタリアートの世界革命の舞台においてのみ、……その解決を見出すことができるだろう」からである。このプランによれば、吾々の革命にとつて残されているものは、自分自身の矛盾の中でみじめな存在を続け、世界革命を待ちつくしてすつかり立ち腐れるというただ一つの見透しだけである。

レーニンの見解による、プロレタリアートの獨裁とは何であらうか？

プロレタリアートの獨裁とは、「資本を完全に打倒する」ためと、「社會主義を終局的に創建し鞏固ならしめる」ためにプロレタリアートと勤勞農民大衆との同盟に立脚する權力である。

トロツキーの見解による、プロレタリアートの獨裁とは何であらうか？

プロレタリアートの獨裁とは、「廣汎な農民大衆」と「反目衝突」をひきおこし、「矛盾」の解決をただ「プロレタリアートの世界革命の舞台において」のみ求めんとする權力である。

この「永續革命の理論」は、プロレタリアート獨裁の思想を否定するメンシェヴィズムの周知の理論と、どの點で異なっているか？

本質的には、何ら異なるところはない。

これを疑うことはできない。「永續革命」は、農民運動の革命的可能性の單なる過少評價ではない。「永續革命」はレーニンのプロレタリアート獨裁論の否定に導くところの農民運動の過少評價である。

トロツキーの「永續革命」は、メンシェヴィズムの一變種である。

十月革命の第一の特殊性については、上記のような事情である。

十月革命の第二の特殊性の性格的特徴は、どんなものであるか？

レーニンは帝國主義、特に戦争の時期における帝國主義を研究して、資本主義諸國の經濟的並に政治的發展の不均等性、飛躍性に關する法則を得るに到つた。この法則によれば、企業、トラスト、工業の諸部門及び個々の國々の發展は、均等には行われず、一つのトラスト、一つの工業部門、または一つの國が始終先に進み、他の色々のトラストや國々が順送りにこれよりもおくれて進むという具合に、一定の順序では行われず、ある國の發展は中斷され、他の國の發展は飛躍的に前進するという具合に、飛躍的に行われるといふのである。この場合、發展のおくれつつある國が、もとの地位を維持せんとする「全く正當な」志向と、飛躍的に前進した國が新しい地位を獲得せんとすると同じく「正當な」志向とは、帝國主義諸國間の軍事的衝突が避け難い必然的なものとなるるところにまで導いて行く。例えば、半世紀前には、フランスおよびイギリスと比較しておくれた國であつたドイツが丁度そうであつた。同じことが、ロシアと比較して日本についても言われなければならない。しかるに、既に二十世紀の初頭には、ドイツは、フランスを追い越すことができ、かつ世界市場においてイギリスを壓迫し始め、日本はまたロシアに對してそうであつたというように、ドイツと日本がはるかに飛躍的前進をしたことは周知の通りである。これらの矛盾から、周知の如く、最近の帝國主義戦争もまた發生したのである。

この法則は次のことから出發している——

(一)「資本主義は極めて少數の「先進」國による地球人口の壓倒的大多數の植民地的抑壓と、金融資本による絞殺の全世界的體系へと成長轉化した」。 (レーニンの「帝國主義論」、フランス語版への序文、レーニン全集、ロシア語版、第一九卷、七四頁)

(二)「この「獲物」の分配は頭のとつべんから足の爪先まで武装している二—三の全世界的に

強大な野獸共（アメリカ、イギリス、日本）の間に行われており、これらの野獸共は自分達の、獲物の分配から起る自分達の戦争に全地球を引きずりこむのである」。〔前掲書参照〕

（三）金融資本による抑壓の世界體系内の諸矛盾の成長と軍事的衝突の不可避性とは、帝國主義の世界戦線が革命のために傷つき易くなり、個々の國々によるこの戦線の突破が、蓋然的となる結果に導く。

（四）この突破は、帝國主義戦線の鎖が他にくらべて弱いところ、すなわち帝國主義が最ももろく、革命が最も容易に展開し得るところの箇所と國において、一番起りそうである。

（五）このために、一國における社會主義の勝利は——例えこの國が資本主義的にあまり發展していない國であり、他の諸國には資本主義が維持されており、しかもこれらの國が資本主義的にもつとよく發展している國である場合でさえも——それは全く可能であり、蓋然的である。

レーニンのプロレタリア革命理論の原則は、簡単にいえばかくの如きものである。

十月革命の第二の特殊性は何か？

十月革命の第二の特殊性は、この革命がレーニンのプロレタリア革命理論の實踐への適用の模範である、という點にある。

十月革命のこの特殊性を理解しない者は、この革命の國際的本性を、その巨大な國際的威力をも、またその獨特の對外政策をも決して理解しないであろう。

レーニンはこう言っている——

「經濟的および政治的發展の不均等性は、資本主義の絶対法則である。ここからして、社會主義の勝利が、初めには少數の資本主義國で、または單獨に一つの資本主義國でさえ可能であると

いうことになる。當該國の勝利したプロレタリアートは資本家を收奪し、自國において社會主義的生産を組織して、他の諸國の被壓迫階級を自分の味方に引きつけ、これらの國で資本家に反對する蜂起を起し、必要な場合には諸搾取階級と彼等の國家に對して武力に訴えてさえ進出して、爾餘の資本主義世界に對抗して起ち上るであろう」と。というのは「社會主義の下における諸民族の自由な結合は、おくれた諸國家に對する社會主義的共和國の多少とも長期に亘る頑強な闘争なくしては、不可能である」からである。(レーニン全集、第一八卷、二三二—二三三頁)

すべての國の日和見主義者は、プロレタリア革命は——彼等の理論によつて一般にどこかで始まるべきものとすれば——ただ工業的に發展した諸國でのみ始まることができると、またこれ等の國が工業的に發展していればいる程、社會主義の勝利の機會は一層多くなると、主張している。そして、この場合一國における社會主義の勝利、况や資本主義的により發展していない國における社會主義の勝利の可能性は、全然ありそうもないこととして除外されている。レーニンはすでに戦争中に、帝國主義諸國家の不均等な發展という法則に立脚して、一國における——たとえこの國が資本主義的により發展していない國であつても——社會主義の勝利についての自己のプロレタリア革命理論を、日和見主義者どもに對立させたのである。

十月革命がレーニンのプロレタリア革命理論の正しいことをあますところなく實證したことは周知の通りである。

一國におけるプロレタリア革命の勝利についてのレーニンの理論から見れば、トロツキーの「永續革命」はどうなつてゐるか？

トロツキーのパンフレット「われわれの革命」(一九〇六年)をとつて見よう。

トロツキーはこう書いている——

「ヨーロッパのプロレタリアートの直接の國家的支持なしには、ロシアの労働者階級は權力を持ちこたえ、自己の一時的な支配を恒久的な社會主義的獨裁に變えることはできないであろう。このことは一瞬間たりとも疑つてはならぬ」。

この引用文は何を物語つているか？ それは、一國における、この場合ではロシアにおける社會主義の勝利は、「ヨーロッパのプロレタリアートの直接の國家的支持なしには」、即ちヨーロッパのプロレタリアートが權力を獲得するまでは、不可能であるということである。

この「理論」と「單獨に、一つの資本主義國において」社會主義の勝利は可能であるというレーニンの命題との間には、どんな共通點があるか？

そこには何等の共通點もないということは、明かなことである。

だがかりに、吾々の革命の性質を規定することが困難であつた一九〇六年に出版されたトロツキーのこのパンフレットが、思わぬ誤謬を含んでいて、もつと後期のトロツキーの見解と完全には一致していないものとしておこう。そこでトロツキーの他のパンフレット、即ち一九一七年の十月革命前に發表され、そして今日の(一九二四年)、著書「一九一七年」の中に再録されている彼の「平和の綱領」をとつて見よう。このパンフレットの中でトロツキーは、一國における社會主義の勝利についてのレーニンのプロレタリア革命理論を批評し、この理論に對してヨーロッパ合衆國というスローガンを對立させている。彼は一國における社會主義の勝利は不可能であり、社會主義の勝利はヨーロッパ合衆國に結合するヨーロッパの主要數國(イギリス、ロシア、ドイツ)の勝利としてのみ可能であ

るか、それとも全然不可能かである、と主張している。彼は率直にこう言っている——「ロシアまたはイギリスにおける革命の勝利は、ドイツにおける革命がなければ考えられず、その逆のことも考えられない」と。

トロツキーは言っている——

「合衆國のスローガンを反駁する唯一の、幾分たりとも具體的な歴史的考察は、スイスで發行されていた「ソシアル・デモクラト」(當時のボルシェヴィキ中央機關紙——イ・スターリン)紙上に、次のような文句で言い現わされている——「經濟的並に政治的發展の不均等性は、資本主義の絶對法則である」、と。ここからして「ソシアル・デモクラト」紙は一國における社會主義の勝利は可能であり、それだからヨーロッパ合衆國の創造を個々別々の國家でのプロレタリアートの獨裁の前提條件とする必要はない、という結論を下した。色々の國の資本主義的發展が不均等であるということは、全く争う餘地のない考察である。だがこの不均等性そのものが非常に不均等なものである。イギリス、オーストリア、ドイツもしくはフランスの資本主義的水準は同一ではない。だがアフリカやアジアと比較すれば、すべてこれらの國は、社會革命が起り得るだけに熟した資本主義的「ヨーロッパ」を表象している。如何なる國も、自己の闘争において他國を「待つていては」ならぬということは、平行的な國際的活動の理念が、他を待つという國際的無活動の理念によつてすりかえられないように、くりかえしていうことが有益であり、また必要な初歩的思想である。吾々は他のものを待つていずに、吾々の發意性が他の諸國の闘争に刺戟を與えるという十分な確信をもつて、自分の國で闘争を開始しかつ繼續しているのである。だがもしこのことがおこらない場合には、例えば革命的ロシアが保守的ヨーロッパに直面して持ちこたえ

得るとか、または社會主義的ドイツが資本主義的世界の中で孤立状態で存続し得るとか考えることは、望みのないことである。歴史の経験もまた理論的考察も、かく實證しているのである。見られる通り、吾々の前にあるのは、これもまたヨーロッパの主要諸國において社會主義の勝利が同時に起るといふ同じ理論であり、原則として、一國における社會主義の勝利というレーニンの革命論と相容れない理論である。

社會主義の完全な勝利のため、舊秩序の復活を阻止し得る完全な保障を得るためには、若干の國のプロレタリアの共同努力がゼヒとも必要であることはいうまでもない。わが國の革命に對するヨーロッパのプロレタリアート側からの支持なくしては、ロシアのプロレタリアートは全般的な強襲に對して、もちこたえられなかつたろうが、またこれと同じく、西歐における革命運動に對するロシア革命の側からの支持なくしては、この運動はロシアにおけるプロレタリア獨裁樹立後に發展しはじめたようなテンポを以て、發展できなかつたであらうといふことはいうまでもない。吾々にとつては支持が必要なことはいうまでもない。だが、吾々の革命に對する西歐のプロレタリアート側からの支持とは何であるか？ 吾々の革命に對するヨーロッパの労働者の同情、軍事的干涉についての帝國主義者共の計畫を瓦解せしめる彼等の用意——すべてこれらは支持であり、重大な援助であるか？ 勿論そうである。ひとりヨーロッパの労働者からばかりでなく、植民地並に隸屬國側からのかような支持なしには、かような援助なしには、ロシアにおけるプロレタリア獨裁は非常に困難な立場に陥つたであらう。わが赤軍の威力と社會主義的祖國を死守せんとするロシアの労働者及び農民の用意とに結合されたこの同情及び援助は、今までのところ十分であつたか？——すべてこれらは、帝國主義者共の攻撃を撃退し、眞剣な建設的活動のために必要な情勢を闘いとるために十分であつたか？ そうだ十分に

あつた。この同情は増大しつつあるか、それとも減少しつつあるか？勿論増大しつつある。かようにして、吾々は社會主義的經濟を組織するという事業を前進させるためばかりでなく、今度は、西歐の労働者、そしてまた東洋の被壓迫民族に支持を與えるためにも有利な條件を有しているか？そうだ、有している。ロシアにおけるプロレタリア獨裁の七年間の歴史は、雄辯にこのことを物語つてゐる。

わが國に猛然たる労働意欲が既に盛り上つてゐる事を、否定できようか？いな、否定できない。すべてこれらのことが明かとなつた以上、革命的ロシアは保守的ヨーロッパに直面して持ちこたえる事はできないだろうというトロツキーの聲明は、一たいどんな意義を持ち得るか？

それは、ただ一つの意義を持ち得るだけである——即ち第一に、トロツキーは吾々の革命の内的威力を感じていない。第二に、トロツキーは、西歐の労働者及び東洋の農民が吾々の革命に與えている精神的支持の評價し難いほど大きな意義を理解していない。第三に、トロツキーは現在帝國主義を蝕んでゐる内的疾患を見逃してゐる。

レーニンのプロレタリア革命理論を批評することに夢中になつて、トロツキーは、一九一七年に出版され、一九二四年に再版されたそのパンフレット「平和の綱領」の中で、思わず知らず自分で自分の論據をまつたく打ち壞したのであつた。

だが、おそろく、トロツキーのこのパンフレットもすでに古くなつて、何等かの理由で彼の現在の見解に一致しなくなつたのではないか？一國における、即ちロシアにおけるプロレタリア革命の勝利の後に書かれた、トロツキーのすつと後の著作をとり上げて見よう。例えば、パンフレット「平和の綱領」の新版のために、トロツキーが一九二二年に書いた「跋文」をとり上げて見よう。彼はこの「跋文」にこう書いてゐる——

「プロレタリア革命は一國のわく内では勝利をとげることが出来ないという『平和の綱領』の中で幾回かくり返えされている主張は、おそらく或る讀者達には、わがソヴェト共和國の殆ど五カ年に亘る経験によつて反證されてしまつて見るように見えるかも知れない。だが、かような結論は、根據のないものであるだろう。労働者の権力が、一國、しかもおくれた國で、全世界に對抗してもちこたえて來たというこの事實は、プロレタリアートの巨大な威力を實證するものであつて、この威力は、他のもつと進んだ、もつと文明的な國では、眞に奇蹟をなすとげることが出来るであらう。しかしながら、國家として、政治的並に軍事的意味で自己を固守してはきたが、吾々は社會主義的社會の創建にはまだ到達していない、否、それに近ずきさえしていない。……爾餘のヨーロッパ諸國家においてブルジョアジーが權力を握つてゐる間は、吾々は經濟的孤立状態との鬭争において、資本主義世界との協定を搜し求めることを餘儀なくされてゐる。同時に、これらの協定は、せいせい吾々が、いずれかの經濟的創痍をなおし、何らかの前進をなすことを助けることはできるかも知れぬが、ロシアにおける社會主義的經濟の正真正銘の高揚は、ヨーロッパの最も主要な諸國におけるプロレタリアートの勝利の後に、のみ*可能となるであらうといふことは、確信を以つて言い得るのである」。

トロツキーはまぎれもなく眞實に背反し、また「永續革命」を終局的な破滅から救おうと執拗に努力しながら、かく述べているのである。

結局、どんなに言い張つたところで、吾々は社會主義的社會の創建には「到達していない」ばかりでなく、それに「近ずきさえしていない」といふことになるのである。「資本主義世界との協定」

* 傍點は私による。——イ・スターリン、

に望みをかけているものがあつたが、これらの協定からだつて何も得られはしないのだ。というのは、どんなに言い張つて見ても、「ヨーロッパの最も主要な諸國において」プロレタリアートが勝利しない間は、「社會主義的經濟の真正銘の高揚」はありはしないからである。

ところで、西欧ではプロレタリアートはまだ勝利していかないのだから、ロシアにおける革命に残されていることは、立ちくされとなるか、それともブルジョア國家に變質してしまふか、どちらかを「選ぶ」ことだけである。

トロツキーがすでに二カ年もの間、わが黨の「變質」について語つてゐるのは、故なきにあらざるである。

トロツキーが昨年、わが國の「破滅」を豫言したのは、故なきにあらざるである。

この奇怪な「理論」と、「一國における社會主義の勝利」に關するレーニンの理論とを一たいどうして一致させることができるか？

この奇怪な「見透し」と、ネツプはわれわれに「社會主義的經濟の基礎を建設完成する」可能性を與えるであろうというレーニンの見透しとを一體どうして一致させることができるか？

この「永續的」無希望と、例えば、次のレーニンの言葉とを一たいどうして一致させることができるか？

「社會主義は既に今日では遠い未來の問題でもなく、或は抽象的に考え出した光景の問題でもない。或は何か聖像のような問題でもない。聖像については、吾々は以前のとおり非常に悪い意見を持つてゐる。吾々は社會主義を日常生活の中に引き入れた、そして、そこで事情を調査研究しなければならぬ。これこそ當面の任務であり、これこそわれわれの時代の任務である。私は

次のような確信を表明して、私の結語としておこう。この任務が如何に困難であろうとも、この任務が従来とおりの吾々の任務に比べて如何に新しいものであろうとも、またそれが吾々に如何に多くの困難をもたらそうとも、吾々すべては協力して、明日にはないが数年の中には、如何なることがあろうとも吾々すべては協力してこの任務を解決し、かようにしてネツプのロシアは社會主義のロシアとなるであろう」。〔レーニン全集、ロシア語版、第二七卷、三六六頁〕

トロツキーのこの「永続的」暗黒とたとえば次のレーニンの言葉とを、どうして一致させることができるか？

「全くのところ、すべての大なる生産手段に對する國家權力、プロレタリアートの手中にある國家權力、このプロレタリアートと幾百萬の小農及び極小農との同盟、農民に對する指導をこのプロレタリアートのために確保すること等々——これらは、吾々がかつては小商人的であるとして輕蔑し、またある點から見れば、現在ネツプの下においてもかかるものとして輕蔑する權利を持つているところの協同組合から、然り、ひとり協同組合のみから出發して、完全な社會主義社會の建設を完成するために必要なすべてのもの、必要缺くべからざるすべてのものではなからうか？これはまだ社會主義社會建設の完成ではないが、しかしそれは、この建設を完成するために必要にして十分なすべてのものである」。〔レーニン全集、ロシア語版、第二七卷、三九二頁〕

そこには何等の一致點もないし、またあり得ないことは明かである。トロツキーの「永続革命」は、レーニンのプロレタリア革命理論の否定であり、そしてその反對に、レーニンのプロレタリア革命の理論は、「永続革命」の理論の否定である。

吾々の革命の力と能力とに對する確信の缺如、ロシアのプロレタリアートの力と能力とに對する確信の缺如、——これが「永續革命」論の基調である。

これまで普通には、農民運動の革命的可能性に對する確信の缺如という「永續革命」の理論のただ一面だけを指摘して來た。現在では公平を期するために、この一面をロシアのプロレタリアートの力と能力とに對する確信の缺如という、他の一面を以て補足することが必要である。

トロツキーの理論は、一國における、しかもおこなわれている一國における社會主義の勝利は、「西歐の主要諸國において」プロレタリア革命がまず勝利するのでなければ、不可能であるという、メンシエヴィズムのありきたりの理論と、どこが異なっているか？

本質的には何等異なるところはない。

これを疑う餘地はない。トロツキーの「永續革命」論は、メンシエヴィズムの一變種である。

最近吾々の出版物の中には、「永續革命」の理論を恰もレーニン主義と相合っているものとして擔ぎまわつてゐる腐りはた外交家共が輩出した。彼等は言う——勿論、この理論は一九〇五年には役に立たなかつた。だが、トロツキーの誤謬は彼が當時、一九〇五年には適用してはならなかつたものを、一九〇五年の情勢に適用させようと試みて、先走り過ぎたことである、と。また彼等は言う——だがその後、例えば革命が完全に成熟を遂げた一九一七年十月には、トロツキーの理論は全く當を得たものであつた、と。これらの外交家のうちの最も主要な人物がラデツクであることを、推測することは難くない。彼の言うところをきいて見よう——

「戦争は、土地の獲得と平和とを切望している農民と小ブルジョア諸黨との間に深い溝を掘つた。戦争は農民を労働者階級及びその前衛即ちボルシエヴィキ黨の指導下においた。労働者階級

と農民の獨裁ではなくて、農民に立脚する労働者階級の獨裁が可能となるにいたつた。一九〇五年にローザ・ルクセンブルグとトロツキーがレーニンに反對して持ち出したもの（即ち「永續革命」——イ・スターリン）は、實際には歴史的発展の第二の段階であつたのだ」。

これはどの言葉も牽強附會だ。

戦争の時に、「労働者階級と農民の獨裁ではなくて、農民に立脚する労働者階級の獨裁が可能となるにいたつた」というのは正しくない。實際には、一九一七年の二月革命は、ブルジョアジーの獨裁との特殊な交錯の下でプロレタリアートと農民の獨裁を實現したものであつた。

ラデツクが口にするのをはばかっている「永續革命」の理論を、ローザ・ルクセンブルグとトロツキーが一九〇五年に持ち出した、というのは正しくない。實際には、この理論はバルヴスとトロツキーによつて持ち出されたのである。十カ月を経た現在では、ラデツクは、「永續革命」の故にバルヴスを悪罵することが必要だと考えて、自分の言葉を訂正している。だが公平を期するなら、ラデツクはバルヴスの相棒たるトロツキーをも悪罵すべきなのだ。

一九〇五年の革命によつて放り出された「永續革命」が「歴史的発展の第二の段階」において、即ち十月革命の時には正しいものであつた、というのは正しくない。十月革命の全進行、その全發展は、「永續革命」の理論が完全に根據のないものであり、レーニン主義の原則と決して一致しないものであることを示したし、また證明したのである。

甘つたるい言葉と腐り果てた外交術とでは、「永續革命」の理論とレーニン主義との間に横たわつてゐる深淵を、おおいかくすことはできない。

三、十月革命の準備期におけるボルシェヴィキ 戦術の若干の特殊性について

十月革命の準備期におけるボルシェヴィキの戦術を理解するためには、少くともこの戦術の、特に重要な若干の特殊性を自ら會得することが必要である。このことは、ボルシェヴィキの戦術について書かれた数多いパンフレットの中で、特にこれらの特殊性が往々にして看過されているから、なおさら必要なのである。

それは如何なる特殊性であるか？

第一の特殊性。トロツキーの言うのをきくと、十月革命の準備史には、あとにもさきにもただ二つの時期、即ち偵察の時期と蜂起の時期とがあるだけであり、爾餘のことは、捏造された事だ、というように考えられる。だが一體一九一七年の四月デモは何であるか？「必要以上に「左」に行き過ぎた四月のデモは、大衆の氣持と大衆とソヴエト内の多数派との相互關係とを審査するための偵察的進撃であつた」。それならば、一九一七年の七月デモは何であるか？トロツキーの意見によれば、「本質上、問題は今度も運動の新しいヨリ高い段階においての、新しいヨリ廣汎な偵察に歸着した」。わが黨の要求に従つて行われた一九一七年の六月デモも、トロツキーの觀念から言つて、なお更「偵察」とよばなければならない事はいうまでもない。

こういうわけで、ボルシェヴィキは、既に一九一七年の三月に労働者と農民からなる、出来上つた政治的軍隊を有していたことになるのである。そしてもしボルシェヴィキが四月にも、六月にも、また七月にも、蜂起のためにこの軍隊を出動させずに、ただ「偵察」だけに従事させていたとすれ

ば、それは、「偵察で得た資料」が、當時有利な「報道」をもたらさなかつたからであり、ただその理由だけによるものであつたということになる。

わが黨の政治的戦術についてのこの單純化された觀念が、ありきたりの軍事的戦術とボルシェヴィキの革命的戦術との混同に外ならないことは、いうまでもない。

實際のところ、これらすべてのデモは先ず第一に、大衆の自然發生的壓力の結果であり、戦争に反對する大衆の憤激が、街頭に溢れ出た結果であつた。

實際のところ、黨の役割はこの場合、ボルシェヴィキの革命的スローガンの方針に沿つて、自然發生的に起つて來た大衆の進出に形を與え、これを指導することにあつた。

實際のところ、一九一七年三月にはボルシェヴィキは既成の政治的軍隊を持つていなかつたし、また持つこともできなかつた。ボルシェヴィキは、一九一七年の四月から十月に到るまでの、階級間の闘争と衝突の進行過程においてのみ、即ち四月のデモを通じて、また六月及び七月のデモを通じて、また區會及び全市會の選挙を通じて、またコルニロフ叛徒との闘争を通じて、さらにまたソヴェトの獲得を通じて、かような軍隊をつくつていつたのである（そして、遂に、一九一七年の十月に到つてこれをつくりあげたのである）。政治的軍隊は軍事上の軍隊と同一なものではない。軍統帥部は、既成の軍隊を持つていて、戦争を始めるのであるが、黨は闘争そのものの進行中において、階級間の衝突の進行中において、大衆自身が自らの經驗に基いて黨のスローガンの正しいこと、黨の政策の正しいことを確信するにいたるにつれて、自己の軍隊をつくつて行かねばならぬ。

勿論かかるデモは、それぞれ同時に、隠されている勢力關係をある程度に明みに出し、ある程度の偵察となつたのであるが、この場合、偵察はデモの動機ではなくて、むしろその自然の結果であつた。

十月蜂起前の諸事件を分析し、これを四月——七月の諸事件と比較して、レーニンはこう述べている——

「事情は實に四月二十日——二十一日、六月九日、七月三日以前のようではない。というのは、當時には自然發生的な興奮があつて、それを吾々は黨として、捉え得なかつたか（四月二十日）、もしくはこれを制止して平和的なデモという形を與えた（六月九日及び七月三日）からである。というのは、當時、諸ソヴエトがまだ、吾々のものではないこと、農民がまだ、リーベル・ダシ・チエルノフ一派の方途を信じて、ボルシエヴィキの方途（蜂起）を信じていないこと、従つて、人民の大多数が吾々の背後にはあり得ないこと、従つてまだ蜂起は早すぎるということを、吾々はよく知つていたからである」。（レーニン全集、ロシア語版、第二一卷、三四五頁）

「偵察」だけでは、十分な結果が得られないことは明かである。

問題は明かに、「偵察」にあるのではなくて、次の諸點にあるのだ——

(一) 黨は十月革命の全準備期を通じ、その闘争において終始一貫、大衆的革命運動の自然發生的の高揚に立脚して來た。

(二) 黨は自然發生的の高揚に立脚しながら、運動に對する單獨不可分の指導を自己の手に確保していた。

(三) 運動に對するかような指導は、黨が十月蜂起のために、大衆的な政治的軍隊をつくりあげること容易ならしめた。

(四) かような政策は、十月革命の全準備が一つの黨、即ちボルシエヴィキ黨の指導の下に行われる結果に導かざるを得なかつた。

(五)十月革命のかような準備は、十月蜂起の結果として、今度はまた、権力が一つの黨、即ちブルシエヴィキ黨の手に歸したということに導いた。

かくして、十月革命の準備の主要な點として一つの黨、即ち共產主義者の黨が單獨不可分的に指導したこと——これが十月革命の性格的特徴であり、これが十月革命の準備期におけるブルシエヴィキ戰術の第一の特殊性である。

ブルシエヴィキ戰術のこの特殊性なしには、帝國主義の情勢下におけるプロレタリアートの獨裁の勝利は、不可能であつたであろうといふことは、おそらく證明する必要があるまい。

十月革命は、この有利な點において、フランスにおける一八七一年の革命、即ち、いずれも共產黨と呼ぶことのできない二つの黨が、革命の指導を互に分けあつて行つた革命と異なつてゐるのである。

第二の特殊性。かくして十月革命の準備は、一つの黨、即ちブルシエヴィキ黨の指導の下に行われた。だが、この指導は黨によつて如何に遂行され、またいかなる方針によつて行われたか？ この指導は、革命の決戦期における最も危険なグループとして、協調的な諸黨を孤立させる方針によつて、即ちエス・エルとメンシエヴィキを孤立させる方針によつて行われた。

レーニン主義の基本的な戰略的基準は何であるか？

それは、次の諸點を認めることである——

(一)まさに來たらんとする革命的決戦期における、最も危険な、革命の敵の社會的支柱は、協調的な諸黨である。

(二)これらの諸黨を孤立させずに、敵（ツァー制またはブルジョアジー）を打倒することは不可能である。

(三) 以上のことから見て、革命の準備期における主要砲火は、これらの黨を孤立させ、廣汎な勤勞大衆をこれらの黨から切り離す點にむけられなければならない。

ツアー制との闘争期、即ちブルジョア民主主義革命の準備期（一九〇五年——一九一六年）における、最も危険なツアー制の社會的支柱は、自由主義的・君主主義的黨、即ちカデットの黨であつた。何故か？ なせならば、この黨は協調的黨であり、ツアー制と人民の大多數、即ち全體としての農民との間の協調をはかる黨であつたからである。當時、黨が主要打撃をカデットにむけたのは當然なことである。というのは、カデットを孤立させずには、農民とツアー制との間が決裂することを期待することは不可能であつたからであり、この決裂を保障しなければ、革命の勝利を期待することが不可能であつたからである。その當時、多くの人はボルシエヴィキ戰略のこの特殊性を理解せず、ボルシエヴィキはカデットに對する闘争で、主要敵即ちツアー制に對する闘争を「おおいかくしている」と斷言し、過度の「カデット憎悪病」としてボルシエヴィキを非難した。だが、これらの非難はまったく根據のないものであつて、主要な敵に對する勝利を容易ならしめ、早めるために、協調的黨の孤立化を要求するボルシエヴィキの戰略に對する、完全な無理解を確證するものであつた。

かような戰略なしには、ブルジョア民主主義革命におけるプロレタリアートのヘゲモニーは不可能であつたであらうということは、おそらく證明する必要があるまい。

十月革命の準備期には、相闘争する諸勢力の重心は、新しい場面に移された。ツアーはなくなつた。カデットの黨は、協調的な勢力から統治勢力に、帝國主義の支配勢力に轉化した。闘争は、もはやツアー制と人民との間にはなくて、ブルジョアジーとプロレタリアートとの間に行われた。この時期には、最も危険な、帝國主義の社會的支柱は、小ブルジョア民主主義黨、即ちエス・エルの黨と

メンシエヴィキの黨とであつた。何故か？ なせならば、これらの黨は當時協調的な黨、帝國主義と勤勞大衆との間の協調をはかる黨であつたからである。ボルシエヴィキの主要打撃が、その當時、これらの黨にむけられていたのは當然なことであつた。というのは、これらの黨を孤立させずには、勤勞大衆と帝國主義との間が決裂すること、を期待することは不可能であつたからであり、この決裂が保障されずには、ソヴェト革命の勝利を期待することは不可能であつたからである。その當時多くの人は、ボルシエヴィキ戰術のこの特殊性を理解せず、エス・エルとメンシエヴィキに對する「過度の憎惡」と、ボルシエヴィキが主要目標を「忘れてゐる」ということとによつてボルシエヴィキを非難した。だが十月革命の全準備期間は、ボルシエヴィキが、ただかかる戰術によつてのみ十月革命の勝利を保障し得たことを、雄辯に物語つてゐるのである。

この時期の性格的特徴は、勤勞農民大衆が一層革命化し、彼等がエス・エルの黨及びメンシエヴィキの黨に失望し、これらの黨から離れて、國を平和に導くことができ、最後まで革命的である唯一の力たる、プロレタリアートの周圍に直接結集する方向に轉換したことであつた。この時期の歴史は、一方ではエス・エルとメンシエヴィキが、他方ではボルシエヴィキが、勤勞農民大衆をめざし、これらの大衆獲得をめざした鬭争の歴史である。連立政府の時期、即ちケレンスキ―政權の時期、地主の土地沒收に對するエス・エル及びメンシエヴィキの拒否、戰爭繼續のためのエス・エル及びメンシエヴィキの鬭争、六月に戰線で行われた攻勢、兵卒に對する死刑、コルニロフの叛亂が、この鬭争の運命を決した。そしてこれらは、この鬭争の運命を、専らボルシエヴィキの戰略に有利なように決定した。なせならば、エス・エルとメンシエヴィキとを孤立させることなしには、帝國主義者の政府を打倒することは不可能であつたからであり、またこの政府を打倒せずには、戰爭から脱出すること

は不可能であつたからである。エス・エルとメンシエヴィキを孤立させる政策は、唯一の正しい政策であつたのである。

かくして、十月革命の準備事業を指導する基本的方針として、メンシエヴィキの黨とエス・エルの黨を孤立させること——これがボルシエヴィキ戦術の第二の特殊性である。

ボルシエヴィキ戦術のこの特殊性がなかつたならば、労働者階級と勤勞農民大衆との同盟は、空中樓閣に終つたであらうといふことは、おそらく證明する必要があるまい。

ボルシエヴィキ戦術のこの特殊性について、トロツキーが、自著「十月革命の教訓」の中で一言も述べず、もしくは殆ど言及していないのは、特徴的である。

第三の特殊性。十月革命の準備事業に對する黨の指導は、かくして、エス・エルの黨とメンシエヴィキの黨とを孤立させる方針によつて、労働者及び農民の廣汎な大衆をこれらの黨から切り離す方針によつて行われた。だが、この孤立化は具體的にはいかなる形態で、いかなるスローガンの下に、黨によつて實現されたか？ それは、ソヴエト權力のための大衆の革命運動の形態で、「すべて權力をソヴエトへ！」というスローガンの下に、ソヴエトを大衆動員の機關から、蜂起の機關に、權力の機關に、新しいプロレタリア國家の機關に轉化するための闘争によつて實現された。

何故ボルシエヴィキは、メンシエヴィキとエス・エルを孤立させることを容易ならしめ、プロレタリア革命の大業を前進させることができ、また幾百万の勤勞大衆をプロレタリアートの獨裁の勝利まで導いて行く使命を持った基本的な組織上の槓杆として、特にソヴエトをつかんだのであるか？

ソヴエトとは何であるか？

早くも、一九二七年九月、レーニンはこう語つてゐる——

「ソヴェトは、第一に、労働者と農民との武装力を提供するところの新しい國家機關である。しかもこの武装力は、舊常備軍の勢力のように、人民から切り離されているのではなく、最も緊密に人民と結合しているのである。軍事的には、この勢力は從來のものに比して、比較にならぬほど強力であり、革命的であるという點では、この勢力は他のいかなるものによつても代えられないものである。第二に、この機關は、從來の國家機關においてはこれと同様なことは全く想像もつかない程緊密な、引き離し難い、容易に點檢されかつ更新され得るような、大衆との人民の大多數との運けいを得させる。第三に、この機關は、その構成員が何等の官僚主義的形式によらず、人民の意志によつて選舉され、また罷免されるといふ點で、從來の機關よりも遙に民主主義的である。第四に、それは極めて多種多様の職業との鞏固な運けいを得させ、これによつて、官僚なしに最も深刻な性質の、種々様々の改革を容易ならしめる。第五に、それは前衛、即ち被壓迫階級、労働者及び農民の最も自覺した、最も精力的な、先進的な部分に組織形態を與え、かくして、これを用いて、被壓迫階級の前衛が、これまで全く政治生活の圏外に、歴史の圏外に立っていた被壓迫階級の巨大な全大衆を奮起させ、教育し、訓練し、指導し得るところの機關である。第六には、それは議會制度の長所を、直接真正デモクラシーの諸長所と結合する可能性、即ち選舉された人民の代表者によつて、立法機能をも、法の執行をも結合する可能性を與える。ブルジョア議會制度と比較するならば、これはデモクラシーの發展上、全世界的・歴史的意義を持つような一步前進である……」

もし革命的階級の人民的創造力がソヴェトを創立しなかつたならば、プロレタリア革命はロシアにおいては望みのないことであつたであらう。何故ならば、舊い機關を以つてしては、ブ

ロレタリアートは、疑いもなく、権力を持ちこたえることはできなかつたであろうし、しかも新しい機關を一舉に創造することは不可能なことだからである」。〔レーニン全集、ロシア語版、第二一卷、二五八——二五九頁〕

だからこそ、ボルシエヴィキは、十月革命を組織すること、並にプロレタリア國家の新しい、強力な機關を創造することを容易ならしめ得る組織上の主要な一環として、ソヴェトをつかんだのであつた。

「すべての権力をソヴェトへ」というスローガンは、その内的發展の見地から見れば、二つの段階、即ち第一段階（ボルシエヴィキの七月の敗北まで、即ち二重政權の時期）と、第二段階（コロニロフ叛亂の敗北後）とを經過した。

第一の段階においては、このスローガンはメンシエヴィキ及びエス・エルとカデットとのプロツクの決裂、メンシエヴィキ及びエス・エルからなるソヴェト政府の形成（というのは、ソヴェトは當時エス・エルメンシエヴィキ的であつたからである）、反政府黨にとつての（即ちボルシエヴィキにとつての）自由に煽動する權利及びソヴェト内部における諸黨の自由な闘争——即ちボルシエヴィキは、かかる闘争によつてソヴェトを獲得し、革命の平和的な發展のうちにソヴェト政府の構成を變え得るであろうということを豫想して——を意味していた。勿論この計畫はプロレタリアートの獨裁を意味してはなかつた。だがそれは、疑いもなく獨裁を保障するために必要な諸條件を準備することを容易ならしめた。なせならば、この計畫は、メンシエヴィキとエス・エルを権力につかせ、彼等にその反革命的政綱を實際に遂行することを餘儀なくさせて、これらの黨の本性の暴露を促進し、彼等の孤立化、彼等の大衆からの切り離しを促進したからである。しかしながら、ボルシエヴ

イキの七月の敗北は、軍部・カデットの反革命を優勢ならしめ、エス・エルとメンシエヴィキを反革命の抱擁の中に投せしめて、この發展を中斷させた。この事情が、黨をして革命の新たな高揚という情勢の下において再びまた掲げるために、「すべての權力をソヴェトへ！」というスローガンを、一時、日程から取りさげること餘儀なくさせたのである。

コルニロフ叛亂の敗北は、第二の段階の始まりであつた。「すべての權力をソヴェトへ！」というスローガンは、再び日程にのぼされた。だが今やこのスローガンは、第一の段階において意味してゐたものをはや意味してはなかつた。その内容は根本的に變化した。今やこのスローガンは、帝國主義との完全な決裂とボルシエヴィキへの權力の移行とを意味してゐた。なせならば、ソヴェトはその大多數がもはやボルシエヴィキ的であつたからである。今やこのスローガンは、蜂起によつてまづすぐにプロレタリアートの獨裁にむかつて革命が進むべきことを意味するにいたつた。そのみならず、今やこのスローガンはプロレタリアートの獨裁を組織し、これを國家として形態づけることを意味するにいたつた。

ソヴェトを國家權力の機關に轉化させるという戰術の評価がたいほど重大な意義は、この戰術が幾百万の勤勞大衆を帝國主義から切り離し、メンシエヴィキの黨とエス・エルの黨を帝國主義の手先として暴露し、これら勤勞大衆をいわば直通輸送によつて、プロレタリアートの獨裁に導いて行つた點にあつた。

このようにして、協動的諸黨の孤立化とプロレタリアートの獨裁の勝利のためとの最も重要な條件として、ソヴェトを國家權力の機關に轉化させる政策、——これが十月革命の準備期におけるボルシエヴィキ戰術の第三の特殊性である。

第四の特殊性。ボルシエヴィキは、如何にしてまた何故に、その黨のスローガンを、革命を前進させるどころの、幾百万の大衆のためのスローガンによく轉化させ得たか、ボルシエヴィキは、いかにしてまた何故に、前衛のみではなく、また労働者階級の大多數のみではなく、人民の大多數にも、ボルシエヴィキの政策の正しいことを確信させ得たか？——吾々がこの問題を取扱わないならば、問題の全貌を明かにし盡したものはなりえないであろう。

革命が勝利するためには、そして、この革命が幾百万の大衆をとらえている眞の人民革命であるならば、ただ黨のスローガンが正しいというだけでは不十分だということ、これが肝心な點である。革命が勝利するためには、なおもう一つの必要な條件がなければならぬ。即ち大衆自身が、自身自身の經驗によつて、これらのスローガンの正しいことを確信することである。そこではじめて、黨のスローガンは大衆自身のスローガンとなる。そこではじめて、革命は眞に人民革命となる。十月革命の準備期におけるボルシエヴィキ戦術の特殊性の一つは、この戦術が、大衆を黨のスローガンに、いわば革命の戸口そのものに、當然導いてくる道と轉換とを、正しく決定することを心得ており、かようにして、大衆が自分自身の經驗によつて、これらのスローガンの正しいことを感じ、點檢し、悟ることを容易ならしめたことにある。言いかえれば、ボルシエヴィキの戦術の特殊性の一つは、この戦術が、黨に對する指導と大衆に對する指導とを混同せず、第一種の指導と第二種の指導との差を明らかに認めており、かくして、それが、黨を指導する科學であるばかりでなく、幾百万の勤勞大衆を指導する科學でもあるということにある。

ボルシエヴィキ戦術のこの特殊性の現われの明白な例は、憲法制定會議の召集とその解散とに關連する經驗である。

ボルシェヴィキが既に一九一七年四月にソヴェト共和國のスローガンに掲げたのは、周知のことである。憲法制定會議が、ソヴェト共和國の原則と根本的に矛盾對立するブルジョア議會であることも、また周知のところである。ソヴェト共和國を目指して進みながら、それと同時に、ボルシェヴィキが臨時政府から憲法制定會議の即時召集を要求したというようなことは、どうして起り得たか？

ボルシェヴィキが選舉に参加したばかりでなく、自ら憲法制定會議を召集したというようなことは、どうして起り得たか？　ボルシェヴィキが蜂起の一カ月前、舊いものから新しいものへの推移に當つて、ソヴェト共和國と憲法制定會議との一時的組合せの可能性を認容したというようなことは、どうして起り得たか？

それは次のような理由から「起つた」――

(一) 憲法制定會議という理念は、廣汎な人民大衆の間でもつとも人氣あるものの一つであつた。

(二) 憲法制定會議即時召集のスローガンは、臨時政府の反革命的本性の暴露を容易ならしめた。

(三) 憲法制定會議の理念に對する信用を、人民大衆の面前で失墜させるためには、これらの大衆を、土地、平和、ソヴェト權力についての彼等の要求をもつて、憲法制定會議と壁一重のところまで導いて行き、こうして彼等を眞實の、目の前にある憲法制定會議と衝突させることが必要であつた。

(四) かようにしてのみ、大衆をして自らの經驗によつて、憲法制定會議の反革命性と、これをぶつつぶす必要とを納得し易くすることができた。

(五)すべてこれらのことは、憲法制定會議を抹殺する手段の一つとして、ソヴェト共和國と憲法制定會議との一時的組合せを認容する可能性を、當然豫想していたのである。

(六)かかる組合せは、もしすべての権力がソヴェトに移行するという條件の下で、それが實現されたのであれば、ソヴェトへの憲法制定會議の從屬とソヴェトの附屬物へのその轉化と苦痛なきその消滅とを意味し得たに過ぎないものであつた。

ボルシエヴィキのかかる政策なしには、憲法制定會議をぶつつぶすことは、あれほどまで圓滑に行われなかつたであらうし、「すべての権力を憲法制定會議へ！」というスローガンの下になされたエス・エルとメンシエヴィキのその後の進出が、あれほど見事に失敗しなかつたであらうといふことは、おそらく證明する必要があるまい。

レーニンは言っている——

「吾々は一九一七年の九月——十一月において、ロシアのブルジョア議會、即ち憲法制定會議の選舉に参加した。吾々の戦術は正しかつたか、それとも正しくなかつたか？……吾々ロシアのボルシエヴィキは一九一七年の九月——十一月において、ロシアでは、議會制度がすでに政治的に死滅したと見なす權利を、西歐のどんな共産主義者よりもヨリ多く持つてはいなかつたか？勿論持つていた。なせならば、ブルジョア議會が、ずつと前からあつたか、或はつい最近からのものであるかどうかが問題なのではなくて、廣汎な勤勞大衆がソヴェト制度を採用し、ブルジョア民主主義的議會をぶつつぶすこと（若しくはぶつつぶすことを許すこと）に、とれだけの用意がすでにあつたか、（思想的に、政治的に、實踐的に）が問題であるからである。ロシアにおいて一九一七年の九月——十一月に都市の勞働者階級、兵士及び農民が、幾多の特殊の條件によつて、ソ

ヴェト制度を採用し、最も民主主義的なブルジョア議會をぶつつぶすために、珍らしいほどよく準備されていたこと、——このことは全く論争の餘地なき、確固たる歴史的事實である。そしてそれにもかかわらず、ボルシエヴィキは憲法制定會議をボイコットせず、プロレタリアートが政治權力を獲得する前にも、またその後にも、選挙に参加したのであつた」。 (レーニン全集、ロシア語版、第二五卷、二〇一—二〇二頁)

では、何故ボルシエヴィキは憲法制定會議をボイコットしなかつたか？ レーニンは次のように言つている——

なせならば「ソヴェト共和國の勝利の數週間前においてさえ、またかかる勝利の後においてさえ、ブルジョア民主主義的議會に参加することは、革命的プロレタリアートにとつて害にならぬばかりか、何故にかかる議會はぶつつぶされるに相當しているかを、おくれた大衆に實證すること、これをプロレタリアートに容易ならしめ、これら議會を成功裡にぶつつぶすことを容易ならしめ、ブルジョア議會制度を「政治的に抹殺すること」を容易ならしめる」(前掲書参照)からである。トロツキーがボルシエヴィキ戰術のこの特殊性を理解しないで、憲法制定會議をソヴェトと組合わせる「理論」をヒルファードイング主義であると嘲笑しているのは、特徴的なことである。

蜂起のスローガンが掲げられ、ソヴェトがたぶん勝利するであろうという場合に、憲法制定會議の召集と結びつけられた、かような組合せを許容することは、ソヴェトを憲法制定會議の附屬物に轉化させるヒルファードイングの戰術と何等の共通點もないところの、唯一の革命的戰術であること、また、この問題における若干の同志の誤謬は、一定の條件の下において、「組合された國家の型」に關するレーニンと黨との、完全に正しい見地を誹謗する根據を彼トロツキーに與えるものでないこと

を、彼は理解しないのである。(レーニン全集、ロシア語版、第二一卷、三三八頁を比較せよ)

憲法制定會議と關連してとられたボルシェヴィキの獨特な政策なしにはボルシェヴィキは幾百万の人民大衆を自己の味方に獲得することができなかつたであろうということ、この大衆を獲得せず、ボルシェヴィキは十月蜂起を深刻な人民革命に轉化することをなし得なかつたであろうということ、トロツキーは理解しないのである。

トロツキーがボルシェヴィキの諸論文の中で出會う「人民」、「革命的デモクラシー」等々の言葉さえ、マルクス主義者の體面を汚すものだとみなして、嘲笑しているのは、注意すべきである。

トロツキーは、レーニン、即ちこの疑いもないマルクス主義者が、プロレタリアト獨裁の勝利の一カ月前の一九一七年九月においてさえ、「革命的プロレタリアトによつて率いられている革命的デモクラシーの手に、全權力が即時移行することが必要である」と書いたことを、たぶん忘れてるのである。(レーニン全集、ロシア語版、第二一卷、一九八頁)

トロツキーは、レーニン、即ちこの疑いもないマルクス主義者が、官僚・軍事的國家機關をぶちこわすことは、ヨーロッパ大陸におけるあらゆる眞の人民革命の前提條件であるということについて書いている、クーゲルマン宛て(一八七一年四月)のマルクスの有名な手紙を引用しつつ、一點の疑いもなくはつきりと次の文句を書いている事を、たぶん忘れてるのである。

「官僚・軍事的國家機構の破壊が、「あらゆる眞の人民革命の前提條件」であるというマルクスのこの上もなく深遠なる指摘は、特別の注目に値する。「人民」革命というこの概念は、マルクスの口から出たものとしては不思議に見える。そしてロシアのブレハーノフ派とメンシエヴィキ、即ちマルクス主義者と見なされたいと望んでいるこれらストルーヴェの追隨者等は、おそ

らくマルクスのかかる表現を「失言」であるというかも知れぬ。彼等は、マルクス主義をブルジョア革命とプロレタリア革命の對置、しかも彼等によつて極端に生氣のないものに理解されている對置以外には、彼等にとつて何物も存在しないような、全く慘めな自由主義的な曲解されたものにしてしまつたのである……

一八七一年のヨーロッパ大陸では、ただの一國にも、プロレタリアートは人民の大多數を形成してはなかつた。眞に大多數を運動に引きこむところの「人民」革命は、それがプロレタリアートを農民をも包括することによつてのみ、かかる「人民」革命たり得たのである。實にこの二つの階級が、當時「人民」を構成していた。この二つの階級は、「官僚・軍事的國家機構」が彼等を抑壓し、壓迫し、搾取することによつて、結合されている。この機構を打ち破り、これを打ちこわすこと——これが「人民」の、「人民」の大多數の、即ち労働者と農民の大多數との眞實の利益であり、これが貧農とプロレタリアートとの自由な同盟の「前提條件」であり、かつかうな同盟なしには、デモクラシーはもういものであり、社會主義的改造は不可能である」。(レーニン全集、ロシア語版、第二一卷、三九五——三九六頁)

レーニンのこれらの言葉を忘れてはならぬ。かくして、幾百萬の勤勞大衆を黨の側に獲得するための最も重要な條件として、これらの大衆を革命的立場に導くことによつて黨のスローガンの正しいことを、大衆自身の經驗に基いて彼等に納得させ得る手腕を有していたこと——これが十月革命の準備期におけるボルシェヴィキの戰術の第四の特殊性である。

この戰術の特徴的な諸點を會得するためには、以上に述べたことで全く十分だと私は考える。

四、世界革命の端緒および前提としての十月革命

ヨーロッパの基本的な諸國において、同時に革命が勝利するという一般概念的な理論、一國における社會主義の勝利は不可能であるとす理論が作爲的な、生命力のない理論であつたことは疑いのないところである。ロシアにおけるプロレタリア革命の七カ年の歴史は、この理論を支持せずに、これを反駁している。この理論は明白な事實と矛盾しているが故に、世界革命の發展の計畫案として受け容れられ得ないばかりではない。それのみか、この理論はスローガンとしてはなお一層、受け容れられ得ないものである。なせならば、それはある一定の歴史的條件によつて、資本戦線を獨自的に突破する可能性を得ている個々の國の發意性を束縛して、これを自由に發展させないからであり、またそれは、個々の國を奮い起たせて資本に對する積極的襲撃へ向わしめる代りに「大詰め」の時機を、消極的に待つてゐる態度を取らせるからであり、またそれは、個々の國のプロレタリアの間に革命的決意の精神を養わずに、「だが萬一、他の者が援助しなかつたら？」というハムレット流の懷疑的精神を培養するからである。レーニンが一國におけるプロレタリアートの勝利は「典型的な場合」であつて、「幾多の國に同時に革命が起るといふこと」は、ただ「稀な例外」たり得ると言つたのは全く正しい。(レーニン全集、ロシア語版、第二三卷、三五四頁)

だがレーニンの革命理論は周知の如く、ただ問題のこの一側面にのみ限られてはいない。それは、それと同時に世界革命の發展についての理論である*。一國における社會主義の勝利といふこと

*「レーニン主義の基礎」参照。——イ・スタヴリン

は、自主的な任務ではない。勝利した國の革命は、自立的なものとして自己を見なすべきではなく、すべての國々におけるプロレタリアートの勝利を促進するための援助として、手段として見なさなければならぬ。というのは、一國における革命の勝利、現在の場合ではロシアにおける革命の勝利は、帝國主義の不均等な發展と日増に増大する頽廢との産物たるのみではないからである。それはまたそれと同時に世界革命の端緒であり、前提だからである。

世界革命の發展の道が、以前、一國における革命の勝利前に、「社會主義革命の前夜」であるところの發展した帝國主義の出現前に見られたような簡單なものでないことは、疑いのないことである。なせならば、軍事的衝突の不可避なこと、資本世界戦線が全般的によわまり、個々の國において社會主義の勝利が可能であることを物語っているところの、發展した帝國主義の諸條件の下に作用している資本主義諸國の不均等な發展の法則というような、新しい要因が現れたからである。なせならば、西歐と東洋との中間に、世界の金融的搾取の中心と植民地的抑壓の舞台との間に、横たわっており、それが存在しているということだけで全世界を革命化しているところの巨大なソヴェト國のような、新しい要因が現れたからである。

すべてこれらのことは、世界革命の道程を研究するに當つて、考慮せざるを得ないような要因である（私はそれほど重要でない他の諸要因については述べない）。

従來、革命は社會主義の諸要素が均等に「成熟する」ことによつて、何よりも先ず一層よく發達した國々において、「先進的な」國々において發展するものと通常考えられていた。だが今日ではこの考え方は、本質的な變更を必要としているのである。

レーニンと言つてゐる——

「國際關係の體系は今や、ヨーロッパにおいて一つの國家が、戰勝國たる諸國家によつて奴隸化されているという有様になつてゐる。その國家とはドイツである。それから、多くの國家、しかも西歐における最も古い諸國家は、戰勝によつて、自國の被壓迫階級に幾多の重要でない讓歩——しかしして、いすれにしてもこれらの國における革命運動を遅延させ、「社會平和」に幾分似せたものをつくり出す讓歩——をするために、この勝利を利用し得るような條件に置かれた」。

「それと同時に、多くの國々、即ち東洋、印度、中國等々は、特に最近の帝國主義戰爭のため、その正常な生活様式を完全に破壊されてしまつた。これらの國の發展は、ヨーロッパに共通な資本主義的尺度に沿つて行われるように、完全にむきをかえた。これらの國々において、全ヨーロッパ的な動搖が始まつた。そしてこれらの國が、全世界資本主義全體の危機に導かざるを得ないような發展の中に引きこまれたことは、今や全世界にとつて明かである」。

そのために、またこれと關連して、「西歐の資本主義諸國は、社會主義への自己の發展を完成するであろう。吾々が従來期待してゐたようにはないが、これを完成するであろう。これらの國は、これらの國における社會主義の均等な「成熟」によつてではなく、或る諸國家による他の諸國家の擯取によつて、全東洋の擯取と結びつけられた帝國主義戰爭で敗北した國家の中の第一の國家の擯取によつて、社會主義への發展を完成しつつある。しかるに他方東洋は、正にこの第一次帝國主義戰爭によつて、終局的に革命運動の中に入り込み、終局的に全世界革命運動の全般的な渦卷の中に引きこまれた」。 (レーニン全集、ロシア語版、第二七卷、四一五——四一六頁)

もしこれに、戦敗諸國及び植民地が戦勝せる國々によつて搾取されるばかりでなく、戦勝國の一部分もまた、最も強力な戦勝國、即ちアメリカとイギリスの金融資本による搾取の圈内に陥つてゐるという事實、これらすべての國々の間の矛盾は、世界帝國主義の崩壊にとつて極めて重要な要因であるという事實、これらの矛盾のほかになお、これら各國內に極めて深刻な諸矛盾が存在し發展しているという事實、すべてこれらの矛盾は、これらの國と並んで偉大なソヴェト共和國が存在している事實によつて、更に深刻となり尖鋭化されているという事實をつけ加えるならば、すべてこれらのことを考慮するならば、國際情勢の特殊な様相は多少とも完全なものとなるだろう。

何よりもありそうなことは、多くの新しい國が、これらの國のプロレタリアに對する帝國主義諸國家のプロレタリアートの支持の下に、革命的方法で帝國主義諸國家の體系から離脱することによつて、世界革命が發展するであろうということである。吾々は最初に離脱した國、最初に勝利した國が、他の諸國の労働者及び勤勞大衆からすでに支持されているのを見ている。この支持なくしてはこの國は持ち堪え得なかつたであろう。この支持が強くなり、成長増大するであろうということは、疑いのないことである。しかしてまた、世界革命の發展そのものは、多くの新しい國が帝國主義から離脱する過程そのものは、最初に勝利した國において社會主義が強化されることが根本的であればあるほど、また、その國が世界革命の一層の展開の基礎に、帝國主義の崩壊を一層促進させる手段に、轉化されることが早ければ早いほど、それだけ早く、またそれだけ根本的に、行われるであろうということも、また疑いのないことである。

もし最初に自己の解放をなした國における社會主義の終局的な勝利は、若干の國のプロレタリアの共同の努力なくしては不可能であるという命題が正しいとすれば、すべての爾餘の國の労働者

及び勤勞大衆に對する最初の社會主義國の援助が、有効なものであればあるほど、世界革命はそれだけ早く、それだけ根本的に、展開するであろうということも、同じ程度に正しいのである。

この援助はどういうことで表現されなければならぬか？

それは第一に、勝利した國が「すべての國における革命を發展させ、支持し、奮起させるために、一國において實行可能な最大限を遂行する」ことによつて表現されなければならぬ。(レイトニン全集、ロシア語版、第二三卷、三八五頁)

それは第二に、一國において「勝利したプロレタリアートは、資本家を收奪し、自國において社會主義的生産を組織して、……他の諸國の被壓迫階級を自分の味方に引きつけ、これらの國で資本家に反對する蜂起を起し、必要な場合には、諸搾取階級と彼等の國家に對して武力に訴えてさえ進出して、爾餘の、資本主義世界に對抗して、起ち上るであろう」ということによつて表現されなければならぬ。(レイトニン全集、第一八卷、二三二—二三三頁)

勝利した國の側からのこの援助を性格づける特徴は、この援助が、他の國のプロレタリアの勝利を早めるといふことのみでなく、この勝利を容易ならしめ、それによつて最初に勝利した國の社會主義の終局的な勝利を保障するといふことにもあるのである。

何よりもありそうなのは、世界革命發展の過程において、個々の資本主義國內の帝國主義の根源地並に全世界におけるこれら諸國の體制と並んで、個々のソヴェト國內の社會主義の根源地と全世界におけるこれらの根源地の體制がつくられ、そしてこれら兩體制間の闘争が、世界革命展開の歴史を満すであろうということである。

レーニンは言っている――

なせならば、「社會主義の下における諸民族の自由な結合は、おくれた諸國家に對する社會主義的共和國の多少とも長期に亘るかつ頑強な鬭争なくしては不可能だからである」。〔前掲書參照〕

十月革命の世界的意義は、それが帝國主義的體制を突破することにおける一國の偉大な發端であり、帝國主義國の大洋中における社會主義の最初の根源地であるという點にあるばかりでなく、それが世界革命の第一の段階であり、その一層の展開の強力な根據地をなしているという點にもある。

それ故に、十月革命の國際的性質を忘却して一國における革命の勝利を純然たる民族的の現象だとなし、單に民族的な現象に過ぎないと宣言するもののみがまちがっているのではない。十月革命の國際的性質を念頭に置きながら、この革命を何か消極的な、ひたすら外部からの支援を受けとるだけの運命をもつたもののように見なしがちな人々もまた、まちがっているのである。實際には、ひとり十月革命だけが、他國の革命からの支持を必要としているばかりでなく、これらの國の革命も、世界帝國主義打倒の大業を促進させ、これを前進させるために、十月革命の側からの支援を必要としているのである。

一九二四年十二月十七日

レーニン主義の諸問題について

ソ同盟共産黨（ボルシエヴィキ）

レーニングラード組織にささぐ

イ・スターリン

一、レーニン主義の定義

パンフレット「レーニン主義の基礎」の中には、周知のレーニン主義の定義が與えられているが、その定義は、一般の承認を得ているようである。その定義は、こうである――

「レーニン主義は、帝國主義およびプロレタリア革命時代のマルクス主義である。もつと正確にいうならば、レーニン主義とは、一般的にはプロレタリア革命の理論と戦術であり、特殊的にはプロレタリアート獨裁の理論と戦術である」。

この定義は正しいであろうか？

私は正しいと考える。第一に、この定義はレーニン主義は帝國主義戦争後に生じたと不正當に考えている或るレーニンの批判者達とは反對に、レーニン主義を帝國主義時代のマルクス主義として性格すけて、レーニン主義の歴史的根源を正しく指示しているが故に、正しいのである。第二に、

この定義はレーニン主義をただ民族的・ロシア的事情の下においてのみ、適用し得るものであると考えている社会民主党とは反対に、レーニン主義の國際的性質を正しく強調しているが故に、正しいのである。第三に、この定義は、レーニン主義はマルクス主義の一層の發展ではなく、ただマルクス主義の復活であり、それをロシアの實情へ適用させたものに過ぎぬと考えている或るレーニン主義の批判者達とは反対に、レーニン主義を帝國主義時代のマルクス主義として性格すけて、レーニン主義とマルクスの教義との有機的關連を正しく強調しているが故に、正しいのである。

以上のことすべては、特別の註解を必要としないようである。

ところが、わが黨内には、レーニン主義をこれと少しちがつたふうに定義する必要があると考えている人達がいるのである。例えば、ジノヴィエフはこう考えている——

「レーニン主義とは、帝國主義戰爭時代、農民が多數を占めている國で直接始まつた世界革命時代におけるマルクス主義である」。

ジノヴィエフが傍點を附して強調している言葉は、何を意味し得るであろうか？ レーニン主義の定義の中にロシアの遅れていること、ロシアの農民的性格をもち込むことは、何を意味するのであるか？

それは、レーニン主義を國際的なプロレタリア的教義から、ロシア獨特の産物に轉化せんとすることを意味する。

それは、レーニン主義が資本主義的に一層よく發展した他の諸國にとって役に立つものであることを否定しているパウエルとカウツキーを助けることを意味する。

農民問題がロシアにとつて極めて重要な意義をもっていること、わが國が農民國であることは、いうまでもない。だが、この事實は、レーニン主義の基礎の性格すけにとつて如何なる意義を持ち得るであろうか？ レーニン主義は、ただロシアの土壤の上で、ただロシアのためにのみ作り上げられたのであつて、帝國主義の土壤の上で、また一般に帝國主義諸國のために作り上げられたのではないのであろうか？ 「資本主義の最高段階としての帝國主義」、「國家と革命」、「プロレタリア革命と變節者カウツキー」、「共產主義における「左翼」小兒病」等々の如きレーニンの著作は、ただロシアにとつてのみ意義を有し、一般にすべての帝國主義國にとつては意義を有しないのであろうか？ レーニン主義は、すべての國の革命運動の經驗の總括ではないのであろうか？ レーニン主義の理論と戰術との原則は、すべての國のプロレタリア黨にとつて役に立つものであり、必要缺くべからざるものではないだろうか？ 「ボルシェヴィズムはすべての國にとつて、戰術の模範として役立つ。」（レーニン全集、ロシア語版、第二三卷、三八六頁參照）といつたレーニンは、正しくはなかつたであらうか？ 「ソヴェト權力並にボルシェヴィキの理論と戰術の原則の國際的意義。」（レーニン全集、ロシア語版、第二五卷、一七一—一七二頁）について語つたレーニンは正しくはなかつたであらうか？ 例えはレーニンの次の言葉は、正しくはないだろうか？

「ロシアにおいては、プロレタリアートの獨裁は、わが國が非常におくれていることと、わが國の小ブルジョア性とのために、先進諸國に比較していくつかの特殊性を持つてゐるという點で、必然的に異つたものでなければならぬ。だが、ロシアにおける基本的諸勢力——

・ 傍點は私による。——イ・スタールン、

そして社會經濟の基本的諸形態も——は、いずれの資本主義國におけるものとも同様であるから、これらの特殊性は、最も主要ならざるものについてのみにいうことができる。」（レーニン全集、ロシア語版、第二四卷、五〇八頁）

しかし、もしもすべてこれらのことが正しいならば、このことによつて、ジノヴィエフが與えたレーニン主義の定義は正しいものとは認められない、ということにならぬであらうか？

民族的に局限されたレーニン主義のこの定義を、如何にして國際主義と合わせることができであらうか？

二、レーニン主義の主眼點

パンフレット「レーニン主義の基礎」の中には、こう述べられている——

「あるものは次のように考える、——レーニン主義における基本的なものは農民問題であり、レーニン主義の發足點は、農民、その役割、その比重についての問題である、と。これは全然正しくない。レーニン主義における基本的な問題、その發足點は、農民問題ではなくて、プロレタリアートの獨裁についての問題であり、その獲得の諸條件、その強化の諸條件の問題である。權力獲得のためのプロレタリアートの闘争におけるプロレタリアートの同盟者の問題として、農民問題は派生的な問題である」。

* 傍點は私による。——イ・スターリン

この命題は正しいか？

私は正しいと考える。この命題はレーニン主義の定義からそつくり出ているのである。事實上、もしもレーニン主義が、プロレタリア革命の理論と戦術であり、しかもプロレタリア革命の基本的内容がプロレタリアートの獨裁であるならば、レーニン主義の主眼點は、プロレタリアート獨裁の問題であり、この問題の究明、この問題の論證と具體化であることは明かである。

ところがジノヴィエフは、この命題に同意していないようである。彼の論文「レーニンの追憶」の中で、彼はこういつている――

「農民の役割についての問題は、私がすでに述べたように、ボルシエヴィズムの、レーニン主義の基本的問題である」。

ジノヴィエフのこういうテーゼは、諸君も見られるごとく、そつくりジノヴィエフが與えたレーニン主義についての正しくない定義から出ているのである。それ故に、レーニン主義についての彼の定義が正しくないと同様に、このテーゼも正しくないのである。

プロレタリアートの獨裁は「プロレタリア革命の根本的内容」(レーニン全集、ロシア語版、第二三卷、三三七頁参照)であるというレーニンのテーゼは、正しいか？ 勿論正しい。レーニン主義はプロレタリア革命の理論と戦術であるというテーゼは、正しいか？ 私は正しいと考える。しかしらば、このことから、どういう結論が生れてくるか？このことから、レーニン主義の基本的問題、そ

* 傍點は私による。——イ・スターリン

の發足點、その土台は、プロレタリアートの獨裁についての問題であるという結論がひき出される。

帝國主義の問題、帝國主義發展の飛躍的性格の問題、一國における社會主義の勝利の問題、プロレタリアート國家の問題、この國家のソヴェト的形態の問題、プロレタリアート獨裁の體系内における黨の役割の問題、社會主義建設方法の問題——これらすべての問題が、特にレーニンによつて究明せられたというこのことは、正しくないだろうか？ これらの問題こそが、また、プロレタリアート獨裁の思想の基礎をなし、土台をなすものであるというこのことは、正しくないだろうか？ これらの基本的問題の究明なくしては、プロレタリアート獨裁の見地からの農民問題の究明などは考え得られなかつたであらうというこのことは、正しくないだろうか？

レーニンが農民問題に造詣が深かつたことは、いうまでもない。プロレタリアートの同盟者の問題として、農民問題がプロレタリアートにとつて極めて重要な意義を持つており、プロレタリアートの獨裁についての基本的問題の一構成部分であることは、いうまでもない。だが、もしプロレタリアートの獨裁についての基本的問題が、レーニン主義の前に提起されていなかつたならば、プロレタリアートの同盟者についての派生的な問題、すなわち農民の問題も存在しなかつたであらうということ、あきらかなことではないか？ もしプロレタリアートによる権力獲得についての實際問題が、レーニン主義の前に提起されていなかつたならば、農民との同盟の問題も存在しなかつたであらうということ、あきらかなことではないか？

もしレーニンが、プロレタリアート獨裁の理論と戰術の基礎によらず、この基礎とは別個に、この基礎の外で、農民問題の究明をおこなつたのであつたならば、レーニンは疑いもなく、彼が實際にそ

うであるような、極めて偉大なプロレタリア思想家ではなく、外國の、文筆を業とする俗物どもがしばしば彼を描き出しているような、單なる「農民哲學者」であつたであらう。

二つの中の一つである。すなわち、

農民問題は、レーニン主義の主眼点であるか？ この場合には、レーニン主義は資本主義的に發達している諸國にとつては、すなわち、農民國ではない諸國にとつては、役に立たぬものであり、また必要缺くべからざるものでもない。

それとも、レーニン主義における主要なものは、プロレタリアートの獨裁であるか？ この場合には、レーニン主義は萬國のプロレタリアの國際的教義であり、資本主義的に發達している國をも含めて例外なくすべての國にとつて、役に立つものであり、かつ必要缺くべからざるものである。

ここにおいて、いずれかひとつを選ばなければならぬ。

三、「永續」革命についての問題

パンフレット「レーニン主義の基礎」の中では、「永續革命の理論」は、農民の役割の過少評價「理論」であると評價されている。そこには、こう述べられている——

「レーニン自身が連續的革命の見地に立つていたのであるから、レーニンは連續性の問題について、「永續」革命の支持者らと鬭争したのではなく、彼らがプロレタリアートの最大の豫備隊たる農民の役割を過少評價したがために彼らと鬭争したのである」。

ロシアの「永續革命論者」に對するこの性格づけは、最近まで一般に承認されているものと考えられていた。ところがこの性格づけは全般的には正しいが、すべてをいいつくしているものと認めることはできない。一方、一九二四年の論争と、他方レーニンの諸勞作の注意深い分析とは、ロシアの「永續革命論者」の誤謬が、單に農民の役割の過少評價にあつたのみではなく、農民を指導すべきプロレタリアートの力と能力との過少評價に、プロレタリアートの指導權の思想に對する確信の缺如にもあつたことを示したのである。

それ故に、私は自分のパンフレット「十月革命とロシア共產主義者の戰術」(一九二四年十二月)の中で、この性格づけを擴げ、これを他の、もつと完全な性格づけをもつて代えたのである。このパンフレットには、こういわれている――

「これまで普通には、農民運動の革命的可能性に對する確信の缺如という「永續革命」の理論のただ一面だけを指摘してきた。現在では公平を期するために、この一面を、ロシアのプロレタリアートの力と能力とに對する確信の缺如という、他の一面をもつて補足することが必要である」。

もちろんこのことは、レーニン主義が、前世紀の四十年代にマルクスによつて宣言された、括弧すきでない永續革命の思想に反對してきたとか、もしくは反對しているとかいうことを意味するものではない。否、反對である。レーニンは、永續革命の思想を正しく理解し發展させた唯一のマルクス主義者であつた。この問題においてレーニンが「永續革命論者」と異なる點は、「永續革命論者」ら

が、マルクスの永續革命の思想を生命のない、書物の上だけの智慧に轉化させて、この思想を歪曲したのに反して、レーニンはこの思想を純粹な形のままでとり上げ、自己の革命理論の基礎の一つとしたことにあるのである。レーニンがすでに一九〇五年に與えたブルジョア民主主義革命の社會主義革命への成長轉化の思想は、永續革命についてのマルクスの理論の體現された形態の一つであることを想起すべきである。レーニンは、この點についてすでに一九〇五年に、次のように書いた——

「民主主義革命からわれわれは直ちに移行し始めよう、そして丁度われわれの力量に應じて、すなわち階級意識を有し、かつ組織されたプロレタリアートの力量に應じて、社會主義革命へ移行し始めよう。われわれは連續革命の主張者である*。われわれは途中で立ち止らないであらう……」

冒險主義に陥ることなく、自己の科學的良心に反することなく、安價な人氣を追うことなく、われわれはただ次の一つのことだけを言うことができるし、またいうのである。すなわち、新しい、ヨリ高度の任務、すなわち社會主義革命にできるだけ早く移行することを、われわれにとつて、プロレタリアートの黨にとつて、一層容易ならしめるために、民主主義革命をなし遂げるように、われわれは全力をあげてすべての農民を助けるであらう、と（レーニン全集、ロシア語版、第八卷、一八六——一八七頁）。

* 傍點は私による。——イ・スターリン、

しかして十六年を経た後、プロレタリアートが権力を獲得した後に、レーニンはこの題目についてこう書いてゐる——

「カウツキー、ヒルファアーディング、マルトフ、チエルノフ、ヒルクイット、ロンダ、マクドナルド、トウラチらの各派およびその他の「第二半」マルクス主義の連中は、……ブルジョア民主主義革命とプロレタリア的社會主義革命との相互關係を理解するにいたらなかつた。前者は後者に成長轉化する*。後者はほんのついでに前者の諸問題を解決する。後者は前者の大業を鞏固にする。後者がどの程度まで前者を越えて成長轉化し得るかは、争闘が、ただ争闘のみが決定する」(レーニン全集、ロシア語版、第二七卷、二六頁)。

私は、一九〇五年九月一日に發表されたレーニンの論文「農民運動に對する社會民主黨の態度」からとつた最初の引用文に、特別の注意をむける。そして、私はこのことを、レーニンがブルジョア民主主義革命の社會主義革命への成長轉化の思想、すなわち永續革命の思想に到達したのは帝國主義戦争の後であるかのごとく、依然として主張しつづけている者達に知らせるために、特に強調するのである。この引用文は、これらの人達がはなはだしく誤解しているのだということについて、なんらの疑問をも残しはしないのである。

* 傍點は私による。——イ・ス・スターリン、

四、プロレタリア革命とプロ レタリアートの獨裁

ブルジョア革命と異なるプロレタリア革命の特徴點は何か？

プロレタリア革命とブルジョア革命との相違は、次の五つの基本的な點に歸着させ得るであらう――

一、ブルジョア革命は、通常、公然たる革命が起る前に、封建社會の母胎の中で成長し、成熟したところの資本主義的制度の多かれ少かれ出来上つた形態が存在するときに、始まるのであるが、一方プロレタリア革命は社會主義制度の出来上つた形態が存在しないか、もしくはほとんど存在しないときに始まるのである。

二、ブルジョア革命の基本的任務は、權力を獲得し、これを現存するブルジョアの經濟と合致させようとすることに歸着するのであるが、プロレタリア革命の基本的任務は、權力を獲得して、新しい社會主義的經濟を建設完成することに歸着するのである。

三、ブルジョア革命は、通常權力の獲得ということによつて成就されるが、一方プロレタリア革命にとっては、權力の獲得はただその端緒にすぎず、この場合、權力は古い經濟の再建を行い、新しい經濟を組織するための槓杆として利用されるのである。

四、ブルジョア革命は、ひとつの搾取者のグループが他の搾取者グループと權力のやりとりをするだけであり、したがつてブルジョア革命は舊國家機構を打ちこわすことを必要としないが、一

方プロレタリア革命はありとあらゆる搾取者のグループを権力の地位から押し除け、すべての勤勞者及び被搾取者の指導者たるプロレタリア階級を権力につかせるのであり、したがってプロレタリア革命は舊國家機構を打ちこわし、これを新しい國家機構をもつて置きかえずにすますることはできないのである。

五、ブルジョア革命は、勤勞者及び被搾取大衆が正に勤勞者であり、搾取されているものであるから、これら幾百萬の大衆を多少とも長い期間に亘つてブルジョアジーの周圍に結束させることはできない。が、一方プロレタリア革命は、もしそれがプロレタリアートの権力を鞏固ならしめ、新しい社會主義經濟の建設を完成するという自己の基本的任務を遂行せんと欲するならば、特に勤勞者ならびに被搾取者としての、~~長期間にわたる~~、長い期間にわたる、~~プロレタリアートの~~の同盟に結合することを要する。また結合しなければならぬ。

左に示すのは、この問題についてのレーニンの若干の基本的命題である。

レーニンはこう言っている――

「ブルジョア革命と社會主義革命との基本的相違の一つは、封建制度から成長してきたブルジョア革命にとつては、舊制度の母胎の中で漸次に新しい經濟諸組織がつくられ、これが漸次に封建社會のあらゆる方面を變更するということにある。ブルジョア革命の面前には、従来の社會のあらゆるきずなを拂い除け、投げ捨て、破壊するというただ一つの任務があつただけであつた。この任務を遂行することによつて、あらゆるブルジョア革命は、この革命に要求されている一切のことを遂行する、すなわち、資本主義の發展を促進するのである。

社會主義革命は、これとは全く異つた状態にある。歴史のジグザグのために社會主義革命を

始めねばならぬようになった國がおくれた國であればあるほど、その國にとつては、古い資本主義的諸關係から社會主義的諸關係に移ることは、なお一層困難である。この場合、破壊という任務に、新しい、未曾有の困難を伴う諸任務、すなわち組織的任務が加わってくるのである」(レーニン全集、ロシア語版、第二二卷、三一五頁)。

レーニンはつずけて言う――

「もしも、一九〇五年の偉大な經驗を経たロシア革命の人民的創造力が、早くも一九一七年二月にソヴェトを創立しなかつたならば、ソヴェトはどんなことがあつても、十月に權力を獲得することはできなかつたであろう。というのは、幾百萬人を包括した運動の、既に出來上つている組織形態が存在しているということのみ、成否はかかつていたからである。この出來上つている形態は、ソヴェトでもあった。しかし、その故に政治的分野における、かの素晴しい成功、吾が體驗したかの連續的な凱旋行進が、われわれを待つていたのである。なせならば、政治的權力の新しい形態はすでに準備ができており、われわれがやるべきことはただ二三の布告を以てソヴェト權力を革命の最初の數カ月間における胎兒的狀態から、法律的に認められ、ロシア國家の中にしつかりと根をおろした形態――すなわちロシア・ソヴェト共和國に轉化することだけであつたからである」(前掲書、三一五頁)。

レーニンは述べている――

「二つのきわめて大きな困難な任務がまだ残つていた。これらの任務の解決は、わが革命がその最初の數カ月間におこなつた凱旋行進のようなものでは決してあり得なかつた」(前掲書、三一五頁)。

「第一にそれは、あらゆる社會主義革命が直面するところの、國內の組織ということについての諸任務であつた。社會主義革命がブルジョア革命と相違していることは、實に、後者の場合においては資本主義的諸關係の出來上つた形態があるが、ソヴェト權力、すなわちプロレタリア權力は資本主義の最も發達した形態を除外するならば——それとても本質的には工業の少數最高部を包容しているのであつて、農業にはまだごく僅かしか觸れていないが——これらの出來上つた諸關係を受けないということである。調査登録の組織、大規模な諸企業に對する統制、全國家經濟機構を單一の大きな機械へ、數億の人々がただ一つの計畫によつて指導される様に働く經濟有機體へ轉化する事——これこそがわれわれの雙肩に懸つてゐるきわめて大きな組織的任務である。現在の勞働條件下では、それはわれわれが國內戰爭の諸任務を解決することに成功し得たように、「ウラー」の喊聲を擧げつつ一舉にして解決され得るものでは決してなかつた」。(前掲書、三一六頁)

「第二のきわめて大きな困難は……すなわち國際問題である。われわれがかくも容易にケレンスキの匪賊共をやつつけ、かくも容易に自國內において權力を樹立し、聊かの困難もなく土地の社會化や勞働者による統制の布告をなし得たのは、ひとえに、當時生じた諸條件が、幸にも短期間われわれがこれらすべてのことをなし得たのは、ひとえに、當時生じた諸條件が、幸にも短期間われわれを國際帝國主義から掩護してくれたからであつた。その資本の全威力を擁して、國際資本のほんとうの勢力、ほんとうの要塞をなしているところの、高度に組織化された軍事技術を擁している國際帝國主義は、その客觀的な地位から言つても、またそのなかに體現されている資本家階級の經濟的利益から言つても、如何なる條件の下においても、決してソヴェト共和國とならんで

生存することはできなかつた。また國際帝國主義は、通商關係からも國際的金融關係からも、そうすることはできなかつたのだ。そこでは衝突は不可避的なものである。ここにロシア革命の最大の困難があり、その最大の歴史的問題、すなわち國際的諸任務解決の必要が、國際革命を呼び起す必要があるのである。』（前掲書、三一七頁）

以上の如きが、プロレタリア革命の内的性格であり、かつその基本的意義である。

暴力革命なしに、プロレタリアートの獨裁なしに、舊い、ブルジョア秩序のかような根本的建設替を遂行し得るであらうか？

不可能なことは明かである。平和的に、ブルジョアジーの支配に順應させられているブルジョア民主主義の範圍内で、かような革命を遂行し得られると考えるのは、正氣を失つて、正常な人間の理解をなくしてしまふか、または厚顔に、また公然とプロレタリア革命を拒否することを意味する。

この命題は、われわれが今のところ、敵意に燃えている資本主義諸國に包圍され、かつそのプロアジエを國際資本が支持せざるを得ないところの一國で勝利を占めたプロレタリア革命に關係するのであるからこそ、なおさら力強く、斷定的に強調しなければならぬのである。それだからこそ、レーニンはこういつている

「被壓迫階級の解放は、暴力革命なくしては不可能であるばかりでなく、支配階級によつてつくられた國家權力機關を絶滅することなくしては不可能である。』（レーニン全集、ロシア語版、第二一卷、三七三頁参照）

「まず私有財産制がまだ保持されている情勢の下で、すなわち資本の權力と抑壓とがまだ保持されている情勢の下で、住民の大多数をしてプロレタリアートの黨を支持することを聲明さ

せよ——ただその時にのみプロレタリアートの黨は權力を獲得することが出来るし、また獲得しなければならぬ——自ら「社會主義者」と稱しているが、實際にはブルジョアジエの奴僕たる小ブルジョア民主主義者は、こゝういつてゐる*」。 (レーニン全集、ロシア語版、第二四卷、六四七頁)

「まず革命的プロレタリアートはブルジョアジエを打倒し、資本の抑壓を打ち壊し、ブルジョア國家機關を破壊するがいい——その時には勝利を占めたプロレタリアートは、搾取者の利益を犠牲として勤勞・非プロレタリア大衆を満足させ、その大衆の大多数の同情と支持を急速に自分の側にひきつけ得るであろう——こゝうわれわれは言うのである*」。 (前掲書参照)

レーニンはつづけて言つてゐる——

「住民の大多数を自己の側に獲得するためには、プロレタリアートは、第一に、ブルジョアジエを打倒し、國家權力を自己の手に奪い取らなければならぬ。第二に、プロレタリアートは、舊國家機關をコツ端微塵に粉碎して、ソヴェト權力を樹立しなければならぬ。プロレタリアートは、こゝうすることによつて、非プロレタリア勤勞大衆の間でのブルジョアジエ及び小ブルジョアの協調主義者共の支配と權威と影響力とを直ちに掘り崩すのである。第三に、プロレタリアートは、搾取者の利益を犠牲として、非プロレタリア勤勞大衆が經濟上必要とするものを、革命的方法を以て、實現させることによつて、彼ら大衆の大多数の間におけるブルジョアジエ及び小ブルジョアの協調主義者共の影響を徹底的に打破しなければならぬ」。 (前掲書、六四一頁)

* 傍點は私による。——イ・スターリン、

プロレタリアート獨裁は、プロレタリア革命の基本的な内容である、ということが若し認められているものとすれば、以上の特徴的な標識との關連における、プロレタリア獨裁の基本的特徴は如何なるものであるか？

レーニンが與えたプロレタリアート獨裁の最も一般的な定義は、次の通りである——

「プロレタリアート獨裁は、階級闘争の終結ではなく、新しい形態での階級闘争の繼續である。プロレタリアートの獨裁は、勝利し、かつ政治權力をその手中に握ったプロレタリアートが、打ち敗られはしたが絶滅しつくされていらない、消滅してはいない、抵抗することを止めない、否その抵抗を強めたブルジョアジーに對して行ふ階級闘争である」。——（レーニン全集、ロシア語版、第二四卷、三一—頁）

プロレタリアートの獨裁を「全人民的」な、「普通選挙による」權力、「階級的でない」權力と混同することに反對して、レーニンはこういつている——

「政治的支配權をその手中に握ったこの階級は、この支配權を單獨で*掌握することを意識して、これを掌握したのである。このことは、プロレタリアート獨裁の概念の中に含まれている。この概念は、一つの階級がただ單獨で政治權力をその手中に握ることをわきまえており「全人民的な、普通選挙による、全國民によつて神聖なものともみなされた」權力云々のおしやべりによつて自分をも、また他の人々をも欺瞞しない場合にのみ、初めて意味をもつていたのである」。——（レーニン全集、ロシア語版、第二六卷、二八六頁）

* 傍點は私による。——イ・スターリン

しかしながらこのことは、権力を他の階級と分有しな^いこと、また分有し得ない一階級の、すなわちプロレタリア階級の権力は、自己の目的を實現するために援助を、すなわち他の諸階級の勤勞者及び被搾取大衆との同盟を必要としな^いということを意味しない。反對である。この権力、この一階級の権力は、プロレタリア階級と小ブルジョア的諸階級の勤勞大衆、先ず第一に農民勤勞大衆との同盟の特殊な形態という手段によつてのみ、確立され、徹底的に遂行され得るのである。

しからは、同盟のこの特殊な形態とは何であるか？ それはどんなものか？ 一般に、他の非プロレタリア階級の勤勞大衆とのこの同盟は、一階級の獨裁という思想と矛盾しはしないか？

それは、すなわち同盟のこの特殊の形態は、この同盟の指導的勢力がプロレタリアートにあるという點にある。それは、すなわち同盟のこの特殊の形態は、國家の指導者、プロレタリアート獨裁の體系における指導者が、他の諸黨とその指導を分有しな^いこと、また分有し得ない、一つの黨、すなわちプロレタリアートの黨、共產主義者の黨であるという點にある。

諸君も見られるように、矛盾はここではただ外見的な矛盾であり、表面上の矛盾にすぎない。レーニンはこういつている――

『プロレタリアートの獨裁は、プロレタリアート、すなわち勤勞者の前衛と勤勞者のうちの數多い非プロレタリア的諸層（小ブルジョアジー、小經營者、農民、インテリゲンチヤ、等々）、あるいは彼らの大多數との間の階級的同盟の特殊な形態*であり、資本に反對する同盟、資本を完全に打倒し、ブルジョアジーの抵抗と、復古の企てとを完全に壓し潰すことを目的とする同

* 傍點は私による。——イ・スターリン、

盟、社會主義を終局的に確立し、鞏固にすることを目的とする同盟の特殊な形態である。これは、特殊な情勢の下に造りあげられるところの、すなわち激烈な國內戦争の情勢下につくりあげられるところの特殊形態の同盟であり、それは社會主義の確乎たる味方とその動搖的な同盟者との、時としては「中立的な」同盟者（この時には、同盟は鬭争についての協定から、中立についての協定となる）との同盟であり、經濟的に、政治的に、社會的に、精神的に、同様でない諸階級間の同盟である*」。〔レーニン全集、ロシア語版、第二四卷、三一—頁〕

カメネフは、その指示的報告演説の一つでプロレタリアートの獨裁についての右のごとき概念を論駁して、こう言っている——

「獨裁とは、一つの階級の他の階級との同盟ではない*」。

カメネフはここではまず第一に、私のパンフレット「十月革命とロシア共產主義者の戦術」中の一つの箇所を考慮して言っているのだと、私は考へる。この箇所にはこうのべられている——

「プロレタリアートの獨裁とは「經驗ある戰略家」の注意深い手によつて「手際よく」「選ばれ」、住民の何れかの層に「利口に頼つている」單なる政府の上層部ではない。プロレタリアートの獨裁とは、資本の打倒と社會主義の終局的勝利のための、プロレタリアートと勤勞農民大衆との階級的同盟であり、しかもプロレタリアートがこの同盟の指導的勢力であることを條件とした階級的同盟である」。

私はプロレタリアートの獨裁に對するこの定義すけを完全に支持する。というのは、この定義すけは、上に引用したばかりのレーニンの定義すけと、そつくり完全に一致すると考へるからである。

* 傍點は私による。——イ・スターリン

「獨裁とは、一つの階級と他の階級との同盟ではない」という、かように留保なしの形でなされているカメネフの聲明は、プロレタリアート獨裁についてのレーニンの理論と何等の共通點を持つていないものであると、私は斷言する。

スムイチカ（結合）の思想、プロレタリアートと農民との同盟の思想、この同盟におけるプロレタリアートのヘゲモニイの思想の意味を理解しなかつたもののみが、こんなふうに言い得るのであると、私は斷言する。

「革命が他の諸國にまだ起きていない間は、農民との協調のみが*、ロシアにおける社會主義革命を救うことが出来るのである」。〔レーニン全集、ロシア語版、第二六卷、二三八頁〕。

「獨裁の最高原則とは*プロレタリアートが指導的役割と國家權力とを保持し得るために、~~プロレタリアートの同盟を維持する~~」〔レーニン全集、ロシア語版、第二六

卷、四六〇頁〕。

というレーニンの命題を理解しなかつたもののみが、こんなふうに言い得るのである。

獨裁の最も重要な目的の一つである、搾取者を彈壓する目的を強調しつつ、レーニンはこう述べている――

「獨裁の科學的な概念は、いかなるものによつても制限されず、如何なる法律によつても、如何なる規則によつても絶対に束縛されず、直接暴力に立脚している權力を意味するものに外ならぬ」〔レーニン全集、ロシア語版、第二五卷、四四一頁〕。

* 傍點は私による。――イ・スターリン

「獨裁とは——カデットの紳士諸君よ、このことをしつかりと承知しておきたまえ——法律に立脚するのではなくて、力に立脚する、何らの制限を受けない權力を意味する。國內戦争の時期には、勝利を獲得したあらゆる權力は、ただ獨裁のみであり得るのだ」(レーニン全集、ロシア語版、第二五卷、四三六頁)。

しかしながら、たとえ暴力なしの獨裁はないとはいえ、プロレタリアートの獨裁はもちろん暴力をもつて盡きるといふわけではない。

レーニンはこう言っている——

「暴力なしには獨裁は不可能であるが、獨裁は暴力のみを意味するものではない。それはまた、舊來の組織よりも一層高度な、労働の組織を意味している」(レーニン全集、ロシア語版、第二四卷、三〇五頁)。

「プロレタリアートの獨裁は………搾取者に對する暴力のみではなく、また、暴力を主たるものとするわけではない。この革命的暴力の經濟的基礎、その生活力と成功を保障するものは、プロレタリアートが資本主義と比較して労働の社會的組織の一層高度の型を代表し、これを實現するということである。ここに眼目がある。この點に、共產主義の力の源泉と、その必然的な、完全な勝利の保障とがある」(レーニン全集、ロシア語版、第二四卷、三三五——三三六頁参照)。

「その(すなわち獨裁の——イ・スタヴリン)主要本質は、勤勞者の先進部隊、彼らの前衛、彼らの唯一の指導者、すなわちプロレタリアートの組織性と規律性にある。プロレタリアートの目的は、社會主義を建設し、社會の階級分裂を絶滅し、社會のすべての成員を勤勞者とな

し、人間による人間のあらゆる搾取の根源をとり除くことである。この目的を即座に實現することはできない。それは資本主義から社會主義へはかなりながくつづく過渡期を必要とする——なせならば、生産の組織替えは困難なことであるからであり、生活のすべての分野において根本的な變化をなすとげるためには、時間を要するからでもあり、小ブルジョアのならばにブルジョアの經濟制度への習慣の巨大な力は、ただ長い期間にわたる頑強な闘争においてのみ克服され得るからである。それだから、マルクスは、資本主義から社會主義への過渡期としてのプロレタリアート獨裁の長い一時代について、語つてもいるのである」(前掲書、三一四頁)。

以上のごときが、プロレタリアート獨裁の特徴点である。

ここから、次のごときプロレタリアート獨裁の三つの根本的な面が生れてくる。すなわち——

- 一、搾取者を弾壓するため、國を防衛するため、他國のプロレタリアートとの連けいを固めるため、すべての國において革命を發展させ、勝利させるために、プロレタリアートの権力を利用すること。

二、勤勞、被搾取大衆をブルジョアジーから終局的に切りはなすため、プロレタリアートとこれらの大衆との同盟を鞏固にするため、これらの大衆を社會主義建設の大業に引き入れるため、またこれらの大衆に對してプロレタリアートの國家的指導を行うために、プロレタリアートの権力を利用すること。

三、社會主義を組織するため、階級を絶滅するため、階級のない社會、社會主義の社會に移るために、プロレタリアートの権力を利用すること。

プロレタリアート獨裁は、この三つの面をすべて合同したものである。これらの面のどの一つも、これをプロレタリアート獨裁の唯一の、特徴的な標識として、抜き出すことはできないし、反對に、これらの標識のうちのだ一つにしろ缺けているということは、プロレタリアートの獨裁が資本主義による圍繞という情勢の下においては、十分それだけで獨裁ではなくなつてしまふのである。それ故にプロレタリアート獨裁の概念を歪曲する危険を犯すことなしには、これら三つの面のうちのどの一つをも除外することはできない。これら三つの面がすべて一緒にまとめられてのみ、プロレタリアート獨裁の完全な、完成された概念をわれわれに與えるのである。

プロレタリアート獨裁は、その各々の時期とその特殊の諸形態と種々様々の活動方法を有している。國內戰爭の時期には、獨裁の暴力的な面が特に目立つのである。しかし、そうだからといって、國內戰爭の時期には、何らの建設的活動も行われないうことには決してならぬ。建設的活動なしに國內戰爭を行うことは不可能である。社會主義建設の時期には、これとは反對に、獨裁の平和的な、組織的な、文化的活動、革命的法律等々が特に目立つのである。だが、そうだからといって、また、建設の時期には獨裁の暴力的な面がなくなつてしまつたとか、なくなり得るとかいうことには決してならぬ。彈壓の諸機關、軍隊及びその他の組織は、現在建設の時期においても、國內戰爭の時期におけると同様に、必要缺くべからざるものである。これらの機關が存在することなしには、獨裁が、多少とも保障された建設活動を行うことは不可能なのである。革命が現在のところ、ただ一國內だけで勝利を占めているということを、忘れてはならぬ。資本主義による圍繞が存在している限り、武力干渉の危険とこの危険から生れてくるあらゆる結果もまた、あり得るであろうということを、忘れてはならない。

五、プロレタリアート獨裁の體系

内における黨と労働者階級

私は前章において、プロレタリアート獨裁について、その歴史的必然性の見地から、その階級的内容の見地から、その國家的本質の見地から、そして最後に、資本主義から社會主義への過渡期と稱せられる歴史上の一時代にわたつて遂行される、その破壊的任務と創造的任務の見地から語つた。

今やわれわれはプロレタリアート獨裁について、その構造の見地から、その「機構」の見地から、それらの總和が「プロレタリアート獨裁の體系」(レトニン)をなしており、それらのたすけによつてプロレタリアート獨裁の日常活動が實現されるところの「ベルト」、「槓杆」及び「指向力」の役割と意義という見地から述べなければならぬ。

プロレタリアート獨裁の體系におけるこの「ベルト」或はこの「槓杆」とは何であるか？ この「指向力」とは何であるか？ 何のためにこれらは必要であつたか？

槓杆もしくはベルト——これこそは、その援助なしには獨裁の實現が不可能であるところの、プロレタリアートの大衆組織そのものである。

指向力——これこそは、プロレタリアートの先進部隊であり、これこそ、プロレタリアート獨裁の基本的な指導力であるところのプロレタリアートの前衛である。

これらのベルト、槓杆ならびに指向力は、プロレタリアートにとって必要缺くべからざるものである。なせならば、これらなしには、プロレタリアートは勝利獲得をめざす闘争において、組織さ

れ、武装された資本を前にひかえて、武器のない軍隊の地位に陥るであろうからである。それらの組織は、プロレタリアートにとつて、必要缺くべからざるものなのである。なせなれば、これなしにはプロレタリアートは、ブルジョアジー打倒のための闘争において、自己の権力強化のための闘争において、社会主義建設のための闘争において、必然的に敗北を蒙るであろうからである。これらの組織の系統的な援助と前衛の指向力とは、必要缺くべからざるものなのである。なせなれば、これらの條件なしには、多少とも長い期間にわたる、鞏固なプロレタリアートの獨裁は不可能だからである。

この組織とは何であるか？

第一に、それは非常に多くの生産的、文化的、教育的及びその他の組織の形態で、中央および地方にその枝をもつているところの、労働者の労働組合である。これは、すべての職業の労働者を結合している。これは黨外組織である。労働組合は、これをわが國において支配している労働者階級の總括的な組織と稱することができる。これは共產主義の學校である。これは、その仲間の中から統治のあらゆる部門の指導的活動のために最も優秀な人間を選出している。これは労働者階級の成員中の先進分子とおくれた分子との連けいを實現させる。これは、労働大衆を労働者階級の前衛と結合させる。

第二に、それは行政的、經濟的、軍事的、文化的及びその他の國家組織の形態で、中央及び地方に多數の枝をもつているソヴエト、それに加うるに、これらの組織をとりまき、これを住民と結びつけている、勤勞者の自發的な無數の大衆團體である。ソヴエトは、都市及び農村の全勤勞者の大衆組織である。これは黨外組織である。ソヴエトは、プロレタリアート獨裁の直接の表現である。ソヴエトを通じて、獨裁を強化し、社会主義を建設するためのありとあらゆる方策が行われるのであ

る。農民に對するプロレタリアートの國家的指導は、ソヴェトを通じて實現される。ソヴェトは、幾百萬の勤勞大衆をプロレタリアートの前衛と結びつける。

第三に、それはすべての枝をもつあらゆる種類の協同組合である。これは勤勞者の大衆組織であり、黨外組織であり、勤勞者をまず第一に消費者として、また時の経過につれて生産者として（農業協同組合）結合する組織である。これはプロレタリアートの獨裁が鞏固化した後、廣汎な建設の時期には特殊の意義をもつに至る。これはプロレタリアートの前衛と農民大衆との連けいを容易ならしめ、農民大衆を社會主義の軌道に引き入れる可能性をつくり上げるのである。

第四に、それは青年同盟である。これは勞働者農民青年の大衆組織であり、黨外組織ではあるが、黨に接している組織である。これは社會主義の精神のもとに若い年代の人々を教育することに於いて黨を援助することを自己の任務としている。これは、統治の全部門におけるプロレタリアートの爾餘の一切の大衆組織に年若い豫備隊を供給する。青年同盟はプロレタリアートの獨裁が鞏固化した後、プロレタリアートの廣汎な文化的ならびに教育的活動の時期には、特殊の意義を得た。

最後に、それはプロレタリアートの黨、プロレタリアートの前衛である。その力は、黨がプロレタリアートのすべての大衆組織の中から、プロレタリアートの最も優秀な人々をすべて自己の中に吸収するというところにある。その使命は例外なくすべてのプロレタリアートの大衆組織の活動を統一し、これらの組織の行動を一つの目的、すなわちプロレタリアートの解放という目的に指向し、向けることにある。しかし、これらの活動と行動を統一し、これらを一つの目的方針に向けることは絶対に必要である。なせならば、このことなしにはプロレタリアートの統一は不可能であり、このことなしには權力の獲得をめざすプロレタリア大衆の闘争において、社會主義建設のための彼らの闘争に

において、プロレタリア大衆を指導することは不可能だからである。しかし、プロレタリアートの大衆組織の活動を統一し、これに方向を與え得るのは、ただプロレタリアートの前衛、すなわちプロレタリアートの黨のみである。ただプロレタリアートの黨のみが、ただ共産主義者の黨のみが、プロレタリアート獨裁の體系内における基本的指導者としての、この役割をはたし得るのである。

何故か？

「なぜならば、第一に、黨はプロレタリアートの黨外諸組織と直接の連絡を持ち、かつ頻繁にこれらの組織を指導している労働者階級の最も優秀な分子の集合点だからである。第二に、黨は、労働者階級の最も優秀な人々の集合点として、自己の階級のあらゆる組織形態を指導する能力をもっている労働者階級の指導者を養成する最良の學校だからである。第三に、黨は、労働者階級指導者の最良の學校として、その經驗と權威の點で、プロレタリアートの闘争の指導を中央集権化し、かようにして、労働者階級のありとあらゆる黨外組織を、黨と階級とを結びつける補助機關ならびにベルトに轉化し得る唯一の組織だからである」(「レーニン主義の基礎」参照)。

黨はプロレタリアート獨裁の體系内における基本的な指導力である。

「黨はプロレタリアートの階級的結合體の最高形態である」(レーニン)。

かくして、まず第一に生産の線に沿うて、黨を階級に結びつけているプロレタリアートの大衆組織としての労働組合、まず第一に國家統治の線に沿うて、黨を勤勞大衆に結びつける勤勞者の大衆組織としてのソヴェト、まず第一に經營の線に沿うて、農民を社會主義建設に引き入れるという線に沿うて、黨を農民大衆に結びつけているところの、主として農民の大衆組織としての協同組合、プロレ

タリートの前衛のために、新しい年代の人間を社會主義的に教育し、年若い豫備隊をつくりあげ、ことを容易ならしめる使命を負わされているところの、労働者農民青年の大衆組織としての青年同盟、そして最後に、これらすべての大衆組織を指導することを使命とするところの、プロレタリアト獨裁の體系内における基本的指向力としての黨——以上が大體において、獨裁の「機構」の全貌であり、「プロレタリアト獨裁の體系」の全貌である。

基本的指導力としての黨なくしては、多少とも永い期間にわたる鞏固なプロレタリアートの獨裁、ということとは不可能である。

かようにして、レーニンの言葉をもつて言えば、「それによつて黨が緊密に階級並に大衆と結びつけられ、かつそれによつて黨の指導の下に階級の獨裁が實現されるところの、形式上は共產主義的ではない、屈伸性を持ち、比較的廣汎な、極めて強力なプロレタリア的機關が大體において出來上るのである」(レーニン全集、ロシア語版、第二五卷、一九二頁)。

勿論このことを黨が労働組合、ソヴェト、その他の大衆組織に代り得るとか、または代らなければならぬとかいうふうには解釋してはならない。黨は、プロレタリアートの獨裁を實現させる。だが、黨は、これを直接にはなく、労働組合の助けによつて、ソヴェトとその分枝を通じて、これを實現させるのである。これらの「ベルト」なしには多少とも鞏固な獨裁は不可能であつたであらう。

レーニンはこういつている——

「前衛と先進的階級の大衆との間、また後者と勤勞者大衆との間をつなぐ、いくつかの「ベルト」なしには、獨裁を實現することはできない」(レーニン全集、ロシア語版、第二六卷、六五頁)。

「黨は、いわばプロレタリアートの前衛を自分の中に吸収するのである。そしてこの前衛がプロレタリアートの獨裁を實現させるのである。しかして、労働組合のような基礎をもたずには獨裁を實現することはできないし、國家的機能を遂行することはできない。これらの機能はまた幾多の、また何らかの新しい型の特殊の機關を通じて、*すなわちソヴェト機關を通じて、*實現しなければならぬのである」(レーニン全集、ロシア語版、第二六卷、六四頁)。

たとえば、わが國において、すなわちソヴェト同盟において、プロレタリアート獨裁の國において、黨の指導的役割の最高の現われとして認むべきものは、重要な政治上または組織上の問題の一つといえども、わが國では黨の指導的指令なしには、わがソヴェト組織並に他の大衆組織によつて決定されはしないというこの事實である。この意味において、プロレタリアートの獨裁は、本質的には、プロレタリアートの前衛の「獨裁」、プロレタリアートの基本的指導力としての、プロレタリアートの黨の「獨裁」であるといつてもよいであろう。このことについてレーニンは、コミンテルンの第二回世界大會でこう述べた――

「タンナーは、プロレタリアートの獨裁に賛成であると言つてゐる。だが彼が考へてゐるプロレタリアートの獨裁は、われわれが考へてゐるようなプロレタリアートの獨裁と全く同じものではない。彼は、われわれがプロレタリアートの獨裁を、本質的には、*プロレタリアートの組織されかつ階級意識のある少数者の獨裁であると理解してゐると述べてゐる。」

* 傍點は私による。――イ・スターリン、

そして實際に、労働大衆が絶え間のない搾取の下にあり、その人間的能力を發展させることのできない資本主義の時代においては、労働者の政黨にとつて最も特徴的なことは、實に、これらの黨がただ自己の階級の少數のみを包括し得るということである。あらゆる資本主義社會において、眞に階級意識のある労働者は、全労働者の少數部分を構成しているに過ぎないと丁度同じく、政黨は階級内の少數者のみを結合し得るのである。それ故にわれわれはこの階級意識のある少數者のみが廣汎な労働大衆を指導し、彼等を率いて行くことができるという事を認めざるを得ないのである。しかも同志タンナーが、自分は黨の敵である、だが同時に、最も好く組織され、最も革命的な労働者の少數者が、全プロレタリアートに道を指し示す事には賛成であるというのであれば、實際には吾々の間に差異はないと、私は言うのである」(レーニン全集、ロシア語版、第二五卷、三四七頁)。

しかしながら、このことを、プロレタリアートの獨裁と黨の指導的役割(黨の「獨裁」との間に兩者相等しいという符號を附し得ると解釋し、前者を後者と同一視し得ると解釋し、また後者をもつて前者に代え得ると解釋してはならない。たとえばソーリンは、「プロレタリアートの獨裁はわが黨の獨裁である」と述べている。諸君も見られる如く、この命題は「黨の獨裁」をプロレタリアートの獨裁と同一視しているのである。レーニン主義の立場に立ちつつ、この同一視を正しいものと認めてもよいであろうか?否、そんなことはできない。しかもそれは、次のような理由によつてである。

第一。コミンテルンの第二回世界大會におけるレーニンの演説から引用した右の引用文の中で、レーニンは黨の指導的役割を、プロレタリアートの獨裁と決して同一視してはいない。彼は、ただ、「階級意識のある少數者(すなわち黨——ソ・スターリン)のみが廣汎な労働者大衆を指導し、彼

らを率いて行くことができる」ということ、特にこの意味においてこそ、「われわれはプロレタリアートの獨裁を、本質的には*プロレタリアートの組織され、かつ階級意識ある少数者の獨裁と理解している」と言っているのである。

「本質的には」ということは、「そつくり全部」ということをまだ意味するものではない。われわれはこぼせば、民族問題は本質的には農民問題である、と言っている。そしてこのことは斷然正しいのである。だがそれは、民族問題は農民問題と合致するものであり、農民問題はその範圍と内容から言つて、民族問題と相等的いものであり、農民問題は民族問題と同一である、ということをも未だ意味するものではない。民族問題がその範圍と内容からいつて、農民問題よりもつと廣く、もつと豊富であるということは、證明する必要はない。これと同様に、黨の指導的役割とプロレタリアートの獨裁にいつても同じことを言わなければならない。黨がプロレタリアートの獨裁を實行し、そしてこの意味においては、プロレタリアートの獨裁は本質的には、プロレタリアートの黨の「獨裁」であるとしても、それはまだ「黨の獨裁」（指導的役割）はプロレタリアートの獨裁と同一であり、かつ、その範圍と内容からいつて、前者は後者に相等的い、という事を意味するものではない。プロレタリアートの獨裁が、その範圍と内容からいつて、黨の指導的役割よりもつと廣汎であり、もつと豊富であるということも證明する必要はない。黨はプロレタリアートの獨裁を實行する、だが黨はプロレタリアートの獨裁を實行するものであつて、何か他の獨裁を實行するのではない。黨の指導的役割をプロレタリアートの獨裁と同一視するものは、プロレタリアートの獨裁を黨の「獨裁」を以てすりかえるものである。

* 傍點は私による。——イ・ス・スターリン、

第二。プロレタリアートの大衆組織の重要な決定の一つといえども、黨の側からの指導的指令なしにはなされない。このことは斷然正しい。だがこのことは、プロレタリアートの獨裁は黨の指導的指令をもつて盡きるといふことを意味するであらうか？ それだからとて、このことは黨の指導的指令をプロレタリアートの獨裁と同一視してもよいことを意味するであらうか？ もちろん、そんなことを意味しない。プロレタリアートの獨裁は黨の指導的指令と、プロレタリアートの大衆組織によるこれらの指令の實行と、住民によるこれらの指令の實現ということによつて成り立つてゐる。

諸君が見られる通り、われわれはこの場合、プロレタリアートの獨裁のかなり重大なる要素をなしてゐる幾多の過渡と中間段階に直面するのである。従つて黨の指導的指令とそれらの實現との間には、指導されるものの意志と行動、階級の意志と行動とが存在しており、かような指令を支持しようとする階級の覺悟（もしくはこれを支持しようとする通り）にこれらの指令を實行する階級の能力（もしくは無能力）が介在してゐるのである。指導の役割を引き受けた黨が、指導されるものの意志、状態、階級意識の水準を考慮せざるを得ないこと、自己の階級の意志、状態ならびに階級意識の水準をないがしろにし得ないことは恐らく證明する必要はなからう。だから黨の指導的役割とプロレタリアートの獨裁とを同一視するものは、階級の意志と行動とを、黨の指令を以てすりかえるものである。

第三。レーニンはこう言つてゐる——『プロレタリアートの獨裁は、勝利し、かつ政治權力をその手中に握つたプロレタリアートの階級闘争である』（レーニン全集、ロシア語版、第二四卷、三一—頁）この階級闘争は何に表現され得るか？ それは打倒されたブルジョアジーの攻撃に對し、または外國ブルジョアジーの武力干渉に對するプロレタリアートの幾多の武装行動に表現され得る。それ

は、もともプロレタリアートの権力がまだ鞏固となつていない時には、國內戦争に表現され得る。それは、権力が鞏固化された後では、廣汎な大衆をこの大業に引き入れつつなされる、プロレタリアートの廣汎な組織的ならびに建設的活動に表現され得る。これらすべての場合における登場人物たるべきものは階級としてのプロレタリアートである。黨が、ただ黨だけが、階級の支持を受けずに、専ら自分自身の力だけで、これらすべての行動を實現するというような場合はなかつた。通常、黨はこれらの行動を指導するだけであり、しかも黨が階級の支持を得ている限りにおいて、これらの行動を指導するのである。というのは、黨は階級そのものと合致することもできなければ、階級に變ることとも出来ないからである。というのは、黨のあらゆる重要な指導的な役割にもかかわらず、依然として黨は階級の一部としてとどまつてゐるからである。それだから、黨の指導的役割をプロレタリアートの獨裁と同一視するものは、階級を黨をもつてすりかえるものである。

第四、黨はプロレタリアートの獨裁を實現させる。「黨は、直接に統治するプロレタリアートの前衛であり、指導者である」(レーニン)。この意味において、黨は権力を握つてゐるのであり、黨は國を統治してゐるのである。だがこれをまだ、黨が國家權力とは關係なしに、國家權力なしに、プロレタリアートの獨裁を實現するということが、黨がソヴェトとは關係なしに、ソヴェトを経ずに、國を統治するというふうな解釋してはならない。それはまだ、黨をソヴェトと、また國家權力と同一視し得るといふことを意味するものではない。黨は権力の核心である。だが黨は國家權力のものではないし、黨を國家權力と同一視することはできない。

レーニンはこういつてゐる——「統治する黨としてわれわれは、ソヴェトの「上層」を黨の「上層」と融合させざるを得なかつた——この兩者はわが國ではすでに融合しており、また將來もかくの

如くであろう』（レーニン全集、ロシア語版、第二六卷、二〇八頁）。これは斷然正しい。だがレーニンはこれをもつて、全體としてのわがソヴェトの諸機關、例えばわが軍隊、わが交通運輸機關、わが經濟諸機關その他が、わが黨の機關であり、黨はソヴェト及びその分枝に代ることができ、黨を國家權力と同一視することができると言おうと欲しているのでは決してない。レーニンは一度ならず、『ソヴェトの體制は、プロレタリアートの獨裁であり』、『ソヴェト權力は、プロレタリアートの獨裁である』（レーニン全集、ロシア語版、第二四卷、一五頁及び一四頁）、と述べたが、黨は國家權力であり、ソヴェトと黨は同一物であるとは決して言わなかつた。數十萬の黨員をもつてゐる黨は、黨員ならびに非黨員である數十萬の人々を包容している中央及び地方のソヴェト及びその分枝を指導しているが、黨はこれらソヴェト機關に代ることは出来ないし、また代つてはならない。それだからこそレーニンは、『ボルシエヴィキ共產黨に指導されているところの、ソヴェトに組織されているプロレタリアートが、獨裁を實現しており』、『黨のあらゆる活動は、職業の別なく、勤勞大衆を結合させているところのソヴェトを通じて*行われており』（レーニン全集、ロシア語版、第二五卷、一九二頁及び一九三頁）、獨裁をば『ソヴェト機關を通じて*實現しなければならぬ』（レーニン全集、ロシア語版、第二六卷、六四頁）と言つてゐるのである。それ故に黨の指導的役割をプロレタリアート獨裁と同一視するものは、ソヴェトを、すなわち國家權力を、黨をもつてすりかえるものである。

* 傍點は私による。——イ・スターリン、

第五。プロレタリアート獨裁の概念は國家的概念である。プロレタリアートの獨裁は必ずその中に暴力の概念を含んでいる。もし獨裁をこの語の嚴密な意味で理解するならば、暴力なしには獨裁はあり得ない。レーニンは、プロレタリアートの獨裁を「直接暴力に立脚しているところの權力」(レーニン全集、ロシア語版、第一九卷、三一五頁)と定義した。このことによつて、プロレタリア階級に對する黨の獨裁を云々し、これをプロレタリアートの獨裁と同一視することは、とりもなおさず、黨は自己の階級に對して、單に指導者であるばかりでなく、領袖であり教師であるばかりでなく、自己の階級に對して暴力を行使するところの一種の獨裁者でもあるということを意味するが、それは勿論根本的にまちがつてゐる。それ故に「黨の獨裁」をプロレタリアートの獨裁と同一視する者は、暗黙の中に、黨の權威は労働者階級にたいする暴力に基いて築きあげることができるといふ思想から出發するものである。これは荒唐無稽であり、レーニン主義とは、全く相容れないものである。黨の權威は労働者階級の信頼によつて支持されている。しかし労働者階級のこの信頼は暴力によつて得られるものではなく——信頼は暴力によつて毀損されるだけである——黨の正しい理論によつて、黨の正しい政策によつて、労働者階級に對する黨の誠實さによつて、労働者階級大衆との黨の連けいによつて、そのスローガンの正しいことを大衆に納得させ、黨の用意とその手腕によつて、得られるのである。

以上述べたすべてのことから、如何なる結論が引き出されるか？

以上のことから、次のような結論が引き出される——

一、レーニンは黨の獨裁という言葉をも、この語の嚴密な意味(「暴力に立脚している權力」)にではなく、轉義で、不可分的指導という意味で用いてゐるのである。

二、黨の指導をプロレタリアートの獨裁と同一視するものは、全體としての労働者階級に對する暴力の機能を、不正當にも黨に押しつけることによつて、レーニンを曲解する者である。

三、黨が本來もつていない機能であるところの、労働者階級全體に對する暴力の機能を黨におこつける者は、前衛と階級、黨とプロレタリアートとの間には正しい相互關係がなければならぬという、基本的な要求に違反する者である。

かようにして、われわれは黨と階級、労働者階級内の黨員と非黨員との相互關係の問題にまで丁度到達したのである。

レーニンは、これらの相互關係を「労働者階級の前衛と労働大衆との間の相互的信頼」(レーニン全集、ロシア語版、第二六卷、二三五頁)と定義している。

これは何を意味するか？

これは第一に、黨は細心に一言もききもらさぬように大衆の聲に耳を傾けなければならぬということ、黨は大衆の革命的本能に對して注意深く對しなければならぬということ、黨は大衆闘争の實踐上で自己の政策の正否を點檢しつつ、大衆闘争の實踐を研究しなければならぬということ、従つて黨は大衆に教えるばかりでなく、また大衆から學ばなければならぬということを意味している。

これは第二に、黨はたえず、毎日プロレタリア大衆の信頼を獲得しなければならぬということ、黨はその政策とその活動によつて自己に對する大衆の支持を築きあげなければならぬということ、黨は大衆をして自分自身の經驗にもとずいて黨の政策の正しいことを悟ることを容易ならしめ、命令す

* 傍點は私による。——イ・スターリン

るのではなく、何よりも先ず納得させなければならぬということ、したがって黨は、自己の階級の指導者であり、領袖であり、教師でなければならぬということの意味している。

これらの條件に違反することは、前衛と階級との間の正しい相互關係を侵害することを意味しており、「相互的信頼」を掘り崩し、階級の規律をも、また黨の規律をも崩壊させることを意味している。

レーニンはこう言っている――

「わが黨の中に最も厳格な、眞に鐵の規律がなかつたならば、また勞働者階級全大衆からの*すなわちこの階級の中の思想をもつた者、誠實なもの、自己犠牲的な者、影響力のある者、おくれた層を導きもしくは引きつける能力をもつた者、これらすべての者からの、黨に對する最も完全な、獻身的な支持がなかつたならば*ボルシエヴィキは二カ年半はおろか、二カ月半も權力をもちこたえることができなかつたにちがいないことは、今日では、もはや殆ど各人が知つてゐるところであらう」。(レーニン全集、ロシア語版、第二五卷、一七三頁)

更にレーニンは、こういつている――

「プロレタリアートの獨裁は、舊社會の諸勢力と傳統とに對する流血的なまた非流血的な、暴力的なまた平和的な、軍事的なまた經濟的な、教育的なまた行政的な、頑強な闘争である。幾百萬幾千萬の人々の習慣の力は、最も恐ろしい力である。闘争によつて鍛え上げられた、鐵の如き黨なくしては、當該階級中すべての誠實な者の信賴を享有してゐる*黨なくしては、大衆の氣も

* 傍點は私による。――イ・スタヴリン、

ちをつねに注視し、これに影きようを興えることを心得ている黨なくしては、かかる鬭争を成功的に遂行することは不可能である』(レーニン全集、ロシア語版、第二五卷、一九〇頁)。

だが階級のこの信頼と支持とを、黨は如何にして獲得するか？ 労働者階級内のプロレタリアートの獨裁とつて必要缺くべからざる鐵の規律はいかにしてつくられるか、それは如何なる地盤の上に成長するか？

これについて、レーニンはこういつている――

「プロレタリアートの革命的黨の規律は、何によつて維持されるか？ 何によつてそれは點檢されるか？ 何によつて強められるか？ 第一にはプロレタリア前衛の階級意識性と革命に對するその忠誠とによつて、その鍛練、自己犠牲、英雄的精神によつて。第二には、最も廣汎な勤勞大衆*先ず第一にプロレタリアの大衆と、だが、またプロレタリアでない勤勞大衆とも結びつき、接近し、また望みとあらば、ある程度まで融合すること*をプロレタリア前衛が心得ていることによつて。第三には、最も廣汎な大衆が自分自身の經驗によつて、その正しいことを納得するということとを前提條件としてこの前衛によつて實現される政治的指導が正しいことによつて。この前衛の政治的戰略と戰術とが正しいことによつて。これらの條件なくしては、ブルジョアジーを打倒し、全社會を改造する使命を持つた、眞に先進階級の黨たり得る革命黨内の規律は、實現し得られない。これらの條件なくしては、規律をつくり上げようという試みは必然的にデメラメとなり、空言となり、道化とならざるを得ない。しかしながら、他方では、これらの條件は即座に生ずるわけにはいかない。それは長い期間に亘る活動と苦しい經驗とによつてのみはじ

* 傍點は私による。――イ・スターリン、

めてつくりあげられるのである。これらの條件をつくり上げることは、正しい革命的理論によつてのみ容易なものとなる。しかし、この理論はドグマではなくて、眞に大衆的な、眞に革命的な運動の實踐と緊密に結びつけられてのみはじめて、終局的に組み立てられるのである」。

(レーニン全集、ロシア語版、第二五卷、一七四頁)

そしてさらに――

「資本主義に對して勝利するためには、指導している黨、すなわち共產黨、革命的階級、すなわちプロレタリアート、そして大衆、すなわち勤勞者並に被搾取者總體、これらのあいだの正しい相互關係が要求される。ただ共產黨のみが、もしそれが、眞に革命的階級の前衛であり、この階級の最良の代表者すべてを包容しており、頑強な革命的闘争の經驗によつて教育され、鍛え上げられている、完全に階級意識ある、獻身的な共產主義者で構成されており、この黨が自己の階級の全生活と、そしてまたこの階級を通じて被搾取者の全大衆と引き離しがたく結びつき、かつこの階級とこの大衆に完全な信頼の念*を吹き込むことをよくなじ得ているならば、ただかかる黨のみが、資本主義のあらゆる勢力に對する最も容赦なき、斷乎たる、最後の闘争において、プロレタリアートを指導する能力を備えているのである。他方においては、かかる黨の指導下においてのみ、プロレタリアートは、資本主義によつて腐敗させられた勞働貴族、勞働組合や消費組合の古い首領達その他の、僅かな少数者の必然的な無感覺とその抵抗をさえ、徹底的に無力ならしめつつ、自己の革命的突撃の全威力を發揮することができるのであり、また、資本主義社會の經濟

* 傍點は私による。

イ・スタールン、

構造そのものによつて、プロレタリアートの階級に於ける割合とは、比較にならない程大きなその全威力を發揮することができるのである。(レーニン全集、シノ語版、第二五卷、三

一五頁)

これらの引用から、次のような結論が引き出される。

すなわち――

一、プロレタリアートの獨裁にとつて必要缺くべからざる黨の權威と労働者階級内の鐵の規律とは、恐怖もしくは黨の「無制限」な權利を基礎にして築き上げられるのではなく、黨に對する労働者階級の信頼に基いて、労働者階級からの黨に對する支持に基いて、築き上げられるのである。

二、黨に對する労働者階級の信頼は、直ちに獲得されるものでなく、また労働者階級に對する暴力の手段によつて獲得されるものでもなく、黨が大衆の中で永い期間に亘り活動することによつて、黨の正しい政策によつて、黨が自己の政策の正しいことを大衆自身の經驗にもとずいて大衆に納得させる手腕を有することによつて、労働者階級の支持を自己のために確保し、労働者階級の大衆を導いて行く手腕を黨が有することによつて、獲得されるものである。

三、大衆闘争の經驗によつて強化された正しい黨の政策なごには、また労働者階級の信頼なごには、黨による眞の指導はないし、またあり得ないのである。

四、もし黨が階級の信頼を享有しており、かつその指導が眞の指導であるならば、黨とその指導とは、プロレタリアートの獨裁に對立させることはできないのである。というのは、労働者階級の信頼を得ている黨の指導(黨の「獨裁」)なごには、多少とも鞏固なプロレタリアートの獨裁は不可能だからである。

これらの條件なしには、黨の權威と勞働者階級内の鐵の規律とは、空虚な文句であるか、もしくは高慢と冒険であるか、そのいずれかである。

プロレタリアートの獨裁を黨の指導（「獨裁」）に對立させてはならぬ。多少とも鞏固な、多少とも完全な獨裁を考慮に入れて、完全でなく、かつ鞏固でもない獨裁であつたもの、例えばバリ・コムニョンのような獨裁を考慮にいれないとすれば、黨による指導はプロレタリアートの獨裁における主要なものであるから、この兩者を對立させてはならないのである。プロレタリアートの獨裁と黨の指導とはいわば、同一の活動の線に沿うていゝるものであり、同一の方向に向つて作用していゝるものであるから、兩者を對立させてはならないのである。

レーニンはこういつてゐる――

「「黨の獨裁か、もしくは、階級の獨裁か？ 領袖の獨裁（黨）か、もしくは、大衆の獨裁（黨）か？」という問題の立て方そのものが、すでに最も信じ難い、手のつけようのない思想の混亂を證言してゐるのである……。大衆が諸階級に分れており……階級が通常は、そしてまた大多數の場合、少くとも現代の文明諸國においては、政黨によつて指導されてゐるということ、政黨が一般の規則としては最も權威あり、影響力を有し、經驗を有し、最も重要な地位に選出されてゐる人物、いわゆる領袖達の多かれ少なかれ固定されたグループによつて指導されてゐるということは、萬人周知のことである……。一般的に大衆の獨裁を領袖の獨裁と對立させるまで……話を持つて行くに至つては、笑うべきたわごとであり、馬鹿々々しいことである」。

（レーニン全集、ロシア語版、第二五卷、一八七頁及び一八八頁）

これは全く正しい。だがこの正しい命題は、前衛と労働大衆、黨と階級との間の正しい相互關係が存在するという前提から出發しているのである。それは前衛と階級との相互關係が、いわば正常であり、「相互的信賴」の範圍内にとどまつているという豫想から出發しているのである。

ところで、もし前衛と階級との正しい相互關係が、もし階級と黨との「相互的信賴」の關係が侵害された場合には、どうなるか？

もし黨自身が階級との正しい相互關係の原則を侵害し、「相互的信賴」の原則を侵害して、どんなふうにか自分を階級と對立させはじめる場合にはどうなるか？

一般にこんな場合があり得るであろうか？

そうだ、あり得る。

こういうことは、次のような場合にあり得るのである。すなわち——

一、黨が大衆の間における自己の權威を、自己の活動と大衆の信賴にもとずいてではなく、自己の「無制限」な權利にもとずいて築こうとし始める場合。

二、黨の政策が明白に間違つており、しかも黨が自己の誤謬を再検討し、修正しようと欲しない場合。

三、黨の政策は一般に正しいが、大衆にまだこの政策を完全にわがものとするだけの用意ができておらず、しかも黨が、黨の政策の正しいことを大衆自身の經驗にもとずいて納得する可能性を大衆に與えるために、その時機を待つことを欲しないか、また時機を待つことをなす得ないで自己の政策を大衆に押しつけようとする場合。

わが黨の歴史は、かような例を多く示している。わが黨内の各種のグループや分派は、これらの三つの条件のうちの一つを侵害し、時としてはこれらの条件のすべてをも、みなひつくるめて侵害したために没落し、消滅してしまつたのである。

しかしこのことから、次の場合においてだけは、プロレタリアートの獨裁を黨の「獨裁」(指導)に對立させることは、正しいものと認めることはできないという結論が引き出される。すなわち――

一、労働者階級に對する黨の獨裁を、この語の本來の意味(「暴力に立脚する權力」)での獨裁と理解せずに、レーニンが正にそう理解しているように、全體としての労働者階級に對する、その大多数に對する暴力を排除するところの黨の指導と理解する場合。

二、黨が階級の眞の指導者たる資格をもっている場合、すなわち黨の政策が正しく、その政策が階級の利益と一致している場合。

三、階級が、階級の大多数が、この政策を受け容れ、この政策を完全にわがものとし、黨の活動によつて、この政策の正しいことを納得し、黨を信頼し、黨を支持する場合。

これらの諸條件を侵害することは、必然に黨と階級との間の紛争をひき起し、兩者の間の分裂をひき起し、兩者の對立をひき起すのである。

黨の指導を力づくで階級におしつけることができるであらうか? いや、できない。いずれにしても、かような指導は多少とも永い期間にわたるものであることはできない。もし黨がプロレタリアートの黨としてとどまつていることを欲するならば、黨は、先ず第一にそしてまた主として、労働者階級の指導者であり、領袖であり、師であるということを知つていなければならぬ。われわれ

は、レーニンがこの點に關してパンフレット「國家と革命」の中で言つた言葉を忘れることはできない——

「マルクス主義は、労働者黨を教育することによつて、プロレタリアートの前衛を、すなわち、權力を握り、全人民を社會主義の方向に指導する能力をもち、新たな制度を嚮導し、組織する能力をもち、ブルジョアジーのない、そしてブルジョアジーに反對する、自分自身の社會的生活を建設する大業において、すべての勤勞者並に被搾取者の師たり、指導者たり、領袖*たる能力をもつてゐる前衛を教育するのである」。——（レーニン全集、ロシア語版、第二一卷、三八六頁）

もし黨の政策が正しくなく、その政策が階級の利益と衝突するような場合に、黨は眞に階級の指導者であると思ふことができなうか？ 勿論、できない。かような場合に、もし黨が、依然として指導者でありたいと欲するなら、その政策を再検討し、その政策を訂正し、自己の誤謬を認めこれを訂正しなければならぬ。この命題を確證するために、例えばわが黨の歴史から次のような事實、すなわち労働者農民大衆が明かにわが黨の政策に不満をもつており、黨が公然と正直にこの政策の再検討にとりかかつた、かの餘剩糧食收集制撤廢の時期を引き合いに出すことができるであらう。レーニンは第十回黨大會において、餘剩糧食收集制撤廢と新經濟政策實施の問題について、當時こう語つたのである——

「われわれは何ものをもかくそうと努めてはならぬ。否、われわれは農民がわれわれと彼らとの間にでき上つた關係の形態に不満であるということ、農民がこの關係の形態を欲しておら

* 傍點は私による。——イ・スターリン、

ず、またこの状態でこれ以上暮して行こうとしないであろうということを、率直に語らなければならぬ。これは論争の餘地のないことである。農民のこの意志は、はつきりといひ現わされてゐる。これは勤勞住民の龐大な大衆の意志である。われわれは、これを考慮しなければならぬ。そしてわれわれは、農民に對するわれわれの政策を再検討しようではないか*と、率直にいひ得るほど冷靜な政治家であるのだ」。〔レーニン全集、ロシア語版、第二六卷、二三八頁〕

黨は例えば階級が政治的におくれているために、黨の政策が階級の信頼と支持とをまだ受けていないような場合、例えば事件がまだよく熟していないために、その政策の正しいことを階級に納得させることがまだできなかったような場合、黨の政策が一般的に正しいという理由だけを根據にして、大衆の決定的な行動を組織するに當り、創意性と指導とを、自分が擔當しなければならぬとみなすことができるであろうか？ いや、できない。かかる場合に、黨がもし眞の指導者たらんと欲するならば、黨は時期を待つことを心得ていなければならぬし、その政策の正しいことを大衆に納得させなければならぬし、大衆が自分自身の經驗にもとずいて、この政策の正しいことを自ら納得するように援助しなければならぬ。

レーニンはこう言っている――

「もし革命黨が、革命的諸階級の先進的部隊内において、また國內において、大多數を有していない場合には、蜂起ということは問題となり得ない」。〔レーニン全集、ロシア語版、第二一卷、二八二頁〕

* 傍點は私による。――イ・スターリン、

「労働者階級の大多数の見解に轉換が起ることなしには、革命は不可能であり、しかも、この轉換は、大衆の政治的經驗によつてつくりだされるのである」。〔レーニン全集、ロシア語版、第二五卷、二二一頁〕

「プロレタリア前衛は、思想的に獲得されている。これが主要なことである。これなくしては、勝利への第一歩をもふみだすことはできない。だがここから、勝利を得るまでにはまだまだ遠いのである。前衛だけで勝利することはできないことだ。全階級が、廣汎な大衆が前衛を直接に支持するという立場、もしくは少くとも前衛に對して、好意的中立の立場と前衛の敵を支持するなどということが全くできないような立場をまだとつていないうちに、前衛のみを決定的な戰鬥に投じさせることは、愚かなことであるばかりでなく、また犯罪でもあるだろう。だが眞に全階級が、勤勞者、及び資本によつて壓迫されているものの眞に廣汎な大衆がかような立場をとるに至るためには、ただ宣傳だけでは、煽動だけでは、不十分である。これがためには、これら大衆自身の政治的經驗が必要である」。〔前掲書、二二八頁〕

わが黨が、一九一七年のレーニンの四月テーゼから十月蜂起に至る期間において、正にこのように行動したことは、周知の通りである。そしてわが黨がレーニンのこの指示にしたがつて行動したからこそ、黨は蜂起において勝利を得たのである。

以上の如きが全體において、前衛と階級との正しい相互關係の諸條件である。

黨の政策が正しく、前衛と階級との正しい關係が侵害されていない場合、指導するということは何を意味するか？

こういう情勢下で指導するということは、黨の政策が正しいということを大衆に納得させ、大衆を黨の立場まで引きよせ、大衆自身の経験に基いて、彼らが黨の政策の正しさを悟ることを容易ならしめるようなスローガンを掲げ、これを實行し、大衆を黨の意識水準まで引き上げ、かようにして大衆の支持と、決定的な闘争に對する大衆の用意とを確保することを心得ることを意味している。

それだから、納得させるといふ方法は、黨が労働者階級を指導するための基本的な方法である。レーニンはこういつている——

「われわれがロシアにおいて現在、すなわちロシアと連合國とのブルジョアジーに對する二カ年半に亘る未曾有の勝利の後に、「獨裁の承認」を労働組合加入の條件とすれば、われわれは馬鹿げたことをやり、大衆に對するわれわれの影響を打ちこわし、メンシエヴィキ共を援助したことになるであらう。なせならば、共産黨員の全任務は、おくらせているものを納得させ、彼らの間で活動することを心得ていることであつて、頭の中だけで考えた子供じみた「左翼的」なスローガンをもつて、彼らと自分との間に障壁を築くことではないからである」。——（レーニン全集、ロシア語版、第二五卷、一九七頁）

このことは勿論、黨はすべての労働者を最後の一人まで納得させなければならないこと、その後でのみ行動にとりかかることができ、その後でのみ行動を開始することができ、というふう

に解釋してはならない。斷然いけない！これはただ、決定的な政治的な行動に出るよりも前に、黨は永い間の革命的活動によつて、労働大衆の大多數の支持を、少くとも階級の大多數の好意的な中立を、自己のために確保しなければならぬということの意味するのみである。そこからざる場合

には、勞働者階級の大多數を黨の味方に獲得することは勝利を得べき革命にとつて必要缺くべからざる條件であるというレーニンの命題は、そのすべての意味を失なつてしまふことになつたであらう。

ところが、少數者が大多數の意志に自由意志をもつて服従することを欲しない時、またそれに同意しない時には、どんなふうにもこの少數者に對すべきか？ 黨は大多數の信頼を受けていて、大多數の意志に服従するように少數者を強制することができるか、また黨はそうしなければならぬか？ そうだ、そうすることができるとし、またそうしなければならぬ。指導ということとは、大衆に對する黨の働きかけの基本的な方法としての、大衆を納得させるという方法によつて確保される。だがこのことは、強制を排除するものではなく、この強制が勞働者階級の大多數の黨にたいする信頼と支持とをその基礎としているときには、また大多數をよく納得させることができた後に、少數者に對して強制が適用されるようなときには、かえつて、強制の適用が豫想されるのである。

このことに關しては、勞働組合にかんする論争の時期に起つたわが黨内の争論を想い起すべきであらう。當時、反對派の誤謬、ツェクトラン（鐵道水上運輸従業員合同組合中央委員會）の誤謬はどの點にあつたか？ 反對派が當時強制は可能であるとみなしたことにあつたのではなかつたか？ いやその點ではない。當時の反對派の誤謬は、自己の立場の正しいことを大多數に納得させることができず、大多數の信頼を失つていた反對派が、それにもかかわらず、強制の手段を用い、大多數の信頼を得ている人々の『大掃除』を主張し始めたことにあつたのである。

レーニンは當時、第十回黨大會で、勞働組合についての自分の演説の中で次のように言つて
いる――

「労働者階級の前衛と労働大衆との間の相互關係、相互的信賴を確立するためには、もしツェクトランが誤謬を犯したとすれば……その誤謬を訂正することが必要であったのである。しかるにこの誤謬を辯護しはじめるときには、それは政治的危険の源となるのである。もし、クトウゾフがここでいい現しているような氣持ちによつて、民主主義の意味でできるだけのことをやらないならば、われわれは政治的破綻に立ち至つたであろう。先ず第一に、われわれは納得させなければならぬ。そしてそれから、強制しなければならぬ。われわれは、如何なることがあつても、はじめには納得させなければならぬ。そしてそれから強制しなければならぬ*。われわれは廣汎な大衆を納得させることをよくなし得なかつた、そして前衛と大衆との正しい相互關係を侵害したのであつた」。(レーニン全集、ロシア語版、第二六卷、二三五頁)

レーニンは彼のパンフレット『労働組合について』の中で、これと同じことを言っている——
 「われわれが強制の基礎として最初に納得の方法を用い得た時には、われわれは、正しく、また成功裏に、強制を適用しえたのであつた」。(前掲書、七四頁)

そしてこれは、完全に正しいのである。なせならばかかる條件なしには、いかなる指導も不可能だからである。なせならば、ただかようにしてのみ、もし黨が問題となるときには黨内の行動の統一を、もし全體としての階級が問題となるときには、階級行動の統一を、確保することができるからである。このことなしには、労働者階級の陣營には分裂と分散と壊廢とがおこるのである。

以上の如きが大體において、黨による労働者階級の正しい指導の根本原則である。

* 傍點は私による。——イ・スターリン、

指導に對するこれと異なつたあらゆる解釋は、サンヂカリズムであれ、無政府主義であれ、官僚主義であれ、その他何でも好みのものでありえようとも、ボルシエヴィズムでないだけであり、レーニン主義ではないだけである。

黨と労働者階級、前衛と勤勞者大衆との間に正しい相互關係が存在している場合には、プロレタリアートの獨裁を黨の指導（「獨裁」）に對立させてはならない。しかして、このことから、黨と労働者階級とを、また黨の指導（「獨裁」）と労働者階級の獨裁とを同一視してはなおさらいけないということになる。黨の「獨裁」をプロレタリアートの獨裁と對立させてはならないという根據に基いて、ソリンは「プロレタリアートの獨裁はわが黨の獨裁である」というまちがつた結論に到達した。

だがレーニンは、かように對立させることの許すべからざることだけについて述べているのではない。レーニンはそれと同時に「大衆の獨裁を領袖の獨裁に」對立させることの許すべからざることについても、述べているのである。この根據に基いて、領袖の獨裁をプロレタリアートの獨裁と同一視してはどうであらうか？ かようなふうに進めて行くなれば、われわれは「プロレタリアートの獨裁はわが領袖達の獨裁である」といわなければならぬであらう。しかも實をいえば、黨の「獨裁」をプロレタリアートの獨裁と同一視する政策は、正にこういう馬鹿げた結論にこそ導くものなのである……。

この點では、ジノヴィエフはどう問題をたてているか？

ジノヴィエフは、本質的には、ソリンと同じく、黨の獨裁をプロレタリアートの獨裁と同一視するといふ、同じ立場に立つている。だが、ただ相違するところは、ソリンがもつと率直に、もつとはつきりと表現しているのに反して、ジノヴィエフは「まわりくどく言つてゐる」點である。こ

のことを納得するには、ジノヴィエフの著書「レーニン主義」から、ただ次の箇所を引用するだけで十分である。

ジノヴィエフはこういつている——

「ソヴェト同盟に存在している制度は、その階級的内容という見地からいえば何であるか？ それは、プロレタリアートの獨裁である。ソ同盟における権力の直接の主動力は何か？ 何者が労働者階級の権力を實現しているか？ 共産黨である！ この意味において、わが國には*黨の獨裁がある。ソ同盟における権力の法的形態は何か？ 十月革命によつて創造された國家制度の新しい型は何か？ それはソヴェト體制である。兩者は決して相互に矛盾對立するものではない」。

兩者が相互に矛盾對立しないということは、もし黨の指導を、労働者階級全體に對する黨の獨裁というように解釋するならば、勿論正しい。だが、この根據に基いて、プロレタリアートの獨裁と黨の「獨裁」、ソヴェト體制と黨の「獨裁」との間に、等符號などをどうして附すことができるか？ レーニンはソヴェト體制をプロレタリアートの獨裁と同一視した。しかも彼は正しかったのである。なせならば、ソヴェトは、わが國のソヴェトは、黨の指導の下にプロレタリアートの周圍に勤勞者大衆が結束した組織だからである。だがレーニンは、何時、どこで、彼の如何なる勞作の中で、ジノヴィエフが今やつているように、黨の「獨裁」とプロレタリアートの獨裁、黨の「獨裁」とソヴェト體制との間に等符號を附したか？ 黨の指導（「獨裁」）のみではなく、領袖の指導（「獨裁」）もまた、プロ

* 傍點は私による。——イ・スターリン、

レタリアートの獨裁と矛盾對立しない。この根據にもとづいて、わが國はプロレタリアート獨裁の國である、すなわち黨獨裁の國である、すなわち領袖獨裁の國であると宣言してはどうであろうか？ しかも、ジノヴィエフがこつそりと、おすおすと實行している、黨の「獨裁」とプロレタリアートの獨裁とを同一視する「原則」は、正にこういう馬鹿げた結論にこそ導くものなのである。

レーニンの多數の勞作の中で、レーニンがほんの序に黨獨裁の問題に少しふれている場合を、私はただ五回だけ見出すことができた。

第一の場合——これは、エス・エルとメンシエヴィキとに對する論戰であつて、そこでレーニンはこういつている——

「一黨獨裁をやつているといつてわれわれを非難し、諸君も聞かれたように、統一的社會主義戰線を提案するとき、われわれはこういう——「そうだ、一黨獨裁だ！われわれは、一黨獨裁を固守しており、この地盤からはなれ去ることはできない。なせならば、それは幾十年にわたつてすべての工場ならびに産業プロレタリアートの前衛の地位を獲得した黨だからだ」と」（レーニン全集、ロシア語版、第二四卷、四二三頁）。

第二の場合——これは「コルチャツクに對する勝利について勞働者農民にあてた手紙」であつて、そこでレーニンはこう言つている——

「人々は（特にメンシエヴィキとエス・エル、すべて、彼等の中の「左翼」でさえ、）「一黨獨裁」、ボルシエヴィキ・共產主義者の黨の獨裁という化物で農民を脅かしている。

農民は、しかしコルチャツクの例によつて、この化物を恐れる必要がないということを學んだのである。

地主と資本家の獨裁（すなわち鐵の權力）か、それとも労働者階級の獨裁か、だ。（レーニン全集、ロシア語版、第二四卷、四三六頁）

第三の場合——これは、タンナーとの論戰において、コミンテルンの第二回世界大會で行われたレーニンの演説である。この演説は私が先に引用したものである*。

第四の場合——これは、バンフレット「共產主義における「左翼」小兒病」の中の數行である。これに該當する引用文は、すでに前に引用されている**。

そして、第五の場合——これは、「レーニン選集」第三卷に發表されたプロレタリアートの獨裁についての大綱草案であつて、それには、「一黨獨裁」という小見出しがついている。（「レーニン選集」、ロシア語版、第三卷、四九七頁）

以上五つの中の二つの場合、すなわち最後と第二の場合においては、レーニンは「一黨獨裁」というこの言い現しかたが正確でなく、轉義であることをはつきりと強調して、括弧をつけてこの語を用いていることを、指摘しなければならぬ。

また同様に、これらの場合のすべてにおいて、レーニンは「黨の獨裁」ということを、カウツキー一味の中傷的作り話に反して、労働者階級に對する獨裁（「鐵の權力」としてではなく、「地主と資本家」に對する獨裁と解釋していることを指摘しなければならぬ。

* 本書二一九——二二〇頁參照。編集部

** 本書二二七、二二八、二二九、二三一、二三五、二三六、二三七頁參照。編集部

レーニンがプロレタリアート獨裁について、またプロレタリアート獨裁の體系内における黨の役割について論じており、または單にこれにふれている彼の諸勞作、すなわち基本的なものたる第二義的なものたるを問はず、そのうちのただ一つの中にも、「プロレタリアートの獨裁はわが黨の獨裁である」というようなことについては、暗示さえもないということとは、特徴的なことである。否、反對に、これらの勞作の各頁、各行は、かような言い現しかたに對して聲を大にして反對しているのである。（「國家と革命」、『プロレタリア革命と變節者カウツキー』、「共產主義における「左翼」小兒病」その他參照）

なおもつと特徴的なことは、レーニンの直接指導の下に作成され、レーニンが黨の役割と任務との正しい定義すけの模範として、自分の演説で幾回となく引き合に出したところの、政黨の役割についてのコミンテルン第二回世界大會のテーゼの中には、われわれの黨の獨裁について一言も、文字通り一言も見出されないということである。

すべてこれは、何を物語っているか？

それは次のことを物語っているのである——

イ、レーニンは、「黨の獨裁」という言い現し方を、申分のない、正確なものとは、みなさなかつた。それ故に、この言い現し方は、レーニンの勞作の中では極めて稀にしか用いられておらず、時としては括弧すきで用いられているのである。

ロ、レーニンが反對者との論戦で、どうしても黨の獨裁ということを書べなければならなかつたごく僅かな場合にも、レーニンは、通常「一黨獨裁」、すなわち、わが黨が單獨で權力についており、

わが黨が他の諸黨と權力を分たないということについて述べているのであつて、その上にレーニンはいつも、労働者階級に對する黨の獨裁ということは、黨による指導、黨の指導的役割と理解しなければならぬと説明したのであつた。

ハ、レーニンがプロレタリアート獨裁の體系内における黨の役割を、科學的に規定することを必要と認めたすべての場合に、彼は、専ら労働者階級に對する黨の指導的役割について語つたのである（そして、こういう場合は何千回となくあつた）。

ニ、それだからこそ、レーニンは黨の役割についての基本的な決議の中に——私はコミンテルン第二回世界大會の決議のことを言つているのである——「黨の獨裁」といふ言ひ現し方を書き入れようとは「思い及びもじなかつた」のである。

ホ、黨の「獨裁」つまりまた「領袖の獨裁」をも、プロレタリアートの獨裁と同一視し、もじくは同一視しようとしてゐる同志等は、レーニン主義の見地から言つて正しくなく、政治的には近視眼である。というのは、彼らはこれによつて、前衛と階級との正しい相互關係の諸條件を侵害しているからである。

以上にあげた保留條件をつけずに用いた「黨の獨裁」といふ言ひ現し方が、われわれの實踐的活動において幾多の危険と政治的缺陷を引き起し得るものである、ということについては、もはや私は述べない。保留條件なしでこの言ひ現し方を用いることは、こつそりと次のようにささやくことと同じであらう——

イ、非黨員大衆に向つては、文句をいふな、自分の意見をいふな、なせなら、黨はなんでもできるんだから、われわれのところは黨の獨裁なんだから。

ロ、黨のカードルにむかつては。もつと思いきつてやれ、もつとしつかりきめつけろ、非黨員大衆の聲には耳を傾けなくてもいいのだ——われわれのところは黨の獨裁なんだ。

ハ、黨の上層部にむかつては。自己満足にふけてもいいんだ、少く位はうぬぼれたつてかまわないんだ、なせなら、われわれのところは黨の獨裁、「つまり」領袖の獨裁でもあるんだから。

黨が注意深く大衆の聲に耳を傾けようとする用意が、われわれにとつて特別な價值をもつており、大衆の要求に對して親切敏感であるということが、わが黨の基本的な戒律であり、政策上において特別な慎重さと、特別な屈伸性とが、黨に要求されており、うぬぼれという危険が、大衆を正しく指導するにあたり、黨が直面している最も重大な危険の一つである時、すなわち大衆の政治的積極性の高揚の時期にある今こそ、これらの危険について述べることが時宜に適しているのである。

わが黨の第十一回大會で、レーニンが述べたつぎの貴重な言葉を想いおこさざるを得ない——

「人民大衆の中では、吾々（共産黨員——イ・スターリン）はなんといつたところで、まだまだ大海の中の一滴である。そしてわれわれが、人民の意識していることを正しく言い現す時のみ、われわれは統治して行くことができるのである。このことなほには、共産黨はプロレタリアートを導いて行くことが出来ず、またプロレタリアートは、大衆を導くことができないであろう。そして、全機械はばらばらに崩壊してしまふであろう」。〔レーニン全集、ロシア語版、第

「人民の意識、正しく言い現すこと」——これが正に、プロレタリアート獨裁の體系内における基本的指導力としての、榮譽ある役割を黨に保障するところの、必要缺くべからざる條件でもあるのである。

六、一國に於ける社會主義の勝利についての問題

パンフレット『レーニン主義の基礎』（一九二四年五月、第一版）の中には、一國における社會主義の勝利の問題について二つの定式づけがある。第一の定式づけはこうである——

「從來は、ブルジョアジーに對して勝利するためには、すべての先進國、あるいは少くとも、かかる國の大多數のプロレタリアの共同進出が必須であると考えて、一國における革命の勝利は不可能であるとみなしていた。だが、現在においては、この見地はもはや實際とは合致しない。現在では、かかる勝利が可能であるということから出發しなければならぬ。なせならば、帝國主義の情勢の下における資本主義諸國の發展の不均等にして飛躍的な性質、不可避的な戰爭に導く帝國主義内部の破局的矛盾の發展、世界のすべての國における革命運動の成長——すべてこれらのことは、個々の國におけるプロレタリアートの勝利が可能であるという結論に導くばかりでなく、またそれが必至的であるという結論に導くからである」。——（『レーニン主義の基礎』參照）

この命題は完全に正しい、そしてこれは何らの註解をも必要としない。この命題は、他の諸國に

において、革命が同時に勝利を得ていないのに一國でプロレタリアートが権力を掌握するということは空想であるとみなしている。社會民主主義者達の理論に反對して向けられているのである。

だが、パンフレット「レーニン主義の基礎」の中には、もう一つ第二の定式すけがある。そこにはこういわれている――

「だが、一國內でブルジョアジーの権力を打倒し、プロレタリアートの権力を樹立することは、まだ社會主義の完全なる勝利を保證することを意味しない。社會主義の主要な任務、すなわち社會主義的生産を組織することはまだ將來に残されている。いくつかの先進國のプロレタリアートの共同の努力なしに、この任務を解決することができらるであろうか、一國において社會主義の終局的な勝利を達成することができるであろうか？ 否、出来はしない。ブルジョアジーを打倒するためには一國の努力で十分である――このことについては、わが國の革命の歴史が物語っている。だが社會主義の終局的な勝利のためには、社會主義的生産を組織するためには、一國の努力、特にロシアのような農民國の努力だけではもはや不十分である。そのためにはいくつかの先進國のプロレタリアートの努力が必要である」。――（「レーニン主義の基礎」第一版参照）

この第二の定式すけは、他の諸國において勝利が存在しない場合には、一國におけるプロレタリアートの獨裁は「保守的なヨーロッパに反對して持續すること」ができないといったレーニン主義に對する批判者の主張に反對して、トロツキストに反對して向けられたものであった。

この限りでは――しかしただこの限りでは――この定式すけは、その當時（一九二四年五月）十分なものであった。そしてそれは疑いもなく、ある程度の役に立つたのであった。

だが、その後、この分野におけるレーニン主義に對する批判が黨内において既に克服され、そ

て新しい問題、すなわちわが國の力で、外部からの援助なしに、完全な社會主義社會の建設を完成する可能性についての問題が日程にのぼされるに至つて、この第二の定式すけはもはや明白に不十分なものであり、従つてまた正しくないものとなつたのである。

しからば、この定式すけの不十分さはどの點にあるか？

その不十分さは、この定式すけが二つの異なる問題、すなわち一國の力によつて社會主義の建設を完成することが可能であるか、という問題——この問題に對しては肯定的な答えが與えられなければならない——と、プロレタリアートの獨裁を有する國は、他の幾多の國に革命が勝利することなしにも、武力干渉から、また従つて舊制度の復古から完全に保障されているとみなすことができるかという問題——この問題に對しては否定的な答えが與えられなければならない——という二つの問題を一つの問題に結びつけているところにある。この定式すけが、一國の力をもつては社會主義社會を組織することは不可能である——それは勿論正しくない——と考えさせる動機を與える可能性をもつてゐることについては、私はもはや述べない。

この根據から私は、私のパンフレット「十月革命とロシア共產主義者の戰術」(一九二四年十二月)においてこの定式すけの形を變え、訂正し、この一つの問題を二つの問題、すなわちブルジョア制度の復古からの完全な保障の問題と一國における完全な社會主義社會の建設、完成の可能性の問題とに分けたのである。これは第一には、「社會主義の完全なる勝利」を「若干國のプロレタリアートの共同の努力」という方法によつてのみ可能であるところの、「舊制度の復古からの完全な保證」として解釋し、また、第二には、レーニンのパンフレット「協同組合について」に基いて、われわれは完全な社會主義社會の建設を完成するために必要なすべてのものをもつてゐるといふ争う餘地のない真理

を宣明することによつて、達成されたのである。(『十月革命とロシア共産主義者の戦術』参照) 問題の新しいこの定式づけこそは、資本主義の安定化と関連して、一國における社會主義の勝利に關する問題を取扱つており、わが國の力によつて社會主義の建設を完成することは可能なことであり、かつ必要なことであるともみなしていた周知の第十四回黨會議の決議『コミンテルンとロシア共産黨(ボルシェヴィキ)との任務について』(一九二五年四月)の基礎となつたものであつた。

この定式づけはまた、第十四回黨會議直後、すなわち一九二五年五月に出版された私のパンフレット、『第十四回黨會議の活動の總決算について』の基礎ともなつたのである。

このパンフレットでは、一國における社會主義の勝利の問題をどういうふうに立てるべきかということについて、次のように述べられている――

『わが國は、二つの矛盾のグループを示している。矛盾の一つのグループ、これはプロレタリアートと農民の間に存在しているところの國內的な矛盾である(ここでは一國における社會主義の建設完成が問題となつていたのである――イ・スターリン)。他の矛盾のグループ、それは社會主義國としてのわが國と、資本主義國としての爾餘のすべての國との間に存する國外的な矛盾である(ここでは社會主義の終局的な勝利が問題となつていたのである――イ・スターリン)……。『一國の努力によつて完全に克服し得られる第一の矛盾のグループを、その解決のためには若干の國のプロレタリアの努力を必要とする第二の矛盾のグループと混同するものは、とりもなおさ

* 問題のこの新しい定式づけは、その後にあたつてパンフレット『レーニン主義の基礎』のその後の版で、古い定式づけの代りに用いられた。

す、レーニン主義に對して極めて大なる誤謬を犯すところの者であり、それは頭の混亂した人間であるか、または矯正せられぬ日和見主義者かである」。(「第十四回黨會議の活動の總決算について」参照)

わが國における社會主義の勝利の問題について、このバンフレットは次のように述べられて

「われわれは社會主義の建設を完成することができる。そしてわれわれは労働者階級の指導の下に農民と一緒に社會主義を建設するであろう」。……なせならば、「わが國におけるプロレタリアート獨裁の下では……ありとあらゆる國內的な困難を克服して、完全な社會主義社會の建設を完成するために必要なすべての條件があるからであり、なせならば、われわれは、われわれ自身の力によつてこれらの困難を克服することができるからであり、また克服しなければならぬからである」。(前掲書、参照)

社會主義の終局的な勝利の問題については、前記のバンフレットにはこう述べられている——

「社會主義の終局的な勝利とは、武力干渉の試みからの、またすなわち復古の試みからの完全な保障である。というのは、多少とも眞剣な復古の試みは、外からの眞剣な支持があつた場合にのみ、國際資本の支持があつた場合にのみ、起り得るからである。それだから萬國の労働者がわが國の革命を支持するということが、いわんや、これらの労働者がたとえ若干の國においてにせよ、勝利を占めるということは、最初に勝利した國を武力干渉と復古との試みから完全に保障するための必須條件であり、社會主義の終局的な勝利のための必須條件なのである」。(前掲書参照)

これで明白だ、と思う。

この問題が私のパンフレット「質問と解答」(一九二五年六月)、及びソ同盟共産黨(ボルシェヴィキ)第十四回大會における中央委員會の政治報告(一九二五年十二月)の中で、これと同じ意義で解釋されていることは、周知の通りである。

事實はこの通りである。

これらの事實は、ジノヴィエフをも含めてすべての同志達に、周知のことであると私は考える。しかるに黨内における思想闘争のほとんど二年を経た今日、そしてまた第十四回黨會議(一九二五年四月)において決議が採用された後に、ジノヴィエフが第十四回黨大會(一九二五年十二月)におけるその結語で、一九二四年四月にかかれたスターリンのパンフレットから、古い、全く不十分な定式づけを、一國における社會主義の勝利についての、すでに決定されている問題を解決するため基礎として引つぱりだしてもかまわないと考えるならば、ジノヴィエフのこの獨特なやり方は、彼がこの問題において全く混乱してしまっていることを物語るにすぎないのである。黨がすでに前進した後で黨を背後に引きもどし、第十四回黨會議の決議が、黨中央委員會總會で確認された後にこの決議を回避するということは、矛盾の中に救い難くおちこんでいることであり、社會主義の建設という大業を信じないことであり、レーニンの道からそれることであり、自分自身の敗北を裏書きすることである。

一國における社會主義の勝利の可能性とは、どういうことか？

それは、わが國內部の力によつて、プロレタリアートと農民の間にある矛盾を解決することが可能であるということであり、他の諸國のプロレタリアの同情と支持を受けてはいるが、他の諸國にお

いてプロレタリア革命の勝利がまだなくとも、わが國においてプロレタリアートが權力を獲得し、完全な社會主義社會の建設を完成するためにこの權力を利用することが可能であるということである。

こういう可能性なくしては、社會主義の建設は見透しのない建設であり、社會主義の建設を完成する確信のない建設である。社會主義の建設を完成することが可能であるという確信をもたずに、また、わが國が技術的におくれていることは、完全な社會主義社會の建設を完成するための克服し得ない障得ではないという確信をもたずに、社會主義を建設することはできない。かような可能性を否定することは、社會主義建設の大業を信じないことであり、レーニン主義からはなれることである。

他の諸國において革命が勝利することなしには、一國において社會主義の完全な、終局的な勝利は不可能であるということ、はどういうことか？

これは、少くとも若干の國において革命が勝利することなしには、武力干渉からの完全な保障、従つてまた、ブルジョア制度の復古からの完全な保障は不可能だということである。この論争の餘地なき命題を否定することは、インターナショナルイズムから離れることであり、レーニン主義から離れることである。

レーニンはこういつている――

『われわれは一つの國家の中で生活しているのみでなく、諸國家の體系の中で生活しているのであつて、ソヴェト共和國が帝國主義諸國家といつじよに並んで永い期間にわたつて存在して行けるなどということは、考え得られないことである。結局のところ、一方が勝つか、他方が勝つかである。そして、この結果がやつて来るまでの間は、ソヴェト共和國とブルジョア諸國家との間の、幾多の最も戦慄すべき衝突は避くべからざるものである。このことは、支配している階

級すなわちプロレタリアートが、支配することを欲しさえするならば、また支配しようとするならば、自分の軍事的組織によつてもまた、このことを證明しなければならぬということを意味している。』（レーニン全集、ロシア語版、第二四卷、一二二頁）

レーニンは、また他の箇所でもこう言っている――

「われわれの前には、極度に不安定な、だがそれにしても疑いのない、争う餘地のない、ある程度の均衡がある。この均衡が永く続くかどうかを、私は知らないし、またこれを知ることができないと考える。そして、それだから、われわれとしては極めて用心深くすることが必要である。そして、われわれの政策の第一の戒律、一年間のわれわれの政府としての活動から生れて來た最初の教訓、すべての労働者農民が好く體得しなければならぬ教訓は、用心を怠つてはならないということ、われわれに對して、非常に深い憎惡を露骨に示している人々や階級や政府によつてわれわれが包圍されていることを、記憶せねばならぬということである。われわれは、いつも敵からのあらゆる襲撃とはほんの紙一重のへだたりしかないところ立っていることを記憶していなければならぬ。』（レーニン全集、ロシア語版、第二七卷、一一七頁）

これで明白だ、と思う。

さて、一國における社會主義の勝利の問題について、ジノヴィエフはどんなふうにみているか？

まず聞いてくれたまえ――

「社會主義の終局的な勝利ということは、少くとも一、階級の根絶、従つて、二、一つの階級の獨裁、すなわち、現在の場合ではプロレタリアート獨裁の撤廢と理解すべきである」。

ジノヴェエフは更に、こう言つてゐる——「わがソヴェト同盟において、一九二五年に問題がどうなつてゐるかを一層正確に了解するためには、二つのことを區別する必要がある。すなわち、一、社會主義を建設する確實な可能性——社會主義を建設するというかやうな可能性は、勿論一國の範圍内でも全く考え得られることである——そして、二、社會主義の終局的な建設の完成と鞏固化、すなわち社會主義制度、社會主義社會の實現である」。

これらすべてのことは、何を意味し得るであろうか？

と

これは、ジノヴェエフが一國における社會主義の終局的な勝利、武力干渉と復古から保障されることと理解せずに、社會主義社會の建設を完成する可能性と理解してゐることを意味してゐる。一國における社會主義の勝利ということ、ジノヴェエフは、社會主義建設の完成に導くことができず、また建設の完成に導いてはならないやうな、社會主義の建設と理解してゐるのである。見透しのない、ゆきあたりばつたりの建設、社會主義社會の建設を完成することの不可能な社會主義の建設——これがジノヴェエフの見地である。

社會主義の建設を完成する可能性なくして社會主義を建設すること、建設は完成されないだらう、ということを知つていながら、建設すること——こういう馬鹿げたことをしやべるまでに、ジノヴェエフは立ちいたつたのである。

しかししてこれは、問題に對する愚弄であつて、問題を解決することではない！

次に、第十四回黨大會におけるジノヴェエフの結語の中からもう一つの箇所をあげて見よう——「たとえば同志ヤコヴレフが、最近のクルスク縣黨會議において、どういふことを言うにいたつたかを見てくれたまえ。彼は次のやうな質問を出してゐる。「資本主義國と言う敵に四面

から包圍されていて、われわれは、一國において社會主義の建設を完成することができらうか、またこういう條件の下に、われわれは一國において社會主義の建設を完成することができらうか」と。そして彼はこう答える——「以上のべたすべてのことにもとずいて、われわれは社會主義を建設しているばかりでなく、われわれが今のところひとりぼっちであり、今のところ世界において唯一のソヴェトの國であり、ソヴェト國家であるにも拘らず、この社會主義建設を完成するであらうといつて差支えないのである」。(「クルスカヤ・ブラズダ」一九二五年十二月八日發行、第二七九號)と。一體、これはレーニンの問題の立て方だらうか？　ここには民族的局限性の臭いがあり、はじまないだらうか？　*」

かようにして、ジノヴィエフの意見によれば、一國における社會主義建設完成の可能性を認めることは民族的局限性の見地に立つことであり、かような可能性を否定することはインターナショナルイズムの見地に立つことを意味するということになる。

だが、もしこれが正しいならば、一般にわが國經濟の資本主義的要素に對する勝利のために闘争を遂行するだけの價值があるだらうか？　また上述したことから、かような勝利は不可能であるといふことになりはしないだらうか？

わが國經濟の資本主義的要素の、前に降服すること——これがジノヴィエフの論證の内的論理の行きつくところである。

* 傍點は私による。——イ・スターリン

そしてレーニン主義とは何らの共通点をもっていないこの馬鹿げたことをジノヴィエフは、われわれの前に「インターナショナルイズム」として「百パーセントのレーニン主義」として、持ち出して来るのである！

ジノヴィエフは、社会主義建設の最も重大な問題において、メンシエヴィキたるスハノフの見地に轉落して、レーニン主義からはなれていると、私は斷言する。

ひるがえつてレーニンを見よう。まだ十月革命前、すなわち一九一五年八月、一國における社会主義の勝利について、レーニンはこういつている――

「経済的及び政治的發展の不均等性は、資本主義の絶対法則である。ここからして社会主義の勝利が、はじめには少數の資本主義國で、または單獨に一つの資本主義國でさえ可能であるということになる。當該國の勝利したプロレタリアートは、資本家を收奪し、自國において社会主義的生産を組織して、*他の諸國の被壓迫階級を自分の味方に引きつけ、これらの國で資本家に反對する蜂起をおこし、必要な場合には諸搾取階級と彼らの國家に對して武力に訴えてさへ進出して、爾餘の資本主義世界に對抗して、起ち上るであろう」。――（レーニン全集、ロシア語版、第一八卷、二三二——二三三頁）

「自國において社会主義的生産を組織して」という私が傍點をうっているレーニンの文句は、何を意味しているか？これは、勝利を占めた國のプロレタリアートは、權力を掌握した後、自國において社会主義的生産を組織することができるし、また組織しなければならぬことを意味している。とこ

*傍點は私による。——イ・スタリリン

ろで、「社會主義的生産を組織する」ということは、何を意味するか？ それは、社會主義社會の建設を完成することを意味している。レーニンのこの明白な、確定的命題が、何らこれ以上の註解を必要としないことは、おそらく論證するまでもないであろう。そうでない場合には、一九一七年十月にレーニンがプロレタリアートに呼びかけて、權力掌握のために蹶起をうながしたことは、理解されなかつたであらう。

レーニンのこのはつきりした命題は、社會主義の建設を完成する可能性がないのに、われわれは「一國の範圍内では」これを建設することができるといふ、ジノヴィエフの混亂した、反レーニン主義的「命題」とは雲泥の相違があることを、諸君は見られるであろう。

この命題は、一九一五年、すなわちプロレタリアートが權力を掌握する前に、レーニンが述べたところのものである。だが、權力掌握の經驗を経た後、すなわち一九一七年後に、レーニンは見解を變えたのであろうか？ ひるがえつて、一九二三年に書かれたレーニンのパンフレット「協同組合について」を見よう。

レーニンはこう言っている——

「全くのところ、すべての大なる生産手段に對する國家權力、プロレタリアートの手中にある國家權力、このプロレタリアートと幾百萬の小農及び極小農との同盟、農民に對する指導をこのプロレタリアートのために確保すること等々——これらは、われわれが、かつては小商人的であるとして輕蔑し、またある點から見れば、現在ネツプの下においてもかかるものとして輕蔑する權利を持つていふところの協同組合から、然りひとり協同組合のみから出發して、完全な社會主義社會の建設を完成するために必要なすべてのもの、必要缺くべからざるすべ

てのものではなからうか？ *これはまだ社會主義社會建設の完成ではないが、しかしそれは、この建設を完成するために必要にして十分なすべてのものである*。 (レーニン全集、ロシア語版、第二七卷、三九二頁)

換言すれば、われわれは完全な社會主義社會の建設を完成することができるし、また完成しなればならないのである。なせならば、われわれはこの建設の完成に必要なにして十分なすべてのものを掌中にもつてゐるからである。

これ以上はつきりと言ひ現すことは、困難であると思ふ。

このレーニンの模範的な命題を、ヤコヴレフに對するジノヴィエフの反レーニン主義的な、しつべいがえしと比べて見たまえ。そうすれば、ヤコヴレフが一國における社會主義建設完成の可能性についてのレーニンの言葉を、ただくり返しているのに過ぎないのに反して、ジノヴィエフは、この命題に反對してヤコヴレフを鞭打ちつつ、レーニンから離れて、メンシェヴィキたるスハノフの見地に、すなわち技術的におくれているために、わが國においては社會主義の建設を完成することは不可能であるという見地に立つにいたつたということを、諸君は理解されるであらう。

もしわれわれが社會主義の建設を完成することを豫想していなかつたとすれば、われわれは一體何のために一九一七年の十月に權力を掌握したか、ということとはわからないことになる。

一九一七年十月に權力を掌握すべきでなかつた——ジノヴィエフの論證の内的論理は、正にこういう結論に導くのである。

* 傍點は私による。——イ・スタトリン

社會主義の勝利についての最も重要な問題においてジノヴィエフは第十四回黨會議の周知の決議「コミンテルン執行委員會擴大總會と關連して、コミンテルン及びロシア共產黨（ボルシェヴィキ）の任務について」の中に明確に記録されているわが黨の明確なる決定に反對するにいたつたことを、更に私は斷言する。

この決議を見よう。この決議の中には、一國における社會主義の勝利について、こう述べられて
 いる――

「二つの正反對な社會制度が存在しているということは、資本主義による封鎖、經濟的壓迫の他の諸形態、武力干渉、復占の絶えまない脅威をよび起すのである。したがつて、社會主義の終局的な勝利*の唯一の保障、すなわち復古からの保障*は、幾多の國における勝利した社會主義革命である……」、「ブルジョアの諸關係の復古からの完全な保障」という意味*での社會主義の終局的な勝利は、ただ國際的規模においてのみ可能であると、レーニン主義は教えている……」「だが、このことから、ロシアの如きおくれた國では、技術的・經濟的に一層發達した諸國の「國家的援助」（トロツキー）なくしては完全な社會主義社會*の建設を完成することは不可能である」という結論は、決して生れて來ない*」。〔決議参照〕

かくして、ジノヴィエフが自著「レーニン主義」の中で與えている解釋とは全く反對に、決議は、社會主義の終局的な勝利を武力干渉と復古からの保障と解釋していることを、諸君は見られるであらう。

* 傍點は私による。――イ・スターリン、

諸君は、またジノヴィエフが第十四回黨大會での彼の結語において、ヤコヴレフに對するしつべい返しの中でやつている逆の斷言とは全く反對に、決議がロシアのようにおくれた國において、技術的・經濟的に一層發達した國からの「國家的援助」なくしても、完全な社會主義社會の建設を完成することが可能であると、認めていることを見られるであろう。

これを第十四回黨會議の決議に反對するジノヴィエフの鬭争と稱せずして、何と稱し得るであろうか？

もちろん黨の決議として、時として非難の餘地がないわけではない。黨の決議に誤謬が含まれていることもある。概して、第十四回黨會議の決議にも若干の誤謬が含まれていると豫想することができ。ジノヴィエフがこの決議を間違つているものと考えているというところもあり得ることだ。だがもしそうだとすれば、ボルシエヴィキらしく、これをはつきりと、また公然と言わなければならぬのである。しかるにジノヴィエフは、どうしたことか、それをしない。彼はむしろ他の道を、すなわち、第十四回黨會議の決議については黙つていて、何ら決議に對する公然たる批判をもせず、この決議に對して背後から攻撃するという道を選んだのである。ジノヴィエフは多分、この道が一番よく目的を達し得る道だと考えているのであろう。しかも彼の目的とするところは、ただ一つ、すなわち決議を「改善」し、レーニンを「ほんの少し」修正することである。ジノヴィエフが誤算していたことは、恐らく論證するまでもなからう。

ジノヴィエフの誤謬は、何から生じて來たのであるか？ また何處にこの誤謬の根源があるか？ この誤謬の根源は、私の考えでは、わが國が技術的におくれていることは、完全な社會主義社會の建設を完成するための克服し得ない障害であり、プロレタリアートは、わが國が技術的におくれている

るといふ理由のために、社會主義の建設を完成することができない、というジノヴィエフの確信の中にあるのである。ジノヴィエフとカメネフとは、かつて四月黨會議前の、黨中央委員會のある會議で、この論據をひつさげて乗り出さんと試みた。だが、彼等はじつべいがえしを喰つて、退却を餘儀なくされ、形式上は、彼らの見地とは對立的な見地に、すなわち中央委員會の大多數の見地に服従したのである。だが形式上この見地に服従したものの、ジノヴィエフは常にこの見地に對する鬭争をつずけて來たのである。ロシア共產黨（ボルシエヴィキ）中央委員會内のこの「事件」について、わが黨のモスクワ委員會は、レニングラード縣黨會議の書簡に對するその「回答」の中で、こう述べている――

「あまり以前のことではないが、カメネフとジノヴィエフとは、中央委員會政治局で、もし國際革命がわれわれを救わないならば、わが國が技術的並に經濟的におくれているために、われわれは國內の困難をよく克服することはできないであろうというような見地を擁護した。われわれの方は、中央委員會の大多數と共に、わが國が技術的におくれているにもかかわらず、しかもそのことにもかかわらず、われわれは社會主義を建設し得るであろうし、現にわれわれはこれを建設しており、また建設を完成するであろうと考へるのである。この建設は、もちろん世界的に勝利を占めた場合に比べて、はるかに遅々として進むであろうとわれわれは考へる。だがそれにもかかわらず、われわれは前進しているし、將來も前進するであろう。また、われわれは丁度これと同様に、カメネフとジノヴィエフの見地は、わが労働者階級とこの労働者階級のあとについていつている農民大衆との内部的な力に對する確信の缺如を表現しているものである、と考へる。この見地はレーニンの立場からはなれるものであると、われわれは考へる」。（「回答」參照）

この文書は、第十四回黨大會の最初の會議の時に出版物上に發表されたのだ。もちろん、ジノヴィエフは、大會中にもこの文書に對して、反對演説をする機會を持つていたのである。しかるにジノヴィエフとカメネフが、わが黨モスクワ委員會から彼らに對してなされたこの重大な彈劾に反對する證據を、見出さなかつたということは特徴的である。これは偶然なことであつたであらうか？ 偶然なことではないと、私は考へる。この彈劾はたぶん急所を衝いていたので。ジノヴィエフとカメネフは、この彈劾に「打ち勝ち得る」切り札が手元になかつたので、默殺をもつてこれに「答へた」のだ。

『新反對派』は、わが國における社會主義建設の勝利を信じていないということによつて、人々がジノヴィエフを非難していることに腹を立てている。だが、一國における社會主義の勝利についての問題が、まる一年間も討議された後、ジノヴィエフの見地が中央委員會の政治局によつて論駁されてしまつた（一九二五年四月）後、この問題に對してすでに確定的な黨の意見が作り上げられ、この意見が第十四回黨會議（一九二五年四月）の周知の決議に明確に記録された後、すなわちこれらすべての事實の後に、ジノヴィエフが自著『レーニン主義』（一九二五年九月）において、黨の見地に反對して立つことを決意するにいたつたとすれば、また彼がその後この反對論を第十四回黨大會においてくり返しているとすれば、これらすべてのこと、自分の誤謬を固守するこの頑強さ、この執拗さは、ジノヴィエフがわが國における社會主義建設の勝利に對する確信の缺如に感染しているということ、救い道のないほどに感染しているということによるにあらすして、どうしてこれを説明することができらるであらうか？

この自分の確信の缺如をインタナショナルイズムと解釋することは、ジノヴィエフの御隨意である。だが、一體、いつからレーニン主義の中心ともいうべき問題において、レーニン主義からはなれることが、わが國ではインタナショナルイズムとして解釋されはじめたのであろうか？

この場合、インタナショナルイズムと國際革命に反する罪を犯している者は、黨ではなくて、ジノヴィエフであるというのが、もつと正しいのではなからうか？ けれど「社會主義を建設している」わが國は、世界革命の根據地でなくて何であらうか？ だが、もしわが國が社會主義社會の建設を完成する能力を有していないとするならば、それは世界革命の眞の根據地であり得るであらうか？ もし、わが國が自國においてわが國經濟の資本主義的要素に對する勝利、社會主義建設の勝利を達成する能力をもつていないとするならば、わが國は萬國の労働者をひきつける最大中心點——わが國は現在疑いもなくそういう中心點である——として残りつづけることができるであらうか？ そんなことはできない、と私は考える。だが、これらのことからして、社會主義建設の勝利に對する確信の缺如、この確信の缺如の宣傳は、わが國から世界革命の根據地たる地位を奪うこととなり、わが國からこの地位を奪うことは、世界革命運動を弱らせる結果に導くことになりはしないであらうか？ 社會民主主義者の紳士諸君は、何をもつてわれわれから労働者を脅かし去らせていたであらうか？ それは「ロシア人には何もできやしない」という宣傳を以てであつた。おびただしい労働者代表團をわが國に惹きつけて、これによつて全世界における共產主義の地位を固めつつ、われわれは今何をもつて社會民主主義者に打撃を加えているか？ それはわれわれの社會主義建設の成功によつてである。だがそうであるとすれば、社會主義建設におけるわれわれの成功に對する確信の缺如を宣傳するものは、間接に社會民主主義者を助けているものであり、國際革命運動の發展規模を弱めるものであり、

不可避的にインターナショナルイズムから離れるものであるということは、明かなことではないであろうか？……

ジノヴィエフの「インターナショナルイズム」は、一國における社會主義建設の問題における彼の「百パーセントのレーニン主義」と比べて、少しもヨリ具合よくいつてゐるわけではないことを、諸君は見られるであらう。

それ故に、第十四回黨大會が「新反對派」の見解を「社會主義建設の大業に對する確信の缺如」であり、「レーニン主義の歪曲」であると規定したのは、正しかったのである。

七、社會主義建設の勝利をめざす闘争

社會主義建設の勝利に對する確信の缺如は、「新反對派」の基本的な誤謬であると私は考える。私の考えでは、この誤謬は基本的なものである。というのは、この誤謬から「新反對派」の他のすべての誤謬が生れ出ているからである。ネップ、國家資本主義、わが國の社會主義的工業の本性、プロレタリアートの獨裁下における協同組合の役割、クラークに對する闘争方法、中農の役割とその比重についての問題に關する「新反對派」の誤謬、これらすべての誤謬は反對派の基本的な誤謬、すなわちわが國の力による社會主義社會建設の完成の可能性に對する確信の缺如から來た派生的な誤謬である。

わが國における社會主義建設の勝利に對する確信の缺如とは何か？

これは先ず第一には、農民の基本的犬彘がわが國發展の一定の條件によつて、社會主義建設の大業に引き込まれ得るといふことに對する確信が缺如してゐることである。

これは第二には、國民經濟において最も緊要な地位を占めているわが國のプロレタリアートが、農民の基本的大衆を社會主義建設の大業に引き入れる能力をもつて、ことに對する確信が缺如してゐることである。

反對派は——彼らが意識的にやつてゐるか、或は無意識的にやつてゐるか、いずれにしろわが國發展の道に關する彼等の理論を構える時に、暗黙裏に以上の命題から出發してゐるのである。

ソヴェト農民の基本的大衆を、社會主義建設の大業に引き入れることが出来るであろうか？
パンフレット『レーニン主義の基礎』の中には、この問題について次の如き二つの基本的な命題がある——

一、「ソヴェト同盟の農民を西歐の農民と混同してはならぬ。三つの革命の試練を経て、プロレタリアートと共に、プロレタリアートを先頭として、ツアールとブルジョア權力に對して闘争した農民、プロレタリア革命によつて土地と平和とを得、それ故にプロレタリアートの豫備隊となつた農民——この農民は、ブルジョア革命の時に自由主義ブルジョアジエを先頭に立てて戦い、このブルジョアジエによつて土地を得、それ故にブルジョアジエの豫備隊となつた農民とは異ならざるを得ない。プロレタリアートとの政治的親睦と政治的協力を尊重することに慣れており、この親睦とこの協力のおかげでその自由を得たところのソヴェト農民が、プロレタリアートとの經濟的協力のための極めて好都合な材料たらざるを得ない」ということは、恐らく論證する必要があるまい」。

二、「ロシアの農業を西歐の農業と混同してはならぬ。西歐では、農業の發展は資本主義の普通の道をたどつて進んでゐる、即ち、一方の極には大領地と私營資本主義的大農場、他方の

極には貧窮と貧困と賃銀奴隷、という農民の深刻な分化事情のもとで行われている。西歐ではこのために、崩壊と腐敗とは全く當然である。だがロシアではそうではない。わが國においては、農業の發展はソヴェト権力の存在と主要な生産用具及び手段の國有化とが、以上のような發展を許さないことからいつても、かような道をたどることはできない。ロシアにおいては、農業の發展は他の道をたどつて、すなわち幾百萬の小農と中農との協同組合化の道をたどつて、特典的信用貸付の制度によつて國家から援助されているところの、大衆的協同組合を農村において發展させるという道によつて進まなければならぬ。レーニンは協同組合に關する諸論文の中で、農業の發展はわが國では必ず新しい道をたどつて、すなわち農民の大多數を協同組合を通じて社會主義的建設に引き入れるという道によつて、はじめは農業生産物の販賣の領域で、ついで農業生産物の生産の領域で、集團主義の原則を農業の中に漸次に植付けるといふ道によつて進まなければならぬ、と正しく指摘した……

農民の最大多數が、私營資本主義的大農場と賃銀奴隷との道、貧困と零落の道を打ちすて、喜んでこの新しい發展の道をとるであらうことは、恐らく論證する必要はあるまい」。

これらの命題は正しいであらうか？

これらの命題は二つとも、ネツプの條件下でのわが全建設期にとつて正しいものであり、議論の餘地のないものである、と私は考へる。

これらの命題は、プロレタリアートと農民との結合についての、農民經營を國の社會主義的發展の體系の中に加へることについての、プロレタリアートは農民の基本的な大衆と共に社會主義に向つて前進しなければならぬということについての、幾百萬の農民大衆を協同組合に組織することは、農村

における社會主義建設の正道であり、わが國社會主義工業が成長する條件の下では、「協同組合の單なる成長も、われわれにとつては社會主義の成長と同じものである」(レーニン全集、ロシア語版、第二七卷、三九六頁参照)ということについてのレーニンの周知の諸テーゼの表現にすぎないのである。

全くのところ、わが國における農民經營の發展は、いかなる道に沿うて進むことができ、また進まなければならぬであらうか？

農民經營は資本主義經營ではない。農民經營の壓倒的多數をとり上げて見るならば、農民經營は小商品生産經營である。しからは、小商品生産的農民經營とは何であるか？ それは、資本主義と社會主義の間の分岐點に立つている經營である。この經營は、現在資本主義諸國で見られるように資本主義の方に發展することもできるし、われわれのところ、すなわちわが國において、プロレタリアート獨裁の下にそうでなければならぬように、社會主義の方にも發展し得るのである。

農民經營のこういう不安定性、こういう非獨立性はどこから來るか？ これは何によつて説明されるか？

これは農民經營の分散性によつて、その非組織性によつて、農民經營が都市、工業、クレジット制、その國における權力の性質に依存していることによつて、最後に、農村が物質的にも文化的にも、都市に追隨して進んでおり、また進まなければならぬという一般周知の命題によつて説明されるのである。

農民經營の資本主義的發展の道は、一方の極には大規模の大農場、他方の極には大衆的窮乏化という、農民の極めて深刻な分化を通じての發展を意味している。こういう發展の道は、資本主義諸國

においては避くべからざる道である。というのは、農村、農民經營は、都市、工業、都市の集中化されたクレジット、権力の性質に依存しており、しかも都市においてはブルジョアジー、資本主義的工業、資本主義的クレジット制度、資本主義的國家權力が支配しているからである。

都市は全くこれと異つた相貌を有しており、工業はプロレタリアートの手に握られており、運輸交通やクレジット制度や國家權力その他が、プロレタリアートの手中に集中されており、土地の國有化が國內の全般法則となつてゐるわが國においては農民經營發展のこの道はせひとも通らなければならぬ道であるだろうか？ 勿論必ず通らねばならぬというわけではない。否、反對である。都市が農村の指導者であり、しかもわが國では都市において、國民經濟のすべての最も緊要な地位をその手中に握つてゐるところのプロレタリアートが支配してゐるからこそ、正にそれだからこそ、農民經營はその發展にあつては異つた道を、すなわち社會主義建設の道を進まなければならないのである。

これはいかなる道であるか？

これは協同組合のあらゆる線に沿うて幾百萬の農民經營を大衆的に協同組合に組織する道であり、分散してゐる農民經營を社會主義的工業のまわりに糾合する道であり、はじめは農業生産物を販賣し都市の製品を農民經營へ供給するという線に沿うて、次いで農業生産の線に沿うて、農民の間に集團主義の原則を植えつける道である。

そして更に進めば進む程プロレタリアート獨裁の情勢下においては、この道はますます不可避的なものとなる。なせならば、販賣の線に沿うての協同組合化、供給の線に沿うての協同組合化、そして最後にクレジットと生産の線に沿うての協同組合化（農業組合）は、農村における福祉を向上させる唯一の道であり、廣汎な農民大衆を窮乏と零落から救う唯一の手段だからである。

わが國においては、農民はその地位からいつて社會主義的ではないし、従つて農民は社會主義的に發展する能力がない、というものがある。農民がその地位からいつて社會主義的ではないということは勿論正しい。しかしながら農村は都市に隨いて進み、しかも都市においては、社會主義的工業が指揮しているということが論證されるとすれば、前述のことは、農民經營が社會主義の道によつて發展するということを反駁する論據とはならぬ。十月革命の時に、農民はその地位からいつて、社會主義的ではなかつたし、また農民は、國內に社會主義を樹立することを希望したわけでは決してなかつた。當時、農民は主として地主の権力を絶滅し、戰爭を終結させ、平和を確立することに努力していた。それにもかかわらず、當時、農民は、社會主義的なプロレタリアートに隨いて進んでいつたのである。なぜか？ なぜならば、ブルジョアジーの打倒と社會主義的プロレタリアートによる權力の獲得は、その當時にあつては、帝國主義戰爭から脱け出るための唯一の道であり、平和を確立するための唯一の道であつたからである。なぜならば、その當時、他の道はなかつたし、またありえなかつたからである。なぜならば、當時、わが黨が農民にとつて受け容れられ、かつ有利であるところの、農民の特殊な利益（地主の打倒、平和）を國の全般的な利益（プロレタリアートの獨裁）と結合させ、これに従ぞくさすべき、その度合をさぐり出し、發見することができたからである。そしてそれだから農民は、その非社會主義的であるということにもかかわらず、當時社會主義的なプロレタリアートに隨いて進んだのである。

わが國における社會主義建設についても、農民をこの建設の軌道に引き入れることについても、これと同じことをいわなければならぬ。農民はその地位からいつて、社會主義的ではない。だが農

民は社會主義的發展の道に立つべきであり、また必ず立つに至るだろう。　　というのは、プロレタリアートの結合を外にしては、社會主義工業との結合を外にしては、農民經營を農民の大衆的協同組合化を通じて社會主義的發展の全般的な軌道に引き入れることを外にしては、農民を窮乏と零落から救う他の道はないのであり、またあり得ないからである。

では、なせ、特に農民の大衆的協同組合化を通じてであるか？

なせならば、大衆的協同組合化において農民にとつて受け容れられ、かつ有利であるところの、また農民の基本的な大衆を社會主義的建設の大業に引き入れる可能性を、プロレタリアートに保障するところの「個人的利益、個人商業の利益、國家によるその審査と統制を結合するその度合を、この個人的利益を全般的な利益に従ぞくさせる度合をわれわれが発見した」(レーニン)からである。農民にとつては協同組合を通じて自分の商品の販賣と、自分の經營への機械の供給とを組織することが有利であるからこそであり、それだからこそ、農民は大衆的協同組合の道に沿うて進まなければならぬのであり、またその道を進むであろう。

しかし、社會主義的工業が指導的地位を占めている情勢の下に、農民經營を大衆的に協同組合化するということは、何を意味するか？

それは小商品生産的農民經營が、農民の大衆的零落を孕んでいるところの古い資本主義の道から離れること、新しい發展の道、すなわち社會主義建設の道に移ることを意味している。

それだからこそ、農民經營發展の新しい道をめざす闘争、農民の基本的な大衆を社會主義建設の大業に引き入れるための闘争は、わが黨の當面の任務なのである。

それ故、ソ同盟共産黨（ボルシエヴィキ）第十四回大會が次のような決議を採用したのは、正しかったのである――

『農村における社會主義建設の基本的な道は、社會主義的國營工業、國營クレジット機關、その他プロレタリアートの手に握られているところの最も緊要な地位からの經濟的指導を増大させると同時に、農民の基本的な大衆を協同組合組織に引き入れ、この組織の資本主義的要素を利用し、克服し、驅逐しつつ、この組織に社會主義的發展を保障することにある』。（黨中央委員會の活動報告に對する大會の決議参照）

『新反對派』の極めて深刻な誤謬は、『新反對派』が農民發展のこの新しい道を信せず、プロレタリアート獨裁の條件下において、この道が全く不可避的であることを見ないか、もしくは理解しないところにある。しかも『新反對派』がこのことを理解しないのは、『新反對派』がわが國における社會主義建設の勝利を信せず、わが國のプロレタリアートが社會主義への道によつて農民を率いて行く能力をもっていることを信じないからである。

ここから、ネツプの二重性格に對する無理解とネツプの否定的方面の誇張とネツプは主として退却であるという見解とが生れてくるのである。

ここからまた、わが國經濟における資本主義的諸要素の役割の誇張とわが社會主義的發展の槓杆（社會主義的工業、クレジット機關、協同組合、プロレタリアートの權力、等々）の役割の過少評價とが生れて來るのである。

ここからまた、わが國營工業の社會主義的本性に對する無理解とレーニンの協同組合計畫の正當さに對する疑惑とが生れてくるのである。

ここからまた、農村における分化の対小棒大的誇張と、クラークに對する周章狼狽と、中農の役割の過少評價と、中農との鞏固な同盟を確保しようとする黨の政策を挫折させようとする試みと、一般に、農村における黨の政策についての問題において、ああやつてみたり、こうやつてみたりして、轉々とする態度とが生れてくるのである。

ここからまた、工業及び農業の建設に、協同組合及びソヴエトを活氣づけることに、國の統治に、官僚主義との鬭争に、わが國家機關の改善と改造とをめざす鬭争に、幾百萬の勞働者と農民の大衆を引き入れるという、黨のこの巨大な活動に對する無理解が生れて來るのである。しかも、この活動は發展の新時期を劃するものであつて、これなくしては、いかなる社會主義的建設も考え得られないものである。

ここからまた、わが國の建設の困難に面して絶望に陥り、茫然自失し、わが國の工業化の可能性を疑い、黨の變性云々についての悲觀的なおしやべりにふける態度等々が生れて來るのである。

彼らの方では、すなわちブルジョアの方では萬事が多かれ少なかれうまくいっている、ところが、われわれの方では、すなわちプロレタリアの方では、萬事多かれ少なかれうまくいっていないし、もし西歐から革命が早くやつて來ないなら、われわれの大業はだめになるだろう、と。こういうのが『新反對派』の共通の調子である。これは、私の考えでは、解黨派的な調子であるが、反對派は何等の理由で（恐らくは人を笑わせるために）、これを『インターナショナルナリズム』であると詐稱しているのである。

ネツプは資本主義である、と反對派はいっている。ネツプは主として退却である、とジノヴィエフはいっている。これはみな、いうまでもなく正しくない。實際においてネツプは、社會主義的要素

と資本主義的要素との闘争を是認して資本主義的要素に對する社會主義的要素の勝利を豫定しているところの、黨の政策である。實際において、ネツプは、退却をもつて開始されただけであつて、それは、退却の過程において勢力の配備變更を遂行し、攻撃を行うことを豫定している。實際において、われわれはすでに數年間、わが産業を發展させ、ソヴエト商業を發展させ、私營資本を壓迫して、成功を収めつつ攻撃を遂行しているのである。

じからば、ネツプは資本主義であり、ネツプは主として退却である、というテーゼは何を意味するか？ このテーゼは何から出發しているか？

このテーゼは、わが國においては、現在資本主義の單純な復舊、資本主義の單純な「復歸」が起つているといふ正しくない假定から出發している。わが工業の社會主義的本性についての反對派の疑惑は、ただこの假定によつてのみ説明し得られる。クラークに對する反對派の周章狼狽は、ただこの假定によつてのみ説明し得られる。反對派が農民の分化についての正しからぬ數字に大慌てにかじりついたこの性急さは、ただこの假定によつてのみ説明し得られる。中農はわが國では農業の立役者であるということをおぼわすに、反對派の特に著しい健忘性は、ただこの假定によつてのみ説明し得られる。中農の比重の過少評價とレーニンの協同組合計畫に關する疑惑とは、ただこの假定によつてのみ説明し得られる。農村發展の新しい道、農村を社會主義建設に引き入れるという道に對する「新反對派」の確信の缺如は、ただこの假定によつてのみ「論證し」得られるのである。

實際のところ、わが國においては現在、資本主義復舊の一面的な過程が進行しているのではなく、資本主義の發展と社會主義の發展との兩面的な過程、すなわち資本主義的要素に對する社會主義

的要素の闘争の矛盾せる過程が、社會主義的要素による資本主義的要素克服の過程が行われているのである。このことは、國營工業が社會主義の基礎をなしている都市に關しても、社會主義的工業と結合されている大衆的協同組合が社會主義的發展の基本的な足がかりとなつているところの農村にかんしても、同じく議論の餘地のないものである。

資本主義の單純な復舊は、わが國においては權力がプロレタリア的であり、大工業がプロレタリアートの手中に握られており、運輸交通とクレジットとがプロレタリア國家の支配下にあるということからいつても、不可能なことである。

農村における分化は從來通りの規模で行われることはできない。中農は依然として農民の基本的な大衆のままであるが、クラークは從來どおりの力を獲得することはできない。というのは、わが國においては土地が國有化されており、土地の賣買が禁じられており、わが國の商業政策、クレジット政策、課税政策、協同組合政策がクラークの搾取者の熱望を制限し、最も廣汎な農民大衆の福祉を向上させ、かつ農村における諸極端を平均化する方向に向けられているといふ理由からいつてもそうなのである。クラークに對する闘争が、現在わが國では、古い方針、すなわちクラークに反對して貧農を組織するといふ方針に沿うて行われているだけでなく、新しい方針、すなわち、クラークに反對して、プロレタリアート並に貧農と中農大衆との同盟を強化するといふ方針に沿つても、行われているといふことについては、私はもはや述べない。反對派が、この第二の方針によるクラークとの闘争の意味と意義とを理解しないといふ事實、この事實は、反對派が農村發展の古い道、すなわち、クラークと貧農とが農村における基本的な勢力をなしており、中農は「洗い流されていた」時の、農村の資本主義的發展の道でふみまよつていふことを、もう一度確證してあるのである。

協同組合は國家資本主義の一變種であると反對派はいつて、その際、レーニンの「現物税」を引き合いに出している。したがつて、反對派は社會主義的發展のための基本的な足がかりとしての協同組合利用の可能性を信じないのである。反對派はここでもまた、非常に大きな誤謬を犯している。協同組合に對するかかる解釋は、一九二一年、すなわち「現物税」が書かれ、發達した社會主義的工業がわが國になかつた時、レーニンが國家資本主義をわが國經濟組織の可能な基本的形態と考え、協同組合を國家資本主義と組合せて考えていたときにおいては十分であつたし、また満足なものであつた。だがこの解釋は、今日では、もはや不十分であり、時代おくれのものとなつてゐる。なせなら、その時以來時勢は變化し、わが國では社會主義的工業が發達し、國家資本主義はそれがかつては望ましいものであつた程度には根をおろさず、現在一千萬以上の組合員を包容している協同組合は社會主義的工業と結合するようになったからである。

「現物税」が書かれた後わずか二年を経て、すなわち一九二三年に、レーニンが「わが國の諸條件下における協同組合は、しばしば全く社會主義と合致する」(レーニン全集、ロシア語版、第二七卷、三九六頁參照)とみなして、協同組合を別なふうに見るようになったといふこの事實は、前述の理由によらずして、何をもちつて説明し得るであらうか？

この二年間に社會主義的工業はすでに成長することができたが、國家資本主義は十分な程度に根をおろさず、そのためにレーニンが協同組合をもちや國家資本主義と組み合せるのでなく、社會主義的工業と組み合せて見はじめたということによらずして、何をもちつてこれを説明し得るであらうか？ 協同組合發展の諸條件は變化した。協同組合の問題に對する態度もまた變化されなければならなかつた。

例えば、この問題の真相を闡明ならしめているレーニンのパンフレット「協同組合について」（一九二三年）の一つの素晴らしい箇所を次にあげよう——

「國家資本主義の下では、*協同組合企業は、まず第一に私營企業として、第二には集團的企業として、國家資本主義的企業と異なっている。現在わが國に存在している制度の下では*協同組合企業は、集團的な企業として、私營資本主義的企業とは異なっているが、もしこれらの企業が、國家すなわち労働者階級にぞくしている生産手段の下に、土地を基礎として立てられている場合には社會主義的企業と異なるものではない*。」（レーニン全集、ロシア語版、第二七卷、三九六頁）

この短い引用文の中で、二つの大きな問題が解決されている。第一には、「現在わが國に存在している制度」は國家資本主義ではないという問題であり、第二には、「わが國の制度」と組み合わせられて考えられた協同組合企業は、社會主義的企業と「異なるものではない」という問題である。

これ以上はつきりと言いあらわすことは、困難だと私は思う。

レーニンの同じパンフレットから、もう一つの箇所をあげよう——

「協同組合の單なる成長も、われわれにとつては、社會主義の成長と同じものである（前に述べた「少しばかり」の例外つきで）。そして、これと共にわれわれは、社會主義に對するわれわれのすべての見解が根本的に變化したことを認めざるを得ないのである」（前掲書參照）。

* 傍點は私による。——イ・ヌ・カトリン

パンフレット「協同組合について」の中には、われわれは協同組合についての新しい評價がなされていることを見るが、「新反對派」は、これを認めようと欲せず、事實に逆い、明白な眞理に逆い、レーニン主義に逆つて、このことを努めて黙殺しているのである。

「國家資本主義と組み合わせて考えられた協同組合と、社會主義的工業と組み合わせて考えられた協同組合とは、全く別なものである」。

だがこのことから「現物税」とパンフレット「協同組合について」との間に深淵が横たわつていゝるという結論を引き出してはならぬ。そういう結論は、もちろん正しくない。協同組合の評價の問題において、「現物税」とパンフレット「協同組合について」の間の切り離し難い關係を直ちに確認するには、例えば、「現物税」の中の次の箇所を引用するだけで十分である。

以下はその箇所である——

「利權から社會主義への過渡は、大規模生産の一つの形態から大規模生産の他の形態への過渡である。小經營者の協同組合から社會主義への過渡は、小規模生産から大規模生産への過渡である。すなわち一層複雑ではあるが、そのかわり、それが成功する場合には、はるかに廣汎な住民大衆を包括することができ、古い、前社會主義的^{*}諸關係、そればかりでなく、あらゆる「新奇なもの」に對して抵抗するという意味で最も頑強な、前資本主義的諸關係の、一層深く入り込んだ、一層つよい生活力をもつた根を引き抜くことのできる過渡である」。——レーニン全集、ロシア語版、第二六卷、三三七頁)

* 傍點は私による。——イ・スターリン、

この引用文によつて、「現物税」の時に、すなわちまだわが國に發達した社會主義的工業がなかつた時に、すでにレーニンは、協同組合を、それが成功する場合には、「前社會主義的」諸關係に對する、従つてまた資本主義的諸關係に對する強力な闘争手段に轉化せしめることが可能であると考へていたことが分る。實にこの思想こそがその後、彼のパンフレット「協同組合について」の出發點ともなつたのであると、私は考へる。

以上述べたすべてのことから、どういふ結論が引き出されるか？

以上のことから、「新反對派」は協同組合の問題に對してマルクス主義的態度をとらず形而上學的態度をとつているということになるのである。「新反對派」は、協同組合を他の現象と組み合はせて考へられた歴史的現象としてではなく、例えば國家資本主義（一九二一年における）もしくは社會主義的工業（一九二三年における）と組み合はせて考へられた歴史的現象としてではなく、何らか恒常的な、永久的なものとして、「物自體」として見ているのである。

ここから協同組合問題に對する反對派の誤謬が生れて來ていたのであり、ここから協同組合を通じて社會主義へ至る農村の發展に對する反對派の確信の缺如が生れて來ていたのであり、ここから、古い道、すなわち農村の資本主義的發展の道への、反對派の方向轉換が生れて來ていたのである。

大體において以上の如きが、社會主義建設の實踐的諸問題に對する「新反對派」の見地である。

結論は一つしかない。反對派の方針——彼らが何らかの方針をもつていふとする限りでは、反對派の動搖とぐらつき、彼らのわが大業に對する確信の缺如と困難に直面しての茫然自失とは、その結果として、わが國經濟の資本主義的要素に對する降伏に導いてるのである。

というのは、もしネツプが主として退却であり、國營工業の社會主義的本性に對して疑惑がさしはさまれ、クラークがほとんど全能なものであり、協同組合には僅かの希望しかかけ得られず、中農の役割が加速度に減少し、農村發展の新しい道が疑わしいものであり、黨はほとんど變質しつつあり、しかも西歐の革命がまだそれほど近ずいていないものとするならば、一體反對派の武器庫には、何が残るだろうか？ 反對派は、わが國經濟の資本主義的要素に對する闘争において、一體何を頼みとするのであるか？ ただ「時代の哲學」だけをひっさげて、戦闘にのぞむことはできないではないか？

「新反對派」の武器庫が——これを一般に武器庫と呼ぶことができるのであれば——羨望に値するものでないことは、明かである。この武器庫は闘争のためのものではない。いわんやそれは勝利のためのものではなお更ない。

もし黨が取つ組合いの闘争をはじめるとすれば、こういう武器庫をもつてしては、黨は「またたく間に」破滅させられてしまつたであろうということ、黨はわが國經濟の資本主義的要素の前に降伏するより外はなかつたであろうということ、明かなことである。

それだから、第十四回黨大會が「ソヴェト同盟における社會主義建設の勝利のための闘争はわが黨の基本的任務であり」、この任務を解決するために必要缺くべからざる条件の一つは「わが國における社會主義建設の大業に對する確信の缺如と、「徹底的に社會主義的な型」(レ、ニ、ン)の企業であるところの、わが國の企業を「國家資本主義的」企業として見ようとする試みとに對する闘争」であり、「かかる思潮は、一般的には、社會主義建設に對し、なかなしく社會主義的工業に對する大

衆の意識的態度を不可能ならしめ、經濟における社會主義的要素の成長を妨げ、社會主義的要素に對する私營資本の鬭争を容易ならしめ得るのである』、『それ故に大會は、レーニン主義のこの歪曲を克服するために廣汎な教育的活動をすることを必要缺くべからざるものと認める』と決定したのは、全く正しかつたのである。（ソ同盟共產黨（ボルシエヴィキ）中央委員會の活動報告に對する決議參照）

ソ同盟共產黨（ボルシエヴィキ）第十四回大會の歴史的意義は、この大會が、『新反對派』の誤謬をよく根底までバクロすることができ、『新反對派』の確信の缺如と泣きごとをきつぱりとかなぐりすて、社會主義をめざす今後の鬭争の道を明瞭に正確に示し、黨に勝利の見透しを與え、これによつて、社會主義建設の勝利に對する確乎不拔の確信をもつてプロレタリアートを武装したことにある。

一九二六年一月二十五日

農民問題に關する黨の二つの基本的

スローガンについて

ヤンキー—スキーへの回答

君の手紙は、もちろん、遲滞なく受け取った。少し返事がおくれたのは、悪しからずご容赦を乞う。

一、レーニンは、『あらゆる革命における最も主要な問題は國家權力についての問題である』（レーニン全集、第二一卷、一四二頁）と言つてゐる。いかなる階級、もしくはいかなる諸階級に、權力が集中されているか、いかなる階級、もしくはいかなる諸階級が打倒されねばならぬか、いかなる階級、もしくはいかなる諸階級が權力を掌握すべきか、この點に、『あらゆる革命における最も主要な問題』が存するのである。

革命のいずれかの段階における全時期を通じて、その効力を持續してきた黨の基本的戰略スローガンも、レーニンのこの根本テーゼにそっくり完全に立脚してゐないならば、基本的スローガンと呼ぶことはできないであらう。

基本的スローガンは、もしもそれらが諸階級勢力のマルクス主義的分析を土台として構築されており、それらが階級闘争戦線上における革命勢力の正しい配置圖を立案し、それらが革命の勝利をめざす闘争戦線へ、新しい階級による權力掌握のための闘争戦線へ大衆を誘導することを容易にし、

また、それらがこの任務を遂行するために必要な、廣汎にして強力な政治的軍隊を、廣汎な人民大衆によつて編成することを黨に容易ならしめるものであるような場合にのみ、正しいものたり得るであらう。

革命のいずれかの段階を通じて、敗北と退却、失敗と個々の戰術的誤謬が起るといふこともあるかも知れないが、このことは、それだけではまだ、基本的な戰略スローガンが正しくないという意味にはならない。たとえば、わが革命の第一段階における基本的なスローガン、即ち「全農民と共に、ブルジョアジーを中立させて、ツアーと地主に反對し、ブルジョア民主主義革命の勝利をめざすこと」というスローガンは、一九〇五年の革命が敗北を蒙つたということにもかかわらず、全く正しかったのである。

したがつて、黨の基本的スローガンについての問題と革命の發展中のあれこれの段階における革命の成功もしくは失敗についての問題とを、混同してはならないのである。

また、革命の進行中において、黨の基本的スローガンは、すでに舊來の諸階級もしくは舊來の階級の權力を打倒するにいたつたが、このスローガンから生ずる革命の幾多の重要な要求がまだ實現を見るに至らず、或はその實現が一時代に亘つて長く續くか、或はその實現のためには、また新しい革命を要するとかいふことも起り得るものであるが、このことも、これだけではまだ、基本的スローガンが正しくなかつたという意味にはならない。たとえば、一九一七年の二月革命は、ツアー制と地主を打倒したが、地主の土地の沒收、等々を實現させなかつた。だが、このことも、これだけではまだ、革命の第一段階における吾々の基本的スローガンが正しくなかつたという意味にはならない。

或はまた——十月革命は、ブルジョアジートの打倒とプロレタリアートの手中への権力の移行とを實現したが、(イ)一般的にはブルジョア革命を最後までやり遂げるということ、(ロ)特に農村においてクラークを孤立させるということ、一定期間に亘つて長びかせ、一舉にそれを實行しなかつた。しかし、このことも、これだけではまだ、革命の第二段階における吾々の基本的スローガン、即ち「貧農とともに、中農を中立させて都市及び農村における資本主義に反対し、プロレタリアートの権力獲得をめざすこと」というスローガンが、正しくなかつたという意味にはならない。したがつて、黨の基本的スローガンについての問題と、これらのスローガンから生ずるあれこれの要求實現の期間ならびに形態についての問題とを混同してはならないのである。

故に、わが黨の戦略的諸スローガンを、いずれかの時期における革命運動の一時的成功もしくは敗北という見地から評價してはならないし、況んや、これらのスローガンから生ずるあれこれの要求實現の期間もしくは形態というような見地から評價する事はなお更いけない。黨の戦略的諸スローガンは、諸階級勢力のマルクス主義的分析と革命の勝利と新しい階級の手中への権力の集中とをめざす闘争戦線における革命諸勢力の正しい配置という見地からのみ、評價され得るのである。

君の誤謬は、君がこの最も重要な方法論上の問題を迂回してしまつたか、もしくはそれを理解しなかつた點にある。

二、君の手紙にはこう書いてある——

「吾々は、十月革命の時までのみ、全農民と同盟して前進したのだと確認することは正しいであらうか？ 否、それは正しくない。」「全農民との同盟」というスローガンは、全農民がブ

ブルジョア革命を最後までやり遂げることを利益としたから、十月革命にいたるまでも、十月革命の最中にも、また十月革命後の最初の時期にも、効力を有していた』。

かくのごとく、この引用文によつて、革命の第一段階（一九〇五年——一九一七年二月）、即ちツアー・地主的權力を打倒し、プロレタリアートと農民の獨裁樹立ということが問題であつた當時における、黨の戰略的スローガンは、革命の第二段階（一九一七年二月——一九一七年十月）、すなわちブルジョア權力の打倒とプロレタリアートの獨裁樹立ということが問題であつた當時における戰略的スローガンとは、異ならなかつたという事になるのである。

したがつて、君はブルジョア的・民主主義革命とプロレタリア的・社會主義革命との間の、基本的相違を否定しているのである。しかして、君がこの誤謬を犯したのは、革命の當該段階における權力についての問題と、いかなる階級が打倒され、いかなる階級の手に權力が移行するかという問題が戰略的スローガンの基本的題目であるという單純な事柄を、たぶん、君は理解しようとしなからである。この點について、君が根本的に間違つてゐるということは、いまさら證明するまでもないだろう。

君は、全農民がブルジョア革命を最後までやり遂げることを利益としたから、十月革命の最中にも、十月革命後の最初の時期にも、『全農民との同盟』というスローガンを、吾々は實行したのだといつてゐる。だが、十月の變革と十月革命がブルジョア革命を最後までやり遂げるということとで盡され、或はそれを自己の基本的任務としていたとか、そんなことを一體だれが君に話したか？ 一體何で君はそんなことを言い出したのか？ 一體ブルジョア權力の打倒とプロレタリアート獨裁の樹立をブルジョア革命の範圍内に納めることができるものであろうか？ 一體プロレタリアート獨裁の獲得ということ、ブルジョア革命の範圍内から出るといふことではないのか？

クラーク（やはり農民だ）が、ブルジョアジーの打倒と、プロレタリアートへの権力の移行とを敢て支持したなどは、どうして断言することができるであろうか？

土地の國有化、土地私有制の撤廢、土地賣買の禁止、その他等々についての布告は、それが社會主義的布告とは認められないにもかかわらず、吾々によつて、クラークと同盟してではなく、彼等に對する鬭争において遂行されたことを、どうして否定できようか？

クラーク（やはり農民だ）が、諸工場、鐵道、銀行、その他の收奪についてのソヴエト権力の布告、或は帝國主義戰爭の國內戰爭への轉化についてのプロレタリアートのスローガンを敢て支持したなどということを、どうして断言することができようか？

十月革命における基本的なものは、これらの、またこれらに類する行動でもなければ、ブルジョアジーの打倒とプロレタリアート獨裁の樹立でもなくて、ブルジョア革命を最後までやり遂げることであるなどと、どうして断言し得るであろうか？

十月革命が、ブルジョア革命を最後までやり遂げるといふことを、自己の主要任務の一つとしてもつていたこと、十月革命なしには、ブルジョア革命は最後までやり遂げられはしなかつたであろうといふこと、これと全く同様に、十月革命そのものが、ブルジョア革命を最後までやり遂げることなしには、鞏固化され得なかつたであろうといふこと、また十月革命が、ブルジョア革命を最後までやりとげたがゆえに、この革命は、全農民からの同情を當然受けるべきであつたのだといふことは、論争の餘地のないことである。すべてこれらは議論の餘地のない事である。だがこの基礎に立つて、ブルジョア革命を最後までやりとげるといふ事は、十月革命の進行中における派生的現象ではなくて、その本體、もしくはその基本的目的であると断言してもよいであろうか？ 君の場合には、十月革命における主要

目的、即ちブルジョア權力の打倒、プロレタリアート獨裁の樹立、帝國主義戰爭の國內戰爭への轉化、資本家の收奪、等々が一體どこへ行つてしまつたのか？

そして戰略的スローガンの主要題目が、あらゆる革命の基本的問題、即ち一つの階級の手から、他の階級の手への權力の移行についての問題であるとするならば、このことからプロレタリア權力をもつて、ブルジョア革命を最後までやりとげることにしての問題を、ブルジョア階級の打倒ならびにこのプロレタリア權力をそれ自身の獲得についての問題、即ち革命の第二段階における戰略的スローガンの主要題目である問題と混同してはならぬということとは明かなことではないか。

プロレタリアート獨裁の最も重要な成果の一つは、この獨裁がブルジョア革命を最後までやりとげたことと、中世紀の汚物をきれいさつぱりと掃除してしまつたこととにある。農村にとつては、このことは最も肝要なことであつて、かつ、眞に決定的な意義を有したのである。このことなしには、すでに前世紀の後半において、マルクスが語つたところの、農民戰爭とプロレタリア革命との結合と、いうことを、實現させることはできなかつたであらう。このことなしには、プロレタリア革命そのものを、鞏固化することはできなかつたであらう。

それにつぎの重要な事柄を考慮に入れることが必要である。即ち、ブルジョア革命を最後までやりとげるということは、單一の行爲ではない。事實上、それは君が手紙の中で確言しているように、一九一八年の一小部分のみではなく、一九一九年（ヴオルガ河流域地方からウラルにかけて）と一九一九年——一九二〇年（ウクライナにおいて）の一小部分をも包括した全時期に亘つたのであつた。私的のいうのは、コルチャック並にデニキンの進撃のことであつて、そのとき、全體としての農民が、地主的權力の復舊という危険に直面し、そして、まさしく、全體としての農民が、ブルジョア革命を

最後までやりとげることを保障し、かつこの革命における成果を自己のために保持せんがために、ソヴェト権力の周圍に結集せざるを得なかつたのである。君が引證しているレーニンの著作からの引用文と、また同じく、黨のスローガン實現化のからくりをも正しく理解するためには、實際生活の過程のこの複雑性と多様性を、プロレタリアートの獨裁の直接的な社會主義的任務とブルジョア革命を最後までやりとげるという任務との「氣まぐれな」交錯を、常に念頭におかなければならない。

この交錯は、革命の第二段階における黨のスローガンの正しからぬことを證明するものであるとか、このスローガンは、革命の第一段階のスローガンと異なるところはないとかいえるだろうか？ 否、そうはいえない。反對に、この交錯は、革命の第二段階における黨のスローガン、即ち、貧農と一緒に、都市並に農村における資本主義的ブルジョアジーに反對し、プロレタリアートの権力をめざして、等々のスローガンの正しさを確認するものに外ならない。なぜか？ なぜならば、ブルジョア革命を最後までやりとげるためには、まず最初に、十月革命においてブルジョアジーの権力を倒し、プロレタリアートの権力を樹立することが必要であつたからである。なぜならば、ただかかる権力のみが、ブルジョア革命を最後までやりとげることをなす得るからであり、しかも十月革命において、プロレタリアートの権力を樹立するためには、ブルジョアジーを打倒することができ、またプロレタリアートの権力を樹立することができる適當な政治的軍隊を十月革命のために準備し組織することが必要であつたからであり、しかして、吾々は、ブルジョアジーに反對し、プロレタリアートの獨裁をめざす貧農とプロレタリアートの同盟というスローガンによつてのみ、かかる政治的軍隊を準備し組織し得たということを證明する必要はないからである。

一九一七年四月から一九一七年十月まで實行されたか、かかる、戦略的スローガンなしには、吾々は、

かかる政治的軍隊を持つこともできなかつたであろうし、従つて、十月革命において勝利することもできず、ブルジョアジーの權力を打倒せず、またしたがつて、ブルジョア革命を最後までやりとげる可能性も持たなかつたであろうといふことは明かである。

だからこそ、ブルジョア革命を最後までやりとげるといふことを、プロレタリアートによる權力の奪取を保障することをその任務として有する、革命の第二段階における戦略的スローガンに對立させてはならないのである。

すべてこれらの「矛盾」を避けるためには、ただ一つの手段があるのみである。即ち、革命の第一段階（ブルジョア・民主主義革命）の戦略的スローガンと、革命の第二段階（プロレタリア革命）の戦略的スローガンとの間の基本的相違を認めることであり、革命の第一段階の時期において、吾々は、ブルジョア・民主主義革命をめざして、すべての農民と共にすすんだが、革命の第二段階の時期においては、吾々は、資本の權力に反對し、プロレタリア革命をめざして、貧農と共に進んだことを認めることである。

しかして、革命の第一並に第二段階における諸階級勢力の分析が、これを認めることを吾々に義務付けているがゆえに、そうすることがせひ必要なのである。そうでないといふ、吾々が、一九一七年の二月までは、プロレタリアートと農民の革命的・民主主義的獨裁といふスローガンによつて活動を行つたが、一九一七年の二月後には、このスローガンは、プロレタリアートと貧農との社會主義的獨裁といふスローガンによつてとりかえられたといふ事實を、説明することはできなかつたであろう。

君の圖式では、一九一七年の三月から四月にかけてこういふふうの一つのスローガンを他のスローガンに取り替へたことは説明できないといふことを認めたまえ。

黨の二つの戦略的スローガンの間にあるこの基本的相違を、レーニンは、すでに彼のパンフレット「民主主義革命における社會民主黨の二つの戦術」の中で指摘している。ブルジョア・民主主義革命の準備期における黨のスローガンを、レーニンは次のように定式づけている——

「プロレタリアートは、力づくで專政制度の抵抗を壓殺し、ブルジョアジーの不安定性を麻痺させるために、農民の大衆を味方にひきつけて、民主主義的變革を最後まで遂行しなければならぬ」。(レーニン全集、第八卷、九六頁)

換言すれば、すべての農民と共に、專政制度に反対し、ブルジョアジーを中立させて、民主主義的變革をめざすことである。

社會主義革命への準備期における黨のスローガンについては、レーニンは次のように定式づけている——

「プロレタリアートは、力づくでブルジョアジーの抵抗を打破し、農民及び小ブルジョアジーの不安定性を麻痺させるために、人口中の半プロレタリア的分子の大衆を味方にひきつけて、社會主義的變革を成就させなければならぬ」。(前掲書参照)

換言すれば、都市及び農村における小ブルジョアジーを中立させて、貧農ならびに、一般人口中の半プロレタリア層といつじよに、ブルジョアジーに反対し、社會主義的變革をめざすことである。

これは一九〇五年におけることであつた。

一九一七年の四月には、レーニンは、その當時の政治情勢を、プロレタリアートと農民の革命的・民主主義的獨裁と、ブルジョアジーの實際的權力との交錯であると性格づけて、つぎのように述べている——

「ロシアにおける現時機の獨特性は、プロレタリアートの階級意識性と組織性が不十分であつたために、權力をブルジョアジーに與えた革命の第一段階から、プロレタリアートと農民のうちの貧しい層の手に、權力を與えるべきである革命の第二段階への過渡*にあるという點である」。(レーニン、『四月テーゼ』、全集、第二〇卷、八八頁)

全力をかけて、十月革命への準備を行つていた一九一七年の八月末、『農民と労働者』と題する特別の論文で、レーニンはつぎのように書いた――

「ただプロレタリアートと農民*のみが、君主制を打倒することができる。――かくの如きが、その當時（一九〇五年のこと）を言つている。――イ・スターリン）におけるわが階級政策の基本的定義であつた。そして、この定義は正しかつた。一九一七年の二月と三月は、もう一度このことを確證した。貧農*（わが黨の綱領では半プロレタリアと言われている）を指導しているプロレタリアートのみが、民主主義的構和によつて、戰爭を終結させ、戰爭の創痕をいやし、絶對に必要で、猶豫を許さぬものとなつた歩行を社會主義へ向つて開始することができる。――かくの如きが、現在におけるわが階級的政策的定義である」。(レーニン全集、第二一卷、一一頁)

このことは、吾々が、プロレタリアートと貧農との獨裁を、恰も現在もつているかの如くに理解すべきではない。そんなことは、勿論正しくない。吾々は、プロレタリアートと貧農との獨裁というスローガンの下に、十月革命に向つて行進し、このスローガンを十月革命において形式上實現したの

* 傍點は私による。――イ・スターリン

だ。というのは、吾々ボルシェヴィキは、多数派となつていたので、實際には、すでにその當時、わが國がプロレタリアートの獨裁を有してはいたとはいひながら、左翼エス・エルとのプロツクを有し、彼等とともに指導權を分有してはいたからである。しかしながら、左翼エス・エルの「叛亂」の後、また國家の指導權を他の黨と分有せず、また分有することができない一つの黨の手に、すなわちわが黨の手に、指導權が、そつくり、かつ完全に移行した時である左翼エス・エルとのプロツクの決裂後には、プロレタリアートと貧農との獨裁は、形式上には存在しなくなつてしまつたのである。つまりこれを、吾々はプロレタリアートの獨裁と稱しているのである。

最後に、一九一八年十一月、レーニンは、革命が經過してきた道を回顧して、次のように書いた——
「そうだ、吾々が、全體としての農民と共に、進んでいる間は、わが國の革命はブルジョア革命である。吾々はこのことを、はつきりしすぎるほど明白に自覺しており、一九〇五年以來、何百何千回も言つたし、歴史的過程上のこの必須な段階を、跳び越えたり、また布告によつてそれを廢棄しようなどは、決して試みなかつた……。だが、一九一七年には、四月以來、十月革命より、いもすつと前に、即ち、吾々が* 權力を掌握するにいたつたよりもすつと前に* 吾々は人民に次のように、公然と語り、かつ説明してきた。即ち、今やこの段階で革命を停止させておくことはどうしてもできない。なせならば、國は前進したし、資本主義も前方へ歩を進めたし、荒廢はかつて見ざるほどの程度に達し、この荒廢は、(何人かがそれを欲すると否とにかかわらず) 社會主義に向つて、前進することを要求しているからである。なせならば、他の方法では、前進するこ

* 傍點は私による。——い・スターリン、

とも、戰爭で苦しめられてゐる國を救ふこともできないし、勤勞大衆と搾取されてゐる者達の苦難を軽減すること他の方法ではできないからである、と。丁度、吾々がいつていたとおりになつた。革命の進行は、吾々の考察の正しいことを確證した。初めは、「すべて」の農民と共に、君主制に反對し、地主に反對し、中世紀的な制度に反對して行われる（そして、この限りにおいては、革命はまだブルジョア革命であり、ブルジョア・民主主義革命である）。そして次には、貧農とともに、半プロレタリアートと共に、すべての被搾取者達と共に、農村の金持ちたるクラークや闇商人をも含む資本主義に反對して、*行われる。そしてこの限りにおいては、革命は社會主義革命となる』（レーニン全集、第二三卷、三九〇——三九一頁）

以上によつて明かなように、レーニンは、ブルジョア・民主主義革命の準備期における第一の戦略的スローガンと、十月革命の準備期における第二の戦略的スローガンとの間の相違のきわめて深刻なことを、度々強調した。第一の場合のスローガンは、專政制度に反對して、すべての農民と共にであり、第二の場合のスローガンは、ブルジョアジーに反對して、貧農と共にである。

ブルジョア革命を最後までやりとげるといふことが、十月革命後のある一時期に亘つて長くつづいたこと、そして、吾々がブルジョア革命を最後までやりとげたといふかぎりにおいて、「すべて」の農民は、吾々に同情を寄せないわけにはいかなかつたといふこと、これらの事實は、すでに私が上述したように、吾々が貧農と共に十月革命に向つて前進し、貧農と共に十月革命において勝利したこと、クラーク（やはり農民）の反抗と中農側の動搖の存在する條件のもとで、貧農と共にブルジョアジー

* 傍點は私による。——イ・スタールン、

の權力を打倒し、プロレタリアートの獨裁（ブルジョア革命を最後までやりとげるといふことは、プロレタリアート獨裁の任務の一つである）を樹立したといふこの基本的な命題を、ほんの少しも動搖させるものではない。

これは明かだと思ふ。

三、さらに、君の手紙にはこう書いてある——

「吾々は、中農を中立させて、貧農と同盟を結ぶといふスローガンの下に十月革命までやつてきた」と斷言することは、正しいことだろうか？ 否、正しくない。すでに上述した考察とレーニンから引用した拔萃とによつて、このスローガンは、「農民内で階級分化の機が熟した」（レーニン）その時のみ、即ち、「一九一八年の夏から秋」にのみ生起し得たということがわかるのである」。

この引用文によれば、黨が中農を中立させるという政策をとつたのは、十月革命の準備期においてもなければ、十月革命の際でもなく、十月革命後、特に一九一八年の後、即ち貧農委員會の創設後だといふ事になる。これは斷然間違いだ。

事實は反對だ。中農中立化の政策は、貧農委員會の創設後、即ち一九一八年の後に始まつたのではなくて、その時に終つてしまつたのである。中農中立化の政策は、一九一八年の後にこそ、わが實踐活動上において、廢止されたのであつた（實施されたのではない）。實に、一九一八年の後、すなわち一九一九年三月に、レーニンはわが黨第八回大會を開會するに當つて、つぎのように述べた——

「舊時代における社會主義の優秀な代表者達は——當時彼等はまだ革命を信奉しており、理論的ならびに思想的に革命に貢獻していた——農民の中立化について、即ち、プロレタリアー

トの革命を、積極的に援助しないまでも、せめてこの革命の邪魔をせず、中立を保ち、吾々の敵側にならぬ社會層に、中農を作りあげることに就いて語つた。この抽象的にして理論ばつた問題の立て方は、吾々には全くはつきりしてゐる。しかし、この問題の立て方は不十分である*。

吾々は、農村における活動の經驗によつてよく點檢された基本的な規約と指令を、具體的に、精確に作成しなければならぬような、社會主義建設の段階*に入つた。吾々は、この規約と指令によつて中農に對する鞏固な同盟の基礎を作り上げるために行動しなければならぬ」。――（レーニン全集、第二四卷、一一四頁）

これで見ると、君が手紙で述べていることと、何だか全く正反對のようになる。しかし、君はこの點で、中農中立化政策の開始とその終結とをごつちやにして、眞實のわが黨の實踐活動を逆立ちさせてゐる。

中農は、ブルジョアジーが打倒されてしまふまでは、ソヴェト權力がまだ鞏固化されてしまわない間は、泣き言をならべ立てて、革命と反革命の間を動搖してゐた。そしてそれ故に、中農を中立させなければならなかつたのである。ブルジョアジーは「本當に」打倒されてしまひ、ソヴェト權力は鞏固になつてゆき、クラークはやつつけられ、赤軍は國內戰爭の諸戦線で勝利しはじめたということ、中農が確信するにいたつたときに、彼等はわれわれの側に轉向してくるようになった。かかる轉換の後にこそ、黨の第三の戰略的スローガン、第八回黨大會においてレーニンが與えたスローガン、すなわち貧農に依據し、中農との鞏固な同盟を確立して、社會主義建設をめざして前進する、というスローガンが可能となつたのであつた。

* 傍點は私による。——イ・スタールン、

どうして君は、この一般周知の事實を忘れてしまったのであろうか？

さらに、君の手紙によれば、プロレタリア革命への移行に際し、またこの革命の勝利後の最も初期における、中農中立化の政策は正しくないし、役に立たず、従つて認容し難いものだ、ということになる。これは斷然間違つてゐる。事實はまつたく反對なのだ。ブルジョアジーの権力が打倒されるに際し、かつプロレタリアートの権力が鞏固化するにいたるまでにおいてこそ特に、中農は、どんなときよりも最もひどく動搖し、反抗するのである。この時期にこそ、貧農との同盟ならびに中農の中立化が必要なのである。

自分の誤謬を固執して、農民に關する問題は、わが國にとつてのみならず、『十月革命前のロシアにおける經濟制度に、多かれ少なかれ似かよつてゐる』他の國々にとつても、大きな意義をもつてゐると、君は斷言してゐる。この後半は、勿論正しい。しかし、次の如きが、コミンテルン第二回世界大會において、レーニンが農業問題に關する彼のテーゼの中で、プロレタリアートが權力を掌握した時期における、中農に對するプロレタリア黨の政策について述べてゐるものである。レーニンは、貧農、或は、もつと正確に言えば、『農村における勤勞大衆と被搾取大衆』を、農業労働者、半プロレタリア、或は零細農と小農で構成されている別個のグループとして規定し、ついで、農村における特殊なグループとしての中農についての問題に移つて、つぎのように述べてゐる——

「經濟的意味における「中農」ということは、所有權によるか或は小作權によるか、いずれにしても廣くはない一區劃の土地を領有してはいるが、それにしても第一に、資本主義制度の下では、一般の定則として辛うじて家族を扶養し貧しい經營を維持してゆけるだけでなく、少なくとも豊作の年には、資本にくり入れることもできる、ある程度の剩餘をも得る可能性を興えられ、

第二にかなりしばしば(二つか三つかの經營のうちの一つにおいて)、他人の勞働力を雇い入れるところの小農夫と理解すべきである……革命的プロレタリアートは——少なくとも、近い將來とプロレタリアートの獨裁の初期にとつては——この層を自分の味方に引き入れるということをして己の任務として打ちたてることはできないであろう。プロレタリアートは、この層を中立させるといふこと、即ちプロレタリアートに對するブルジョアジーの鬭争において、中立の態度をとらせるという事に、問題を局限しなければならぬ』。(レーニン全集、第二五卷、二七一——二七二頁)

それなのに一體、中農中立化の政策はわが國では、『一九一八年の夏から秋』に『だけ』即ち、ソヴェトの權力、プロレタリアートの權力の鞏固化が事實上決定的に成功した後、『生起』し得たなどということが、どうして斷言し得るのであるか？

これで見ると、社會主義革命への過渡とプロレタリアートの權力の鞏固化との時機における、プロレタリア黨の戰略的スローガンについての問題は、中農中立化の問題と丁度同じく、君が考へてゐるように、そう簡單なものではない。

四、すべて以上に述べたことから、君が引證したレーニンの著作からの引用文が、革命の第二段階における黨の基本的スローガンに、ほんの少しでも對立するものでありえないことは明かである。なせならば、これらの引用文は、(イ)、十月革命以前の黨の基本的スローガンについてではなく、十月革命以後に、ブルジョア革命を最後までやりとげるといふことについて論じているのであり、(ロ)、これらの引用文は、このスローガンを論駁しているのではなくて、その正しさを確認しているのだからである。

革命の第二段階における、プロレタリアートによる権力掌握までの時期における、そして権力についての問題をその主要題目とする黨の戦略的スローガンを、プロレタリアートによつて権力が掌握された後の時期において實施されるところの、ブルジョア革命を最後までやりとげるといふ任務に對立させてはならぬということを、私はすでに上述したが、さらにもう一度、どうしてもくり返さなければならぬ。

五、君は、「ブラヴダ」に掲載された同志モロトフの「わが國におけるブルジョア革命について」(一九二七年三月十二日)なる周知の論文について語つてゐる。そしてこの論文は、君が私に説明を求める「動機となつた」のである。君がどんなふう論文を讀んでゐるかを私は知らない。同志モロトフの論文は私も讀んだ。そして、この論文が、農民に關する黨のスローガンについて、わが黨の第十四回大會で行つた報告演説中において私が述べたことと、いささかも矛盾してはいないと、私は考へる。

同志モロトフが彼の論文で論じてゐるのは、十月革命に際しての黨の基本的スローガンについてはなく、十月革命後に黨がブルジョア革命を最後までやりとげた限りにおいて黨は全農民の同情を得ていたということについてである。しかして、この事實を確認することは、吾々は貧農と共に、そして中農を中立させて、都市及び農村におけるブルジョアジーに反對して、ブルジョアジーの権力を打倒し、プロレタリアートの獨裁を樹立したこと、また、このことなしには、吾々はブルジョア革命を最後までやりとげなかつたであらう、といふこの基本的命題の正しさを否定するものではなく、かえつて反對に、それを確認するものであるといふことは、すでに私が上述したところである。

十月革命の準備期におけるプロレタリアート と貧農との獨裁のスローガンについて

——エス・ボクロフスキーへの回答——

本年五月二日附の君の手紙は、詳細に、いわば各項目全部について答えなければならぬような、何等の理由も、何等の根據ももつてはいないと私は考えるものである。

實をいえば、この手紙はヤン——スキーの手紙と比べてみて、何も特別に新しいものはない。

だが、それにしても、私が君の手紙に答えようとしているのは、この手紙が、一九一七年の四月——五月頃の、カメネフ一味の見解を端的に復興せんとする若干の要素を内容としているからである。カメネフ一味の見解の復興であるこれらの要素を暴露するためにのみ、君の手紙に對して簡略に答えることが必要だと私は考えるのである。

一、「事實吾々は、二月革命から十月革命までの時期において、すべての農民との同盟というスローガンをもつていた」、「二月革命から十月革命にいたる時期において、黨は農民に對する自己の舊いスローガン、すなわち、全體としての、すべての農民との同盟というスローガンを固守し、かつ擁護した」ということを、君はその手紙の中で述べている。

これによれば第一に、ボルシエヴィキは十月革命の準備期（一九一七年の四月——十月）において、貧農と富裕な農民との間に境界線を引くことを自己の任務として立てず、全體としての農民を取上げたということになる。

これによれば第二に、十月革命の準備期において、ボルシエヴィキは「プロレタリアートと農民との獨裁」という舊いスローガンを、「プロレタリアートと貧農との獨裁」という新しいスローガンに取り替えることをせず、一九〇五年に書かれたレーニンのパンフレット「二つの戦術」の中で規定されている舊い立場にとどまっていたということになる。

これによれば第三に、十月革命の準備期（一九一七年の三月——十月）におけるソヴェトの動搖と協調主義とに對する、諸ソヴェト内における、また戦線における中農の動搖に對する、革命と反革命との間での中農の動搖に對する、エス・エルとメンシエヴィキの協調主義者が指導的地位を占めていたソヴェトが、ボルシエヴィキを孤立させんがために反革命將軍共と歩調を合せるにいたつた七月事件のときに、特に尖鋭な性質をとるにいたつた動搖と協調主義とに對するボルシエヴィキの闘争政策が、即ち農民の或る層のこれらの動搖と協調主義とに對するボルシエヴィキの闘争が、目當てのないもので、絶対に無用なものであつたという事になる。

そして最後に、これによれば、一九一七年の四月——五月に、プロレタリアートと農民との獨裁という舊いスローガンを固守したカメネフは正しく、このスローガンを、すでに時代おくれとなつたものとみなし、プロレタリアートと貧農との獨裁という新しいスローガンを宣言したレーニンは正しくなかつたということになる。

全體として、君の手紙の一切の不合理なことを知るには、これらの問題を提起するだけで十分である。

しかしながら、君は、レーニンの著作から個々の文句を引用することが、大變好きな人だから、その引用文を見ることにしよう。

レーニンが、革命の一層の發展という見地から、二月變革後のロシアの農業關係における新しいものとしてみなしていたのはプロレタリアートと全體としての農民との利害の共通性ではなくて、貧農が富裕な農民と決裂したこと、彼等のうちの前者、即ち貧農がプロレタリアートの方へ味方し、後者、即ち富裕な農民が、臨時政府にくつついて行つたことであつて、これを證明するためには、大した苦勞も要らないのである。

一九一七年の四月に、レーニンはカメネフとカメネフ一味の見解を論駁し、この點について次のように言つている――

「農民との利害の共通性ということに、現在*望みをかけることは、プロレタリア黨にとつて許すべからざることである」。――一九一七年四月會議におけるレーニンの演説、レーニン全集、第二〇卷、二四五頁）

さらに、

「現在すでに、多くの農民大會の決定において、農業問題の解決を、憲法制定會議まで待つという意見のあるのを吾々は見ると、――これはカデツトの方へ傾いていつている富裕な農民*の勝利である」。――一九一七年四月の、ペトログラード全市黨會議におけるレーニンの演説、レーニン全集、第二〇卷、一七六頁）

* 傍點は私による。――イ・スターリン

さらに、

「農民が全土地と全権力とを掌握するであろうということは可能なことである。私はこの可能性を忘れていず、また自分の眼界を今日だけに局限してはいないばかりでなく、新しい現象、即ち作男並に貧農と、富裕な農民との一層深刻な決裂* ということを考慮に入れて、農業綱領を直截精確に定式付けているのである」。(レーニンの四月の論文「戦術に關する手紙」、レーニン全集、第二〇卷、一〇三頁)

レーニンは、以上の點に二月革命以後の農村における新情勢下の新しいもの、重要なものを看取したのである。

レーニンは、以上の點から一九一七年二月以後の時期に黨の政策を確立するに際して、發足したのである。

レーニンは、一九一七年四月ペトログラード全市黨會議で次の如く述べたときにも、この命題から發足したのである——

「労働者兵士代表ソヴエトが、権力を臨時政府に譲渡したということを、吾々はたつたいま、この場所で知つたばかりだ。労働者兵士代表ソヴエトは、プロレタリアートと兵士——兵士のうちの大多数は農民である——の獨裁の實現されたものである。これこそ、プロレタリアートと農民との獨裁なのである。しかしながら、この「獨裁」は、ブルジョアジーと妥協するにいたつた。ここにおいて、「舊い」ボルシエヴィズムの再検討ということが必要となつたのである」。(レーニン全集、第二〇卷、一七六頁)

* 傍點は私による。——イ・スターリン

レーニンは、彼が一九一七年四月に次の如く書いたときにも、この命題から出發している。即ち、
 「現在、「プロレタリアートと農民との革命的民主主義的獨裁」についてののみ云々する者は、實生活からおくれた者であり、従つて、プロレタリア的階級闘争に反對して、事實上小ブルジョアジーの側に移行した者であり、そんなものは、革命前の「ボルシェヴィキ的」珍書文庫（「昔のボルシェヴィキ」文庫と稱してもよい）に引渡さなければならぬ」。――（レーニン全集、第二〇卷、一〇一頁）

プロレタリアートと農民との獨裁という古いスローガンに代る、プロレタリアートと貧農との獨裁というスローガンは、この基礎の上に生れたのである。

君は、君の手紙の中でも言つていられるように、これは、まだ完成されていない農民革命をトロツキー流に飛び越すことであるというかも知れない。だが、これは一九一七年の四月に、レーニンに對して向けられたカメネフのこれと同様な反對が、納得できたと丁度同じ程度に、納得できるものであるだろう。

レーニンが過ぎのようによつて述べたときには、かかる反對意見を完全に入れていたのだ――
 「トロツキズムは、「ツァーリなしで労働者の政府をつくれ」、と。これは正しくない。小ブルジョアジーは存在しているのだ。これを無視することはできない。だが、小ブルジョアジーには二つの部分がある。その貧しい*部分は、労働者階級とともに進行している」。――（レーニン全集、第二〇卷、一八二頁）。

* 傍點は私による。――イ・スターリン

カメネフの誤謬、そして、現在における君の誤謬は、小ブルジョアジーの、そしてこの場合には農民の、二つの部分の間における差異を見てとり、それを強調することを能くできないということ、また全體としての農民の全大衆の中から、農民のうちの貧しい部分を分離させ、この基礎の上に、一九一七年における革命の第一段階から、その第二段階への過渡の情勢下における黨の政策を築き上げ、ことを能くできないということ、このことから新しいスローガン、すなわちプロレタリアートと貧農との獨裁についての、黨の第二の戰略的スローガンをよく導き出せないということにあるのである。

一九一七年の四月から十月にいたるまでの、『プロレタリアートと貧農との獨裁』というスローガンの實際的歴史を、レーニンの勞作のうちから、順序を追つてよく調べてみよう。

一九一七年四月——

『ロシアにおける現時機の獨特性は、プロレタリアートの階級意識性と組織性とが不十分であつたために、權力をブルジョアジーに與えた、革命の第一*段階から、プロレタリアートと農民のうちの貧しい層*の手に、權力を與えるべきである革命の第二段階への過渡にあるという點である』。(レーニンの『四月テーゼ』、レーニン全集、第二〇卷、八八頁)

一九一七年七月——

『もじも貧農が*革命的勞働者を支持するならば、彼等革命的勞働者だけが、資本家の反抗を粉碎し、土地の無償獲得と、完全な自由と、飢餓の克服と、戰爭の克服と公正にして確乎たる平和とへ、人民を導き得るものである』。(レーニン全集、第二一卷、七七頁)

* 傍點は私による。——イ・スターリン、

一九一七年八月——

「ただ貧農*（わが黨の綱領では半プロレタリアといわれている）を指導しているプロレタリアートのみが、民主主義的媾和によつて戦争を終結させ、戦争の創痕をいやし、絶対に必要にして猶豫を許さぬものとなつた歩行を、社會主義へ向つて開始することができる——かくの如きが、現在におけるわが階級的政策的定義である」。〔レーニン全集、第二一卷、一一一頁〕

一九一七年九月——

「ただプロレタリアートと貧農*との獨裁のみが、資本家の反抗を粉碎し、權力の眞に偉大なる勇敢さと斷乎さとを體現し、軍隊内においても、また農民の間においても、大衆の熱誠にみちた、獻身的な、眞に英雄的な支持を自己のものとして確保することができるのである」。〔レーニン全集、第二一卷、一四七頁〕

一九一七年の九月——十月、レーニンが「ノーヴァヤ・ジーズニ（新生活）」と論争しているパ
ンフレット「ボルシエヴイキは國家權力を維持するか？」

「全權力をブルジョアジーに與えるか*——諸君はすでにすつと前から、これを擁護していないし、ブルジョアジー自身も、その事をおくびにも出そうとはしない。それは、すでに四月の二十日——二十一日に、人民が一寸肩をゆすつただけで、こんな權力を振りすててしまつたということ、そして現在では、以前に三倍した斷乎さと容赦なさで、こんな權力を振りすてるであろう

* 傍點は私による。——イ・スターリン、

ということを知っているからである。それとも*権力を小ブルジョアジー、即ち小ブルジョアジーとブルジョアジーとの連立（同盟、協定）に與えるか*、なせならば、小ブルジョアジーは、自主的に、また獨立で權力を掌握しようとは欲しないし、また掌握することなどはできないからである。これはすべての革命の經驗が證明しているところであり、また、資本主義國においては、資本の味方となることもできようし、或は勞働の味方となることもできようが、その中間に踏みとどまることはできないと説明している經濟學も、證明しているとおりである。この連立は、ロシアにおいては半カ年の間に幾十という方法を試験してみたが、完全に失敗してしまつたのである。最後に、それとも*ブルジョアジーに反對して彼等の反抗を粉砕するために、プロレタリアートと貧農*とに全權力を與えるか*。これはまだ試験済みではない。そして「ノーヴヤ・ジーズニ」の紳士諸君、諸君はブルジョアジーに對する諸君自身の恐怖で人民を脅かして、彼等にこのことを思い止まらせようとしてゐるのである。このつぎに來るべき第四のものは、考へ出せない」。〔レーニン全集、第二一卷、二七五頁〕

事實はかくの如くである。

十月革命の準備史上における、これらの事實と事件のすべてを、君は、「具合よく」回避し、當時、諸ソヴェト内に席を占めていた「富裕な農民」の動搖と協調主義とに對する十月革命の準備期におけるボルシエヴィキの鬭争を、ボルシエヴィズムの歴史から「具合よく」抹殺し、プロレタリアートと貧農との獨裁についてのレーニンのスローガンを、「具合よく」生埋めにし、そして、それと

* 傍點は私による。——イ・スターリン

もに、このことは、歴史に對する、またレーニン主義に對する暴行ではないと君は考えようとしている。

まだいくらでもあげることが出来るこれらの引用文から、ボルシエヴィキが全體としての農民ではなく、農民のうちの貧しい部分を、一九一七年二月以後の起點としてとりあげたこと、またボルシエヴィキが、プロレタリアートと農民との獨裁という舊い、スローガンの下にはなく、プロレタリアートと貧農との獨裁という新しい、スローガンの下に、十月革命に向つて前進したことを、君は知らなければならぬ。

このことによつて、ボルシエヴィキが、諸ソヴエトの動搖と協調主義に對する、また諸ソヴエト内に席を占めていた農民のある部分の動搖と協調主義とに對する、エス・エル並にメンシエヴィキとよばれる周知の小ブルジョア民主黨の動搖と協調主義とに對する鬭争において、このスローガンを實行したということは明かである。

このことによつて、プロレタリアートと貧農との獨裁という新しいスローガンなしには、吾々は、エス・エルとメンシエヴィキとの協調主義を克服し、農民のうちのある部分の動搖を中立化し、ブルジョア権力を打倒し、かくしてブルジョア革命を最後まで遂行することを可能ならしめることのできるほど十分に強力な政治的軍隊を創り上げることは、できなかつたであろうということは明かである。

このことによつて、「クラーク（やはり農民だ）の反抗と中農側の動搖とのある中を、吾々は、貧農とともに十月革命に向つて前進し、十月革命において勝利した」（ヤン—スキーへの私の回答を見よ）ということは明かである。

かくして、十月革命の準備期間全體にわたつてと同じ様に、一九一七年四月にも正しかつたのは、レーニンであつてカメネフではなかつた。そして、現在カメネフ一味の見解を復興させている君は、あんまり良くない仲間の中へ轉落しているとしか思えない。

二、以上に述べた一切のことに對立させて、君は、一九一七年の十月においては、全體としての農民の支持を得て、吾々が權力を掌握したということについてのレーニンの言葉を引證している。吾々が全體としての農民の、或る程度、の支持を受けて權力を掌握したということ、それは全く正しい。だが君は「瑣事」、即ち全體としての農民は、十月革命において、また、十月革命後にも、吾々がブルジョア革命を最後までやりとげたという限りにおいてのみ、吾々を支持したということを、つけ加えるのを忘れていた。この事は、この場合において、問題を決定するところの、非常に重要な「瑣事」である。このように重要な「瑣事」を「忘却し」、かくして最も重要な問題を曖昧にしてしまふなどということは、ボルシェヴィキには許されないことである。

君の手紙によつて、君は、全體としての農民の支持ということについてのレーニンの言葉を、同じくレーニンによつて與えられた「プロレタリアートと貧農との獨裁」についての黨のスローガンに對立させていることが明かである。だが、レーニンのこれらの言葉を、レーニンの著作からの前の引用文に對立させるためには、また、プロレタリアートと貧農との獨裁のスローガンについてのレーニンの前の引用文を、君が引用しているところの、全體としての農民についての同じくレーニンの言葉によつて反駁する根據をもつためには、そのためには少なくとも二つのことを證明しなければならぬ。

第一。ブルジョア革命を最後まで遂行するということは、十月革命における主要なものであるということを證明しなければならぬ。レーニンは、ブルジョア革命を最後まで遂行するということは「通りがかりに」この任務を解決した十月革命の「副」産物であるとみなした。何よりもまず、レーニンのこの命題を反駁し、十月革命における主要なものは、ブルジョアジーの権力の打倒でもなく、プロレタリアートの手中への権力の移行でもなくて、ブルジョア革命を最後まで遂行することであるということを證明することが必要だ。これを證明してみたまえ。それができた時には、私も、吾々はプロレタリアートと貧農との獨裁ではなくて、プロレタリアートと農民との獨裁が一九一七年四月から十月まで黨のスローガンであつた、ということをも認める覺悟がある。

君の手紙によつて、君は、この冒險以上ともいふべき任務を、自分で引受けようとせず、十月革命の最も重要な問題の一つ、即ち平和の問題では、全體としての農民全部が、恰も吾々を支持したかの如く「通りがかりに」證明しようとしていることが見られるのである。もちろんそれは正しくない。それは斷然正しくない。平和問題では、君は通俗的な見地に迷い込んでしまつた。事實、平和問題は、當時わが國においては権力についての問題であつた。なせならば、プロレタリアートの手中への権力の移行ということによつてのみ、帝國主義戦争からの脱出を期待することができたからであつた。君は、「戦争を終結させる」ということは、権力が別の階級へ移行することによつてのみ可能であり、また、「戦争を打倒せよ」ということは、銃劍を投げ出すことではなくて、それは別の階級への権力の移行を意味する」(一九一七年四月のペトログラード全市黨會議におけるレーニンの演説、レーニン全集、第二〇卷、一八一頁及び一七八頁)というレーニンの言葉を、きつと忘れてしまつたのに違ひない。

このようにして、二つのうちの一つ、即ち、君は十月革命における主要なものは、ブルジョア革命を最後まで遂行することだということを當然証明するか、それとも、君はそれを証明しないか、どちらか一つである。そして後者の場合には、全體としての農民は、吾々が帝制、地主の所有および地主制度を清算しつつ、ブルジョア革命を最後まで遂行した限りに、おいてのみ、十月革命において、吾々を支持することができたという結論がひとり出てくるのである。

第二。ボルシェヴィキが、十月革命の準備期間全體にわたつて、プロレタリアートと貧農との獨裁というスローガンを系統的に實行することなしに、このスローガンが原因となつて生じた、小ブルジョア諸黨の協調主義に對して系統的に鬭争することなしに、この同じスローガンが原因となつて生じた、農民のある層と諸ソヴェト内における彼等の代表者達との動搖を系統的に暴露する事なしに、ブルジョア革命を最後まで遂行した限りにおいて、彼等は十月革命において、また十月革命後にも、全體としての農民の支持を獲得することができたということを、君は證明しなければならぬ。

これを證明して見たまえ。事實、なせ吾々は十月革命においてもまた十月革命後にも、全體としての農民の支持を保障することができたのか？ なせならば、吾々はブルジョア革命を最後まで遂行する可能性を得たからである。

なせ吾々は、かかる可能性を得たか？ なせならば、吾々はブルジョア權力を顛覆させて、ブルジョア革命を最後まで遂行することのできる唯一のものであるプロレタリアートの權力と置き替えたからである。

なせ吾々は、ブルジョア權力を顛覆させて、プロレタリアートの權力を確立することができたか？ なせならば、吾々はプロレタリアートと貧農との獨裁というスローガンの下に、十月革命の準備

を遂行したからであり、このスローガンから發足して、吾々は小ブルジョア諸黨の協調主義に對して系統的な鬭争を實行したからであり、このスローガンから發足して、吾々は諸ソヴエト内における中農の動搖に對して系統的な鬭争を實行したからであり、こういうスローガンによつてのみ、吾々は、中農の動搖を克服し、小ブルジョア諸黨の協調主義を粉碎し、プロレタリアートの手に權力を移行させるための鬭争を遂行することができるような、政治的軍隊を結集することができたからである。

十月革命の運命を決定したこれらの豫備條件なしに、吾々は十月革命においても、また十月革命後にも、ブルジョア革命を最後までやりとげることにおいて、全體としての農民の支持を獲得することはできなかつたであらうということを、今更證明する必要があるまい。

農民戦争とプロレタリア革命との結合ということは、こういうふうに理解すべきである。

だからこそ、十月革命中また十月革命後の、ブルジョア革命を最後までやりとげることにおける全體としての農民の支持をプロレタリアートと貧農との獨裁というスローガンの下における十月革命の準備という事實に對立させることは、レーニン主義を少しも理解しておらぬことを意味するのである。

君の基本的な誤謬は、君が十月革命の進行過程においては、社會主義的任務とブルジョア革命を最後まで遂行するという任務とが交錯しているという事實も、また、プロレタリアートと貧農との獨裁についての、黨の第二の戰略的スローガンから出ているところの、十月革命の個人の要求の實現の方法をも、理解しなかつたことにあるのである。

君の手紙を讀むと、農民をプロレタリア革命に役立たせたのは吾々ではなくて、反對に、クラークをも含めた「全體としての農民」が、ボルシエヴィキを自分達に役立たせたというように考えられる。もしもボルシエヴィキが、こんなによやすすと、非プロレタリア階級への奉仕に「従事した」とすれば、ボルシエヴィキの仕事は駄目だつたであらう。

一九一七年四月の時期におけるカメネフ一味の見解、——これこそ君の足をひっぱっているのだ。

三、君は、スターリンが一九〇五年の状況と一九一七年二月までの情勢との間の相違を見ていないと確言している。それはもちろん、真面目ない方ではない。私はこれについて述べなかつたし、また述べることもできなかった。私は自分の手紙の中で、一九〇五年に掲げられたプロレタリアートと農民との獨裁についての黨のスコロガンは、一九一七年二月革命において確證されたということだけを述べた。そして、これは勿論その通りだ。一九一七年八月に、レーニンは彼の論文「農民と勞働者」の中で、この情勢を、實にこのように描き出しているのである。

即ち、

「ただプロレタリアートと農民のみが、君主制を打倒することができる、——かくの如きがその當時（一九〇五年のこと）をいつている。——イ・スターリン）における、わが階級政策の基本的定義であつた。そして、この定義は正しかつた。一九一七年の二月と三月は、もう一度このことを確證した*。」（レーニン全集、第二一卷、一一一頁）

君は、ただ言いがかりをつけているのだ。

四、さらに君は、プロレタリアートの獨裁が鞏固化された後には、中農と協同して社會主義を建設し得る可能性について述べているところの、スターリンのバンフレット「レーニン主義の諸問題」からの引用文を、十月革命までの中農の協調主義についてのスターリンのテーゼと對立させて、スターリンの矛盾撞着を實證しようとしている。

傍點は私による。——イ・スターリン、

二つの異なる現象をこういうふう同一視することが絶對的に非科學的であるということを示すには、大した苦勞は要らない。ブルジョアジーが權力を握つていた時である十月革命前の中農と、ブルジョアジーがすでに打倒かつ收奪されてしまい、協同組合が發達し、基本的な生産手段がプロレタリアートの手に收められていた時であるプロレタリアート獨裁の鞏固化された後の中農とは、二つの全く異なつたものである。これら二種の中農を同一視し、彼等を同一列におこうとすることは、歴史的環境との連けいなしに現象を考察し、一切の見透しを失うことである。これは日付や時期を全部ごちやごちやにするジノヴァイエフ流の引用の手法とどこか似たものである。

これをもじ「革命的辯證法」と稱するならば、ボクロフスキーは、「辯證法的」曲解におけるレコード全部を破つた、ということを認めなければならぬ。

五、その他の諸問題については、ヤン—スキーとの文通ですでにいい盡されてゐると思うので、ここでは觸れないことにする。

一九二七年五月二十日

十月革命の國際的性格

——十月革命十周年に際して——

十月革命は、單なる「一國の範圍内における」革命とみなしてはならない。それは何よりもまず國際的な、世界的な性格を有する革命である。なせならば、十月革命は、舊來の、即ち資本主義の世界から、新しい、即ち社會主義の世界への、人類の全世界史における根本的な轉換を意味しているからである。

過去の革命は、通常、國政の樞機をにぎる一つの搾取者のグループが他の搾取者のグループによつて交代されることによつて終りを告げていた。搾取者は代つた、だが搾取は依然として残つていた。奴隸解放運動の時期においてはこういう有様であつた。農奴蜂起の時代においても、こういう有様であつた。イギリス、フランス、ドイツにおける周知の「大」革命の時代にも、こういう有様であつた。資本主義に反對して歴史を向けようとするプロレタリアートの最初の、輝かしい英雄的な試みではあつたが、やはり不成功に終つたバリ・コンミュンについては私は述べない。

十月革命は、これらの革命とは原則的に異なつてゐる。十月革命は、一つの搾取の形態を、他の搾取の形態に代え、一つの搾取者のグループを他の搾取者のグループにかへることをその目的とせず、人間による人間のあらゆる種類の搾取を絶滅し、ありとあらゆる搾取者のグループを絶滅し、プロレタリ

アートの獨裁を樹立し、今日まで存在していたあらゆる被壓迫階級の中の、最も革命的な階級の權力を樹立し、階級のない新しい社會主義社會を組織することを目標としていたのである。

それだからこそ、十月革命の勝利は、人類の歴史における根本的な轉換を、世界資本主義の歴史的意義をもつ運命上の根本的な轉換を、世界プロレタリアートの解放運動における根本的な轉換を、全世界の被搾取大衆の闘争方法と組織形態、その生活様式と傳統、その文化とイデオロギーにおける根本的な轉換を意味しているのである。

十月革命が國際的な世界的な性格を有する革命であるという根據は、この點にあるのである。

十月革命を自己の解放の保障であると認めて、すべての國の被壓迫階級がこの革命に對して向けているところの深い同情の根底も、この點にあるのである。

全世界の革命運動の發展に對して、十月革命が影響を與えているところの幾多の基本的問題をあげてみよう。

一、十月革命は、何よりも先ず、それが世界帝國主義戰線を突破し、最大の資本主義國の一つにおいて帝國主義的ブルジョアジエを顛覆し、社會主義的プロレタリアートを權力につかせたという點で、特筆すべきものである。

被雇傭者の階級、しいたげられている者の階級、抑壓され、搾取されている者の階級が、人類の歴史上において初めて、支配階級の地位に登り、萬國のプロレタリアートに自ら範を示して感奮させているのである。

このことは、十月革命が新しい時代を、即ち帝國主義の諸國においてプロレタリア革命の時代をひらいたことを意味している。

十月革命は、生産用具と生産手段とを地主及び資本家の手から奪い取り、これを社会的所有に轉化させ、かくしてブルジョアの所有に社会主義的所有を對置させた。十月革命は、かくすることによつて、ブルジョアの所有は、神聖にして犯すべからざるものであり、永久不變なものであるという資本家の言の偽りであることを暴露した。

十月革命は、ブルジョアジーから権力を奪取し、ブルジョアジーの政治的權利を剝奪し、ブルジョアの國家機關を破壊して権力をソヴェトに引き渡し、かくして、資本主義的民主主義としてのブルジョア議會制度に、プロレタリア民主主義としてのソヴェトの社会主義的權力を對置させた。ラファルグが早くも一八八七年に、革命の翌日には「今日までの資本家はすべて選舉權を奪われるであろう」といつたのは正しかったのだ。

かくすることによつて十月革命は、ブルジョア議會制度を通じて、平和的に社会主義に移ることが現今においてできるという社会民主主義者共の言の偽りであることを暴露した。

しかしながら、十月革命はこれだけにとどまらなかつた。またとどまることができなかつた。十月革命は、舊いもの、ブルジョア的なものを破壊して、新しいもの、社会主義的なもの建設に着手した。十月革命の十年は、黨、労働組合、ソヴェト、協同組合、文化組織、運輸交通、工業、赤軍の建設の十年である。ソ同盟における建設の戦線で收めた社会主義の疑う餘地なき成功は、プロレタリアートがブルジョアジーなしに、またブルジョアジーに反對して、國を見事に統治し得るといふこと、プロレタリアートがブルジョアジーなしに、またブルジョアジーに反對して、見事に工業を建設し得るといふこと、プロレタリアートがブルジョアジーなしに、またブルジョアジーに反對して、見事に全國民經濟を指導し得るといふこと、資本主義による圍繞が存在するにも拘らず、プロレタリアートが見事に社会主義を建設し得るといふことを、一目瞭然と示したのである。

頭やその他の身體の部分が胃袋なしには存在し得ないと同じ様に、被搾取者は搾取者なしにはやつて行けないという古い「理論」は、單に古代史上で有名なローマの元老院議員メネウス・アグリッパだけの言分ではない。この「理論」は現在では、一般には社會民主黨の政治「哲學」の礎石であり、特殊的には帝國主義的ブルジョアジーとの連立についての社會民主主義的政策の礎石である。偏見的性格を帯びるにいたつたこの「理論」は、現在、資本主義諸國のプロレタリアート革命化の途上に横たわる、最も重大な障礙物の一つとなつてゐる。十月革命の最も重要な結果の一つは、十月革命がこの虚構の「理論」に致命的な打撃を與えたという事實である。

十月革命のこれらの、そしてまたこれらに類する結果が、資本主義諸國の労働者階級の革命運動に、重大な影響を及ぼさざるを得なかつたこと、また及ぼさざるを得ないということを、いまさら證明する必要があるだろうか？

資本主義諸國における共產主義の前進的成長と、ソ同盟の労働者階級に對する萬國プロレタリアの同情の成長増大、最後にソヴェト國への労働者代表團の殺到、というが如き一般に周知な諸事實は、十月革命によつて蒔かれた種子が、すでにその實を結び始めていることを疑いもなく物語つてゐる。

二、十月革命が帝國主義をぐらつかしたのには單に帝國主義の支配の中心においてのみではなく、單に「本國」においてのみではなかつた。十月革命は、植民地ならびに隷屬國における帝國主義の支配を掘り崩し、なお、帝國主義の後方にも、その周邊にも打撃を加えた。

地主と資本家を打倒して、十月革命は、民族的・植民地的抑壓の鎖を斷ち切り、廣大な國家の被壓迫諸民族を一つの例外もなく、抑壓から全部解放した。プロレタリアートは、被壓迫民族を解放せずには、自らを解放することはできない。十月革命の特徴は、それがソ同盟において、これらの民族

的・植民地的革命を、民族間の反目と民族間の衝突の旗の下にでなく、ソ同盟内諸民族の労働者と農民の相互的信頼と同胞的接近という旗の下に、即ちナシヨナリズムの名においてでなく、インターナシヨナリズムの名において遂行したという事實である。

わが國において、民族的・植民地革命がプロレタリアートの指導下に、インターナシヨナリズムの旗の下に行われたからこそ——然り、それだからこそ、非人の地位にあつた民族、奴隷の地位にあつた民族は、人類史上において初めて眞に自由な、眞に平等な民族の地位に登り、全世界の被壓迫民族に自ら範を示して感奮させているのである。

このことは、十月革命が新しい時代、即ちプロレタリアートと同盟して、プロレタリアートの指導下に、世界の被壓迫諸國において遂行される植民地革命の時代を開いたことを意味している。

従來は、世界は永遠の昔から下等人種と高等人種、黒色人種と白色人種とに分れており、そのうち前者は、文明を發達させる能力をもつておらず、搾取の對象物となる運命をもつていたが、後者は文明の唯一の擔當者であり、前者を搾取する使命を負わされていると考へるのが「慣わしであつた」。

現在ではこの作りばなしは打ち破られ、打ちすてられてしまつたものとみなさなければならぬ。十月革命の最も重要な結果の一つは、この革命がソヴェト的發展の軌道に引き入れられたところの、解放された非ヨーロッパ民族が、眞に先進的な文化と、眞に先進的な文明を、決してヨーロッパの民族に劣らず、前進させる能力をもつていゝことを、實際において示して、この作りばなしに致命的な打撃を與へたという事實である。

従來は、被壓迫民族を解放する唯一の方法は、ブルジョア的民族主義の方法であり、諸民族を互

に離反させる方法であり、彼等を分裂させる方法であり、いろいろの民族の勤勞大衆間に民族的反目を強める方法であると考へるのが「慣わしであつた」。

現在ではこの作りばなしは論駁しつくされてゐるものとみなさなければならぬ。十月革命の最も重要な結果の一つは、十月革命が、被壓迫民族を解放するプロレタリア的、國際的方法が唯一の正しい方法として可能であり、かつ目的にかなつたものであることを實際に示し、種々様々の民族の勞働者農民が自由意志とインテリナシヨナリズムの原則によつて、同胞的に同盟することが可能であり、目的にかなつてゐることを實際に示して、この作りばなしに致命的な打撃を與へた事實である。統一的世界經濟の下での、萬國勤勞者の將來の結合の原型をなしてゐるソヴェト社會主義共和國同盟の存在は、このことの端的な證明として役立たざるを得ない。

十月革命のこれらの、そしてまたこれらに類する結果が、植民地や隸屬國の革命運動に重大な影響を及ぼさざるを得なかつたし、また及ぼさずにはいられないことはいふまでもない。中國、インド、ネシヤ、インド、等々の被壓迫民族の革命運動の成長、またソ同盟に對するこれらの民族の同情の成長増大というような事實は、疑いもなくこのことを物語つてゐるのである。

植民地並に隸屬國を、無事平穩に擯取し、かつ抑壓し得る時代は、過ぎ去つてしまつた。

植民地並に隸屬國における解放革命の時代、これらの國のプロレタリアトの覺醒の時代、革命におけるプロレタリアートのヘゲモニーの時代が到來した。

三、帝國主義の中心において、またその後方においても、革命の種子を蒔き、「本國」における帝國主義の威力を弱め、植民地におけるその支配をゆり動かして、十月革命は、これによつて全體として、世界資本主義の存在そのものを問題化させた。

帝國主義の諸條件の下で、資本主義の自然成長的發達が、その發達の不均等性により、紛争と武力衝突の不可避なことにより、最後に未だかつてなかつた程の帝國主義的殺戮によつて、資本主義の腐敗と死滅の過程へ成長轉化したとすれば、十月革命と、これと關連して資本主義の世界體系から龐大な國が脱落したことは、世界帝國主義の基礎そのものを一步一步洗い去りつつ、この過程を促進せざるを得なかつたのである。

そればかりではない。帝國主義をぐらつかせながら、十月革命は、それと同時に最初のプロレタリア獨裁として、世界革命運動が前には決してもつていなかつたところの、そして、現在においてはそれに依據することのできる、世界革命運動の強大な、公然たる根據地を創り上げた。十月革命は、世界革命運動が、帝國主義に反對する萬國のプロレタリア及び被壓迫民族の革命的統一戰線を組織しつつ、前には決してもつていなかつたところの、そして、現在ではこれを中心として結束し得る世界革命運動の強大な、公然たる中心を創り上げた。

このことは、先ず第一に、十月革命が、世界資本主義に致命傷を與え、世界資本主義がもはや決してこの致命傷から恢復されないことを意味している。それだからこそ、資本主義は十月革命前に享有していた「均衡」と「安定」とを、二度と再び決してとり戻さないであろう。

資本主義は部分的に安定することができようし、その生産を合理化し、國の統治をファシズムに引き渡し、勞働者階級を一時抑えつけることができるであろうが、資本主義は從來見せびらかしていた「安静」と「確信」、「均衡」と「安定」とを決してとり戻さないであろう。というのは、世界資本主義の危機は、革命の焰が時には帝國主義の中心に、時にはその周圍に必ず燃え上り、資本主義のつぎはぎを台無しにし、資本主義の没落を日一日と近すけざるを得ないような發展の段階にまで、行

きついているからである。それは周知の寓話にある「尻尾をひきずり出せば、くちばしがもぐりこみ、くちばしをひきずり出せば、尻尾がもぐりこむ」様子とそっくり同じである。

このことは、第二に、十月革命が、支配階級をして全世界の被壓迫階級を新しい、重大な要因として考慮せざるを得ないようにさせ、これらの被壓迫階級の力と比重、勇敢さと戦闘準備の度合とを一定の高さに引き上げたことを意味している。現在では、もはや世界の勤勞大衆を、暗黒の中をさまよひ、前途の見透しを奪われている「盲目の群衆」とみなすことはできない。というのは、十月革命は彼等に向道を通し、前途の見透しを與える燈臺を、彼等のためにつくつたからである。もしも前には、被壓迫階級の憧れと志望とを表明し、またこれらをまとめあげるような全世界的な公會所がなかったとすれば、現在ではかかる公會所は最初のプロレタリア獨裁として存在しているわけである。

この公會所が打ち碎かれたら、「先進諸國」の社會・政治生活が長い間止め度のない、激烈な反動の間につまれるであろうということは、疑うべくもない。「ボルシエヴィキ國家」の存在という單なる事實でさえも、反動の暗黒の力を抑制し、自己解放のための被壓迫諸階級の鬭争を容易ならしめてゐることを否定することはできない。すべての國々の擄取者が、ボルシエヴィキに對して懐いてゐるかの獸的な憎惡は、實際これによつて説明されるのである。

歴史は、新しい基礎の上においてではあるが、くりかえされる。かつて封建制度の没落の時期に、「ジャコバン派」という言葉が、すべての國の貴族どもに恐怖と嫌惡をよび起した如く、今日資本主義の没落の時期においては、「ボルシエヴィク」という言葉は、すべての國のブルジョアジーに恐怖と嫌惡をよび起してゐるのである。そして反對に、かつては、蹶起しつつあつたブルジョアジーの革命的な代表者にとつて、パリが避難所であり、學校であつた如く、今日においては、モスクワは、蹶起しつつあるプロレタリアートの革命的な代表者にとつて、避難所であり、學校

である。ジャコバン派に對する憎惡も、封建制度の崩壞を阻止することはできなかつた。ボルシェヴィキに對する憎惡が、資本主義の必然的な壞滅を阻止しえないということに、疑問を懐くことができるであらうか？

資本主義の「安定」時代は、ブルジョア制度が確乎不動であるという作りばなしとともに、過ぎ、さつてしまつた。

資本主義崩壞の時代が到來したのだ。

四、十月革命は、經濟關係ならびに社會・政治的諸關係の領域のみにおける革命とみなしてはならない。それはそれとともに労働者階級の頭腦の革命であり、またそのイデオロギーの革命である。十月革命は、マルクス主義の旗の下に、プロレタリアート獨裁の理念の旗の下に、帝國主義とプロレタリア革命の時代におけるマルクス主義であるところの、レーニン主義の旗の下に生れ、鞏固化した。それゆゑ十月革命は、改良主義に對するマルクス主義の勝利、社會民主主義に對するレーニン主義の勝利、第二インターナショナルに對する第三インターナショナルの勝利を標示しているのである。

十月革命は、マルクス主義と社會民主主義との間に、レーニン主義の政策と社會民主主義の政策との間に、越え難い障壁を築いた。

かつてプロレタリアートの獨裁が勝利するまでは、社會民主黨はプロレタリアート獨裁の理念を公然とは否定しないが、この理念の實現を近ずけるためにはなにもせず、絶對になにもせず、マルクス主義の旗を見せびらかすことができた。もちろん社會民主黨のかような振舞は、資本主義にとつて何らの脅威にもならなかつたのである。當時、即ちこの時期には、社會民主黨は、マルクス主義と形式上合流していたか、或は殆ど合流していた。

だが現在、マルクス主義が何を齎さんとしているか、マルクス主義の勝利が何を意味し得るか、すべての人がはつきりと知るにいたつた現在、即ちプロレタリア獨裁の勝利の後では、もはや社會民主黨は、資本主義に對してある程度危険をもたらさずにはマルクス主義の旗を見せびらかすことはできないし、プロレタリアート獨裁の理念にいちやつくことはできないのである。すつと前からマルクス主義の精神とは訣別した社會民主黨は、マルクス主義の旗とも訣別せざるを得なくなり、公然、はつきりと、マルクス主義の生みの子、十月革命に反對し、世界最初のプロレタリアートの獨裁に反對するにいたつた。

今や社會民主黨は、自分とマルクス主義との間に境界線を設けざるを得なくなり、また實際に境界線を設けたのである。というのは、世界最初のプロレタリア獨裁を、公然とまた獻身的に支持せず自國のブルジョアジーに對して革命鬭争を遂行せず、自分の本國で、プロレタリアート獨裁の勝利のための條件を作り上げずに、現在の如き情勢の下でマルクス主義者と自稱することはできないからである。

社會民主黨とマルクス主義との間には、深淵が横たわるにいたつた。この時以後、マルクス主義の唯一の具現者であり、城砦たるものは、レーニン主義であり、共産主義である。

だが問題はこれにとどまらなかつた。十月革命は、社會民主黨とマルクス主義との間に境界線を劃し、社會民主黨を世界最初のプロレタリア獨裁に反對する、資本主義の公然たる擁護者共の陣營につきおとして、もつと前へ進んだ。アドラーおよびバウエル、ヴェルスおよびレヴィー、ロンゲおよびブリュムムの諸氏が「ソヴェト制度」を誹謗し、議會「民主主義」をほめをやしているとき、彼等はこれによつて、ソ同盟において資本主義制度を復興させるために、また「文明」諸國における資本主義的奴隸制を維持するために、彼等は鬭争しており、また將來も鬭争するであろうと言いたのである。

現在の社會民主主義は、資本主義の觀念的支柱である。現在の社會民主黨の政治家共は「労働運動内におけるブルジョアジートの眞の手先であり、資本家階級の労働者の番頭であり」、「ブルジョアジーに對するプロレタリアートの國內戦争」の時には、彼等は必然的に「「コンミュン派」に反對して「ヴェルサイユ派」の側に」つくであらうとレーニンが語つたのは、いかにも正しかつた。

労働運動における社會民主主義をやつつけてしまわないかぎり、資本主義をやつつけてしまふことはできない。ゆえに、資本主義の死滅の時代は、また同時に労働運動における社會民主主義の死滅の時代である。

十月革命の偉大な意義は、なかななくこの革命が世界労働運動における社會民主主義に對するレーニン主義の必然的な勝利を標示している點にある。

労働運動における、第二インターナショナルと社會民主主義との支配時代は終つた。

レーニン主義と第三インターナショナルとの支配時代が到來した。

「ブラヴダ」第二五五號、一九二七年十一月六日——七日

穀物戦線において

一九二八年五月二十八日に行われた、赤色教授養成所、共産主義
學士院、スヴェルドロフ大學の學生達との會談からの抜萃

質問。何を、穀物問題におけるわが困難中の基本的なものともみなすべきであるか？ これらの困難から脱し得る出路はどこにあるか？ 一般的には、わが工業の發展テンポとの關係において、特に輕工業と重工業との相對關係という見地から、これらの困難に關して、いかなる結論を引き出すべきであるか？

應答。一見ただけでは、穀物についてのわが困難は、偶然的なものであり、ただ計畫のたてかたが下手だっただけの結果であり、ただ經濟的均衡上において幾多の誤謬があつただけの結果であるように見えるかもしれない。

しかし、それはただ一見したときにのみ、そう見えるかもしれない。だが事實上、困難の原因は、この點では遙かにもっと深いところに存するのである。下手な計畫の立てかた、經濟的均衡上における誤謬ということが、この點で重大な役割を演じているということ、このことについては、何等の疑いもあり得ないのである。しかしながら、一切のことを下手なプランのたて方と偶然的な誤謬とによるものだとしてしまふことは、最も甚だしい誤謬におち込むことを意味する。プランをたてる

ということの役割と意義とを過少評價することは間違いだらう。だが、ありとあらゆるものについて、プランを立て、かつ統制することのできる可能性を有するような發展の段階に、すでに吾々は到達したのだと考えて、計畫原則の役割を過大評價することは、さらにもっと大きな間違いであらう。

わが計畫制度に承服している要素の外に、わが國民經濟の組成中には、現在のところまだ計畫制度に従つて物事を行うことを承服しない、また別な要素を有しているということ、最後に、國家計畫委員會の普通の計畫の立てかたでは克服することのできないところの、吾々に敵對している諸階級を有しているということを、忘れてはならない。

だからこそ、一切のことを、單なる偶發事、計畫の立て方の間違い、等々の所爲に歸してしまつてはならない、と私は考えるのである。

では、穀物戰線におけるわが困難の基礎をなすものは何であるか？

穀物問題におけるわが困難の基本的原因は、市場向の穀物生産の増加が、わが國においては穀物に對する要求の増大に比して、遅々としているという點にあるのである。

産業は成長しつつあり、労働者数は増大してゆく。都市はますます増えてゆく。そして最後に、市場向の穀物を需要するところの加工用農作物（棉花、亞麻、砂糖大根、等々）の生産地方が増大してゆく。すべてこれらのことは、穀物に對する、すなわち市場向の穀物に對する需要の急速な増加に導いてゆく。しかるに、市場向の穀物の生産は、おそろしくのろいテンポで増加している。

國家の支配下にある穀物の貯藏高がわが國では去年の、或は一昨年貯藏高よりも、今年も少なかったということはできない。反對に、今年わが國では、過去數年におけるよりもずっと多量の穀物を國家の手中にもつていたのだ。それにもかかわらず、吾々は依然として穀物についての困難に直面している。

若干の數字を次に示そう。一九二五——二六年度には、吾々は四月一日現在で、四億三千四百萬ブード（一ブードは一六・三八キログラム——譯者註）の穀物を調達することができた。その中から、一億二千三百萬ブードは國外へ輸出した。従つて、國內には三億一千一百萬ブードの貯藏穀物が残つた。一九二六——二七年度には、吾々は四月一日現在で、貯藏穀物五億九千六百萬ブードを有していた。その中から一億五千三百萬ブードを國外へ輸出した。國內には、四億四千三百萬ブードの貯藏穀物が残つた。一九二七——二八年度には、吾々は四月一日現在で、五億七千六百萬ブードの貯藏穀物をもつていた。その中から二千七百萬ブードを國外へ輸出した。國內には五億四千九百萬ブードの貯藏穀物が残つた。

換言すれば、今年四月一日現在で、吾々は國の需要を充たすための貯藏穀物を去年よりは一億ブード多く、また一昨年よりは二億三千萬ブード多くもつていたのである。しかるに依然として吾々は、今年も穀物戦線において困難を有しているのである。

私はすでに、自分の報告演説のうちの一つで、これらの困難は、農村における資本主義的分子により、そして、まず第一に、クラークによつて、ソヴェトの經濟政策を打ちこわすために利用されたことを述べた。諸君は、ソヴェト政權がクラークの反ソヴェト的行動を清算することを目的とする多くの方策をとつたことを知つている。それゆえ、ここでは、私はこのことについて、くだくだしくのべることはしないであらう。この場合、私は別の問題に關心を持つていたのである。私は、市場向の穀物の遅々たる生産の増加というこの原因についての問題、またすでに吾々が、播種面積と穀物の總産額において、戦前の規準に到達し得ているにも拘らず、市場向の穀物生産の増加がわが國では、穀物に對する要求の増大に比して、遅々としてゐることについての問題のことをいつていたのである。

事實上、吾々はすでに、播種面積において戦前の規準に達したということは、はたして事實ではないだろうか？ そうだ、それは事實だ。穀物の總産額がすでに昨年において、戦前の生産規準に等しくなったということ、即ち穀物の産額が五十億ブードにまで達したということは、はたして事實ではないだろうか？ そうだ、それは事實だ。それでは、これらの事態にもかかわらず、吾々が、市場向の穀物を戦前の時期に比してその二分の一しか産出せず、しかも二十分の一ほどの穀物を國外へ輸出しているなどということは、何をもって説明することができるか？

これは、まず第一に、そしてまた主として十月革命の結果としてわが農業の機構が變化されたことと、最大量の市場向の穀物を提供していた地主的、クラークの大規模經營から、最少量の市場向の穀物を提供している小規模と中規模の農民經營への移行ということとによつて説明されるのである。戦争の前に、わが國には一千五百萬乃至一千六百萬の個人農民經營があつたとすれば、現在吾々は二千四百萬乃至二千五百萬の農民經營を有しているという一つのことがすでに、すでにこの一つのことが、いまでは、最少限の市場向の穀物を提供しているところの小規模農民經營が、わが農業の基本的土台であるということをも物語つていたのである。

農業における大規模經營の強さは、それが地主の經營であろうとクラークの經營であろうと、はたまた集團的經營であろうとも、それが、即ち大規模經營が機械を適用し、科學知識を利用し、肥料を用い、労働生産能力を高め、かくして、最大量の市場向の穀物を提供し得る可能性をもっているという點にあるのである。そして反對に、小規模農民經營の弱さは、それがこれらの可能性をもつことを全く奪われているか、或は殆ど奪われており、それがために、それはまた半消費的な經營であり、少量の市場向の穀物しか提供する事のできない經營でもあるという點にあるのである。

例えば、コルホーズとソフホーズとを例にとつてみよう。わが國においては、この兩者は、その全産出總額の四割七分二厘にあたる市場向の穀物を提供している。換言すれば、これらは戦前の時期における地主の經營が提供したよりも相對的に多くの、市場向の穀物を提供している。ところで小規模、中規模の農民經營はどうであるか？ わが國ではそれらはその全産出總額の僅に一割一分二厘にすぎないものを市場向の穀物として提供している。諸君も知られる通り、この兩者の間の差異は、全くはつきりしているのである。

ここに過去における、即ち戦前の時期における、また現在即ち十月革命後の時期における穀物生産機構の様相を明瞭に示している若干の數字がある。これらの數字は、中央統計局參議會員同志ネムチノフによつて提供されたものである。これらの數字は、同志ネムチノフが、彼の覺え書の中で述べているように、正確なものであることを主張してもいないし、またこれらの數字は、ただ概算し得るだけの可能性を與えるものである。とはいへ、これらの數字は一般的に穀物生産の、また特に市場向の穀物生産の機構という見地から、戦前の時期と十月革命後の時期との間における差異を知り得るためには、全く十分なものである。(三二八頁を見よ)

この表は何を物語っているか？

第一に、この表は穀物生産物の壓倒的大量の生産が地主とクラークの手から、小農と中農との手へ移行したことを物語っている。このことは、小農と中農とが地主の抑壓から全く解放され、かつクラークの勢力を大體において打ち毀して、自己の物質的狀態を、極めて著しい程度に改善し得る可能性を得たことを意味している。これは、とりもなおさず十月革命の結果である。この點に、何よりもまず農民の基本的大衆が、十月革命の結果として得た決定的意義をもつ利得をみるこゝができるのである。

戦前	穀物總生産額		市場向の穀物 (農村外で消費されるもの)		穀物の市場 に向け 得る率
	單位百萬 ブード	%	單位百萬ブード	%	
戦前	一、地 主	六〇〇	二八一・六	二一・六	四七・〇
	二、ク ラ	一、九〇〇	六五〇・〇	五〇・〇	三四・〇
	三、中 農と貧 農	二、五〇〇	三六九・〇	二八・四	一四・七
總計		五、〇〇〇	一、三〇〇・六	一〇〇・〇	二六・〇
戦後 (一九二六—二七年度)	一、ソ フホーズと コルホーズ	八〇・〇	三七・八	六・〇	四七・二
	二、ク ラ	六一七・〇	一二六・〇	二〇・〇	二〇・〇
	三、中 農と貧 農	四〇五二・〇	四六六・二	七四・〇	一一・二
總計		四、七四九・〇	六三〇・〇	一〇〇・〇	一三・三

第二に、この表は市場向の穀物の主たる保有者は、わが國では小農、そしてまず第一に中農であることを物語っている。このことは、穀物の總産出高という見地からのみならず、市場向の穀物の生産という見地からも、ソ同盟は、十月革命の結果として、小規模農民經營の國となり、一方中農は、農業における『立役者』となつたということを意味している。

第三に、この表は地主（大規模）經營の清算、クラーク（大規模）經營の三分の一以下への縮少、そして僅に自己の産額の一割一分を市場向にあてるところの小規模農民經營への移行ということが、穀物生産の領域において、幾分たりとも發展した大規模の公共的經營（ホルホーズ、ソフホーズ）が存在しない場合には、戦前の時期に比して、市場向穀物生産の、急激な減少に導かれざるを得なかつたし、また實際にそうなつたことを物語っている。穀物の總産出額が戦前の規準に達しているにも拘らず、現在、吾々は市場向の穀物を以前の半分しかもつていないということは事實である。以上の如きが、穀物戦線におけるわが困難の基礎となつているところのものである。

だからこそ、穀物調達の領域におけるわが困難を、單なる偶發的なものとみなしてはならないのである。

わが商業の諸組織が、多くの小中都市へ穀物を供給するというような無用な任務を自ら引受け、その結果、國家の貯藏穀物がある程度減少させざるを得なかつたという事情もまた、この點においてある程度好ましくならぬ役割を演じていることは疑いのないところである。しかしながら、穀物戦線におけるわが困難の基本的なものは、この事情ではなくて、市場向の穀物に對する要求が急激に増大している際に、わが國農業の穀物を市場に向け得る率が、遅々として發展しているという事實にあることは、いささかも疑う根據はないのである。

この状態からの出路はどこにあるか？

この状態からの出路を、クラーク経営に逆もどりすることと、クラーク経営の發展ならびに展開とにあるとみている人々がある。これらの人達は、地主経営への逆もどりについて語ることを決かねている。というのは、彼等は明かに、今時そんなことをうつつかり喋つては、自分の身が危険だということをよく知つてゐるからである。しかしながら、彼等はソヴェト権力の……利益のために、クラーク経営をできる限り發達させることの必要については、一層熱心に語つてゐる。これらの人達には、ソヴェト権力は、一つの對立的な階級、即ち、労働者階級を搾取することをもつてその經濟上の原則とするところのクラークの階級と、一切の搾取を絶滅することをもつてその經濟上の原則とする労働者階級とに、同時に依據できたであらうと考へてゐる。反動家どもに全く相應した手品だ。これらの反動的な「計畫」が労働者階級の利益やマルクス主義の原則や、レーニン主義の任務とは似ても似つかぬものであることは、證明するにも値しないことである。クラークは、都市の資本家よりも「もつと悪い」といふことはない」とか、クラークは、都市のネツブマン（新經濟政策の初期における個人企業家、商人、ヤミ屋——譯者註）とくらべて、ちつともヨリ大きな危険ではないとか、またそれゆゑに現在、吾々はクラークを「危険がる」ことは何にもないのだとかいふ言ひぐさ、即ち、かゝる言ひぐさは、労働者階級と農民の基本的大衆の警戒性を鈍らせてゐる空虚な、自由主義的な饒舌である。もしも吾々が、工業において工業製品全量の九割を生産してゐる大規模の社會主義的工業を都市の小資本家に對立させることができるとすれば、吾々は農村において、生産の點ではまだ強化されてもいさ、クラーク経営にくらべてその八分の一の穀物を生産してゐるにすぎないコルホーズとソフホーズを、大規模なクラーク生産に對立させることができるといふことを忘れてはならない。農村における大規

模なクラーク經營の意義を理解せず、農村におけるクラークの比重が、都市工業における小資本家の比重よりも百倍も大であることを理解しないということ、それは、正氣を失い、レーニン主義と縁を切り、労働者階級の敵の側へ脱走することを意味する。

それならば、この状態からの出路はどこにあるか？

一、出路は、何よりもまず、小規模の、おくれかつ分散した農民經營から、機械で設備され、科學の知識で武装され、かつ、市場向の穀物を最も多量に産出することのできる、合同した大規模の公共經營に移行することにある。出路は、農業の個人的な農民經營から集團的經營に、公共經營に移行させることにあるのである。

コルホーズを組織すべきことを、レーニンは、早くも十月革命の初期から黨に呼びかけた。その時以來ずっとコルホーズ觀念の宣傳は、わが黨内においてやめられはしなかつた。しかしながら、コルホーズ建設への呼びかけが、大衆的な反響を見出し得たのは、ほんの最近のことであつた。このことは、何よりもまず、農村における協同組合組織の廣汎な發展がコルホーズに都合のよいように、農民の氣分を轉換させるために準備をしたということ、そして、すでに現在、一デシャチン（一デシャチンは、一町一反四歩八——譯者註）につき百五十乃至二百ブードの收穫を收め、その三割乃至四割を市場に出し得ている多くのコルホーズが存在しているということが、貧農と中農のうちの下層とを、非常につよくコルホーズの方へ惹きつけた、ということによつて説明しうるのである。

しかして國家が、コルホーズ建設の運動に對し、眞剣に財政的援助を與えようになつたのは、ほんのごく最近のことだという事情もまた、この點において小さからぬ意義を有しているのである。國家が、今年、コルホーズの援助のために、去年の倍額（六千萬ルーブル以上）を支出したことは、周

知のことである。大衆的な、コルホーズ建設運動のための条件はすでに熟しているということ、またコルホーズ建設運動を強化することは、わが国における市場向の穀物の生産率を高揚させるための、最も重要な手段の一つであることを認めた第十五回黨大會は、斷然正しかった。

一九二七年におけるコルホーズの穀物總産額は、中央統計局の資料によれば、五千五百萬ブロードより少くなくはなく、市場に穀物を出せる率は、平均三割であつた。今年のはじめにおける、新しいコルホーズの建設をめざす廣汎な波と、前からあるコルホーズの擴張とは、年末までに、コルホーズの穀物生産に、當然著しい増大を齎さなければならぬ筈である。そこで任務は、コルホーズ建設運動の現在の發展テンポを保持し、コルホーズを合併擴大し、ごまかしのコルホーズを却けて、それらをほんもののコルホーズととり替え、そして國家から補助金とクレジットとを受ける權利を奪われることを恐れて、コルホーズが市場向の各自の穀物全部を國家機關並に協同組合機關に差し出すような制度を制定することである。これらの條件を嚴守することによつて、三——四年ほど後には、吾々は約一億ブロードの市場向の穀物をコルホーズから受けられるようになるであろう、と私は考えるのである。

コルホーズはコルホーズであり、協同組合はまた別なものだ、というようにおそらく考えて、コルホーズの運動と協同組合の運動とを對立させる者が時々ある。勿論これはただしくない。またある者は、コルホーズはレーニンの協同組合計畫に對立するものだとさえいうにいたつてゐる。こんな對置が、眞實とは何らの共通點ももつていないということは、いうまでもないことである。事實において、コルホーズは協同組合の一形態であり、生産協同組合のうちの最もはつきりとした形態である。協同組合のうちには、販賣協同組合あり、供給協同組合あり、さらに生産協同組合もある。コル

ホーズは、一般には協同組合運動の、特にレーニンの協同組合計畫の、切りはなすことのできない構成部分である。レーニンの協同組合計畫を實行するということが、それは農民を、販賣協同組合、供給協同組合の水準から、生産協同組合の水準へ、いわばコルホーズ的な協同組合の水準へ高めることを意味する。わが國ではコルホーズが、販賣ならびに供給協同組合の發展強化の結果としてのみ發生し、發展するにいたつたという事實は、何よりもこれらのことによつて説明されうるのである。

二、出路は、第二に、從來のソフホーズを擴大強化し、新しい大規模のソフホーズを組織し發展させることにあるのである。現存するソフホーズの穀物總産額は、中央統計局の資料によれば、一九二七年において四千五百萬ブードより少くはなく、その中、市場に出せる率はその六割五分であつた。國家からの或程度の支持が與えられることによつて、ソフホーズが、穀物生産を著しく高めえたであろうということは疑いのないことである。

しかしながら、任務はこれだけに局限されるのではない、ソヴェト權力の決定があり、その決定によつて、五——六年後には約一億ブードの市場向の穀物を提供できるようになる筈の、新しい大規模のソフホーズ（各々一萬デシヤチンから三萬デシヤチンを領域として擁する）が、農民の分與地には全く手を觸れずに、諸地方に組織されるであろう。これらのソフホーズの組織活動は、すでに着手された。任務は、どんなことがあつても、ソヴェト權力のこの決定を實現させるということにあるのである。これらの任務を遂行するという條件の下に、吾々はほぼ三——四年後には、前からあるソフホーズと新しく組織されるソフホーズとから、約八千萬乃至一億ブードの市場向の穀物を得ることができるようになるであろう、と私は考えるのである。

三、最後に、出路は、小規模な、また中規模の個人農經營の收穫力を、系統的に高めるといふこ

とにある。吾々は個人的な、大規模のクラークの經營を支持することはできないし、また支持してはならない。しかしながら、吾々は、小規模な、また中規模な個人農經營の收穫力を高めさせ、協同組合組織性の軌道に彼等をひき入れつつ彼等を支持することができるし、また支持しなければならない。この任務は古くからのものであり、餘剩糧食收集制が現物税にとりかえられた一九二一年に早くも、特別力すよくわが國で唱導されたところの任務である。この任務は、第十四回黨大會と第十五回黨大會とにおいて、わが黨によつて確認された。この任務の重要さは、現在、穀物戰線における困難ということによつて、強調されている。それゆえにそれは、この任務は、最初の二つの任務、即ちホルホーズに關する任務とソフホーズに關する任務とを遂行するときのような根氣強さをもつて遂行されなければならぬ。

すべての資料は農民經營の收穫力を、數年の中に一割五分乃至二割高めることができるであろうということを示している。現在、わが國では五百萬挺を下らぬ舊式の犁が使用されている。これらを現代的な犁ととりかえるということだけでも、わが國の穀物生産を非常に多く増加させることができるであろう。農民經營に對する一定の最低限度の肥料の供給、精撰した種子の供給、小型機械の供給、等々については、私はもはや述べない。豫約買上げの方法、すなわち、穀物の適當量を、彼等から受けとるといふ義務條件すきで、彼等に種子その他を供給することについて、部落全體、村全體と契約を結ぶという方法、この方法は、農民經營の收穫力を高め、協同組合に農民をひき入れるための、最良の方法である。この方針の下に、眞剣に活動するならば、三―四年ほど後には、吾々は小規模の個人農民經營から一億ブードを下らぬ市場向の穀物を、新たに得ることができよう、と私は考えるのである。

かくして、これらの任務全部を遂行するという条件によつて、吾々は、三——四年後に、二億五千萬乃至三億ブードの市場向の穀物を、新たに國家の支配下に有することができるし、これは國內においても、また國外においても、必要なふうに、いろいろと手段をめぐらすために、多かれ少なかれ間に合うところのものなのである。

かくの如きが、大體において、穀物戦線における困難から抜け出るために必要な諸方策なのである。

これらの基本的な方策を、當面の方策、即ち、多くの中小都市に穀物を供給するという義務からわが商業諸組織を解放して、農村への商品供給の領域におけるプランの立てかたの改善についての方策と組み合わせること、かくの如きが、現在における任務なのである。

これらの方策とならんで、また別の多くの方策、例えていえば、わが工業の發展テンポを緩慢にするための方策を採つてはならないか？ というのは、わが工業の成長は穀物に對する急激な需要の増大をもたらし、この需要は現在のところ、市場向の穀物生産の増加を追い越しているから、と。否、そうすべきではない。どんな場合においてもそうすべきではない！ 工業發展のテンポをゆるめるといふことは、労働者階級を弱くすることを意味する。なせならば、工業發展のための前進の一步一歩、新しい工場の一つ一つは、レーニンの言葉をもつていえば、小ブルジョアの奔流との闘争において、またわが國經濟中の資本主義的要素との闘争において労働者階級の陣地を強化させているところ

の労働者階級の『新要塞』だからである。反對に、吾々は工業發展の現在のテンポを保持しなければならぬし、農村に物資をどしどし送り込み、農村から出来るだけ多くの穀物を引き出すことができるために、農業に、そしてどこよりも先にコルホーズとソフホーズに、機械類を供給するために、農業

を工業化し、農産物の市場に出し得る率を高めるために、吾々は最初の好機をつかんで、工業發展の現在のテンポを、さらに一層發展させなければならない。

さらにもつと「慎重であるべき」ために、主として農民に賣ることを目ざして生産している輕工業を、わが工業の土台とするために、重工業の發展を遅滞させるべきであつたのではなからうか？ どんな場合においてもそんなことをすべきではない！ そんなことは、輕工業をも含めてわが工業全體を自滅させることであり、内部から掘り崩してしまふことである。そんなことは、わが國の工業化というスローガンから遠ざかることであり、また、わが國を世界資本主義的經濟制度の附加物に轉化させてしまふことを意味するであらう。

この點については、吾々はコミンテルン第四回世界大會でレーニンが述べ、かつわが黨全體にとつて無條件的に義務づけられているところの、レーニンの有名な指導的テーゼから出發するであらう。次の如きが、この點に關して、レーニンがコミンテルン第四回世界大會で述べたところのものである——

「ロシアを救うということは、農民經營で良い收穫が得られるということだけではない——これだけではまだ不十分だ、——また、農民に日用品を提供している輕工業の状態が良好だということだけでもない——これだけでもまだ不十分である、——吾々には重工業もまた必要なのである」。

或はまた、

「吾々はすべてのことにおいて、學校のことですえも節約している。これはそうしなければならぬ。なせならば重工業を救うことなしには、それを復興させることなしには、吾々は一つ

の工業といえども、建設を完成し得ないであろうし、また、工業なしには、概して、吾々は獨立國としては滅亡してしまふであろうということを、吾々は知つてゐるからである」。――レーニン全集、第二七卷、三四九頁）

レーニンのこれらの指示を忘れてはならない。

労働者と農民の同盟についての問題は、以上に提起されている諸方策との關連において、どんなふうになるであろうか？ これらの方策は、労働者と農民の同盟を鞏固にすることを容易にすることができただけだ、と私は考へる。

實際上、もじもじホルホーズとソフホーズが急テンボで發展してゆけば、もじもじ小中農に對する直接の援助の結果として、彼等の經營からの收穫が高められ、一方、協同組合が益々廣汎な農民大衆を組織して行けば、もじもじ國家が巧にやりくりすることができるとに必要な、市場向の穀物を新たに幾億ブードも受けることになれば、またもじもじこれらの、或はこれらに類した方策が用いられた結果として、クラークが抑制され、漸次に克服されて行けば、労働者と農民の同盟内における労働者階級と農民との間の矛盾對立は、これによつていよいよ益々とり除かれてゆき、穀物調達のために非常手段をとらねばならぬ必要は消滅し、廣汎な農民の大衆は、益々集團的經營形態の方へ轉じ、一方農村における資本主義的要素克服のための闘争は、益々大衆的、よく組織された性質を帯びるであろうということ、明かなことではないか。

また労働者と農民の同盟ということ、かかる方策によつてただ利益を得るのみだということ、明かなことではないか？

プロレタリアート獨裁の條件下における労働者と農民の同盟とは、ただ單なる同盟であると見なしてはならないということ、どうしても考慮に入れなければならぬ。それは、労働者階級と勤勞農民大衆との、階級的同盟の特殊な形態であつて、次の諸點をその目的としている。即ち、イ、労働者階級の地位を強化すること、ロ、この同盟内における労働者階級の指導的役割を保障すること、ハ、階級並に階級のある社會を絶滅することである。労働者と農民との同盟に對する、これ以外のあらゆる解釋は、日和見主義であり、メンシエヴィズムであり、エス・エル主義である。即ち、何となくしようと隨意だが、ただマルクス主義でなく、またレーニン主義でもないのである。

労働者と農民との同盟の觀念を、農民は「最後の資本主義的階級」である、というレーニンの周知な命題と、どんなふうに合致させることができるか？　そこに矛盾はないだろうか？　そこでは、矛盾は、外見上だけの幻惑的のものにすぎない。實際上、そこには、何らの矛盾も存在しないのである。レーニンが「最後の資本主義的階級」として農民を性格つけた、コミンテルン第三回世界大會におけるその報告演説で、この報告演説の中でレーニンは、「獨裁の最高原則ということ、それは、プロレタリアートが指導的役割と國家權力を保持することができるよう、プロレタリアートと農民との同盟を支持することである」と聲明して、労働者と農民との同盟の必要なことを、再三再四論證しているのである。レーニンがこの點において何らの矛盾もみていないということは、明かなことである。

それならば、農民は「最後の資本主義的階級」であるというレーニンの命題を、どんなふう理解すべきであろうか？　これは、農民は資本家によつて構成されているということの意味はしないか？　否、そんなことを意味しはしない。

これは、第一に、個人農民は生産用具と生産手段の私有制に基礎を置いて、その經濟を築き上げて、その特殊な階級であり、この故に生産用具と生産手段の集團的所有性に基礎を置いてその經濟を築き上げていくプロレタリアの階級とは、相違するところの特殊な階級であるということの意味している。これは、第二に、個人農民は、資本家とクラーク、そして一般に各種の搾取者共を自己の仲間の中から、分出させ、生み出し、養い育てていくような階級であるということの意味している。

この事情は、労働者と農民の同盟を組織するということとつて、克服しがたい障礙物となるのではないか？ いや、そうではない。プロレタリアート獨裁の條件下におけるプロレタリアートと農民との同盟は、農民全體との同盟と見なしてはならない。プロレタリアートと農民との同盟は、労働者階級と勤勞農民大衆との同盟である。かかる同盟は農民の中の資本主義的分子に對する鬭争なしには、クラークに對する鬭争なしには實現され得ない。かかる同盟は、農村における労働者階級の支柱としての、貧農の組織なしには、鞏固たり得ない。それゆえに、プロレタリアート獨裁の、現下の條件下における労働者と農民との同盟は、貧農に依據し、中農とは鞏固な同盟を樹立し、クラークとの鬭争は一分間も中止するな、というレーニンの周知のスローガンによつてのみ、實現することができるのである。なせならば、このスローガンを實行することによつてのみ、基本的な農民大衆を社會主義建設の軌道に引き入れるということを実現し得るからである。

かくして、諸君は、レーニンの二つの定式の間の矛盾とは、ただ外見上の、幻惑的の矛盾にすぎないことを理解されるであらう。實際上、これらの間にはなんらの矛盾もないのである。

中農との同盟についての問題とレーニン

——同志エス……への回答——

同志エス……！

ピテイリム・ソロキンについての、レーニンの有名な論文中に提出されている「クラークとの闘争は一分間も放棄せず、かつ貧農にのみがつちりと依據して、中農とは協定を結ぶことを心得ること」というレーニンのスローガンが、恰も「貧農委員會の時期」のスローガンであり、「いわゆる中農中立化の末期」のスローガンであるかのようにいうのは、正しくない。これは、断然正しくない。

貧農委員會は、一九一八年六月に創立されたのであった。一九一八年の十月末には、吾々はすでに農村において、クラークに比してずつと優勢なわが勢力をもつていたし、かつ、中農は、ソヴェト權力の側へ方向轉換していたのであった。この方向轉換に基いて、ソヴェトと貧農委員會とによる二重政權の廢絶、郷並に村ソヴェトの再選舉、新しく選出されたソヴェトへの貧農委員會の融合とその結果としての貧農委員會の解消、これらについての黨中央委員會の決定もなされたのであった。そして、この決定がソヴェトによつて正式に採用されたのは、周知の如く、一九一八年十一月九日の第六回ソヴェト

* 或程度省略して發表する。——イ・スターリン、

大會においてであつた。私は、村及び郷ソヴエトの再選舉とソヴエトへの貧農委員會の融合とについての、一九一八年十一月九日の第六回ソヴエト大會の決定のことをいつていたのである。

ところで、レーニンが、中農の中立化というスローガンの代りに、中農との協定というスローガンを聲明している『ピテイルム・ソロキンの貴重な告白』と題するレーニンの論文が發表されたのは、一體いつか？ それは、一九一八年十一月二十一日、即ちこの第六回ソヴエト大會の決定の後、約二週間を経て發表されたのであつた。レーニンは、この論文で、中農との協定政策は、中農が吾々の側へ方向轉換した、ことによつて指示されたのだ、とはつきり述べている。

次に掲げるのがレーニンの言葉である。

「農村における吾々の任務は、地主を絶滅し、搾取者と闇商人・クラークの反抗を撃破することであり、これをなすために吾々は、ただ半プロレタリアにのみ、即ち「貧農」にのみ、がつちりと依據することができるのである。しかしながら、中農は吾々にとつて敵ではない。中農は今までも動搖してきたし、現在も動搖しており、將來も動搖するであろう。そして、動搖しているものに感化を及ぼす任務は、搾取者を打倒し、積極的な敵に對して勝利するという任務とは同一なものではない。クラークとの鬭争は一分間も抛棄せず、かつ貧農にのみがつちりと依據して、中農とは協定を結ぶことを心得ること——これが、現在の時期における任務である。なせならば、實に現在こそ、以上に述べた原因によつて、中農の間において、吾々の側への方向轉換が必然的*だからである」。(レーニン全集、第二三卷、二九四頁)

以上のことから、いかなる結論がひき出されるか？

*傍點は私による。——イ・スターリン

このことから、當然のこととして、レーニンのスローガンは、古い時期に關するものではなく、即ち貧農委員會の時期並に中農中立化の時期に關するものではなくて、新しい時期、即ち中農との協定の時期に關するものだということになる。それゆえにこのスローガンは、古い時期の終りではなくて、新しい時期の始まりを反映しているのである。

しかして、レーニンのスローガンについての君の斷言は、形式上からだけでなく、また例えば、年代的關係の點で正しくないだけでなく、本質的にもそれは正しくないのである。

中農との協定についてのレーニンのスローガンが、新しいスローガンとして、わが黨の第八回大會（一九一九年三月）で全黨の名によつて宣言公表されたものである、ということは周知のことである。また第八回大會こそ、とりもなおさず、中農との鞏固な同盟というわが政策の原則を創定したその大會であるということも周知のことである。また、わが黨の綱領、即ち、ソ同盟共產黨（ボルシエヴィキ）の綱領も、同じ様に第八回大會で採用された、ということも周知のことである。また、この綱領には、農村における各種グループ、即ち貧農、中農、クラークに對する黨の態度について、特別な項が設けられているということも周知のことである。ソ同盟共產黨（ボルシエヴィキ）綱領のこれらの項では、農村における社會的諸グループにつき、また彼等に對する黨の態度について、どんなことが述べられているか？きいてくれ給え——

『ロシア共產黨は、農村におけるその全活動において、従來のとおり、農村におけるプロレタリア的層と半プロレタリア的層に依據し、農村に黨の細胞、貧農の組織、農村のプロレタリアと半プロレタリアの特殊な型の労働組合等々を創立し、全力をつくして彼等を都市のプロレタリアートに近ずかせ、農村ブルジョアジーと小所有者の利害關係の影響下から引離して、何よりもまず、彼等を獨立勢力に組織する。』

クラークに對する、農村ブルジョアジーに對するロシア共産黨の政策は、彼等の擯取者的意向に反對する斷乎たる鬪争と、ソヴエト的政策に對する、彼等の反抗の彈壓といふことにある。

中農に對するロシア共産黨の政策は、中農を、一步一步、かつ計畫的に社會主義建設の活動に引き入れることにある。黨は中農の必要とすることに極めて注意深く對することによつて、中農をクラークから引離し、彼等を労働者階級の味方に引きつけることを自己の任務とする。それのために、重壓を加えるというやり方は斷じて用いず、思想的に感化するという方法で中農の後進性を克服し、中農の切實な利害關係に觸れるあらゆる場合に、彼等と實際的協定を遂げるように努力して、社會主義的改革遂行のための方法の決定においては、彼等に讓歩しなければならぬ*。』（『ロシア共産黨（ボルシエヴィキ）第八回大會』速記報告書、三五二頁）

綱領中のこれらの諸項とレーニンのスローガンとの間にたとえごく些細な、單に字句上だけの差異でも探し出して見てくれ給え！ 君は、この差異を探し出すことはできないにちがいない。なせならば、そんな差異は、もともと存在していないからだ。いやそれのみではない。レーニンのスローガンが、中農についての第八回大會の決定に對立するものではないのみならず、その反對に、これらの決定の最も正確な、かつ最も適切な定式づけであるということには、一點の疑いをささはさむ餘地もありえないのである。そして、ソ同盟共産黨（ボルシエヴィキ）の綱領が、中農の問題を特別に審議した一九一九年三月の第八回大會で採用され、また中農との協定についてのスローガンを聲明しているところの、レーニンの論文、即ちピテイリム・ソロキンを駁する論文が、第八回大會の四カ月前、即ち一九一八年十一月に發表されたということは、正に事實なのである。

* 傍點はすべて私による。——イ・スターリン

第八回黨大會が、レーニンのピテイリム・ソロキンを駁する論文中で聲明されているレーニンのスローガンを、社會主義建設の現時期全體に亘つて、黨が農村における活動のための指導となすべきスローガンとして全體的かつ完全に確保したことはあきらかなことではないか？

レーニンのスローガンの眞髓は何であるか？

レーニンのスローガンの眞髓は、それが農村における黨活動の三位一體の任務を素晴しく正確に把握し、この任務を一つの簡潔な定式すけで言い現している、ということにある。即ち、イ、貧農に依據し、ロ、中農とは協定を結び、ハ、クラークに對する闘争を一分間もやめるな、ということである。この定式すけのうちから、現在の時機における農村での活動のための基礎として、その一部分だけを取り、他の残りの部分は忘れてしまふように試みて見給え。君はそこで、必ず行詰まつてしまふに相違ない。

社會主義建設の現段階の條件下において、貧農に依據せず、クラークに對する闘争を遂行せず、眞の、そして鞏固な、中農との協定を打ち樹てることができらるであろうか？

そんなことはできはしない。

現發展段階の條件下において、貧農に依據せず、かつ中農との協定を有せず、クラークに對して勝利を博すことのできるような闘争を遂行することができらるであろうか？

そんなことはできはしない。

農村における黨活動のこの三位一體の任務を、一つの普遍的なスローガンで、最も効果的にうまく言い現すためにはどうすればよいか？ 私は、レーニンのスローガンが、この任務の最も適切な言い現し方である、と考えるのである。レーニンよりもつと適切に、だれも言えない、ということを確認ねばならぬ……

なせ、レーニンのスローガンの合目的性を、特に現在、農村での活動の現情勢下において、特に強調する必要があるのか？

なせならば、特に現在こそ、農村における黨活動の三位一體の任務を、バラバラに分解し、かつこれらの各部を互に切離せうとする、個々の同志達の傾向が認められるからである。このことは、本年の一月——二月におけるわが穀物調達カンパの實踐上において、そつくり確證された。

中農とは協定を打ち樹てることが必要だということは、ボルシエヴィキ全部が知つてゐる。だが、この協定をどんなふうにして打ち樹てるかということについて、だれでもが理解してゐるというわけではない。ある者は、中農との協定はクラークに對する鬭争をやめてしまふか、もしくはこの鬭争を緩和するという方法によつて打ち樹てるべきだと考へる。即ち、クラークとの鬭争は、中農の一部、即ちそのうちの富裕な部分をおどかして、離れさせてしまふだらうというのだ。

また他の者は、中農との協定は、貧農を組織するための活動をやめてしまふか、或はこの活動を緩和するという方法によつて打ち樹てるべきだと考へる。即ち、貧農を組織するということは、貧農が一人立ちできるように導き、しかして、この貧農が一人立ちできるようになるということ、中農をおどかして、吾々から離れさせてしまふか、もしくはこれぬというのである。

正しい方針からのこれらの脱線の結果、中農とは動搖してゐる階級であること、中農との協定は、クラークとの斷乎たる鬭争が遂行されるという條件の下においてのみ、貧農の間における活動を強化するという條件の下においてのみ、鞏固なものとする事ができるということ、また、これらの條件なしには、中農は、強力なものに惹きつけられるように、クラークの方に傾いて行くであろうというマルクス主義的命題の忘却ということになるのである。

第八回大會で述べられたレーニンの言葉を思い出してくれ給え。つぎのように述べられている

「確定的にして確乎たる地位をまだもつていない*階級に對する態度を決定することがぜひ必要である。プロレタリアートの大多數は社會主義に賛成であり、ブルジョアジーの大多數は社會主義に反對である。これら二つの階級間の關係を規定することは容易なことである。だが、吾々が中農のような階級層に考えを移してみると、それは、動搖していると、この階級であるということがわかるのである。この階級は一面では有産者であり、また一面においては勤勞者である。この階級は勤勞大衆の他の代表者を搾取しはしない。この階級は、幾十年の間、非常に大きな困苦と戦つて、自己の地位を守りつづけだし、またこの階級は地主と資本家の搾取を身をもつて體驗し、あらゆる苦しみを背負つている。が、しかもそれと同時に、この階級は有産者である。ゆえに、この動搖してゐる階級に對する吾々の態度は、甚だしく困難なものとなるのである」。 (『ロシア共産黨(ボルシエヴィキ)第八回大會』速記報告書、三〇〇頁)

しかして、上述のものにも劣らず危険な、正しい方針からの他の脱線も存在する。また、クラークに對する鬭争を遂行してはいるが、それが不器用にかつ不合理に行われているために、實際の打撃は中農と貧農とに振りかかつているというようなこともある。その結果、クラークは少しの損害をもうけず、中農との同盟ということには、ひびが入り、貧農の一部は、ソヴェト的政策に反對して潜在的鬭争を行つてゐるクラークの手中に一時陥るようなことになる。

また、現在の情勢の下では、クラークの收奪ということは馬鹿げたことであり、餘剩穀物收集制は、中農との同盟ではなく、中農に對する鬭争を意味するものであることを忘れて、クラークに對す

* 傍點は私による。——イ・スターリン

る闘争をクラークの收奪に轉化させ、穀物調達活動を餘剩穀物收集制に轉化させようと試みているような場合もある。

黨の方針からの、これらの脱線は、何に原因しているか？

それは、農村における黨活動の三位一體の任務が、單一にして切離すことのできない任務であるということを理解しないことに原因している。また、クラークに對する闘争の任務を、中農との協定という任務から、そしてまた、これら兩方の任務を、貧農を農村における黨の支柱に轉化するという任務から切離してはならぬということ、理解できないことに原因している*。

* このことから次のようなことが生ずる。即ち、黨の正しい方針からの脱線ということは、労働者と農民の同盟ということにとつて二様の危険、例えば穀物調達のための暫定的非常手段を、恒常的な、或は長期に亘る黨の方針に轉化させようと考へている者から生ずる危険と、クラークに對する束縛を解き、完全に自由な商業、即ち國家機關による統制のない商業を布告するために、非常諸手段の撤廢を利用しようと考へている者から生ずる危険とである。それゆゑに、黨の正しい方針を保障するためには二つの戦線に對する闘争が必要なのである。

私は、この機會を利用して、わが出版物が、時々或程度の一方的な偏向をさへ示して、この規定をいつも遵守しているとはいえないということを注意したい。例えば、結合の存在を危険ならしめ、暫定的な性質を有する穀物調達についての非常手段を、わが政策の恒常的な方針に轉化しようと欲する者たちを暴露するということがある。これは非常によいことである。だがしかし、それと同時に、他の側から結合を脅す者に對して、當然なさねばならぬ十分な注意を拂わ

す、また暴露をもなさず、小ブルジョアの奔流に屈服し、農村における資本主義的要素に對する闘争を弱らせ、國家による統制をうけることのない、完全に自由な商業を打ち樹てることを要求し、かくして、結合を、別な方面から掘崩させようとするものを暴露しないならば、それはよくないことであり、かつ正しからぬことである。これはすでによくないことである。これはまた、一方だけに片よつたやり方である。

また例えば、現段階における農業の基礎であるところの、個人的小規模の農民經營を振興させることの可能性と合目的性を否定しようとする者を暴露することもある。これは非常によいことである。だがしかし、それと同時に、コルホーズ並にソフホーズの意義を蔑視し、個人的小規模の農民經營の振興という任務がコルホーズ・ソフホーズの建設を振興させる任務によつて、實踐的に補足さるべきであるということを理解しない者を暴露しないならば、それはよくないことであるし、また正しくない。これはすでに一方だけに片よつたやり方である。

正しい方針を保障するためには、二つの戦線に對する闘争を遂行し、一切の、一方だけに片よつたやり方を驅逐しなければならぬ。

農村における現在のわが活動の遂行過程において、これらの任務が相互に離反しないようにするためには、どうすることが必要であるか？

そのためには、少なくとも、すべてこれらの任務を一つの共通した定式に統一するところの、従つて決してこれらの任務が、相互に切離されないような、指導的スローガンを與えることが必要である。

吾々は黨の武器庫に、かかる定式、かかるスローガンを持ち合せているだろうか？

然り、もつてゐる。かかる定式とはレーニンによつて與えられたスローガン、即ち「クラークとの鬭争は、一分間も放棄せず、かつ貧農にのみがつちりと依據して、中農とは協定を結ぶことを心得ること」これである。

だからこそ、このスローガンは、最も時宜に適したものであり、かつすべてを包括しているスローガンであり、特に現在、農村における活動の現在の条件下において、特に、このスローガンを最前面におし出すことが必要である、と私は考えるのである。

君は、レーニンのスローガンを「反對派的」なスローガンだとみなして、君の手紙で次のように問うている——「こんな反對派的なスローガンが、一九二八年のメトデーに際して『ブラヴダ』に掲載されるなんて……どうしてこんなことが起り得たのであろうか？……ソ同盟共産黨中央委員會の機關紙たる『ブラヴダ』紙上に、こんなスローガンが現れるなんて、何をもつて説明することができようか？これは一體、技術上の誤植に過ぎないものか？ それとも中農についての問題上での、反對派に對する妥協なのか？」と。

實に恐しい權幕で言われている。だが、何はともあれ同志エス……よ、「曲り角では」もつとよく注意深くし給え。君は熱中のあまり、レーニンのスローガンをそっくりそのまま確認しており（これは事實だ！）、基本的にはレーニン（彼は決して反對派の者ではない！）によつて起草され、第八回黨大會（これも反對派的なものではない！）によつて採用されたわが黨綱領を、印刷發表することを禁止しようとの結論に到達してゐるようである。農村におけるそれぞれの社會的グループについてのわが黨綱領中の周知な諸項目に、もう少し多く尊敬を拂つてもらいたいものだ！ 中農に對する第八回黨大會の決定に、もう少し多く尊敬を拂つてもらいたいものだ！……

「中農についての問題上での反対派に對する妥協」という君の文句についていえば、この文句は、論駁すべき價值さえないものだ、と自分は考える。即ちこの文句は、疑いもなく君が激昂のあまり、口走つたことにちがいないのだから。

レーニンのスローガンと、第八回黨大會で採用されたソ同盟共產黨（ボルシエヴィキ）の綱領、これら兩方の中では、中農との協定ということについて語られており、一方、第八回黨大會の開會にあつたの演説では、レーニンが、中農との鞏固な同盟について語つたという事態によつて、おそらく君は、混乱させられているのだ、と思われる。君は、きつとこれを、何か矛盾したものと見ているのに相違ない。君はおそらく、中農との協定という政策は、彼等との同盟という政策から脱線したものであるかのように臆測しようとする傾きをもつている。同志エス：よ、これは正しくない。これは大きな思い違いである。スローガンの文字を読むことはできるが、スローガンの意味を深く究めることができない人々のみが、こんなふうによく考へ得るのである。中農との同盟についての、また彼等との協定についてのスローガンの歴史を知つていない人々のみが、こんなふうによく考へられるのである。第八回黨大會における開會の辭で、中農との『鞏固な同盟』の政策について聲明したレーニンが、この同じ大會で彼が行つた他の演説と、おなじく第八回黨大會で採用された黨綱領とにおいて、今や吾々にとつては、中農との『協定』政策が必要なのだと言つて、自分自身の立場から脱線してしまつたのだと臆測できるような人々のみが、こんなふうによく考へられるのである。

問題は一體どこにあるのか？ 問題は、レーニンと黨が、第八回黨大會において、『協定』に對する解釋と『同盟』に對する解釋との間に、如何なる差異をも認めていないということにある。問題は、レーニンが、いたるところで、第八回黨大會における彼の演説のすべて、『同盟』に對する解釋と、

「協定」に對する解釋との間に、等號を^{おいた}ということにある。また「協定」に對する解釋と「同盟」に對する解釋との間に等號を附した、「中農に對する態度について」という第八回黨大會の決議についても、同じ様なことが言われなければならない。そしてレーニンと黨は、中農との協定政策を偶然なもの、また瞬間的なものではなくて、長期に亘る政策とみなしているので、彼等は、中農との協定という政策を、中農と鞏固な同盟を結ぶ政策と名づけ、またその逆に、中農と鞏固な同盟を結ぶという政策を、彼等との協定政策と名づけられる一切の根據をもつていたし、また現在ももつているのである。このことは第八回黨大會の速記報告書と、中農についての同大會の決議とを一讀すれば直に確認されるであらう。

次の如きが、第八回黨大會におけるレーニンの演説からの拔萃である。即ち――

「ソヴェトのはたらき手が十分な經驗をもつていないことと、問題の困難なこととによつて、クラークに對して向けられる筈の打撃が、しばしば中農に振りむけられた。この點では、吾々は極めて大きい過失を犯している。この點において吾々が積んだ經驗は、將來これを避けるために、すべての事ができるよ^うに吾々を助けるであらう。かように、吾々の前に立てられた任務は、理論的なものではなくて實際的なものである。この任務が困難なものだということは、諸君の極めてよく知つているところである。吾々は、中農に與えられるような良い物を持つてはいない。だが中農は物質主義者であり、また實際家であつて、吾々が現在のところでは與えることができない具體的な物質的有益物を要求している。だが、それなしにわが國は、おそらくもう數カ月の間、現在では完全に勝利を約束されてはいるが、困難な闘争をやらねばならぬであらう。だが、吾々は、わが國行政上の實踐において、多くのことをやれるであらう。即ち、わが諸機關を改善し、山積してい

る弊害を匡正することができる。吾々は中農とのプロツク、同盟、協定の方へ、*十分に用いられなかつたわが黨の方針を——この方針を吾々は眞直に直し、正しく直すことができるし、またそうしなければならぬ」。(「ロシア共産黨(ボルシェヴィキ)第八回大會」速記報告書、二〇頁)

レーニンが、「協定」と「同盟」との間に、差異をつけていないことを、君は見られるであろう。また、「中農に對する態度について」なる第八回大會の決議からの抜萃は、次のようである——

「中農をクラークと混同し、クラークに對して立てられた方策を、どんな程度においても中農に及ぼすことは、單にソヴェト權力の一切の布告とその政策全部に對してのみでなく、共産主義の一切の基本的原則、即ち、ありとあらゆる搾取の撤廢へ無痛で移行し得るための條件の一つとしてのブルジョアジーの打倒をめざす、プロレタリアートの決定的鬭争期におけるプロレタリアートと中農との協定、ということを示して共産主義の一切の基本的原則に對しても、最も甚だしく違反することを意味する。

比較的強靱な經濟的根底をもつている中農は、ロシアはさておき、先進資本主義諸國においてさえも、農業の技術は工業の技術よりも後れているという理由によつて、プロレタリア革命がはじまつてからも、かなり長い間存在しつづけるであろう。ゆえに、黨活動家達と丁度同じ様に、農村におけるソヴェトの働き手達の戦術は、中農との長期に亘る協力、ということを豫期しなければならぬ……

* 傍點は私による。——イ・スターリン、

：農村におけるソヴェト権力の完全に正しい政策は、かくの如く、勝利を博したプロレタリアートと中農との同盟と協定とを保障しているのである……

：労働者農民政府と共産黨との政策は、今後も、プロレタリアート並に貧農と中農との協定というこの精神によつて行われなければならぬ*。 (「ロシア共産黨(ボルシエヴィキ)第八回大會」速記報告書、三七〇—三七二頁)

見られる通り、決議も同じ様に、「協定」と「同盟」との間に差異をつけてはいないのである。

第八回黨大會のこの決議中に、中農との「鞏固な同盟」については、一言もいわれていないということを指摘することも、餘計なことではないだろう。しかしながら、このことは、それによつて決議が、中農との「鞏固な同盟」という政策から脱線しているということになるだろうか？ 否、そういうことを意味はしない。それは、決議が「協定」、「協力」という概念と「鞏固な同盟」という概念との間に、等號を附しているということだけである。また、中農との「協定」なしに中農との「同盟」はありえないし、また、もしも中農との「長期に亘る」協定と協力ががないならば、中農との同盟も、「鞏固な」ものとなることができなことは、わかりきったことである。

事實はかくの如くである。

要するに、次の二つの中の一つ、即ち、レーニンと第八回黨大會とが、中農との「鞏固な同盟」についてのレーニンの聲明から脱線したか、それとも、この出たらめな臆測をすてて、レーニンと第

* 傍點はすべて私による。——イ・ス・スターリン

八回黨大會とが、「協定」という概念と「鞏固な同盟」という概念との間に、どんな差異もつけていないことを認めるべきであるか、どちらか一つである。

かくして、空虚な文字の末に拘泥することの犠牲になることを欲せざるもの、貧農への依據、中農との協定、クラークとの鬭争、等について語られているレーニンのスローガンの意味を、深く究めようと欲する者は、中農との協定政策は、とりもなおさず彼等との鞏固な同盟という政策に他ならぬことを、理解せぬわけにはゆかないのである。

君の誤謬は、君が反対派の詐欺師的な詭計を理解せずに、敵が君に對してしつらえたわなに自らひつかかつて、反対派の挑發工作の手に乗つたことにある。反対派の詐欺師共は、彼等が、中農との協定についてのレーニンのスローガンを固守しているということを斷言して喚き立て騒ぎたて、しかしてそれと同時に、中農との「協定」ということは一つのことと、彼等との「鞏固な同盟」ということは、また別個のものだということについて、彼等は挑發者的な暗示を投じている。こうすることによつて、彼等は、一舉に二虎を射止めようと欲しているのである。即ち、第一には、中農との協定ではなくして「中農との不和反目」(第十六回モスクワ縣黨會議において、私が引用した反対派スミルノフの周知な演説参照)に他ならないところの中農に對する彼等の眞の立場を覆いかくすことであり、第二には、「協定」と「同盟」との間に虚構的な差異をつけて、それによつて、ボルシエヴィキのうちの間抜け共をうまくひっかけ、レーニンから彼等を引離して、彼等を全く混亂におとし入れてしまふことである。

ところで、これに應酬してわが同志達のうちのある者は何をしているか？ 彼等は、反対派ベテラン師共の面上から、假面をひつ剝がす代りに、彼等の眞の立場に關して黨を欺瞞している彼等の罪證

をつかんで、これを暴露する代りに、即ちこれらのことをする代りに、釣針にひつかつたり、わなにかつたり、自分をレーニンから離れて行かせるようなことをしている。反対派は、レーニンのスローガンについて騒ぎ立て、また反対派の連中は、レーニンのスローガンの味方を装っている。こんなふうだから、私は反対派と混同してみられないために、このスローガンとの間にはつきりとした區別をつけなければならぬ。さもなければ、私は「反対派と妥協」したと言つて、非難されるだろう——こういうのが、これら同志達の論法である。

そしてこれは、反対派の詐欺師的手法の唯一の例ではない。例えば、自己批判についてのスローガンをとつてみたまえ。ボルシエヴィキは、自己批判のスローガンがわが黨活動の基礎であり、プロレタリアート獨裁強化の手段であり、カール・ラウシェンバウアーの精髄であるということを理解しないではいられない。一方反対派は、自己批判のスローガンは、彼等、即ち反対派によつて案出されたものであつて、黨はこのスローガンを反対派から横取りしたのだ。だから黨は反対派に降伏したのだ、と主張して騒ぎ立てている。こんなふうには振舞つて、反対派は少なくとも、次の二つのことを獲得しようとしているのだ。

即ち第一には、黨精神の崩壊をその目的とする反対派の「自己批判」と、黨精神の鞏固化をその目的とするボルシエヴィキの自己批判との間には、深淵が横たわつてゐることを労働者階級に隠し、かくして彼等を欺瞞すること。

第二には、間抜け共のうちの幾人かを、釣針でひつかけて、自己批判についての黨のスローガンから彼等が離れることを餘儀なくさせることである。

ところで、わが同志達のうちのある者は、これに對してどんなふうには反撥對應してゐるか？ 反対

派中のペテン師の面上から、假面をひつ剝がしてボルシエヴィキ的自己批判のスローガンを守り代りに、彼等は、わなにひつかかり、自己批判のスローガンから自ら離れ去り、自ら進んで反対派の笛に和しておどり、そして………反対派との間にはつきりした區別をつけるのだという誤った臆測から、反対派に降伏しているのである。

こんな例は、山ほど擧げることができる。

しかし吾々は、自己の仕事上では、それがいかなる人間にしろ、その人の笛に和しておどることはできない。まして反対派の連中が、吾々について言っていることをもって、吾々の仕事の上における指導とすることなどはできない。吾々は、反対派の詐欺師的な言動も、反対派共の挑発工作の手に乗るわがボルシエヴィキ中のある者達の誤謬も、脇の方へ掃き出してしまつて、自己の道を進まなければならない。「自己の道をどこまでも進め、そして人々には言いたないように言わせておけ」と語つたマルクスの言葉を思い出してくれ給え！

一九二八年六月十二日

ソ同盟共産黨（ボルシェヴィキ）内における 右翼の危険について

一九二八年十月十九日のソ同盟共産黨（ボルシェヴィキ）モスクワ

黨委員會並にモスクワ黨統制委員會の總會における演説

同志諸君、吾々が現に關心をもっている右翼的偏向の問題を解決するためには、何よりもまず、些細な事や個人的な問題、等々から離れることが必要だ、と私は考える。

吾々は黨内に右翼的な、日和見主義的危険をもっているか、かかる危険にとつて有利な、客觀的條件が存在しているか、この危険といかにして闘争すべきであるか、——かくの如き問題が、今や吾の前にたてられているのである。

しかしながら、問題の周圍に附着し、また吾々が問題の本質を理解することを妨げているところの、些細な事や外部的な要素全部を、問題からきれいに除き去ってしまったら、吾々は右翼的偏向に關するこの問題を解決することができないであらう。

右翼的偏向の問題は偶然な問題だ、と考えているザポルスキーは正しくない。彼は、ここでは一切の問題は右翼的偏向ということにあるのではなくて、いさかいに、個人的な詭計等々にあるの

だ、と主張している。あらゆる鬭争におけると同じ様に、いさかいや個人的な詭計が、ここでも或程度の役割を演じていると、しばらく假定しておこう。しかしながら、すべてのことをいさかいで説明し、いさかいの蔭にある問題の本質を見ないということは、正しい道から、マルクス主義的道から離れて行くことである。

大きな長い歴史をもつ、一致團結した組織、疑いもなくかかる組織であるモスクワの黨組織が、數名のいさかいをする者や詭計家連の力で、上から下まで、震撼させられたり、グラつき出したりなどすることは、あり得べからざることだ。否、同志諸君、かかる奇蹟は、この世にはおこりえない。モスクワの黨組織の勢力と強さを、こんなに軽く評價すべきではないということについては、私はこれ以上述べない。ここには、いさかいとも、詭計とも何等の共通點を有していない、もつと根深い原因が作用しているということ、明かなことである。

右翼的危険の存在を認めているとはいいいながら、真面目な實務家達が眞剣にこれに携わるほど價值のあるものとして、このことを考えていないフルントフもまた正しくない。彼は、結局、右翼的偏向についての問題は、どなりや達のやるべき題目で、實務家達が携わるべきものではないというように考えている。私は、毎日の實際的仕事に追いかけて、わが國發展の前途の見透しについて考える暇をもつていないフルントフを、完全に理解している。しかしながら、このことはまだ、幾人かの黨の働き手達の狹隘な、純事務的な實際主義を、わが國建設上の教義に變えてしまわなければならぬということ、意味してはいない。健全な實務主義、これは結構なことだ。だが、もしもそれが仕事における見透しを失い、かつ自分の仕事を、黨の基本的方針に従屬させないならば、それは、缺陷になつてしまふ。しかし一方、右翼的偏向についての問題は、わが黨の基本的方針についての問題

であり、わが黨が第十五回大會で規定した發展についてのその見透しが、正しいか、正しくないか、という点については問題であることを理解するのは困難なことではない。

右翼的偏向についての問題を審議するに際し、右翼的な偏向を代表している人々に對して、問題を集中させている同志諸君も正しくない。右翼的な人々、或は調停主義者達を吾々に示してくれ、吾が彼等をやつつけることができるように、その人達の名を呼びあげてくれ、とこれらの同志諸君は言う。これは、正しくない問題のたてかたである。個々の人が或程度の役割を演ずるといふことは、勿論である。だが、ここでの問題は、個々人にあるのではなく、黨内に右翼的危険を生み出すその諸條件に、その情勢にあるのである。個々の人を排斥してしまふことはできる。だが、このことはそうしたことによつて、吾々は、わが黨内における右翼的危険の根を引き抜いてしまつたということには、まだなりはしない。それゆえに、個々の人についての問題は、疑いもなく、興味のあることであるといへ、問題を解決しはしないのである。

これらのことと關連して、わが軍隊がデニキン一味をウクライナから驅逐し、オデッサ地方におけるデニキン軍隊の最後の殘兵を完全に壊滅させた一九一九年末と一九二〇年初めに生じた、オデッサにおける一つの挿話を思い出さざるを得ない。その時、わが赤兵の一部隊は、彼等がアンタント（連合國）を捕えさえすれば、戦争がすむだろうと信じて、オデッサで躍起になつてアンタント（連合國）なるものを搜索した（満場哄笑）。赤兵が、オデッサで、連合國代表者のうちの誰かを捕えることができたかも知れない。しかしながら、勿論これによつて、連合國の問題は解決されはしなかつたであらう。蓋し、オデッサは當時デニキン一味の最後の據り所であつたといへ、連合國の根源は、オデッサにあるのではなくて、世界資本主義にあるからである。

右翼的偏向についての問題において、この偏向を生せしめた諸條件については忘れてしまつて、右翼的偏向を代表している個々の人々に對して、問題を集中させている若干のわが同志達に對しても、丁度、同様に行うことができる。

それゆえに、吾々はここでは、何よりもまず、レーニンの方針からの右翼的、そしてまた同じ様に「左翼的」(トロツキスト的)偏向を生せしめた諸條件についての問題を、解明しなければならぬ。

資本主義の條件下における、共產主義内部の右翼的偏向は、一部共產黨員の傾向、意向、——もつとも、はつきりとは形態づけられてはいないし、またおそらくまだ自覺されてもいないであらうが、とにかく、マルクス主義の革命の方針から離れて、社會民主主義の側へおもむく意向を意味している。共產黨員のある一部が、選挙闘争において「階級對階級」というスローガンを時宜に適しないものとなし(フランス)、或は、共產黨から獨自的な候補者を舉げることにより反對意見を述べ(イギリス)、或は「左翼」社會民主主義者に對する闘争に問題を集中することを欲しない(ドイツ)、等等等々とするならば、これは共產黨の内部に、共產主義を社會民主主義へ順應させようと骨折っている人々がいるということの意味している。

資本主義諸國の共產黨内における右翼的偏向の勝利は、共產黨の思想的壊滅と、社會民主主義の非常なる強化とを意味したであらう。ところで、社會民主主義の非常なる強化とは、どういうことであるか？ それは、資本主義の強化と鞏固化とを意味する。なせならば、社會民主主義は、労働者階級内における資本主義の主要な支柱だからである。

したがつて、資本主義諸國の共產黨内における右翼的偏向の勝利は、資本主義を保持するために必要な諸條件の増大へみちびくであらう。

資本主義はすでに打倒されてはいるが、その根はまだ完全に引き抜かれていない、ソヴェト的發展の条件下における共産主義内部の右翼的偏向は、一部共産黨員の傾向、意向、——もつとも、はっきりとは形態づけられてはいないし、またおそろくまだ自覺されてもいないであろうが、とにかく、わが黨の一般の方針から離れて、ブルジョアのイデオロギーへおもむく意向を意味している。わが共産黨員のある一部が農村における資本主義的分子に對して攻勢に出ることの必要を否定して第十五回黨大會の決定から黨を後退させようと試みたり、或はわが國工業發展の現在の急テンポは國を破滅させるものだ、と考えて、わが工業の操業短縮を要求したり、或は割當金は金錢を風の中に撒き散らすようなものだ、と考えて、ユルホーズとソフホーズに對するそれら(割當金)の時宜に適したものであることを否定し、或は自己批判はわが機關をグエツがせると推測して、自己批判を基礎として官僚主義と鬭争することが時宜に適したものであることを否定し、或は外國貿易の國家獨占を少し緩ゆるように要求したり、等々するならば、これは、とりもなおさず、自身ではそれに氣づいていないかも知れないが、わが社會主義建設の大業を、「ソヴェト的」ブルジョアジの好みと要求とに順應させようと試みる人々がわが黨陣列内に存在しているということの意味する。わが黨内における右翼的偏向の勝利は、わが國における資本主義的分子の非常な強化となるであろう。そして、わが國における資本主義的分子の強化ということは何を意味するか？ それは、プロレタリアート獨裁を弱らせ、そして資本主義の復舊のための機會を強めることを意味する。

したがって、わが黨内における右翼的偏向の勝利は、わが國における資本主義の復舊のため、必要な條件の増大を意味することになるのである。

わが國には、わがソヴェトの國には、資本主義の復舊(再興)を可能ならしめる條件が仔仕して

いるであらうか？ 然り、それらは存在している。これは奇妙なことに思われるかも知れないが、同志諸君、これは事實である。吾々は資本主義を打倒し、プロレタリアートの獨裁を樹立し、わが社會主義的工業を、農民經濟と緊密に結びつけ、急テンポで發展させている。だがしかし、吾々は、資本主義の根をまだ完全に引き抜いてはいない。それら、即ちこれらの根そのものはどこに潜在しているか？ それらは、商品生産ということの中に、都市、そして特に農村の小規模生産ということの中に潜在している。

レーニンがいつているように、資本主義の力は、「小規模生産の力にある。なせならば、小規模生産は、遺憾ながらまだ世の中に非常に多數残つており、しかも小規模生産は、資本主義とブルジョアジーとを、不斷に、毎日、毎時間、自然發生的に、大量的に生み出しているからである」(レーニン全集、第二五卷、一七三頁參照)。

小規模生産が、わが國で大量的な、かつ主たる性格としてさえ存在している間は、またこの小規模生産が特にネツプの條件下において、不斷に、かつ大量的に資本主義とブルジョアジーとを生み出している間は、わが國には、資本主義の復舊を可能にする諸條件が存在している、ということ**は明かなことである。**

わが國には、わがソヴェトの國には、資本主義復舊の可能性を絶滅し、根絶させるために必要な手段と力が、存在しているか？ しっかり、存在している。特にこの點にこそ、完全な社會主義社會をソ同盟において建設完成させることの可能性についてのレーニンのテーゼの正しさが根拠づけられて**いるのである。**これがためには、プロレタリアート獨裁を鞏固にすること、勞働者階級と農民との同盟を強化すること、國の工業化という見地から、わが國民經濟の最緊要點を廣大させること、工業發

展の急速なテンポ、國の電化、新しい技術の基礎の上に全國民經濟を移行させること、農民の大衆的協同組合化と農民經營の收穫力をたかめること、個人農經營の共同、集團經營への漸次的合同、ソフホーズの發展、都市ならびに農村における資本主義的分子の抑制と克服、その他等々が必要である。

次の如きが、この點に關してレーニンが述べているものである――

「吾々が小農の國に生活している間は、ロシアにおける資本主義にとつては、共産主義にとつてよりも、もつと鞏固な經濟的土台があるのである。このことをよく記憶しておくことが必要である。都市の生活と比較して、農村の生活を注意深く觀察しているものはだれでも、吾々が資本主義の根を引つこ抜いてしまつてはいないし、また國內の敵の土台を、基礎を掘り崩してしまつてはいないことを知つてゐる。國內の敵は、小規模經營に依據してゐる。そして、これを掘り崩すためには、一つの方法がある。即ち、農業をも含めて國の經濟を、新しい技術の基礎の上に、現代的大規模生産の技術の基礎の上に移すことである。かくの如き基礎たり得るものは、ただ電氣あるのみである。共産主義とは、ソヴェト權力に加える國全體の電化ということである。しかしらざる場合には、國は小農の國としてそのまま残るであらう。そして、吾々はこのことをはつきりと認識することが必要である。吾々はただ世界的規模においてのみならず、國內においても、資本主義より弱いのである。このことはすべての人々に明かなことだ。吾々はこのことを認識した。そして、吾々は、經濟的基礎が小農民的なものから、大規模な工業的な基礎へ移り行くまで、このことを遂行するであらう。國が電化されるようになったときにのみ、工業、農業、運輸交通が現代的な大規模工業の技術的基礎の上に据えられるようになったときにのみ、即ち、ただそのときにのみ、吾々は終局的に勝利することができるのである」。〔レーニン全集、第二六

第一に、吾々が小農の國に生活している間は、吾々が資本主義の根をまだ完全に抜ききらぬ間は、資本主義にとつては、共產主義にとつてよりも、一層鞏固な經濟的基礎があるということになるのである。樹木は伐り倒されたが、根は完全に抜きとられなかつた、即ち力が足りなかつた、ということが往々ある。このことによつて、わが國における資本主義復舊の可能性もまた生ずるのである。

第二に、資本主義復舊の可能性以外に、わが國には今一つ、社會主義の勝利の可能性も存在しているということになる。なせならば、もしも、國の電化について猛烈な活動を遂行するならば、もしも、工業、農業、運輸交通を現代的大規模工業の技術の基礎の上に据えるであろうならば、吾々は、資本主義の復舊の可能性を絶滅することができ、し、資本主義の根を完全に引き抜き、わが國における資本主義に對する終局的勝利を達成することもできるからである。このことによつて、わが國における社會主義の勝利が可能であるということも生れてくるのである。

最後に、農村は都市のあとを「自發的についでくるだろう」という考えから、農業を自然成長的な發展にまかせて工業のみにおいて社會主義を築き上げることはできないという事になる。都市において社會主義的工業が現存するという事は、農村の社會主義的改造のための基本的要因である。しかし、このことはまだ、この要因が完全に十分満足すべきものだとすることを意味してはいない。社會主義的都市が農民の住む村を自分の後に最後まで従わせるためには、そのためには、レーニンが述べた如く「農業をも含めて、*國の經濟を、新しい技術の基礎の上に、現代的大規模生産の技術の基礎の上に移すこと」が必要なのである。

* 傍點は私による。——イ・スターリン

レーニンのこの引用句は、「ネツプ（新經濟政策）は、社會主義經濟の土台の建設を完成させる可能性*を、吾々に完全に保障している」というレーニンの他の引用句と矛盾してはいないか？否、矛盾してはいない。反對に、この二つは、お互に完全に一致している。レーニンは、ネツプが出來上つた形態における社會主義を、吾々に與えるであらうとは決して述べていない。レーニンは、ネツプが社會主義經濟の土台の建設を完成させる可能性を吾々に保障しているということだけを述べているのである。社會主義建設完成の可能性と、社會主義の實際的な建設完成との間には、大きな差異が存在するのである。可能性を實際のことと混同してはならない。實にこの可能性を實際のことに轉化させるためにこそ、このためにこそ、レーニンは、わが國における社會主義の終局的勝利のための條件として、國の電化と、工業、農業、運輸交通を、現代的大規模工業の技術の基礎の上に据えることを提案しているのである。

しかしながら、社會主義建設完成のためのこの條件を、一—二年間に實現させる可能性はないのである。一—二年間に國を工業化し、強大な工業の建設を完成し、幾百萬という農民大衆を協同組合化し、農業を新しい技術的基礎の上に据えつけ、個人農經營を、大規模な共同體に合同し、ソフホーズを發展させ、都市並に農村における資本主義的分子を抑制し、克服することはできない。これがためには、何年も何年もの、プロレタリアート獨裁の激烈な建設活動が必要である。そしてこのことが實行されない間は、——しかもこのことは、たちどころにやつてしまえることではない——わが國は、小規模生産が不斷に、大量的に、資本主義とブルジョアジーを生み出しており、また、資本主義復舊の危険がまだ力をもつているところの、小農の國のまま、依然として残るのである。

* 傍點は私による。——イ・スターリン

そしてわが國のプロレタリアートは、眞空の中に住んでゐるのではなくて、最も眞實にして現實的な、多種多様なあらゆる形態をもつ生活の中でくらしつゝ生きているからには、小規模生産の土台の上に生み出されているブルジョアの分子は「四方八方から、小ブルジョアの奔流をもつてプロレタリアートをとりまきそれによつてプロレタリアートに毒素を浸みこませ、それによつてプロレタリアートを墮落させ、プロレタリアートの内部に、小ブルジョアの無性格さ、分散性、個人主義、熱中から意氣銷沈への移行、これらの再現を不斷によび起してゐる」(レーニン全集、第二五卷、一八九頁)。また、かくの如くにして、プロレタリアートとその黨の中に、ある程度の動搖と、ある程度の逡巡とをもたらずのである。

わが黨の陣列内におけるレーニンの方針からの、あらゆる性質の動搖と偏向の根と基礎とは、以上の如き點にあるのである。

だからこそ、わが黨内における右翼的もしくは「左翼的」偏向についての問題を、くだらぬ問題だとみなしてはならないのである。

わが黨内における右翼的偏向、即ち公然たる日和見主義的偏向の危険は、どういふ點にあるか？ それは、この偏向が吾々の敵の力を、資本主義の力を過少評價し、資本主義の復舊の危険を見ず、プロレタリアート獨裁の條件下における階級闘争の眞相を理解せず、そして、それゆゑに、わが工業發展のテンポを緩めることを要求し、農村並に都市の資本主義的分子に對する負擔の軽減を要求し、コルホーズ並にソフホーズについての問題をうしろの方へひっこめることを要求し、外國貿易國家獨占の緩和、その他等々を要求して、こんなにも易々と資本主義に讓歩してゐるといふ點にあるのである。

わが黨内における右翼的偏向の勝利は、資本主義の力を解放し、プロレタリアートの革命的陣地

を崩壊させ、わが國における資本主義復舊のための、機會を多くさせたであらうということは、疑いのないことである。

わが黨内における「左翼的」(トロツキスト的)偏向の危険は、どういふ點にあるか？ それは、この偏向が吾々の敵の力を、資本主義の力を過大評價し、資本主義復舊の可能性だけを見て、わが國の力で社會主義の建設を完成することの可能性を見ず、絶望に陥つて、わが黨のテルミドル主義についておしやべりすることによつて、こゝして自分を慰めていふといふことにあるのである。

「吾々が小農の國に生活している間は、ロシアにおける資本主義にとつては、共產主義にとつてよりも、もつと鞏固な經濟的土台があるのである、」というレーニンの言葉から、即ちレーニンのこれらの言葉によつて、「左翼的」偏向は、ソ同盟においては、總じて、社會主義を建設完成させるということは不可能であり、農民なんか何の役にも立たないし、労働者階級と農民の同盟という理念は、時代おくれの理念であり、西歐において勝利した革命からの援助が適時にやつて來なかつた場合には、ソ同盟におけるプロレタリアートの獨裁は没落し或は變質しなければならぬし、たとえそれが農民との分裂という高價な犠牲に導くものであらうとも、超工業化という荒唐無稽なプランを採用するにあらざれば、ソ同盟における社會主義の大業は、滅亡すべきものと考えなければならぬといふまぢがつた結論をしてゐる。

この點から、「左翼的」偏向の政策上における冒險主義が発生しているのである。この點から、政策上における「超人的」跳躍が生れてゐるのである。

わが黨内における「左翼的」偏向の勝利が、労働者階級を彼等の、農民という土台から引離し、労働者階級の前衛を、爾餘の労働者大衆から引離す結果に、したがつて、プロレタリアートの敗北

に、資本主義の復舊のための條件を容易ならしめる結果に導いたであろうということは、疑いのないことである。

見られるとおり、これら二つの危険は、「左翼的」なものも右翼的なものも、レーニンの方針からのこれら二つの偏向は右翼的なものも「左翼的」なものも、それぞれ異なった出發點から發足しているとはいえ、同じ結果に導くのである。

これらの危険のうち、どつちの方がヨリ悪いのか？ 私はどつちも悪いと思う。

これらの偏向に對して効果的な鬭争をなすという見地から見たこれらの偏向の間の相違は、現在においては、「左翼的」偏向の危険は、右翼的偏向の危険よりも、黨にとつてもつとはつきりしているということである。吾々はすでに、「左翼的」偏向に對して數年間激しい鬭争をやつていているという事情、この事情が、黨にとつて無駄に終るといふようなことは勿論あり得ない。「左翼的」トロツキスト的偏向に對して鬭争した數年間に、黨は、多くのことを學んだし、また、「左翼的」言辭で黨を欺くことも、すでに容易でなくなつたといふことは明かなことである。

從來も存在し、また現在では、去年の穀物調達上での危機と關連して、小ブルジョアの奔流の強化された結果として、一層めだつて進出してきた右翼的危険については、この危険は、わが黨の或る層にとつては、それほどはつきりとはしていない、と私は考へる。それゆゑに、任務は、「左翼的」、「トロツキスト的危険に對する鬭争を、たとえほんの僅かたりとも弱めることなしに、右翼的偏向に對する鬭争に重點を置き、この偏向の危険といふことが、トロツキスト的危険が黨にとつて明白なことであると同じ程度に、黨にとつて明白ならしめるために、あらゆる手段をとるといふことにあるのである。

右翼的偏向についての問題は、もしもこの偏向がわが國の發展における困難についての問題と関連されていかなかったならば、わが國では、現在見られるほど、尖锐な問題とはなつていなかったかも知れない。しかしながら、實際では、右翼的偏向の現存は、わが國の發展における困難を複雑化し、これらの困難の克服ということを妨害しているのである。そして、正に右翼的危険が困難を克服するための闘争を一層困難ならしめるという理由によつてこそ、正にそれゆゑに右翼的危険の克服についての問題が、吾々にとつて特に重要な意義をもつていたのである。

わが國の困難の性格について、一言述べよう。わが國の困難を決して、沈滞、或は衰退による困難と見なしてはならないということを考慮に入れておかなければならない。經濟の衰退、或はその沈滞によつて起る困難ということは一般にあることであり、その際、人々は、經濟的沈滞の痛手を少しでも軽くし、或はその衰退の深度を少しでも淺くしようとする。わが國の困難は、かかる性格の困難とは、少しの共通點ももつていない。わが國の困難の特徴は、それが高揚の過程における困難であり、成長の過程における困難であるということにある。吾々が困難について語つてゐるときには、通常、工業を何割何分高揚させ、播種面積を何割何分擴大し、收穫を何ブード増やすこと、等々が問題とされているのである。そして正にわが國の困難が高揚の過程における困難であり、衰退或は沈滞の過程における困難ではないからこそ、正にそれゆゑにこそ、これらの困難は、黨にとつては何等か特別な危険であつてはならないのである。

しかしながら、困難は依然として困難である。そして、それゆゑに、困難を克服するためには、全力を緊張させることが必要であり、確乎さと忍耐が必要であり、しかもだれでもが確乎さと忍耐とを十分にもつてゐるといふのではないから——即ち疲勞困憊したため、或は闘争や波瀾なしに、なる

べく平穩に暮すことを選ぶために——そこで、特に動搖と逡巡、最少限抵抗線の側への轉換や、工業發展テンポの低減、資本主義的分子に對する負擔の輕減、コルホーズとソフホーズとの否定、そして一般に、日常活動の普通にして平穩な状態の域を踏み越えたところのものすべての否定についての論議がはじまり出すのである。

しかしながら、吾々は、吾々の前に立ちふさがっている困難を克服することには前進することはできない。そして困難を克服するためには、何よりもまず、右翼的危險に對して闘争しこれを克服することが必要であり、何よりもまず、困難に對する闘争を妨害し、困難克服のための闘争に向うわが黨の意志を破壊しようと試みている右翼的偏向を克服することが必要なのである。

問題となつてゐるのは、勿論、右翼的偏向に對する眞の闘争についてであつて、言葉の上だけの、紙の上だけの闘争についてはない。わが黨内には、良心を満足させるために、坊主が時々祈禱文句を稱えるように、右翼的危險に對する闘争を宣言することは厭われないが、右翼的偏向に對する闘争を當然そうあるべき程度に行ひ、これを、この偏向そのものを、實際に克服するためには、何等の、全く何等の實際的方策もとらないところの人達がいる。かかる思潮を、吾々は、右翼的な偏向、公然な日和見主義的偏向に對する調停主義的思潮と呼んでいる。この種の調停主義に對する闘争が、右翼的偏向に對する、右翼的危險に對する全般的闘争の一構成部分であるという事は理解しやういことである。なせならば、自己の翼の下に日和見主義者達を覆い庇つている調停主義に對する系統的闘争を遂行することなどは、右翼的、日和見主義的偏向を克服する事は不可能なことだからである。右翼的偏向をもつてゐる人達についての問題は、それが事件を解決しつくし得るものではないと

しても、疑いもなく興味ある問題である。去年、穀物調達上に危機があつた時に、吾々は、わが黨の下部組織における右翼的危険をもつている人達と衝突を起した事があつた。その當時郷や村落にいた多くの共産黨員達は、クラーク的な分子との結合を實行して、黨の政策に反対していた。吾々がこの種の分子を、今年の春、黨からきれいに掃除してしまつたことを、諸君は知つておられる。このことについては、本年二月におけるわが黨中央委員會の周知の文獻上に、特別に記載されている。

しかしながら、かかる分子がわが黨内に残つてはいないというのは、正しくないであろう。もしも、少し眼を上の方に向けて、郡や縣の黨組織、ソヴェトや協同組合の機關内をよくよく捜査してみると、諸君は少しも骨を折らずに、右翼的危険の具現者達や、この危険に對して調停主義的態度をとつている人達を、そこに見出されるであろう。わが黨やソヴェト機關における多くの働き手によつて書かれた「手紙」や「上申書」、その他の文書が、右翼的偏向の方へ惹きつけられていることを、きわめてはつきりと物語つているものであることは、周知のことである。諸君は、中央委員會の七月總會の速記録に、これらの手紙や文書について記載されていることを知つておられる。

もしも眼をより上の方に向けて、中央委員會の成員について問題を立てるとすれば、中央委員會の中にも、若干の、ごく僅な數に過ぎないが、右翼的危険に對して、調停主義的態度をとる分子が存在する、ということを知ればならぬ。中央委員會七月總會の速記録は、このことに對する明白な證據物件である。

さて、政治局（ポルトビュロー）内ではどうか？ 政治局内に何らかの偏向が存在しているか？ わが政治局内には、右翼的偏向も左翼的偏向もないし、また彼等に對する調停派もない。こ

のことを、この場で最大の斷乎さをもつて、述べなければならぬ。今や、黨に對して敵意を懷く者や、あらゆる種類の反對派共によつてわが中央委員會の政治局内に、右翼的偏向或は彼等に對して調停派的態度をとる者が存在する、ということについて流布されているくだらぬ噂を排除すべきである。

モスクワの黨組織、もしくはその上層部、即ちモスクワ委員會内に、動搖と逡巡が存在していたか？ 然り、存在していた。そこでは、逡巡も動搖もなかつたと、現在斷言するなどということは、愚かなことである。ペンコフの率直な演説は、このことに對する明白な證據である。ペンコフは、モスクワの黨組織とモスクワ委員會内において末席を占める人ではない。諸君は、彼が、わが黨の政策上における多くの最も重要な問題に關する自己の誤謬を、率直に、公然と自認したのをきかれたであろう。このことは、勿論、モスクワ委員會全體が動搖したということを意味してはいない。否、そんなことを意味してはいない。今年の十月に發表された、モスクワの黨組織に所屬する黨員に宛てられたモスクワ委員會の檄のような文獻は、モスクワ委員會が、若干の委員の動搖をよく克服することができたことを、確實に物語つてゐる。私は、モスクワ委員會の指導的核心が情態を徹底的に匡正できるであらうということ疑わぬ。

ある同志達は、地區の黨諸組織がモスクワの黨組織のそれぞれの指導者の誤謬と動搖とを清算することについての問題をたてて、この問題に干渉したということに、不満を感じてゐる。どうすれば、こんな不満を、正常化することができるかを、私は知らない。モスクワの黨組織の地區の積極分子が誤謬と動搖とを清算することを要求して、反對の叫びをあげたということに、何の不都合なことがあり得るだろうか？ 吾々の仕事は、下からの自己批判という旗印の下に遂行されてはいないとでもいうのであろうか？ 自己批判が、黨の、そして一般的にプロレタリアートの下部の積極性を高めてい

るといふこのことは、はたして事實ではないであらうか？ 地区の積極分子が、情勢に最も適つたよりに行動したからといつて、そこにはいかなる不都合なことも、或は危険なことがあるであらうか？

黨中央委員會が、この問題に干渉すべく起ち上つたことは正しいであらうか？ 中央委員會は正しく行動したと、私は考える。ベルジンは一地区の組織から弾劾をうけたところの、地区の指導者のうちの一人の更迭に關して問題を立て黨中央委員會がひどく峻嚴な扱い方をしたと考へている。これは全然正しくない。私は一九一九年だつたか、或は一九二〇年だつたかにあつたところのある挿話について、ベルジンの記憶を呼びおこそう。そのとき、私の考へでは、黨の方針に關して、そんなに大して重大ではないと思はれる若干の誤謬を犯したある中央委員達は、レーニンの提案によつて、懲戒處罰せられ、彼等のうちの一人はトルケスタンに送られた。そして他の者は罪の償いとして、中央委員たることから危く除名されるところであつた。

こんなふうな處理したレーニンは正しかつたか？ そうだ、彼は全的に正しかつたと私は考へる。黨中央委員會内における當時の状態は、現在のようなものではなかつた。中央委員會の半分は、當時トロツキーに追隨し、中央委員會それ自身の内部の事態は安定していなかつたのだ。中央委員會は、現在、そのときとは比較にならないほど、より寛大に行動している。なぜか？ 吾々は、レーニンよりも温良な人間でありたいと願つてゐるからであらうか、否、問題はそんなことではない。問題は、現在、中央委員會の状態はその當時よりもずつと安定したものであり、かつ現在、中央委員會は、より寛大な處置をとる可能性をもつてゐるといふ事にあるのである。

中央委員會の干渉は、おそすぎたと斷言してゐるサハロフも正しくない。彼は正しくない。中央委員會の干渉は、實は、今年の二月に開始されたのだといふことを、おそらく彼は知つてゐないか

らだ。もしもサハロフが志望するならば、この點について彼は自ら納得できるはずである。もつとも、中央委員會の干渉は、直に好い結果をもたらさなかつた。しかしながら、この點について、中央委員會を難詰するなどということはおかしな話である。

結論。

一、右翼的危険は、わが黨内における重大な危険である。なせならば、それは、わが國の社會・經濟的情勢に根をもつているからである。

二、右翼的偏向の危険は、右翼的偏向とそれに對する調停主義とを克服せずには、克服することができないところの困難が存在することによつて、倍加される。

三、モスクワの黨組織内においては、動搖と逡巡があつたし、また不安定な要素もあつた。

四、モスクワの黨委員會の中核は、中央委員會と地區の積極分子との援助を得て、動搖を清算してしまふために、あらゆる手段をとつた。

五、モスクワの黨委員會が、前に現われた誤謬を克服できらうことは疑い得ないところである。

六、任務は内部の闘争を清算し、モスクワの黨組織を一致團結させ、自己批判の廣汎な展開を基礎として、黨細胞の再選舉を成功裡に遂行することにある。(拍手)

ソ同盟共産黨（ボルシエヴィキ）内の の右翼的偏向について

一九二九年四月のソ同盟共産黨（ボルシエヴィキ）中央委員會
並に中央統制委員會總會における演説より

一、階級的諸變動と吾々の間の意見の不一致

吾々の間の意見の不一致とはどんなことであり、またどんなことと関連しているか？

この意見の不一致は、何よりもまず、わが國並に資本主義諸國において、最近生じている階級的變動についての問題に關連している。ある同志達は、わが黨内における意見の不一致は、偶然的性格をもつものであると考えている。同志諸君、それは間違つてゐる。それは斷然間違つてゐる。わが黨内の意見の不一致は、最近において生じ、かつ發展上において轉換をもたらしつてゐるところの、階級的變動に基因し、階級闘争の尖鋭化に基因して發生したのである。

ブハリンのグループの主要な誤謬は、このグループが、これらの變動とこの轉換とを見ず、またそれらを見もしなければ、認めることも欲しないということにあるのである。黨とコミンテルンの

新任務に對する不理解ということとは、このことによつて實際に説明されるのであり、またこの不理解は、ブハリンの反對派の特徴ともなつてゐるのである。

同志諸君、ブハリンの反對派の指導者達が黨中央委員會と中央統制委員會との總會における彼等の演説の中で、わが國における階級的變動についての問題を全然素通りしてしまひ、階級闘争の尖鋭化ひなことをほつては一言半句も述べず、また吾々の意見の不一致が、實にこれらの階級闘争が尖鋭化と關連したものであるということについての、ほんの少しの至つて漠然たる暗示さえも與えていないことを、諸君は注意されたであろうか？ 彼等は哲學についても理論についても、あらゆることについて語つたが、現在の時機におけるわが黨の向うべき方向と實踐活動とを規定してゐるところの、その階級的變動については一言半句も述べなかつた。

この奇怪な仕業は何をもつて説明すればよいだろうか？ 忘れつばいからだろうか？ 勿論そんなことは無い！ 政治家は最も主要なことを忘却することはできないのだ。このことは、わが國においても、また資本主義諸國においても、現在起きている新しい革命的な過程を彼等が見ず、かつ理解しないということによつて説明されるのである。このことは、彼等が最も主要なものを見逃し、政治家として、見逃すことのできない階級的變動を見逃したということによつて説明される。ブハリンの反對派が、わが黨の新しい新任務に直面して表示してゐるところの、狼狽と無能無力とは、このことによつて、實際に説明されるのである。

わが黨内における最近の事件を想起しよう。わが國における新しい階級的變動と關連して、つい最近、黨が與えた諸スローガンを想起しよう。私がいつてゐるのは、自己批判のスローガン、官僚主義

に對する鬭争を尖鋭化させることと、ソヴェト機關の肅清とに對するスローガン、新しい經營家のカードルと赤色専門技術家を育成すべきことについてのスローガン、ホルホイズ化運動とソフホルイズ化運動を強化することについてのスローガン、クラルクに對する攻勢についてのスローガン、生産原價の低減と労働組合の仕事の實際方法の根本的改善についてのスローガン、黨の肅清についてのスローガン、等々のような諸スローガンについてである。ある同志達にとつては、これらのスローガンは、きわめて突飛な、目をまわさせるようなスローガンに思われた。だがとにかくこれらのスローガンが、現在の時機における、最も必要で緊急な黨のスローガンであることは明白である。

問題は、シャハト裁判事件と關連して、新しい經營家のカードルに對する問題、舊専門技術家ととり代えるために、労働者階級の人々の中から、赤色専門技術家を養成することについての問題を、吾々がまた新たに提起したことから起つた。

シャハト裁判事件と關連してどんなことが明かになつたか？ それは、ブルジョアジは、まだ徹底的にはやつつけられてしまつてはいないこと、ブルジョアジは、わが國の經濟建設において、妨害工作を組織しているし、また今後も組織するであろうということ、わが經濟組織、労働組合組織、そして部分的には、黨の組織までが、吾々に對する階級敵の破壊工作を見逃がしていること、従つて、わが諸組織は、その階級的警戒性を發展させ強化させて、全力を挙げ、全手段を盡して、強化され、改善されなければならぬことが明かになつた。

これらと關連して、自己批判のスローガンについての問題が益々重要なものとなつた。なぜか？ なぜならば、批判と自己批判を、極力發展させず、また、わが諸組織の活動を、大衆の統制下におかすには、わが經濟組織、労働組合、黨の組織を改善することはできないし、社會主義の建設と、ブルジ

ョアジの妨害工作の抑制という問題を前進させることはできないからである。そして、ただ石炭産出地方のみならず、金屬産業の領域にも、軍需品工業の領域にも、交通人民委員部内にも、金及び白金産業内にも、その他等々の中にも、妨害工作は存在したし、また存在しつづけるであろうということは、事實でなくて何であらう。この點にこそ、自己批判のスローガンが提起された理由があるのである。

さらに、穀物調達上の困難と關連し、ソヴェトの價格政策に反對するクラークの反對行動に關連して、コルホーズとソフホーズを出来る限り發展させ、クラークに對して攻勢に出で、クラーク的の富裕な分子に對して壓迫を加える方法による穀物調達を組織することについての問題に吾々は重點を置いたのである。穀物調達上の困難は、何を説明しているか？ それは、クラークは、拱手傍觀してはいない、クラークは成長しているのであり、彼等は、ソヴェト權力の政策に對して地下工作を組織しているのに、一方、わが黨、ソヴェト、協同組合の諸組織は、ともかくもそのうちの一部は、敵を見ないか、或は、敵と鬭争する代りに、敵に順應しているということを説明している。

ここにおいて、自己批判のスローガン、わが黨組織、協同組合組織、そして一般に諸物資調達のための組織の點檢と改善とのスローガンが、新たに、益々重要なものとなるのである。

さらに、社會主義の基礎の上に、工業と農業とを再建せんとする新任務と關連して、生産原價の系統的低減、労働規律の強化、社會主義競争の展開、等々についてのスローガンが生じた。これらの任務は、労働組合とソヴェト機關のすべての實踐活動を再檢査し、これらの組織を根本的に活氣あるものたらしめ、かつ官僚主義的要素を掃き出して、これらの組織をきれいに掃除することを要求した。

ここにおいて、労働組合とソヴェト機關における官僚主義に對する鬭争についてのスローガンが、益々重要なものとなるのである。

最後に、黨の肅清のスローガンについての問題。黨そのものを鍛え上げることがせず、わがソヴェト行政並に經濟機關の組織、労働組合と協同組合の組織を強化することができ、またこれらの組織から官僚主義の汚れをきれいに掃き出してしまふことができると思ふならば、それは笑止千萬なことであろう。官僚主義的要素は、經營組織や協同組合の組織内や、また労働組合やソヴェトの組織内のみならず、黨そのものの組織内にも存在していることは、疑うことはできないであろう。黨がこれらの組織全部の指導勢力であるとすれば、黨の肅清ということは、明かに必要缺くべからざる條件であり、この條件をもたずには、労働者階級の一切の他の組織を活氣あるものたらしめ、かつ改善することを、徹底的に實行することはできないであろう。こゝにおいて、黨の肅清についてのスローガンの必要があるのである。

これらのスローガンは偶然的なものであろうか？ 否、偶然的なものではない。これらのスローガンが偶然なものでないことは、諸君自身が知っておられる。これらのスローガンは資本主義の要素に對する社會主義の攻勢と稱される、單一の切離すことのできぬ鎖のうち、必要缺くべからざる環をなしているのである。

これらのスローガンは、何よりもまず、社會主義の土台の上にわが工業とわが農業とを再建する時期と関連させられている。だが、社會主義の土台の上に、わが國民經濟を再建するということは、何を表示しているか？ それは、國民經濟中における資本主義的要素に對する、全戦線に亘つての社會主義の攻勢ということである。このことは、わが國労働者階級の社會主義の建設完成の方への、極めて重大な前進である。しかして、この再建を實行するためには、何よりもまず社會主義建設におけるカードル即ち經營・ソヴェト部門と労働組合のカードル、そしてまた黨や協同組合のカードルを、改

善し、強化することが必要であり、わが組織全部を鍛えあげ、それらの中の汚れをきれいに掃除することが必要であり、労働者階級並に農民の幾百萬大衆の積極性を高く引き上げることが必要である。

さらに、これらのスローガンは、社會主義の攻勢に對する、國民經濟中の資本主義的分子の反抗という事實と關連させられている。いわゆるシャハト裁判事件を、偶然なものともみなしてはならない。「シャハトの一味」は、現在、わが工業の全分野に亘つて入りこんでいる。彼等のうちの多くの者は捕えられた。しかしまだまだ、決して、全部が逮捕しつくされていない。ブルジョア・インテリの妨害工作は、發展しつつある社會主義に對する反抗のうちの、最も危険な形態の一つである。妨害工作は、それが國際資本と連ケイされているので、なおさら一層危険である。ブルジョアの妨害工作は、資本主義的分子が、まだまだ決して武器を放棄していかないこと、彼等は、ソヴェト權力に對する新たな進撃のために、力を蓄積しているという事實の、疑いのないじらである。

農村における資本主義的分子については、ソヴェトの價格政策に反對して、すでに一年以上もつづけているクラークの反抗行爲を、偶然的なものだとみなすことは、なおさらいけないことである。多くの人達は、クラークが、一九二七年までは、自然の成行きにまかせておいても穀物を提供していたのに、一九二七年からは、自然の成行きにまかせておいては穀物を提供しなくなつてしまつたという事實を、今にいたるまで理解することができずにいる。だが、この情態には、いささかも驚くべきことはないのである。以前、クラークがまだ比較的弱く、自己の經營をしっかりと整備するための可能性をもたず、自己の經營を強化するために要する、十分な資本をもたず、それがために彼等は、自分達の穀物生産物の餘剰を、全部もしくは殆ど全部、市場に持ち出すことを餘儀なくされていたとすれば、現在、即ち豊作の幾年かを經た後、クラークが經營を都合よく築き上げることができ、必要

な資本を蓄積することができた現在では、クラークは市場で駆引をやる可能性を得たし、市場へは、肉類、燕麥、大麥その他のそう重要でない農産物を搬出する方を好んで、重要穀物、即ちこの正貨中の正貨ともいふべき主要穀物を、自分のための豫備として別にしまつておく可能性をえた。クラークの自由意志によつて、クラークから穀物を得ることができると、現在希望することは笑止千萬なことであつたらう。

これこそが、現在、ソヴエト權力の政策に對してクラークが示しているところの、反抗の根源なのである。

しかして、都市及び農村の資本主義的分子が、社會主義の攻勢に對する反抗は、何を表示しているか？ それは新しいものに反對して、古いものを固守することを自己の目的として有する、プロレタリアートの階級敵の諸勢力の再編成である。これらの情態が、階級闘争の尖鋭化を呼び起さずにおかないということは、了解するに難くはない。だが、階級敵の反抗を粉碎し、社會主義が前進すべき道を清掃するためには、一切のその他のことを行つた上に、わが組織全部を鍛え上げ、その中から官僚主義を掃蕩し、これらの組織に働くカードルを改善し、數百萬の労働者階級と農村の勤勞者層の大衆を、都市と農村の資本主義的分子に對して動員することが必要である。

このような階級的變動の土台の上には、わが黨の現在のスローガンが生れたのだ。

資本主義諸國における階級的變動についても、同じ様なことをいわなければならぬ。資本主義の安定が、不變のままに残つていふと考えることは、笑止千萬なことであつたらう。况や、この安定が強化され堅牢なものになりつつあると斷言するに至つては、なおさら笑止千萬なことであつたらう。事實、資本主義の安定は、一月毎に、一日毎に内部から浸蝕され、震撼させられているのである。國外市場

と原料をめざす闘争の尖鋭化、軍備の増大、アメリカとイギリスの間の矛盾対立の増大、ソ同盟における社會主義の成長、資本主義諸國における労働者階級の左翼化、ヨーロッパ諸國におけるストライキと階級的戦闘との連續時代、インドを含めた植民地における革命運動の成長、世界のすべての國における共產主義の成長、——すべてこれらは、資本主義諸國においては、新しい革命的高揚の要素が成長發展しつつあることを、疑問の余地を残さずに物語っている諸事實である。

こゝにおいて、社會民主黨に對して、そして何よりも先に資本主義の社會的支柱としてのそのうちの「左」翼に對して闘争を尖鋭化させるといふ任務が生れるのである。

こゝにおいて、社會民主黨の影響をひろめる手先としての、共產黨内の右翼的分子に對する闘争を尖鋭化させるといふ任務が生れるのである。

こゝにおいて、共產黨内における日和見主義の避難所としての調停主義、即ち右翼的偏向との調停主義に對する闘争を尖鋭化させるといふ任務が生れるのである。

こゝにおいて、社會民主主義的傳統を掃き出して、共產黨をきれいにするというスローガンが生れるのである。

こゝにおいて、労働組合内における共產主義のいわゆる新戦術が生れるのである。

ある同志達は、これらのスローガンの意味と意義とを理解していない。しかし、マルクス主義者は、これらのスローガンを實行することなしには、プロレタリア大衆を新しい階級戦のため準備するなどということは考えられず、社會民主黨に對して勝利することなども考ええられぬことであり、資本主義に對する闘争へ労働者階級を導き入れる能力をもっている、共產主義運動の眞の指導者を選抜することなどは不可能であることを、常に理解するであらう。

同志諸君、これこそが、わが國における、また資本主義諸國における階級的變動であり、これに基いて、黨の國內政策の線上、またコミンテルンの線上において、わが黨の現在のスローガンが成長したのである。

わが黨は、これらの階級的變動をみている。わが黨は、新任務の意義をよく理解して、これらの任務を解決するために、諸勢力を動員している。それゆえに、黨は、完全に武装して諸事件を迎えるのだ。それゆえに黨は、黨が直面している困難を恐れない。なせならば、黨には、この困難を克服する準備ができていからである。

ブハリンのグループの禍患は、このグループが、これらの階級的變動を見ず、黨の新任務を理解しないということである。そして、實に、このグループがこれらのことを理解しないがためにこそ、このグループは完全に混亂状態に陥つており、困難から逃げ出し、困難に面して退却し、敵に城を明渡ししてしまえる用意が常にできているのである。

諸君は、エニセイ河のような大河で暴風雨に出くわした漁夫達を見たことがあるか？私は彼等を再三見た。荒れ狂う暴風雨に遭遇するや、自分達の全力を動員し、仲間達を元氣づけ、「オイ仲間よ、元氣を出せ、しつかりと舵をとれ、波を乗り切れ、俺等はきつと勝つんだぞ！」と叫んで、暴風雨に抗して勇敢に舟を進めている漁夫達がある。

だがまた、暴風雨がやつてきたことを感じるや、すつかり元氣をなくしてしまつて、メソメソと泣きだし、「さあ大變だ、大嵐がやつてくるぞ、皆、船底に寝ころんでじつと眼をとじていろ、うまく行つたら岸へ打ち上げられるかも知れぬよ」といつて、自身の隊伍の氣分を沮喪させてしまふような、別の質の漁夫達もあるのである（満場哄笑）。ブハリンのグループの立場と行動が、困難に出くわ

し、恐怖狼狽して退却する第二の漁夫のグループの立場と行動に寸分も違わない程よく似ているということを、さらに證明することが必要であろうか？

吾々は言う。ヨーロッパには、新しい革命的高揚の條件が成熟しており、この情勢は、共産党内の右翼的偏向に對する鬭争を強化して、黨から右翼的偏向者を追い出すという新しい任務を、また、右翼的偏向を庇っている調停主義に對する鬭争を強化し、共産党内における社會民主主義的傳統に對する鬭争の強化、その他等々についての新しい任務を吾々に課している、と。ところが、ブハリンは、吾々につきぎのように答える。そんなことはみんな下らぬことだ。吾々には、そんな新しい任務なんて、何もありません。事實は、黨中央委員會の大多數が、彼、即ちブハリンを、「槍玉にあげる事」を望んでいるということが、こゝで問題にされているのだ、と。

吾々は言う。わが國における階級的變動は、生産原價の系統的な低減と、企業における労働規律の強化とを要求している新しい任務を吾々に課しており、労働組合の活動上における實際活動のすべてを、根本的に變更することなしには、これらの任務を實行するということは不可能である、と。ところが、トムスキーは、吾々に次のように答える。そんなことは、みんな下らぬことだ。吾々には、そんな新しい任務なんて、何にもありません。事實は、黨中央委員會の大多數が、彼、即ちトムスキーを、「槍玉にあげる事」を望んでいるということが、こゝで問題にされているのだ、と。

吾々は言う。國民經濟の再建ということは、ソヴェト行政並に經濟機關内にある官僚主義との鬭争の強化、これらの機關から、腐った異分子を掃き出し、妨害者共を逐い出して、これらの機關を肅清すること、その他等々の新しい任務を吾々に課している、と。ところが、ルイコフは、吾々に次のように答える。そんなことは、みんな下らぬことだ。吾々には、そんな新しい任務なんて、何にも

ありはしない。事實は、黨中央委員會の大多數が、彼、即ちルイコフを、「槍玉にあげること」を望んでいふということが、こゝで問題にされているのだ、と。

同志諸君、一體これは笑止千萬なことではないだろうか？ ブハリン、ルイコフ、トムスキーは、この世の中で、自分達の臍より他には何にも見えないのだということは、明かなことではないか？ ブハリンのグループの不運は、このグループが、新しい階級的變動を見ず、黨の新しい任務を理解しないことである。そして、このグループが、これらのことを理解しないからこそ、このグループは、諸事件の尻尾についていつたり、困難に出あつて臆病に尻ごみせざるをえなくなつたのである。

この點にこそ、吾々の意見の不一致の根源が存するのである。

一、コミンテルンの方針について の意見の不一致

私は、諸共産黨から右翼分子を追ひ出し、調停主義を抑制し、社會民主主義的傳統を共産黨内からきれいに掃き出してしまふという、コミンテルンの新しい任務、即ち益々増大してゆく、新しい革命の高揚という條件によつて課せられた新しい任務を、ブハリンは見もせず、また理解してもいないということをすでに述べた。この命題は、コミンテルンの問題についての吾々の間の意見の不一致によつて、完全に確證された。

この領域における意見の不一致は、どんなことから始まったか？

問題は、コミンテルン第六回世界大会における国際情勢についてのブハリンのテーゼのことからはじまった。テーゼはソ同盟共産黨（ボルシエヴィキ）の代議員團で、豫め検討されるのが常であった。しかるに、この場合には、右のような條件は遵守されなかつたのだ。ブハリンの署名のあるテーゼが、一方で、ソ同盟共産黨（ボルシエヴィキ）の代議員團に送附されると同時に、第六回世界大会の外國の諸代議員團にも配布されるというようになったのだ。しかして、テーゼは、多くの點において不満足なものであつた。ソ同盟共産黨（ボルシエヴィキ）の代議員團は、このテーゼに、約二十の修正を加えなければならぬことになつた。

この情勢は、ブハリンの立場を、ある程度具合わるくさせた。だが、これはだれの罪だろうか？ 何のためにブハリンは、ソ同盟共産黨（ボルシエヴィキ）の代議員團が、テーゼを検討せぬうちに、外國の諸代議員團にテーゼを配布することを必要としたのであろうか？ テーゼが不満足なものであつた場合に、ソ同盟共産黨（ボルシエヴィキ）の代議員團は、修正を加えないですますことができただであらうか？ そして結局、ソ同盟共産黨（ボルシエヴィキ）の代議員團によつて、實際上、國際情勢についての新テーゼが提出され、そしてそれが外國の諸代議員團によつてブハリンの署名になる舊テーゼに對立されるようになったのだ。もしもブハリンが、自分の書いたテーゼを、外國の諸代議員團に配布することをこんなに急がなかつたならば、こんな具合の悪いことは起らなかつたであらうということは、明かなことである。

私は、ソ同盟共産黨（ボルシエヴィキ）の代議員團がブハリンのテーゼに加えた、四つの基本的修正について、ここで指摘したいと思う。私は、コミンテルンの問題に關する意見の不一致

の性質を、事實をもつて一層明瞭に示すために、これらの基本的な修正を指摘したいと思うのである。

第一の問題。これは資本主義の安定の性質についての問題である。プハリンのテーゼによると、現在の時期においては、資本主義の安定を震撼させているような、何等新しい現象も起つてはいないということ、否、反對に、資本主義は再建されつつあり、また大體として、多かれ少かれ、鞏固に持ち堪えているということになつてゐる。いわゆる第三期、即ち、吾々が現在體驗してゐるこの時期に對する右のような性格すけに、ソ同盟共産黨（ボルシエヴィキ）の代議員團が同意できなかったということは、明かなことである。ソ同盟共産黨（ボルシエヴィキ）の代議員團が、これに同意することができなかつたというのは、第三期に對するかかる性格すけを保持することは、いわゆる資本主義の「恢復」の見地に、即ちヒルフアーディングの見地に、吾々共産黨員がどうしても賛成できない見地に吾々が立つてゐるといふ好材料を、吾々に反對する批評家共に與えることとなつたかもしれないからである。それがために、ソ同盟共産黨（ボルシエヴィキ）の代議員團は修正を加えたのであつて、この修正によつて、資本主義の安定は、鞏固化してもいないし、また鞏固化されることもできないこと、そして、世界資本主義の危機の尖鋭化によつて、この安定は震撼させられており、また諸事件の進行によつて將來も震撼させられるであろう、ということが理解されるのである。同志諸君、この問題は、コミンテルンの諸支部にとつては、決定的な意義をもつてゐるのである。資本主義の安定はグラついているか、それとも鞏固化しつつあるかということ、實にこの點に、彼等の日常政治活動上における共産黨の全目標はかかつてゐるのである。吾々は、今、革命運動の衰退の時期に、單なる勢力集結の時期にあるのか、それとも、新しい革命的高揚のための條件が益々増大してゐる時

期、來るべき階級的戰闘に労働者階級を準備訓練すべき時期にあるかということ、實にこの點に共產黨の戰術的目標はかかつていたのである。あとで、世界大會において可決されたソ同盟共產黨（ボルシエヴィキ）代議員團の修正は、第二の見透し、すなわち、あたらしい革命の高揚のための條件が、益々増大しているという見透しに基く、明白な目標を與えたことによつて、眞實よいものであつた。

第二の問題。これは、社會民主黨に對する闘争についての問題である。ブハリンのテーゼには、社會民主黨に對する闘争は、コミンテルンの支部の、基本的任務のうちの一つであると述べられてゐる。このことは、勿論正しい。だが、これだけでは不十分である。社會民主黨に對する闘争を好結果に遂行するためには、社會民主黨内のいわゆる「左」翼に對する、「左」翼的言辭を弄して、それによつて労働者達を巧に欺瞞して、社會民主黨から労働者大衆が離れ去ることを阻止しているその「左」翼に對する闘争に、問題を集中することがせひ必要である。「左」翼社會民主黨員を粉砕せずに、一般的に社會民主黨を克服するなどということが不可能なことは明かである。しかるに、ブハリンのテーゼには、「左」翼社會民主黨についての問題は、全然見逃がされてゐた。これは、勿論大きな缺點である。それゆえに、ソ同盟共產黨（ボルシエヴィキ）の代議員團は、あとで世界大會で採用されたところの、適當な修正を、ブハリンのテーゼに加えることとなつたのである。

第三の問題。これはコミンテルンの諸支部内における調停主義についての問題である。ブハリンのテーゼには、右翼的偏向に對する闘争の必要については述べられてゐるが右翼的偏向との調停主義に對する闘争については、一言半句も述べられてゐない。これは、勿論大きな缺點である。問題は、右翼的偏向に對して宣戰が布告された時に、右翼的偏向者はいつでも調停派らしく装い、黨は困難な立場に立たされるといふ點にあるのである。右翼的偏向者のこの駆引を豫め防止するために、調停

主義に對する、決定的鬭争に關して問題を立てることが、ゼヒ必要である。それゆえに、ソ同盟共産黨（ボルシエヴィキ）の代議員團は、ブハリンのテーゼに、あとで世界大會で採用されたところの、適當な修正を加えることが必要だと考えたのであつた。

第四の問題。これは、黨内規律についての問題である。ブハリンのテーゼには、諸共産黨内において、鐵の規律を維持することの必要については記載されてない。これもまた少なからず重要な缺點である。なぜか？ なぜならば、右翼的偏向に對する鬭争が激化している時期に、諸共産黨を日和見主義的分子から肅清するというスローガンが實行されるその時期に、右翼的偏向者は、分派を形成し、自分自身の分派的規律はつくり上げるが、黨の規律を破り、これを紊すのが常だからである。右翼的偏向者の分派的出撃から黨を防護するためには、黨の鐵の規律についての問題と、この規律への黨員の無條件服従についての問題とをうち立てることがゼヒとも必要である。これを實行することなしには、右翼的偏向との眞剣な鬭争などは、考えることもできないのである。それ故に、ソ同盟共産黨（ボルシエヴィキ）の代議員團は、その後、第六回世界大會で採用されたところの適當な修正を、ブハリンのテーゼに加えたのであつた。

吾々は、ブハリンのテーゼに、これらの修正を加えずにすませることができたであらうか？ できなかつたことは明かである。昔は、哲學者プラトンについて語られたものだ。吾々はプラトンを愛している。だが、眞實をもつと愛している。ブハリンについても同じ様なことがいえるだろう。吾々はブハリンを愛している。だが、眞實を、黨を、コミンテルンをもつと愛している。それゆえに、ソ同盟共産黨（ボルシエヴィキ）代議員團は、ブハリンのテーゼにこれらの修正を加えざるを得なかつたのである。

これが、コミンテルンの問題における、いわば吾々の間の意見の不一致の第一段階ともいふべきものである。

吾々の間の意見の不一致の第二段階は、いわゆるウイットルフとテールマンとの問題に關連している。ウイットルフは、ハンブルグ市黨組織の前の書記であつて、黨の基金費消の廉で非難されているものである。彼はこのために黨から除名された。ドイツ共産黨中央委員會における調停派は、同志テールマンがウイットルフの罪科と何等かかり合いがないのに、ウイットルフが同志テールマンと親密であつたということを利用して、ウイットルフの問題をテールマンの問題に轉化させ、かつドイツ共産黨の指導部をひつくり返しはじめた。諸君は、調停派のエーヴェルトとゲルハルトが、當時、ドイツ共産黨中央委員會の大多數を、同志テールマンに反對させて、一時自分達の味方となじえたことを、出版物での報道によつてすでに承知していられる筈である。それからどうなつたか？彼等はテールマンを指導部から遠ざけ、瀆職のかどで彼を非難はじめ、そして、コミンテルン執行委員會の承諾と裁可なしに『さかるべき』決議を公表した。

かくして、調停主義に對する鬭争についてのコミンテルン第六回世界大會の指令を遂行する代りに、右翼的偏向と調停主義とに對する鬭争の代りに、事實上、この指令に、甚だしく違反したこととなり、ドイツ共産黨の革命的指導部に對して鬭争し、同志テールマンに對して鬭争し、ドイツ共産黨員の陣列内における右翼的偏向を掩護し、調停主義を固めることを、その目標とする鬭争をする結果となつたのである。

そこで、舵を廻して、状態を匡正する代りに、第六回世界大會の違反された指令を復権させかつ調停派に警告を與えることを要求する代りに、ブハリンは、彼の周知な手紙をもつて、調停派共のや

つた變革を裁可し、ドイツ共産黨を調停派共の手に渡し、同志テールマンに對しては、彼の罪についての聲明書をもう一度作成して、出版物上で再び彼をこきおろすことを提案した。そして、これが、コミンテルンの『指導者』と呼ばれているのである！ この世の中に、果してこんな『指導者』というものが有り得るだろうか？

黨中央委員會はブハリンの提案を審議して、これを棄却した。これが、ブハリンのお氣に召さなかつたことは勿論である。だが、それは一體誰れの罪か？ 第六回世界大會の諸決定は、それらに違反するがためではなくて、それを實際に遂行するために採用されたのである。第六回世界大會が、同志テールマンを首班とするドイツ共産黨の基本的中核の手に指導を保持しておいて、右翼的偏向とそれに對する調停主義との鬭争を宣言することを決定したにもかかわらず、調停派のエーヴェルトとゲルハルトが、この決定をひっくり返えそうと思いつくに到つたとするならば、ブハリンの義務は、調停派に警告を與えることを要求し、ドイツ共産黨内の指導を彼等の手に残しておかぬようにすることである。第六回世界大會の諸決定を、「忘却した」ブハリンが悪いのだ。

吾々の間の意見の不一致の第三段階は、ドイツ共産黨の右翼に對する鬭争についての問題、ブランドラーとテールハイマーの分派の壊滅とこの分派の指導者たちを、ドイツ共産黨から除名した問題に關連している。この根本的問題において、ブハリンと彼の友人達の執つた「態度」は、彼等が、この問題の解決に参加することをいつも回避したということである。實際のところ、そこでは、ドイツ共産黨の運命に關する問題が決定されたのであつた。ところがブハリンと彼の友人達は、このことを知つていながら、しかも、この問題の解決を擔當している機關の會議に参加することを、常習的に回避して、常にこの問題の進行を阻害したのであつた。何のためにか？ コミンテルンに對しても、ドイツ共産黨内の右翼に對しても、「清廉潔白な者」としてありたいのであつたに相

違ふのである。そしてまたあとで、『ブランドラーとテールハイマーを共産黨から除名したのは、吾々、即ちブハリン一派ではなくて、彼等、即ち黨中央委員會の多數派なのだ、』とすることもできるであらうためであつた。そして、これが、右翼的危険に對する鬭争と稱されているのである！

最後に、吾々の間の意見の不一致の第四の段階。この段階は、ノイマンをドイツから召還することと、その一つの演説において、第六回世界大會でのブハリンの報告演説を批判したとかいわれる同志テールマンに警告を與えることとについて、黨中央委員會の十一月總會前に提出したブハリンの要求と関連している。吾々は、ブハリンの要求を確認できるような文獻を、全く何一つ有していなかつたので、ブハリンに賛成することは、勿論できなかった。ブハリンは、ノイマンとテールマンの罪を證明する文獻を提出することを約束した。しかしながら、彼は、何等の文獻も遂に提出しなかつた。文獻を提出する代りに、彼はコミンテルン執行委員會の政治書記局でなされた、エムベル・ドロの周知な演説、その後コミンテルン執行委員會の常任委員會で、日和見主義的な演説として銘を打たれたその演説を、ソ同盟共産黨（ボルシエヴィキ）の代議員團の各員に配布した。エムベル・ドロの演説を、ソ同盟共産黨（ボルシエヴィキ）の代議員團の各員に配布し、かつ、これをテールマンを糾弾するための資料として推薦して、ブハリンは、ノイマンの召還と、同志テールマンに警告を與えることについての彼の要求の正當さを證明しようと欲したのであつた。だが實際においては、彼はこのことによつて、彼自身エムベル・ドロの立場、即ち、コミンテルン執行委員會が、日和見主義的立場であるとみなしている立場と、相提携しているものだとすることを證明したのであつた。

同志諸君、これこそが、コミンテルンの問題に關する、吾々の間の意見の不一致における主要な點である。

ブハリンは、コミンテルンの各支部内で、右翼的偏向との、そして、右翼的偏向に對する調停主義との闘争を實行し、ドイツ共産黨とチエコ・スロヴァキア共産黨を、社會民主主義的分子と傳統から肅清して、諸共産黨から、ブランドラーやタールハイマーのような連中を追つぱり出すときは、これによつて、吾々は、コミンテルンを「瓦解させ」、コミンテルンを「破滅させる」ことになる、と考へている。だが、吾々は反對に、かかる政策を實行することによつて、右翼的偏向と、この偏向に對する調停主義とに對する闘争に問題を集中することによつて、吾々はコミンテルンを強化し、コミンテルンを日和見主義者から肅清し、コミンテルンの各支部をボルシェヴィキ化し、來るべき革命的戦闘へ労働者階級を準備訓練するために諸共産黨を援助することである、と考へている。なせならば黨は自己を腐敗分子から肅清することによつて自己を強化するからである。

諸君は、これが、ソ同盟共産黨（ボルシェヴィキ）中央委員會の陣列内における單なる色合の差異ではなくて、コミンテルンの政策についての、根本的問題に關する、いかにも重大な意見の不一致であることを知られるであらう。

二、國內政策の方針に關しての意見の不一致

私は前に、わが國における階級的變動と階級闘争とについて述べた。私は、ブハリンのグループが盲目症に感染して、これらの變動を見ず、黨の新しい任務を理解していない、ということ述べた。私は、これが根據となつて、ブハリンの反對派の呆然自失、困難に對する恐れ、困難に對しては、すぐにも屈服できる用意が發生したということ述べた。

ブハリン派のこれらの誤謬は、天から降ってきたのだと言うことはできない。反對に、それらは、すでに経過したところの、そして、國民經濟復興の時期と稱されているところの、發展の時代と關連している。この時期には、建設は平和的方法で、いわば自然發展の形態によつて行われており、現存するような階級的變動もまだなかつたし、現在吾々が觀察しているような階級闘争の尖鋭化もまだなかつたのである。

だが、今やわが國は、舊い時代、即ち復興の時代と異なつた、新しい發展時代にあるのである。今やわが國は、建設の新しい時代、社會主義に基礎をおく、國民經濟全體の再建設の時代にあるのである。この新しい時代は、新しい階級的變動と階級闘争の尖鋭化とを呼びおこしている。この時代は闘争の手法、わが勢力配備の變更、わが組織全部の改善と強化とを要求する。

ブハリンのグループの不幸は、實に、このグループが過去に生きるものであり、この新しい時代の特徴的な點を見ず、闘争の新しい手法の必要なことを理解しないということにこそあるのである。ここにおいて、困難に直面してのこのグループの盲目症、呆然自失、周章狼狽が生ずるのである。

イ、階級闘争について

ブハリンのグループのこの盲目症とこの呆然自失との理論的基礎は何であるか？

この盲目症と呆然自失の理論的基礎は、わが國における階級闘争の問題に對する、ブハリンの間違った非マルクス主義的な態度にあると、私は考へる。私は、社會主義へのクラークの成長伸展に對しての、ブハリンの非マルクス主義的理論や、プロレタリアート獨裁の情勢下における階級闘争の真相に對する無理解ということを考慮していつているのである。

ブハリンのパンフレット「社會主義への道」から、クラークの社會主義への成長伸展について述べている周知の一節が、この席上で再三引用された。だが、それは、ここでは幾分文句を抜かして引用された。この一節をそっくり全部引用することを許されたい。同志諸君、こうすることは、ブハリンが、階級闘争についてのマルクス主義的理論からいかに遠くかけはなれてしまっているかを、如實に示すために、せひ必要なのである。まさきいてくれ給え——

「わが協同組合的農民組織の基本網は、クラーク的ではなくて、「勤勞」型の協同組合的細胞によつて、わが全國的機關の制度に成長伸展し、かくして、社會主義經濟の單一の鎖の環となつてゐる細胞によつて構成されるであらう。他方において、クラークの協同組合群も、丁度おなじように、銀行その他を通じて、矢張この制度に成長伸展するであらう。だが、それらは、ある程度まで、例えば利權企業に類するような異體的なものであるだらう*」。

ブハリンのパンフレットから、この一節を引用しながらも、ある同志達は、何故か利權所有者に關しては最後の句を抜かしてゐる。ロジツトは、たぶんブハリンを援助したいと思つてであらうが、この機會を利用し、ブハリンの眞意が曲解されてゐると、その座席から叫んだ。だが、それにも拘らず、全引用句の最も大切な點は、利權所有者に關しては最後の句にこそ存するのである。なせならば、利權所有者とクラークとを同列にならば、しかもクラークが社會主義へ成長伸展するであらうとするならば、その結論はどういうことになるであらうか？ その結論はただ一つ、即ち利權所有者もまた同じ様に社會主義へ成長伸展するであらうということ、即ち、クラークのみならず、利權所有者もまた社會主義へ成長伸展するだらう、ということになるのである。(満場哄笑)

* 傍點は私による。——イ・スターリン、

つまり結論としてはこんなことになるのだ。

ロジツト。ブハリンは、「異體的なもの」となるといつた。

スターリン。ブハリンは、「異體的なもの」となるといつたのではなく、「ある程度まで、異體的なもの」となるといつたのだ。したがって、クラークと利権所有者とは、「ある程度まで」、社会主義制度内における異體的なものであるということになるのである。しかして、特にブハリンの誤謬の存する點は、クラークと利権所有者とが、「ある程度まで」異體的なものではあるが、それにしてはやはり兩方とも社会主義へ成長伸展するであろうという點にあるのである。

ブハリンの理論は、とどのつまり、このようなたわごとになるのだ。

都市と農村との資本金家、クラークと利権所有者は、社会主義へ成長伸展しつつある。ブハリンは、とどのつまりこんな馬鹿げたことを言うまでにいつたのだ。

否、同志諸君、こんな「社会主義」は、吾々には無用だ。ブハリンに與えてやろう。

今まで、吾々マルクス主義者であり、レーニン主義者である者は、一方に都市と農村との資本金家、他方に労働者階級、この間には、到底調和することのできない利害の對立が存在していると考えてきた。實にこの點にこそ、階級闘争についてのマルクス主義的理論が依據しているのである。ところが今、資本金家が、社会主義へ平和的に成長伸展するのだ、ブハリンの理論によると、これは全部まつさかさまにひっくりかえされ、搾取者と被搾取者との間の到底調和することのできない階級的利害の對立というものは消滅してゆき、搾取者は社会主義へ成長伸展するのである。

ロジツト。それは違っている。プロレタリアートの獨裁が豫想されているのだ。

スターリン。だが、プロレタリアートの獨裁とは、階級闘争の最も尖鋭な一形態のことである。

ロジツト。その點にこそ問題があるのだ。

スターリン。ところが、ブハリンの言によれば、このプロレタリアートの獨裁自體へ、資本家共が成長伸展するということになるのだ。ロジツト、どうして君は、このことが分らないのか？ 都市と農村との資本家共が、プロレタリアート獨裁の制度へ成長伸展するとすれば、何者に對して闘争を行うことが必要であり、また何者に對して最も尖鋭な形態の階級闘争を遂行することが必要なのであるか？

プロレタリアートの獨裁は、資本主義的分子に對する容赦なき闘争を遂行するために、ブルジョアジーを壓潰し、かつ資本主義を根元から掘り崩すために必要なのである。だが、都市と農村との資本家共が、クラークと利權所有者とが、社會主義へ成長伸展するとするならば、一體それでもプロレタリアートの獨裁が必要であろうか？ またそれが必要だとするならば、いかなる階級を壓潰すためにそれが必要なのであるか？

ロジツト。ブハリンのいう成長伸展ということは、階級闘争を豫想しているということに、問題があるのだ。

スターリン。ロジツトはブハリンに奉仕することを誓つたと見える。だが、彼の奉仕は寓話にある熊の奉仕と同じ様な結果になつてゐる。なせならば、彼はブハリンを救いたいと望んでゐるのがあるが、實際には、却つて彼を完全に溺死させてしまつてゐる。「世話すきな熊は、敵よりもつと危険だ」とは、意味なく言われたことではない。(満場大笑)

二つのうちのどつちか一つだ。即ち、資本家の階級と、権力につき、かつ自己の獨裁を組織した労働者階級との間には、到底調和できない利害の對立が存在するか、それとも、この利害の對立がな

いか、ということであつて、そのときには、ただ一つのことが残る。即ち、階級的利害の調和を宣言することである。

二つのうちのどつちか一つだ。

階級闘争についてのマルクスの理論が、それとも、社會主義への資本家共の成長伸展の理論か。

階級的利害の到底調和できない對立か、それとも、階級的利害の調和の理論か。

社會主義は資本主義へ成長伸展し、資本主義は社會主義へ成長伸展するということを説教しているブレンタノもしくはシドニー・ウエツプ型の「社會主義者達」のことは、まだしも理解することができる。なぜならば、これらの「社會主義者達」は、實際においては反社會主義者であり、ブルジョア自由主義者だからである。だが、マルクス主義者たろうと望んでおり、しかも、それと同時に、資本家階級が社會主義へ成長伸展するという理論を説教している人間なんて、到底理解することはできない。

ブハリンは、自分の演説中でレーニンの周知な引用句を引證することによつて、社會主義へのクラークの成長伸展という理論を裏書きしようとして試みた。その際、彼は、レーニンがブハリンと丁度おなじことを語っている、と斷言している。同志諸君、これは正しくない。これは、レーニンに對する、甚だしい許すべからざる中傷である。

次の如きがレーニンからのその引用句の本文である――

「勿論、わがソヴェト共和國では、社會機構は二つの階級、即ち労働者と農民の協力に基礎をおいており、それへ、現在では、「ネツブマン」即ちブルジョアジーも一定の条件すきで加わること許されている」。〔レーニン全集、第二七卷、四〇五頁〕

ここには、社會主義への資本家階級の成長伸展に關しては、一言半句さえもないことを、諸君はみられるであろう。ここでは、ただ、吾々は、「一定の條件すきで」労働者と農民との協力へ、ネツプマン、即ち、ブルジョアジーも参加することを「許した」、ということだけが述べられているのである。

これは何を意味しているか？ これは、それによつて、ネツプマンが社會主義へ成長伸展する可能性のあることを吾々が許容したということの意味するだろうか？ 勿論、意味しない。恥知らずの人間のみが、こんなふうなレーニンからの引用句を扱うことができるのである。このことは、吾々が今のところブルジョアジートを絶滅せず、吾々は、今のところブルジョアジーの財産を没收せず、一定の條件すきで、即ち資本家共の徹底的制限と國民・經濟生活からの漸次的なじめ出しに導くところのプロレタリアートの獨裁の法則に、無條件的に服従するという條件すきで、ブルジョアジーの存在を許容するであろうということだけを意味している。

激烈な階級闘争を行わずに、資本家共を縮出し、資本主義の根を絶滅するということを實現することができらるであろうか？ 否、それはできないことだ。

資本家共は社會主義へ成長伸展するであろうというような理論と實踐とが幅をきかしているような状態の下で、階級を絶滅することができらるか？ 否、それはできないことだ。かかる理論と實踐は、階級を培養し、それを不朽なものとするだけでできらるだけである。なせならば、それは、即ちこの理論は、マルクス主義的階級闘争の理論と矛盾對立しているからである。

ところで、レーニンからの引用句の方は、プロレタリアート獨裁の情勢下における階級闘争についてのマルクス主義的理論に終始一貫基礎をおくものである。

クラークは社會主義へ成長伸展するであらうというブハリンの理論と、激烈な階級闘争としての獨裁についてのレーニンの理論との間に、どんな共通點があり得るだろうか？、そこには、何等の共通點もないし、またあり得る筈もないことは明かなことである。

ブハリンは、プロレタリアート獨裁の下においては、階級闘争は、階級の絶滅をもたらすため、終熄し、解消すべきである、と考へている。レーニンの方は、反對に、プロレタリアート獨裁の條件下において、プロレタリアートの獨裁前よりも、一層激烈となつてきた頑強な階級闘争を實行することによつてのみ、階級は絶滅することができる、教へているのである。

レーニンはつぎのようについている――

「階級を絶滅するということは、長期に亘るところの、困難で頑強な階級闘争のことである。この階級闘争は、資本の權力を打倒した後、ブルジョア國家を破壊した後、プロレタリアート獨裁を樹立した後にも、消滅せず（舊式な社會主義と舊弊な社會民主黨との俗物共が想像しているようには）、ただその形態を變更し、多くの點において、益々激烈さを増してくるだけである」。――（レーニン全集、第二四卷、三一五頁）

これこそ、階級の絶滅について、レーニンが語つてゐるところのものである。

プロレタリアートの激烈なる階級闘争の方法をもつてする階級の絶滅――かくの如きが、レーニンの定式である。

階級闘争の終熄と、資本家共の社會主義への成長伸展という方法をもつてする階級の絶滅――かくの如きが、ブハリンの定式である。

これら二つの定式の間、どんな共通點があり得るだろうか？

クラークが社會主義へ成長伸展するというブハリンの理論は、こうして、階級闘争についてのマルクス主義・レーニン主義的理論からの離脱である。彼の理論は、講壇社會主義への接近なのである。

この點に、ブハリン並に彼の友人達の一切の誤謬の基礎があるのである。

クラークは社會主義へ成長伸展するだろうというブハリンの理論については、この理論自身が、ブハリンに反對して語つてゐる——單に語つてゐるのみでなく、わめてさえいゝ——のだから、そう長く語る價值はないというかも知れない。だが、同志諸君、それは正しくない！ この理論が表面にでてこない間は、この理論に注意を拂わなくともよかつたのだ。いろんな同志達の書いたものの中に愚説が出て來るのはよくあることだ。そして、實際最近まで、吾々は、ブハリンのこの理論に注意を拂わなかつた。だが、最近、情勢は變化した。最近の數年間に高潮してきた小ブルジョアの奔流の波は、この反マルクス主義的理論に、現實的な性格をつけ加えて、この理論を鼓舞激勵させた。現在においては、すでに、この理論が表面に現れてはいないということはできない。現在それは、ブハリンのこの奇怪な理論は、わが黨内における右翼的偏向の旗幟、日和見主義の旗幟となる抱負をもつてゐる。ゆえに吾々は、この理論を見逃しておくことは、すでにできないのである。ゆえに吾々は、右翼的偏向に對する、わが黨員同志達の闘争を容易にするために、間違つた理論、有害な理論として、この理論を擊破すべきことを義務づけられている。

ロ、階級闘争の尖鋭化について

ブハリンの第一の誤謬が原因となつて生じた彼の第二の誤謬は、階級闘争の尖鋭化、ソヴェト權力の社會主義的政策に對する資本主義的分子の反抗強化問題に對する正しくない、非マルクス主義的態度ということにあるのである。

この點では、何が問題となつてゐるか？ 資本主義的分子が、わが國經濟の社會主義的部門よりも急速に成長してゐるということ、また、この事情のために、資本主義的分子は、社會主義の建設を掘り崩して、その反抗を強化してゐるということが問題となつてゐるのではないのか？ 否、その點ではない。その上になお、資本主義的分子が、社會主義的部門よりも急速に成長してゐるかの如きうことも正しくない。こんなことがほんとうであつたならば、社會主義的建設はすでに滅亡に瀕してゐたであらう。

ここで問題となつてゐるのは、社會主義は資本主義的分子に對する攻撃を成功裏に行つてゐること、社會主義は資本主義的分子よりも一層急速に成長しており、これがために、資本主義的分子の比重は低下しつゝあり、かつ、資本主義的分子の比重が低下しつゝあるからこそ、資本主義的分子は致命的な危険を感じて、その反抗を強化してゐる、ということについてである。

しかして、彼等が現在のところ、なおその反抗を強化する可能性をもつてゐるのは、世界の資本主義が彼等に支持を與えてゐるという理由からだけではなく、彼等の比重が低下したことも加わらず、社會主義の成長に比して、彼等の相對的な成長度が低められてゐるにもかかわらず、資本

主義的分子の絶對的成長は依然として行われており、そして、このことは、社會主義の成長に反抗するために、諸勢力を蓄積するある程度の可能性を彼等に與えているからである。

發展の現段階において、諸勢力相互關係の現情勢下において、階級闘争の尖鋭化と、都市及び農村の資本主義的分子の反抗の強化とが發生しているのも、これに基いてるのである。

ブハリンと彼の友人達の誤謬は、彼等がこの簡單にして明瞭な眞理を理解していないことにあるのである。彼等の誤謬は、彼等が、マルクス主義者的にはなく、俗人的な態度で問題に對し、階級闘争の尖鋭化を、あらゆる種類の偶然的な原因、すなわち、ソヴェト諸機關の「役に立たぬこと」、地方の同志達の「慎重を缺いた」政策、柔軟撓屈性の「缺如」、「行きすぎ」等々によつて説明せんと試みることにあるのである。

たとえば、次の如きが、階級闘争の尖鋭化についての問題に對する、全然非マルクス主義的な態度をありありと示しているところの、ブハリンのパンフレット「社會主義への道」からの引用句である——

「あつちでもこつちでも、農村における階級闘争は、これまで通りの現れ方で爆發しており、その上に、その尖鋭化は、通常、クラーク的分子によつてひき起されている。たとえば、クラークや、或は他人を犠牲として金を儲けたり、また、ソヴェト權力の機關内へもぐりこんだりしている人々が、農村通信員を狙撃したりするようになったときは——これは、階級闘争の最も尖鋭な形態をとつた現れである。（最も尖鋭な闘争形態は蜂起であるから、これはほんとうではない。——「イン・スタトリン」。）だが、このような事件は、ソヴェトの地方機關がまだ弱いところで、通常起きている。この機關が改善されるに従つて、ソヴェト權力のすべての下部細胞が強化されるに

従つて、地方的な、農村の黨組織と共産青年同盟の組織とが改善され、強化されるに従つて、この種の現象は、そんなことは、全くはつきりとわかりきつたこととして、益々稀有なこととなるであろうし、結局は痕跡もなく消え去つてしまふであらう*」。

かくして、階級闘争の尖鋭化は、わが下部諸組織が役に立つとか、或は役に立たないとか、弱いか、或は強いとかいうように、機關の素質が原因になつていくという結論になるのだ。

たとえば、ソヴェト權力に對するブルジョア的分子の反抗形態であり、階級闘争の尖鋭化した形態であるところの、シャハトにおけるブルジョア・インテリゲンチヤの妨害工作は、階級諸勢力の相互關係によつてではなく、社會主義の成長によつてでもなくて、わが諸機關が役に立たないということによつて説明されるということになるのである。

シャハト地區において大がかりな妨害工作が出現するまでは、わが國の機關は良好であつたが、その後、大がかりな妨害工作が出現すると、たちまちにしてその瞬間から、機關は何故か、全く役に立たぬものになつてしまつたということになるのである。

穀物の調達が自然の成行きにまかせて遂行され、階級闘争の特別な尖鋭化がわが國になかつた去年までは、地方のわが諸組織は良好であつたか、或は理想的でさえあつたのに、クラークの反抗が特に尖鋭な形態をとるにいたつた去年以來、わが諸組織は、急に不良な、全く役に立たぬものになつてしまつたということになるのである。

* 傍點は私による。——イ・スターリン

これは説明ではなくて、説明に對する嘲笑である。これは科學ではなくて、インチキである。

では、この尖鋭化は、實際何によつて説明されるか？

それは、二つの理由によつて説明される。

第一に、吾々の前進、吾々の攻勢、工業における、また農業における社會主義的經濟形態の成長、都市並に農村の資本家のある部隊を相應に縮出す結果を伴うところの成長ということによつて説明される。問題は、吾々が、レーニンの定式、即ち「だれがだれに勝つか」という法則によつて生活していること、即ち、吾々が彼等資本家共を投げ倒し、レーニンがいつたように、彼等と最後の決戦をやるか、それとも、彼等が吾々を投げ倒すか、というようになっているのである。

第二に、資本主義的諸分子は自ら進んで舞台から退場することを欲しないということ、即ち、彼等は社會主義に對して現在も反抗しているし、將來においても反抗しつつあることである。よつて説明される。なせならば、彼等の生存できる最終日が到来しつつあることを彼等は知つていからである。そして彼等の比重の低下にも拘らず、彼等はとにかく絶對的には成長しているので、今のところ、彼等はまだ反抗しつづけることができるのである。即ち、都市並に農村の小ブルジョアジーは、レーニンが語つているように、自分達の仲間のうちから、毎日、毎時間、資本家と小資本家とを分出しており、かつ彼等、即ちこれらの資本主義的分子は、自己の生存を固守するために、全力を盡しているのである。

死滅しつつある階級が、自ら進んで舞台から退場するというような場合は、歴史上にかつてなかつたのだ。死滅しつつあるブルジョアジーが、自己の生存を固守するために、自己の殘存勢力すべてを試用し盡さなかつたというような場合は、歴史上にかつてなかつたのだ。わがソヴェトの下部機關

が良かろうと悪かろうと、わが前進、わが攻勢が資本主義的分子を減少させ、彼等を締め出してしまふとも、彼等、死滅してゆく階級は、どんなことがあつても、必ず反抗するであらう。

この點にこそ、階級闘争の尖鋭化にとつての、基礎が存するのである。

ブハリンと彼の友人達の誤謬は、彼等が、資本家の反抗の増大と、資本家共の比重の増大とを、同一視しているという事に存するのである。だが、この同一視は、何等の根據をも持たないものである。それは根據をもつていない。なせならば、もしも、彼等、即ち資本家共が反抗するとしても、この事は、彼等が吾々よりも強くなつたという事を意味するものでは決してないからである。事情は全く反對なのである。老衰しつつある階級は、彼等が吾々よりも強くなつたからではなくて、社會主義の方が彼等よりも速に成長し、かつ彼等が吾々よりも弱くなつたから反抗しているのである。そして特に、彼等が一層弱くなり、彼等が自己の生存の最後の日を感じていればこそ、全力を挙げ、全手段をつくして反抗せざるを得なくなつていたのである。

この點にこそ、現在の歴史的時機における階級闘争の尖鋭化と、資本家共の反抗との真相が存するのである。

かくの如き事情において黨の政策はいかなるものでなければならぬか？

それは労働者階級と農村の被搾取大衆を覺醒させ、都市並に農村の資本主義的分子に對する闘争と、反抗している階級敵に對する闘争とのために、彼等の戦闘力を高揚させ、彼等の動員準備力を發展させるということではなければならない。

階級間の闘争についてのマルクス主義・レーニン主義的理論が優良であるのは就中、この理論が、プロレタリアート獨裁の敵に對して労働者階級を動員することを容易ならしめるということにもあるのだ。

資本家共が社會主義へ成長伸展できるというブハリンの理論、そしてまた、階級闘争の尖锐化についての問題に對するブハリンの解釋の害毒は、どういふ點にあるか？

それは、この理論が労働者階級を眠りこませ、わが國の革命的諸勢力の動員準備力を内部から掘り崩し、労働者階級の動員を解除し、ソヴェト權力に反對する資本主義的諸分子の攻撃を容易ならしめるという點にあるのである。

ハ、農民について

ブハリンの第三の誤謬は、農民についての問題に關してである。わが國では、農民に關する問題がわが政策中の最も重要な問題の一つとなつていふことは、周知のことである。わが國の條件下における農民は、いろいろな社會的グループ、即ち、貧農、中農、クラークによつて構成されている。これらのグループに對する吾々の態度が、同一なものであり得ないのは、わかりきつたことである。労働者階級の支柱としての貧農、同盟者としての中農、階級敵としてのクラーク、即ちかくの如きが、これらの社會的グループに對する吾々の態度である。こんなことはみんな、わかりきつたことであり、まただれでもが知つていふところである。

ところが、ブハリンはこの問題を幾分違つたふうに見ている。農民を性格ずけるにしても、彼によれば、農民分化という事實は抜け落ちてしまひ、社會的諸グループの存在といふことも何處かへ消えてなくなり、農村と呼ばれる一個の灰色の班點のみが残るのである。彼にとつては、クラークもクラークでなく、中農も中農ではなくて、農村は全般的に區別なく貧窮していふことになつて

いる。彼が、ここで、彼の演説の中で語ったことも、この通りであつた。即ち彼は、わが國のクラークは、クラークと呼ぶことができるだろうか？ 彼等は貧乏人じやないか、といつた。そして、また、わが國の中農は、はたして一般にいう中農に似ているだろうか？ 彼等は、半餓死状態で生活している貧乏人じやないか、とブハリンはここで聲明した。農民に對するかような觀點が、レーニン主義とはどうしても相容れることのできない、根本的に誤つた觀點であることは、わかりきつたことである。

個人農は、最後の資本主義的階級である、とレーニンは語つた。この命題は正しいだろうか？ そうだ、絶対に正しい。なぜ個人農は最後の資本主義的階級としての資格を與えられているか？ なぜならば、わが社會を構成しているところの二つの基本的階級のうちに農民は、彼等の經濟が私有と小商品生産とに基礎をおいているところの、その階級だからである。なぜならば、農民は、彼等が小商品生産を行つている個人農として留まる間は、彼等の仲間の中から恒常的に、連續的に、資本家を出しており、また分出せざるをえないからである。

この事情は、労働者階級と農民との同盟の問題に對する吾々のマルクス主義的態度についての問題上で、吾々にとつて決定的な意義をもっている。このことは、吾々にとつては、農民との一切、切切の同盟が必要なのではなくて、農民のうちの資本主義的な分子に對する鬭争に基礎をおくような同盟だけが入用なのだということを意味するのである。

知られる如く、最後の資本主義的階級としての農民について述べているレーニンのテーゼは、労働者階級と農民との同盟という觀念と矛盾對立しないだけでなく、反對に、この同盟に、わが國經濟のうちの一般的に資本主義的分子、特に農村における農民の資本主義的分子に對して向けられた労働者階級と農民の大多數との同盟としての基礎を與えている。

レーニンは、このテーゼを、労働者階級と農民との同盟は、農民が自分の中から分出してきているところの、資本主義的分子との鬭争に、この同盟が基礎づけられているような場合にのみ、鞏固なものたることができるであろう、ということを示すために、このテーゼを提出したのであつた。

ブハリンの誤謬は、彼がこの單純な事柄を理解せず、かつ受け入れず、農村における社會的諸グループについて考えることを彼が忘却し、彼にとつては、クラークと貧農とは視野から消え失せ、ただ全般的な中農大衆一つだけが視野に残つていゝることと存するのである。

これは、疑いもなく、クラークと貧農以外の他の社會的グループを農村において見ず、そして、中農は視野から姿を消している「左翼的」、トロツキスト的偏向とは反對に、右の方へのブハリンの偏向である。

農民との同盟問題におけるトロツキズムとブハリンのグループとの間の相違は何であるか？トロツキズムは、農民の中農大衆との鞏固な同盟という政策に反對意見を述べているが、ブハリンのグループは、一般的に農民とのあらゆる種類の同盟に賛成しているという點である。これら兩方の立場が間違つたものであり、かつ彼等の間には何等の優劣もないことは、何ら證明する必要はないのである。

レーニン主義は、農民の基本的な大衆との鞏固な同盟に、中農との同盟に絕對に賛成である。だが、あらゆる種類の同盟に賛成するのではなくて、労働者階級の指導的役割を保障し、プロレタリアート獨裁を強化し、階級の絶滅を容易ならしめるような中農との同盟に賛成なのである。

レーニンは次のようにいつている――

「労働者階級と農民との間の協定ということとは、どんなふうにもでも解釋することができる。もし労働者階級の見地から、協定が労働者階級の獨裁を支持し、かつ階級を絶滅させるために講

せられた手段の一つであるときにのみ、協定は、許さるべきであり、正しいものであり、原則上可能なものであるということを考慮しないならば、労働者階級と農民との協定という定式は、勿論、ソヴェト権力に對する一切の敵と、獨裁に對する一切の敵とが、彼等の見解を主張するために利用する定式にとどまるのである』。(レーニン全集、第二六卷、三八七頁)

そしてさらに、レーニンは次のようにいつている――

「今や、プロレタリアートは権力を掌握し、かつそれを指導している。プロレタリアートは農民を指導している。農民を指導するということは、何を意味しているか？ それは、第一に、階級を絶滅するための方針をとることであつて、小生産者にむけられた方針をとるものではない。吾々が根本的にして基本的なこの方針から離れて迷い出したならばその時には、吾々は社會主義者ではなくなり、かつ現在、プロレタリアートの最も兇惡な敵である小ブルジョアの陣營にエス・エルとメンシエヴィキの陣營に轉落してしまつたであらう」。 (前掲書、三九九―四〇〇頁)

これが、農民の基本的大衆との同盟についての問題、中農との同盟についての問題に對する、レーニンの見解である。

中農の問題に對するブハリンのグループの誤謬は、彼等が、労働者階級と資本家との中間にある中農の二元的本性と、二元的地位とを理解していないことに存するのである。『中農とは、動搖している階級である』、とレーニンは述べた。なぜか？ なぜならば、中農は一面からいえば、勤勞者であつて、このことは彼等を労働者階級に近いものにさせているのであるが、他面からいえば、中農は財産所有者であつて、このことは彼等をクラークに近いものにさせているからである。中農の動搖の

原因は、この點にあるのである。そして、これは、ただ理論的のみ正しいのではない。これらの動搖は、日々の一時間毎の實踐上にもまた表明されているのである。

レーニン是这样いつている――

「農民は、勤勞者として、ブルジョアジの獨裁よりも、勤勞者の獨裁の方をよいとして選んで、社會主義の方へ惹きつけられて行つてゐる。農民は穀物の賣り手として、ブルジョアジの方へ、自由商業の方へ、即ち、「習慣になつてゐる」、舊い、「古來の」資本主義の方へ後退して、惹きつけられて行つてゐる」。――(レーニン全集、第二四卷、三一四頁)

ゆえに、中農との同盟は、それが資本主義的分子に反對し、資本主義總體に反對して向けられ、それがこの同盟内における勤勞者階級の指導的役割を保障し、それが階級を絶滅させることを容易にする、というような場合にのみ、鞏固であることができるであらう。

ブハリンのグループは、これらの簡單な、わかりきつた事柄を忘れてゐる。

ニ、ネツプと市場關係について

ブハリンの第四の誤謬は、ネツプ(新經濟政策)についての問題に關係してゐる。ブハリンの誤謬は、この點では、彼がネツプの二面的性格を見ず、ネツプの一面だけを見てゐるということにある。われわれが、一九二一年にネツプを施行したときに、われわれは、當時、戦時共產主義に反對し、いかなるものであろうと私的商業の自由ということを一切排除してゐるところの、かような制度と體系とに反對して、その鋭鋒を向けたのであつた。ネツプは、私的商業のある程度の自由を意味して

ると、吾々は考えたし、今もそう考えている。問題のこの方面を、ブハリンは記憶にとどめた。それも非常によいことだ。

だが、ブハリンは、この一面だけがネツプのすべてだと考えることによつて、誤謬を犯している。ブハリンは、ネツプが今一つ他の面をもつていることを忘れている。問題のあるところは、ネツプが、私的商業の完全な自由、市場において値段を自由に上下し得るといふことを、決して意味するものではないといふことである。ネツプとは、市場における統制者としての國家の役割を保障した上での、一定の制限内における、一定の範囲内における私的商業の自由である。實にこの點にこそ、ネツプの第二の面があるのである。その上、ネツプのこの一面は、ネツプの第一の面に比して、より重要なのである。わが國には、資本主義諸國で普通に行われているような、市場において値段を自由に上下し得るといふことはない。吾々は、穀物の値段を大體に決定する。吾々は、工業製品の値段を決定する。吾々は、農産物の値段を常に安定させておけるように努力して、生産原價を下げ、工業製品の値段を下げる政策を實行することに努力している。市場における、かくのごとき特別にして特殊な秩序が、資本主義諸國には存在しないといふことは、明かなことではないか。

ここにおいて、ネツプが存する間は、その面の兩方とも、即ち、戦時共産主義の制度に反對して向けられており、かつ、私的商業のある程度の自由を保障することを目的として有している第一の面も、また、私的商業の完全な自由に反對して向けられており、かつ市場における統制者としての國家の役割を保障することを目的として有している第二の面も、保存されていなければならない、ということになるのである。この兩面のうちの一つを抹殺してみよ、諸君のところには、新經濟政策はなくなるであらう。

プハリンは「左からの」危険だけが、即ち、商業の一切の自由を絶滅することを希望している人々からの危険のみが、ネツプを脅かすことができると考えている。これは正しくない。これは最も甚しい誤謬である。そののみならず、かゝる危険は、現在、實際とは最も縁の遠いものである。なせならば、わが國には、わが地方の組織にも中央の組織にも、商業のある程度、自由を保存することの必要とそれの時宜に適したものである事とのすべてを、理解しないような人達は、現在、全くいなか、でなければ、殆どいないからである。

もつと遙かに實際的なのは、右からの危険、即ち、市場における統制者としての國家の役割を絶滅させることを希望し、市場を「解放し」、かくして、私的商業の完全に自由な時代を開こうと希望している人々の側からの危険である。ネツプを失敗に歸させる右からの危険の方が、現在、遙かに實際的なものであることは、些かも疑うことのできないところである。

小ブルジョアの奔流の波が、特にこの方向に、右からネツプを失敗に歸させようとする方向に動いていることを、忘れてはならないのである。また、往々にして多くのわが同志達を負かしてしまつたクラークと富裕な分子の號泣、闇商人や買占め商人の號泣、特にこの方面からネツプを爆撃していることを、當然記憶していなければならぬ。プハリンがネツプを失敗に歸させる真に現實的な、この第二の危険を見ないというこの事實、この事實は、彼が、小ブルジョアの奔流の波の重壓に負けただけということ、疑う餘地もなく物語っている。

プハリンは、市場を「正規化すること」と、地方地方によつて、穀物の買上げ値段を「手加減すること」即ち、穀物の値段を引上げることが提案している。これは何を意味するか？ これは、市場に對するソヴェト的條件が、彼を満足させないこと、また、彼は市場における統制者としての國家の役

割を漸進的に低下させることを欲し、かつ右から、ネツプを失敗に歸させようとしている小ブルジョアの奔流の波に、讓歩することを提案しているのだ、ということの意味している。

しばらく、吾々がブハンの忠告に従つたこととしておこう。その結果はどうなるか？ 吾々は穀物の値段を、例えば、秋に、即ち穀物調達期の始めに高めるとする。だが、穀物を三倍も高い値段で買うことのできる各種の闇商人や買占め商人のような人々が、市場には常にいるし、また、吾々は闇商人共に追い附くことができないので——というのは、彼等は、みんなでおよそ千萬ブードを買取るだけであるが、吾々の方は、數億ブードを買入れなければならぬからである——穀物の保有者は、結局、もつと値段が上ることを待つて、穀物を賣らずに手元に残しておくであろう。したがつて主として、國家が穀物を真に必要としはじめる時である春に、吾々は穀物の値をもう一度上げなければならぬのである。しかして、春に穀物の値を高めるといふことは、何を意味するか？ それは、安い値で秋に穀物を賣つてしまひ、春ともなれば、一部は種子用として、一部は需用として、どうしてもその穀物を再び買い足さなければならぬところの、貧農や經濟力の弱い農民層を没落させることを意味する。吾々は、これらの工作の結果として、十分な量の穀物を得ることができるといふ意味で、何らか重要な効果を得ることができらうか？ できないといふことは請合いだ、といふのは、おなじ穀物に對して、さらに二倍も三倍も高く、敢て支拂う闇商人や買占め商人が、いつでも居合せるからである。したがつて、吾々は、闇商人や買占め商人の上手に出るために、無益な努力をして、穀物に對して新たな値上げを準備しなければならぬのである。

しかして、以上のことから、ひとたび穀物の値を高めはじめると、十分な量の穀物を得られるという保障もなしに、急坂をころがり落ちるように、吾々は際限もなく値上げをつすけて行かなければならぬことになるのだ。

しかし、問題はこれで盡きるのではない。

第一に、穀物の調達のための値段を高くする一方、吾々は農産物の値段に對して、一定の釣合を保たせるために、農村經濟によつて生産される原料の値も、そのあとで引上げなければならぬであろう。

第二に、穀物調達のための値段を引上げて、吾々は都市におけるパンの小賣値段を安い値段のままに維持しておくことはできないだろう。したがつて、パンの賣り値もまた高めなければならなくなるであろう。しかして、吾々は労働者を不利にすることはできないし、また不利にさせてはならないから、吾々は急テンポで、労働賃銀を引上げなければならぬであろう。しかして、このことは、工業製品の値段も引き上げる結果にまで導かざるを得なくなるであろう。なせならば、そうしない時には、工業化の利益に反して、資金は都市から農村へ流動することとなるかも知れないからである。

その結果として、吾々は、穀物に對しても、工業製品に對しても、だんだん下つて行くとか、或は少なくとも安定した値段を基礎としたものではなくて、だんだん高まつてゆく値段を基礎として、工業製品と農産物の値段を均等にしなければならぬであろう。

換言すれば、吾々は、工業製品と農産物との値段を上げる方針を採らなければならないであろう。値段に對するかかる「手加減」がソヴェトの價格政策を完全に無効にし、市場を統制している國家の役割を無効にし、完全に、小ブルジョアの奔流のおもむくままにさせる結果に導かざるをえないことは、理解するに難からぬことである。

これは、だれにとつて有利であろうか？

ただ、都市と農村との富裕な住民層にとつてのみ有利なのである。なせならば、高價な工業製品と農産物とは、労働者階級にとつても貧農や經濟力の弱い農民層にとつても、近ずき難いものとならざ

るをえないからである。クラークと富裕なもの、ネツプマンとその他の金持階級が利益を得ることになるからである。

これもまた、結合ではあろうが、獨特な結合、即ち、農村並に都市の金持層との結合である。労働者と経済力の弱い農民層とは、吾々に次のように質問する完全な権利を有するであろう。即ち、吾吾はいかなる権力であるか？労働者・農民の権力か、それともクラーク・ネツプマンの権力か？と。

労働者階級との、そして経済力の弱い農民層との絶縁、農村並に都市の金持層との結合、これこそ、ブハリンのいう市場の「正規化」と、地方地方によつて穀物の値段を「手加減する」ということが、導かざるを得ないところの結果である。

黨が、この破滅を意味する道を探り得ないことは明かなことである。

ネツプについてのブハリンのすべての概念が、いかに甚しく混乱しており、彼が、いかに逃がれがたく、小ブルジョアの奔流のとりこになりきつているかということは、なかんずく、彼が都市と農村、國家と農民との間の、商品流通の新形態についての問題に對して、否定以上の反對態度を示していることによつて知られるのである。彼は、國家は農民のための商品供給者になつたし、農民は國家のための穀物供給者になろうとしていふことに反對して、憤慨し、わめきたてている。こんなことは、ネツプの法則全部に對する違反であり、殆どネツプの失敗を意味するものであると彼は考えている。なぜか？何を根據にしてそういうのか？という問題がおこる。

國家が、國營の工業が、農民のための仲買いなしの商品供給者であり、農民が工業のための、國家のための——やはり仲買いなしの——穀物供給者だということに、どんな不都合があり得るだろうか？農民が、國營工業の需要を満すために、棉花、砂糖大根、亞麻の供給者にすでに轉化してしまつ

たからといって、また、國營工業が、これらの農業部門のための、都市商品、種子、生産用具の供給者にすでに轉化してしまつたからといって、マルクス主義の、マルクス主義的政策の見地からいって、どんな不都合があり得るだろうか？ 豫約購入制度の方法は、この點で、都市と農村との間における、商品流通のこれらの新形態を確立するための基本的な方法である。しかして、一體、豫約購入制度の方法は、ネツプの要求しているところのものと矛盾對立するものであろうか？

この豫約購入制度の方法の結果として農民が、棉花、砂糖大根、亞麻のみではなく、穀物の點でも國家への供給者になりつつあるということに、どんな不都合があり得るだろうか？

小口商賣、小賣は商品流通と名すけてもよいのに、商品の値と質に關して、前以て取り決めた契約（豫約購入制度）によつて行ふ大口の商賣を、なせ商品流通とみなしてはならないのか？

都市と農村との間の、豫約購入制度の方法による商品流通の、これらの新しい大衆的な形態が、他ならないネツプの基礎の上にこそ發生したものであり、それらが國民經濟に對する計畫的、社會主義的指導を強化するという意味における、わが諸組織の側からの巨大なる一步前進であることを理解するのは、はたして困難なことであらうか？

プハリンは、この簡單なわかりきつた事柄に對する理解を失つたのである。

ホ、工業發展のテンポと結合の新形態について

最後に、工業發展のテンポと、都市と農村との間の結合の新形態についての問題。この問題は、吾々の間の意見の不一致のうちの、最も重要な問題の一つである。この問題の重要さは、黨の經

濟政策の問題上における吾々の間の實際的意見の不一致のすべてが、この問題に集中されているというものである。

結合の新形態とは何であるか？ わが國經濟政策の見地からいつて、これは何を意味するか？

何よりもまず、これは、工業が主として、農民の個人的要求（キヤラコ、履物、一般布類、等）を満足させていた時における、都市と農村との舊い形態の結合の他に、工業が、農民經營の生産のための需要（農業機械、トラクター、改良された種子、肥料、等）を満足させるであろう時における、新しい形態の結合が、さらに吾々に入用だということである。

吾々が、以前、農民經營の生産のための需要には少ししか觸れず、主として、農民の個人的要求を満足させていたとすれば、今では農民の個人的要求を満足させつつけながら、新しい技術を基礎として、農業生産を再建するために直接關係をもっている、農業機械、トラクター、肥料、等を供給するために、全力を擧げて努力することが吾々にとつて必要である。

問題が農業の復興と、以前の地主とクラークとの土地を、農民の手でうまく經營することにあつた間は、吾々は、結合の舊い形態で満足することができた。だが現在、問題が農業の再建、ということにある時には、これではすでに不十分なのである。今では、新技術と集團的労働を基礎として、農業生産を再建設するように農民を援助しながら、さらに前進することが必要なのである。

第二に、これは、わが工業の再装備と並んで、吾々は、農業をも、真劍に再装備しはじめなければならぬということである。吾々は、わが工業を新しい技術の基礎の上に据え、あたらしい改良された機械と、新機種のよく訓練されたカールとをこれに供給して、わが工業を再装備するであろうし、部分的にはすでに再装備したのである。吾々は新しい諸工場を建設しているし、吾々は古い工場を再建し

擴大しているし、吾々は冶金工業、化學工業、機械製作工業を發展させている。この基礎の上に、新都市が殖えてゆき、あたらしい工業地帯は數を増し、從來のものは擴大されるのである。この土台の上に、食料品に對する、工業のための原料に對する需要が増大している。ところが、農業は、依然として、舊式な農具を使用し、舊式な祖先傳來の耕作法を踏襲し、舊式にして幼稚な、現在ではまつたく役に立たない、或は殆ど役に立たない技術を用い、舊式な小農的個人的な經營と勞働との形態を有する状態を續けているのである。

たとえば、革命前までのわが國の農家戸數は約一千六百萬戸であつたが、今では二千五百萬戸を下らぬ農家があるというこの事實は、何としたことだろうか？ これらのことは、農業が益々分散的な、零細的な性格を帯びるにいたつたということ以外に、何を物語るものであろうか？ しかして分散した小規模經營の特徴點は、これら小規模經營が、技術、機械、トラクター、農學の成果を、當然な程度に利用する力量を有していないこと、また、それらが、僅かな生産物しか市場に出すことのできない經營であるということにあるのである。

農産物の市場への出荷が不十分であるということも、この點に原因しているのである。

都市と農村間、工業と農業間の決裂の危険ということも、この點に原因しているのである。

わが工業發展のテンポにまで農業を引き上げ、驅り立てることの必要も、この點に原因しているのである。

そして、こんな決裂の危険を生じさせないためにこそ、あたらしい技術を基礎として慎重に、農業を再裝備はじめなければならぬのである。しかして、農業を再裝備するためには、零細な農民の個人經營を、大規模な農民經營に、コルホーズに漸次結合させることが必要であり、集團勞働を基

礎として農業を建設することが必要であり、集團的農民經營を大規模なものにすることが必要であり、前からあるソフホーズも、新しいソフホーズをも發展させることが必要であり、農業の基本的な部門全部に對して、豫約購入制度の大衆的な形態を系統的に採用することが必要であり、農民が新しい技術を十分に習得し、労働を集團化することを援助するところの機械・トラクター・ステーション制度を發展させることが必要である。つまり小農の個人經營を大規模の集團的生産の基礎の上へ、漸次に移行させることが必要なのである。なせならば、公共的型の大規模生産のみが、科學の成果と新しい技術を全的に利用し、わが農業の發展を巨人の足取で前進させることができるからである。

だがこのことは、勿論、吾々が、個人農としての貧農と中農との經營をおつぱり出してしまわなければならぬということを意味しはしない。否、そんなことを意味しているのではない。個人農としての貧農と中農との經營は、食料品と原料を、工業に供給するという點において、現に有力な役目を果しているし、近い將來においても、なおこの役目を果しつつあるのであろう。それゆえにこそ、個人農としての貧農と中農との、まだコルホーズに結集されないうころの、經營を支持することが必要なのである。

しかして、このことは、個人農の經營だけでは、もはや不十分だということの意味しているのである。このことについては、わが穀物調達上における困難がよく證明している。それゆえに、個人農としての貧農と中農との經營を發展させるということは、集團的經營形態とソフホーズをできる限り發展させるということによつて補足される必要があることである。

それゆえに、農民が、自己の小規模な個人經營を、集團的労働の軌道に移し變えることを容易ならしめるために、大衆的豫約購入制度の形で、機械・トラクター・ステーションの形で、協同組合運動

をできる限り發展させるといふ形で、個人農としての貧農と中農との經營と、集團的、公共的形態の經營との間に、橋を架け渡すことが必要である。

これらの條件を備えずには、農業を眞實に發展させることは不可能なことである。これらの條件を備えずには、穀物問題を解決することは不可能なことである。これらの條件を備えずには、經濟力の弱い農民層を、零落から、窮乏から救い出すことは不可能なことである。

最後に、このことは、農業生産の再建に關して、農業生産に榮養を補給する基本的源泉としての、わが工業をできる限り發展させることが必要であり、冶金、化學、機械製作工業を發展させることが必要であり、トラクター製作工場、農業機械製作工場等を建設することが必要であるということである。

大衆的な豫約購入制度を通じて、農民の基本的な大衆を集團的經營形態に引き入れることをせず、また相當な數量のトラクター、農業機械等を、農業に供給せずには、コルホーズを發展させることはできず、また機械・トラクター・ストラシヨンを發展させることができないということは、さらに證明する必要もないのである。

しかして、機械やトラクターを農村へ供給するということは、わが工業を急テンポで發展させずには不可能なことである。わが工業の發展の急テンポが集團主義を土台とする農業再建の鍵であるといふことも、この點にあるのである。

かくの如きが、結合の新形態の意味と意義である。

ブハリン一派は、結合の新形態が必要であることを、言葉の上では認めることを餘儀なくされた。だが、これは、言葉の上で認めたただけのことで、言葉の上では、結合の新形態を認めているとい

う様にみせかけて、正反對の何ものかを、こつそり持ち込むことを目論んでのことである。實際には、ブハリンは、結合の新形態に反對しているのである。ブハリンの出發點は、農業生産の再建のための助成手段としての工業發展の急テンポということではなくて、個人農經營の發展ということなのである。彼は、市場の『正規化』、市場において農産物の値段を自由に上下することを許容すること、即ち私的商業の完全な自由を許容するということを、最も主要なものともみなしているのである。黨中央委員會の七月總會におけるブハリンの演説、ならびに中央委員會七月總會に先だつて彼が起草したテーゼの中で述べられているところの、コルホーズに對する彼の不信任的態度はここから生れたのである。クラークに反對して、穀物調達に際して採られた、非常手段のありとあらゆる形態に對する、彼の否定的な態度は、ここから生れたのである。

ブハリンが恰も惡魔が魔除けの呪文をおそれると同じ様に非常手段をおそれているのは、周知のことである。

現在の條件下においてクラークは、自然の成行きにまかせておいては、自ら進んで十分な量の穀物を提供しないであろうということ、ブハリンが相も變らず理解できないということは、周知のことである。

このことは、わが穀物調達の仕事の上での、二カ年の經驗によつて、現在證明されている。

ところで、依然として、市場向の穀物が不足なときには、どうすればよいか？ ブハリンは、これに對して次のように答える。非常手段を講じなどして、クラークを驚愕させないでくれ給え、そして穀物は外國から輸入し給え、と。彼はつい最近、約五千萬ブロードの穀物を外國から輸入すること、即ち約一億金ルーブルを投じて穀物を輸入することを提案したのだ。だが、正貨は、工業の諸設備を輸

入するために必要だとすれば、どうなるか？ プハリンは、これに對して次のように答える。即ち、外國からの穀物の輸入の方に優先權を與えることが必要なのだ、と。明かに、工業の設備のための輸入ということは、ずっと後方に押しやられていたのである。

かくして、穀物問題の解決と、農業の再建とのための基礎となるものは、工業の急テンポ的發展ではなくて、自由市場、そして、市場における値段を自由に上下するということを基礎にしたところの、クラークの經營をも含めた個人農經營の發展であるということになるのである。

かくして、吾々は、經濟政策上における二つの異なる計畫をもつことになるのである。
黨の計畫。

一、吾々は工業を再装備（再建）する。

二、吾々は農業を眞剣に再装備（再建）することをはじめぬ。

三、そのためには、コルホーズとソフホーズの建設を擴張し、工業と農業との間に生産上の結合を樹立する手段として、豫約購入制度と機械・トラクター・ステーションとを、大規模に採用することが必要である。

四、現在の時機における穀物調達上の困難についていえば、クラークの反抗を擊破し、かつ穀物を外國から輸入せすにすませ、かつ工業の發展のために正貨を保全しておくために必要な、大量の剩餘穀物をクラークから取ることができるとして、中農と貧農との大衆の社會的支持を後楯とした一時的な非常手段の採用が許さるべきである、ということを確認することが必要である。

五、個人農としての貧農と中農との經營は、國に食料品と原料を提供するという點で有力な役割をつとめているし、また將來も、なおそれをつずけるであろうが、これだけでは、もはや不十分であ

る。即ち、それ故に、個人農としての貧農と中農との經營の發展は、農業から資本主義的要素を逐い出し、個人農經營を、大規模集團經營の軌道の上に、集團的勞働の軌道の上に、漸次に移行させることを容易ならしめるための、コルホーズとソフホーズとの發展、大衆的な豫約購入制度、機械・トラクター・ステーションを、急速に發展させることによつて、補足されることが必要である。

六、しかして、これらすべてを達成するためには、何よりもまず工業、即ち金屬工業、化學工業、機械製作工業の發展、トラクター製作工場、農業機械製作工場、等の發展を強化することがせひ必要である。これをせずには、穀物問題を解決することが不可能であり、また、農業の再建も不可能である。

結論。農業再建の鍵となるものは、わが工業の急テンポをもつてする發展である。

ブハリンの計畫。

一、市場の「正規化」、市場で値段を自由に上下することを許すこと、それから、工業製品、原料、パンの値段を高める結果になるかも知れないということなどは少しも顧慮せずに、穀物の値段を引上げること。

二、コルホーズとソフホーズの發展テンポを、或る程度まで緩めて、個人農經營をできる限り發展させること。(七月のブハリンのテーゼ、七月總會におけるブハリンの演説)

三、クラークに反對して向けられている非常手段は、たとえそれが、中農と貧農との大衆に支持されているものであるとしても、常に、またいかなる條件の下でもそれを部分的にさえ採用することを決してしないところの自然の成行きのままにまかせた穀物の調達。

四、穀物が足りない場合には、一億ルーブルほど投じて穀物を輸入すること。

五、しかして、穀物の輸入に對してもまた、工業のための設備の輸入に對しても、それに要する正貨が足りない場合は、工業のための設備の輸入を減らすこと、つまり、わが工業の發展テンポをも緩めることが必要である。でなければ、わが國の農業は、「同じ場所に足踏みする」ことになるであらうし、また、農業の「一直線の下降」となるであらう。

結論。農業再建の鍵となるものは、個人農經營の發展である。

同志諸君！ 以上の如きが、問題の真相である。

ブハリンの計畫は、工業の發展のテンポの引下げと、結合の新形態を破壊する計畫である。かくの如きが、吾々の間の意見の不一致なのである。

吾々は結合の新形態を發展させること、コルホーズ、ソフホーズを發展させること、等々のことをはじめのが、おそすぎはしなかつたか？ こういう質問が時々出される。

黨はこれらの仕事にとりかかることが、少なくとも約二年間おそかつたと主張している人達がある。同志諸君、これは正しくない。これは全然正しくない。ソ同盟の經濟については何も知らない「左翼」のどなり屋たちのみが、こんなふうにいることができるのだ。

このことにおいて、おくれたということは何を意味するか？ もしも、コルホーズとソフホーズの必要なことを豫見するということについて云々されているならば、吾々は十月大變單の時に、すでにこれに着手していた。黨が、十月大變單の時期に、すでに、コルホーズとソフホーズの必要なことを豫見していたということ、これには、いささかの疑いをもさし挟むことはできないのである。最後に、第八回黨大會（一九一九年三月）で採用されたわが綱領を例にとつてみてみよう。コルホーズとソフホーズの必要であるということが、その中では、極めて明白に考慮されている。

だが、わが黨の指導的上層幹部が、コルホーズとソフホーズの必要なことを豫見したということだけでは、コルホーズと、ソフホーズとをめぐす大衆的な運動を實現し、組織するためには、不十分なのである。したがつて、問題となるのは、豫見したとかせぬとかいうことにあるのではなくて、コルホーズ・ソフホーズ建設のプランが、實現されたかどうかということにあるのである。しかし、かゝるプランを實現するためには、現在までわが國には存在しなかつたところの、そして、最近になつてはじめて出現したところの、多くの條件が要求されるのである。

同志諸君、まずこういう譯なのである。

コルホーズとソフホーズをめぐす大衆的運動のプランを實行するためには、黨の上層指導部がこの事業において、黨員の大多數の支持を得るということが、何よりもまず必要である。そして、周知の如く、わが黨は、黨員百萬を數える黨である。したがつて、指導的上層部の政策の正しいことを、廣汎な黨員大衆に納得させることが必要であつた。これが第一の點である。

さらに、このためには、農民の内部で、コルホーズをめぐす大衆運動をおこし、農民がコルホーズを恐れずに、却つて、コルホーズが個人經營よりも優れたものであることを實際の経験によつて確信して、自らコルホーズに加入するようにさせることが必要である。そして、これは、一定の期間を必要とする重大な事業である。これが第二の點である。

さらに、このためには、國家がこの運動に、コルホーズの建設に必要な資金を與え、コルホーズとソフホーズに資金を與えるために必要な資金をもつことが必要である。そして、この事業のためには、親愛なる同志諸君よ、幾億ルーブルという經費が入用なのである。これが第三の點である。

最後に、このためには、機械、トラクター、肥料等々を、農業に供給するために必要な工業を、多かれ少なかれ十分な程度に發展させることが必要である。これが第四の點である。

吾々は、すでに、二―三年前に、これらの條件全部をもつていたと斷言することができらうか？否、これを斷言することはできない。

吾々は、支配している黨であつて、反政府黨ではない、ということをおぼえてはならない。反政府黨は、彼等が政權についた後に實現しようと思ふスローガン——私は運動の根本的實踐的スローガンに ついていつていっているのである——を掲げることが出来る。反政府黨が、その根本的スローガンを即時實現しないからといつて、反政府黨を非難できるものは誰もないのである。なせならば、政治の舵を操つてゐるのは、この黨即ち反政府黨ではなくて、他の黨だということを、みんなが知つてゐるからである。

わがボルシエヴィキ黨の如き、支配してゐる黨にとつては、問題は、全く異なつたふうになつてゐる。かかる黨のスローガンは、單なるアジ的スローガンではなくて、はるかにもつと多くの意義をもつものである。なせならば、これらのスローガンは、實際的決定に匹敵する力、法律に匹敵する力をもつてゐるからであり、これらは、今すぐに實行することを必要とするものだからである。わが黨は、實踐的スローガンを掲げ、しかる後、それを實現させることをするに延引させるようなことはできない。これは大衆を欺瞞することであるだろう。實際的スローガン、特に、幾百萬の農民大衆を、集團主義の軌道に移らせるというような、重大なスローガンを掲げるためには、これを眞直ぐに實現するための諸條件を有することが必要であり、最後に、これらの條件を創り上げ、組織することが必要である。だからこそ、吾々にとつては、黨の上層部がコルホーズとソフホーズの必要

を豫見するということだけでは、不十分なのである。だからこそ吾々には、吾々のスローガンをすぐに行い、實現するために必要な諸條件が、さらに必要なのである。

わが黨の黨員大多數は、例えば、二―三年前に、コルホーズとソフホーズを、あらゆる手段をつくして發展させるための準備ができていたであろうか？ 否、黨は、まだ、それに對する準備ができていなかった。黨員大衆の間における、結合の新しい形態の側への眞剣な轉換は、穀物調達における最初の重大な困難がおこつた時に、やつと始まつたばかりである。これらの困難は、黨員の大多數が、結合の新しい形態、そして、何よりもまずコルホーズとソフホーズの建設を強行すべきことの必要を、すべて感得するために、また、この事業上において、自己の黨中央委員會を、斷乎として支持するために必要なものであつた。かくの如きが、以前には吾々が有せず、現在實際に有しているところの一つの條件である。

二年或は三年ほど前に、コルホーズもしくはソフホーズのための、幾百萬農民大衆の眞剣な運動が、わが國にあつたであろうか？ 否、それはなかつた。二―三年前には、農民が、ソフホーズに對しては敵對的な態度を持ち、一方コルホーズをば、全く無用な『共產經營』として鼻であしらつたといふことは、だれでも知つてゐることである。だが、現在はどうか？ 現在では、すつかり事情は變つてゐる。現在、わが國にはソフホーズとコルホーズを、種子や、改良種の家畜や、機械やトラクターをもつて農民經營を援助してくれる源泉として見ている廣汎な農民層がすでにあるのである。現在では、ただ機械とトラクターさえ給與すれば、コルホーズ建設の事業は急速なテンポで前進するであろう。一定の、かなり廣汎な農民諸層の間におけるかかる急轉換は、どうして生じ得たのであろうか？ 何がこれに貢獻したのか？

それは、何よりもまず、協同組合と協同組合運動との發展である。協同組合、特に、コルホーズにとつて有利な心理的土台を農民の間に築き上げている農業協同組合の強力な發展なしには、現在、廣汎な農民層の中に見られるコルホーズへのこの關心を、吾々はもつていなかつたであらうということとは、疑うことのできないことである。

この點では、小規模農民經營を、大規模農民經營に、集團經營に合同し、いかに農業を改良することができるとかという良い模範を農民に示しているよく整備された諸コルホーズが存在するということもまた、非常に役立つのである。

經營の改善という點で、農民を援助しているよく整つたソフホーズが存在するということもまたこの點で役立つのである。すべての諸君によく知れ渡つている他の諸事實については、私はもはや述べない。かくの如きが、以前には吾々が有せず、現在、有じているところの、もう一つの條件である。

さらに、吾々は、二年或は三年ほど前に幾億ルーブルをそのために支出して、コルホーズとソフホーズとに十分に資金を供給する可能性をもつていたと斷言してもよいであらうか？ 否、そんなことを斷言することはできない。農業の再建についてはいうまでもなく、それがなくては、いかなる工業化も、一般に不可能であるところの、最少限度の工業を發展させるためにさえもわが國では資金が不足していたということも、諸君はよく知つている。國の工業化の基礎となるべき工業から、これらの資金を取り上げ、それをコルホーズとソフホーズの方へまわすなどということが吾々にできたであらうか？ できなかつたことは明かである。さて、現在はどうか？ 現在わが國は、コルホーズとソフホーズを發展させるための資金をもつてゐる。

最後に、吾々は二年或は三年ほど前に、機械、トラクター、等々を、農業へもつと多く供給するための十分な基礎を、工業においてもつていたと斷言してもよいであろうか？ 否、そんなことを斷言することはできない。その當時の任務は、將來において、機械やトラクターを農業に供給するために、最小限度の工業的基礎を築き上げることにあつた。當時わが國では、わが乏しい財源も、この基礎を築き上げることに費されたのであつた。では、現在はどうか？ 現在わが國は、農業のための基礎を築き上げることに費されたのであつた。いすれにしても、それは、この基礎そのものは、急速なテンポで、わが國において築かれつつあるのである。

コルホーズとソフホーズを大衆的に發展させるために必要な諸條件は、わが國では、最近にいたつてはじめて築きあげられたのだということになるのである。

同志諸君、事情はこのようになつているのである。

だからこそ、吾々は結合の新しい形態の發展におくれたと、いつてはならないのである。

へ、理論家としてのブハリン

わが政策上の基本的な諸問題における、右翼的反対派の理論家——ブハリン——の主要な誤謬は、大體においてかくの如きものである。

ブハリンは、わが黨における理論家の一人だといわれている。勿論、これは正しい。だが、問題は、彼の理論にはあやふやな點があるということだ。このことは、彼が黨の理論と政策の問題について、多くの誤謬を積みかさねているということによつても、知ることができるのであつて、これらの

誤謬を私はたつた今性格すけた。これらの誤謬、即ちコミンテルンの方針に關しての誤謬、階級闘争、階級闘争の尖锐化、農民、ネツプ、結合の新形態の諸問題に關しての誤謬——すべてこれらの誤謬は、彼にとつては偶然的なものたりえないであろう。否、これらの誤謬は偶然的なものではない。これら、即ちブハリンのこれらの誤謬は、間違つた彼の理論的見地から、彼の理論的欠陥から生じたものである。そうだ、ブハリンは理論家だ、だが、彼はマルクス主義的には不完全な理論家であつて、マルクス主義的理論家となるためには、もつともつと深く學ばなければならない理論家である。

理論家としてのブハリンについての、同志レーニンの周知な手紙が、よく世間で引用されている。この手紙を讀んでみよう——

「少壯中央委員のうちから、ブハリンとビヤタコフについて數言述べたいと思う。私の考
えでは、この兩人は、最も優れた人材（最も若い人材中での）であり、彼等に關しては、次の諸
點を考慮に入れておくことが必要であろう。即ちブハリンは、黨の甚だ貴重な大理論家で
あるばかりでなく、彼はまた、全黨に好かれてゐる者だと、正當にみなされている。だが、
彼の理論的觀點は、非常に大きな疑問符を附してのみ、完全にマルクス主義的なものとして扱
うことが出来るであらう。なせならば、彼は、何か煩瑣哲學的なものをもつてゐるからだ（彼は
一度も辯證法を學ばなかつたし、また一度も辯證法を完全に理解したことがないのだ、と私は思
う。）*とレーニンは述べてゐる。（一九二六年七月總會速記録、第四冊、六六頁）

* 傍點は私による。——イ、スターリン、

かくして、彼は、辯證法抜きで理論家なのだ。また煩瑣哲學者的理論家なのだ。その人の「理論的觀念は、非常に大きな疑問符を附してのみ、完全にマルクス主義的なものとして扱うことができるところの理論家なのである。かくの如きが、レーニンによつて與えられたブハリンの理論的相貌に對する性格すけである。

同志諸君、かかる理論家は、もつともつと自ら深く學ぶことが必要だということを、諸君自身理解している。そして、ブハリンは完全にはまだ完成した理論家でないこと、彼は、もつともつと深く學ぶことを必要としてゐること、辯證法こそマルクス主義の神髓であるのに、彼は辯證法をまだ習得していない理論家であること等を彼が理解してゐたならば——これを彼が理解してゐたならば、彼はもつと謙遜であつたであらうし、これによつて黨もまた、利益を得ただけであつたらう。だが、不幸なことは、ブハリンが謙遜的にならうと努力しないのだ。不幸なことは、彼が謙遜的にならうと努力しないのみならず、多くの問題について、何よりもまず、國家の問題について、吾々の師であるレーニンを教えようとさえし始めてゐることだ。同志諸君、この點にこそブハリンの不幸があるのだ。

一九一六年に起つたところの、國家の問題についてレーニンとブハリンとの間に行われた周知な理論的論争を、この機會において引證することを許されたい。これは、レーニンを教えんとしてゐるブハリンの法外な自惚と、そしてまた同じ様にプロレタリアートの獨裁、階級闘争、等々についての問題の如き、重要な問題上におけるブハリンの理論的弱さの根源をも暴露するために、吾々にとつて重要なのである。

周知の如く、雑誌「青年インターナショナル」に、事實上、同志レーニンに反對して書かれたブ

ハリソンの論文が、ノタベネの署名で一九一六年に掲載された。この論文の中で、プハリソンは次の如く書いてゐる——

「……社會主義者と無政府主義者との間の差異を、前者は國家の支持者であり、後者は國家の敵であるということに見出そうとするのは、斷然間違ひである。實際のところ、差異は、革命的社會民主黨は、中央集權的な、即ち、技術的に最も進歩的な、新しい社會的生產を組織したいと欲している。かかるに、地方分權的な無政府主義的な生產は、舊式な技術への、企業の舊形態への一步退却を意味するのみであらうということに歸着するのである……」

「……大衆の教育者であり、少くともそうでなければならぬ社會民主黨にとつては、今や、いかなる時期にも勝つて、國家に對していただいている自分の原則的な敵對性を強調することが必要である。……現在の戰爭は、國家觀念がいかに深く労働者の精神に根を下しているかを示した」。

プハリソンのこの見地を批判して、一九一六年に發表された周知の論文で、レーニンは次のようにいつてゐる——

「これは正しくない。この論文の筆者は國家に對する社會主義者の態度と無政府主義者の態度との差異はいかなる點にあるかと問題を立てておきながら、これに對してではなく、別の問題、即ち、將來の社會的經濟的基礎に對する彼等の態度の差異はいかなる點にあるかということについて答えている。これは、勿論、非常に重要にして、必要な問題である。だが、そうかといつて、國家に對する社會主義者と無政府主義者との態度の差異上における主要なもの、を、忘れてしまつてもよいということにはならない。社會主義者は、労働者階級の解放のための闘争におい

て、現代的國家とその諸機關を利用することを主張している。そして、丁度それと同様に、資本主義から社會主義へいたる獨特な過渡的形態のために、國家を利用することの必要をも主張している。やはり、一種の國家であるところの、かかる過渡的形態は、プロレタリアートの獨裁である。無政府主義者は、國家を「廢止し」、國家を「爆破する」(“Sprengen”)ことを欲している。

それはこの見解を社會主義者の有するものとして、間違つて記述している同志ノタベネが、ある箇所で言い現しているところのものである。社會主義者は——遺憾ながら、この論文の筆者は、この點に關係をもつているエンゲルスの言葉を、あまりに不完全に引用している——ブルジョアジーが收奪された後の、國家の「死滅」、漸次的「永眠」を認めるのである。……

「國家に對する「原則的な敵對性」を「強調する」ためには、眞に「明瞭に」この敵對性を理解しなければならぬ。しかるにこの論文の筆者には、少々の明瞭さもない。「國家觀念の根」についてのこの文句も、すでに全く混亂した、非マルクス主義的な、そして、非社會主義的な文句である。「國家觀念」が國家觀念の否定と衝突したのではなくて、日和見主義的政策(即ち、國家に對する日和見主義的、改良主義的、ブルジョアの態度)が革命的、社會民主主義的政策(即ち、ブルジョア國家に對する、またブルジョアジーを打倒するために、ブルジョアジー反對に國家を利用することに對する、革命的社會民主主義的態度)と衝突したのである。この二つのものは、全然、全く異なつたものなのである」。(レーニン全集、第一九卷、二九六頁)

ここで何が問題となつているか、また、ブハリンがいかなる半無政府主義的な水溜に落ちこんでしまつているかということは、多分これではつきりしたことと思う!

ステイン。レーニンは、その當時、國家を「爆破すること」の必要性を、まだ展開された形で定式

すけはしなかつた。無政府主義的な誤謬を犯しながらも、ブハリンは、この問題の定式すけに近すきつつあつたのだ。

スタトリン。否、今、問題となつてゐるのは、そのことについてではない。問題となつてゐるのは、國家一般に對する態度についてであり、ブハリンの意見によるところの、労働者階級は、労働者階級國家をも含む、あらゆる國家に對して、原則的に敵對せるものでなければならぬ、ということが、問題となつてゐるのである。

ステン。レーニンは、その當時、ブハリンに對する批判では、「爆破」については一言も述べず、ただ國家の利用ということについてだけ述べたのだ。

スタトリン。君は間違つてゐる。國家の「爆破」はマルクス主義的な定式ではなく、無政府主義的定式である。ここで問題となつてゐるのは、ブハリンの（そしてまた無政府主義者の）意見によるところの、労働者は、あらゆる國家に對して、したがつて過渡期における國家に對しても、即ち労働者階級の國家に對しても、自己の原則的な敵對性を強調しなければならぬということについてなのだということを、私は敢て君に斷言する。

労働者階級は、おなじく國家にちがいないところのプロレタリアートの獨裁に對して、原則的な敵對性をつよく懐いていなければならぬと、わが労働者達にまず説明を試みてみたまえ。

「青年インターナショナル」に掲載されたブハリンの論文中に述べられてゐるブハリンの見地はとりもなおさず、資本主義から社會主義への過渡期における國家を否定する見地である。

ブハリンは、この點で、「小さい事」を見落してゐる。即ち、もともと労働者階級が、ブルジョア階級を壓し潰し、社會主義を建設することを眞に欲するならば、労働者階級は、自分自身の國家なしには、どうしてでもやつてゆけない時である過渡期全部を彼は見落してゐるのだ。これが第一の點である。

第二の點は、同志レーニンが、その當時、彼の批判の中で、國家の「爆破」、一般的に「廢止」の理論に言及しなかつたというのは正しくない。そのことは、私が引證した引用文によつてもわかるように、レーニンはこの理論に言及しているのみならず、ブルジョアジーが打倒された後の新しい國家、即ち、プロレタリアート獨裁國家の形成と利用という理論を、この理論に對立させて、レーニンは、この理論を無政府主義的なものとして、こつびどくやつつけたのであつた。

最後に、國家の「爆破」と「廢止」という無政府主義的な理論を、プロレタリア國家の「死滅」またはブルジョアの國家機關の「打破」「粉碎」というマルクス主義的理論と混同させてはならない。ある者は、これら二つの異なる概念が同一の想念を言い現したものだと考えてこれらを混同しようとする方へ惹きつけられている。だが、これは正しくない。レーニンが、國家の「爆破」と一般的に國家の「廢止」という無政府主義的理論を批判した時には、彼は、實に、プロレタリア國家の「死滅」とブルジョアの國家機關の「打破」というマルクス主義的理論からこそ發足したのであつた。

問題をもつとはつきりさせるためには、おそらく一九一六年の終りか、一九一七年の初め（一九一七年の二月革命のときまで）かに書かれたにちがいないと思われる國家についての同志レーニンの原稿の一節を、私がここへ持ち出すとしても、無用なことではないであらう。この原稿によつて、次の諸點が容易に看取されるのである。即ち、

イ、國家の問題についてのブハリンの半無政府主義的誤謬を批判するにあたり、レーニンは、プロレタリア國家の「死滅」とブルジョアの國家機關の「打破」というマルクス主義的理論から發足したということ。

ロ、レーニンの言い現し方によれば、ブハリンは、「カウツキーよりは、眞理に少し近い」とはいえ、「依然として彼は、カウツキー一味を暴露する代りに、自己の誤謬によつて彼等を援助している」ということ。

次の如きが、この原稿の本文である——

「一八七五年三月十八日——二十八日付のペーペルに宛てた、エンゲルスの手紙は、國家の問題について非常に大きな重要性を有している。

次の如きが、最も重要な箇所の全文である——

「……自由な人民國家は、自由な國家になり變つてしまつた。これらの語の文法的意味に従えば、自由な國家とは、その國の市民に對する關係上で自由な國家、即ち專制政府を有する國家の如きをいうのである。國家についてのこのおしやべり一切を特に、本來の意味での國家ではすでになかつたところのコンミンの後に、おいては、やめてしまふべきであらう。かつては、ブルードンに反對したマルクスの著作、またその後の「共産黨宣言」が、社會主義的社會制度の實施と共に、國家は、自ら解體し(Sich auflöst)かつ消滅するということをも、明白に述べているとはいへ、無政府主義者達は「人民國家」ということによつて、あまりに多く吾々をいじめつけた。國家は、闘争において、革命において、自己の敵共を暴力によつて壓し潰すために利用さるべきほんの一時的な機關にすぎないのであるから、自由な人民國家について云々することは、全くのたわごとである。プロレタリアートが、まだ國家を必要としている。(傍點はエンゲルスによる)限り、プロレタリアートは、自由のためにはなく、自己の敵共を壓し潰すために國家を必要としているのであつて、自由について語ることが可能となるときには、國家は、かくの如き國家としては

存在しなくなるであらう。ゆえに、吾々は國家（傍點はエンゲルスによる）という語の代りに、「コンミュン」というフランス語に相當する「オプシチナ」（Gemeinwesen）という素晴らしい古いドイツ語をどこにでも用いることを提案したいものである」。

これは、マルクスとエンゲルスの著作中の、いわば「國家に反對している」おそらく最も素晴らしい、そして、おそらく最も辛辣な章句であらう。

一、「國家についてのおじやべり一切を、やめてしまふ必要のあること」。

二、「コンミュンは、すでに、本來の意味における國家ではなかつた」。（では、それは何か？ 國家から非國家へ移る過渡的形態であることは、明かなことだ！）

三、無政府主義者達は、「人民國家」ということによつて、吾々を十分「いじめつけた」（in die Zähne geworfener 文字通りに譯せば鼻つ面をこすきまわす意）。（即ち、マルクスとエンゲルスは、自分のドイツの友人達の犯した、この明白な誤謬を恥じたのであつた。だが、彼等は、この誤謬を無政府主義者達の誤謬とは、比較にならぬほど、あまり重要でない誤謬であると考へたのであつた。そして彼等は、その當時の情態としては、正しく考へたのだということもちろんである。この點、よく注意すること!!）

四、國家は、「社會主義的社會制度の實施と共に」、……………「自ら分解し（「解体」）（この點よく注意すること）かつ消滅する」……………（あとにある「死滅する」という語と對照されたい）。

五、國家は、「鬭争において、革命において」必要とするところの、「一時的機關」である……（プロレタリアートにとつて、必要なものであることはいふまでもない）

六、國家は、自由のためにはなく、プロレタリアートの敵を、押し潰す。(Niederhaltung) というのは、押し潰すという本來の意味ではなくて、それは再興を阻止し、従順にさせておくことである—ために必要なのである。

七、自由があるようになった時には、國家はないであろう。

八、「吾々は」(即ちエンゲルスとマルクス)、「國家」の代りに、「どこでも」(綱領の中で)「オブシチーナ」(Gemeinwesen)、「コンミュン」という言葉を用いることを提議したいものである!!

以上によつて、日和見主義者のみならず、カウツキーもまた、マルクスとエンゲルスをいかに卑俗化し、汚したかということを知ることができるのである。

日和見主義者は、これらの極めて内容の豊富な八つの想念のうちの一つさえも、理解しなかつたのだ!!

彼等は、ただ目の前の實際的に入用なもの、即ち、プロレタリアートを訓練し、教育するために、「讓歩を奪いとる」ために、政治的闘争を利用し、現代的國家を利用することのみをとり上げた。これは正しい(無政府主義者に反して)が、これはまだ、マルクス主義の百分の一——こんなふうには算術的な言い方をしてよいとすれば——たるにすぎない。

カウツキーは、宣傳者としての、また一般に著述家としての彼の仕事の上で、一、二、五、六、七、八の諸項と、マルクスの「Zerbrechen」とを全然抹殺(或は忘却)したのか? それとも理解しなかつたのか?—した。(一九一二年か一九一三年かにおけるパンネクツクとの論争にお

いて（後文四五―四七頁参照）、カウツキーは、この問題に關しては、すでに全く、日和見主義に轉落してしまつた）

吾々は、（甲）現在、國家を利用するということ、（乙）プロレタリアートの革命（「プロレタリアートの獨裁」）の時期に國家を利用するという點で、無政府主義者とは異なつてゐる。

——これらの項目は、實踐活動にとつて、今すぐ最も重要なものである。（これらのことをこそ、プハリンは忘れてしまつたのだ！）

吾々は、（イ）國家の「一時的」性質について、（ロ）現在、國家について「おじやべりすること」の有害なことについて、（ハ）完全な國家とは言われないプロレタリアート獨裁の性質について、（ニ）國家と自由との矛盾について、（ホ）國家に代る「オブシチーナ」のより正確な理念（概念、綱領上での術語）について、（ヘ）官僚主義的・軍事機關の「粉碎」（Zerbrechen）につづての、一層深遠な、「一層永遠な」眞理を有するという點で、日和見主義者とは異なつてゐる。

今一つ、ドイツの公然たる日和見主義者共（ベルンシュタイン、キヨルプ、その他）は、プロレタリアートの獨裁を率直に否定してゐるが、正式な綱領、そしてまたカウツキーは、日常の煽動においてはそれについて語らず、キヨルプ一味の裏切行爲を容認して、間接にこれを否定していることを忘れてはならない。

プハリンには、一九一六年の八月に、「國家についての君の考えを、「まともあげてほしい」と手紙を書いたのだつた。ところが、彼は、それをまとめあげてくれずに、「ノタ・ベネ」の名で出版物に乗り出し、カウツキー一味を暴露せずに、却つて、自分の誤謬によつて彼等を援

助するといふような風に、これを行つたのであつたけれども實際は、ブハリンは、カウツキーよりは、眞理に少し近いのである』。

以上の如きが國家問題に關する理論的論争の簡略ないきさつである。

問題は明白だと思われる。即ち、ブハリンは半無政府主義的誤謬を犯した。今やこれらの誤謬を匡正して、レーニンのあとに従うべき時である。だが、かういふふうを考えることができるのは、レーニン主義者のみである。ブハリンはこれに同意しないのだ。反對に、彼は誤謬を犯したのは彼でなく、レーニンが誤謬を犯したのであり、レーニンの後に従ひ或は従わなければならぬ者は彼ではなくて、反對に、レーニンが、ブハリンのあとに従うことを餘儀なくされるにいたつたのだと斷言している。

同志諸君、諸君はそんなことを信じないであらうか？ それではまず、もつと先きを聞いてくれたまえ。一九一六年に行われたこの論争の後、それから年を経ること九年、その間中ずつと、ブハリンは沈黙を守りつづけていたが、レーニンの逝去後、一年を経て、即ち一九二五年に、ブハリンは、「法の革命」といふ論文集へ『帝國主義國家の理論について』といふ論文を發表している。この論文は、かつて『社會民主黨員論集』の編集部によつて、（即ちレーニンによつて）發表することを拒絶されたものであつて、ブハリンは、この論文の註の中で、この論争において正しかつたのはレーニンではなくて、彼、即ちブハリンだつたのだと、はつきり聲明している。これはほんとうではないように見えるだらうが、同志諸君、これは事實なのだ。

この註の本文といふのをまづきいてくれたまえ——

『ヴェ・イ（即ちレーニン）は、「青年インターナショナル」誌に發表された論文を反駁する短評を書いた。私が犯したようにいわれている誤謬を、私が犯しているのではないということ

とを、讀者は容易に看取されるであらう。なせならば、私は、プロレタリアート獨裁の必要なことを、明確に理解しているし、他方、イリイチの短評によつて、彼が、その當時、國家（ブルジョア國家であることはいふまでもない）の「爆破」の問題を、プロレタリアート獨裁の死滅についての問題と混同して、國家の「爆破」の命題を不正に取扱つた*といふことが見られるからである。或は、その當時に、獨裁についての題目を、私は、もつと發展させるべきであつたかも知れない。だが、當時、社會民主黨がブルジョア國家を讚美するようなことが流行し、この情勢下においては、この機關の爆破についての問題に、一切の注意が集中されたのは當然なことであつたと、自己辯明のために私はいふことができる。

私がアメリカからロシアへ歸つてきて、ナデジユダ・コンスタンチノヴナ（クルプスカヤ）に會つたときに（これは、わが黨の非合法な第六回大會においてであつた。この時、ヴェ・イは、身を隠していた）、彼女がいつた最初の言葉は、「ヴェ・イは、國家の問題については、現在のところ、あなたと意見上で不一致な點がないことを、あなたに伝えるようにと頼んだ」といふことであつた。この問題を研究して、イリイチは「爆破」に對し同じ様な結論に到達したのだ*。しかして彼は、この題目を、そしてあとでは、獨裁についての教義を、この方面における理論的思想の發展上において、一時代を劃するほど發展させたのであつた。

レーニンの逝去後一年を経て、ブハリンは、レーニンについてこのように書いていたのである。これこそ、諸君の前におかれた生半可な理論家の僭越至極な自惚の見本である！
ナデジユダ・コンスタンチノヴナが、ブハリンがここで書いてるように、實際に、ブハリンに

* 傍點は私による。——イ・スターリン、

話したということも、全くあり得べきことである。だが、そうかといつて、このことからどんな結論がひき出されるか？ このことから結論されるのはただ一つ、即ちレーニンが、ブハリンが、自己の誤謬を放棄したか、或は放棄する覺悟ができていると考へうる、ある根據を有していたということだけである。後にも先にも、ただそれだけである。ところが、ブハリンは、これを別なふうにかへた。彼は、今後、マルクス主義的國家理論の創始者、もしくは、いずれにもせよ、その鼓吹者たるべきは、レーニンではなく、彼、即ちブハリンであるとみなさなければならぬと決めた。

今まで、吾々は、自分をレーニン主義者だとみなしていたし、またこれからも、そうみなしつづけるであらう。しかるに、今や、レーニンも、また、彼の弟子である吾々も、ブハリン主義者だということになつているのである。同志諸君、いささかおかしなことではないか。だが、ブハリンの尊大ぶつた自惚に直面しなければならぬとすれば、他にどうしようもないのである。

ブハリンは、上述の論文に對する註では、いいまちがつたのであり、彼は、馬鹿なことをうつかり言つたのであつたが、あとでそのことを忘れてしまつたのだと、考えることも出来るだろう。しかし、判明したところによれば、そうではないのだ。じつさいにおいてはブハリンはまったく眞面目にいつていたのだ。このことは、この註の中で彼が書いたところの、レーニンの誤謬と、ブハリンの正當なことについての聲明が、最近、即ち、レーニンに對するブハリンの最初の挑戦後二年を経た一九二七年に、マレツキーが書いたブハリンの略傳の中で、再び發表され、しかもブハリンは、マレツキーの、かかる……大膽さに對して、抗議しようとは、考へさえもしなかつたということによつても、よくわかるのである。レーニンに對するブハリンの反對行動を、偶然なものと考へてはならないことは、明かなことである。

かくして、正しいのはブハリンであつて、レーニンではなく、マルクス主義的國家理論の鼓吹者は、レーニンではなくて、ブハリンだということになるのである。

同志諸君、かくの如きが、ブハリンの理論的脱線と、理論的自惚の全貌である。

そしてこの人間は、こうなつてもまだ、わが黨の理論的見地の中には、「何か腐敗したものがあ
る」とか、わが黨の理論的見地の中には、トロツキズムへの偏向が存在するとかいうことを、ここで
の、自分の演説の中で、述べる大膽さをもつてゐるのだ！

そしてこれは、多くの重大な、理論的な、また實踐的な誤謬を犯してゐる（過去においても誤
謬を犯した）ブハリン、最近までトロツキーの弟子であつたブハリン、まだつい昨日まで、レーニン
主義者に反對するトロツキストとのプロツクを探し求め、裏口から、こつそり彼等のところへ急いで
いた、このブハリン自身が述べてゐるのだ！

さて、同志諸君、はたしてこれが、笑止千萬なことではないだろうか？

ト、五か年計畫か、二か年計畫か

今度は、ルイコフの演説に話を移そう。ブハリンが、右翼的偏向の理論的論證を與えようと試み
たとすれば、ルイコフは、彼の演説で農業の方面でのわが困難さという點から引き出した「恐慌」で
吾々をおどろかせて、この問題の下に、實踐的な提案の基礎を据えようと努力してゐるのだ。これ
は、ルイコフが理論的問題には言及しなかつたということを意味しはしない。否、彼は理論的問題に
言及したのだ。しかして理論的問題に言及した彼は、少くとも二つの重大な誤謬を犯したのだ。

黨中央委員會政治局の専門委員會が否決したところの、ルイコフの五カ年計畫についての決議草案の中で、彼は、「五カ年計畫の中心理念は、國民勞働生産能力の増大ということである」と述べている。黨中央委員會政治局の専門委員會が、この全然まちがった見地を、否決したにもかかわらず、ルイコフは、それをここで、自分の演説で擁護したのだ。

ソ、グ、エトの國における、五カ年計畫の中心理念は、勞働生産能力の増大であるということは、正しいだろうか？ 否、正しくない。吾々にとつて必要なのは、國民勞働生産能力の、あらゆる増大ではない。吾々に必要なのは、國民勞働生産能力の、一定の増大、即ち、國民經濟中の社會主義的部門を、その資本主義的部門に對して、系統的に優位ならしめることを保障するような、かゝる増大なのである。この中心理念を忘れてしまつた五カ年計畫は、五カ年計畫ではなくて、五カ年たわごとである。

一般的に言つた勞働生産能力の増大ということは、資本主義社會も、資本主義前の社會も、あらゆる社會が要望しているのだ。ソ、グ、エト社會が、他のあらゆる社會と異なつてゐるのは、この社會が、勞働生産能力のあらゆる種類の増大を要望しているのではなく、社會主義的經濟形態が、他の經濟形態に對して、何よりも先ず資本主義的經濟形態に對して、優位になることを保障するような、また、かくして、資本主義的經濟形態を克服し、逐い出すことを保障するような増大を要望しているといふことにこそあるのである。しかるに、ルイコフは、このソ、グ、エト社會發展の五カ年計畫の、眞の中心理念を忘れてしまつたのだ。この點に、彼の第一の理論的誤謬が存するのである。

第二の彼の誤謬は、彼が、商品流通の見地から、例えばコルホーズと、個人的資本主義經營をも含めたあらゆる個人經營との間に差異をつけないか、もしくは、その差異を理解することを欲しない

ということにある。ルイコフは、穀物市場における商品流通の見地から、また穀物を得るという見地から、彼はコルホーズと個人的な穀物所有者との間の差異をみず、したがって、彼にとつては、吾々が、コルホーズから穀物を買おうと、個人的所有者或は、誰れかアルゼンチンの穀物買占人から買おうと、おなじことだ、と斷言している。これは斷然正しくない。これは、穀物をどこで買おうと、だれから買おうと、個人商人から買おうとコルホーズから買おうと、彼にとつてはおなじことだ、と一時主張したフルムキンの周知な聲明のくり返しである。

これは、穀物市場におけるクラークの奸計の擁護、その名譽回復、かつ釋罪の偽裝形態である。この擁護が商品流通の見地からなされているというこの事實——この事實は、この擁護が、依然として、穀物市場におけるクラークの奸計の釋罪であるということに變りはないのである。もしも、商品流通の見地からいって、集團形態の經營と非集團形態の經營との間に差異がないとすれば、その時は、コルホーズを發展させる必要があるだろうか、コルホーズに諸特惠を與える必要があるだろうか、また、農業における資本主義的分子を克服するという困難な任務に従事する必要があるだろうか？ ルイコフが、正しくない立場をとつたということは明かである。この點に、彼の第二の理論的誤謬があるのである。

しかし、これは、序に言つたまでのことである。ルイコフの演説において提出された實際問題に移ろう。

ルイコフは、五カ年計畫の他に、もう一つ別な、並行的に行われる計畫、即ち農業發展のための二カ年計畫が必要だと、ここで斷言した。彼は、並行二カ年計畫についてのこの提案を、農業における困難ということによつて論證した。彼は次のように述べた。五カ年計畫は、實に結構なことで、彼も

これに賛成する。だが、吾々が、同時に、農業の二カ年計畫を制定するならば、もつとよいであろう。しからざる場合には、農業の事態は、暗礁にのり上げてだめになつてしまふであらう、と。

見たところ、この提案には、何もわるいところはないかのようである。だが、これをよく觀察してみるならば、農業の二カ年計畫といふことは、五カ年計畫が非現實的な、紙上の空文的な性質をもつものであることを強調せんがために案出されたものだということがわかるのである。吾々はこれに同意することができたであらうか？ 否、できなかったのである。吾々はルイコフに次のように話した。もし君が、農業に關する點で五カ年計畫に不満であり、また、農業發展のために五カ年計畫に支出されるであろう振當額が不足だと君が考えるならば、君の追加提案を君が考えていられる追加投資について、はつきりと言つてくれ給え、そうすれば、吾々は、農業へのこれらの追加投資を五カ年計畫にとり入れることに同意するであらう、と。その結果はどうであつたか？ ルイコフには、農業のための追加投資についての、何等の追加提案もなかつたことがわかつたのだ。では、結局何のための、農業並行二カ年計畫なのであるか？ という問題がおこる。

さらに、吾々は彼に次のように話した。五カ年計畫の他に、なお、五カ年計畫の部分をなす一年毎の計畫がある。ルイコフが、一般に、農業の高揚の方面に關する具體的な追加提案をもつていないならば、最初の二カ年における毎年の計畫に、君がもつてゐるその追加提案をとり入れようではないか、と。ところで、その結果はどうであつたか？ ルイコフは、提案すべき、追加振當額についてのかかる具體的な計畫をもつていないということがわかつた。

そこで、二カ年計畫についてのルイコフの提案には、農業の高揚ということではなくて、五カ年計畫が非現實的な、紙上の空文的な性質をもつものであることを強調しようとする希望、五カ年計畫

の聲望を失墜させようとする希望が考慮されているのだ、ということ^①を吾々はさとした。『良心を安んずる』ため、體裁をつくるためには五カ年計畫を、事業のため、實際活動のためには二カ年計畫を——これがルイコフの戰略なるものである。ルイコフは、あとで、即ち五カ年計畫を實際に實施する過程において二カ年計畫を五カ年計畫に對置し、五カ年計畫を編成しなおし、工業のための振當額を減少し削減して、五カ年計畫を、二カ年計畫に順應させんがために、二カ年計畫を舞台に登場させたのである。

これが、即ち、吾々がどんな考えをもつて、並行二カ年計畫についてのルイコフの提案を否決したかという理由である。

チ、播種面積についての問題

ルイコフは、ソ同盟全體に亘つて、播種面積は、系統的に縮少する傾向があると頑強に主張して、こゝで、黨を驚かした。それと同時に、彼は、播種面積の減少は、黨の政策の罪であるということ^②を仄めかした。彼は、わが國の農村經濟が頽勢にあるとははつきり言わなかつた。だが、彼の演説から受けた印象は、吾々が、何か頽勢に類するものを、實際に有しているというふうになつてゐる。

播種面積が系統的に減少する傾向があるということ^③は、本當であろうか？ 否、本當ではない。ルイコフは、ここで全國における播種面積の平均数を提示して論じた。地方別の資料によつて訂正されたものでない平均数による方法は、科學的方法とみなすことはできない。おそらくルイコフは、レーニンの著作『ロシアにおける資本主義の發達』をいつか讀んだことがあるであろう。もし彼が讀んでゐるとすれば、彼は播種面積の増加について平均数による方法を用いかつ地方別の資料を無視

しているブルジョア經濟學者を、レーニンが、この書の中でいかに罵つてゐるかを記憶してゐる筈である。ルイコフが、ブルジョア經濟學者の誤謬を、現在、繰返すなどということは、奇怪なことだ。ところで、播種面積の動きを地方別によく觀察してみるならば、即ち、科學的にこの問題を扱ふならば、ある地方では播種面積は系統的に増大しており、他の地方では、主として氣象上の條件に左右されて、播種面積は時々、低減していること、かつその上、重要な穀物産出地方のうち、たとえ一地方にしろ、播種面積が、系統的に減少しているような地方を、吾々がどこかに有してゐると言えるような資料はないということが、わかるのである。

事實上、冷害や旱魃の被害をうけた各地方、たとえば、ウクライナの若干の州の播種面積は近年、減少を示しているのである：

誰かの聲。ウクライナ全體ではない。

シユリフテル。ウクライナでは、播種面積は、二分七厘増加してゐるのだ。

スタトリン。私は、ウクライナの草原地帯のことをいつてゐるのである。しかし、他の諸地方、たとえば、悪い天候條件にも害されなかつたシベリア、ヴォルガ河流域、カザヒスタン、バシユキリアでは播種面積は系統的に増加してゐる。

ある地方では、系統的に播種面積が増加してゐるのに、他の諸地方では、播種面積が往々減少しているということは、何によつて説明できるだろうか？ 實際上、ウクライナにおける黨の政策は一つの政策であり、ソ同盟の東部或は中央部における黨の政策は、それとはまた異なつた別の政策なだと斷言することはできない。同志諸君、そんなことはナンセンスだ。この點では、天候上の條件とということが、少なからず重要な意義をもつてゐるといふことは、明かなことである。

天候上の條件とは何の關係もなしに、クラークが、播種面積を減らしているのはほんとうだ。この點では、多分、クラークに反對して、中農と貧農との大衆を支持している黨の政策の「罪」かも知れない。だが、それだからといって、どうだというのか？ クラークを含めた農村における社會的グループ全部を満足させることが出来るような政策を實行することを、かつていつか、吾々が引受けたことがあつたであろうか？ また概して、吾々が、マルクス主義的政策を實行することを一般に欲するならば、搾取者も、被搾取者も満足させ得るような政策を、果して吾々は實行することが出来るであろうか？ 農村における資本主義的分子に對する抑制と克服とを期待しているわがレーニン主義的政策の結果として、クラークが、自己の播種面積を部分的に縮少しはじめているとしても、何も殊更めずらしいことがあろうか？ はたしてこれとちがつたようになりようがあるであろうか？

この政策が正しくないのかも知れない。それなら、率直にそのことを、吾々にいつてくればよい。マルクス主義者と自ら稱している人達が、クラークがやつている播種面積の部分的な縮少を見て驚愕し、一般的な播種面積の減少であると主張しようとして一生懸命になり、クラークの他に、播種面積を擴張している貧農と中農がさらに存在していること、急速度をもつて播種面積の増加しているコルホーズとソフホーズが存在していることを忘れているとは、奇怪なことではないか。

最後に、ルイコフの演説には播種面積の問題に關して、もう一つの正しくないことがある。何處かで、即ち、コルホーズが最もよく發展しているような場所では個人農である貧農と中農との耕地が、減少しはじめているといつて、こゝで不平を漏らしている。この減少はほんとうのことだ。だが、この點で、どんなわいことがあるというのか？ またこれ以外になりようがあるだろうか？ もし貧農と中農との經營が個人的耕地を振りすてて集團經營の方へ移つて行くとすれば、コルホーズの擴張とそ

の数の増加ということは、それと共に、個人農である貧農と中農との耕地の減少を當然伴う筈だといふことは、明かなことではないか？　ところで、君はどんなことを望んでいるのか？

現在、コルホーズは二百萬ヘクタール（一ヘクタールは一町二五歩——譯者註）あまりの土地をもっている。五カ年計畫の終りには、コルホーズは二千五百萬ヘクタール以上の土地をもつてであろう。誰の持分を削減したためにコルホーズの耕地は増えて行くか？　個人農である貧農と中農との耕地を削減したためである。ところで、君は、どんなことを望んでいるのか？　貧農と中農との個人經營を、集團經營の軌道に移すためには他の方法があるだろうか？　コルホーズの耕地は、個人所有の耕地を犠牲にして、多くの地方において増えてゆくであろうといふことは、明かなことではないか？　こんな單純な事柄を、人々が理解することを欲しないのは奇怪なことだ。

リ、穀物調達について

わが穀物上の困難については、ここで、愚にもつかぬ話が散々しゃべりちらされた。だが、わが穀物についての時局的な性格をもつ困難のうちの主要な點は、見落されている。

何よりもまず吾々は、今年、らい麥と小麥を——私は、總收穫高について言っているのである——去年よりも五億乃至六億ブロード（一ブロードは一六・三八キログラム——譯者註）少く穫り入れたといふことを忘れてしまつてゐる。このことが、わが穀物調達上に反映せずにはすんだであろうか？　もちろん反映せずにはすまなかつた。

これは、黨中央委員會の政策の罪であろうか？　否、黨中央委員會の政策はそれには何のかかわりもない。これは、ウクライナの草原地帯における、極めてひどい不作（冷害と旱魃による）と北

カフカズ、中央黒土地方、西北部の諸州における部分的な不作とによつて、説明されるのである。

吾々が、昨年においては、四月一日までにウクライナで、二億ブードの穀物（らい麥と小麥）を調達したのに、今年は、僅に、二千六百萬乃至二千七百萬ブードの穀物しか調達しなかつたということも、主として、これらのことによつて説明されるのである。

また、中央黒土地方での小麥とらい麥の調達高が、殆ど八分の一に減じ、北カフカズでは四分の一に減じたということもこれらによつて説明されなければならない。

東部における穀物の調達は、若干の地方では、今年、約二倍に増加した。だがこれらは、吾々がウクライナや北カフカズや中央黒土地方において生じた穀物の不足を、補うことはできなかつたし、もちろん補いもしなかつた。

ウクライナと北カフカズが、正常な作柄であるときには、ソ同盟全體にわたつて調達される穀物全量の約半分を、調達していることを忘れてはならない。

ルイコフが、この事情を見逃しているということは、奇怪なことである。

最後に、わが穀物調達についての時局的な性格をもつ困難のうちの主要な點をなしている第二の事情について。私は、穀物調達についての、ソヴェト権力の政策に對する、農村のクラーク的分子の反抗ということ念頭においているのである。ルイコフは、この事情を回避した。だがこの點を回避するということは、穀物調達上の仕事における主要なものを回避することである。穀物調達上における最近の二カ年間の經驗は、何を物語つてゐるか？ それは、自己の手中にかなりな剩餘穀物をもつており、穀物市場で重大な役割を演じてゐる農村の富裕な層は、ソヴェト権力が決定した値段で、必要な量の穀物を、自ら進んで吾々に賣り渡すことを望んではいないということを物語つてゐる。吾々

は、都市と工業地點、赤軍と加工用植物栽培諸地方に穀物を保障するために、毎年、約五億ブードの穀物を必要とするのである。自然のなりゆきにまかせておいたのでは、吾々は、約三億乃至三億五千萬ブードを調達しうるだけであろう。そして残りの一億五千萬ブードは、農村のクラーク的層と富裕な層とに對して組織的な重壓を加えるという方法によつて、無理にも得なければならぬのである。かくの如きが、最近の二カ年間の、穀物調達の經驗が、吾々に物語つてるところのものである。

この二年間に、どんなことが起つたか、かかる變化の原因はどこにあるか、なせ、以前には自然のなりゆきにまかせておいてもよかつたのに、現在ではそれが不十分なものとなつたのか？ クラーク的分子と富裕な分子とが、これらの年々の間に成長し、豐作の幾年かは、彼等にとつて無駄ではなかつたし、彼等は經濟的に強固になり、小資本を蓄積して、今や彼等は、高値になるのを期待して剩餘穀物を自己の手に保留し、他の農作物を賣つて間に合はしなどとして、市場で思うままな駆引ができるようになった。

穀物はありきたりの商品であるとはみなすことはできない。穀物は食べることもできず、また誰れにでも賣るといふわけにはゆかないところの、棉花などはちがつている。棉花と異なつて、わが國現在の條件下における穀物は、だれでもがそれを欲しがり、かつそれなしには生存することができないというような商品なのである。クラークはこの點を考慮しており、かつクラークは、穀物の所有者一般にこの風潮を感染させて、穀物を手元にとどめておく。穀物が、正貨中の正貨であるということを知つては知つてゐる。剩餘穀物が、單に自己を富ますための手段であるのみならず、貧農を奴隸化するための手段でもあるということを知つてゐる。クラークは知つてゐる。クラークの手中にある剩餘穀物は、現在の條件下においては、クラーク的分子を、經濟的に、政治的に強くさせる手段である。それゆゑに、

クラークの手からこれらの剩餘穀物を取り上げるとすれば、都市と赤軍とに穀物を供給することが、吾々にとつて容易になるばかりでなく、クラークを經濟的に政治的に強化する手段を打ち壞すことにもなるのである。

これらの剩餘穀物を手に入れるために、吾々はどんなことをしなければならぬか？ 何よりもまず、自然の成行にまかせておこうとする心理作用を、有害にしてかつ危険なものとして根絶することが必要なのである。穀物調達活動を組織することが必要なのである。クラークに反對させて、貧農と中農との大衆を動員し、穀物調達を活潑ならしめるためのソヴェト權力の諸方策に對する彼等の公其的支持を組織することが必要なのである。自己の意志による課税の原則を實施した、ウラル・シベリアにおける穀物調達方法の意義は、この方法が穀物調達を活潑ならしめる手段として、クラークに反對して、農村の勤勞層を動員する可能性をあたえる、という點にこそあるのである。經驗は、この方法が、吾々に好結果を與えるものであることを示している。經驗は、これらの好結果が、わが國では二つの方向において得られるであろうということを示している。即ち、第一に、吾々は農村の富裕な層から剩餘穀物を取り上げて、それで國內の穀物供給を容易ならしめること、第二に、吾々は、この事業において、クラークに反對して貧農と中農との大衆を動員し、彼等を政治的に教育し、農村において幾百萬人を擁する自己の強力な政治的軍隊を、彼等をもつて組織すること、この二つの方向である。ある同志達は、この第二の事情を考慮していない。しかるに、この事情こそ、穀物調達におけるウラル・シベリアの方法での、最も重要な結果ではないまでも、重要な結果のうちの一つたるものである。

もつとも、この方法は、ブハリンとルイエフの滑稽な號泣を引き起しているところの、クラーク

に對する非常手段の採用と時々組み合わされている。だが、そうだといつて、どんな不都合なことがあるか？ 一定の條件下において、時々、吾々の階級敵クラークに反對する非常手段を適用しては、なせいけないか？ 都市で何百人という闇商人を逮捕し、彼等をトルハンスク地方に追放してもよいのに、パンの闇商賣を行い、ソヴェト權力の喉首を絞め、貧農を自己に隷屬させようと企んでいるクラークから、貧農や中農がわが穀物調達機關へ、穀物を賣渡しているのとおなじ値段で、社會的強制の方法によつて剩餘穀物を買取ることが、なせいけないのか？ そんな理窟がどこにあるか？ わが黨が、原則として、闇商人とクラークに對して非常手段を適用することに反對すると、かつて述べたことがあつたであらうか？ わが國においては闇商人に對する法規があるではないか？

ルイコフとブハリンは、明かに、クラークに對して非常手段を適用することにはどれにもみな、原則として、反對しているのである。だがこれは、正しく、ブルジョア・自由主義的政策であつて、マルクス主義的政策ではないのである。レーニンが、新經濟政策の實施のあとで、勿論一定の條件を附してではあるが、貧農委員會の政策への復歸にさえ賛成するといふ自分の考えを述べたことを、諸君が知らない筈はない。ところで、クラークに對する非常手段の部分的適用とは、はたして何か？ これは貧農委員會の政策に比べれば、大海中の一滴にさえもあたりはしないのだ。

彼等、即ちブハリンのグループの支持者等は、階級敵が自發的に自己の利益を放棄して、自發的に彼等の剩餘穀物を吾々に賣渡すように、彼等を説得することを希望している。彼等はまた、成長して來て、闇商賣を行い、他の農作物を提供して穀物の供出を脱れる可能性をもち、また自己の剩餘穀物を隠匿するクラークが、この同じクラークが、わが穀物調達のために決められた値段で、自發的に、彼等の剩餘穀物を吾々に手渡すであらうことを希望しているのである。彼等は氣が狂つたのではある

まいか？ 彼等が、階級闘争の真相を理解せず、階級とは何であるかを知っていないということ、明かなことではないか？

しかして、穀物調達を活潑にするためにつくられた村の寄合で、クラーク共が、わが働き手達やソヴェト権力を、いかに愚弄しているかを、彼等は知っているのであるか？ 例えば、カザヒスタンで生じたような事實、即ち、吾々の煽動員が、國に供給するために穀物を賣渡すように、穀物の持主を二時間に亘つて説得したときに、クラークは、煙管を銜えながら「オイ若者、一つ踊つて見せてくれ、そうすりやお前に、二ブード位の穀物をくれてやらあ」と彼に答えたというような事實を、彼等は知っているものであろうか？

誰かの聲。不屈な奴等だ！

スターリン。こんな人達を一つ説き伏せてくれ給え。

そうだ、同志諸君、階級は正に階級である。この眞理を曲げることはだれにだつてできはしない。ウラル・シベリアで用いられた方法は、それが、貧農層と中農層とをクラークに對して蹶起させることを容易にし、クラークの反抗を撃破することを容易ならしめ、彼等がソヴェト権力の機關に、剩餘穀物を賣り渡さざるをえないようにするというこの理由によつて、よい方法なのである。

現在、ブハリンのグループの人々の間で、最も流行している言葉は、穀物調達上における「やり過ぎ」という言葉である。この言葉は、彼等の日和見主義的な方針を偽装することを助けるので、彼等の間で最も人氣のある商品なのである。彼等が、自分の方針を偽装しようと欲したときには、彼等はいつでも次のようにするのである。もちろん吾々は、クラークに對して重壓を加えることに反對なのではないが、この領域において犯され、かつ中農をも刺戟するところのやり過ぎに、吾々は反對

なのである、と。さらに、話はこれらのやり過ぎの「恐ろしさ」についてすすめられ「農民」からの手紙が読みあげられ、マルコフに類する同志達からの、周章狼狽、なすところを知らずというような手紙が読みあげられ、さてその後、クラークに對して重壓を加える政策は、撤廢されることを必要とす、という結論が引き出されている。

正しい政策を實行するに當つてやり過ぎがあつたから、この正しい政策そのものを撤廢する、ことが、必要なのだ、ということになつたら、どうであらうか？ 正しい政策を實行するに當つて、やり過ぎがあつたということを経由して、この方針を撤廢し、これを日和見主義的方针ととり替える、というようなやり方が、日和見主義者の常套手段である。その上に、ブハリンのグループの支持者達は、もう一つ別の種類のやり過ぎ、もつと危険にしてみつと有害なやり過ぎ、即ち、クラークとの融合という方向への、農村の富裕な層への順應という方向への、黨の革命的政策を右翼偏向者の日和見主義的政策をもつて取り代えるという方向へのやり過ぎについては、注意深く沈黙を守つてゐる。

もちろん、吾々はみなこれらのやり過ぎに反對である。吾々はみなクラークに向けられた打撃が、中農を刺戟することに反對である。これは明白なことで、これについては、何らの疑いもないところである。だが、吾々はブハリンのグループが熱心に實行してゐるところの、やり過ぎについてのおしやべりによつて、わが黨の革命的政策を抹殺し、ブハリンのグループの日和見主義的政策をもつてこれに替えようとするには、斷乎として反對する。否、かれらの思うように、そうは問屋で卸さない。

いずれかのやり過ぎを伴わないような黨の政治的方策を、たとえ一つでもよいから、いつてみてくれ給え。この點からいつても、やり過ぎに對しては鬭争しなければならぬのである。だが、これを理由にして、唯一の正しい方針であるところの方針そのものを、非難してもよいであらうか？

七時間労働制の実施というような方策をとりあげてみよう。この方策が、最近において、わが黨が實行した最も革命的な方策の一つであるということには、一點の疑いをはさむこともできない。實質的に極めて革命的なこの方策が、わが國では、多くのやり過ぎを、時には最も厭うべきやり過ぎをひつきりなしに惹起していることを知らぬ者があろうか？ だからといつて、吾々は、七時間労働制の實施という政策を撤廢しなければならない、ということになるであらうか？

ブハリン反對派の支持者達は、穀物調達の仕事の上で生じたやり過ぎの事實を強調しながら、いかなる泥沼に彼等が落ちこんでいるかを、理解しているのであらうか？

四、右翼的偏向に對する闘争について

かくして、吾々は、理論の領域における、またわが黨のコミンテルンに對する政策と國內政策との領域における吾々の間の意見の不一致についての、主要な問題すべてを檢分した。以上に述べたところによつて、吾々の間には、單一方針が存在するというルイコフの聲明が、實際に適應しないものである、ということを知り得るのである。以上に述べたところによつて、吾々は事實上、二つの方針をもつてゐることを知り得るのである。一つの方針、それは黨の一般の方針であり、わが黨の革命的レーニンの方針である。もう一つの方針、それは、ブハリンのグループの方針である。この第二の方針は、幾分かは、ブハリンのグループの間に、思いもよらぬような、見解の混亂をもつてゐるという事により、またいく分かは、それが、この第二の方針が、黨内における比重が軽いために、あれこれ

と偽装することに憂き身をやつしているということによつて、まだ完全な形をとつてはいない。だがそれは、この方針は、見られる如く、とにかく存在しており、また、それは、黨の方針とは異なつた方針として、わが政策上の殆どすべての問題において、黨の一般の方針に對立している方針として存在しているのである。この第二の方針が、大體としての、右翼的偏向の方針なのである。

ブハリンは、彼の言葉によれば、わが黨の諸組織によつて「槍玉にあげられた」黨中央委員會政治局員三人の、「公民權剝奪の處刑」について述べた。彼は、黨が、三人の黨中央委員會政治局員、即ち、ブハリン、レイコフ、トムスキーを「公民權剝奪の處刑」にかけ、出版物上で、また會合において彼等の誤謬を批判しているのに、彼等、即ちこれら三人の政治局員は、沈黙を守ることが「餘儀なくされた」、ということについて述べた。

同志諸君、これらのことはすべて取るに足らぬ話だ。これは、右翼的偏向に對する黨の鬭争において、黨を弱らせようと企圖している自由主義者化した共産黨員のこじらえ言である。ブハリンによれば、彼と彼の友人達が右翼偏向者の誤謬に陥つているとしても、黨には、これらの誤謬を暴露する權利はなく、黨は右翼的偏向に對する鬭争を中止して、ブハリンと彼の友人達が、自分達の誤謬を放棄することが好ましくなるであらうその時期まで、待つべきである、ということになるのである。

ブハリンは、吾々にあまり多くを要求しすぎてはいないか？ 黨は彼のために存在するものであつて、彼が黨のために存在するのではないと、彼は考えているのではあるまいか？ しかし全黨が右翼的偏向に對する鬭争に動員され、困難に對して、斷乎たる攻撃をやつているときに、誰が彼に沈黙を守り、じつとおとなしくしていることを餘儀なくさせるのであるか？ なせ彼、ブハリンと彼の

親友達とは、現在右翼的偏向とそれに對する調停主義とに對して反對行動をおこし、かつ斷乎たる鬭争を實行しないのであろうか？　プハリンと彼の親友達が、それほどに困難ではないこの方策をとることを決心するならば、黨は彼等を歓迎したであらうということ、疑うことができる者が一人でもあるだろうか？　結局において、彼等にとつて必須なこの方策をとることを、どうして彼等は決心しないのであろうか？　自己のグループの利益を、黨と黨の一般の方針の利益よりも、彼等は重く見てゐるからではないか？　右翼的偏向に對する鬭争に、プハリン、ルイコフ、トムスキーが参加してゐないというようなことになつたのは、何人の罪であらうか？　三人の黨中央委員會政治局員の「公民權剝奪の處刑」云々についての話は、黨を黙らせ、右翼的偏向に對する鬭争をやめさせんがための三人の政治局員の、下手に偽装した企圖であることは、明かなことではないか。

右翼的偏向に對する鬭争を、わが黨の第二義的な任務とみなしてはならない。右翼的偏向に對する鬭争は、わが黨の決定的意義をもつ任務のうちの一つである。吾々が、もし自分自身の陣列内に、自分自身の黨内に、運動を指導し、プロレタリアートを前進させるところの、プロレタリアートの政治的參謀部内、もしも吾々が、この參謀部そのものの中に、黨の結束性を亂し、労働者階級を頽廢させ、わが政策を「ソヴエト的」ブルジョアジーの好みに適應させ、かくして、わが社會主義建設の困難に頭を下げさせようと企ててゐる右翼偏向者共を、自由に存在させ、自由に活動させておくならば、もしも吾々が、これら一切の事を許しておくならば、これは何を意味するだろうか？　それは、吾々が革命にブレーキをかけ、わが社會主義建設を頽廢させ、困難に負けて逃げだし、資本主義的分子に城を明渡すことを意味しはしないであらうか？

右翼的偏向に對する鬭争を拒否するということは、勞働者階級を裏切り、革命を裏切ることを意味するものであることを、ブハリンのグループは、理解しているであらうか？

右翼的偏向とそれに對する調停主義とを克服することなしには、吾々が直面している困難を克服することは不可能であるし、またこれらの困難を克服することなしには、社會主義建設の決定的成功を達成することも不可能だといふことを、ブハリンのグループは理解しているであらうか？

こうなつてくると、結局三人の中央委員會政治局員の「公民權剝奪の處刑」云々というあわれっぽい言葉にどんな價値があるであらうか？

否、同志諸君、「公民權剝奪の處刑」云々についての自由主義的なおしやべりでは、ブハリン一派は黨をおどろかせることはできないだらう。黨はわが黨の全中央委員と共に、同一隊列内にあつて、右翼的偏向とこれに對する調停主義とに對して斷乎たる鬭争を行うことをかれらに要求する。黨は、勞働者階級を動員する活動を容易ならしめ、階級敵の反抗を擊破し、わが社會主義建設上における困難を斷乎として克服することを組織せんがために、これをブハリン一派に要求するのである。

ブハリン一派が、黨のこの要求を遂行するならば、そのときこそ、黨はかれらを歡迎するであらう。もしもかれらがこれを遂行しないならば、そのときには、己れ自身を責めるがよい。

偉大なる轉換の年

——十月革命第十二周年記念日に際して——

過去の一年は、社會主義建設の全戰線における偉大なる轉換の一年であつた。この轉換は、都市並に農村の資本主義的分子に對する、社會主義の決定的攻勢という旗印の下に行われてきたし、また現在もそれを續けている。この攻勢の特徴は、この攻勢がすでに、わが國民經濟の社會主義的建直の基本的領域において、幾多の決定的な成功を吾々にあたえたという點にあるのである。

このことによつて、黨はネツプの初期の諸段階におけるわれわれの退却を、あとで、ネツプのその後の諸段階で轉換を組織し、資本主義的分子に對して効果的な攻勢を實行するために、適宜によく利用できたということになるのである。

レーニンは、ネツプの實施に際して、次のようにいつた——

「吾々は今、退却している。それは恰もあとすさりしているようだが、吾々は、まずはじめに退却し、そのあとで、前方へ疾驅して、一層大きく走り跳びするために、退却しているのである。ただこの條件の下においてのみ、……退却の後に、最も頑強な前進攻撃を開始するために、

わがネツプの實施にあつて、吾々は後退したのであつた」。(レーニン全集、第二七卷、三六一—三六二頁)

過去一年間の總結果は、黨がレーニンのこの決定的意義を有する指示を、その仕事の上で成功裡に遂行したことを、一點の疑う餘地もなく物語っている。

* * *

吾々にとつて、決定的意義をもつている、經濟建設の方面における過去一年間の總結果をとりあげてみるならば、この戰線におけるわが攻勢の成功、過去一年間におけるわが成果は、三つの基本的な要因に歸着させることができるであらう。

一、労働生産能力の領域において

最近一年間のわが建設における、最も重要な事實の一つは、吾々が、労働生産能力の領域において、決定的な轉換を達成できたという事實であるということ、はたして疑うことができるであらうか。この轉換は、社會主義建設の戰線における、労働者階級の幾百萬という大衆の創造的、創造性と強力な労働の高揚との進展擴大という點において表現された。この點に、過去一年間におけるわが第一の、そして基本的な成果があるのである。

大衆の創造的、創造性と労働の高揚との進展擴大は、次の如き、三つの基本的線によつて促進されている。即ち、

イ、大衆の労働の創意性と労働の積極性とを縛りつけている官僚主義に對する——自己批判の方法による——闘争の線によつて。

ロ、無斷缺勤者とプロレタリア的労働規律の違反者に對する——社會主義競争の方法による——闘争の線によつて。

ハ、生産上における舊習墨守と不活潑とに對する——連續操業週間制*の實施による——闘争の線によつてである。

その結果として、吾々は労働戦線上において、巨大な成果を収めている。それは廣大無邊なわが國のいたるところにおける、労働者階級の幾百萬という大衆の間の労働に對する熱中と労働上での競争という形態によつてである。そして、この成果の意義は、眞に評價しがたいほどのものである。なせならば、幾百萬大衆の労働の高揚と労働に對する熱中のみが、労働生産能力の、この累進的増大を保障することができるのであり、これなしには、わが國における、資本主義に對する社會主義の終極的勝利ということは、考えられもしないからである。

レーニンは次のようにいつている——

「労働生産能力、これは、結局において、新しい社會制度が勝利するために、最も重要な、最も主要なものである。資本主義は、農奴制度の下においては見ることもできなかつたような、労働生産能力を創り上げた。資本主義は、終極的に征服されるし、また終局的に征服されるで

*この制度の下においては、企業（機關）は、毎日休むことなく働くが、労働者は、順々に五日目毎に休日と與えられるといふ労働制度である。——譯者註

あろう。それは、社會主義が、新しい、遙かに高度な勞働生産能力を創り上げるだろうからである。』（レーニン全集、第二四卷、三四二頁）

以上のことから出發して、レーニンは次のように考へている――

「吾々は、この勞働に對する熱中、勞働に對する意志、頑強さによつて貫かれなければならぬ。即ち、勞働者と農民を救済するための最も迅速な手段、國民經濟の救済手段は、現在では、この點にかかつていたのである。』（レーニン全集、第二五卷、四七七頁）

過去の一年は、黨が、この途上に横たわつてゐる困難を斷乎として克服しつつ、この任務を成功の中に遂行してゐることを示した。

過去一年間における黨の第一の重要な成果についての問題は、このようになってゐるのである。

二、工業建設の領域において

黨のこの第一の成果と切り離す事のできない關係をもつて、黨の第二の成果が存在してゐる。それは、即ち黨のこの第二の成果は、吾々が過去の一年間に、重工業の基本的建設のための、蓄積の問題を、大體、好都合に解決することができたこと、生産手段の生産の發展を、急速度で行い、かつわが國を金屬工業の國に轉化させるための前提を創り上げたということにあるのである。

この點に、過去一年間における吾々の第二の、そして基本的な成果があるのである。

輕工業の問題には、特別な困難さはない。吾々は、それを數年前にすでに解決してしまつた。もつと困難であり、かつもつと重要な問題は、重工業の問題である。

重工業は巨額の投資を要求するがゆえに、かつまた、工業の點でおかれている國々の歴史が示しているように、重工業は巨額の長期借款なしには、濟ますことができないから、一層困難なのである。

重工業が發達せずには、吾々は、如何なる工業も建設を完成することができないし、如何なる工業化も實行することができないから、一層重要なのである。

しかも、吾々は長期の借款も、幾分なりとも長期に亘るクレジットも受けなかつたし、また受けでもないのです、この問題の深刻性は、吾々にとつては餘りにも明瞭なことである。

吾々が、自分自身の力では、蓄積の問題を手際よく處理できないであらうし、重工業再建設の問題で失敗し、そして彼等に對して膝を屈し、彼等の奴隷とならざるをえなくなるであらうと想像して全世界の資本家共が吾々に借款とクレジットをあたえることを拒否しているのは、實にこのことを根據にしているのである。

しかして、過去一年間の總結果は、この點について、吾々に何を物語つてゐるか？ 過去一年間の總結果の意義は、これらの總結果が資本家紳士諸君の考えていたことを、粉微塵に破砕してゐるということである。

過去の一年は、ソ同盟に對する明らさまな、そしてまた、覆われた形での財政的封鎖にもかかわらず、吾々は、資本家の奴隷にもならなかつたし、また自分自身の力で蓄積の問題を成功裡に解決し、重工業の基礎を据えつけたということを示したのであつた。このことは、現在では、勞働者階級の不俱戴天の敵といえども、否定することはできないであらう。

事實、第一に、去年における大規模工業への投資額が十六億ルーブル以上であり、しかもその中の約十三億ルーブルが重工業に投資されたとすれば、今年度の大規模工業への投資額は、三十四億ルーブル以上であり、しかもそのうちの二十五億ルーブル以上は、重工業に投資されるであろう。また第二に、大規模工業の生産總額が、去年一年間に二割三分増加し、しかもそのうち、重工業の増加は三割であつたが、今年の大規模工業の生産總額は三割二分増加し、しかもそのうち、重工業の増加は四割六分でなければならぬとすれば、重工業の建設を完成するための蓄積の問題はすでに吾々にとつて克服できない困難さではないといふことは、明かではないか。

吾々が舊來のテンポを飛び越し、かつわが國「古來の」おくれを後におきざりにして、わが重工業の發展の方向へ急步調で前進していることを、どうして疑うことができるであろうか？

以上すべて述べてきた後で、五カ年計畫に豫定されたことが、過去の一年において凌駕されたこととなり、ブルジョア三文文士達が「到底實現不可能な幻想」だとみなしており、かつわが右翼日和見主義者達（ブハリンのグループ）を震え上らせた五カ年計畫の最上案は事實上五カ年計畫の最小限案に轉化してしまつたといふことは、いままさら驚くべきであろうか？

レーニンは次のようにいつている——

「ロシアを救ふといふことは、農民經營で良い收穫が得られるといふことだけではない——これだけではまだ不十分だ——また、農民に日用品を提供している輕工業の状態が良好だといふことだけでもない——これだけでもまだ不十分である——吾々には重工業もまた必要なのである。……重工業を救ふことなしには、それを復興させることなしには、吾々は一つの工業といえども、建設を完成できないであろうし、また、工業なしには概して吾々は獨立國としては滅亡して

しまうであろう。……重工業は國家からの補助金を必要とする。吾々がこの補助金を見出さない時には、吾々は文明國家としては——社會主義國家としてはいうまでもないが——滅亡してしまふであらう」。〔レーニン全集、第二七卷、三四九頁〕

以上の如きが重工業の建設を完成するための蓄積の問題と黨の任務の問題とを、レーニンがいかに手厳しく言いあらわしているかを示すものである。

過去の一年は、黨が、この途上にあるありとあらゆる困難を、みんな斷乎として克服しつつ、この任務を、成功裡に遂行していることを示した。

勿論このことは、工業が、これ以上、重大な困難にであわないうことを意味してはいない。重工業の建設を完成するという任務は蓄積の問題にのみ據りかかっているのではない。この任務は、なおカードルの問題に、即ち、

イ、ソヴェト的精神をしつかりともつ技術家と専門家を、何萬人も社會主義建設の事業に引き入れること。

ロ、労働者階級の人々の中から、あたらしい、赤色技術家と赤色専門家を養成することという問題に據りかかっている。

もそも、蓄積の問題が、大體において、解決されたものとみなすことができるならば、カードルの問題は、まだ解決されることを、待ちわびている問題である。しかして、カードルの問題は、現在、工業の技術上における再建設という事情の下においては、社會主義建設のための決定的意義をもつ問題なのである。

レーニンは次のようにいつている——

「吾々にとって不足なるものは、主として文化性と行政上の技能とである。……經濟的に、また政治的に、ネツプは、社會主義經濟の土台を建設完成する可能性を吾々に完全に保障している。問題は、プロレタリアートとプロレタリアートの前衛との教養ある人材ということ「のみ」にあるのである」。――（レーニン全集、第二七卷、二〇七頁）

ここで問題となつてゐるのは、何よりもまず「教養ある人材」の問題、一般には、經濟的建設のための、特殊的には、工業の建設と管理とのための、カードルの問題についてである。

しかして、これによつて、重工業にとつて本質的意義をもつてゐる蓄積の領域において、極めて大きな成果があるにもかかわらず、カードルの問題が解決されないうちは、重工業の建設完成の問題を、完全に解決されたものとみなしてはならないということになるのである。

ここにおいて、黨の任務は、カードルの問題とガツチリと取つ組みあい、どんなことがあつても、この城塞を乗つ取つてしまふということになるのである。

過去一年間における黨の第二の成果に關する問題は、以上の通りである。

三、農業建設の領域において

最後に、最初の二つの成果と有機的關連をもつてゐる、去年一年間の黨の得た第三の成果について。問題は、小規模の、おくれた個人經營から、大規模で先進的な集團的農業へ、土地の協同耕作へ、機械・トラクター・ステーションへ、新しい技術に據りどころをえてゐるアルテリ、コルホー

ズへ、最後に、何百というトラクターとコンバインが備えつけられている巨大ソフホーズへの、わが國農業の發展上における根本的な轉換についてである。

この點で、黨の得た成果は、吾々が多くの地方で、舊式な資本主義的發展の道から、即ち、一握りの金持・資本家だけが利得をえて、大多數の農民は、零落していつまでも貧窮な生活を忍んでゆかねばならなかつた道から、新しい社會主義的發展の道へ、即ち、金持・資本家をおつぱり出し、中農と貧農が、貧窮とクラークの奴隸たることから、土地の協同耕作、集團的耕作の廣道へ脱け出せるように、彼等を新式に裝備し直し、新農具で裝備し、トラクターや諸農業機械で裝備する道へ、農民の基本的大衆を方向轉換させることができた、ということである。

黨の得た成果は、吾々が、到底信じ難いほどの困難にもかかわらず、また、クラークや僧侶から、偏狭な人達や右翼的日和見主義者にいたるまでの、ありとあらゆる一切の暗黒勢力の、死物狂いの反抗にもかかわらず、この根本的な轉換を、農民そのものの内部で組織し、貧農と中農との廣汎な大衆を自己のあとについてこさせるようにすることができた、ということである。

次に二——三の數字を示そう。

一九二八年におけるソフホーズの播種面積は、百四十二萬五千ヘクタール（一ヘクタールは一町餘——譯者註）で、そのうち市場向穀物の產出高は、六百萬ツェントネル（一ツェントネルは一〇〇キログラム——譯者註）以上（三千六百萬ブード以上）であり、コルホーズの播種面積は、百三十九萬ヘクタールで、そのうち、市場向穀物の產出高は、約三百五十萬ツェントネル（二千萬ブード以上）であつた。

一九二九年には、ソフホーズの播種面積は百八十一萬六千ヘクタールで、そのうち市場向穀物の產出高は、約八百萬ツェントネル（約四千七百萬ブード）であり、コルホーズの播種面積は、四百二十

六萬二千ヘクターで、そのうち市場向穀物の產出高は、約一千三百萬ツェントネル（約七千八百萬ブード）であつた。

來るべき一九三〇年においては、ソフホーズの播種面積は、統制數字によれば、たぶん三百二十八萬ヘクターを算するであらう。そのうち市場向穀物產出高は一千八百萬ツェントネル（約一億一千万ブード）でなければならず、コルホーズの播種面積は確に一千五百萬ヘクターを算し、そのうち市場向穀物產出高は、約四千九百萬ツェントネル（約三億ブード）を算する筈である。

換言すれば、來るべき一九三〇年においてはソフホーズとコルホーズの市場向穀物の產出高は四億ブード以上、即ち農業全體の市場向穀物產出高（農村外において賣買される穀物）の五割以上でなければならぬのである。

吾々の認めなければならぬことは、かかる暴風のごとき發展のテンポは、その發展のテンポが、總じて、猛烈な振幅をもつて特徴とするわが社會主義化された大規模工業においてさえ、見られないほどのものであつた、ということである。

わが若い、大規模な社會主義的農業（コルホーズとソフホーズの農業）が、偉大な將來をもつてゐるといふこと、また奇蹟的な成長を示すであらうといふことは、明かなことである。

コルホーズ建設の領域におけるこの前代未聞の成功は、多くの原因によつて説明されるが、これらの原因のうち少なくとも、次の諸點を指摘しなければならぬ。

この成功は、何よりもまず、黨が、協同組合運動を普及することによつて、農民大衆をコルホーズに徹底的に引き入れつつ、大衆教育のためのレーニン主義的政策を實行してきたことによつて、説明されるのである。この成功は、運動よりも先き走りし、かつコルホーズの發展を、一片の布告に

よつて強制的に行おうと企圖する者（「左翼的」な、徒らに大言壯語する輩）に對しても、また、黨を後へ引つぱり戻し、運動の尻尾にとり残されるようにしようとする者（右翼的なならしめない愚劣な輩）に對しても、黨が成功の中に鬭争を遂行したことによつて、説明されるのである。かかる政策をとることなしには、黨は、コルホーズ化運動を、農民自身の眞に大衆的な運動に變えてしまふことは、できなかつたであらう。

レーニンは次のようにいつている――

「ペトログラードのプロレタリアートと、ペトログラード守備隊の兵士とが權力を奪取したときに、彼等は、次のことを非常によく心得ていた。即ち、農村における建設事業は、大きな困難に遭遇するであらうということ、したがつて、農村では、もつと漸進的に物事を行わなければならぬこと、農村で、土地の公共耕作を、布告で、法規で實行しようと試みることは、甚だしく馬鹿げたことであつたらうということ、農民のうちの極く少数の先覺者は、これに同意し得たであらうが、大多數の農民は、この任務を念頭にもおいてはいないということ、これらをよくよく知つていた。そして、それ故に、吾々は、革命の發展のために、絶対に必要なことだけに局限した。即ち、如何なる場合にも、大衆の發展に先走りすることなく、これらの大衆自身の經驗によつて、彼等自身の鬭争によつて、前進の運動が発生するまで待つてゐることであつた」。――（レーニン全集、第二三卷、二五二頁）

コルホーズ建設の戦線上で黨が非常な大勝利を獲得することができたとすれば、それは、黨が、レーニンのこの戦術的指示を、精確に遂行したからである。

この成功は、農業建設の事業におけるこの前代未聞の成功は、第二に、ソヴェト權力が、新式農

具に對する、新技術に對する農民の需要が、日一日と増大していることを、正當に考慮したということによつて、また、ソヴェト權力が、土地耕作の舊式な形態をそのままにしておいては、農民の狀態は絶對によくなくなる見込みのないことを正當に考慮し、かつ、これらすべてを考慮して、農具の賃貸所、トラクター隊、機械・トラクター・ステーションによつて、土地の公共的耕作を組織することによつて、コルホーズを創設することによつて、最後に、ソフホーズの力によるあらゆる方面から農民經營への援助ということによつて、農民に對する援助を適時に組織したということによつて、説明できるのである。

勤勞農民大衆に、系統的な、そして、長期に亘る生産上の援助を與える覺悟と能力のあることを、實際に證明したところの權力、即ちソヴェト權力が、人類の歴史上においてはじめて世の中に出現した。

昔から農具の缺乏で苦しまされている勤勞農民大衆が、コルホーズ化運動の道に立つて、この援助にかじりつかなければならなかつたということは、明かなことではないか？

また、「農村に注意を向けろ」という勞働者の古いスローガンは、今後、おそらく「都市に注意を向けろ」というコルホーズ農民の新しいスローガンによつて、補足されるであらうということも、はたして驚くべきことであらうか？

この成功は、コルホーズ建設の事業におけるこの前代未聞の成功は、最後に、わが國の先進的勞働者が、この事業を自分達の手に引きうけたことによつて、説明できるのである。私は、わが國の主要な諸地方へ散らばつて行つた何十、何百という勞働者隊のことを考慮していつているのである。コルホーズ化運動のための、すでに現存せる、また將來に得られるであらうすべての宣傳者達の中で、勞働者の宣傳者は、農民大衆の間における最良の宣傳者であるということ認めなければならぬ。勞

働者達が、個人的な小規模經營に比べて、大規模の集團經營がずっと優れているものであることを、農民に納得させることができたということ、況んや、現存するコルホーズとソフホーズとが、この優れている點をまざまざと示している、はつきりとした實例であるということは、はたして驚くべきことであろうか？

これこそ、コルホーズ建設の領域において得た吾々の成果が、私の考えでは、最近の數年間における全成果のうちでの、最も重要な、そして決定的な意義をもつと思われる成果が、成長したところの土壤なのである。

四萬乃至五萬ヘクターを擁する大規模の穀物農業工場を組織することの可能なことと、時宜に適切なものであることに反對した「科學」の反對論は、粉々に崩壊し、粉碎されてしまった。實踐が、「科學」に學ばなければならぬばかりでなく、「科學」が實踐から學んだところで、ちつともさじつかえのないことを、いま一度示して、實踐は「科學」の反對論を論破した。

資本主義諸國では、大規模の巨大穀物農業工場がしつかりと根を張ることなどはありえない。だが、わが國は社會主義國である。この「小さな」相違を忘れてはならない。

そこでは、資本家のところでは、多くの地所を買い取ることなしに、或は絶對地代を支拂うことなしには、大規模の穀物農業工場を組織することはできない。それは、生産に龐大な經費を負担させざるをえないのである。なせならば、そこでは、土地の私有制が存在しているからである。だが、反對にわが國には、絶對地代なるものも、地所の賣買ということも存在してはいない。そしてこのことは、大規模穀物農場の發展のための、有利な條件を創り出さざるをえないのである。なせならば、わが國には、土地の私有制がないからである。

そこでは、資本家のところでは、大規模穀物農場は、最大限の利潤を得るということ、或はいずれにしても、いわゆる利潤の平均規準額に相當するだけの利潤を得るといふ自己の目的を有しており、それがなければ一般的にいつて、資本は穀物農場組織の事業に關わりあうことを利益とはしていない。反對に、わが國では、また同時に國家經營でもあるところの大規模穀物農場は、その發展のために最大限の利潤も、平均規準額の利潤も必要とはせず、却つて最小限の利潤に自ら制限することがのであつて、ときには、何らの利潤もなしにすませることがのできるのである。そしてこのことは大規模穀物農場の發展にとつての、有利な條件をまた更につくりあげるのである。

最後に資本主義の下においては、大規模穀物農場のために、これというほどの特惠あるクレジツトも、これというほどの特惠ある租税制度も存在していないが、一方、社會主義的部門の支持を期待できるソヴエト制度の下においては、かかる特典が存在しているし、また將來も存在するであろう。

尊敬すべき「科學」は、このこと一切を忘れてしまつたのである。

次の諸點についての、右翼日和見主義者達（ブハツンのグループ）の主張は、粉々に崩壊し、粉碎されてしまつた。即ち、

（イ）、農民はユルホーズへは行かないだろうということ

（ロ）、ユルホーズ發展のテンポを速めることは、大衆的な不満と、勞働者階級と農民の間の裂目とをひき起さうるだけであるということ

（ハ）、農村における社會主義的發展の「大道」たりうるものは、ユルホーズではなくて、協同組合であるということ

（ニ）、ユルホーズの發展と農村の資本主義的分子に對する攻勢とは、國を穀物なしにさせてしまふであらうということ、これらである。

これらはすべて古いブルジョア自由主義的がらくたと同様に、完全に崩壊し、粉砕されてしまつた。

第一に、農民はコルホーズに入つた。村全體、郷全體、郡全體がコルホーズに入つた。

第二に、大衆的コルホーズ化の運動は、結合を弱めはせず、却つてそれに新しい、生産的基礎を與えて、強化している。農民の基本的な大衆の間に、何らかの重大な不満があるとすれば、それはソヴェト權力のコルホーズ政策に對してではなく、ソヴェト權力が農民へ機械とトラクターを供給するということにおいて、コルホーズ化運動の成長に追いつけないということについてであることを、現在盲人でさえも見ているのである。

第三に、農村の社會主義發展の『大道』についての論争は、アイヘンワルドやスレブコフ型の生若い小ブルジョア自由主義者共に相應した煩瑣哲學的な論争である。大衆的なコルホーズ化の運動がまだなかつた間は、『大道』は協同組合の初歩的な形態、即ち、購買協同組合と販賣協同組合とであつたが、協同組合の高度の形態、即ち、協同組合のコルホーズ的形態が舞台に登場しはじめたときには、コルホーズの形態が、發展の『大道』になつたということは、明かなことである。

農村の社會主義的發展の括弧なしの大道たるものは、初歩的なもの（購買並に販賣協同組合）から高度のもの（生産的コルホーズ的協同組合）にいたるまでの、農業協同組合の全形態を包含しているところの、レーニンの協同組合計畫である。コルホーズを協同組合に對立させることは、レーニン主義を愚弄し、自分自身の無智を裏書きすることを意味している。

第四に、農村の資本主義的分子に對して攻撃にでることをせずには、またコルホーズ化とソフホーズ化の運動を發展させることなしには、今年獲得できたような穀物調達の仕事における決定的な

成功も、すでに國家の手に蓄積された絶對に流用することを許さない何千萬ブードという穀物貯藏も、現在、吾々は有していなかつたであろうといふことは、いまでは盲人でさえも見ているのである。

なおその上にコルホーズ化とソフホーズ化の運動が成長したことによつて、吾々は穀物危機から完全に脱出しつつあるか、でなければすでに脱出したといふことを、確信をもつていふことができるのである。そして、コルホーズとソフホーズとの發展が急速なテンポで進んで行くとするれば、ざつと三年後には、わが國は世界最大の穀物産出國とまではならないまでも、最大の穀物産出國のうちの一つになるといふことを、疑う理由は少しもないのである。

現在のコルホーズ化運動における新しいものとは何であるか？ 現在のコルホーズ化運動における新しい、決定的な意義をもつものは、農民が以前のように、個々のグループによつてではなく、村全體、郷全體、地區全體、そして管區全體さえがコルホーズへ加入しつつあることである。

しかしてこれは何を意味するか？ これはコルホーズへ中農が入りだしたことを意味する。この點に、過去一年間におけるソヴェト權力の最も重要な成果であるところの、農業の發展上における根本的轉換の基礎があるのである。

勞働者階級は、社會主義建設の事業において、農民の基本的大衆を自ら指導する能力がないといふトロツキズムのメンシエヴィキ的『概念』は、粉々に崩壊し、粉碎させられてしまつてゐる。現在では盲人でさえも、中農がコルホーズの側に轉じて來たことを見ている。現在では工業と農業との五カ年計畫は、社會主義社會の建設完成の五カ年計畫であり、わが國における社會主義の建設完成の可能性を信じない人々は、わが五カ年計畫を祝す権利がないといふことはすべての人々に明かである。

ソ同盟に資本主義を復舊させることを夢想している、世界各國の資本家共のもつてゐる最後の希

望、即ち、「私有財産制の神聖な原則」は崩壊し、壊滅している。資本家から資本主義のための土壌を肥やしている材料と見なされている農民は、「私有財産制」という讚美された旗幟を、大衆的に投げすてて、集團主義の軌道に、社會主義の軌道に移行している。資本主義復舊に對する最後の希望は崩壊しつつある。

とりわけこのことによつて、舊世界の全勢力を、攻勢にでてゐる社會主義に反對して蹶起させようとするわが國の資本主義的分子の死物狂いの企圖が、また階級闘争の尖鋭化に導いてゐる企圖が説明されるのである。資本は社會主義に「成長伸入する事」を欲しないのである。

このことによつても、ストルューヴェとヘッセン、ミリュコフとケレンスキー、ダンとアブラモヴィッチ等のあらゆるこれら鎖につなされた資本の番犬共が、ボルシェヴィズムに反對して猛り狂つて吠え出したことが説明されなければならぬ。資本主義復舊に對する最後の希望が消滅しつつあるということは、決して冗談ごとではないのである。

階級敵のこの狂氣じみた猛獸さと、資本の下僕共のこの激しい吠聲とは、黨が、社會主義建設の最も困難な戦線において、決定的な勝利を、眞に獲得したことによつてでなくして、他の如何なるものによつて證明することができるであらうか？

レーニンは次のようにいつてゐる——

「公共的、集團的、協同的、アルテリの土地耕作の優越してゐることを、農民に事實上で示すことに成功できるような場合にのみ、また協同的、アルテリの經營の方法によつて農民を援助することに成功できるような場合にのみ、その時にのみ、自己の手に國家權力を握つてゐる勞働者階級は、眞に、自己の正當さを農民に證明し、眞に、幾百萬という農民大衆をがっちりと、かつ本當に自分の側にひきつけることができるであらう」。 (レーニン全集、第二四卷、五七九頁)

かようにレーニン等は、幾百萬の農民を労働者階級の側にひきつける方法についての、またホルトゾ建設の軌道に農民を移行させる方法についての問題を、立てているのである。

過去の一年は、黨がこの道に横たわるありとあらゆる困難を斷乎として克服しつつ、この任務を、成功のうちに處理していることを示した。

レーニンは次のようにいつている——

「中農は、共產主義社會において、吾々が彼等の生活の經濟條件を樂にし、改善するであろうときのみ、吾々の側に來るであらう。もしも吾々が、明日にも最高級のトラクター十萬台を提供し、それにガンソンを供給し、これらのための連轉手を供給できたならば（諸君は、現在のところでは、こんなことは幻想だということをよくよく知つている）、中農は、「俺はコンムニアに賛成だ」（即ち、共產主義に賛成のこと）というだろう。だが、これらのことを實行するためには、まず初めに、國際ブルジョアジーに對して勝利しなければならないし、またブルジョアジーにこれらのトラクターを吾々に提供するように強制しなければならぬし、それとも吾々自身がこれらのトラクターを提供できるようになる程、吾々の生産能力を高めないければならぬのである。このようにこの問題をたてることのみが、正しいであらう。」（レーニン全集、第二四卷、一七〇頁）

かように、レーニンは、中農を技術的に再裝備する方法について、また彼等を共產主義の側へひきつける方法についての問題を、立てているのである。

過去的一年は、黨がこの任務をも、成功のうちに處理していることを示した。來る一九三〇年の春には、吾々は、耕地に六萬台以上のトラクターを、その一年後には十萬台以上のトラクターを、そし

てさらに二年後には、二十五万台以上のトラクターをもつに至るであろうということは、周知のことである。すなわち、二——三年前には「幻想」だと考えられたことを、今やわれわれは、おまけをつけて、現實なものに轉化させる可能性をもっているのである。

ここにこそ、中農が「コンムニア」の側へ轉向してきた原因があるのである。

黨が得た第三の成果に關する問題は、かくの如くなつているのである。

以上の如きが、過去一年間において黨が得た、主要な成果なのである。

結 論

吾々は、わが國永年來の「ロシア的」おくれを、おきざりにして、工業化の道を、即ち社會主義に向つて、全速力で進んでゆくのである。

吾々は、金屬工業の國、自動車の普及した國、トラクターの普及した國となるのである。

そして自動車にソ同盟を乗せ、トラクターに百姓を乗せるであらうときに、自己の「文明」を負っている尊敬すべき資本家共に、吾々に追いつくように試みさせてみるがよい。このときに、諸國のうちのどんな國々がおくれた國だと「規定」され、どんな國々が先進國だと「規定」されるであらうかを、吾々はまず見物するとしよう。

一九二九年十一月三日。

一九二九年十一月七日付「プラヴダ」第二五九號。

ソ同盟における農業政策の問題について

——一九二九年十二月二十七日におけるマルクス主義者・農業問題専門家の會議における演説——

同志諸君！ 現在におけるわが社會・經濟生活の基本的な事實、一般の注意を惹いている事實は、コルホーズ化運動のすばらしい成長という事實である。

現在のコルホーズ化運動の特徴點は、これまでのように、コルホーズへ貧農の個々のグループのみが加入するのではなく、中農も、大衆的にコルホーズに加入とはじめたということである。このことは、コルホーズ化運動が、勤勞農民の個々のグループ、個々の狭い層の運動から、何百萬何千萬という農民の基本的大衆の運動に轉化したということを意味している。就中このことによつて、強力な、日毎に成長増進する反ク、ラクト的、雪崩の押しよせるような性格をもつにいたつたコルホーズ化運動が、自己の進む途上において、クラークの反抗を掃除し、クラーク層を撃破し、農村における廣汎な社會主義建設のための大道を、開拓しているという、この極度の重要な事實が説明されることもなるのである。

だが、吾々は、社會主義建設の實踐活動上における成功を誇り得る根據をもつてゐるとしても、一般的には經濟の領域における、特に農業の領域における、わが理論的活動の成功について、同じ様なことをいうことはできないのである。なおその上、理論的思想が、わが實踐上の成功におくれずについてゆけず、われわれは實踐上の成功と理論的思想の發展との間に、ある裂目をもつてゐることを認めなければならぬ。しかしてまた、理論的活動は、實踐的活動におくれずについて行くのみではなく、社會主義の勝利をめざす彼等の鬭争のために、わが實際活動家を武装させて、實踐的活動の先驅をすることが必要なのである。

理論の意義については、私はここで述べない。このことは、諸君が十分よく知つておられることである。もしも理論が、眞の理論であるならば、理論は、實際活動家に、方向を決める能力、はつきりした見透し、活動における確信、わが大業の勝利に對する信念を與えるといふことは周知のことである。すべてこれは、わが社會主義建設事業において、巨大な意義をもつてゐる。——また、またないわけにはゆかないのである。不幸なことは、特にこの領域において、わが國經濟問題の理論的研究の領域において、吾々が跋を引きはじめてゐるということである。

わが國には、わが社會的的政治的生活において、また、わが國の經濟問題に關して、各種のブルジョアのまた小ブルジョアの理論が、依然として流布されてゐるという事實は、これ以外の何をもつて説明することができるか？これらの理論と小理窟が、當然な反撃を今まで受けていないといふことは、何によつて説明されるか？また、ブルジョアの理論と小ブルジョアの理論に對する最も信頼すべき解毒劑であるところのマルクス主義的・レーニン主義的政治經濟學の多くの基本的命題が、忘れられはじめ、わが出版物上で普及化されず、何故か前面に押し出されないとすることは、何をもちて説明されるか？マルクス主義的・レーニン主義的理論を基礎として、ブルジョアの理論と徹底的に闘

争を行うことなじには、階級敵に對して、完全な勝利を獲得することの不可能であることを、理解するのは困難なことであろうか？

新しい實踐は、過渡期における經濟の諸問題に對するあたらしい取り扱ひ方を生み出している。ネツプについて、階級について、建設のテンポについて、結合について、黨の政策についての諸問題はいまや、新たなふうに立てられている。實踐におくれないためには、現在直に、これらの問題全部を、新しい情勢の見地から研究することが必要である。こうすることなじには、わが實踐活動家達の頭腦を濁しているブルジョアの理論を克服することは不可能である。こうすることなじには、頑固な偏見になりつつあるこれらの理論を、根こそぎにしてしまふことは不可能である。なぜならば、理論上のブルジョアの偏見との闘争によつてのみ、マルクス主義・レーニン主義の陣地の鞏固化を達成することができるからである。

理論と名づけられているこれらのブルジョアの偏見のうち、せめて二——三のもの性格すけに移り、かつ、わが建設についての二——三の中心問題に照らして、これらの偏見がいかにかに不健全なものであるかを、事實によつて證明することにしよう。

一、「均衡」論

諸君は、共産黨員の間に、わが國民經濟部門の間の、いわゆる「均衡」論が、今にいたるまで流布されていることを勿論知つておられる。勿論、この理論は、マルクス主義とは、何等の共通點をももっていない。だが、それは、この理論をそのものは、右翼偏向者陣營の多くの人達によつて宣傳されているのである。

この理論によれば、吾々は、何よりもまず、社會主義的部門——これは一種の箱である——をもつており、またこの他に、吾々は、非社會主義的部門、——お好みならば資本主義的部門といつてもよいが——これはまた別の箱である——をもつていと假定されている。これらの二つの箱は、兩方ともそれぞれ異なつた軌道に乗つており、お互同志、ぶつつかり合うことなしに、平和的に前へ運ばれて行くのである。幾何學上、平行線が決して出合わないということは、周知のことである。ところが、この素晴らしい理論の創案者は、いつかは、この平行線は出合うであろうし、そしてそれが出合うときに、吾々は社會主義を持つことができるであろうと考へてゐる。しかして、この理論は、いわゆる「箱」の背後には階級があり、そして、これらの「箱」の運行は、激烈な階級闘争、即ち生きるか死ぬかの闘争、「誰が誰に勝つか」の原則上に立つての闘争の下に行われるものであることを見逃がしてしまつてゐる。

この理論が、レーニン主義とは何らの共通點をもつていないということとは、理解し易いことである。この理論が、個人農經營の立場を固守し、クラーク的分子がコルホーズに對して闘争を行うにあつて、「新式」の理論的武器をもつて、彼等を武装し、コルホーズに對する信用を害することを、事實上、自己の目的としてゐることは、理解し易いことである。

だがそれは、この理論は、今にいたるまで、わが出版物上に流布されている。しかも、この理論が眞剣な反撃に出あつたともいえないし、いわんやわが理論家達の側からの激烈な反撃に出あつたとはなおさらいえないのである。この不合理さを、わが理論的思想のおくれということによらずして、他の何をもつて説明することができ得るであらうか？

しかして、この部門間の均衡論を一點の痕跡をも残さぬまでにやつつけるためには、マルクス主

義の寶庫から再生産の理論を取り出して、これを部門間の均衡論に對立させるだけでよいのである。事實、再生産についてのマルクス主義的理論は、現代の社會は年々に蓄積されて行くことなしには發展することができず、しかしてまた、年々の擴張再生産なしには、蓄積するということは不可能だということを教えている。このことは、明白なことであり、わかりきったことである。わが大規模の集中化された社會主義工業は、擴張再生産についてのマルクス主義的理論に従つて發展している。なせならば、社會主義的工業は、年々、その大きさの點において成長し、その蓄積をもち、最大速力で前進しているからである。

だが、わが大規模工業は、國民經濟全部を包括してはいない。反對に、わが國民經濟において、まだまだ小規模な農民經營が優位を占めているのである。わが國の小農經營は、擴張再生産の原則によつて發展しているといつてもよいだろうか？ 否、そんなことをいうことはできない。わが國の小農經營は、その大多數において、毎年擴張再生産を實現していないのみならず、反對に、わが國の小農經營は、單純な再生産さえ實現する可能性を常に有してはいないのである。擴張再生産を行う能力をもたず、しかも、わが國民經濟における主勢力となつている小農經營の如き農業を基礎としていながら、わが社會化された工業を、もつと速められたテンポで前進させることができるであろうか？ 否、そんなことはできない。多少とも長期にわたつて、ソヴェト權力と社會主義建設とを、二つの異なる基礎の上に、即ち、最も大規模な、合同統一された社會主義工業の土台と最も分散的な、時代おくれの小商品生産的農民經營の土台との上に、基礎を築きあげることができるであろうか？ 否、そんなことはできない。こんな状態は、おそかれ早かれ、國民經濟全體を、完全に崩壊させてしまうこととならなければならない。

では、出路はどこにあるか？ 出路は、農業を大規模なものにし、農業をば、蓄積と擴張再生産とを行う能力あるものにし、こうして、國民經濟の農業的基礎を改革することにある。

だが、どんなふうにして農業を大規模にすればよいか？

そのためには二つの道がある。農業に資本主義を植えつける方法によつて、農業を大規模にさせる資本主義的道、農民を貧窮に導き、農業における資本主義的企業の發達に導く道が存在する。この道を、吾々はソヴェト的經濟と相容れない道として排斥している。

別の道、即ち、農業にコルホーズとソフホーズを建設するところの社會主義的道、小農經營を、技術と科學とによつて裝備されさらに發展する可能性を有する大規模の集團經營——なせならばこれらの集團經營は擴張再生産を實現じうるから——へ合同統一させる方へ導いている道が存在する。

したがつて、問題は、次のように立てられている。即ち、この道をとるか、あの道をとるか、資本主義への後退か、社會主義への前進か、と。いかなるものにするか、第三の道というものはないし、またあり得ないのである。

「均衡」論は、第三の道を追い求めんとする企てである。そして、この理論が、第三の（實在しない）道を期待していたという理由によつてこそ、この理論は、空想的な、反マルクス主義的な理論なのである。

このように、この部門間の「均衡」論を一點の痕跡をも残さぬまでにやつつけるためにはこの理論に、マルクスの再生産論を對置するだけでよいのである。

それだのになせ、わがマルクス主義者・農業問題専門家達は、これをしないのであろうか？

笑止千萬な「均衡」論が、わが出版物上で幅をきかせているのに、マルクス主義的再生産論が、棚の上に全く置き忘れられているなどということが、一體、誰に必要なのであろうか？

二、社會主義建設における「自然發展」論

政治經濟學における第二の偏見、即ち、第二のブルジョア式理論に移ろう。私は、社會主義建設事業における「自然發展」論、マルクス主義とは何らの共通點もないが、右翼陣營において、熱心に宣傳されている理論のことを考慮してあるのである。

この理論の創案者達は、ざつと、次のように斷言している。即ち、わが國には資本主義が存在し、資本主義的基礎の上に産業を發展させた。ところで一方農村は、資本主義的都市の形態と同じ様に自己を改造して、自然發生的に、自然發展的に、資本主義的都市のあとからついて行つたのだ。もしも物事が、資本主義の下で、こんなふうに行進したとするならば、ソヴェト經濟の下においてもどうしてこれと同じ様に行われ得ないということがあろうか？ また農村は、小農經營は、社會主義的都市の形態と同じ様に自然發生的に自己を改造して社會主義的都市のあとから、自然發展的にくついで行く事が、どうしてできないことがあろうか？ と。この理論の創案者達は、これを根據として、農村は自然發展的に、社會主義的都市のあとから、くつついてゆくことができると斷言している。ここから次のような問題がおこつてくる。即ち、もしも農村がこんなふうには社會主義的都市のあとからくつついてゆくことができるとすれば、吾々はソフホーズやコルホーズを創設することに熱中する價值があるだろうか？ 吾々は、これについて、一生懸命になつて論争する價值があるだろうか？ これこそが、もう一つの理論、即ち農村の資本主義的分子がコルホーズに對して闘争するにあつて、彼等の手に新しい武器を與えることを事實上自己の目的としている理論なのである。

この理論の反マルクス主義の本質ということについては、いささかの疑う餘地もないのである。

わがコルホーズの仕事に従事している實際活動家達の頭腦を濁しているこの奇妙な理論をわが理論家達が未だ徹底的にやつつけようともしなかつたということは、奇怪なことではないか？

小農・個人經營的な農村に對する社會主義的都市の指導的役割が、偉大なものであり、評價がたいほどのものであることは、疑いのないことである。この點にこそ、農業に對して改造を行う工業の役割が、築きあげられているのである。だが小農經營的な農村が、社會主義建設の事業において、自然に都市のあとからくつついてゆくためには、この要因で十分であろうか？ 否、不十分である。

資本主義の下においては、農村は自然發生的に都市の後からくつついて行つた。なせならば、都市の資本主義的經濟と、農民の個人小商品生産的經濟とは、その根本においては、同一型の經濟だからである。もちろん、農民の小商品生産經濟は、まだ資本主義的經濟ではない。だが、それは、生産手段の私有制に立脚しているがゆえに、その根本において、資本主義經濟とは同一型である。ブハリンのパンフレット『過渡期における經濟學』についての評言の中で、プロレタリアートの『社會主義的傾向』に對立するものとして「農民の商品生産的・資本主義的傾向」について語つているレーニンは、絶對に正しい。(傍點はレーニンによる——イ・ス・スターリン)。これによつてこそ、「小規模生産は、資本主義とブルジョアジとを、不斷に、毎日毎時間、自然發生的に、大量的に生み出している」(レーニン)ということも説明されるのである。

小商品生産的農民經濟も、その根本において、都市における社會主義的生産と同一型のものであるといつてもよいであろうか？ マルクス主義から逸脱することなしには、そんなことをいうことはできないということは、明かなことである。でなければ、「吾々が小農の國に生活している間は、ロシアにおける資本主義にとつては、共生主義にとつてよりも、もつと鞏固な經濟的土台があるのである」とレーニンは述べなかつたであろう。

したがって、社會主義建設事業における「自然發展」の理論は、腐つた、反レーニンの理論なのである。

したがって小農經營的な農村が、社會主義的都市のあとからくつついて行くためには、社會主義の基礎として、社會主義的都市を先頭に立てて、農民の基本的大衆をひきいてゆくことのできる、大規模の社會主義的經營を、ソフホーズとコルホーズの形態において、農村に植えつけることが、何にもまさつて必要なのである。

したがって、社會主義建設事業における「自然發展」の理論は、反マルクス主義的理論である。社會主義的都市は、小農經營的な農村を自己の後にひきいてゆくことができる。そしてそれは農村にコルホーズとソフホーズとを植えつけ、農村を新しい社會主義的調子に改造してゆくことによつてのみ實現されるのである。

社會主義建設における反マルクス主義的「自然發展」論が、わが理論家である農業問題専門家側からの、當然な反撃に、いまにいたるまで出會つていないということは、奇怪なことである。

三、小農經營の「安定性」についての理論

政治經濟學における第三の偏見、小農經營の「安定性」についての理論に移ろう。小規模經營に對する大規模經營の優越性についてのマルクス主義の有名なテーゼが、あたかも工業にとつてのみ効力をもつており、農業には適用されないものであるかのように言つて、ブルジョア政治經濟學がそれに異議をとなえていることは、周知のことである。この理論を説教しているダヴィッドやヘルツ型の

社會民主黨の理論家達は、これを説教するに當つて、小農は根氣強く、我慢強く、自分のちつばけな土地を固守するためだけに、どんな艱難をも自分の身に引きうける覺悟をもつているという事實、また、これがために、農業における大規模經營との闘争においては、小農經營は、安定性を示しているという事實に『立脚しよう』と試みている。

かかる『安定性』が、あらゆる非安定性にくらべて悪いのだということは、理解し易いことである。この反マルクス主義的理論が、ただ一つのこと、即ち、何百萬という小農大衆を零落させる資本主義的制度を讚美し、鞏固にすることのみを自己の目的としてしているものであることは、理解し易いことである。そして、この理論がかかる目的をもつているからこそ、實にそれだからこそ、マルクス主義者は、かくも容易に、この理論を論破することができたのである。

だが現在問題となるのはこの點についてではない。問題は、われわれの實踐活動、われわれの實際的事情が、この理論に反對する新しい論據を與えているのに、わが理論家達は、奇妙にも、この新しい武器を、労働者階級の敵に對して利用することを欲しないか、或は利用できないということにあるのである。私は、わが國における土地私有制の根絶の實踐活動、土地國有化の實踐活動、小農を、彼等のちつばけな土地に對して彼等がいだいてる盲目的な執着のきずなから解放し、そうすることによつて、小規模の農民經營から大規模の集團的經營に移行することを容易ならしめるところの實踐活動ということを考えていつていたのである。

事實上、何が、西歐における小農を、彼等の小商品生産經濟に、過去においても、また現在においても、縛りつけており、なお將來までも縛りつけるであろうか？ それは何よりもまず、そして、主として、自分のものであるちつばけな土地が存在しているということであり、また、土地の私有が

存在しているということである。小農はちつぽけな土地を買うために、長い年月、金銭を貯蓄した。そして小農はこのちつぽけな土地を買った。小農は、土地を買った以上は、ただ自己のちつぽけな土地を固守するためだけに、即ち小農の個人經營の基礎を固守するためだけに、ありとあらゆる艱難にも耐えるし、また牛馬に等しい生活をも乞食同様の生活をも甘んじて受けるが、土地とは離れることを欲しないということは、わかりきったことである。

この要因が、わが國においても、即ちソヴェト制度の下においても、かかる形で作用しつづけるであろうといつてもよいか？ 否、そんなことをいうことはできない。わが國には、土地の私有ということがないのだから、そんなことをいうことはできない。そして、わが國には、土地の私有ということがないからこそ、西歐に存するところのこのちつぽけな土地に對する農民の盲目的執着というものも、わが國にはないのである。そして、この事態は、小農經營を、コルホーズの軌道に移行させることを容易ならしめずにはおかないのである。

この點にこそ、農村における大規模經營、農村におけるコルホーズが、わが國において、即ち、土地の國有化されている條件の下において、小規模農民經營に對する自己の優越性を、かくも容易に事實をもつて示すことを得た理由の一つがあるのである。

この點にこそ、絶對地代を根絶し、土地の私有ということを撤廢し、土地國有化を制定したところの、ソヴェト農地法の偉大な革命的意義があるのである。

しかして、このことによつて、大規模經營に對する小農經營闘争において、後者の安定性を宣言しているブルジョア經濟學者に反對する新しい論據を、吾々は掌中に握つているということになるのである。

わが理論家である農業問題専門家は、ありとあらゆるブルジョアの理論に對して鬭争するに際して、この新しい證據を、なせ十分に利用しないのであろうか？

吾々は、土地の國有化を實行するに當つては、まず、極めて豊富な理論的思想の寶庫であるところの、『資本論』第三卷、有名なマルクスの著書『剩餘價值論』、レーニンの農業問題に關する諸著作、これらにおいて與えられている理論的前提を出發點としたのであつた。私は一般的には地代論、特殊的には絶對地代論を考慮に入れていつていのである。これらの勞作の中にある理論的命題が、都市および農村におけるわが社會主義建設の實踐活動によつて、見事に確證されたことは、現在、明かなことである。

なせチャヤノフ輩型の『ソヴエト』經濟學者の反科學的な理論が、わが出版物上において自由に横行するというようなことがなされるべきであつて、地代論並に絶對地代論についてのマルクス・エングルス・レーニンの卓絶した諸勞作が廣く普及され、かつ前面に押し出されることなごに、棚の上に置き忘れられていなければならぬか？ ということだけは、了解できないことである。

諸君は、エンゲルスの有名なパンフレット『農民問題』を、おそらく記憶しておられるであろう。諸君は、エンゲルスが、協同經營の道へ、集團經營の道へ、小農を移行させる問題に對して、どれほどまで、慎重な態度をとつていられるかを、勿論記憶していられるだろう。エンゲルスのパンフレットの中の、この點について述べられている箇所を、引用することにしよう——

『吾々は斷然小農の味方である。吾々は彼等の生活をもつと樂にするために、彼等が協同經營に移ることを決心する場合には、これを容易ならしめるために、出来るだけのことをするであらう。もし彼等が、まだこの決心をするに至らない場合には、吾々はこの問題について、彼等が自

己のちつぽけな土地の上で考える時間をできるだけ多く與えるように努めるであらう*」。

諸君は、個人農經營を、集團制度の軌道に移し入れる問題に對して、エンゲルスが、どれほどま
で慎重な態度をとつているかを見られるであらう。一見したところでの、エンゲルスのこのようなあ
まりに慎重すぎるような態度は、何によつて説明することができるか？ 彼はこれをなすに際して、
何を出發點としたか？ 土地私有の存在していることと、農民が「自己のちつぽけな」土地をもつて
おり、彼等にとつては、即ち農民にとつては、この土地と離れることが困難であらうという事實と
を、彼が出發點としてゐることは明かなことである。西歐の農民は、かくの如きである。土地の私有
が存在している資本主義諸國における農民は、かくの如くである。そこでは、非常な慎重さを必要と
することは、わかりきつたことである。

ところで、わがソ同盟にも、このような情勢があるといつてもよいであらうか？ 否、そんなこ
とをいつてはならない。わが國には、農民を彼等の個人經營に縛りつけてゐる土地の私有というこ
とがないのであるから、そんなことをいうことはできない。わが國には、個人農民を、集團主義の軌道
に移すことを容易ならしめる土地の國有化があるのであるから、そんなことをいうことはできない。

この點にこそ、わが國において、コルホーズ化運動が、最近比較的容易に、かつ迅速に、發展し
ている理由の一つがあるのである。

わが理論家である農業問題専門家達が、わが國における農民の状態と西歐の農民の状態との間の
この相違を、申分なき明白さで暴露することを、まだ試みなかつたということは、甚だ残念なことだ

傍點は私による。

イ・スタールン

ある。しかしして、かかる仕事は、吾々ソヴェトの働き手のみならず、すべての國の共產主義者にとつても非常に大きな意義をもつたであらう。なせならば、プロレタリアートが權力を奪取したすぐその日から、土地國有化の基礎の上に社會主義を建設するようになるか或はかかる基礎なしに社會主義を建設するようになるかということは、資本主義諸國のプロレタリア革命にとつては、決してどうでもよいことではないからである。

最近發表した私の論文（『偉大なる轉換の年』*）の中で、私は大規模のソフホーズを念頭において、農業における大規模經營の、小規模經營に對する優越性を主張するいくつかの周知な論據を解説展開させた。これらの論據がすべて、大規模の經濟單位としてのコルホーズにも、そつくり完全に適用されるものであることは、證明するまでもないことである。私は、機械・トラクター基地をもつている、よく發展したコルホーズについてのみではなく、コルホーズ建設の手工業時代を代表しているところでもいうべき、また前から農民がつかつてゐる農具で間に合はしてゐるような初歩的なコルホーズについてもいつてゐるのである。私は、全面的なコルホーズ化が行われてゐる諸地方において、現在創立されつつあるような、また農民の生産農具を簡單に集合組成したもので、間に合はしてゐるような、初歩的なコルホーズを念頭においていつてゐるのである。

舊ドン州のホブル地區における諸コルホーズを例にとつてみよう。一見したところでは、これらのコルホーズは、技術という點から見て、小規模の農民經營と異なつていないようである（機械が少なく、トラクターが少ない）。しかるに、コルホーズ内部における農具の簡単な集合組成が、吾々の實

* 本書四六二―四八〇頁參照。編集部

實際活動家達が、夢想だにしなかつたような効果をあたえたのであつた。この効果は、どんなことに表現されたか？ それはコルホーズの軌道への移行が、三割、四割、五割というような播種面積の擴張をもたらしたとすることに表現された。この「目をまわさせる程の」効果は、何をもちつて説明できるか？ それは、個人的労働という條件の下においては無力であつた農民が、自分達の農具を集合組織し、コルホーズに團結して、非常に強大な勢力に轉化したということによつて説明できるのである。それはまた、農民が個人的労働という條件の下において、耕作に困難な廢地と未開墾地を、耕作する可能性を得たことによつて、説明できるのである。それはまた、農民が、未開墾地を自分達の手に入れる可能性を得たことによつて説明できるのである。それはまた、空地や個々のちつぽけな土地、畦道、等々を、耕作地として活用する可能性を得たということによつて説明できるのである。

廢地や未開墾地の耕作についての問題は、わが農業にとつて、非常に大きな意義をもっている。

諸君は、舊時のロシアにおける革命運動の中心となつていたのは、農民問題であつたということを知つておられるだろう。諸君は、農民運動が、土地不足を根絶することを、その目的の一つとしてもつていたことを知つておられるだろう。當時、多くの人々は、土地不足ということ、それは絶對的なものであると考へた。即ちロシアには、耕作のできるような空いた土地は、これ以上存在しないと考へていた。だが、實際はどんなことが明かにされたか？ ソ同盟には、何千萬ヘクタールという空地があり、残つていたということは、現在、いたつて明瞭なことである。しかしながら、農民は、これらの土地を、彼等のみすばらしい農具で耕作するなどという可能性を全くもつていなかった。そして農民が未開墾地と廢地とを耕作する可能性をもつていなかったからこそ、それゆゑにこそ、農民は「軟い土地」の方へ、地主の所有していた土地の方へ、個人的労働の條件の下において、農民が前から

もつている農具の力で耕作するに便利な土地の方へ惹きつけられたのであつた。この點にこそ、「土地不足」の根據があつたのである。それゆゑに、トラクターによつて裝備されているわが穀物トラストが、農民が實際に使用していき、また、個人的労働の方法によつては、小農的な農具の力によつては耕作することのできない、約二千萬ヘクタールの空地を耕地として活用する可能性を、現在もつていゝといふことは、少しも驚くべきことではない。

コルホーズ化運動の全段階における、その初期の段階においても、またコルホーズがトラクターで裝備されるにいたつた一層發展した段階においても、——コルホーズ化運動の意義は、農民達が、今や廢地と未開墾地とを耕作地として活用する可能性を得たといふ點にもある。この點に、農民が集團的労働に移行したことによつて、播種面積を著しく擴張することができた、といふことについての秘密があるのである。この點に、個人的農民經營に對するコルホーズの優越性といふことの根據の一つがあるのである。

個人的農民經營に對するコルホーズの優越性といふことが、全面的にコルホーズ化されている諸地方における初歩的なコルホーズの援助のために、わが機械・トラクター・ステーションと機械・トラクター隊とが出かけるようになり、コルホーズ自身が、トラクターとコンバインを、彼等の手に集中する可能性を得るようになるときには、もつともつと論議の餘地のないものになるといふことは、いふまでもないことである。

四、都市と農村

ブルジョアの經濟學者によつて培養されたところの、いわゆる「缺狀形態」についての偏見が存在している。これに對しては、遺憾ながらソヴエトの出版物上で普及されているところの、他の一切のブルジョアの理論に對すると同じ様に、容赦のない戦いを布告することが必要である。私が念頭においているのは、恰も十月革命が、二月革命よりも少しか農民に與えなかつたかの如く、十月革命は、實のところ農民に何も與えなかつたのだ、という理論のことである。

この偏見は、一時、『ソヴエトの』經濟學者の一人によつて、わが出版物上で盛に言い觸らされた。尤も彼は、この『ソヴエトの』經濟學者は、その後、自分の理論を放棄したのであつた。（聲——「それは一體だれか？」）それはグローマンだ。だが、この理論はトロツキスト・ジノヴィエフの反對派によつていち早く取り上げられ、黨に反對するために利用された。しかして、この理論が、現在、『ソヴエトの』世論界には、流布されていないと斷言できる根據は何一つないのである。

同志諸君、これは非常に重要な問題である。これは、都市と農村との間の相互關係の問題に觸れている。これは、都市と農村との間の對立の根絶という問題に觸れている。それは「缺狀形態」について、最も切實な問題に觸れている。それ故に、私は、この奇怪な理論をただす要があると考えるのである。

農民が、十月革命によつては、何も得なかつたということは、ほんとうだろうか？　まず事實について検討してみよう。

私はここに、私の論文「穀物戦線において」の中で發表された有名な統計學者同志ネムチノフの周知な統計表をもつてゐる。この統計表によれば、革命前の時期には、地主は、六億ブード（一ブードは、一六・三八キログラム——譯者註）を下らぬ穀物を「生産してゐた」ことを知りうるのである。したがつて、地主は當時、六億ブードの穀物保有者であつたのだ。

この統計表によればクラークは、當時、十九億ブードの穀物を「生産してゐた」。これは、非常に大きな力であつてその當時クラークは、これを占有してゐたのであつた。

しかして、貧農と中農とは、この統計表によれば二十五億ブードの穀物を生産してゐた。かくの如きが、舊時の農村、即ち十月革命までの農村における情景である。

十月革命の後、農村にはどんな變化がおこつたか？同じ統計表からの數字をとらう。たとえば一九二七年をとつてみよう。この年に、地主は、いくらほど穀物を生産したであろうか？ 彼等は、何にも生産してゐないし、また生産することができなかつた、ということとは明かなことである。なせならば、地主は十月革命で絶滅されたからである。このことは、當然農民の状態を、著しく樂にさせるために役立たなければならなかつたということ、諸君は了解されるであらう。なせならば、農民達は、地主の重荷から解放されたからである。このことは、勿論十月革命の結果として農民が得たところの、農民にとつての大きな利得である。

クラークは一九二七年にいくら生産したか？十九億ブードではなくて、六億ブードの穀物を生産した。したがつて、十月革命から後の期間に、クラークの力は三分の一以下に弱まつたのである。諸君は、このことが、貧農と中農との状態を、樂にせずにはおかなかつたということ、を了解されるであらう。ところで、貧農と中農とは、一九二七年にいくら生産したか？ 二十五億ブードではなくて四十

億ブードを生産した。したがつて貧農と中農とは、十月革命の後には革命前の時期におけるよりも、十五億ブード多くの穀物を生産するようになったのである。

これこそ、貧農と中農とが、十月革命によつて龐大な利益を得たことを物語るところの諸事實である。

これこそ、十月革命が、貧農と中農とに與えたところのものである。

これだけはつきりとした後になつてもなお、十月革命は、農民に何も與えなかつたなどということとを、どうして斷言することができらうか？

だが、同志諸君、これが問題のすべてではない。十月革命は、土地の私有ということを根絶し、土地の賣買を根絶し、土地の國有化を制定した。これは何を意味するか？ これは、穀物を生産するために、農民は土地をかうことが、現在全く必要でなくなつたということを意味している。以前、農民は土地を手に入れるための資金を、何年もかかつて蓄積し、土地を手に入れんがためにのみ借金をし、奴隸ともなつた。土地買入れのための費用は、勿論、穀物の生産價格に影響を及ぼした。現在では、農民は、これを必要としていない。現在では、農民は土地を買入れることなしに穀物を生産することができるのである。したがつて土地買入れのために費した幾億萬のルーブルは現在、農民の手もとに残るのである。これは農民の状態を樂にしているか、それとも樂にはしていないか？ 樂にしているということとは、明かなことだ。

さらに、最近まで農民は、個人的な労働の方法で、舊式な農具をつかつて土地をはじくつていなければならなかつた。舊式な、現在ではすでに役に立たなくなつてゐる生産用具によつて裝備されてゐる個人的な労働が、相當な生活をなし、自己の物質的狀態を系統的に高め、自己の文化水準を發展さ

せ、社會主義建設の大道に出てゆくために必要なところの利得を與えないということは、あらゆる人々によく知られているところである。ところで、現在、即ちコルホーズ化運動が強い力で活潑に發展した後においては、農民達は、自己の勞働を隣人達の勞働と結合させ、コルホーズに團結し、未開墾地を開拓し、廢地を利用し、機械とトラクターとを得て、かくして自己の勞働生産能力を、三倍とまではゆかずとも二倍に高める可能性をもっているのである。ところで、これは、何を意味しているか？ これは、農民がコルホーズに團結したおかげで、同一の勞働によつて前よりも遙に多くのものを生産し得る可能性を、現在もつていることを意味している。したがつてこれは、穀物の生産が、最近までのそれに比して、ウンと安くなつたことを意味している。最後にこれは値段の安定ということによつて、農民がこれまで得ていたよりも遙に多額の金を、彼等は穀物によつて得ることができるといふことを意味している。

これだけみんなはつきりとした後になつてもなお、十月革命は、農民に利得を與えなかつたなどということをも、どうして斷言することができ得るであろうか？

こんな出まかせをいう人達は、明かに黨を、ソヴェト權力を誹謗する者であるといふことは、明かなことではないか？

しかし、すべてこれらのことから、どういふ結論が導き出されるか？

これによつて、『缺狀形態』についての問題、『缺狀形態』の根絶についての問題は、現在、新しいふうを立てられなければならないといふことになるのである。これによつてもしもコルホーズ化の運動が、現在のテンポで發展してゆくであろうならば、『缺狀形態』は、最近のうちに根絶されるであろうといふことになるのである。これによつて、都市と農村との間の關係についての問題は、新し

い地盤の上に立つてであろうということ、都市と農村との間の對立は急テンポで消滅してゆくであろうということになるのである。

同志諸君、この事態は、一切のわが建設にとつて、極めて大きな意義をもっている。それは農民の心理を改造し、農民の關心を都市の方へ向けかえさせる。それは、都市と農村との間の對立を根絶するための地盤を築き上げる。それは、「農村へ注意を向けろ」という黨のスローガンを、「都市へ注意を向けろ」というコルホーズ農民のスローガンで補足するための地盤を築きあげる。

そして、この點においても、何らおどろくべきことはないのである。なせならば、農民は、現在、機械、トラクター、農業技師、組織者、そして最後に、トラクターに對する鬭争のための、また、トラクターを克服するための直接の援助を、都市から得ているからである。都市を掠奪者とみなして、それに對して默的な不信を抱いている古い型の農民は、後の方へ退いて行つてゐる。彼等に代つて、都市から、眞の生産的援助を受けようという希望をもつて都市を見ている、新しい型の農民、即ちコルホーズ農民が登場している。貧農になり下ることを恐れ、そして、こつそりと（大つびらには、選挙権を剝奪されるおそれがあるからだ！）トラクターの地位になり上りつつある古い型の農民と入れ代つて、新しい見透し、即ちコルホーズに加入し、貧窮と無智蒙昧からぬけだして經濟的および文化的高揚のある大道に行こうとする見透しを有する新しい農民が登場している。

同志諸君、實にこんな具合に、問題は變轉してゐるのである。

同志諸君、わが理論家である農業問題専門家達が、十月革命の獲得したものと成長しつつあるコルホーズ化運動との意義を抹殺しようと企てている、ありとあらゆるブルジョアの理論を、徹底的にやつつけ、かつ根こそぎにするために全力を盡していないということは、甚だ遺憾なことである。

五、コルホーズの本質について

經營の型としてのコルホーズは、社會主義的經營形態のうちの一つである。この點には何らの疑いもあり得ない。

演説者のうちの一人は、この席上で演説し、かつコルホーズの意義を抹殺した。彼は經濟的組織としてのコルホーズは、社會主義的經營形態とは、何一つ共通するものをもっていないと斷言した。同志諸君、コルホーズに對するかかる性格づけは、斷然正しくないということを私は聲明しなければならぬ。これが、この性格づけが、現實とは何一つ共通するものをもっていないということは、疑うことのできないことである。

經營の型は、何によつて決定されるか？ 生産過程における人々の關係によつて決定されるといふことは、明かなことである。他の何らかによつて、經營の型を決定することができるであろうか？ しかして、コルホーズの内部には、生産手段の所有者である人々の階級、またこれらの生産手段を奪いとられている人々の階級をもっているであろうか？ コルホーズの内部には、搾取階級と被搾取階級をもっているであろうか？ コルホーズは、國家に屬している土地の上で用いる基本的な生産用具を公有化したものではないであろうか？ 經營の型としてのコルホーズは、社會主義的經營形態の一つではないということゝを斷言できるための、どんな根據があるか？

勿論、コルホーズには矛盾がある。勿論、コルホーズには個人主義的な殘滓、またクラク的な殘滓さえもあるであろう。これらの殘滓は、まだ無くなつてはいないが、コルホーズの強化に伴い、またコルホーズの機械化に伴つて、時の經るにしたがつて必ずなくなるべきものである。だが、その

矛盾も缺陷も含めて、全體としてのコルホーズが、經濟上の事實としてのコルホーズが、農村發展の新しい道、クラクティック・資本主義的發展の道に對立するものとしての、農村の社會主義的發展の道を、大體において、代表しているということ、否定することができらるであろうか？ コルホーズが（私はコルホーズについていつていたのであつて、僞コルホーズについていつていてのではない）、わが國にある條件下において、農村における社會主義建設の基地と根據地——これらは、資本主義的分子との、死物狂いの闘争において成長したものである——となつていくことを、否定できらるであろうか？

コルホーズの意義を抹殺し、コルホーズを、ブルジョア的な經營形態だと言明しようとするある同志達の企圖は、何らの根據をもつていないものであるということ、あきらかなことではないか？ 一九二三年においては、わが國にはまだ大衆的な、コルホーズ化の運動はなかつた。レーニンは、彼のパンフレット「協同組合について」の中で、協同組合のすべての種類、すなわちその最下級な形態（購買・販賣協同組合）も高度な形態（コルホーズ的形態）をも、考慮していつている。當時彼は、協同組合について、協同組合的な企業について、どんなことを述べたか？ 次の如きが、レーニンのパンフレット「協同組合について」の中からの一つの引用句である——

「現在わが國に存在している制度の下では、協同組合的企業は、集團的な企業として、私營的・資本主義的企業とは異なつてゐるが、もしもこれらの企業が、國家、即ち労働者階級に屬してゐる生産手段の下に、土地を基礎として立てられてゐる場合には、社會主義的企業と異なるものではない」*。（レーニン全集、第二七卷、三九六頁）

* 傍點は私による。——イ・スタヴリン

したがって、レーニンは、協同組合的企業を、獨立せるものとしてではなく、わが國に現存する制度との關連において、國家に屬している土地の上で、生産手段が國家に屬している國において、これらの協同組合的企業が經營されているということとの關連において取りあげていたのであり、かつこんなふうには協同組合的企業を觀察して、協同組合企業は社會主義的企業と異なるものではないと、レーニンは斷言しているのである。

レーニンは、一般的に、協同組合的企業について、このようにいつているのである。

現在の時期の「ホルホーズ」についても、さらに大きな根據をもつて同じようにいつことができる、ということとは明かなことではないか？

さて、これによつて、レーニンが、わが國の條件下における、「協同組合の單純な成長を、社會主義の成長に匹敵するもの」として考へているということも、説明されるのである。

諸君は、前述の演説者が「ホルホーズの意義を抹殺して、レーニン主義に反する、非常に大きな誤謬を犯した」ということを理解されるであらう。

この誤謬は、さらにまた別の彼の誤謬、即ち「ホルホーズ内における階級闘争についての誤謬をひき起させている。演説者は、ホルホーズ内における階級闘争はホルホーズの存在しないところにおける階級闘争と異ならないと、考へてもよいほど、ホルホーズ内における階級闘争を、大げさに極彩色で描き出した。いやそれどころではない。ホルホーズ内の階級闘争は、もつと激烈になりつつあるのだと、考へることができるほどにいつている。とはいいいながら、この問題で罪を犯しているのは前述の演説者一人だけではない。階級闘争について無駄口を叩き、ホルホーズ内の階級闘争について、小うるさいビービー聲をたてるということは、今や、わが「左翼的」となり屋達すべての特徴である。しかし

て、この小うるさいビービー聲のうちでも最も滑稽なのは、このビービー連中が、階級闘争がないところ、もしくは、殆んどないところでは階級闘争を「見る」が、階級闘争が現存し、かつ溢れ出すほどあるところでは、階級闘争を見ていないということである。

コルホーズ内には、階級闘争の要素があるか？ 然り、存在する。個人主義的な、或はクラーク的でさえある心理の残滓を、コルホーズ内にまだ保持しては、物質的狀態上のいくぶんの不平等を、コルホーズ内にまでもつていては、コルホーズに階級闘争の要素が存在しなくなることはあり得ないのである。コルホーズ内における階級闘争は、コルホーズのないところでの階級闘争と相等しいといつてもよいであろうか？ 否、そんなことをいうことはできない。わが「左翼的」な口達者な連中の誤謬は、彼等がこの間の差異を見ないという點にこそあるのである。

コルホーズのなかつたとき、コルホーズが組織されるまでの階級闘争とはどういうことを意味しているか？ それは、生産用具と生産手段とを占有しており、これらの生産用具と生産手段とをもつてゐることによつて、貧農を自分達の奴隷にしている、クラークとの闘争ということの意味している。この闘争は生死を賭しての闘争なのである。

しかし、コルホーズという基礎の上での、階級闘争とは、どういうことであろうか？ それはまず第一に、クラークが撃破され、生産用具と生産手段とが奪いとられたことを意味している。それは第二に、基本的な生産用具と生産手段との公有化を基礎として、貧農と中農とが、コルホーズに結合したということの意味している。それは最後に、問題はコルホーズ員間の闘争、即ち、彼等のうちのある者は個人主義的な、クラーク的な残滓からまだ解放されていず、またコルホーズ内に存する幾分の不平等を、自分に都合のよいように利用しようとしており、また他の者はこれらの残滓とこの不

平等を、コルホーズからおつぼり出してしまふことを希望しているというような、コルホーズ員間の闘争についてである、ということの意味している。コルホーズという基礎の上での階級闘争と、コルホーズがないところでの階級闘争との間の、相違を見ることのできないのは、盲人だけだということ、明かなことではないか？

コルホーズを持つことができたのだから、社会主義の建設を完成するに必要なもの全部も得ることができたのだと考えることは、間違いであろう。況んやコルホーズ員達が、すでに社会主義者に轉化したと考えることは、なおさら誤りであらう。否、コルホーズ農民を作り變え、彼等の個人主義的心理を矯正し、彼等を社会主義社会の本當の労働するものにしてしまふためには、もつともつと多くの仕事をしなければならぬのである。そして、このことは、コルホーズがより早く機械化されればされるほど、またより早くトラクター化されればされるほど、より早くなすとげることができらるであらう。しかして、このことは、農村の社会主義的改造を促進する手段としてのコルホーズの巨大な意義を、少しも低減させるものではない。コルホーズの偉大な意義は、實に、コルホーズが農業に機械とトラクターとを適用するための主要な基礎をなしているということと、コルホーズが農民を作り變え、社会主義の精神で彼等の心理を作り直すための、主要な基礎を構成しているということにこそ存するのである。レーニンが、次のように述べているのは正しかった——

「小農夫の作り變え、彼等の心理と慣習とをすべて作り變えるという事業は、幾世紀をも必要とする任務である。小農夫に關するこの問題を解決し、いわば、彼等の心理一切を健全ならしめるということは、物質的基礎、技術、廣汎な規模で農業にトラクターと機械とを適用すること、廣汎な規模での電化、これらのみがなし得るであらう。」（レーニン全集、第二六卷、二三九頁）

コルホーズが、ただ、それによつてのみ、幾百萬という小個人農を、經濟的高揚の助成手段としての、また、農業の社會主義的發展の助成手段としての、機械とトラクターとを有する大規模經營に惹きつけることのできるところの、社會主義的經濟の形態に他ならぬということを、否定できる者があるであろうか？

わが「左翼的」な口達者な連中は、これらのこと一切を、忘れてしまつたのだ。
わが演説者もまた、これを忘れてしまつたのだ。

六、階級變動と黨政策上の轉換

最後に、わが國における階級變動と農村における資本主義的分子に對する社會主義の攻勢とについての問題。

最近の一年間におけるわが黨の活動の特徴は、黨として、ソヴェト權力として、吾々が、

イ、農村における資本主義的分子に對して、全戦線にわたり攻勢を展開したこと

ロ、この攻勢が、周知の如く、非常に、明白に感得されるような肯定的な結果を與へたし、また現在も與へつづけている、という點にある。

これは何を意味しているか？ これは、われわれがクラークの擯取者の志向を抑制する、政策から、階級としてのクラークを絶滅する、政策に移行したことを意味している。これは、われわれがわが政策全體にわたつて決定的な意義をもつ轉換の一つを、すでに行つたし、また行いつづけるであろうということの意味する。

最近まで黨は、クラークの擡取者的志向を抑制する立場をとっていた。この政策が、すでに第八回黨大會で宣言されたということは、周知のことである。それは、この政策そのものはネツプの實施にあたり、また、わが黨の第十一回大會においても、再び宣言されたのであつた。レーニンが、かかる政策をこそ實行することの必要についての問題を、もう一度とり上げているブレオブラジエンスキーのテーゼについてのレーニンの有名な手紙（一九二二年）のことは、だれでもよく記憶していることである。最後に、この政策はわが黨の第十五回大會で確認された。この政策を、吾々は、最近まで實行してきたのだ。

この政策は正しかつたか？ 然り、それは、あの時もちろん正しかつた。五年或は三年ほど前に、われわれは、クラークに對して現在のような攻勢にできることができたであろうか？ その當時、われわれは、かくの如く攻勢が成功することを期待することができたであろうか？ 否、そんなことはできなかつた。そんなことは、最も危険な冒險主義であつたであろう。そんなことは、極めて危険な攻撃ごつこであつたであろう。けだし、吾々は、きつとこのことに失敗したであろうし、かつ吾々が失敗した結果として、クラークの地位を強化させることになつただろうからである。なせか？ なせならば、廣く普及されたソフホーズ網、コルホーズ網というような、即ち、クラークに對する決定的な攻勢を基礎づけることができるような、農村における支柱を、吾々はまだもつていなかつたからである。なせならば、その當時、吾々は、クラークの資本主義的生産を、コルホーズとソフホーズの社會主義的生産をもつて、置き替へる可能性をもつていなかつたからである。

一九二六年——一九二七年に、ジノヴィエフ・トロツキスト反對派は、クラークに對して即時攻勢に出るといふ政策を、黨にムリヤリに押しつけた。だが、黨は、この危険な冒險をやらなかつた。な

せならば、黨は眞面目な人達にとつては、攻撃ごつこなど、到底できることではないということ、よく知つていたからである。クラークに對して攻勢に出るといふことは、非常に重大なことである。これをクラークに反對する大ゲサな聲明などと混同してはならない。また、これをジノヴィエフ・トロツキスト反對派が黨にムリヤリに押しつけたような、クラークを一寸引つかくだけの政策と混同してはならない。クラークに對して攻勢に出るといふこと、それは、クラークを撃破し、クラークを階級として絶滅してしまふことを意味している。これらを目的としていない攻勢は、とりもなおさず、大ゲサな聲明であり、一寸引つかくだけのことであり、口先だけの大言壯語であり、その他何とも好きなようにいつてもよいがただ眞のボルシェヴィキ的攻勢だけではあり得ないのである。クラークに對して攻勢に出るといふこと、それは實際行動のために準備し、そしてクラークに對して打撃を與えること、しかしてクラークが二度と再び、まともに立ち上ることができなくなるような、打撃を彼等に與えることを意味している。これをこそ、吾々ボルシェヴィキは、眞の攻勢とよんでいるのである。五年或は三年ほど前に、吾々は成功を期待して、かかる攻勢を行うことができたであろうか？ 否、そんなことはできなかつた。

事實上、クラークは一九二七年において、六億ブード以上の穀物を生産したのであるが、この總量のうちから、約一億三千萬ブードを、農村外で賣つたのであつた。これは、無視することのできない、かなりに重大な勢力である。ところが、その當時、わがコルホーズとソフホーズとは、どれほど生産していたか？ それは、約八千萬ブードであつて、そのうちから、約三千五百萬ブードを、市場へ（市場向穀物）送り出したのであつた。この當時、吾々が、クラークの生産とクラークの市場へ出すことのできる穀物を、わがコルホーズ並にソフホーズの生産と市場に出すことのできる穀物

とをもつて置き替へることができたかどうかを、諸君自身で判断してくれ給え。そんなことができなかったということは、明かなことである。

こんな條件の下において、クラークに對し決定的な攻勢に出ることは、何を意味するか？ それは、間違ひなく吾々の失敗となり、クラークの地位を強化させ、わが國は穀物なしになつてしまふことを意味している。それだからこそ、ジノヴィエフ・トロツキスト反對派の冒險主義的大げさな聲明にもかかわらず、その當時吾々は、クラークに對して決定的攻勢に出ることができなかつたし、また攻勢に出てはならなかつたのであつた。

さて、現在ではどうか？ 現在の事情はどうなつてゐるか？ 現在、わが國はクラークに打撃を與え、彼等の反抗を撃破し、階級としてのクラークを絶滅させ、彼等の生産を、コルホーズとソフホーズとの生産をもつて置き替へるための、十分な物質的基礎をもつてゐる。一九二九年におけるコルホーズとソフホーズの穀物生産は、四億ブードを下らなかつた（一九二七年におけるクラーク經營の總產出高より二億ブード少ない額）ということは、周知のことである。さらに、一九二九年においては、コルホーズとソフホーズが、一億三千萬ブード以上（即ち一九二七年におけるクラークのそれよりも多く）の市場向穀物を供出したということは周知のことである。最後に、一九三〇年において、コルホーズとソフホーズの穀物總產出高は、九億ブード以下ではなく（一九二七年におけるクラークの總產出高よりも多く）、一方、市場向穀物の方は、四億ブード以下ではない量（即ち一九二七年におけるクラークのそれとは、比べられないほど多く）供出できるであろうということは周知のことである。

同志諸君、わが國では、現在、事情はこんなふうになつてゐるのである。

かかる變動こそが、わが國の經濟において起つたところのものなのである。

現在、わが國には、諸君も知られるように、クラークの生産を、コルホーズとソフホーズとの生産をもつて置き替へるための、物質的基礎があるのである。それだからこそ、クラークに對するわれわれの決定的攻勢は、今や、疑う餘地のない成功をえられるのである。

もしも吾々がクラークに對する眞の決定的攻勢について語り、それを空虚な大げさな聲明だけに制限しないとすれば、クラークに對し、こんなふうにくそ攻勢に出なければならぬのである。

それだからこそ、吾々は、クラークの擯取者の志向を抑制する政策から、階級としてのクラークを絶滅する政策へ、最近移つたのであつた。

では、クラークの財産收奪の政策についてはどうすればよいか？ 全面的なコルホーズ化が行われる地方においては、クラークの財産收奪をやつてもよいであろうか？ という質問がいろんな方面からなされる。實に笑止千萬な質問である！ 吾々がクラークの擯取者の志向を抑制する見地に立つている間は、吾々がクラークに對する決定的な攻勢に移る可能性をもつていなかった間は、吾々にクラークの生産を、コルホーズとソフホーズの生産によつて置き替へる可能性がなかつた間は、クラークの財産收奪ということは、許すべからざることであつた。その當時においては、クラークの財産收奪を許さぬという政策は、必要であつたし、また正しかつたのだ。ところで、現在はどうか？

現在は全く違つてゐる。現在、吾々は、クラークに對して決定的な攻勢を實行し、彼等の反抗を撃破し、階級としての彼等を絶滅し、彼等の生産を、コルホーズとソフホーズの生産をもつて置き替へる可能性をもつてゐる。現在、クラークの財産收奪は、全面的コルホーズ化を實現してゐる貧・中農大衆自身によつて行われている。今や、全面的にコルホーズ化の行われている地方におけるクラークの財産收奪は、すでに、單なる行政上の處置ではない。今や、クラークの財産收奪ということは、そ

ここでは、コルホーズの創設とコルホーズの發展との一構成部分をなしているのである。それゆえに、クラークの財産收奪について、現在、とやかくいうことは、笑止千萬なことであり、眞面目さを缺くものだ、というのである。御本尊の首が無くなつてゐるんだから、髪の毛のことなんか未練がましくいうもんじゃない。

もう一つの質問、即ちコルホーズへクラークを加入させてもよいだろうか、という質問もこれに劣らず笑止千萬なものだと思われる。コルホーズへクラークを加入させるなんて、もちろんとんでもないことである。クラークは、コルホーズ化運動の不倶戴天の敵なのだから、そんなことはできないことではない。

七、結 論

同志諸君　これが、わがマルクス主義者である農業問題専門家達の理論的活動が、どうしてもそれに觸れなければならないところの、六つの中心問題である。

これらの問題の意義は、何よりもまず、これらの問題のマルクス主義的研究が、恥かしい話ではあるが、わが共産黨員の同志達によつても、時には流布され、また、わが實際的活動家の頭腦を濁している、ありとあらゆるブルジョアの理論を、根こそぎにする可能性を與えているということにあるのである。しかし、これらの理論を根こそぎにし、それらの理論を遠く彼方へ放棄するということには、すでに、ずつと前になさるべきであつたであろう。なせならば、これらの理論またはこれに類する理論に對する容赦なき闘争によつてのみ、マルクス主義者である農業問題専門家達の理論的思想は成長し、強化され得るからである。

これらの問題の意義は、最後に、これらの問題が過渡期における經濟上の古い問題に、新しい相貌をつけ加えているということにあるのである。

ネツプについての、階級についての、コルホーズについての、過渡期における經濟についての問題は、現在、新しいふうに出されてゐる。

ネツプを退却として、ただ退却としてのみ理解してゐる人達の誤謬を暴露しなければならぬ。事實上、レーニンは、すでに新經濟政策の實施にあつて、それが、決して退却だけのものではないということ、この政策が、退却と共に都市並に農村の資本主義的分子に對する新しい決定的な攻勢に爲るための準備をも意味するものなることを、語つたのであつた。

ネツプは、都市と農村の間の連繫のためにのみ必要だと考へてゐるところの人達の誤謬を、暴露することが必要である。吾々にとつては、都市と農村の間のあらゆる連繫が必要なのではない。吾々には、社會主義の勝利を保障するような連繫が必要なのである。そして、吾々がネツプを維持してゐるとすれば、それは、この政策が社會主義のためになるものだからである。だが、それが社會主義のためにならなくなるであらう時には、吾々は、このネツプを、地獄の果へ、なげ棄ててしまふであらう。レーニンは、ネツプは、慎重に、長期に亘つて施行されるであらう、と言つた。だが、レーニンは、ネツプは、永久に施行されるであらうとは、決していわなかつた。

マルクス主義的再生産論の普及化の問題もまた、たてなければならぬ。わが國民經濟の收支決算表の問題も研究されなければならぬ。國民經濟の收支決算表の形態で、一九二六年に中央統計局が發表したものは、收支決算表ではなくて、數字遊びなのである。國民經濟の收支決算表の問題

に對するバザロフとグローマンの取扱い方もまた、適當なものではない。革命的マルクス主義者達が、一般に、過渡期における經濟の諸問題の研究に従事することを欲しているならば、彼等は、ソ同盟の國民經濟收支決算の圖表を、研究しなければならない。

わがマルクス主義者である經濟學者達が、過渡期の經濟の問題を發展の現段階において新しい方法で研究するために、働きの特別なグループを、別に結成させたならば、それはよいことであろう。

階級としてのクラーク絶滅の政策に 關する問題について

「クラスタヤ・ズヴェズダ（赤い星）」紙第十六號掲載の論文「階級としてのクラークの絶滅」は、一般的には疑いもなく正しいのであるが、その定式すけには精確を缺く二つの點がある。これらの不精確な點を訂正することが必要だと私は考えるのである。

一、論文には次のように書かれている——

「復興期においては、都市並に農村の資本主義的要素を抑制する政策を吾々は遂行した。そして再建期の初めからは、吾々は、抑制政策から、彼等をしめ出す政策へ移つた」。

この命題は間違つてゐる。資本主義的要素を抑制する政策と、彼等をしめ出す政策とは、二つの異なる政策ではない。これは同じ政策である。農村における資本主義的要素のしめ出しということは、資本主義的要素を抑制する政策の、また、クラークの搾取者の志向を抑制する政策の必然的結果であり、またその構成部分なのである。農村の資本主義的要素をしめ出すということを、階級としてのクラークをしめ出すことと同一視してはならない。農村の資本主義的要素をしめ出すということは、課税による強壓に堪えきれず、ソヴェト權力の抑制方策の制度に堪えきれないところの、クラークの個々の部隊を

しめ出し、克服することである。クラークの搾取者的志向を抑制する政策、農村の資本主義的要素を抑制する政策がクラークの個々の部隊のしめ出しということに導かざるを得ないことは、わかりきったことである。それゆえに、クラークの個々の部隊のしめ出しということは、農村の資本主義的要素を抑制する政策から生ずる必然の結果として、また、その構成部分としてより他にはみなすことができないのである。

この政策は、復興期のみならず、再建期にも、また第十五回黨大會（一九二七年十二月）以後の時期にも、またわが黨の第十六回會議（一九二九年四月）、また同様に、この會議後から一九二九年の夏まで、即ちわが國において全面的集團化が始まり、階級としてのクラークを絶滅する政策の方への轉換が始まった時までの時期においても、わが國で實行されたのであった。

一九二五年十二月の第十四回黨大會（黨中央委員會の活動報告についての決議参照）からでもよいが、そのときから、一九二九年四月の第十六回黨會議（「農業の高揚の道について」の決議参照）にいたるまでの、黨の最も重要な諸文獻をよく觀察するならば、「クラークの搾取者的志向の抑制」もしくは、「農村における資本主義の成長の抑制」についてのテーゼが、「農村の資本主義的要素のしめ出し」についてのテーゼ、また、「農村の資本主義的要素の克服」についてのテーゼと、常に同列にあることに氣ずかないわけにはゆかないのである。

これは何を意味しているか？

これは、黨が農村の資本主義的要素をしめ出すということと、クラークの搾取者的志向を抑制する政策、農村の資本主義的要素を抑制する政策とを、別々なものとはしていないということを意味している。

第十五回黨大會、そしてまた第十六回黨會議も同様に、「農業ブルジョアジーの搾取者的志向の抑制」(第十五回黨大會の決議「農村における活動について」)なる政策の基礎の上に、「農村における資本主義の發展を抑制する新方策の適用」(前掲決議参照)なる政策の基礎の上に、「クラークの搾取者的志向の斷乎たる抑制」(五カ年計畫についての第十五回黨大會の決議参照)なる政策の基礎の上に、「クラーク並に個人商人に對して、更に、もつと系統的にして確乎たる抑制に移行する」という意味での、「クラークに對する攻勢」の政策(前掲決議参照)の基礎の上に、都市並に農村における「私營資本主義的經濟の諸要素」を、「もつと斷乎として、經濟上でじめ出す」政策(黨中央委員會の活動報告についての、第十五回黨大會の決議参照)の基礎の上に、完全に立脚しているのである。

したがつて、(イ)、資本主義的要素を抑制する政策と、彼等をはじめ出す政策とを、二つの異なる政策として描き出している上述の論文の筆者は正しくないのである。諸事實は、吾々はこの點において、資本主義の抑制という一つの共通的な政策をもっているのであつて、この政策の構成部分であり、その結果たるものが、クラークの個々の部隊のじめ出しなだということを物語つてゐる。

したがつて、(ロ)、農村の資本主義的要素のじめ出しということとは、再建期、即ち第十五回黨大會の時期になつてから、やつと始まつたのだと、斷言している上述の論文の筆者は正しくないのである。事實上、じめ出しということは、第十五回黨大會以前、即ち復興期にも、また、第十五回黨大會後、即ち再建期にも行われた。第十五回黨大會の時期には、新しい追加方策によつて、クラークの搾取者的志向を抑制する政策が、強化されたにすぎなかつたのだ。そして、これと關連して、クラークの個々の部隊のじめ出しも、當然強化されなければならなかつたのである。

二、論文には次のように述べられている――

「階級としてのクラークを絶滅する政策は、資本主義的要素のしめ出しという政策からそつくり生じたものであつて、新段階におけるこの政策の繼續である」。

この命題は不精確であり、したがつて、正しくない。階級としてのクラークを絶滅するという政策がひとりでに天から降つてくることのできるものでないということは、わかりきつたことである。この政策は、農村の資本主義的要素の抑制、したがつてまたそのしめ出しの政策をとつていた過去の時期全體にわたつて準備されたものであつた。だがこのことは、この政策が、農村の資本主義的要素の抑制の（またしめ出しの）政策とは、根本的に異つてはいないとか、或は、この政策が、恰も、抑制の政策の繼續であるかのように見なしてもよいということはまだ意味してはいない。わが筆者がいつているようにいうことは、一九二九年の夏以來、農村の發展上において見られる急轉換を否定することを意味している。こんなふうにいることは、吾々が農村におけるわが黨の政策上において、この時期に轉換を實行したという事實を否定することを意味する。こんなふうにいることはかつてブルムキンが、コルホーズとソフホーズの創設政策に反對して、第十四回黨大會の決定に絡みついたと同様に、現在、黨の新しい政策に反對して、第十五回黨大會の決定に絡みついているわが黨内の右翼分子のために、ある種のイデオロギー的避難所を設けてやることを意味するのである。

農村の資本主義的要素を抑制する（そしてまたしめ出す）政策を強化することを宣言するにあたり、第十五回黨大會は、何を根據としたのであつたか？それは、クラークに對するこの抑制にも拘らず、階級としてのクラークは、當分の間は、やはり残らねばならぬということを根據としてである。この根據に立つて、第十五回黨大會は、土地の借り手の大多數がクラークであるということを、二百も承知の上で、土地の賃貸借についての法律を有効なままに残しておいたのであつた。この根據

に立つて、第十五回黨大會は、農村における労働雇傭法を、確實に實施することを要求してこの法律を有効なままに残しておいたのであつた。この根據に立つて、クラークの財産收奪ということの許さるべきでないことがもう一度宣言されたのであつた。これらの法律と、これらの決定とは、農村の資本主義的要素の抑制の（またしめ出しの）政策に矛盾對立してゐるであろうか？ 勿論そんなことはない。これらの法律とこれらの決定とは、階級としてのクラークを絶滅する政策に矛盾對立してゐるか？ 勿論、然りである！ したがつて、これらの法律とこれらの決定とは、全面的集團化の進行してゐる地方、集團化普及の範圍が、一日毎にではなく、一時間毎に擴大してゐる地方においては、今や、協の方へのけておかねばならないこととなるのである。とはいへ、全面的に集團化の進行してゐる地方ではコルホーズ化運動の進行過程そのものにおいて、すでに、これらの法律や決定は協の方へのけられてしまつてゐるのである。

これでもなお、階級としてのクラーク絶滅の政策は、農村の資本主義的要素の抑制の（またしめ出しの）政策の繼續であると、斷言してもよいだろうか？ そんなことをいつてはならないということとは、明かなことである。

上述の論文の筆者は、土地を自由に使用する權利と共に生産用具をクラーク階級的手中に残しておき、また、わが實踐活動上で、農村における労働雇傭についての法律、土地の賃貸借に關する法律、クラークの財産の收奪禁止の法律を保存して、おいて、課税ならびにあらゆる他の抑制の方策によつて、階級としてのクラークの階級をしめ出すことはできないということとを、忘れてゐるのである。筆者は、クラークの搾取者的志向を抑制する政策の下では、クラークの個々の部隊だけをしめ出すことを期待し得ること、そしてこのことは、階級としてのクラークを、當分の間保存しておくことと矛

盾するのではなくて、反對に、それを豫定しているということを忘れてゐる。階級としてのクラークを締め出すためには、そのためには、クラークの個々の部隊の抑制と締め出し政策では不十分である。階級としてのクラークを締め出すためには、この階級の反抗を、公然たる戦いにおいて撃破し、彼等の生存と發展の生産上の諸源泉（土地の自由な使用、生産用具、土地の賃貸借、労働雇傭の權利、等々）を、彼等から剝奪してしまふことが必要である。

これが即ち、階級としてのクラークを絶滅する政策への轉換である。これをやらないで、階級としてのクラークを締め出すことを云々するのは、右翼的偏向者のみにとつて都合がよく、そしてまた有利な、つまらないおしやべりである。これをやらないでは、農村における如何なる眞剣な集團化、況んや全面的な集團化などということは、思いも及ばぬことである。クラークをやつつけ、全面的な集團化を實現しているわが農村の貧農と中農はこのことをよく理解した。だが、あるわが同志達は、どうもまだこのことを理解していないらしい。

したがつて、農村における現在の黨の政策は、舊來の政策の繼續ではなくて、農村の資本主義的要素を抑制する（そして、締め出す）舊來の政策から、階級としてのクラークを絶滅する新しい政策への轉換ということなのである。

一九三〇年一月二十一日付「クラスマナヤ・ズヴェズダ」第十八號

成功による眩惑

——コルホーズ化運動の問題について——

コルホーズ化運動の領域における、ソヴェト権力の成功について、今やすべての人々は語り合っている。敵さえも、重大な成功の現存を認めることを餘儀なくされている。そして、實際、これらの成功は偉大なものである。

本年の二月二十日現在で、ソ同盟全體の農民經營の五割を、すでに集團化したということは事實である。このことは、吾々が一九三〇年二月二十日までに、集團化の五カ年計畫を、二倍以上も超過遂行したことを意味している。

本年の二月二十八日現在で、コルホーズは、春蒔きのための種子を、三千六百萬ツェントネル（一ツェントネルは一〇〇キログラム——譯者註）以上、即ち計畫の九割以上、約二億二千萬ブード（一ブードは一六・三六キログラム——譯者註）を、すでに徴收することができたのは、事實である。コルホーズの線のみによつて——しかも穀物調達計畫を好結果に遂行した後——二億二千萬ブードの種子を集めたということは、巨大な成果である。これを認めないわけにはゆかない。

これらのことはみな、何を物語っているか？

社會主義の方への農村の根本的な轉換は、すでに保障されたものとみなしてもよいということを物語っている。

これらの成功が、わが國の運命にとつて、わが國における指導勢力としての労働者階級全體にとつて、最後に、黨自身にとつて、極めて大きな意義をもっているということを、證明する必要はない。直接の實際的結果については、すでにいうまでもなく、それらは、即ちこれらの成功は、黨そのものの内部生活にとつて、またわが黨の教育にとつて、巨大な意義をもっている。それらは、元氣に満ちた精神と、自己の力に對する信念とをわが黨に吹きこんでいる。それらは、吾々の大業の勝利に對する信念をもつて、労働者階級を武装させている。それらは、幾百萬という新しい豫備隊を、わが黨に引き寄せている。

ここにおいて黨の任務は、すでに獲得した諸成功を鞏固化し、一層前進するために、これらの成功を計畫だてて利用するということになるのである。

だが成功というものは、各々その陰影面をもっている。特にその成功が、比較的「容易」に、たとえば「思いがけなく」というふうに分ることができたようなときにそうである。かかる成功は、時としては、「吾々は、どんなことでもできる！」とか、「どんなことだつて、吾々にとつてはなんでもないことだ！」とかいうような、自惚と高慢な心持をおこさせる。即ちそれらは、これらの成功は、しばしば人々を酔わせる。しかして、人たちは、成功によつて有頂天になりだし、度を失い、現實を理解する能力を失い、自己の力を過大評價して、敵の力を過少評價せんとする志向が現われ、社會主義建設についての一切の問題を「一舉にして」解決してしまおうとする冒險主義的な企てが現われてくる。

のである。もうこうなつては、すでに獲得した成功を鞏固化し、一そう前進するために、これらの成功を計畫だてて利用する、ということについての氣くばりなどということは、すでに行われるすべもないのである。何が故に、吾々は、すでに獲得した成功を鞏固にする必要などがあるのか、吾々は、「一舉にして」社會主義の完全な勝利まで、駆けつけることができるんだから。「吾々は、どんなことでも出来る！」、「どんなことだつて、吾々にとつてはなんでもないことだ！」から。

ここにおいて黨の任務は、大業にとつて危険であり、かつ有害な、これらの氣持に對して斷乎たる鬭争を遂行し、これらの氣持を黨から驅除するということになるのである。

しかし、これらの大業にとつて危険であり、かつ有害である氣持が、わが黨の陣列内に幾分たりとも、廣く傳播されていたということはできない。だが、それらは、即ちこれらの氣持は、やはりわが黨内に存在しているし、それと同時に、これらの氣持が強化されはしないだろう、と確信する根據はないのである。そして、もしも、それらが、即ちこれらの氣持が、吾々の間で公然たる存在權を得るようになれば、コルホーズ化運動ということとは、著しく弱められるであろうし、またこの運動が挫折させられる危険が現實的なものとなるかも知れない、ということとは、疑うことのできないことであろう。ここにおいてわが言論界の任務は、これらの、そしてまた、これに類する反レーニン主義的氣持を、系統的に暴露するということになるのである。

次に二——三の事實を挙げよう。

一、わがコルホーズ化政策の諸成功は、就中、それが、即ちこの政策が、コルホーズ化運動の自由意志性ということに立脚し、ソ同盟のそれぞれ異なる地方における條件の相違を十分考慮している、ということによつて説明される。コルホーズを力づくでつくり上げることはできない。そんなことは馬

鹿げたことであり、また反動的なことであろう。コルホーズ化運動は農民大衆の側からの、積極的な支持に立脚しなければならぬ。發展した諸地方における基本的コルホーズ建設のやり方をそのままを、まだ發展しておらぬ地方へ、機械的に移植してはならない。そんなことは馬鹿げたことであり、また反動的なことであらう。かかる「政策」は、集團化の理念の威信を、ただの一撃で失墜せしめてしまつたであらう。コルホーズ建設のテンポと方法を決定するに當つては、ソ同盟のそれぞれ異なる地方における條件の相違を、注意深く考慮する必要があるのである。

コルホーズ化運動において、全地方の先頭に立つているのは、わが國では穀物生産地方である。なせか？

なせならば、第一に、吾々はこれらの地方に、すでに鞏固になつたソフホーズとコルホーズとをどこよりも、最も多くもつており、それがために、農民は、新しい技術の力と意義を、また新しい、集團的經營組織の力と意義を、自ら會得する可能性をもつていたからである。

なせならば、第二に、これらの地方は、穀物調達カンパのときにおいて、クラークとの二年間に及ぶ鬭争の訓練を自らもつており、このことはコルホーズ化運動の事業を容易ならしめないわけにはゆかなかつたからである。

なせならば、最後に、これらの地方は、最近の數年間にわたつて、工業中心地から、最も優秀なカードルを、非常に多く供給されたからである。

これらの特別に有利な條件が、他の諸地方、たとえば、わが國の北部諸州のような穀物消費地方、或はトルケスタンといつたような、まだまだおくれっている民族諸地方にも、同様に存在しているといつてもよいであらうか？

否、そんなことをいうことはできない。

自由意志の原則と並んで、ソ同盟のそれぞれ異なる地方における條件の相違を考慮するといふ原則が、健全なコルホーズ化運動の、もつとも大切な前提の一つであることは、明かなことである。

ところで、實際上、わが國では、時としてどんなことが行われているか？ 自由意志の原則と地方的特殊性を考慮するという原則とは、多くの地方で違反することなく實行されているといつてもよいだろうか？ 否、残念ながらそういうことはできない。例えば、コルホーズを即時組織するために都合のよい條件が、穀物生産地方よりも比較的少ない穀物消費地帯である北部の多くの地方では、コルホーズを組織するための準備活動を、コルホーズ化運動における役人的法令による命令主義、コルホーズの成長についての紙の上だけの決議、或は、實際のところ、まだ存在していないのに、コルホーズの「存在」についての、自慢だからだらの決議は山ほどもあるというような、紙の上だけのコルホーズを組織することによつて、すりかえようとの努力がなされていることも、稀ではないといふことは、周知のことである。

或は、コルホーズを即時組織するために都合のよい條件が、北部の消費地帯の諸州よりもまだまだずつと少ないトルケスタンのある諸地方を例にとつてみよう。トルケスタンの多くの地方において、武力をもつて脅かし、今のところまだコルホーズに加入することを欲しない農民には灌水もしてやらないし、また工業製品も供給してやらないと脅かすことによつて、ソ同盟の先進的諸地方に、「追いつき、追い越さん」という企圖がすでにあつたといふことは周知のことである。

下士ブリシベエフ* 的なこの「政策」と、コルホーズ建設の事業において、自由意志と地方的特

* 頼まれもせぬのに秩序と道徳の擁護者の役目をつとめようとする頑冥固陋な人

のタイプ。チエホフの同名の小説から出たもの。——譯者註

殊性を考慮するということに立脚している黨の政策との間に、どんな共通點があり得るであろうか？ これらの間には、何らの共通點もないし、またありえないということとは明かなことである。

これらの曲解、コルホーズ化運動におけるこのお役人的の法令による命令主義、農民に對するこれらのくだらない脅迫は、一體だれに必要なのであろうか？ 吾々の敵以外には、だれにも必要ではないのだ！

これらの曲解は、どんな結果に導き得るであろうか？ 吾々の敵の強化とコルホーズ化運動の理念の威信の失墜に導く。

「左翼」をもつて自任している、これらの曲解の發案者は、事實上、右翼日和見主義のお先棒の役目をつとめているのだということとは、明かなことではないか？

二、わが黨の政治的戰略上における最大の功績の一つは、わが黨が、各々の當該瞬間において、運動の鎖の基本的環を選びとることを心得ているということであつて、この環をつかんでおれば、任務を解決できるために、一つの共通の目標へ、あとで鎖全體を引きつけ得るということにあるのである。黨は、すでに、コルホーズ建設體系中で、コルホーズ化運動の鎖の基本的な環を選びとつたといつてもよいであらうか？ 然り、そういつてもよいし、またそういふことが必要である。

この鎖の基本的環とは何であるか？

土地の共同耕作のための協同經營であらうか？ 否、それではない。生産手段がまだ共有化されていないところの、土地の共同耕作のための協同經營は、コルホーズ化運動の、すでに過去となつた段階なのである。

それは農業、コンミューンであろうか？ 否、コンミューンではない。コンミューンは、まだ今のところでは、ホルホーズ化運動において稀に見られる現象である。生産のみならず、分配もが共有化されているところでの最も一般的な形態としての農業コンミューンのためには、條件はまだ成熟していない。

ホルホーズ化運動の鎖の基本的環、現在つかまなければならぬところの、現時機におけるホルホーズ化運動の最も一般的な形態というのは、農業アルテリである。

農業アルテリでは、基本的な生産手段、主として穀物栽培經營のために必要なもの、即ち労働、土地の使用権、機械その他の農具、役畜、經營用建物が共有化されている。農業アルテリでは、宅地附屬地（小野菜畑、小果樹園）、住宅、搾乳用家畜の一定部分、小家畜、家禽等々は共有化されない。

アルテリは、ホルホーズ化運動の鎖の基本的な環である。なせならば、アルテリは、穀物問題を解決するための、最も適當な形態だからである。穀物問題こそは、農業の全體系中における鎖の基本的な環なのである。なせならば、この問題を解決せずには、畜産（小家畜も大家畜も）の問題も、工業に主要原料を提供している加工用並に特殊農産物の問題も解決することは不可能だからである。それだからこそ、農業アルテリは、現時機においては、ホルホーズ化運動の體系中における鎖の基本的な環なのである。

完成された本文が今日發表されている* ところの、ホルホーズの「模範的規約」は、以上の點から發足しているのである。

* 一九三〇年三月二日付「ブラヴダ」。

わが黨とソヴェトとの働き手、即ちその義務のうちの一つが、この規約を本質的に研究し、この規約を徹底的に實行することにあるところの彼等もまた、以上の點から發足しなければならぬのである。

かくのごときが、現時機における黨の方針である。

黨のこの方針が、違背と歪曲なしに、實行されているといつてもよいであらうか？否、遺憾ながら、そういうことはできない。ソ同盟の多くの地方、即ちコルホーズの生存を擁護するための闘争が、まだまだ終つていないところ、また、アルテリがまだ鞏固になつていない地方において、アルテリの範圍を飛び出し、農業コンミュンへ一舉に飛び移らんとする試みがあるという事は、周知のことである。アルテリはまだ鞏固になつていないのに、彼等は住宅や小家畜、家禽をすでに「共有化しつつあり」、而して、この「共有化」は、紙の上だけの、官僚主義的な法令による命令主義に變性しつつある。なぜならば、かかる共有化を必要ならしめる條件が、まだ存在していないからである。穀物問題は、コルホーズにおいてすでに解決されたし、この問題は、すでに過去となつた段階であり、現時機における基本的な任務は、穀物問題の解決ということではなくて、畜産と養禽の問題の解決である、と考える者があるかも知れない。そこにおける問題は、コルホーズ化運動のそれぞれ異なる形態を、ごつちやませにしてしまうようなこの無茶な「活動」が、だれに必要か？ ということである。この馬鹿げた、そして事業にとつて有害な先つ走りが、だれに必要か？ 穀物問題はまだ解決されておらず、コルホーズのアルテリの形態は、まだ鞏固になつていないときに、住宅、搾乳用家畜全部、小家畜全部及び家禽を「共有化」するという事によつて、コルホーズ農民をいらいらさせるとい

うこと——かかる「政策」が、吾々の不倶戴天の敵にのみ都合のよい、かつ有利なものであるだろうということは、明かなことではないか？

かかる熱狂的な「共有化主義者」のうちの一人は、「三日以内に各農家所有の家禽全部の数を調べ上げることに」、計算と監督をなすために、専門「指揮官」の職制を定め、「アルテリ内で最緊要的地位を占め」、「部署を去らずに、社會主義的戦闘を指揮し」、そして、——わかりきつたこととして——アルテリ全部をしっかりと手中に握りしめることを指定している命令を、アルテリに與えるという程度にまで達している。

これはいつたい何か？ コルホーズを指導する政策か、それとも、コルホーズを崩壊させ、その信用を失わせるための政策か？

アルテリ組織の仕事を、教會の鐘を取外すことから始めるところの、失禮ながら、括弧すきの革命家達については、私はもはや述べない。鐘を取外すなんて、——まあ考えても見てくれ給え、何とていふ凄じい革命主義であることよ！

「共有化」に關するこれらの無茶な眞似、自分自身を飛び越えようとする笑止千萬な企圖、階級と階級闘争を避ける事をその目的としているが、實際上では、吾々の階級敵のお先棒の役目をつとめるような企圖が、どうして吾々の間に發生することができたのであろうか？

それらは、コルホーズ建設の戦線における吾々の「容易な」、そして「思いがけない」成功、という雰囲気においてのみ發生することができたのだ。

それは、黨の一部の陣列内におけるだらしない愚劣な気分、即ち「吾々は、どんなことでもで

きる！」とか、「どんなことだつて、吾々にとつてはなんでもないことだ！」という氣分の結果としてのみ、發生することができたのだ。

それらは、あるわが同志達が、成功によつて有頂天となり、明確な理智と冷靜なる見解とを、しばし失つてしまつた結果としてのみ、發生することができたのだ。

ユルホーズ建設の領域における吾々の活動の方針を匡正するためには、これらの氣分をすつかり無くしてしまふことが必要である。

黨の當面の任務の一つは、現在この點にあるのである。

指導の技巧ということは、重大なことである。運動から落伍してはならない。なせならば落伍するということは、大衆から切離されることを意味するからである。だが、先つ走りしてもならない。なせならば、先つ走るといふことは、大衆を失い、自己を孤立化することを意味するからである。運動を指導し、それと共に幾百萬といふ大衆との連繫を保持しようとする者は、二つの戦線において、即ち、落伍している者に對しても、先つ走りしている者に對しても、鬭争を遂行しなければならない。わが黨は強力であり、決して打ちまかされることのない黨である。なせならば、運動を指導するに際しては、黨は、幾百萬といふ労働者農民大衆との自己の連けいを保持し、かつ、これを益々増進させることを心得ているからである。

同志コルホーズ員たちへの回答

新聞によつてすでに周知のように、スターリンの論文「成功による眩惑」*と、「コルホーズ化運動における黨方針の歪曲に對する鬭争について」という黨中央委員會の周知の決定とは、コルホーズ化運動を實際にやつている働き手達の間に、非常に多くの反響をよび起した。この事と關連して、私は最近、コルホーズ員同志諸君から、そこに提出された質問に對して回答を要求する多くの手紙を受けつた。私の義務は、個人的な文通によつて、これらの手紙に回答することであつた。だが、これらの手紙の半分以上は、發信人の住所が記されていなかった（彼等は、住所を書き送ることを忘れたのだ）、個人的に返事を出すということは不可能となつた。しかして、手紙の中で言及されている問題は、すべてのわが同志諸君にとつても、非常に大きな政治的な興味をもつ問題である。その上に、自分の住所を書き送ることを忘れた同志諸君に對しても、私は、返事をせずそのままにしておくなどということができなかつたのは、わかりきつたことである。そこで、私は、コルホーズ員同志諸君

* 本書五二一——五三〇頁参照。編集部

の手紙に對して、このことにとつて必要な問題全部を、これらの質問の中からとり上げて、公開的に即ち出版物上で、回答することがぜひとも必要になつたのであつた。私は、このことについて黨中央委員會の直接の決定をもつていたので、なおさら進んでこの仕事に着手したのである。

第一の質問。農民問題における、誤謬の根源は何であるか？

回答。それは、中農に對する間違つた態度という點である。中農との經濟的關係の方面において、暴力を用いたという點である。中農大衆との經濟上の結合は、暴力的手段を基礎とするのではなくて、中農との協調を基礎として、中農との同盟を基礎として築き上げられなければならないということ、忘れてゐる點である。また、現時機におけるコルホーズ化運動の基礎は、一般的には資本主義に反對し、そして特殊的にはクラークに反對するところの、労働者階級並に貧農と中農との同盟であることを忘れてゐる點である。

攻勢が、中農との統一戦線で、クラークに反對して遂行されてゐる間は、萬事うまく運んでゐた。だが、成功で有頂天になつたあるわが同志達が、クラークに對する攻勢の道から、中農に對する鬭争の道へ知らぬ間に轉落し始め、彼等が、集團化の率が高くなることをのみ追い求めて、中農の選舉權を剝奪し、中農に對して『クラーク收奪』を行い、沒收して、中農に暴力を加えはじめるようになったときには、攻勢ということは歪曲されはじめ、中農との統一戦線は破壊されはじめ、而して、當然なこととして、クラークは、再び起き直ろうと企圖する可能性を得たのであつた。

吾々の階級敵に對する鬭争においては、必要であり、かつ有益である暴力行使が、吾々の同盟者である中農に對しては、許すべからざることであり、かつ極度に有害なものであるということが忘れられてしまつたのであつた。

軍事的課題を解決するためには、必要であり、かつ有益である騎兵の突撃が、コルホーズ建設、しかも、中農との同盟によつてこそ組織することのできるコルホーズ建設の任務を解決するに際して用いられることは、全く用をなさぬことであり、極度に有害なものであるということが忘れられてしまつたのであつた。

以上の點にこそ、農民問題における誤謬の根源があるのである。

以下は中農との經濟上の關係について、レーニンが語つてゐるところである――

「この點においては、暴力行使の方法によつては、問題の實質上、何事も達成することができないという眞理に、吾々は何よりも特に依據しなければならぬ。經濟的任務は、この點では全く異なつてゐる。この點では、家の土台全部、建物全部をそのままに残しておいて、切離すことができるような上層部というものはない。都市においては資本家であつたこの上層部は、ここにはない。ここで暴力を行使するということは、全問題を破壊させてしまふことである。……中農との經濟的關係の方面において、暴力を行使しようとするこの、考えほど馬鹿げたものは、他に一つもないのである」。 (レーニン全集、第二四卷、一六八頁)

さらに――

「中農に對して暴力を用いることは、それ自身極度に有害なことである。中農は非常に人數の多い、數百數千萬を數える社會層である。どこにも中農がこんなに強力にはなつておらず、技術と文化、都市の生活、鐵道が素晴しく發展し、どこよりも容易にそういうことを考えやすそうなどころであるヨーロッパにおいてさえも、誰も、最も革命的な社會主義者のうちのただ一

人も、中農に對して暴力手段を用いることを提案した者はなかつた」。〔レーニン全集、第二四卷、一六七頁〕

これは明瞭なことだと思ふ。

第二の質問。コルホーズ化運動における主要な誤謬は、どういふことか？

回答。かかる種類の誤謬は少なくとも三つある。

一、コルホーズ建設に際して、レーニンの自由意志の原則に違背した。コルホーズ建設は自由意志性によつて行わるべきであるといふことについての、黨の基本的指示と農業アルテリの模範規約とに違背した。

レーニン主義は、農民を自由意志の原則によつて、また、個人經營に對する公共經營、集團經營の優越を納得させるという方法によつて、集團經營の軌道へ移行させることの必要を教えている。レーニン主義は、集團經營の優越性をもつて農民を納得させるといふことは、コルホーズが個人經營よりも勝れていること、コルホーズが個人經營よりも有利であること、コルホーズが農民に、貧農と中農に、窮乏と貧窮からの活路を與えるといふことを、彼等に示し、そして實際において、經驗によつて證明し得るであらう場合にのみ、でき得ることを教えている。レーニン主義は、これらの條件なしに、コルホーズが鞏固なものたることはできないといふことを教えている。レーニン主義は、コルホーズ的經營を暴力を用いて無理に押しつけようとする一切の試み、強制的手段によつてコルホーズを建設しようとする一切の試みは、否定的な結果をもたらさし得るのみであり、コルホーズ化運動から、農民を離反させ得るのみだといふことを教えている。

そして、實際に、この基本的な規則が嚴守されていた間は、コルホーズ化運動は、次から次へと

成功したのであつた。ところが、成功に有頂天になつたあるわが同志達は、これらの規則を無視するようになり、極度にせつちかちになりはじめ、そして、集團化率を高くすることをのみ追い求めて、強制的手段によつてコルホーズを建設するようになった。かかる「政策」の否定的な諸結果が、まもなく現れずにはいなくなつたということは、いささかも驚くべきことではない。急いで作り上げたコルホーズが、迅速にでき上つたと同じ様に、迅速に崩壊しはじめ、昨日はまだコルホーズに對して深大な信頼をもつていた農民の一部が、コルホーズから離れてゆき始めた。

この點に、コルホーズ化運動における第一の、そして主要な誤謬があるのである。

つぎのときが、コルホーズ建設の自由意志性に關してレーニンが語つてるところである――

「現在、吾々の任務は、土地の公共耕作へ移行し、大規模の公共經營に移行する事である。だが、ソヴェト權力の側からの、いかなる強制もあつてはならないし、いかなる法律もこれを強制することはない。農業コンミュンは自由意志に基礎をおいており、土地の公共耕作への移行は、ただ自由意志によつてのみ行われ得るのであり、労働者農民政府の側からの、これに對する最少の強制もあつてはならないし、また、法律によつて行うということも、許されないことである。諸君のうちの誰かが、かかる強制を目標したとすれば、諸君は、それが法律の濫用であり、それが法律の違反であることを理解しなければならぬし、吾々は、それを全力を盡して匡正しよう」と努力しているし、また匡正するであろう」*。(レーニン全集、第二四卷、四三頁)

* 傍點は私による。――イ・スターリン

さらに――

「公共的、集團的、協同的、アルテリの土地耕作の優越していることを、農民に事實上で示すことに成功し得るような場合にのみ、また協同的、アルテリの經營の方法によつて農民を援助することに成功し得るような場合にのみ、その時にのみ、自己の手に國家權力を握っている勞働者階級は、眞に、自己の正當さを農民に證明し、眞に、幾百萬という農民大衆をがっちりとし、かつ本當に自分の側に惹きつけることができるであろう。それゆえに、協同的、アルテリの農業に協力するための、あらゆる種類の方策の意義を、最大評價すべきである。吾々は、僻村に分散し、散在している幾百萬の個々別々の農民經營をもっている。……協同的、アルテリの農業への移行が、必要であり、かつ可能であることを實踐上で、農民にとつて理解し易い經驗に基いて證明されるであろうときのみ、そのときにのみ、ロシアのようなかかる尨大なる農民國において、社會主義的農業の道に沿つて、重大な前進が行われるということ、吾々はいふ權利を與えられるであろう」*。(レーニン全集、第二四卷、五七九――五八〇頁)

「ソヴエト權力の代表者達は、あらゆる種類の協同經營、そして、同じ様に中農の農業コンミューンをも奨励することにしても、これらを築きあげるに際して、どんな小さな強制にしろ、決して行使してはならないのである。農民の自由な發議によつて彼等自身が實行し、その有利なことを彼等が實踐によつて審査したところの連合體のみが、價值をもつのである。このことにおい

*傍點は私による。――イ・スターリン

て、過度に急ぐ、ということは有害である。なせならば、それはただ、革新に反対する中農の偏見を強めることだけに役立つからである。農民をコンミュンに加入させることを目標として、直接的な強制のみでなく、たとえ間接的なものといえども、強制を行使することを自分に許すようなソヴェト権力の代表者達は、最も厳しい處分を受け、かつ農村における仕事から却けられなければならない*。(レーニン全集、第二四卷、一七四頁)

これは、明瞭なことだと思う。

黨が、レーニンのこれらの教示を、最も嚴格に實行するであろうということは、おそらく證明する必要があるまい。

二、コルホーズ建設については、ソ同盟のそれぞれ異なる地方における多種多様な條件を考慮すべきである、というレーニン主義的原則に違背した。ソ同盟には、それぞれ異なる經濟的形態と文化水準をもつ、極めて多種多様の州がある、ということを忘れてしまったのだ。これらの州の中には、先進的な州、中位な州、おくれた州のあることを忘れてしまったのだ。コルホーズ化運動のテンポとコルホーズ建設の方法とは、これらの、非常にかげはなれた相違をもつ諸州に對して、同一であることはできない、ということを忘れてしまったのだ。

レーニンは次のようにいつている——

『吾々が、ロシア中のすべての地方に對し、一般に千篇一律の布告を書くならば、ウクライナやドン地方のボルシエヴィキの共産黨員ソヴェトの働き手たちが、何らの區別をすることもな

* 傍點は私による。——イ・スタヴリン、

く一様に、他の諸州へまでこれらの布告を及ぼすにいたつたならば、それはまちがいであろう。……なせならば、『吾々は、いかなる場合にも、一様な、型にはまつた行動で自分を縛りつけはしないし、また吾々の経験、即ち、中央ロシアの経験を、すべての邊境地方へ、そつくりそのまゝ移してもよいなどということ、こゝろん際決定しはしない』からである。(レーニン全集、第二四卷、一二五—一二六頁)

さらに、レーニンは次のようにいつている——

「中央ロシア、ウクライナ、シベリアを千篇一律化し、一定の型に押しこめようとすることは、この上なくひどい馬鹿げたことであろう」。(レーニン全集、第二六卷、二四三頁)

最後に、レーニンは、カフカズの共産黨員に對して、彼等が次のようにすべきことを義務付けている——

「ロシア・ソヴェト連邦社會主義共和國の狀態並に條件と相違する、彼等の狀態、彼等の共和國の狀態の獨特性を理解し、わが戰術をそのまま引き寫しにするのではなくて、具體的な條件の相違に適用し得るよう、熟考して、この戰術の形態を變えることの必要を理解すること」ぞ。

(レーニン全集、第二六卷、一九一頁)

これは明瞭なことだと思ふ。

レーニンのこれらの教示にもとずき、わが黨中央委員會は、『集團化のテンポについて』(一九三〇年一月六日付『ブラヴダ』參照)なるその決定において、集團化のテンポという見地から、ソ同盟の諸州を三つに分類した。それらのうちで、北カフカズ、ヴォルガ中流、ヴォルガ下流は、大體において、一九三一年の春に集團化を完了することができるであろうし、他の穀物生産地方(ウクライ

ナ、中部黒土州、シベリア、ウラル、カザヒスタン、その他）は大體において、一九三二年の春に、集團化を完了することができ得るであろうが、その他の諸州は、集團化を、五カ年計畫の終りまで、すなわち一九三三年まで延長してもよいのである。

ところで、實際には、どうなつたか？ コルホーズ化運動は最初の成功で有頂天になつたわが同志達のある者は、レーニンの教示に關しても、黨中央委員會の決定についても、あつさり忘れてしまつた。モスクワ州は、集團化率のいかさま數字を夢になつて追っかけまわり、少なくとも三カ年、（一九三二年末まで）の餘裕が残されていたにもかかわらず、一九三〇年の春までに、集團化を完了するように、この州の働き手達を指導しはじめた。中部黒土州は「他の州よりもおくれること」をいさぎよしとせず、少くとも二カ年（一九三一年末まで）の餘裕が残されていたにもかかわらず、一九三〇年の上半期までに、集團化を完了するように、この州の働き手達を指導しはじめた。しかして、後カフカズとトルケスタンの働き手達は、先進的の地方に、「追いつき、追い越す」ことに熱中して、満四カ年（一九三三年末まで）の餘裕が残されていたにもかかわらず、「最短期間」内に集團化を完了するように、指導しはじめた。

集團化のかかる性急な「テンボ」によつて、コルホーズ化運動への準備が、まだ十分にはできていない地方が、より多く準備された地方を「追い越すこと」に熱中するとなれば、コルホーズ化運動の急速なテンボのために不足な諸要因を、自分自身の行政上の激情でおぎなおうと企て、強化された行政上の壓力を加えることを餘儀なくされるといふことは、わかりきつたことである。その結果は、すでに周知のことである。これらの州に混亂がおこり、それはその後黨中央委員會が干渉することによつて、解決されたことは、だれもが知つていふところである。

ここに、コルホーズ化運動における第二の誤謬があるのである。

三、コルホーズの建設について、運動の未完成形態を飛び越すことを、許すべからざることとするレーニン主義の原則に違背した。大衆の發展よりも先きつばしりをせず、大衆の運動に命令せず、大衆から切離されず、わがスローガンの方へ大衆を導き、わがスローガンの正しいことを、彼等が自身自身の経験によつて、容易に納得できるようにさせながら、大衆と共に行動し、彼等を前進させるといふ、レーニン主義の原則に違背した。

レーニンは、次のようにいつている——

『ペトログラードのプロレタリアートと、ペトログラード守備隊の兵士とが権力を奪取したときに、彼等は、次のことを非常によく心得ていた。即ち、農村における建設事業は、大きな困難に遭遇するであろうということ、したがつて、農村では、もつと漸進的に物事を行わなければならぬこと、農村で、土地の公共耕作を、布告で、法規で實行しようと試みることは、甚だしく馬鹿げたことであつたろうということ、農民のうちの極く少數の先覺者は、これに同意したであらうが、大多數の農民は、この任務を念頭にもおいてはいないということ、これらをよく知つていた。そして、それゆえに、吾々は、革命の發展のために、絶対に必要なことだけに局限した。即ち、いかなる場合にも、大衆の發展に先き走りすることなく、これらの大衆自身の経験によつて、彼等自身の鬭争によつて、前進の運動が発生するまで待つてゐることであつた』*。

(レーニン全集、第二三卷、二五二頁)

* 傍點は私による。——イ・スターリン

レーニンのこれらの教示を根據として、黨中央委員會は、「集團化のテンポについて」(一九三〇年一月六日付『プラヴダ』參照)という周知のその決定の中で、次の諸點を認めた。即ち、

イ、現時機におけるコルホーズ化運動の主要形態は、農業アルテリであること。

ロ、それゆえに、コルホーズ化運動の主要形態としての、農業アルテリの模範規約の作成が必要であること。

ハ、吾々の實踐活動上において、コルホーズ化運動を上から「法令によつて命令すること」、また「集團化ごっこ」などということが、行われてはならないこと、これである。

これは、吾々が、現在コムミュンの方へではなくて、コルホーズ建設の主要形態としての農業アルテリへの進路を取らなければならないこと、また、農業アルテリを飛びこえて、コムミュンへ飛躍してはならないこと、また、コルホーズへ向う農民の大衆的運動を、コルホーズ建設を「法令によつて命令すること」をもつて、「コルホーズごっこ」をもつてすり代えてはならない、ということの意味している。

これは、明瞭なことだと思ふ。

ところで、實際にはどうなつたか？コルホーズ化運動における最初の成功で有頂天になつたわが同志達のある者は、レーニンの教示も、黨中央委員會の決定も、あつさりと忘れてしまつたのだ。農業アルテリを目ざす大衆的な運動を組織する代りに、これらの同志は、個人農を、コムミュンの規約どおりに、直接「移行させる」にいたつた。運動のアルテリの形態を鞏固にする代りに、小家畜、家禽、自家用の搾乳用家畜、住居を強制手段によつて「共有化する」にいたつた。

レーニン主義者にとって、許すことのできないこの性急な態度が、どんな結果をもたらしたかということは、現在だけでも知つているところである。確固としたコンミュンは、常則として、勿論でき上らなかつた。しかし、これがために、彼等は、多くの農業のアルテリを自己の手中から落してしまつた。もつとも、「良い」決議は残つた。だが、これらの決議が何の役に立つてあるうか？

この點に、コルホーズ化運動における第三の誤謬があるのである。

第三の質問。これらの誤謬は如何にして生じ得たか、また、黨は、いかにしてこれらの誤謬を匡正しなければならぬか？

回答。これらの誤謬は、コルホーズ化運動の領域における、わが迅速な成功の基礎の上に生じたのであつた。成功は、往々にして人々を眩惑させる。成功はしばしば過度の自惚と自惚を生みだす。このことは、権力の地位についている黨の代表者達には、特に起りやすいことである、わが黨のように、その力と權威が、殆ど測りたいほどの黨にとつては、特にそうである。ここにおいて、レーニンが激烈に闘争したところの共產主義的自惚という事實の發生が、完全に可能となるのである。ここにおいて、法令、決議、命令の萬能に對する信頼の發生ということが、完全に可能となるのである。ここにおいて、黨の革命的諸方策を、わが廣大無邊な國の此處彼處の隅々における、個々の黨代表者の、空虚な、お役人的法令主義に變えてしまふ危険性が、完全に現實的なものとなつているのである。私は、單に地方の働き手達だけについてでなく、個々の州の働き手、また個々の黨中央委員をも考慮に入れていつているのである。レーニンはつぎのようにいつている――

「共産主義的自惚とは、まだ肅清されずに共産党内にいる人間が、自分のすべての任務を共産主義的法令の發布によつて解決できると妄想することを意味する」。ヘレーニン全集、第二七卷、五〇——五一頁)

これこそ、コルホーズ化運動における誤謬と、コルホーズ建設の事業における黨の方針の歪曲とを發生させた地盤なのである。

これらの誤謬と歪曲とが、今後も繼續されれば、またそれらが迅速に、かつ痕跡をとどめざるまでに絶滅されなければ、これらの誤謬と歪曲との危険は、どういふ點にあるか？

この點における危険は、これらが、即ち、これらの誤謬が、コルホーズ化運動の信用を失墜せしめ、中農とは不和を來し、貧農の隊伍を亂し、吾々の陣列を混亂させ、わが社會主義的建設全體を弱らせ、クラークを回復させる方向へ、直通路によつて吾々を導いてゆくことにあるのである。

簡單にいえば、これらの誤謬は、農民の基本的大衆との同盟を鞏固にするという道から、プロレタリア獨裁を鞏固にする道から吾々を離れさせて、これらの大衆との決裂の道へ、プロレタリア獨裁の破壊の道へ、吾々を押しやる傾向をもっているのである。

この危険は、すでに二月の下半期において、すなわち從來の成功で眼が眩んでしまつた、わが一部の同志達が、レーニン主義的道から脇の方へ、一目散に疾走した丁度その時機に現われたのであつた。黨中央委員會は、この危険を考慮し、コルホーズ化運動についての特別な論文によつて行過ぎをした同志達に警告を與えることをスターリンに託して、遲滞なくこの問題に干渉した。ある人々は、「成功による眩惑」といふ論文はスターリンの個人的思いつきの結果として書かれたものだと考えている。そんなことはもちろん意味のない話である。わが國に黨中央委員會が存在しているのは、それが

どんな人間であるにしろ、かかる問題を、個人的な思いつきにまかせておくためではない。これは、中央委員会の深遠な偵察であったのだ。そして、誤謬の深度と範囲とが判明したときに、中央委員会は、一九三〇年三月十五日付の著名な決定を發表して遲滯することなく、自己の權威の全力を以て、この誤謬に打撃を與えたのであった。

斷崖に向つてまっしぐらに疾走して行く人々を、狂人のようになつて駆け出しているときに停止させ、彼等を正道に立ちもどらせるということは困難なことである。しかしながらわが中央委員会は、もつと大きな困難をも克服することを心得ているからこそ、レーニンの黨の中央委員会と稱されるのである。そしてわが中央委員会は、大體においてこれらの困難を、すでに克服したのであった。

かかる場合に、黨の部隊にとつては、自己の駆け足を停止させ、適時に正道に立ちもどらせ、かつ自己の隊伍を行進中に建て直すということは、困難なことである。だが、わが黨は、かかる困難を克服するに足るほど十分な巧妙さを習得しているからこそ、わが黨は、レーニン黨と稱されるのである。そして、わが黨は、すでに大體において、これらの困難を克服したのであった。

この點における主要な問題は、自己の誤謬を勇敢に認め、最短期間内にこれらの誤謬を絶滅する力を、自己の中に見出すということである。最近の成功で有頂天になつて、自己の誤謬を認めることを恐れ、自己批判を恐れて迅速かつ徹底的に誤謬を訂正することを望まないこと、この點に主要な困難があるのである。誤謬の痕跡をも残さぬようにするには、この困難を克服しさえすればよいのであり、誇張した數字をならべたてた課題と極端なお役所的官僚主義とを放棄しさえすればよいのであり、コルホーズの組織的・經濟的建設の任務に自己の注意を向け變えさえすればよいのである。黨が、大體において、すでにこの危険な困難を、克服したということ、疑う根據は何一つないのである。

レーニンは次のようにいつている——

「今日までに破滅したすべての革命的黨は、自惚に陥り、彼等の力が何に存するかを見ることができず、そして自己の弱點を語ることを恐れたがために破滅したのであつた。だが、吾々は破滅しないだろう。なせならば、吾々は、自己の弱點を語ることを恐れないし、また弱點を克服することをよく學びうるだろうからである*」。(レーニン全集、第二七卷、二六〇——二六一頁)レーニンのこれらの言葉を忘れてはならない。

第四の質問。黨方針の歪曲に對する鬭争は、後退もしくは退却ではないか？

回答。勿論そんなことはない！ここで、退却について云々することは、誤謬と歪曲を續けることを攻勢とみなし、誤謬に對する鬭争を退却とみなす人々のみである。誤謬と歪曲の山を築き上げるやり方での攻勢なんて、いうまでもなく、とんでもない「攻勢」というべきである：

吾々は、コルホーズ建設における活動への指導として、適當な模範規約を規定して、現時機におけるコルホーズ化運動の基本的形態として、農業アルテリを提案した。吾々はこの問題から、退却しつつあるのだろうか？ 勿論、そんなことはない！

吾々は現時機におけるコルホーズ化運動の基礎として、労働者階級並に貧農と中農との生産上の結合の鞏固化ということを提案した。吾々はこの問題から退却しつつあるのだろうか？ 勿論、そんなことはない！

吾々は現時機における、農村でのわが實踐活動のための主要スローガンとして、階級としてのク

* 傍點は私による。——イ・スターリン

レークの絶滅というスローガンを提案した。吾々は、この問題から退却しつつあるのだろうか？ 勿論そんなことはない！

吾々は、すでに一九三〇年の一月に、ソ同盟の全州を一定の郡に分類し、各郡に對して、各自特殊のテンポを確定して、ソ同盟における農業集團化の一定のテンポを決めたのであった。吾々は、この問題から退却しつつあるのだろうか？ 勿論、そんなことはない！

そんなら、どこに黨の「退却」があるというのか？

吾々は、誤謬と歪曲をした人々が自己の誤謬から退却することを欲しているのである。吾々は、向見ずの人達が自己の愚直さから離れてレーニン主義の立場へ戻ることを欲しているのである。ただこの条件の下においてのみ、吾々は、吾々の諸階級敵に對する眞の攻勢を繼續し得るであろうからこそ、これを欲しているのである。これは、吾々がかくすることによつて、後退しているということの意味するか？ もちろん、そんなことはない！ これは、吾々が向見ずの攻撃ごつこではなく、正しい攻勢を遂行することを欲していることのみを意味している。

變人と「左翼的」極端家のみが、黨のかかる方針を、退却として評價できるといふことは、明かなことではないであらうか？

退却についておじやべりをやつてゐる人達は、少なくとも二つの事柄を理解していない。

イ、彼等は攻勢の法則を知つていない。獲得した陣地を堅めることなしに行われた攻勢は失敗に運命づけられた攻勢であるということ、彼等は理解していない。

たとえば、軍事的についていえば、どんな場合の攻勢が、勝利すべき攻勢たることができるか？ それは、人々が猪突的な前進のみに局限せず、それと同時に占取した陣地を堅め、變轉した環境に

適應させて自己の勢力の配備變更をなし、後方を引き締め、豫備軍を引き寄せようと努力する場合における攻勢である。何のために、すべてこれらは必要なのか？ それは、不意打ちを喰わぬように、いかなる攻勢にも必ず起る個々の中斷を絶滅し、かくして、完全に敵を撃滅する準備をするために必要なのである。一九二〇年におけるポーランド軍の誤謬は、もともと問題の軍事的方面のみをとりあげてみるならば、彼等が、この規定を輕視したという點にあつたのである。ところでキエフ市まで一舉に突進した彼等が、その後ワルソウ市まで、また同じ様に一舉に後退することを餘儀なくされたということもまた、これによつて説明されるのである。一九二〇年におけるソヴェト軍の誤謬は、これもやはり同じ様に問題の軍事的方面のみをとつてみるとすれば、彼等がワルソウ市への攻勢に際して、ポーランド軍の誤謬を繰返したということにあつたのである。

階級闘争戦線における攻勢の法則についても、同じ様にいわなければならぬ。獲得した陣地を堅めず、自己の勢力を配備變更せず、豫備隊を戦線に保障せず、後方を引き締めず、等々では、階級敵を撃滅するために、勝利すべき攻勢を實行することはできない。

一切の問題は、向う見ずの人達が攻勢の法則を理解しないという點にあるのである。一切の問題は、黨がこれらのことを理解し、そしてそれを實行に移すという點にあるのである。

ロ、彼等は攻勢の階級の本性を理解していない。攻勢について叫びたてている。だが、どの階級と同盟して、どの階級に對する攻勢のことをいつているのか？ われわれは、中農と同盟して、農村の資本主義的分子に對して攻勢を行つてゐる。なせならば、かかる攻勢のみが、われわれに勝利を與えることができるからである。だが、もともと黨の個々の部隊の熱中の餘り、攻勢が正しい道を踏みはずしはじめ、その鋒先を、われわれの同盟者に反對して、すなわち中農反對に向け變更されたなら

は、どうなるであろうか？ 一定の階級と同盟して行く、一定の階級に對する攻勢ではなくて、あらゆる攻勢が、はたしてわれわれにとって入用であろうか？ ドン・キホーテもまた、風車を攻撃して、敵を攻撃していると夢想したのであつた。しかしながら、彼が、このいわゆる攻撃で、自分の肩間を破つただけであつたということは、周知のことだ。

明かに、ドン・キホーテのこの功名は、わが「左翼」極端家達を、大いに羨ましがらせているよ
うだ。

第五の質問。 わが國では、どつちが主な危険か？ 右翼的な危険か、それとも「左翼的」な危険か？

回答。 現在、わが國における主な危険は、右翼的危険である。わが國では右翼的危険が主な危険であつたし、また今もやはり主な危険である。

この命題は、「左翼」極端家達の誤謬と歪曲が現在、コルホーズ化運動の發展を阻止している主たるものであるという、一九三〇年三月十五日の黨中央委員會の決定中にある周知のテーゼと矛盾はしないだろうか？ 否、矛盾してはいない。問題は、コルホーズ化運動の領域における「左翼」極端家達の誤謬は、黨内における右翼的偏向を激化し、鞏固化するために好都合な環境を作り上げるような誤謬であるということにあるのである。なぜか？ なぜならば、これらの誤謬は、黨の方針を曲解して表現しているからであり、——したがつてそれは、黨の信用を傷けることを容易にさせている——またそれゆえに、それは、黨の指導に反對する右翼分子の鬭争を、容易ならしめているからである。黨の指導部の信用を傷けるということは、黨に反對する右翼的偏向者達が、鬭争を懸命に行うる唯一の土台たる、最も基礎的な土壌である。「左翼」極端家達、彼等の誤謬と歪曲とは、この土壌

を、右翼的偏向者達に提供している。それゆえに、右翼的日和見主義に對し、成功のうちに鬭争するた
めには、「左翼」日和見主義者達の誤謬を克服しなければならぬのである。「左翼」極端家達は、
事實上、右翼的偏向者達の同盟者なのである。

このようなのが、「左翼」日和見主義と右翼的偏向主義との間の、獨特な關連なのである。

この關連によつて、ある「左翼派」が、右翼派との連合についてしばしば話しているという事實
をも説明することが必要である。またこのことによつて、つい昨日までは、まだ突貫攻撃を「實行し
ており」、二——三週間ばかりのうちに、ソ同盟を集團化してしまおうと企圖していた「左傾者」の
一部が、今日ではすつかり消極的にしよげかえつてしまひ、拱手傍觀なすところを知らず、かくして、
クレークに對して眞の退却（括弧なしの！）の方針を遂行しながら右翼的偏向者に、鬭争舞台をあつ
さり譲り渡してしまふというような、獨特な現象もまた説明することが必要である。

現時機における特徴は、「左翼」極端家達の誤謬に對する鬭争が、わが國では、右翼日和見主義
との鬭争を成功のうちに行うための條件であり、かつ獨特な形態であるということである。

第六の質問。農民の一部が、コルホーズから脱退することを、どんなふうに評價すべきであるか？

回答。一部農民の脱退ということとは、最近わが國において、いくつかの鞏固でないコルホーズが
創設されたということ、そして現在、これらのコルホーズから腰のきまらぬ分子を除いて肅清を行つ
ていることを意味するのである。このことは、にせコルホーズが消滅し、鞏固なコルホーズが残り、かつ
益々鞏固化されるであろうということを意味している。私は、これを、完全に正常な現象であると考
える。ある同志達は、この現象を見て、絶望的になつてしまひ、周章狼狽して、集團化のいかさまな
百分率に必死になつて嘔りついでいる。また他の人達は、これを小氣味よげにながめ、コルホーズ

化運動の「失敗」を豫言している。だが、いずれも、大きな間違いである。いずれもホルホーズ化運動の本質についての、マルクス主義的理解とは、遙に遠くかけ離れたものなのである。

ホルホーズから出て行くのは、何者よりもまず、いわゆる死せる魂である。これは脱退さえもなく、もともと空いた場所のあつたことを、暴露しただけのことである。吾々に死せる魂が要るだろうか？ 勿論、そんなものは要らない。北カフカズとウクライナの人達が、死せる魂でできていたホルホーズを解體して、眞に活き活きとした、眞に堅牢なホルホーズを組織しているのは、全く正しく行動している、私は考えるのである。このことによつて、ホルホーズ化運動は、ただ利益を得るのみである。

第二には、吾々の大業に眞向から敵對している異分子が出て行くのである。かかる分子をたたき出すことが早ければ早いほど、ホルホーズ化運動のためによいということは、明かなことである。

最後に、異分子と呼ぶこともできないし、また、死せる魂とも名づけることのできないところの、動搖している分子が出て行つているのである。これらの分子は、吾々が今日のところでは、吾々の大業の正常なことを、まだ納得させることができなかったが、明日には、確實に、吾々が納得させてしまふであろうところの、その農民達なのである。かかる農民が出て行くということは、たとえ一時的なことであろうとも、ホルホーズ化運動にとつて、重大な損失である。それゆえに、ホルホーズにおける動搖している分子を獲得するための闘争は、現在、ホルホーズ化運動の、最も緊切缺くべからざる任務の一つである。

ゆえに、ホルホーズからの、一部農民の脱退ということは、ただ否定的な現象たるだけではないということになるのである。またこの脱退が、ホルホーズから、死せる魂と純然たる異分子をすつかり

追つばらつてしまふこととなる限りにおいては、脱退は、コルホーズを健全なものとなし、かつ鞏固化するために有益なところの過程なのである。

一カ月前に吾々は、穀物生産州全體に亘つて、六割以上を集團化したとみなしていた。だが、もしも、眞の、そして幾分たりとも確乎たるコルホーズということを考慮していうならば、この數字は、明かに誇張されたものであることが、現在では明瞭である。もしも、一部農民の脱退後に、コルホーズ化運動が、穀物生産州全體にわたつて、四割というところでしつかりと踏みとどまることができたとなれば、——そしてこのことは、確實に實現し得られることである——これは、現在の時機におけるコルホーズ化運動にとつての、極めて大きな成果であるだろう。わが國には、それと同時に、八割乃至九割という數字をもつて全面的集團化が行われている個々の地方もあるということを十分よく承知しながら、私は、穀物生産諸州のための平均數字をとりあげているのである。穀物生産州全體に亘つての四割の集團化ということとは、實に一番最初の集團化五カ年計畫を、吾々は一九三〇年の春までに、二倍も遂行し得たということを意味しているのである。

ソ同盟の社會主義的發展という大業における、この歴史的意義を有する成果の決定的性格を、敢て否定し得る者があるだろうか？

第七の質問。動搖している農民がコルホーズから出て行くといふことは、よい行動であるだろうか？

回答。否、彼等の行動はよろしくない。コルホーズから出て行くと同時に彼等は、自分自身の利益にも反對して行動しているのである。なせならば、ただコルホーズのみが農民に窮乏と暗黒な生活からの活路を興えるからである。コルホーズから出て行くと同時に彼等は、前よりもずつと悪い境遇

に自分をおいているのである。なせならば、ソヴェト権力がコルホーズに給與している特惠と便宜とを、自から失うようなことをしているからである。コルホーズにおいて生じた誤謬と歪曲は、コルホーズから出て行くための理由にはならない。誤謬は、コルホーズに留まつて總力によつて匡正しなければならぬ。ソヴェト権力が、全力を擧げてこれらの誤謬と鬭争するであろうゆえに、これらの誤謬を匡正することは、もつと容易なのである。

レーニンは次のようにいつている——

「商品生産の下における小規模經營制度は、大衆の貧困と彼等の受けている抑壓とから、人類を救済することはな~~い~~、え~~な~~いのである」。〔レーニン全集、第二〇卷、一一二二頁〕

レーニンは次のようにいつている——

「小規模經營をもつては、窮乏から脱することはできない」。〔レーニン全集、第二四卷、五四〇頁〕

レーニンは次のようにいつている——

「もし、吾々が、もとのように、小規模經營のままでおさまつていたならば、たとえ自由な土地を耕す自由な市民であるとしても、どつちみち、吾々は不可避的な破滅をもつて脅かされるであろう」。〔レーニン全集、第二〇卷、四一七頁〕

レーニンは次のようにいつている——

「共同的な、アルテリ的な、そして協同的な労働の援助によつてのみ、帝國主義戦争が吾々を追い込んだ袋小路から脱け出すことができるのである」。〔レーニン全集、第二四卷、五三七頁〕

レーニンはそのようにいつている——

「大規模の模範経営においては、共同耕作へ移行することが必要である」。なせならば、「これなしには、ロシアが現在遭遇しているこの破滅から、この全くの絶望状態から脱することはできない」からである。（レーニン全集、第二〇卷、四一八頁）

これはみな、何を意味しているか？

これは、コルホーズこそ、農民に、窮乏と暗黒な生活からの活路を與える唯一の手段であるということを意味している。

コルホーズから出て行く農民がただしくない行動をしているということとはあきらかである。レーニンは次のようにいつている——

「勿論、諸君はソヴエト權力の一切の行動によつて、吾々がコンミュンに、アルテリに、そしてまた、小規模の個人農経営を、公共的、協同的或はアルテリの經營に轉化させ、かつこの轉化を漸次に援助することを目標としてゐる、あらゆる一般的團體に、どんなに大なる意義を附與しているかということをも、よく知つてゐる*」。〔レーニン全集、第二四卷、五七九頁〕

レーニンは次のようにいつている——

「ソヴエト權力はコンミュンと協同團體を第一位に立たしめて、彼等に本格的な優先權を與えた*」。〔レーニン全集、第二三卷、三九九頁〕

これは何を意味しているか？

* 傍點は私による。——イ・スターリン

これは、ソヴェト權力が個人農經營よりも先に、コルホーズに特惠と優先權とを與えるであろうということの意味している。これは、ソヴェト權力が土地の給付の點でも、機械、トラクター、穀物の種子、その他の供給の點でも、課税を軽減するという點でも、クレジットを供與するという點でも、コルホーズに特惠を與えるであろう、ということの意味している。

なせ、ソヴェト權力は、コルホーズに特惠と優先權とを與えるのであるか？

なせならば、コルホーズは、農民を貧困から救済するための、唯一の手段だからである。

なせならば、コルホーズに對する優先的な援助は、貧農並に中農に對する援助の、最も實質的な形態だからである。

數日前、ソヴェト權力はコルホーズにおける公共化された役畜（馬、牡牛、等）の全部、コルホーズの集團的所有になつていゝるものも、またコルホーズ員の個人所有になつていゝるものも、一切の牝牛、豚、羊、家禽に對して、二か年間課税を免除することを決定した。

その他になお、ソヴェト權力は、コルホーズ員のクレジットに對する借金の支拂い期限を年末まで延期し、かつコルホーズに加入してゐる農民に對して、四月一日までに課せられた罰金と裁判による處分とを全部取消すことを決定した。

最後に、ソヴェト權力は、コルホーズに對する五億ルーブルのクレジットを、本年中に必ず實現すべきことを決定した。

これらの特惠は、コルホーズ農民を救助することとなるであろう。これらの特惠は、脱退に直面して敢然とふみ止まり、コルホーズの敵との鬭争によつて鍛え上げられ、コルホーズを固守し、コルホーズ化運動の偉大な旗幟を、自己の手にしつかりと保持したところのコルホーズ農民を援助するこ

ととなるであろう。これらの特惠は、現在、わがコルホーズの基本的な中核を構成しており、わがコルホーズを鞏固化し、形成し、幾百幾千萬の農民を、社会主義の側に闘いとるであろうところの、コルホーズ員である貧農と中農とを援助することとなるであろう。これらの特惠は、現在、コルホーズにおける基本的なカードルを構成しており、彼等をコルホーズ化運動における英雄と名すけるに全く値するところのコルホーズ農民を援助することとなるであろう。

これらの特惠を、コルホーズから出て行つた農民は、受けられないので、ある。

コルホーズから出てゆく農民は、誤謬を犯しているのだということは、明かなことではないか？
コルホーズに歸つてくることによつてのみ、彼等は、これらの特惠を受け得るようになるのだ
ということとは、明かなことではないか？

第八の質問。コンミュンについてはどうか？ それは解體されなければならないのではないか？
回答。否、解體しなくてもよいし、また解體せねばならない理由もない。勿論、私は真物のコンミュンについていつているのであつて、紙の上だけのコンミュンについていつているのではない。ソ同盟の穀物生産諸州には、それらを奨励し、支持するに値するところの、多くの素晴らしいコンミュンが實在している。私は、試験の幾年かによく堪え、闘争において鍛え上げられ、その存在價値を、完全に實證したところの、以前から存在するコンミュンのことをいつているのである。これらのコンミュンは解體してはならない、アルテリに改變すべきである。

コンミュンを組織し、これらを管理してゆくということは、複雑な、そして困難なことである。大規模の、確乎としたコンミュンは、經驗をつんだカードルと、試験を経た指導者とが實在する場合にのみ存在し、發展することができるのである。アルテリの規約からコンミュンの規約への性急な移行

は、コルホーズ化運動から農民を突き離すだけのことであるだろう。ゆえに、特別な慎重さをもつて、かつどんなことがあつても急ぐということなしに、このことに對さなければならぬのである。アルテリは、ずつと容易なことであり、かつ廣汎な農民大衆にも、ずつと理解されやすいことである。それゆえに、アルテリは、現在の時機における、コルホーズ化運動の最も普及された形態なのである。農業アルテリが、日まじに強化され、鞏固なものとなることによつてのみ、コンミュンの側へ向う、農民の大衆的動きによつての地盤を築きあげることができるのである。だがそれはすぐさま實現されるのではない。それゆえに、最高の形態であるコンミュンは、ただ將來においてのみコルホーズ化運動の鎖の主な環となることができるのである。

第九の質問。クラークにたいしてはどうすればよいか？

回答。今まで、吾々の間では中農に關することが問題となつていた。中農は労働者階級の同盟者であり、吾々の政策も、彼等に對しては友誼的なものでなければならぬ。だが、クラークの場合は、これとは全くちがつている。クラークは、ソヴェト權力の敵である。彼等と吾々の間には、平和關係は存在しないし、またあり得ない。クラークに對する吾々の政策は、階級としての彼等を絶滅する政策である。このことは、勿論、吾々が一撃の下に、彼等を絶滅できるであらうということの意味はしない。だがこのことは、吾々が、彼等を包圍しかつ絶滅するための事業を實行するであらう、ということの意味している。

次のようなのが、クラークについて、レーニンが述べているところのものである——

「クラークは、最も殘虐な、最も亂暴な、最も野蠻な搾取者であり、彼等は、他の諸國の歴史において、地主、皇帝、僧侶、資本家の權力を、再三復興させたところの者である。クラーク

は、地主や資本家よりもずつと人数が多い。だがそれにしても、クラークは、人民の中では少数なのだ。……これらの血に飢えた獣は、戦時における人民の窮乏を利用して金を儲け、彼等は、穀物やその他の食料品の値をつり上げて、莫大なる金を蓄積したのであつた。これらの蜘蛛共は、戦争で零落した農民を犠牲にし、飢えている労働者を犠牲にして、ぶくぶくと肥え太つた。これらの蛭奴は、勤勞大衆の血を吸い取り、都市の、また工場の労働者がひどく飢えれば飢える程、彼らは多くの富を得たのであつた。これらの吸血鬼は、自分達の手に、地主の土地を、以前にもそうであつたが、現在も掻き集めており、貧農を奴隷化し続けているのである。』（レーニン全集、第二三卷、二〇六——二〇七頁）

吾々は、これらの血に飢えた獣、くも、吸血鬼の搾取者の志向を抑制する政策を實行して彼等の存在を我慢してきた。クラーク經營に、クラーク的生産にとつて代わるべきものが何もなかつたので、吾々はそれを我慢してきたのであつた。だが、今では、吾々は、わがコルホーズとソフホーズの經營をもつて、優に、彼等の經營にとり代えうる可能性をもつていたのである。これ以上、これらのくもや血に飢えた獣共の存在を我慢する理由は何もないのである。コルホーズに放火し、コルホーズにおける活動家達を殺し、種蒔きを失敗させようと企圖するこれらのくもや血に飢えた獣共を、これ以上我慢することは、とりもなおさず労働者農民の利益に反對することとなるのである。

それゆえに、階級としてのクラーク絶滅の政策は、ボルシエヴィキのみがそうできるところの、あらゆる頑強さと徹底さをもつて實行しなければならぬのである。

第十の質問。コルホーズの目前に迫つた實踐上の任務は何であるか？

回答。コルホーズの目前に迫つた實踐上の任務は、種蒔きのための闘争、播種面積を最も廣く擴張するための闘争、播種作業を正しく組織するための闘争である。

コルホーズの他の一切の任務は、現在、播種についての任務に順應させられなければならない。

コルホーズにおける他の一切の活動は、現在、播種作業を組織する活動に、從屬させられなければならない。

このことは、コルホーズとコルホーズの非黨員活動分子達の確乎さ、コルホーズの指導者並にコルホーズのボルシエヴィキ的中核の能力が、大げさな決議や誇大な祝辭などによつてではなく、播種作業の正しい組織という實生活上の仕事によつて點檢されるであらうということを意味している。

だが、この實踐上の任務を立派に實現させるためには、コルホーズにおける働き手達の注意を、コルホーズ建設の經濟的諸問題の側へ、コルホーズ内部の建設の諸問題の側へ、向け換えさせることが必要である。

最近まで、コルホーズにおける働き手達が注意を集中していたのは、高度の集團化率を追い求めるといふことであつた。而して、人々は、眞物の集團化と、紙の上だけの集團化との間の差異を見ることを欲しなかつたのだ。今や、この數字に夢中になるということは、遠く彼方へなげ棄ててしまわなければならない。今や、働き手達の注意は、コルホーズを鞏固化することに、コルホーズの組織的形態を整えることに、コルホーズにおける實務的な活動を組織するということに、集中されなければならない。

最近まで、コルホーズにおける働き手達の注意は、大規模なコルホーズ體を組織することに、いわゆる『巨大農場』を組織することに集中されていた。而して、この『巨大農場』は、往々、農村にお

いて、経済的な根底を全くもっていないところの、無用の長物である役所に變形していた。したがって、實務的な活動は、お體裁だけの活動の中に没してしまつたのだ。今や、この體裁だけを飾るということへの熱中は、彼方へ投げ棄ててしまわなければならない。いまや働き手達の注意は、農村におけるコルホーズの組織的・経済的活動の方面へ集中されなければならない。この活動が適當な成功を示すであろうときには、「巨大農場」は、當然のこととして出来るであらう。

最近まで、コルホーズの指導的活動へ中農を引き入れるということには、少しの注意しか拂われなかつた。しかるに一方、中農のうちには、コルホーズ建設において立派な經營上の働き手となる、素晴らしい經營者達がいるのである。今や、吾々の活動上におけるこの欠陥は、絶滅されなければならない。今や任務は、コルホーズの指導的活動に、中農の中の最も優秀な人達を引き入れ、彼等をして、この仕事において、彼等の能力を十分發揮せしめるようにすることである。

最近まで、農村婦人の間における活動に對しては、十分な注意が拂われていなかった。わが國においては、農村婦人の間における活動は、吾々の活動中、最も虚弱な點であることを、過去の時期は示している。今や、この欠陥は、決定的に、永久不變に絶滅されなければならない。

最近まで、多くの地方における共産黨員達は、彼等は、自分自身の力によつて、コルホーズ建設のための全任務を解決することができるということを根據にしていた。この根據から發足して、彼等は、コルホーズにおける責任のある活動に、非黨員を引き入れ、コルホーズにおける指導的活動に非黨員を登用し、コルホーズ内で、廣汎な非黨員の活動分子を組織するということに對して、十分な注意を拂わなかつた。わが黨の歴史は、かかる見地が、根本的に間違つたものであることを實證したし、またコルホーズ建設の過去の時期も、このことを、今一度示したのであつた。もしも共産黨員達

が自分の殻の中に閉じこもつてしまい、非黨員との間に壁を築いて自分達を彼等から隔ててしまふならば、共産黨員達は一切の事業を破滅させてしまったであらう。共産黨員達が、社会主義のための戦いにおいて、榮冠を載くことができ、共産主義の敵が撃滅せられたのは、それは、とにかく共産黨員達が、非黨員の中の最も優秀な人達をこの仕事に引き入れることをよくなし得たからであり、彼等が、廣汎な非黨員大衆の間で、勢力を汲み取ることをよくなし得たからであり、彼等が、自己の黨のまわりに、廣汎な非黨員の活動分子を集めることをよくなし得たからである。今や非黨員の間における吾々の活動のこの欠陥は、決定的に、永久不變に、絶滅されなければならない。

吾々の活動上におけるこれらの欠陥を匡正し、これらの欠陥を根本的に絶滅するということが、これこそは、コルホーズにおける經濟的活動を、正しい軌道に引き入れるということを意味しているのである。

故に――

- 一、任務は――播種作業を正しく組織することである。
- 二、この任務を解決するために必要な手段は――コルホーズ化運動の經濟的諸問題に注意を集中することである。

一九三〇年四月三日、「プラヴダ」第九二號

經營家の任務について

一九三一年二月四日の社會主義工業の働き手達の第一回全同盟

會議における演説

同志諸君！ 諸君の會議における評議は、終りをづけようとしている。今、諸君は決議を採用しようとしているところである。これらの決議が満場一致で採用されるであろうということは疑いのないことである。これらの決議において、——私はこれらについて、少しは知っているのであるが、——諸君は、一九三一年度の工業に對する統制數字を認可し、これらの統制數字を遂行することを約束している。

ボルシエヴイキの一言は、眞剣な一言である。ボルシエヴイキは、自分達の約束したことは、必ず遂行するのが常である。しかして、一九三一年度における統制數字を遂行する義務を負うということは、何を意味するか？ それは、工業生産額を、全體的に四割五分増加することを保障するということである。そして、これは非常に大きな任務である。それのみではない。かかる義務を負うということは、諸君がわが五カ年計畫を、四カ年で遂行することを約束するだけでなく、——このこ

とはすでに決定されたことでもあるし、このために何らの決議も、これ以上に必要はないのである——このことは、諸君が工業の基本的な、決定的意義をもつ部門において、五カ年計畫を、三カ年に遂行することを約束するということを意味しているのである。

會議が、一九三一年度の計畫を遂行し、五カ年計畫を三カ年に遂行することを約束するということは、結構なことである。だが、吾々は、『苦い經驗』によつてすでに教えられてきている。約束が、必ずしも果されるとはかぎらないということを、吾々は知っている。一九三〇年のはじめにも、この一年間の計畫を遂行するという、丁度これと同じ様な約束がなされた。そのときには、わが工業生産額を、三割一分乃至三割二分増加させることが必要であつた。しかしながら、約束は、完全には遂行されなかつた。實際上、一九三〇年度における工業生産額の増加は、二割五分であつた。吾々は、次の質問を出さなければならぬ。即ち、今年も同じ様なことをくり返すのではあるまいか？ と。わが工業における指導者と働き手とは、一九三一年における工業の生産高を、四割五分増大することを、現在約束している。だが、この約束が遂行されるということについて、どんな保障があるか？

統制數字を遂行し、生産高を四割五分増大し、五カ年計畫を四カ年ではなく工業の基本的な、決定的意義をもつ部門においては、三カ年に遂行し終るためには、どんなことが必要であるか？ そのためには、二つの基本的な條件が必要とされる。

第一には、これがための、實在的な可能性、もしくは、吾々の中でいわれるごとく、「客観的」な可能性があるということである。

第二には、これらの可能性が實現されるような場合に、わが諸企業を指導する願望と手腕とを有するということである。

去年吾々は、プランを完全に遂行するための、「客観的」可能性をもっていたか？ じかり、もっていた。議論の餘地のない諸事實がこれを證明している。これらの事實というのは、去年の三月と四月において、工業が、その前年と比較して、生産高を三割一分増加したということである。ところで、なせ吾々は、一年間全體のプランを遂行しなかつたのであろうか？ ということが問題となる。なにがこれを妨げたか？ 何が不足していたか？ 現に存在している可能性を利用する手腕が、足りなかつたのだ。工場を、鑛山を、正しく指導する手腕が足りなかつたのだ。

吾々は、第一の條件、即ちプラン遂行の「客観的」可能性をもっていた。だが、吾々は第二の條件、即ち、生産を指導する手腕を、十分な程度にはもっていなかつたのだ。そして、諸企業を指導する手腕が足りなかつたからこそ、それ故にこそ、プランは結局遂行されなかつたのであつた。三割一分乃至三割二分の増加がなければならなかつたのに、吾々はただ二割五分だけを増加したのであつた。

勿論、二割五分の増加ということは大したことである。資本主義國中のどの國においても、一九三〇年においては生産高の増加ということはなかつたし、また現在もないのである。一つの例外もなしに、すべての資本主義國では、急激な生産の低下が起きているのである。かかる條件の下において、二割五分の増加ということは、大きな前進である。だが、吾々は、もつと大きな増加をもたらしうることができたのだ。吾々はそのために、必要な「客観的」條件全部をもっていたのであつた。

では、結局去年の難事を今年もまたくり返すようなことをせず、プランを完全に遂行し、現に存在する可能性を、吾々が、當然そうあらねばならぬように、それらを利用し、諸君がした約束を、幾分たりとも紙の上だけの空約束に終らせないだろうということについては、どんな保障があるか？

諸國家の歴史、國々の歴史、軍隊の歴史上には、成功を得べきまた勝利を博すべき一切の可能性

があつたのに、それらは、これらの可能性は、指導者達がこれらの可能性によく注意せず、またこれらを有効に利用することをよくしなかつたがために無効になつてしまひ、そして軍隊は敗北を蒙つたという場合があつた。

吾々は、一九三一年度の統制數字を遂行するために必要な、一切の可能性をもつてゐるか？

然り、かかる可能性を吾々はもつてゐる。

これらの可能性は何であり、また、これらの可能性を實在させるためには、何が必要であるか？
まず第一に、國內に十分な天然の富源、即ち、鐵鑛、石炭、石油、穀物、棉花を必要とする。わが國には、これらのものが存在するであろうか？ たしかに存在してゐる。他のどの國よりも多く存在してゐる。ウラルをまず例に取つてみても、ウラルは、他のどんな國においても探し出せないほどの、富源の組合せを呈じてゐる。鑛石、石炭、石油、穀物、——一つとしてウラルにないものがあるか！ わが國には、ただゴムを除く他は何でもある。だが、ゴムも、一——二年後には、吾々の手にもつようにいたるであろう。この方面においては、即ち、天然の富源という方面においては、吾々は完全に保障されてゐる。これらは、わが國には、むしろ必要とするよりも多く存在してゐるのである。

この他にもつと何が必要であるか？

國民の福利のために、これらの龐大な天然の富源を利用するようにさせる願望と力とをもつてゐるような、かかる權力の存在すること、が必要なのである。わが國には、かかる權力が存在するか？ たしかに存在する。もつとも、天然の富源を利用することにあつての吾々の活動が、必ずしも、わが働き手達の間の軋轢なしにすんでゐるというわけではない。たとえば、去年、ソヴェト權力は、吾々が、もつとよく發展するためにゼヒとも必要な石炭・冶金工業のための第二の基地を創設する問題に

ついで、ある闘争を行わねばならなかつた。だが、吾々は、これらの障害を、すでに克服してしまつた。そして、吾々はまもなく、この基地をもつようになるであろう。

この他に、もつと何が必要とされるか？

この他に、なおこの権力が、幾百萬の労働者農民大衆の支持を享有することが必要である。わが権力は、かかる支持を享有しているであろうか？　しかし、享有している。ソヴェト権力が享有しているような、労働者と農民のこんな支持を享有している他の権力を、諸君は世界中どこにも見出すことはできないであろう。社會主義競争の成長についての事實、突撃的労働運動の成長についての事實、呼應産業財政プランの遂行をめざす闘争カンパ、これらについては、私はここでいちいち述べることをしないであろう。幾百萬大衆が、ソヴェト権力を支持していることを明瞭に見ることのできるすべてこれらの事實は、すでによく知られていることである。

一九三一年度の統制数字を遂行し、かつ超過遂行するためには、この他にもつと、何が必要か？　この他になお、資本主義の不治の病には絶對にかからず、また資本主義に對して、比較にならぬほどウンと優越的であり得るような、かかる制度の存在することが必要なのである。危機、失業、濫費、廣汎な大衆の貧困——これこそ、資本主義の不治の病なのである。わが制度は、これらの病氣によつて煩わされないのである。なせならば、権力は、吾々の手中に、労働者階級の手中にあるからであり、吾々は計畫經濟を實行しており、計畫的に資源を蓄積しており、國民經濟の各部門に對して、それらを正しく分配しているからである。吾々は、資本主義の不治の病には絶對にかからない。このことによつて、吾々は資本主義と異なっており、またこのことによつて、吾々は資本主義に對して、決定的に優越的なのである。

資本家共が、經濟危機からどういふふうに脱れようとしてゐるかをよく見給え。彼等は、労働者の賃銀を最大限度に引下げている。彼等は原料の値を最大限に引き下げている。だが彼等は、大衆向の工業製品と食料品との値を、幾分たりとも、實質的に引き下げることが欲しない。このことは、彼等が商品の基本的な消費者を犠牲にして、労働者を犠牲にして、農民を犠牲にして、勤労者を犠牲にして、危機から脱れようとしてゐるといふことを意味してゐる。資本家共は、自分の手で自分の地盤を崩そうとしてゐるのである。そして、危機から脱れる代りに、危機を深める結果となり、新しい、もつともつと激烈な危機へ導くあたらしい前提條件を積み重ねるといふ結果を來してゐる。

吾々の優越性とは、吾々が過剰生産による危機を知らず、吾々が幾百萬という失業者をもつておらず、また將來もたないであろうといふこと、また吾々が生産上における混亂状態をもつていないといふことである。なせならば、吾々は計畫經濟を實行してゐるからである。だが、このことは、まだすべてではない。わが國は、工業の最もよく集中された國である。このことは、吾々が、わが工業を最も優秀な技術を基礎として築き上げ、それによつて、未曾有の労働生産能力と、蓄積の未曾有のテンポとを保障され得ることを意味してゐる。過去における吾々の弱さは、この工業が、分散し、かつ小規模の農民經營に基礎をおいていたといふことであつた。だが、これは過去のことであつた。現在では、こんなことはすでない。近い將來には、恐らく一年後には、吾々は、世界中で最も大規模な農業をもつ國となるであろう。ソフホーズとコルホーズは——そしてこれらは、大規模の經營形態である——本年すでに、わが國の市場に出せる穀物全體の半分を提供した。そして、このことは、わが制度すなわちソヴェト制度が、一つのブルジョア國といえども、夢想することのできないような、急速な前進をなす可能性を、吾々に與えてゐるといふことを意味してゐる。

最大速力で前進するためには、この他にもつと何が必要とされるか？

労働者階級の中の、最良の人々全部の努力を、一つの目標に向けるために十分に結束され、そして十分に統一された黨、困難に面して尻込みせず、かつ正しい、革命的な、ボルシェヴィキ的政策を、系統的に實現するために、十分な經驗をもつ黨の存在することが必要なのである。わが國にはかかる黨があるか？　しかり、存在する。この黨の政策は正しいか？　しかり、正しい。なせならば、その政策は重大な諸成功を與えているからである。現在では、ただ労働者階級の友のみでなく、その敵も、このことを認めている。すべての人達がよく知つている「尊敬すべき」紳士連——アメリカではフイツシユ、イギリスではチャーチル、フランスではポアンカレーが、いかにわが黨に反對して吼え立て、半狂亂になつて憤怒しているかを見給え。なせ彼等は、吼え立て、半狂亂になつて憤怒するの？　なせならば、わが黨の政策が正しいからであり、その政策が、次から次へと成功を與えているからである。

同志諸君、これらが一九三一年の統制數字を實現することを吾々に容易ならしめ、かつ五カ年計畫を四カ年に、決定的な意義をもつ部門では三カ年にさえ遂行することを助ける一切の客觀的可能性である。

こうして、プラン遂行のための第一の條件、即ち、「客觀的」可能性は、吾々の面前に存在しているのである。

吾々は第二の條件、即ち、これらの可能性を利用する手腕をもつてゐるか？

いい換えれば、吾々は、工場、鑛山に對して經理上の正しい指導をもつてゐるか？　そこでは、萬事が好都合に運んでゐるか？

殘念ながら、そこでは萬事が好都合に運んでいるというわけではない。そして、吾々はボルシエヴィキとして、率直に、かつ公然とこのことをいわなければならない。

生産を指導するということは、何を意味するか？ 吾々の間には各々の企業に對する指導についての問題を必ずしもボルシエヴィキ的に取扱わない者がある。吾々の間には、指導するということは、これ即ち、文書に判を押すことだ、と考えている者も少なからずある。これは實に悲しむべきことではあるが、事實である。時には、シチエドリンの小説のボンバドウル*を、いやでも思い出さざるを得ない。ボンバドウル夫人が、自分の息子を、どういうふうに教えたかを諸君は記憶しておられるだろう。「科學なんかに一生涯命になつて頭を壊すな、物事をそう深く研究するな、そんなことは他人にさせておけばよい。そんなことは、お前のなすべき仕事ではない。お前の仕事は、文書に判を押すことなのだ、」と。吾々ボルシエヴィキの中にも、文書に判を押すというだけのやり方で、指導しているような人達も少なくないということを、恥かしいことではあるが、認めなければならぬ。しかして、物事を深く研究し、技術を習得し、事務の主人公となるということ、この點については、決して何一つもしないのである。

三つの革命を成しとげ、激烈な國內戦争で勝利を博し、現代式の工業の建設というような最大の任務を解決し、農民を社會主義の道へ向き變えた吾々ボルシエヴィキが、生産の指導ということにおいて、紙片の前に屈服するというようなことが、どうして起り得たのであろうか？

*有名なロシアの諷刺作家サルテイエフ・シチエドリンが、彼の小説「ボンバドウル達とボンバドウル夫人達」の中で描き出している頑冥固陋な行政官の一つの型である——譯者註

この原因は、文書に判を押す方が、生産を指導するよりも容易であるということに歸するのである。而して、多くの經營家達は、この最少抵抗線の方へ赴いたのであつた。この點では、吾々にも、即ち中央にいる者にも、罪があるのである。十年ほど前に、次のようなスローガンが掲げられた。

「共產黨員は生産上の技術をまだ必要な程度によく分つていないのだから、またかれらは、經營を管理することをもつと學ぶことが必要なのだから、古參の技手や技師、専門家達に生産上の仕事は委せておいて、諸君共產黨員は、事務上の技術には干渉するな、而して、干渉することをせずに、あとで、吾々に對して獻身的な専門家と共に、生産における眞の指導者、事務上における眞の主人公となるために、倦まず撓まずに、技術をふかく研究し、生産を管理するための科學を深く研究し給え」と。スローガンはかかるものであつた。ところで、實際においてはどんな結果となつたか？ この文言のうちの後半は投げすてられてしまつた。なせならば、學ぶということは文書に判を押すことよりももつと困難だからであつて、文言の前半の方は、不干渉ということを、生産の技術を研究し學ぶことを拒否することであると解釋して、俗悪化されてしまつたのである。そして結局、投げ出すことが早ければ早いほどよいというような、馬鹿げたもの、有害で危険な馬鹿げたものとなつてしまつたのだ。

實生活それ自身が、この問題ではあまりうまく運んではいないことを、再三、吾々に警告したのであつた。シャハト裁判事件は、第一の重大な警告であつた。シャハト裁判事件は、黨の諸組織と勞働組合に、革命的警戒性が不足していたことを示した。この事件は、わが經營家達が技術上において、だらしないおくれ方をしていたこと、舊技師や技手のあるものは、何等の監督をも受けずに働いており、しかも、彼等は國外からの敵の「提案」で、間斷なく責められているので、妨害工作の道へ容易に轉落しがちであるということを示していた。

第二の警告は『産業黨』の裁判であつた。

妨害工作の基礎となつてゐるものが階級闘争であることは勿論である。階級敵が、社會主義の攻勢に、死物狂いで抵抗してゐることは勿論である。だが、妨害工作のかかる華々しい隆盛振りを説明するためには、このこと一つをもつてしては不十分である。

妨害工作が、こゝも廣汎な範圍に亘つて、行われるようなことが、どうして生じたのであろうか？ これはだれの罪であろうか？ これは吾々の罪である。もしも吾々が、經營指導の仕事をもつとちがつたふうに行つてゐたならば、また、吾々が事務上の技術の研究へ、技術の習得へ、もつとすつと前に移つてゐたならば、吾々が經營の指導においてもつと頻繁にかつ聰明に干渉してゐたならば、妨害者共は、こゝもおびただしい損害を與えることはできなかつたであらう。

吾々自身が専門家に、事務の主人公にならなければならぬし、技術上の知識の方へもつと注意を向けかねなければならぬ。これこそ、實生活が吾々に教え示したところのものである。だが、第一の警告も、また第二の警告さえも、まだまだ必要な轉換をもたらすことができなかつた。今や技術へ注意を向けかえるべき時であり、すつと前に、すでにそうすべきであつたのである。今や、古いスローガン、即ち、技術に干渉しないという時代おくれのスローガンを放棄すべき時であり、吾々自身が専門家に、事務通になるべき時であり、吾々自身が經理事務の完全な主人公となるべき時である。

なせ吾々は、單獨責任制をもつていないのか？ という質問が往々にしてなされる。吾々が技術を習得しない限り、それは存在しないし、また今後も存在しないであらう。吾々の間で、ボルシェヴィキの間で、技術、經濟、財政の問題によく精通した人達が、十分な人數だけ得られない間は、吾々は眞の單獨責任制をもちえないであらう。諸君はいくらでも好きなだけ決議を書くことができるし、

どんな言葉でも誓言をすることもできるが、もしも工場、鑛山の技術、經濟、財政を習得しないならば、それは何の役にも立たないし、單獨責任制ということはあり得ないであろう。

したがって、任務は、吾々自身が技術を習得し、吾々自身が事務の主人公となることである。これによつてのみ吾々のプランは完全に遂行されるであろうし、單獨責任制は實行されるであろうというところが保障されるのである。

このことは、勿論、容易なことではないが、確實に克服し得ることである。科學、技術上の經驗、知識——これらはすべて獲得できるものである。吾々は、今日、これらをもつてはいないが、明日はもちうるであろう。この點で肝要なことは技術を習得し、生産の科學を習得するための、熱烈なボルシェヴィキ的願望をもつということである。熱烈な願望を以てすれば、すべてのことをなすことができる。またすべてを克服することもできるのである。

少じばかり速度をゆるめ、運動を抑えることはできないだろうか、という質問がときどきなされるが、同志諸君、それはできない！速度をさげてはいけない！反對に、力の許す限り、そしてできるだけ、テンポを増大しなければならない。ソ同盟の労働者と農民に對する吾々の義務として、ゼヒともそうしなければならないのである。全世界の労働者階級に對する吾々の義務として、ゼヒともそうしなければならないのである。

テンポを引き留めることは、落伍である。落伍者はなぐられる。だが、吾々はなぐられたくない。斷じて、なぐられたくない！なかんすく、舊ロシアの歴史は、おくれたために間斷なくやつつけられた記録であつた。蒙古の汗等にやつつけられた。トルコの豪族達にやつつけられた。スエーデンの諸侯にやつつけられた。ポーランドとリトヴァの領主共にやつつけられた。英・佛の資本家に

やつつけられた。日本の軍閥にやつつけられた。寄つてたかつてロシアをやつつけた——おくれたために、軍事的におくれているために、文化的におくれているために、國政上でおくれているために、産業上でおくれているために、農業の點でおくれているために。そうすることが収入も多く、かつ何の罰もかけずにするだから、彼等はロシアをやつつけたのであつた。諸君は、次のような、革命前の詩人の言葉を記憶されるだろう。「祖國ロシアよ、お前は貧しいが、富んでもいる。お前は強いけれども、また弱い」。前時代の詩人のこれらの言葉を、これらの紳士連は、よく學びとつたのだ。彼等は、ロシアをやつつけた。そして「お前は富んでいる」、だからお前を犠牲にしてうまいことをしたつていいんだと言ひ足した。彼等は、ロシアをやつつけた。そして、「お前は貧乏で弱い」、だから、何の罰も受けずに、お前をなぐつたり、お前のものをふんどくつたりしてもいいのだと言ひ足した。おくれている者と弱い者をやつつける、——このようなのが、即ち搾取者共の法則なのである。資本主義の惡辣なおきてなのである。お前はおくれている、お前は弱い、つまりお前は正しくないのだ、従つてお前をぶんなぐつたつて、奴隸にしたつていいんだ。お前は強い、つまり、お前は正しいのだ、従つてお前には用心しなければならぬのだ。

だからこそ、吾々はこれ以上おくれてはならないのだ。

過去において、吾々には祖國はなかつたし、またあり得る筈もなかつた。だが、吾々が資本主義を顛覆させてしまつて、權力が、われら、人民の手中にある現在では、吾々は祖國をもつてゐるし、吾々は祖國の獨立を固守するであろう。吾々の社會主義的祖國がやつつけられてしまひ、わが祖國が自己の獨立を失ふことを、諸君は欲するであろうか？　しかして、これを欲しないとすれば、諸君は、最短期間に、祖國のおくれを根絶し、祖國の社會主義的經濟の建設事業を、眞にボルシェヴィキ

的テンポをもつて發展させなければならぬ。これ以外にとるべき道はないのである。だからこそ、レーニンは、十月革命の前夜に、「死か、それとも、先進的資本主義諸國に追いつき追い越すか」と、述べたのであつた。

吾々は、五十年乃至百年も、先進諸國からおくられていた。この距離を十年間に、吾々は走りぬけなければならぬ。吾々は、これをやりとげるか、それともぶつつぶされるか。

これこそ、ソ同盟の労働者と農民に對して負う吾々の義務が、吾々に命令しているところのものである。

だが、吾々はこの他に、もつと重大な、そしてもつと重要な別種の義務をもっている。それは、世界中のプロレタリアートに對して負う義務である。この義務は、第一種の義務とも一致するものである。しかして、吾々は、この義務を一段と高位におく。ソ同盟の労働者階級は、世界の労働者階級のうちの部分である。吾々は、ソ同盟の労働者階級の努力のみによつてではなく、世界の労働者階級の支持もあつたから勝利したのであつた。かかる支持がなかつたならば、吾々は、すつと前に、粉碎されてしまつていたであらう。わが國は、萬國プロレタリアートの突撃隊だといわれている。これはうまいいい現し方である。だが、これは、吾々にこの上もなく重大な義務を課している。國際プロレタリアートは、何のために吾々を支持しているか、また吾々は、何によつてかかる支持を受けるに値したか？ それは、吾々が資本主義反對の戦いに眞先に身を投じたこと、吾々が労働者の権力を最初に打ち樹てたということ、吾々が最初に、社會主義を建設するにいたつたということ、これらによつてである。それは、吾々が、それが成功した暁には、全世界をひっくりかえし、全労働者階級を解放するであらうような大業を行つているということによつてである。ところで、成功を得るためには、

何が必要か？ 吾々のおくれているということを絶滅し、高度な、建設のためのボルシェヴィキ的テ
ンボを發展させることである。全世界の労働者階級が吾々を見て、「これこそ、わが先進部隊であ
り、これこそ、わが突撃隊であり、これこそ、わが労働者の権力であり、これこそわが祖國である、
——彼等は自分達の大業、そして吾々の大業を、實によくやつている、——吾々は資本家に反対して
彼等を支持し、世界革命の大業を擴大發展させよう」といい得るように、吾々は、前進しなければ
ならない。吾々は、世界の労働者階級の期待に副い、彼等に對して負うところの、吾々の義務を遂行
しなければならぬか？ しかり、吾々が、すっかり面目をつぶすことを欲しないならば、そうしな
ければならぬ。

このようなのが、吾々の國內的ならびに國際的義務である。

これらの義務が、ボルシェヴィキ的發展テンボを、吾々に命令していることを、諸君は見られる
であらう。

これらの數年間に、經營の指導に關して、吾々が何にもしなかつたとは、私はいわないであら
う。それはなされたのだ。しかも非常に多くなされたのだ。戦前に比べて、吾々は、工業の生産高を
二倍に増大させた。吾々は世界中で最大の農業生産を創設した。だが、吾々がこの時期に、生産
を、生産技術を、生産の財政・經濟的方面を、本當に習得するように努力していたならば、吾々はも
つと多くのことをなすことができたであらう。

最大限度十年間に、先進資本主義諸國からおくれているこの距離を、吾々は走りぬけなければな
らない。これがために、吾々はあらゆる「客觀的」可能性をもっている。ただ不足しているものは、
この可能性を本當に利用することのできる手腕である。そして、これは吾々にかかっている。しか

り、吾々にのみかかっている！ 今や、吾々がこの可能性を利用することを學ぶ時である。生産に干渉しないという腐つた方針をやめる時である。別の、新たな、現時に適應した方針、即ち、何事にも干渉するという方針を採用する時である。もし君が工場支配人であるならば、一切のことに干渉し給え、一切のことを探究し給え、どんなことも見のがしてはならない、勉強し給え、然り、いくらでも、勉強し給え。ボルシエヴィキは、技術に習熟しなければならぬ。ボルシエヴィキ自身が、専門家になる時が来た。再建期では、技術が一切を決定する。そして、技術を研究し學ぶことを欲しない、そしてまた、技術を習得することを欲しない經營家なんて、それは、物笑いの種であつて、經營家ではないのである。

技術を習得することはむずかしい、と人々はいふ。それは間違いだ！ ボルシエヴィキが奪取し得ないような城塞というものは、一つだつてないのである。吾々は、多くの最も困難な任務を解決した。吾々は、資本主義を顛覆させたのだ。吾々は權力を奪取したのだ。吾々は最大の社會主義工業の建設を完成したのだ。吾々は、中農を社會主義の道へ方向轉換させたのだ。建設という見地からいつて、最も重要なことを、吾々はすでにやつてしまつたのだ。吾々にとつては、今、少じのこだけが残つてゐる。即ち、技術を研究し學ぶことと、科學を習得することである。そして、吾々がこれをなす遂げてしまつた時には、吾々が現在では夢想さえできないようなテンポで、わが國は發展するであらう。

そして吾々が、これをほんとうに欲するならば、吾々は、このことを成し遂げるであらう！

新情勢と經濟建設上の新任務

一九三一年六月二十三日の經營家協議會で行われた演説

同志諸君！ この協議會に提出されている資料によつて、わが産業は、プランの遂行状態という點では、かなり千差萬別の光景を呈していることが知られるのである。過去の五カ月間において、去年と比べて、生産額を四割乃至五割増大している産業部門がある。また高々二割乃至三割の増大じかもたらしていない部門もある。最後に、およそ六分乃至一割、でなければ、それよりも少ない、最少限度の増大じかもたらしていない、個々の産業部門もある。この最後の部門に數え入れられるものとしては、石炭産業と黑色冶金工業とがある。光景はごらんの通り實に千差萬別である。

この千差萬別の状態は、何を以て説明することができるか？ 若干の産業部門のおくれの原因はどこにあるか？ 若干の産業部門が、僅に二割乃至二割五分じか増大せず、また石炭産業と黑色冶金工業とが、それよりももつと僅じか増大せず、他の部門の尻尾にくつついていくことの原因は、どこにあるか？

これらの原因は、最近において、産業發展の諸條件が根本的に變化し、指導上における新しい方法の採用を必要とする新情勢が現出しているのに、わが經營家達のある者は、仕事の方法を變えることをせずに、依然として、舊來の方法で仕事をしているという點にあるのである。したがつて問題は、産業發展の新しい諸條件が新しい方法で仕事をすることを要求しているのに、わが經營家達のある者は、このことを理解せず、また、現在、新しい方法によつて指導する必要があることを見ない、ということにあるのである。

この點に、わが産業の若干の部門におけるおくれの原因があるのである。

わが産業發展の新しい諸條件というのは何であるか？ それらはどうして生じたか？

それら、即ちこれらの新しい條件は、少なくとも六つある。

これらの條件について考察しよう。

一、労働力

問題となるのは、まず第一に、企業への労働力の補充ということである。以前には、労働者自身が工場へ働きに出かけるのが普通であつた。したがつて、この點においては、或程度まで、自然の成りゆきのままに行われていたのであつた。しかして、この成りゆきまかせの状態は、失業が存在し、農村における階級内の分化が存在し、貧窮があり、人々を農村から都市へ追いやつた飢餓の恐怖があつたということから生じたことであつた。「農村から都市への百姓の逃走」という語を、諸君は記憶しておられるだろうか？ 何が、農民をして、農村から都市へ、逃げ出さざるを得ないよう

にさせたのであつたか？ それは、飢餓の恐怖であり、失業であり、そしてまた農村は、農民にとつての繼母であり、農民は、ただ何かの仕事が得られさえすれば、たとえ悪魔のところであろうとも、農村から逃げ出す覺悟を常にもつていたという、この事情なのである。

わが國における、つい最近までの事情は、かくのごとく、或はほばかくのごとくであつた。

現在も、丁度これと同様な光景を、吾々ももつていると、いつてもよいであろうか？ 否、そんなことをいうことはできない。反對に、情勢は、現在、根本的に變化した。そして、情勢が變化したからこそ、わが國には、労働力の點における自然の成りゆきまかせというようなことは、もはや存在しないのである。

この時期において、一體、何が變化したか？ 第一に、吾々は失業を根絶した。したがつて、吾は『労働市場』を壓迫していた力を根絶したのであつた。第二に、吾々は、農村における階級内の分化の根を断ち切つた。したがつて、吾々は、農民を農村から都市へ追いやつていたところの、大衆的な貧窮そのものを克服したのであつた。最後に、吾々は、トラクターと農業機械を數萬台農村へ供給し、クラークを撃滅し、コルホーズを組織して、人間としてふさわしい生活をなし、働くことの出来る可能性を農民に與えた。現在においては、もはや農村を、農民にとつての繼母などと稱することはできない。そして、もはやこれからのちは、農村を繼母と稱することはできないからこそ、農民は、農村に落ちついて生活するようになったのであり、わが國には、もはや、『農村から都市への百姓の逃走』ということも、労働力の自然的流動ということもなくなつたのだ。

諸君は、吾々が今や全く新しい情勢と、企業に労働力を補充するための新しい條件とをもつてい

ることを見られるであろう。

このことから、いかなることが生起するか？

このことから、第一に、これ以上、労働力の自然的流動ということに當ててはならないということになるのである。即ち、自然の成りゆきにまかせていた「政策」から、産業のための労働者を、組織的に募集する政策へ移行しなければならぬことを意味している。しかしてこれのためには、ただ一つの方法、即ち、經濟團體が、コルホーズ並にコルホーズ員と契約を結ぶ方法が存在するのみである。諸君は、すでに若干の經濟團體とコルホーズとが、この方法を採用しはじめたということ、而して、經驗は、この契約締結の實踐が、コルホーズにも、また工業企業にも、重大なる成功を與えていることを示している、ということを知っておられるだろう。

このことから、第二に、最も困難な労働過程の機械化に即時移行し、この機械化を、極力展開しなければならぬということになるのである（木材産業、建設事業、石炭産業、貨物の積卸し、運輸、黑色冶金工業、等々）。このことは、勿論、恰も手でやる労働をすててしまわねばならないというようなことを、意味するものではない。反對に、手による労働はまだまだながい間、生産上において、極めて重大な役割を演ずるのである。しかしてこの事は、労働過程の機械化ということが、それなごには、わが工業の發展テンポも、生産の新しい規模をも維持することが不可能であるところの、吾々にとつての新しい、決定的な力であるということを意味している。

吾々の間には、機械化ということも、コルホーズと契約を結ぶということも「信用しない」ところの經營家が少なからずいる。これは、新情勢を理解せず、新しい方法で働くことを欲せず、労働力が企業へ「自分でやってきた」、**「昔の黄金時代」**にあこがれて、溜息をついているところの、その經營家達なのである。かかる經營家達と、新情勢が吾々の前に打ち立てているところの、經濟的建

設におけるこれらの新しい任務とは、天と地ほどもかけ離れているということを、いまさらいう必要は少しもないのである。明かに、彼等は、労働力についての困難は、偶然的な現象であり、労働力の不足ということは、ひとりでに、いわば、自然の成りゆきにまかせておいても、消失するであろうと考へている。同志諸君、これは思い違いである。労働力についての困難は、ひとりでに消失してしまふことはできない。それらは、ただ、吾々自身の努力によつてのみ消失させることができるのである。かくして、コルホーズと契約を結ぶという方法によつて、労働力を組織的に募集すること、労働を機械化すること、かくの如きが任務なのである。

わが産業發展のための、第一の新しい條件についての問題は、このようになつてゐる。
第二の條件についての問題に移ろう。

一、労働者の賃銀

私は今じ方、わが企業のために労働者を組織的に募集することについて話した。だが、労働者を募集するということは、萬事をじつくすということをも、まだ意味してはいない。わが企業に労働力を保障するためには、労働者を生産にじつかりと落着かせ、企業における労働人員を多かれ少なかれ恒久的なものになし得ることが必要である。多かれ少なかれ、生産技術に習熟しており、新しい機械装置にも慣れた、恒久的な労働人員なしには、前進することは不可能であり、生産プランを遂行することは不可能であるということをも、はたして證明する必要があるであらうか。これと反對の場合には、労働者を、そのたび毎に、新たに教育し、生産のために時を利用する代りに、その半分を、彼等の教

育のために費すこととなつたであろう。ところで實際上、わが國では、事情はどうなつてゐるか？ わが國では、企業における労働人員は、多かれ少なかれ恒久的である、といつてもよいであろうか？ 否、遺憾ながら、そういうことはできない。反對に、わが國では、諸企業において、労働力のいわゆる頻繁な移動が今もなおあるのである。それだけではない。多くの企業における労働力の頻繁な移動は、單に消失しないのみではなく、反對に増大し、かつ一層激しくなつてゐるのである。とにかく、半年或はせめて三カ月間にせよ、全労働人員の少なくとも三——四割が、入れ替らずにつずけて働いてゐるような企業を、諸君は少ししか見つけ出すことができないであろう。

以前、即ち、わが國の技術的裝備が、まだそう複雑でなく、生産の規模もそう大きくはなかつた産業の復興期においては、労働力のいわゆる頻繁な移動を、どうにかこうにか「我慢すること」ができた。だが、現在はまつたく事情が變つてゐる。現在においては、情勢は根本的に變化した。現在、生産規模は巨大なものとなり、そしてまた技術的裝備は極度に複雑なものとなつてゐる時である、再建事業の展開してゐる時期においては、労働力の頻繁な移動は、わが企業の秩序を紊亂させてゐる、生産を妨害する禍患に轉化したのであつた。現在、労働力の頻繁な移動を「我慢すること」は、わが産業を腐敗させ、生産プランを遂行する可能性をまつたくなくし、生産物の品質を改善する可能性を打ち壞すことを意味するのである。

労働力の頻繁な移動の原因はどこにあるか？

それは、正しからぬ労働賃銀制度に、正しからぬ労働賃銀等級制に、労働賃銀の領域における「左翼的」な均等支給制ということにあるのである。わが國の多くの企業における等級別労働賃銀は、熟練労働と不熟練労働との間の差異、また困難な労働と容易な労働との間の差異が、殆ど消失し

てしまつていゝような具合に制定されている。労働賃銀の均等支給制は、不熟練労働者が熟練労働者となることに興味をもたず、かくして、前進向上する見とおしをもたず、それがために労働者は、まず少し「内職稼ぎをなし」、それから、「幸福を求めて」とほかの場所へ行くために、しばらくの間だけ働いている、生産における「別荘居住者」のように自分を感ぜるところにまでいたらしめるのである。労働賃銀の均等支給制は、熟練労働者をして、自己の熟練労働が、正當に評價されるような企業を、最後に探し出すまで、企業から企業へ、轉々として移動することを餘儀なくさせるにいたらしめるのである。

この結果として、企業から企業への「總體的」な動き、労働力の頻繁な移動ということが生ずるのである。

この惡を根絶するためには、労働賃銀の均等支給制を撤廢し、古い労働賃銀の等級制を粉碎しなければならぬ。この惡を根絶するためには、熟練労働と不熟練労働との間の差異、困難な労働と容易な労働との間の差異を考慮したところの、労働賃銀の等級制を制定しなければならぬ。黑色冶金工業においてアイロンをかける労働者が掃除夫と同額の労働賃銀を得ているというような状態を、我慢することはできない。鐵道運輸における機關手が、寫字生と同額の労働賃銀を得ているというような状態を我慢することはできない。マルクスとレーニンは、熟練労働と不熟練労働との間の差異が社會主義の下においてさえも、階級の絶滅後においてさえも存在するであろうということ、共產主義の下においてのみ、この差異が消失すべきであるということ、これがために、社會主義の下においてさえも、「労働賃銀」は需要に應じてではなく、労働に應じて支給されなければならないということを述べている。ところが、わが經營家並に労働組合の働き手のうちの労働賃銀の均等支給制主義者達は、

これに同意せず、かつ、この差異は、わがソヴェト制度の下においては、すでに消失してしまつたものと考えている。だが正しいか？ マルクスとレーニンか、それとも労働賃銀の均等支給主義者か？ マルクスとレーニンが、この點で正しいと考えなければならぬ。しかしてこれによつて、現在、熟練労働と不熟練労働との間の差異を考慮せずに、労働賃銀の均等支給制の「原則」にもとずいて、労働賃銀等級制を打ち樹てる者は、マルクス主義と訣別し、レーニン主義と訣別することとなるのである。

産業の各部門、各企業、各職場には、多かれ少なかれ熟練した労働者からなる先進的グループが存在している。もしも、吾々が、企業に對して恒久的な労働人員を保障することを眞に欲するならば、何よりもまず、そして主として、これらの労働者達を生産にしつかりと落着かせるようにしなければならぬのである。彼等、即ち、これらの先進的な労働者のグループは生産という鎖の基本的な環を構成しているのである。彼等を企業に、職場に、しつかりと落着かせるということは、全労働人員をしつかりと落着かせ、労働力の頻繁な移動ということを、根本から破壊してしまふことを意味している。ところで、どんなふうにして、彼等を企業にしつかりと落着かせたらよいか？ 彼等を上の地位にひき上げることによつて、彼等の労働賃銀の水準を高めるといふことによつて、働き手の熟練の程度によつて正當な支拂がなされるような、労働賃銀制度をもつといふことによつてのみ、彼等をしつかりと落着かせておくことができるのである。

ところで、彼等を上の地位にひき上げ、彼等の労働賃銀の水準を高めるといふことは何を意味するか、それは不熟練労働者にどんな結果をもたらさ得るか？ それは他のすべてのものはさておき、不熟練労働者のために將來の見透しを與え、上の地位に進むための、熟練等級を進級させるための、

刺戟を彼等に與えることを意味している。吾々が、現在何十萬、何百萬という熟練労働者を必要としてゐることを、諸君自身、よく知つておられる。だが、熟練労働者のカードルを作り上げるためには、不熟練労働者に、一層の前進と上の地位に進むための刺戟と見透しとを與えなければならぬ。そして、吾々がこの道を進むことが勇敢であればあるほどよいのである。なせならば、これが、労働力の頻繁な移動を根絶するための基本的な手段だからである。これを行うに際して、費用を節約することは、罪を犯すことを、わが社會主義工業の利益に反して行動することを意味するのである。

だが、これだけがすべてではない。

労働者を、企業にしつかりと落着かせておくためには、労働者のための諸物資の供給と住宅上の状態とを、さらに一層改善することが必要である。労働者の住宅の建築と労働者への供給との領域において、最近の數年間、少なからぬことがなされたということを否定することはできない。だが、なされたことは、労働者達の急速に成長している需要を充すには、全く不十分なのである。前には、住宅は、今よりもつと少なかつたのだ。だから、現在達成しえた結果で安心してもよいのだ、などということを、口實にしてはならないのである。また同じ様に、前には、労働者に對する供給は、今よりも遙に悪かつたのだ。だから、現状に満足したつてよいのだ、などということを、口實にしてはならないのである。腐つた、骨の髄まで腐つた人々のみが、過去のことを口實にして、自ら慰めることができるのである。過去のことからではなく現在における労働者の、グングン成長している需要ということから結論をひき出さなければならぬ。労働者の生存條件が、わが國では、根本的に變化したということを理解することが必要である。現在の労働者は、以前の労働者ではない。現在の労働者、わが

ソヴェトの労働者は食料品の供給という點においても、住宅の點においても、文化的な、またあらゆる他の需要を保障するという點においても、自分達の物質的な、そして文化的な需要全部を満足させられる生活をするを欲している。現在の労働者は、それを要求する権利をもっているし、また吾々は、これらの條件を、彼等に保障する義務があるのである。労働者が、わが國では、失業のために難澁することもなく、また、彼等が、資本主義の軛から解放されており、彼等はもはや奴隸ではなくて、各自の事業の主人公であるということは眞實のことである。だが、これだけではまだ不十分である。労働者は、自己の物質的な、並に文化的な需要全部を保障することを要求しているし、また吾々は、この彼等の要求を満足させる義務があるのである。吾々自身が、現在、労働者に對してある要求を提出していることを忘れてはならない。即ち、吾々は、労働者に労働規律、一生懸命に働く事、競争、突撃的労働を要求している。労働者の大多數が、ソヴェト權力のこれらの要求を、大なる熱意をもつてとり上げ、英雄的にそれらを遂行しているということを忘れてはならない。それゆゑに、ソヴェト權力の要求を實現するとともに、労働者が、自分の方から、労働者の物質的、文化的状態を一層改善することについての、ソヴェト權力の義務を遂行するように、ソヴェト權力に要求するであろうということは、何も驚くに足りないことである。

そこで、労働力の頻繁な移動ということ、を絶滅し、労働賃銀の均等支給制を根絶し、労働賃銀を正しく規定し、労働者の生活條件を改善すること、すなわちかくの如きが任務なのである。

わが産業發展のための、第二の新しい條件に關する問題は、このようになつてゐる。

第三の條件に關する問題に移ろう。

三、労働の組織

労働力の頻繁な移動を根絶することの必要について、労働者を企業にしっかりと落着かせることについて、私は上述した。しかしながら、労働者を落着かせるということによつて、一切の問題が盡きるのではない。労働力の頻繁な移動を根絶することに成功しただけでは不十分である。その上に、能率よく働き、生産能力を高め、生産物の品質を改善し得る可能性を彼等に與えるような労働條件に、労働者をおくことが必要である。したがつて、ひと月毎に、また三ヵ月毎に、生産能力が向上するように、企業における労働を組織することが必要なのである。

わが企業における、現在の事實上の労働組織は、生産の現代的要求に適應しているといつてもよいであろうか？ 遺憾ながら、そうはいうことはできない。とにかく、わが國には、労働の組織が極めて拙劣に制定されている企業、仕事上における秩序と調和との代りに、無秩序と混亂を有する企業、仕事に對して責任を負うことの代りに、完全な無責任さと個人責任分散制とが専ら支配している企業が、まだまだ多く存在しているのである。

個人責任分散制とは何であるか？ 個人責任分散制とは、自己の擔任する仕事に對して、如何なる責任をも負わぬことであり、諸機械装置や、工作機械、工具に對して責任を負わぬことである。個人責任分散制が存在しているのは、労働生産能力の幾分なりとも眞剣な高揚、或は、生産物の品質改善、機械装置、工作機械、工具に對する注意深い態度などということが、問題にもなりえないということ、わがかりきつたことである。個人責任分散制が、鐵道運輸において、どういふ結果に導いたか

ということ、諸君は知つてゐる。それは、工業においても、同様な結果をもたらしてゐる。吾々は鐵道運輸において個人責任分散制を根絶し、鐵道運輸の作業を高揚させた。吾々は工業においても、工業の作業を、高度に高揚させるために、同じことをやらなされなければならない。

以前には、個人責任分散制や一定の具體的な仕事に對する責任感の缺如とともに、うまい具合に一緒になつていたところの、正しからぬ勞働の組織で、まだ何とかして「やつてゆくこと」ができたのであつた。だが現在は、全くちがつてゐる。現在の情勢は全然ちがつたものである。現在の生産上における宏大な規模と巨大な企業が存在という状態の下においては、個人責任分散制は、企業におけるわが生産的、組織的成果全體にとつての脅威をつくり上げるような、工業における禍患なのである。

わが國においては個人責任分散制が、いかにして幾多の企業内に根を下すことができたのであろうか？ それは、連續操業週間制の不法な同伴者として、企業内に入りこんだのであつた。だが、連續操業週間制が、生産上における個人責任分散制を、必ず伴つてくるというのは正しくないであらう。勞働の正當な組織があり、一定の作業に對して各自が責任を負うように組織されており、諸機械装置や工作機械に對して、勞働者の定まつたグループが指定されており、質においても、また熟練の程度においても、相互の間に優劣のないように交代が正しく組織されてゐるとき、即ち、これらの條件が備つてゐる時には、連續操業週間制は、勞働生産能力の巨大な成長に、仕事の質の改善に、個人責任分散制の根絶に導くであらう。たとえば、鐵道運輸における事態は、かかる状態にあるのである。即ち、そこでは、現在、連續操業週間制が存在しているが、すでに個人責任分散制は存在しないのである。工業の諸企業において、吾々は、連續操業週間制に關して、丁度これと同じ様な、好ましい情景を有し

ているといつてもよいであろうか？ 遺憾ながら、そうはいうことができないのである。問題は、わが國の幾多の企業において、適當な條件の準備なしに、労働者の質と熟練程度の點において、多かれ少なかれ同格である交代を、當然なすべきように組織することなしに、所要の具體的仕事に對して、各自が責任を負うように組織されることなしに、あまり急いで連續操業週間制に移行したということにあるのである。そしてこのことは、奔流の意志のままにすておかれた連續操業週間制が、個人責任分散制に轉化してしまつたという結果に導いたのであつた。その結果、吾々は、幾多の企業において紙の上だけの、言葉の上だけの連續操業週間制と、紙の上だけでなく、眞實の個人責任分散制とを有しているのである。その結果、仕事に對する責任感の缺如、諸機械裝置に對する慎重を缺く態度、工作機械の頻繁な破損、労働生産能力を高めんとする刺戟の缺如ということが生ずるのである。「吾々は労働生産能力を高めるであらうし、仕事を改善もしよう。だが、だれも少しも責任を負わないときに、一體何人が吾々を評價してくれるだらうか？」と、労働者達がいうのも十分もつともなことである。このことによつて、わが同志達のうちのある者が、連續操業週間制を實施することをあるところまで急ぎ、そして、急いだために、これを個人責任分散制に轉化させて、連續操業週間制を歪曲してしまつたということになるのである。

この状態をなくし、個人責任分散制を根絶するためには、二つの活路があるのである。連續操業週間制が、個人責任分散制に轉化してしまわないように、鐵道運輸に對してこれが行われた先例にならつて、連續操業週間制の實施の條件を變更するか、それとも、かかる實驗のための好條件が現存しないとすれば、スターリングラードのトラクター工場で最近なされたように、紙の上だけの連續

操業週間制を放棄して中斷六日週間制に一時移行し、必要な場合、眞の、紙の上だけのものでない連續操業週間制にあつて復歸するための、あるいは連續操業週間制へ、ただし個人責任分散制なしの、連續操業週間制へ復歸するための條件を準備するか、どちらかである。

これ以外に活路はないのである。

わが經營家達が、すべてこのことを充分に理解しているということは、疑いえないことであらう。しかしながら、彼等は黙つてゐる。なぜか？ おそらく、彼等は眞理を恐れているからであらう。だが、いつから、ボルシエヴィキが眞理を恐れるようになりだしたのか？ いくたの企業において、連續操業週間制が、個人責任分散制に轉化してしまつたこと、かくして連續操業週間制が、極度に歪曲されたということは、はたして本當のことでないだろうか？ こんな連續操業週間制を誰が必要とするか？ とたずねたいものである。この紙の上だけの、そしてまた歪曲された連續操業週間制を保持する利益の方が、勞働を正しく組織することの利益よりも重要であり、勞働生産能力を發展させる利益よりも重要であり、眞の連續操業週間制の利益よりも重要であり、わが社會主義工業の利益よりも重要であると、何人が敢ていい切ることができるか？ 紙の上だけの連續操業週間制を葬り去ることが早ければ早いほど、それだけ早く、勞働を正しく組織し得るであらうということは、明かなことではないか？

ある同志達は、個人責任分散制は、呪と大げさな演説とによつてこれを消滅させることができると考へてゐる。とにかく、個人責任分散制に對する自己の闘争を、しばしば、集會においてこの個人責任分散制に對して呪をするだけに局限してゐる幾多の經營家達を、私は知つてゐる。彼等はたぶん、かかる

演説をしたあとでは、個人責任分散制はひとりで、いわば自然的流動によつて、消滅してしまふべきであると考えているのである。彼等が個人責任分散制を、演説や呪で、實踐から追拂うことができると考えているとすれば、彼等は甚だしい思い違いをしているのである。否、同志諸君、個人責任分散制は、決して、自ら消滅するものではない。吾々自身によつてのみ、これを根絶することができるのであり、また根絶させなければならぬのである。なせならば、吾々は、諸君とともに権力の地位にあるのであり、そして、吾々は諸君とともに、個人責任分散制をも含めた一切のことに對して責任を負うものだからである。もしもわが經營上における指導者達が、演説や呪をする代りに、例えば、鑛山或は工場に、一——二ヶ月滞在し、労働の組織についての詳細な點、『小さいこと』一切を研究し、そこで實地に個人責任分散制を根絶し、それから、當該企業の經驗を他の企業へ傳播させたならば、遙によかつたであろうにと私は考えるのである。これは、遙かによかつたであろう。これこそ、個人責任分散制に對する眞の闘争であり、労働の正しい、ボルシェヴィキ的組織のための闘争であり、企業における、勢力の正しい配置のための闘争であらう。

そこで、個人責任分散制を絶滅すること、労働の組織を改善すること、企業において勢力を正しく配置すること、即ち、かくの如きが任務なのである。

わが産業發展のための、第三の新しい條件についての問題は、このようになつてゐる。

第四の條件に關する問題に移らう。

四、労働者階級の生産・技術上のインテリ

ゲンチャヤについての問題

一般的には、産業の幹部員に關し、特に、技師・技術家達に關しても、情態は變化した。

以前には、わが國では、ウクライナの石炭と冶金産業の基地が、わが全産業のための主要源泉となつてゐるというふうであつた。ウクライナは、南部へも、またモスクワやレニングラードへも、わが工業地方全部に金屬を供給してゐた。ウクライナはまた、ソ同盟におけるわが主要企業へ、石炭を供給してゐた。私は、ここでは、ウラルを除外する。というのは、この點においてウラルの占める比重は、ドネツ炭田地方と比べて、取るに足らぬほどのものであつたからである。このことによつて、吾々は、工業の幹部員を養成するための、三つの基本的な中心點、即ち、南部、モスクワ地方、レニングラード地方を有してゐたことになる。かかる事態の下においては、當時わが國が辛うじて有することのできた最少限度の技師・技術家達で、どうにかこうにか間にあわせることができたということとは、分りきつたことである。

つい最近までの過去における状態は、かくの如くであつた。

だが、現在の情勢はまつたくことなつてゐる。現在の發展テンポと巨大な生産規模とを維持して行くときは、われわれがもはや、ウクライナの石炭と冶金工業基地一つだけでは、凌ぎがつかなくなるということとは、今や明かであると私は考える。ウクライナの石炭と金屬が、それらの生産が増大してゐるにもかかわらず、吾々にとつてはすでに足りないということ、諸君は知つてゐる。それゆゑ

に、吾々は、東部に石炭と冶金工業の新しい基地、即ち、ウラル・クズネツキー區を、どうしても築き上げなければならぬのだということを、諸君は知つてゐる。吾々が、この基地を失敗なく築き上げるであらうということを諸君は知つてゐる。だが、これだけではまだ不十分である。吾々は、さらに、益々増大して行くシベリアの需要を満たすために、シベリアの地に、冶金工業を築き上げる必要があるのである。そして、吾々はこれを、すでに着々として築き上げつつあるのである。その他に、吾々は、カザヒスタンと、トルケスタンに、有色冶金工業の新しい基地を築き上げることが必要である。最後に、吾々は、最も廣汎な範圍にわたる鐵道敷設事業を發展させることが必要である。このことは、全體としてのソ同盟の利益のために、即ち邊境地方の諸共和國の利益のためにも、また同じ様に中心地方の利益のためにも、要求されてゐるのである。

しかし、これによつて、吾々が前にはそれですませていた最少限度の産業における技師・技術家達や幹部員によつては、吾々はすでにすまふことはできない、ということになるのである。これによつて、技師・技術家達を養成するための舊來の諸中心點では、すでに不十分であり、新しい中心點の一大綱を、ウラル、シベリア、中央アジアに築き上げることが必要となるのである。吾々が、ソ同盟の社會主義的工業化のプログラムを實現しようとするならば、現在の三倍も五倍もの産業上における技師・技術家達や幹部員達を持ち得るように保障されること、今や吾々にとつて必要なのである。

しかし、吾々には、あらゆる種類の幹部員達や技師・技術家達が必要なのではない。吾々には、わが國の労働者階級の政策を理解する能力をもつような、またこの政策によく通曉する能力をもち、これを誠實に實現する決心を有するよう、な幹部員、技師・技術家達を必要とするのである。

ところで、これは何を意味するか？ それは、労働者階級が生産における労働者階級の利益を、支配している階級の利益として、固守する能力をもつ自分自身の生産・技術におけるインテリゲンチヤを、自分のために創り、あげなければならぬ、ような發展段階に、わが國が入つたことを意味している。

支配している階級は一つとして、自分自身のインテリゲンチヤを持たずにすませることはできなかった。ソ同盟の労働者階級もまた同じ様に、自分自身の生産・技術におけるインテリゲンチヤなすませることができないということは、一點の疑う餘地もないのである。

ソヴェト権力は、この事情を考慮し、労働者階級および勤勞農民のために、國民經濟の全部門にわたつて、最高學府の門戸を開放した。何萬という労働者農民の青年男女が、今や、最高學府で學んでいることを、諸君は知つている。もともと以前に、資本主義の下において、最高學府が、貴族や金持の子弟によつて獨占されていたとすれば、現在、ソヴェト制度の下においては、労働者農民の青年男女が、最高學府において支配的勢力を構成しているのである。吾々が、まもなく、わが學府から、何千人という新しい技手や技師、またわが産業における新しい幹部員達を得るであろうということは疑いのないことである。

だが、これは問題の一面だけにすぎない。問題の他の一面は、労働者階級の生産・技術上におけるインテリゲンチヤが、最高學府を卒業した人々からだけで形成されるのではなく、それはわが諸企業における實際的働手、熟練労働者、工場、鑛山における労働者階級の文化的勢力のうちからも編入されるであろうということにあるのである。社會主義競争の創意者、突撃作業班の班長、労働を高揚させるための實際的鼓舞激勵者、諸々の建設工事場における作業の組織者、實に、彼等こそ、最高

學府を卒業した同志達とともに、労働者階級のインテリゲンチヤの中核を、わが産業の幹部員の中核を、構成しなければならぬところの、労働者階級の新しい層なのである。任務は、これらの創意性を示した「下層」出身の同志達を押し除けずに、勇敢に彼等を指揮的職務の地位に登用し、自己の組織者としての技能を發揮し得る可能性を彼等に與え、自己の知識をさらに豊富ならしめる可能性を彼等に與え、かつそのためには、金錢を惜しむことなく、適應せる條件を彼等のために築き上げる、ということにあるのである。

これらの同志達の間には、少なからぬ非黨員がいる。だがこのことは、彼等を指導的な職務の地位へもつと勇敢に登用するということにとつての障害とはならないのである。反對に、彼等をこそ、即ち、これらの非黨員の同志達にこそ、吾々は、特別な注意をもつて對すべきなのであり、黨は、才能のある老練な働き手達を正しく評價することを心得ているということ、彼等が實際において納得できるように、指揮的な職務の地位に登用すべきなのである。

ある同志達は、工場における指導的職務の地位には、ただ黨員の同志達だけを登用することができると考えている。これを根據として、彼等は、才能と創意性において劣つていても、最も重要な地位に黨員を登用して、才能のある、創意性をもつ非黨員の同志たちを押し除けているのである。このようにないわゆる「政策」が最も愚劣な反動的なものであることは、いうまでもないことである。かかる「政策」は、黨の信用を傷つけ、非黨員労働者を、黨から突きはなしてしまふだけだということを、證明する必要があるであらうか。吾々の政策は、黨を、門戸閉鎖的な一社會グループに轉化させてしまふことでは決してない。吾々の政策は、黨員労働者と非黨員労働者との間に、「相互的信頼」の雰圍氣と、「相互的審査」の雰圍氣とを實在させることにあるのである（レーニ

ン。わが黨が労働者階級の間で強力なのは、とりわけ、黨が、實にかかる政策をこそ遂行しているからなのである。

そこで、ソ同盟の労働者階級が自分自身の生産・技術上におけるインテリゲンチヤを持ち得るようになること、即ち、かくの如きが任務なのである。

わが産業發展のための、第四の新しい條件についての問題は、このようになってゐる。

第五の條件に關する問題に移ろう。

五、生産・技術における舊インテリゲンチヤ間の轉換徵候

生産・技術における舊ブルジョア・インテリゲンチヤに對する吾々の態度の問題もまた、別なふうを立てられる。

二年ほど前には、わが國の事情は、舊技術家インテリゲンチヤのうちの最も熟練を有する部分は、妨害工作病に感染させられてゐるというような次第であつた。そのみではない、妨害工作は、當時、一種の流行になつてゐた。ある者は妨害工作をやり、他の者は、妨害工作をやつた者を庇つた。第三の者は、そつと口を拭つて知らぬ顔をして中立を嚴守し、第四の者は、ソゾエト権力と妨害工作をやつたものとの間で動搖した。もちろん舊技術家インテリゲンチヤの大多數は、多かれ少なかれ、忠實に仕事をつすけていた。だが、ここで問題となつてゐるのは、技術家インテリゲンチヤの大多數についてではなく、彼等のうちの最も熟練をもつ部分についてである。

妨害工作の運動はどうして生じ、また何によつて培養されたか？ それは、ソ同盟内における階

級闘争の尖鋭化によつてであり、都市並に農村の資本主義的分子に對する、ソヴェト權力の攻撃政策によつてであり、ソヴェト權力の政策に對するこれらの資本主義的分子の反抗によつてであり、國際情勢の複雑化によつてであり、コルホーズとソフホーズとの建設上における困難によつてである。もしも、妨害工作者共の戰鬪的部分の積極性が、資本主義諸國の帝國主義者共の武力干渉主義的魂膽によつて、また國內における穀物上の困難によつて強化されるとすれば、積極的な妨害工作者側への舊技術家インテリゲンチヤの他の部分の動搖は、「コルホーズやソフホーズによつては、どつちみち、よい結果は得られはしないのだ」とか、「ソヴェト權力は、どつちみち變性しつつあるのだし、まもなく滅亡してしまふであらう」とか、「ボルシエヴィキは、その政策によつて、自ら武力干渉を助成しているのだ」、等についての、トロツキスト・メンシエヴィキ的饒舌家共の流行言辭によつて強化されたものであつた。その上に、右翼的偏向者の中のある老ボルシエヴィキ達さえが、『疫病』と闘いきることができず、この時期に、黨から脇の方へ離れて行つたとすれば、かつて一度もボルシエヴィズムのにおいさえ嗅いだことのない舊技術家インテリゲンチヤの一定部分もまた、神の加護によつて、動搖したからといつても、驚くべき理由は何もないのである。

かかる事情の下において、ソヴェト權力が、舊技術家インテリゲンチヤに對して、ただ一つの、一つのみの政策、即ち積極的な妨害工作者を撃滅する政策、中立的分子を分化させ、忠誠な分子を惹きつけるという政策のみを、實行し得たといふことは、わかりきつたことである。

——二年前の状態は、以上のようにであつた。

現在、吾々は、丁度これと同じ様な情況の下にあるといつてもよいだろうか？否、そういうことはできない。反對に、わが國には、現在、全く異なつた情勢が生じたのである。まず、吾々は、都市並に

農村の資本主義的分子を壊滅させ、かつ成功裡に克服しつつあるということである。このことは、勿論、舊インテリゲンチヤを喜ばせはしないであろう。彼等が、今もなお、壊滅させられた自分の友人達に對して同情の意を表しているということは、大いにありそうなことである。だが、同情者、まして、中立者並に動搖せるものどもが、自分の積極的な友人達が、峻烈な、挽回の見込みのない敗北を蒙つた後にも、これらの友人共と、その運命を共にすることに、自ら進んで同意するであろうというようなことは、あり得ないことである。

さらに、吾々は、穀物上の困難を克服した。しかも單に克服したのみではなく、ソヴェト權力がうまれて以來、かつてなかつたほど多量の穀物を、外國へ輸出しているのである。したがつて、動搖者のこの「論據」もまた消滅するのである。

さらに、ヨルホーズとソフホーズとの建設の戦線において吾々が、非常に偉大な成功を收めて、確定的に勝利したということは、現在においては、盲人でさえも見ているところである。

したがつて、舊インテリゲンチヤの「武器庫」における最も主要なものは、全滅してしまつたのである。武力干渉ということに對するブルジョア・インテリゲンチヤの期待についてはどうかといえは、それらは、——少なくとも現在のところでは——砂上の樓閣にすぎなかつたということを認めなければならぬ。事實上、六年の間、武力干渉を行うことが約束されていたが、ただの一度も、武力干渉の試みが行われなかつた。わが炯眼なブルジョア・インテリゲンチヤが、單に愚弄されていたのだということ、いまや認めるべき時である。周知なモスクワの公判における積極的な妨害工作者の舉動そのものが、妨害工作の思想を打破しなければならなかつたし、また實際に打破されたということについては、私はもはや述べないであらう。

これらの新しい事情が、わが國の舊技術家インテリゲンチヤに影響を與えずにはおかなかつたといふことは、わがかりきつたことである。新しい情況は、舊技術家インテリゲンチヤの間に新しい氣分を創りあげなければならなかつたし、また實際に創り上げたのであつた。實際、このことによつて、前には妨害工作者に同情していたこのインテリゲンチヤの一部分が、ソヴェト權力の側へ轉換せんとしてゐるといふ確定的な徴候が、わが國に存在するという事實もまた説明されるのである。また、舊インテリゲンチヤのこの層のみではなく、明白な、昨日までの妨害工作者さえが、昨日までの妨害工作者のかなりな部分さえもが、労働者階級と協同して、幾多の工場で働きはじめるといふこの事實、この事實は、舊技術家インテリゲンチヤの間における轉換が、すでに開始されたといふことを、疑いもなく物語るものである。だが、勿論このことは、わが國にはもはや妨害工作者はいないといふことを意味するものではない。否、そんなことを意味しはしない。妨害工作者は存在してゐるし、また、わが國に諸階級が存在する限り、資本主義による圍繞がある限り、妨害工作者は存在するであらう。だが、このことは、どんなふうにか、とにかく以前には妨害工作者に同情をよせていた舊技術家インテリゲンチヤのかなりな部分が、現在、ソヴェト權力の側へ方向轉換したので、積極的な妨害工作者は、僅な人数しか残らず、彼等は孤立させられ、かつ彼等は當分の間、地下ふかく潛み込まざるをえなくなるであらう、といふことを意味する。

しかして、これによつて、舊技術家インテリゲンチヤに對するわが政策もまた、これに相應するように變更されなければならないといふことになるのである。もともと、妨害工作の全盛期における、舊技術家インテリゲンチヤに對する吾々の態度が、主として、彼等を壊滅させるといふ政策によつて表わされていたとすれば、現在、このインテリゲンチヤがソヴェト權力の側へ轉換してゐる時期にお

いては、彼等に對する吾々の態度は、主として、彼等を吾々の方に惹きつけ、彼等について配慮するという政策によつて表わされなければならないのである。新しい、變化した條件の下において、舊政策を實行し続けるということは、正しからぬことであり、また非辯證法的なことであつたであらう。現在、舊派の各専門家と技師達が、殆どみな、未だ逮捕されない罪人であり、妨害工作者であるかか如くみなすということは、馬鹿げたことであり、賢明ならざることであつたであらう。「専門家抹殺主義」は、わが國では、有害な、恥すべき現象として、いつもみなされてきたし、また現在においても、そうみなされているのである。

そこで、舊派の技師・技術家達に對する態度を變更すること、彼等に對して、ヨリ多くの注意を拂い、ヨリ多くの配慮を與えること、もつと勇敢に彼等を仕事に惹き入れること、即ち、かくの如きが任務なのである。

わが産業發展のための、第五の新しい條件に關する問題は、このようになつてゐる。
最後の條件に關する問題に移らう。

六、獨立採算制について

もし、私が、もう一つの新しい條件に言及しなかつたならば、事態の全貌を明かにし盡したものとはいい得なかつたであらう。問題は、産業のための、國民經濟のための蓄積の源泉についてであり、この蓄積のテンポの強化ということについてである。

蓄積という見地から見た、わが産業の發展における新しいもの、特殊なものとは何であるか？それは、蓄積の舊い源泉が、産業の一層の擴張にとつては、すでに不十分になりはじめたということである。したがつて、それは、工業化のボルシエヴィキ的テンポを保持し、發展させることを、吾々が真に欲するならば、蓄積の新しい源泉を探し求め、かつ舊い源泉を強化することが、ゼヒ必要だということである。

資本主義諸國の歴史によつても、自己の産業を高度に高揚させることを希望した、ただ一つの新しい國家といえども、長期のクレジット、或は、借款の形で國外からの援助なしにすませることができなかつたということは周知のことである。この根據に立つて、西歐諸國の資本家共は、クレジットや借款が與えられなかつたならば、たぶん、わが國の工業化を挫折させることができるであろうと考へて、わが國にクレジットを與え、借款を與えることを斷然拒否したのであつた。だが、資本家達は思い違ひをした。彼等は、わが國が、資本主義諸國とは異なつており、工業を復興させ、かつこれを一層發展させるために十分な、蓄積のための若干の特殊源泉を自己の掌中にもつてゐるということと勘定に入れていなかつたのだ。しかし、眞實吾々は、單に工業を復興させたのみでなく、また農業と交通運輸とを復興させたのみでなく、重工業、農業、交通運輸の再建という巨大な事業を、軌道に乗せることに、すでに成功したのであつた。わが國では、この事業のために數百億ルーブルが費されたということは、わかりきつたことである。これらの數百億ルーブルを吾々はどこから汲み出し得たか？それは、輕工業からであり、農業からであり、豫算上での蓄積からであつた。わが國最近までの事情は、このようであつた。

だが、現在では、事情は、まつたく別なふうになつてゐる。もしも前に、工業と交通運輸の再建が、

蓄積の舊い源泉で足りていたとすれば、現在、これは、すでにあきらかに不足はじめているのである。現在問題となつてゐるのは、舊い工業を再建するということについてはない。問題となつてゐるのは、ウラルにおける、シベリアにおける、カザヒスタンにおける新しい技術によつて裝備された工業を創設するということについてである。問題となつてゐるのは、ソ同盟の穀物産出地方、畜産の行われてゐる地方、原料産出地方において、新しい大規模の農業生産を創り上げることについてである。問題となつてゐるのは、ソ同盟の東部と西部との間に、新しい鐵道網を敷設することについてである。蓄積の舊い源泉が、この巨大な事業に對して、十分なものでありえないということにはわがかりきつたことである。

だが、これはまだ全部ではない。これになお、不經濟な仕事のやり方のために、獨立採算制の原則が、多くのわが企業と經濟團體内において、全然打ち壊されてしまふこととなつたという事情をつけ加えなければならぬ。幾多の企業と經濟團體においては、計算し、勘定し、正確な收支對照表を作成することを、すでにすつと以前からしなくなつてゐるということは事實である。幾多の企業と經濟團體内においては、「緊縮政策」、「不生産的出費の削減」、「生産の合理化」なる概念が、すでにすつと前に、流行物でなくなつてゐるということは事實である。明かに、彼等は、國立銀行は、「どつちみち、必要な額の金を吾々に支給してくれるだろう」ということを當にしているのである。最近、多くの企業における生産原價が、高くなりだしてゐるということは、事實である。企業に對しては、生産原價を一割乃至それ以上下げようという任務が與えられてゐるのに、これらの企業は却つて、生産原價を引上げてゐるのである。ところで、生産原價を下げるということは、何を意味するか？ 生産原價をそれぞれ一分ずつ引下げるとは、一億五千乃至二億ルーブルを、工業の内部に蓄積するこ

とを意味するということ、諸君は知つてゐる。かかる状態の下において、生産原價を引上げるといふことは、工業にとつて、また全國民經濟にとつて、數億ルーブルを失うことを意味してゐるといふことは明かなことである。

すべてこれらのことによつて、輕工業だけで、豫算上での蓄積だけで、農業からの収入だけで、凌ぎをつけるということは、もはやこれ以上できないということになるのである。輕工業は、蓄積の最も豊富な源泉であり、かつ輕工業は、現在、一層發展すべき一切の可能性をもつてはいるが、この源泉は、無限にあるのではない。農業は、これに劣らぬ豊富な蓄積の源泉ではあるが、農業自身、現在、農業の再建期において、國家からの財政上の援助を必要としてゐるのである。豫算上での蓄積については、これが無限なものではありえないし、またそうであつてはならないということ、諸君自身知つてゐる通りである。では、何がまだ残つてゐるか？ 重工業が残つてゐる。したがつて、重工業——そして何よりもまずそのうちの機械製作工業——もまた、蓄積を與え得るようにしなければならぬのである。したがつて、蓄積の舊い源泉を強化させ、擴大させると共に、重工業——そして何よりもまず機械製作工業——もまた、蓄積を與えるようにすることが必要なのである。

活路は、この點にあるのである。

そして、このためには何を必要とするか？ そのためには、不經濟な仕事のやり方を根絶し、工業の内的資源を動員し、すべてのわが企業に、獨立採算制をしつかりと根ずかせ、かつ強化させ、生産原價を系統的に引下げ、例外なしに、工業の全部門における工業内部の蓄積を増大させることを必要とするのである。

かくの如きが、活路である。

そこで、獨立採算制をいつかりと根すかせ、強化させること、工業内部の蓄積を高めること、即ちかくの如きが任務なのである。

七、新しい方法で仕事をし、新しい方法で指導すること

同志諸君、以上の如きが、わが工業發展の新しい諸條件である。

これらの新しい條件の意義は、これらの條件が、仕事の新しい方法、指導の新しい方法を要求しているところの新しい情勢を、産業のために築きあげているということである。

そこで――

イ、かくして、これ以上、従前通りに、労働力を自然的の成行のままにまかせておくということに、もはや期待してはならない、ということになるのである。工業に労働力を補充するためには、よく組織されたやり方で労働者を募集しなければならぬし、労働を機械化しなければならぬのである。わが仕事のテンポとわが生産規模との下において、機械化することなしにすませることができると考えることは、海の水を匙で汲み盡せるだらうと期待することと同じである。

ロ、さらに、工業における労働力の頻繁な移動を、これ以上、我慢してはならないということになるのである。この禍を免れるためには、新しい方法によつて労働賃銀を規定し、企業における労働人員を、多かれ少なかれ恒久的なものにしなければならぬのである。

ハ、さらに、生産における個人責任分散制をこれ以上我慢してはならないということになるのである。この禍を免れるためには、新しい方法で労働を組織しなければならぬし、労働者のそれぞれのグループが、仕事に對して、諸機械装置に對して、工作機械に對して、仕事の質に對して、責任をもつように、諸勢力を配置しなければならないのである。

ニ、さらに、吾々が、ブルジョアのロシアから受け継いだところの最少限度の舊い技師・技術家達をもつてしては、従前どおりにこれ以上やつてゆくことは不可能だということになるのである。現在の生産上のテンポをはやめ、かつ生産規模を擴大するためには、労働者階級が、自分自身の生産・技術上におけるインテリゲンチヤをもつようになることが必要なのである。

ホ、さらに、舊派の専門家、技師・技術家全部を、従前通り十束一からげにしてはならないということになるのである。移り變る情勢に適應するためには、労働者階級側へ、確定的に方向轉換しているところの、舊派の専門家、技師・技術家に對するわが政策を變更し、最大限の配慮を示さなければならぬのである。

ヘ、最後に、従前通り、蓄積の舊い源泉によつて凌ぎをつけることはできない、ということになるのである。工業と農業との一層の擴大發展を保障するためには、蓄積の新しい源泉を活用させはじめ、不經濟な仕事のやり方を絶滅し、獨立採算制をしつかりと根すかせ、生産原價を引下げて、工業内部の蓄積を増大せしめ得るようにすることが必要である。

かくの如きが、經濟建設のために、仕事の新しい方法と指導の新しい方法を要求するところの、工業發展の新しい諸條件なのである。

新しいやり方で指導を調整するためには、何を必要とするか？

そのためには、何よりもまず、わが經濟上の指導者達が、新しい情勢を理解し、工業發展の新しい諸條件を具體的に研究し、新しい情勢の要求に適應させて、自己の活動を再建することを必要とするのである。

それがためには、さらに、わが經營上の指導者達が「一般的」ではなく、「二階から目ぐすりの」ではなく、具體的に、實物教育の方法で企業を指導し、彼等が一般的なおしやべりの見地からではなく、嚴格に實務的に、各々の問題に對し、彼等が紙の上だけのお役所式な通牒や、一般的な言葉、或は一般的なスローガンに局限せず、事業の技術を把握し、事業の細部までふかく探究し、「小さい事」をふかく探究することを必要とするのである。なせならば、偉大なる事業は、「小さい事」から今や建設されているからである。

それがためには、さらに、時には、百乃至二百の企業を包括してゐるところの現在の嵩ばりすぎて不便なわが連合體を、即時細分し、數個の連合體に分けることが必要となるのである。百或はそれ以上の工場と關係づけられている連合體の議長が、これらの工場、これらの工場の能力、仕事を、本當に知ることができないということはわかりきつたことである。議長が、工場のことをよく知らないようでは、彼に工場の指導など到底できる筈がないということは、わかりきつたことである。したがつて、連合體の議長遂に、工場を本當にふかく研究し、工場を本當に指導し得る可能性を得させるためには、多すぎる工場を減らして彼等の負擔を軽くしなければならぬし、また連合體を、數個の連合體に分割して、連合體を個々の工場にもつと接近させるようにしなければならぬ。

それがためには、さらに、わが連合體は、合議制管理から、單獨責任制管理へ移行することを必要とする。現在、問題は、連合體の參議會には、十人乃至十五人ほどの參議員がいて、紙の上にかか

書いたり、議論をやつたりしている。同志諸君、こんなふうにして、これから先も管理してゆくことはできない。紙の上だけの「指導」を止め、眞の、實務的な、ボルシェヴィキ的活動へ轉じなければならぬ。連合體の指導部には、一人の連合體議長と數名の副議長とを残しておけばよい。連合體を管理するためには、これだけで全く十分である。爾餘の參議員はもつと下の方へ、即ち工場へ派遣した方がよいであろう。この方が、彼等にとつてもまた仕事にとつても、遙に有益なことであろう。

それがためには、さらに、連合體の議長と副議長達が、なるべく度々工場を巡視し、仕事のために、そこで行けるだけ長く留まり、工場の働き手達とできるだけよく知り合いになり、現場の人達を教えるだけでなく、これらの人達から、自分等が教わるということが必要とするのである。工場から遠く離れた事務所じつと坐つていて、現在、事務室から指導することができると考えることは、思ひ違いといふべきである。工場を指導するためには、企業の働き手たちと、なるべく頻繁に交際しなければならぬ。

最後に、一九三一年度における、わが生産計畫について一言述べよう。わが産業プログラムは、非現實的なものであり、遂行不可能なものであると主張しているところの、黨のまわりをうろついている若干の俗人達がいる。これは、作家シチエドリンの小説にある「意味のない馬鹿げたこと」を、自分の周囲にしゃべり散らす用意が、いつでもできているところの、「聰明至極なカマス」に類するようなものである。わが生産プログラムは、現實的なものであるか？無條件的に、然りだ！このプログラムを實現するために必要な一切の條件がわが國には現存しているということからだけでも、それは現實的なものなのである。このプログラムの遂行ということが、現在専ら、吾々自身に、わが國がもつている極めて豊富な可能性を利用すべき、吾々の手腕に、吾々の欲求に懸つていふということ

からだけでも、それは現實的なものなのである。多くの企業と多くの工業部門とが、計畫をすでに超過遂行したというこの事實を、これ以外の他の何を以て、説明することができるであろうか？つまり、他の企業および工業部門も、計畫を遂行し、超過遂行することができるといふことになる。

生産計畫は、單に掻きあつめられた數字と任務の一覽表に歸着するものであると考えることは、馬鹿げたことであろう。事實上、生産計畫とは、幾百萬という人々の生き生きとした實踐的活動なのである。わが生産計畫案を現實なものたらしめるもの、それは、新しい生活を創造している幾百萬の勤勞大衆なのである。わが計畫を現實のものたらしめるもの、それは、生きた人達であり、それは、吾々であり、勞働せんとする吾々の意志であり、新しい方法で働こうとする吾々の覺悟であり、計畫を遂行しようとする吾々の決心である。わが國には、それが、即ち、この決心といふことがあるだろうか？然り存在する。したがつて、わが生産プログラムは、實現できるし、また實現されなければならぬのである。(長く、つずく、拍手)

ボルシエヴィズムの歴史における

二——三の問題について

——「プロレタルスカヤ・レヴオリユーチャ」誌編集局宛の手紙——

敬愛する同志諸君！

「プロレタルスカヤ・レヴオリユーチャ」(一九三〇年、第六號)誌上に、スルツキーの反黨的、半トロツキスト的論文「ドイツ社會民主黨の戦前の危機時代におけるこの黨についてのボルシエヴィキ」が、討論さるべき論文として、掲載されたことに對して、私は斷乎として抗議する。

スルツキーは、レーニン(ボルシエヴィキ達)が、ドイツの社會民主黨、そして一般に戦前の社會民主黨内における中間主義の危険を過少評價した、即ち正體を隠した日和見主義の危険、日和見主義に對する調停的態度の危険を過少評價したと斷言している。換言すれば、スルツキーの言によると、レーニン(ボルシエヴィキ達)は、日和見主義に對して斷乎たる鬭争を實行しなかつた、ということになるのである。なせならば、中間主義を過少評價するということは、實質的には日和見主義に對して展開された鬭争を拒否することだからである。かくして、戦前の時期におけるレーニンは、

まだ本當のボルシエヴイキではなかつたということ、帝國主義戰爭の時期、或は、むしろこの戰爭の終り頃になつてのみ、レーニンが本當のボルシエヴイキになつた、ということになるのである。

こんなふうには、スルツキーは、彼の論文中で叙述しているのである。ところで君達は、この新たに出現した「歴史家」を、中傷者、偽造者として難詰する代りに、彼と討論をやり出し、彼に演壇を與えているのである。スルツキーの論文が、討論さるべき論文として、君達の雑誌に掲載されたことに對して、私は抗議せずにはいられない。なんとすれば、レーニンのボルシエヴイキについての問題、レーニンが、日和見主義のある一形態としての中間主義に對する原則的な、斷乎たる鬭争を實行したとか、或は實行しなかつたとかいう問題、レーニンは、本當のボルシエヴイキであつたとか、或は、そうではなかつたとかという問題を、討論の題目に轉化してはならないからである。

十月二十日に、黨中央委員會へ送付された「編集局より」という聲明において、君達は、編集局が、スルツキーの論文を、討論さるべき論文として掲載したことによつて誤謬を犯したと認めている。このことは、編集局の聲明が、甚だしくおくれてなされたとはいいながら、勿論よいことである。しかしながら、君達は、その聲明において「戦前の第二インターナショナルとボルシエヴイキの相互關係に關連した問題全部を『プロレタルスカヤ・レヴオリューチャ』の誌上において、一層ふかく研究することが、政治的に、極めて緊切、かつ必要なことであると編集局は考へる」と言明して、新しい誤謬をしでかしている。このことは、君達が、ボルシエヴイキの公理である問題についての討論に、人々を、再び引きすり込もうと欲していることを意味している。このことは、レーニンのボルシエヴイキについての問題を、公理であることから「一層ふかく研究すること」をゼヒ必要とする

ころの問題に轉化させようと、君達がまた再び考えているということの意味している。なぜか？ またどんな根據によつてか？

レーニン主義が、西歐における中間主義（カウツキー）、またわが國の中間主義（トロツキーその他）をも含めて、各種各様の日和見主義に對する容赦なき鬭争の過程において生れ、成長し、強化されたということは、すべての人達によく知られているところである。ボルシェヴィズムに對する眞向からの敵といえども、これを否定することはできない。これは公理である。ところが君達は、『一層ふかく研究すること』を必要とする問題に、この公理を轉化させてしまおうと企圖して、吾々を、後へ引き戻そうとしてるのである。なぜか？ またどんな根據によつてか？ ボルシェヴィズムの歴史をよく知つていないからでもあろうか？ スルツキー輩やその他のトロツキーの弟子達に、口を閉じさせたといえないようにさせんがための、腐つた自由主義のゆえからでもあろうか？ ボルシェヴィズムの最も切實な利益を犠牲にしても實行しようとするところの誠に奇怪な自由主義である。編集局は、スルツキーの論文中の何を一體討論審議するに値するものとみなしたのであろうか？

一、スルツキーは、レーニン（ボルシェヴィキ達）が、戦前の時期におけるドイツ社會民主黨の日和見主義者達、また第二インターナショナルの日和見主義者達との決裂、分裂をめざす方針を實行しなかつたと斷言している。君達は、スルツキーのこのトロツキスト的テーゼについて討論することを欲しているのだ。だが、この點において、討論すべきどんなことがあるというのであろうか？ スルツキーが、レーニンを、ボルシェヴィキ達を、單に中傷しているにすぎないのだということは、明かなことではないか？ 中傷は、難詰こそさるべきであつて、討論の題目に轉化されるべきではないのである。

どのボルシェヴィキも、彼が眞のボルシェヴィキであるならば、次のことを知っている。それはレーニンが、戦争よりもすつと前、大體一九〇三年——四年頃から、即ち、ロシアにボルシェヴィキのグループが形成され、ドイツの社會民主黨内に左翼が初めて頭角を現わしはじめた頃から、わが國、即ち、ロシア社會民主黨内においても、また彼方、第二インターナショナル、特にドイツ社會民主黨内においても、日和見主義者との決裂、分裂をめざす方針を實行したということである。

それだからこそ、ボルシェヴィキは、すでにその當時(一九〇三年——一九〇五年)、第二インターナショナルの日和見主義者の陣列内で、「分裂派」、或は「擾亂派」というような名譽ある名聲を獲得したのだということ、ボルシェヴィキはだれでもみな知っている。だが、第二インターナショナル内における社會民主黨左翼、そしてまず第一にドイツ社會民主黨内における左翼が、「決裂」とか、「分裂」とかいう言葉を口にすることをさえ恐れているような、組織的にもまだ完全に形成されてはおらずイデオロギー的にも錬磨されてはいない、弱い、無力なグループであつたから、レーニンは何をすることができたであろうか？ またボルシェヴィキ達は、何をすることができたであろうか？ レーニンに、そしてボルシェヴィキ達に、ロシアから、西歐の諸黨内における分裂を左翼に代つて組織すべきであつたなどということ、を要求することはできない。

組織的に、またイデオロギー的に弱いということが、戦前の時期だけに限らず、社會民主黨左翼の特徴であつたということについては、私はもはや述べない。周知の如く、この否定的な特徴は、戦後の時期においても、左翼の特徴として保持されていたのである。一九一六年十月、即ち戦争の開始後二年以上たつてから印行された「ユニウスのパンフレット」につい

て」* というレーニンの有名な論文中でなされたドイツ社會民主黨左翼に對する評價は、すべての人達によく知られているところである。その論文で、レーニンは、ドイツにおける社會民主黨左翼が犯している多くの重大な政治的誤謬を批判しつつ、「カウツキー的偽善、術學的態度、日和見主義者に對する、「友誼」の醜惡な網で四方八方から縛りつけられている、すべてのドイツ左翼の弱さ」について語っており、また彼は、「ユニウスは、分裂を恐れ、革命的スローガンを、徹底的に口にすることを恐れているドイツ社會民主主義者達の、「環境」から、左翼社會民主主義者達さえ、「環境」から完全には解放されていない」、ということ語っている。

第二インターナショナルの全グループの中で、ロシアのボルシェヴィキは、當時、その組織上における經驗の點からいつて、またイデオロギー的に十分鍛え上げられているということによつて、そのロシア社會民主黨内の日和見主義者達との斷然たる決裂、斷然たる分裂をなすという意味で、何らか重大な方策を執り得たところの唯一のグループであつた。スルツキー輩が、レーニンとロシアのボルシェヴィキは、日和見主義者（ブレハーノフ、マルトフ、ダン）との分裂を組織し、中間主義者（トロツキー、その他八月プロツクの支持者共）を追拂うために、自分達の有する力量全部を用いなかつたということ、を、證明しようとするのでなく、單に臆測しようとしたのであつたとすれば、その時には、レーニンのボルシェヴィズムについて、ボルシェヴィキ達のボルシェヴィズムについて、論

* ユニウスというのは、ドイツ社會民主黨内における左翼社會民主主義者の指導者ロザ・ルクセンブルグのことである。

議することもできたであろう。ところが、問題は、スルツキー輩が、かかる奇異な臆測をおくびにさえも出せないということにあるのだ。彼等はこれを敢てすることができないのだ。なせならば、ロシアのボルシエヴイキが遂行したところの（一九〇四年——一九一二年）各種各様の日和見主義者との決裂という斷乎たる政策についてのだれにも周知な諸事實が、かかる臆測に反對して叫びをあげるであろうということを知っているからである。彼等はこれを敢てすることができないのだ。なせならば、すぐその翌日には彼等が嘲笑の的となるであろうということを知っているからである。

ところで次の點こそ問題なのである。即ち、ロシアのボルシエヴイキは、第二インターナショナルの日和見主義者並に中間主義者との決裂の方針、彼等との分裂の方針を取らずして同時に、帝國主義戰爭よりもずっと前（一九〇四年——一九一二年）に、ロシアの日和見主義者、中間主義者・調停主義者達との分裂を實現することができたであろうか？ ということである。ロシアのボルシエヴイキが、日和見主義者と中間主義者とに對する自分の政策を西歐の左翼にとつての政策の模範になるものとみなしたということ、何人が疑い得るであろうか？ またロシアのボルシエヴイキが、西歐の社會民主黨左翼、特にドイツ社會民主黨の左翼を、彼等自身の日和見主義者並に中間主義者との決裂へ、分裂へ、さまざまにして押しやつたということ、何人が疑い得るであろうか？ 西歐の社會民主黨左翼が、ロシアのボルシエヴイキにならつて、そのように行動できるまでになつていなかったということ、レーニンの罪ではないし、ロシアのボルシエヴイキの罪ではないのである。

二、スルツキーは、レーニンとボルシエヴイキ達が、ドイツ社會民主黨内の左翼を、斷乎不變の態度で支持せずに重大な保留條件つきでのみ左翼を支持し、また分派的考慮が、彼等をして左翼を徹底的に支持することを妨げたといつて、レーニンとボルシエヴイキ達とを非難している。君達は、こ

のインチキな、骨の髄までごまかしの非難に對して、討論することを欲しているのだ。だが、一體そこには討論すべきどんなものがあるというのか？ スルツキーが、ドイツにおける左翼の立場上における眞の缺陷を、レーニンとボルシエヴィキ達に對するごまかしの非難で覆いかくそうとして、ここで駆引をやつたり努力したりしているのだということは明かなことではないか？ また、ボルシエヴィキが、労働者階級と労働者階級の革命とを裏切らずに、ボルシエヴィズムとメンシエヴィズムとの間を何度も動搖したところのドイツの左翼を重大な保留條件なしに、彼等の誤謬に對する重大な批判なしに、支持することができなかつたということは、明かなことではないか？ 詐欺的な駆引は、非難の烙印をこそ押さるべきであつて、討論の題目に轉化されるべきではないのである。

そうだ、ボルシエヴィキは、ドイツの社會民主黨左翼の半メンシエヴィキ的誤謬を批判し、一定の重大な保留條件すきでのみ、彼等を支持した。だが、このことに對して、ボルシエヴィキを褒めることをこそ必要とすれ、非難すべきではないのである。

このことに疑いを懐くような人達があるであらうか？

歴史上の、最もよく知られている諸事實の方へ目を向けてみよう。

(イ)、一九〇三年には、黨員の資格問題について、ロシアのボルシエヴィキとメンシエヴィキとの間に、重大な意見の不一致が暴露された。ボルシエヴィキは、黨員の資格についての自己の定式すけによつて、非プロレタリア的分子が黨内に氾濫することを防ぐ組織的な拘束を作り上げんと欲したのであつた。かかる氾濫の危険は、ロシア革命のブルジョア・民主々義的性格のゆえに、當時極めて現實的なものであつた。ロシアのメンシエヴィキは、非プロレタリア的分子に、黨の門戸を廣く開放するところの、對蹠的な立場を固守したのであつた。世界革命運動にとつての、ロシア革命の問題の

重要さに鑑み、西歐の社會民主主義者は、この問題に干渉することを決心した。ドイツの社會民主黨左翼、その當時の左翼の指導者バルヴスとローザ・ルクセンブルグも干渉した。ところで、どんなふう干渉したか？ 兩人ともメンシェヴィキに賛成し、ボルシェヴィキに反対したのだ。しかして、ボルシェヴィキに對して、超中央集權主義であり、ブルンキストの傾向をもつという非難があびせかけられたのだつた。その後、これらの俗悪な俗物的な形容語は、メンシェヴィキが、これ幸と早速利用するところとなり、世界中に撒きちらされたのであつた。

(ロ)、一九〇五年には、ロシアの革命の性格について、ロシアのボルシェヴィキとメンシェヴィキとの間に、意見の不一致が展開した。ボルシェヴィキは、プロレタリアートの指導權下における、労働者階級と農民との同盟という思想を固守した。ボルシェヴィキは、この大業を、プロレタリアートと農民の革命的民主主義的獨裁にまで導いてゆく事が必要であり、それによつて、貧農側からの支持の保障の下にブルジョア民主主義革命から社會主義革命へ即時移行することが必要であることを主張した。ロシアのメンシェヴィキは、ブルジョア民主主義革命におけるプロレタリアートのヘゲモニーの思想を排撃し、労働者階級と農民との同盟の政策よりも、彼等は自由主義ブルジョアジーとの協調政策の方がよいとなし、プロレタリアートと農民の革命的民主主義的獨裁は、ブルジョア革命の發展に矛盾撞着するところの、反動的なブルンキスト的圖式であると言明した。ドイツ社會民主黨内の左翼、バルヴスとローザ・ルクセンブルグとは、この論争に、どんなふうな態度をとつたか？ 彼等は、労働者階級と農民の同盟という政策に對するメンシェヴィキ的否定によつて完全に浸透されていくところの、永續革命（革命についてのマルクスの圖式の醜惡な歪曲）という空想的、半メンシェヴィキ的な圖式をつくつて、かつそれを、プロレタリアートと農民の革命的・民主主義的獨裁というボルシ

エヴィキの圖式に對置したのであつた。その後、この半メンシエヴィキ的永續革命の圖式は、トロツキーによつて（一部はマルトフによつて）いち早く利用され、レーニン主義に反對する鬭争の武器に轉化されたのであつた。

(ハ)、戦前の時期に第二インターナショナル諸黨において、最も現實的な問題の一つとして、民族・植民地問題、被壓迫民族と植民地の問題、被壓迫民族並に植民地解放の問題、帝國主義に對する鬭争の方法についての問題、帝國主義打倒の方法についての問題が登場した。プロレタリア革命を發展展開させ、帝國主義を攻圍するために、ボルシエヴィキは、民族自決に基く被壓迫民族と植民地の解放運動を支持する政策を提議し、先進諸國のプロレタリア革命と、植民地並に被壓迫諸國の人民の、革命的・解放運動との統一戦線の圖式を發展普及させた。すべての國の日和見主義者、すべての國の社會・排外主義者と社會・帝國主義者とは、時を移さずこのことに關連して、ボルシエヴィキ反對に起ち上つたのだ。彼等は、ボルシエヴィキを狂犬のように狩り立て、迫害追求した。その當時、西歐の社會民主黨左翼は、どんな態度をとつていたか？ 彼等は、帝國主義についての半メンシエヴィキ的理論を發展させ、マルクス主義的概念における民族自決の原則（分離と自主的國家の樹立にいたるまでの）を排斥し、植民地並に被壓迫諸國における解放運動の重大にして革命的な意義についてのテーゼを否認し、プロレタリア革命と民族・解放運動との統一戦線の可能なことについてのテーゼを否認し、かつ、民族・植民地問題の全面的な過少評價であるところの、この半メンシエヴィキ的ごたませ全部を、ボルシエヴィキのマルクス主義的圖式に對置させたのであつた。この半メンシエヴィキ的ごたませを、あとでトロツキーがいち早く取り上げ、レーニン主義に對する鬭争の武器として、これを利用したことは、周知のことである。

かくの如きが、すべての人によく知られているドイツ社會民主黨左翼の誤謬である。

この問題を取扱つてゐるレーニンの論文中で酷評されてゐるところの、ドイツ左翼の他の誤謬については、私はもはや述べない。

十月變革の時期におけるボルシェヴィキの政策を評價するに際して、彼等が犯した誤謬についても、私は述べない。

戦前の時期の歴史からとり出した、ドイツ左翼のこれらの誤謬は、社會民主黨の左翼が彼等の左翼的傾向にもかかわらず、メンシエヴィキ的の携帶品から、まだ解放されてゐないといふことを物語るものでなくて何であらう？

勿論、ドイツにおける左翼は、重大な誤謬だけを有してゐたといふのではない。彼等は、また、大きな、そして重大な革命的な功績をも持つてゐる。私は、國內政策、そして特に選舉鬭争の問題に對する、議會内並に議會外鬭争の問題に對する、ゼネストについての、戦争についての、ロシアにおける一九〇五年の革命、その他等々についての、多くの彼等の功績と革命的言動とを考慮していつてゐるのである。それだからこそ、ボルシェヴィキは、左翼として彼等を重要視し、彼等を支持し、彼等を前進させるために押したのであつた。しかし、このことは、ドイツにおける社會民主黨左翼が、これとともに、多くの重大な政治的、理論的誤謬を持つてゐたこと、また、彼等は、まだメンシエヴィキの重荷から解放されておらず、それがために、ボルシェヴィキ側からの最も眞剣な批判を大いに必要としてゐるといふ事實を、なくしてしまひはしないし、また、なくしてしまふことはできないのである。

レーニンとボルシェヴィキ達が、労働者階級の利益を裏切らず、革命の利益を裏切らず、共產主義を裏切らずに、西歐の社會民主黨の左翼を重大な保留條件も附けず、彼等の誤謬に對する重大な批

判もしない、支持することができたであろうか？ ということは、現在、君達自身で判断して見たまえ。

もしもスルツキーがボルシエヴィキであつたならば、當然、レーニンとボルシエヴィキ達を褒めなければならぬことについて、逆に彼等を非難したりなどして、彼は、半メンシエヴィキとして、假面を被つたトロツキストとして、徹底的に自己を暴露しているということは、明かなことではないか？

スルツキーは、レーニンとボルシエヴィキ達が西歐の左翼を評價するに際して、自分の分派的考慮から發足したことを、したがつて、ロシアのボルシエヴィキは、國際革命の偉大なる事業を、自己の分派の利益の犠牲に供したのだという臆測をしている。かかる臆測以上に、下劣な、また醜惡なものはない。ということをはたして證明する必要があるであろうか？ これ以上に下劣なものは何一つありえない。というのは、メンシエヴィキの手におえない下劣な者共でさえも、ロシア革命は、ロシア人の私事ではないということ、反對にそれは、全世界の労働者階級の事業であり、世界プロレタリア革命の事業である、ということを理解しはじめているからである。これ以上に醜惡なものは何一つありえない。というのは、第二インターナショナルのうちの、人を中傷することを商賣にしている者さえも、ボルシエヴィキの、徹底的にしようとことなまで革命的であるインターナショナルは、全世界の労働者にとつてのプロレタリア的インターナショナルの模範であるということを理解しはじめているからである。

そうだ、ロシアのボルシエヴィキは、黨についての問題、ブルジョア民主主義革命に對するマルクス主義者の態度、労働者階級と農民の同盟、プロレタリアートのヘゲモニー、議會内並に議會外の闘争、ゼネスト、ブルジョア民主主義革命の社會主義革命への成長轉化、プロレタリアートの獨裁、

帝國主義、民族の自決、被壓迫民族並に植民地の解放運動、これらの運動を支持する政策、等々についての問題の如き、ロシア革命の根本的な問題を、最前面に押しすすめたのであつた。彼等は、これらの問題を、西歐における社會民主黨左翼の革命的耐久力を點檢するための試金石として、提出したのであつた。彼等はこうする權利をもつていたか？　しかし、彼等のもつていた。單に權利をもつていたのみではなく、こんなふうに行動する義務があつたのだつた。彼等は、こんなふうに行動する義務があつたのだ。なせならば、これらの問題はすべてまた同時に、世界革命の根本的な問題であり、ボルシエヴイキは、自己の政策、自己の戦術をこの世界革命の任務に從屬させたからである。彼等はこんなふうに行動する義務があつた。なせならば、ただかかる問題によつてのみ、第二インターナショナルのそれぞれのグループの革命性を本當に點檢する事ができたからである。そこでは、どの點に、ロシアのボルシエヴイキの「分派性」があり、そしてまたこの點ではどこに「分派的」考慮があるか？　と問わなければならない。

レーニンは、早くも一九〇二年に、彼のパンフレット「何をなすべきか？」のなかで次のように書いた。即ち「歴史は今や、吾々の前に、一個の緊急任務を提起した。それは如何なる國のプロレタリアトも直面する全緊急任務のうちでも、最も革命的な任務である」、また「この任務の實現、即ちヨーロッパの反動のみならず、アジア（今や吾々はこういい得る）の反動の最も強力な支柱の破壊は、ロシアのプロレタリアトを國際革命的プロレタリアトの前衛となすであらう」と。パンフレット「何をなすべきか？」が出版されてから、三十年を經過した。この期間に生じた諸事件が、レーニンの言葉を、極めて鮮明に確認していることを、誰一人敢て否定しえないであらう。しかしてこのことからロシア革命は、世界革命の結節點であつた（そして現にそのとおりである）し、ロシア革命の根本問

題は、また同時に、世界革命の根本問題でもあつた（そして今もそうである）ということにならないであらうか？

このような根本的な諸問題によつてのみ、西歐における社會民主黨左翼の革命性を點検することができたのだということは、明かなことではないか？

これらの問題を、「分派的」問題として観ている人々は、下劣な人間として、また變心者として、徹底的に自己を暴露しているのだということは、明かなことではないか？

三、スルツキーは、中間主義に對するレーニン（ボルシエヴィキ達）の決然かつ斷乎たる鬭争を證言している公文書が、まだ十分な量において採し出されていないと斷言している。彼は、この官僚主義的テーゼを、レーニン（ボルシエヴィキ達）が、當然のこととして、第二インターナショナル内の中間主義の危険性を過少評價したという命題に有利な、動かすべからざる論據として振りまわしているのである。君達は、このチンブンカンブンなものに對し、このインチキな奸計に對して討論をはじめようとしているのだ。だが一體、そこで討論を必要とするようなどんな事があるか？ かくして、スルツキーは、文書についてつべこべということによつて、自己のいわゆる立場の貧困さと賸物であることを覆い隠そうと努力しているのだということは、明かなことではないだらうか？

スルツキーは、現存する黨の文書だけでは、不十分だと考えている。なぜか？ 何を根據にしてそういうのか？ 第二インターナショナルに關し、また同じ様に、ロシア社會民主黨の黨内鬭争に關する、すべての人達によく知られている文書が、日和見主義者と中間主義者とに對するレーニンとボルシエヴィキ達の鬭争における彼等の革命的非妥協性を、この上なく明白にしめすために、不十分

でもあるだろうか？ 概して、スルツキーは、一般にこれらの文書を知っているものであろうか？ もつと他にどんな文書が、彼には必要なのか？

すでに周知な文書の他に、例えば、中間主義を絶滅させることの必要を、もう一度論じているボルシエヴイキの決議といったような一束の別な文書が見出されると假定して見よう。だがこのことは、中間主義に對するボルシエヴイキの眞の革命性と眞の非妥協性を示すために、紙片の文書が存在するということが一つだけで十分である、ということの意味するであろうか？ 薬のつけようもない官僚主義者以外に、紙片の文書一つだけに頼り得るような者があろうか？ 黨とその指導者達は、何よりもまず、彼等の實際活動によつてこそ審査されなければならないのであつて、彼等の聲明によつてのみ點檢さるべきではない、ということを理解しないような者が書庫の鼠以外にあるであろうか？ 歴史上には、小うるさい批判家の批判から逃れうるためにはどんなに革命的な決議にでも、いつでも署名する用意をもつていふところの社會主義者が少なからず見られるのである。だが、このことはまだ、彼等がこれらの決議を實際に實行した、ということの意味してはいない。さらに、歴史上には、口角泡を飛ばして、この上もなく革命的な行動をなすように、他國の労働者黨に對して要求するところの社會主義者が少なからず見られるのである。だが、このことはまだ、彼等が、自分自身の黨、或は、自分自身の國において、自國の日和見主義者に、自國のブルジョア階級に、屈してしまわなかつた、ということの意味してはいない。だからこそ、レーニンは、革命黨、思潮、指導者たちを、彼等がなした聲明や決議によつてではなく、彼等の實際活動によつて點檢することを吾々に教えたのではなかつたか？

もしも、スルツキーが、實際に、中間主義に對するレーニンとボルシエヴイキ達の態度上におい

て、彼等の非妥協性を點檢せんと欲したのであるならば、彼は、個々の文書や二——三の私信ではなく、ボルシエヴィキ達の實際活動、彼等の歴史、彼等の行動によるボルシエヴィキの點檢ということ、自分の論文の基礎としなければならなかつたのだということとは、明かなことではないか？ はたして、吾々の間、即ちロシアの社會民主黨の中には、日和見主義者と中間主義者がいなかつたであろうか？ はたして、ボルシエヴィキは、これらすべての思潮に對して、決然かつ斷乎たる鬭争を實行しなかつたであろうか？ はたして、これらの思潮は、西歐の日和見主義者や中間主義者と思想的にも組織的にも連繫されてはいなかつたであろうか？ はたして、世界中で一つの左翼グループも、日和見主義者や中間主義者を擊破しえなかつたほどに、ボルシエヴィキは、彼等を擊破したのではなかつたか？ すべての事實がこのようである以上、レーニンとボルシエヴィキ達が、中間主義の危険を過少評價したなどということが、どうしていい得るであろうか？ なせスルツキーは、ボルシエヴィキの性格すけということにとつて、決定的な意義をもつているこれらの事實を輕視したのか？ なせ彼は、レーニンとボルシエヴィキ達を彼等の實際活動によつて、彼等の行動によつて、點檢するといふ、最も信頼のできる方法を用いなかつたのであるか？ なせ彼は、偶然に取り集めた紙片をほじくりまわすというような、あまり信頼できない方法を選んだのであるか？

なせならば、ボルシエヴィキの實際活動によつて彼等を點檢するといふもつと信頼のできる方法をとることは、スルツキーの立場全體を、一瞬にして全く覆えすこととなつたであろうからである。

なせならば、ボルシエヴィキを彼等の實際活動によつて點檢するといふことは、ボルシエヴィキが日和見主義者と中間主義者を、徹底的に擊破して、彼等を黨からおつぱり出してしまつたところの、世界で唯一の革命的組織であるということを表示することとなつたであろうからである。

なせならば、ボルシエヴイキの眞の實際活動と眞の歴史とに根據をおくようにする事は、スルツキーの先生達、即ちトロツキストらが、ロシアに中間主義の思想を植えつけ、この目的のために、中間主義の發源地として、八月プロツクの形態で特別の組織を創立しているところの主要な、基本的なグループであつたということを表示することとなつただろうからである。

なせならば、ボルシエヴイキを彼等の實際活動によつて點檢するということは、中間主義の危険を過少評價したといふことで、レーニンとボルシエヴイキ達を中傷することによつて、戦前の時期におけるトロツキズムの中間主義を覆いかくそうと企圖していると、わが黨の歴史の偽造家として、スルツキーを徹底的に暴露することとなつただろうからである。

編集人同志諸君、スルツキーと彼の論文とに關する問題は、實にこんなふうになつてゐるのである。

わが黨の歴史の偽造家と討論するようなことをして、編集局は誤謬を犯したのだということを、君達は了解したであらう。

何がこの正しからぬ道へ、編集局を押しやることのできたのであろうか？

一部のボルシエヴイキの間に現在ある程度傳播されている腐つた自由主義が、編集局をこの正しからぬ道へ押しやつたのだと私は考へる。あるボルシエヴイキ達は、トロツキズムは、共產主義の一派、即ち、尤も、誤謬もおかすし、少なからず馬鹿なこともやり、時には反ソヴエト的なことをさえやるが、それにしてもとに角、共產主義の一分派である、と考へている。トロツキストと、トロツキスト的考へをもつてゐる人々とに對する、ある種の自由主義は、實にここから生ずるのである。トロツキズムに對するかかる見解が、甚だしい誤謬であり、かつ有害なものであることを、證明する必要があるであらう。

うか？ 事實上、トロツキズムは、すでにとうの昔に共産主義の分派ではなくなっているのだ。事實上、トロツキズムは、共産主義に反対し、ソヴェト権力に反対し、ソ同盟における社會主義の建設に反対して闘争を行つているところの、反革命的ブルジョアジーの先遣部隊なのである。

わが國において社會主義を建設完成することの不可能についてのテーゼの形態で、ボルシェヴィキの變性の不可避なことその他についてのテーゼの形態で、ボルシェヴィズムに反対する精神的、イデオロギー的武器を、反革命的ブルジョアジーに與えたのはだれか？ トロツキズムが、この武器を、彼等にあたえたのであつた。ソ同盟における反ソヴェト的グループ全部が、ソヴェト権力との闘争の不可避なことを論證しようとするに當り、わが國において社會主義を建設完成することの不可能なことに、ソヴェト権力の變性の不可避なこと、資本主義への復歸の極めてあり得べきことについてのトロツキズムの周知なテーゼを據り所としたという事實を、偶然とみなしてはならないのである。

ソヴェト権力に對して、公然たる反対行動を試みるという形態で、ソ同盟における反革命的ブルジョアジーに戰術的武器を與えたのはだれか？ 一九二七年の十一月七日に、モスクワとレニングラードで、反ソヴェト的デモを行おうとしたトロツキストが、この武器を彼等に與えたのであつた。トロツキストの反ソヴェト的行動が、ブルジョアジーの意氣を高め、ブルジョア技術専門家共の妨害工作を活潑ならしめるにいたつた、ということとは事實である。

反ソヴェト的祕密組織を設立しようとする試みという形態で、反革命的ブルジョアジーに、組織上の武器を與えたのはだれか？ 自分自身の反ボルシェヴィキ的非法グループを組織したところのトロツキストが彼等にこの武器を與えたのであつた。トロツキストの反ソヴェト的祕密活動が、ソ同盟における反ソヴェト的グループの組織的形成を容易にした、ということとは事實である。

トロツキズムは、革命的ブルジョアジーの先進部隊である。

それだからこそ、すでに粉碎されたものであろうと、また假面をつけたものであろうと、トロツキズムに對する自由主義は、犯罪と境を接し、労働者階級に對する叛逆と境を接するところの愚鈍な行爲なのである。

それだからこそ、わが文獻の中へ、假装したトロツキスト的ガラクタを密輸入しようとするある「文筆家」と「歴史家」達の企圖に對しては、ボルシェヴィキの側から、斷乎たる反撃が與えられなければならないのである。

それだからこそ、トロツキスト的密輸入者共との文獻上での討論などをしてはならないのである。

トロツキスト的密輸入者共の同類のうちの「歴史家」と「文筆家」は、現在のところ、二つの線によつて、彼等の密輸入活動を行おうと努力している、と私には思われる。

第一に、彼等は、レーニンが戦前の時期に、中間主義の危険を過少評價したということを證明しようと努力しており、その際、試練をうけていない讀者をしてレーニンは、したがつて、その當時、まだ本當の革命家ではなかつたこと、レーニンは、戦争の後、即ち、トロツキーの援助によつて「自分を再武装した」後にのみ、本當の革命家になつたのだと推量させるようにしているのである。スルツキーを、この種の密輸入者の典型的な代表者としてみなすことができるであろう。

以上によつて、スルツキーとその仲間、これ以上長く彼等に關するに値いしないものだということ吾々は見たのであつた。

第二に、彼等は、レーニンが戦前の時期に、ブルジョア民主主義革命を、社会主義革命へ成長轉化させることの必要を理解していなかったということを證明しようと努力しており、その際、經驗に乏しい讀者をして、レーニンは、したがって、その當時まだ本當のボルシエヴィキではなかったこと、レーニンは、戦争の後、即ち、彼がトロツキーの援助によつて「自分を再武装した」後にのみ、かかる成長轉化の必要なことを理解したのだと、推量させるようにしているのである。「ソ同盟共産黨（ボルシエヴィキ）歴史教程」の著者、ヴオロセヴィツチを、この種の密輸入者の典型的な代表者としてみなすことができるであらう。

實際、レーニンは、すでに一九〇五年に、「民主主義革命から、吾々は直ちに、そして、丁度吾々の力量に相應じて、即ち、階級意識をもち、かつ組織されたプロレタリアートの力量に相應じて、社会主義革命へ移行し始めよう」、また「吾々は連續革命の主張者である」とし、「吾々は半途に立ち止まらないであらう」と書いたのであつた。實際、これと同じ様な性格を有する事實と文書とを、レーニンの著作の中で非常に多く見出すことができたであらう。だが、レーニンの生涯と活動からの諸事實にヴオロセヴィツチ輩は何の關係があるか？　ヴオロセヴィツチ輩は、ボルシエヴィキ的色彩で表面を塗りかくして、自分達の反レーニンの密輸入物をひきすり込み、ボルシエヴィキを誹謗し、ボルシエヴィキ黨の歴史を偽造しようとしたために書いているのである。

ヴオロセヴィツチ輩は、スルツキー輩と似たり寄つたりだということを、君達は了解している。

このようなのが、トロツキスト的密輸入者の「行路と岐路」なのである。

この種の「歴史家達」に討論のための演壇を提供することによつて、彼等の密輸入者の活動を容易ならしめるといふようなことは、「プロレタルスカヤ・レヴオリユーチャ」誌の編集局のやるべきことではないといふことを、君達自身理解している。

編集局の任務は、ボルシエヴイズムの歴史についての問題を、當然をうあるべき程度の高さにまで引き上げ、わが黨の歴史の研究を、科學的、ボルシエヴイキ的軌道に引き入れ、トロツキスト的、また他種のわが黨歴史のあらゆる偽造家共の假面を系統的にひつつ、彼等に對して注意を集めることにある、と私は考えるのである。

このことは、あるわが歴史家達——私は括弧なしの歴史家達、わが黨のボルシエヴイキ的歴史家達についていつていっているのである——でさえ、スルツキー輩やヴオロセヴィツチ輩の水車に水を引き入れて援けるような誤謬を犯してはいないとはいえないから、なおさら必要なのである。この點では、遺憾ながら、同志ヤロスラフスキも、例外とすることはできないのである。ソ同盟共産黨（ボルシエヴィキ）の歴史についての彼の諸冊子は、長所をもつていられるにもかかわらず、原則的また歴史的な性格をもつ幾多の誤謬を包含しているのである。

共産主義的挨拶を以て——イ・スタ、リ、ン

「プロレタルスカヤ・レヴオリユーチャ」誌

一九三一年、第六號（通號一一三號）

第一次五カ年計畫實現の總結果

ソ同盟共産黨（ボルシエヴィキ）中央委員會と中央統制委員會
との合同總會での報告演説

——一九三三年一月七日——

一、五カ年計畫の國際的意義

同志諸君！ 五カ年計畫が世上に現われた際、人々は、この五カ年計畫が、巨大な國際的意義を持ち得るであろうと、はたして豫想したであろうか。反對に、多くの人々は、五カ年計畫は、ソヴェト同盟一國だけのことであり、問題は重要でもあり、また重大なことでもあるが、それにしても、ソヴェト同盟一國だけのことであり、國內的なことであると考へたのであつた。

しかしながら、歴史は、五カ年計畫の國際的意義が、量りがたいほど大きいものであることを示した。歴史は、五カ年計畫がソヴェト同盟一國だけのことでなく、全國際プロレタリアートのことである、ということを示した。

五カ年計畫の出現のすつと前、吾々が武力干涉者との鬭争を終え、經濟的建設の軌道に移行した時期に、早くもこの時期に、レーニンは、わが國の經濟的建設は、深甚な國際的意義をもつていて、經濟的建設の途上においてソヴェト權力の前進する一步一步は、資本主義諸國の極めて種々様な階級層の間における、深刻な反響を受け、かつ人々を二つの陣營、即ち、プロレタリア革命の味方の陣營と、この革命の敵の陣營とに振り分けてゐることを語つた。

その當時、レーニンは次のように述べた——

「現在、吾々は、國際革命における主要な吾々の影響を、吾々の經濟政策によつて與えてゐる。すべての人達が、どんな例外もなしに、何等の誇張もなしに、世界各國の勤勞大衆全部が、ソヴェト・ロシア共和國を注視してゐる。これはすでに達せられたところである。……この活動舞台において、鬭争は全世界的な規模に移されてゐる。吾々がこの任務を解決するならば、その時には吾々は、國際的規模において、確實に、しかも終極的に勝つたこととなるであらう。それゆえに、經濟的建設の問題は、吾々にとつては全く異常に大きな意義を獲得してゐるのである。この戰線において吾々は、徐々に、漸次に——急速にやつてはならない——だが着々と向上線をたどり、かつ前進して、勝利を獲得しなければならぬ」。 (レーニン全集、第二六卷、四一〇——四一一頁)

これは、吾々が武力干涉者に對する戰爭を終つた時、資本主義との軍事的鬭争から經濟的戰線における鬭争に、即ち經濟的建設の時期に、吾々が移行したその時期に、述べられたのであつた。

その時以來、長い年月が経過した。そして、經濟的建設の領域におけるソヴェト權力の一步一步、各年、各四半期は、同志レーニンのこれらの言葉の正しさを、見事に確證したのであつた。

しかして、レーニンの言葉の正しさに對する最も見事な確證は、わが建設の五カ年計畫、この計畫の生起、その發展、その實現ということによつて與えられた。事實上、わが國の經濟的建設途上におけるとの一步といえども、ヨーロッパ、アメリカ、アジアの資本主義諸國のきわめて種々様々な階級層の間において、五カ年計畫についての、その發展についての、その實現についての問題ほどの影響を受けはしなかつたと思われるのである。

最初の頃、五カ年計畫は、ブルジョアジーとその出版物から嘲笑をもつて迎えられた。「空想」、「タツ言」、「幻想」、こんなふうには彼等は、その當時わが五カ年計畫を命名したのであつた。

その後、五カ年計畫の實現が、現實的な結果をもたらしているということが明かになりはじめた時に、彼等は、五カ年計畫が、資本主義諸國の生存を脅かしており、また五カ年計畫の實現は、ヨーロッパの市場を商品で充満させ、ダンピングの強化と失業の深刻化とに導くと斷言して、警鐘を亂打し始めたのであつた。

それからまた、ソヴェト權力反對に利用されたこの詭計も、期待したような結果を與えなかつた時、あらゆる種類の會社、出版機關、各種の團體等々の各種各様の代表者達は、ソ同盟では、一體全體とんが行われているかを、自分自身の眼で、はつきりと見極める目的をもつて、ソ同盟漫遊を次から次へと續いて行いだした。五カ年計畫出現の極く最初から、ソヴェト權力の企畫と成功とに對して自分達の讚美を表示し、かつソ同盟の労働者階級を支持しようとする自分達の覺悟を表明したところの労働者代表團については、私はここでは述べない。

この時分から、いわゆる世論、ブルジョア出版物、あらゆる種類のブルジョア團體、等々の分裂が始まり出したのであつた。ある者共は、五カ年計畫は完全に失敗し、ボルシエヴィキは滅亡に瀕して

いると斷言した。他の者は、反對に、ボルシェヴィキは厭うべき人間共ではあるが、彼等の五カ年計畫に關しては、とにかく事業は進行しており、そして彼等は、おそらく自分達の目的を達成するであろうと信じたのであつた。

私が、ここで、各種のブルジョア出版機關の評言を引用しても無駄なことではないだろう。

まず一例として、アメリカの新聞「ニューヨーク・タイムス」をとろう。一九三二年十一月末に、この新聞は、次のように書いた――

「釣合の感覺に挑戦することを目的となし、モスクワがしばしば誇らしげに自慢しているような、費用におかまいなく、目的に向つて突進している産業五カ年計畫は、眞實のところ計畫などというものでない。それは山師の事業である」。

即ち、五カ年計畫は、計畫でさえもなく單なる山師の事業であるということになるのである。

ところで、一九三二年十一月末發行の、イギリスのブルジョア新聞「デイリー・テレグラフ」の評言は次の如くである――

「『計畫經濟』の實際的な試金石としてみれば、この計畫は完全に失敗している」。

一九三二年十一月における「ニューヨーク・タイムス」の評言は、次の如くである――

「集團化運動は、みつともなく失敗した。それは、ロシアを飢餓に瀕せしめてゐる」。

一九三二年夏發行のポーランドのブルジョア新聞「ガゼタ・ポルスカ」の評言は、次の如くである――「情勢は、ソヴェト政府が、その農村集團化の政策において、行きすまつてしまつたことを示しているようである」。

一九三二年十一月発行のイギリスのブルジョア新聞「フアインシアル・タイムス」の評言は次の如くである——

「スターリンと彼の黨は、彼等の政策の結果として、五カ年計畫制度の瓦解と、當然達成されなければならなかつた諸目標の挫折とに直面している」。

イタリアの雑誌「ポリチカ」の評言は次のようである——

「一億六千萬人からなる國民の四年間に亘る活動、ボルシエヴィキ支配として表示されるかかる勢力の支配が、四年間に亘つて行つた超人間的な、經濟的・政治的努力が、何一つ創り上げなかつたなどと考えることは、愚かなことであつたであらう。事實は反對に彼等は、多くのものを創り上げたのであつた。だが、それにもかかわらず、破局は目の前にあり、破局は、萬人にとつて明かな事實である。このことは、味方も敵も、ボルシエヴィキもボルシエヴィキ反對者も、右翼反對派も、左翼反對派も、確認しているところである」。

最後に、アメリカのブルジョア雑誌「カレント・ヒストリー」の評言は次のようである——
「ロシアにおける事態の現状についての考察は、かくして、五カ年プログラムは、その發表された統計上の目標の點でも、またもつと基本的には、その基礎をなしている社會的・原則の點においても、失敗に歸したという結論に導いている」。

このようなのが、ブルジョア出版物の一部における評言である。

これらの評言の筆者共を批評する價值がはたしてあるだろうか？ そんなことをするにはあたらなないと私は思う。これらの「頑冥固陋」な人達は、發掘された中世紀の特種な人間に屬するものであり、彼等にとつては、事實ということは何の意義ももたず、かつ彼等は、わが國において五カ年計畫

がどのように實現されようとも、自分の意見に固執するような人々なのだから、批判などするにはあたらぬのである。

おなじブルジョア陣營に屬する、他の出版機關の評言に移ろう。

一九三二年一月發行のフランスの周知なブルジョア新聞「タン」の評言はつぎのようである——

「ソ同盟は、外國資本の援助なしに、自國を工業化して、第一回の勝負に勝つた」。

一九三二年の夏に發行された同じ「タン」紙の評言は次のようである——

「共產主義は巨大なテンポで再建設を完成している。ところが一方、資本主義制度の方では、緩慢な歩調での動きのみが許されている。……土地の所有が、個々の所有者の間に、際限なしに分割されているフランスにおいては、農業を機械化することは不可能である。ところが、ソヴェトでは、農業を工業化して、この問題を解決することをよくなじえたのであつた。……吾々の競争においては、ボルシェヴィキは、勝利を得たのだ」。

イギリスのブルジョア雑誌「ラウンド・テーブル」の評言は、次のようである——

「五年計畫の下に達成された發展は、驚くべきものである。ハリコフとスターリングラードのトラクター工場、モスクワのアモ自動車工場、ニジニイ・ノヴゴロドの自動車工場、ドネーブル水力發電所、マグニトゴルスクとクズネツクの巨大な鑄鋼工場、ロシアにおけるルールと化しつあるところの、ウラルにおける機械製作工場と化學工場の一大網、全國にわたる、すべてのこれらの、またその他の工業上の成果は、たとえ幾多の困難があつたとしても、ソヴェトの工業が、よく灌水された植物のように、色も鮮かに、丈ものび、丈夫に成長しつづけているという

ことを證言している。……五カ年計畫は、將來の發展のための基礎を据えた……そして、ソ同盟の威力を異常に強めた」。

イギリスのブルジョア新聞「フアインシヤル・タイムス」の評言は次のようである——

「機械製作工業において達成された成功については、何等疑う餘地はないし、これらの成功に對する出版物上、また演説上の稱揚は、決して論據のないことではない。勿論、ロシアが、從來極めて簡單な種類の機械と器具のみを生産していた……ということは、記憶していなければならぬ。……事實、現在においても、機械と器具の輸入の絶對數量は、事實上増大しているが、自國製機械に對する輸入機械の割合は、確實に着々と減少している。……ソ同盟は、今日、自國の冶金工業と電氣産業に、せひ必要なすべての機械を生産している。また自身の自動車製造工業を創設することに成功した。また、小さな精密器具から最も重い壓搾機械にいたるまでの、全種類にわたる自身の機械器具製作工業を築き上げた。そして、農業機械についていえば、ソ同盟は、すでに外國からの輸入をまったく必要としないのである。……また、ソヴェト政府は、鐵と石炭産出の遅延が、五カ年計畫の四カ年遂行に障害とならぬように然るべき手段を採用している……新たに建設されている巨大な諸工場が、重工業の産出を著しく増大させることを保障している、ということとは疑う餘地のないことである」。

一九三二年の初めに發表されたオーストリアのブルジョア新聞「ノイエ・フライエ・ブレッツセル」の評言は次のようである——

「ボルシエヴィズムを呪詛してもよいが、ボルシエヴィズムを知ることが必要である。五カ年計畫、これは、注意を拂わなければならず、かついすれにもせよ、經濟的方面で勘定に入れる必要のある新しい巨物である」。

一九三二年十月に發表されたイギリスの資本家、「ユーナイテッド・ドミニオン・トラスト」の總裁ギブソン・チャーヴィの評言は次のようである——

「さて私は、私が共產主義者でもなければボルシェヴィキでもなく、私は、まぎれもない一資本家であり、かつ個人主義者であるということを、はつきりと了解しておいてほしいのである。……ロシアは、常に先頭を切つて進んでいる。しかるにわが國の工場が、非常に多く操業を停止しており、かつ、概略三百萬のわが國民が、血眼になつて仕事を探している。……この計畫に對していろいろ嘲笑が浴びせられ、その失敗が豫言された。だが、諸君は、五カ年計畫の下において、かつて實際に企圖されたことよりも遙に多くのことが完遂されたと疑いもなく考えることができるであろう。……私が訪れたすべての工業都市においては、一定の計畫によつて建設されたところの、緑樹やつじ公園で美装された廣い道路のある町、最も近代的家屋、學校、病院、労働者クラブ、働いている母親の子供達を世話するために必要缺くべからざる託兒所と保育所のある、新しい町々が出来ている。……ロシア人を、或は彼等の計畫を過少評價し給うな。そして、ソヴェト政府は當然崩壊しなければならぬなどということ信じるといふような誤謬を犯さぬようにし給え。……今日のロシアは、潑刺たる精神と理想とを有する國である。……ロシアは、驚くべき積極性を有する國である。……私は、ロシアの志向は、健全なものであると信ずる。そして、おそらく、何よりも最も重要なことは、ロシアのすべての青年、すべての労働者が、非常に悲しむべきことながら資本主義諸國においては現在存在してないところの一つのこと、即ち希望をもつてゐることである」。

ある

一九三二年十一月アメリカのブルジョア雑誌「ネーション」が発表した評言はつぎのようである――

「五カ年計畫の四カ年間は、眞にめざましい發展を立證した。……ソ同盟は、新しい生活の原則を建設完成するという創造的任務に、戰時的な激烈さで従事している。この國の相貌は、文字通り、同じものとは思われないほどに變化している。このことは、新たにアスハルトが敷かれた幾百の街路、つじ公園、新しい建物、新しい近郊をもち、その町外れにたち並ぶ新工場を有するモスクワについて、全く本當であり、また、このことは、もつと小さく、またそう重要でない都市についても本當である。新しい町々が、草原地帯にも、荒野荒地にも建設されており、しかも、それらは、單に數都市というのではなくて、五萬乃至二十五萬の人口を擁する都市が、少なくとも五十はあつて、これらはすべて最近の四カ年間に建設されたものであり、各々、何かの天然資源の開發のための新しい一つの企業、または數箇の企業を中心地として建設されたのである。幾百という新しい地方的發電所と、ドネープロストロイと同じ様な多くの巨大經營とが、「社會主義とは、ソヴェト權力に電化を加えたものである」というレーニンの定義すけを徐々に實現している。……ソヴェト同盟は、現在、ロシアがこれまで決して生産したことのない無限に異なる種々様々な品目、即ち、トラクター、コンバイン、良質鋼、人造ゴム、球入軸承、強力ディーゼル發動機、五萬キロワットのタービン、電話交換裝置、鑛山用電氣機械、飛行機、自動車、自轉車、その他數百の異なる型の新機械の大規模な製作に従事している。……はじめて、ロシアは、アルミニウム、マグネシウム、磷灰石、沃素、ポッターシユ、その他多くの貴重な礦物を掘り出している……ソヴェトの渺茫たる廣地における、道標は、もはや、教會堂の十字架や圓屋根ではな

いて、穀物貯藏塔と秣倉庫とである。ユルホーズでは、家屋や、家畜小屋や豚小屋が建設されている。電氣は農村にまでもよく行きわたつており、ラジオと新聞も十分に農村に普及されている。労働者達は、最新式の機械を操縦することを學んでおり、青年農民達は、これまでアメリカにあつたよりも、もつと大型の、もつと複雑な農業機械を作り、かつ使用している。……ロシアは「機械に基いて考える」ようになりはじめている。ロシアは、木製器使用の世紀から、鐵の、鋼鐵の、コンクリートの、モーターの世紀へ、急速に移行しつつある」。

一九三二年九月、イギリスにおける「左翼」改良主義雜誌「フォワード」が發表した評言は次のようである——

「ソ同盟において現在進行している巨大な建設活動が特に目につく。新しい工場、新しい學校、新しい映畫館、新しいクラブ、新しい巨大な家屋、どこにもかしこにも新しい建築物があり、それらのうちの多くはすでにでき上つているし、まだできあがらないものには、足場がかかつている。……イギリスの讀者に、どんなことが成し遂げられ、そしてどんなことが、今も行われているかを、正確に語り伝えることは困難である。これを信じ得るためには、見なければならぬ。吾々自身の戦時に行つた努力も、ソ同盟でなされることに比較すれば、虱に食われたほどのものにすぎない。アメリカの西海岸諸州において、最も急がしく仕事が行われている日々でさえも、今日ソ同盟で行われている熱狂的な創造的活動に似たものは、何一つないということを、アメリカ人は認めている。もう十年たつうちにソ同盟は、どんなふうになるだろうと想像しようと試みることを、人々は諦めてしまわねばならないほどの甚だしい變化が、最近の二年間にソ同盟において生じていることを人々は見ている。……それゆゑに、ソ同盟について、かくも執拗に、かくも

ばからしく嘘をついているイギリスの新聞の空想的な怪談を、諸君の頭から追いのけてしまひ給え。そして、何がそこで行われているかについてのほんのちよつびりの理解もなしに、中間階級的な眼鏡を通じて尊大振つてソ同盟を見ている素人學者的なインテリによつて流布された生半可な眞理と誤解とを諸君の頭から追いのけてしまひ給え。……ソ同盟は、健全な方針にもとずいて、新しい社會を築き上げている。この目的を實現するためには、危険を冒し、かつて世界中で決して見なかつたような精力をもつて、熱狂的に働き、その他の世界から孤立した廣大無邊な國に社會主義を建設しようとするこの試みと切離す事のできぬ極めて巨大な諸困難と闘わなければならぬ。だが、二年を経て再びこの國に旅行して、私は、この國が堅實な進歩の道を歩み、計畫し、創造し、建設しており、然もそれらがすべて敵對せる資本主義世界に對するめざましい挑戦と見るべき規模で行われているという印象をうけたのであつた」。

このようなのが、ブルジョアの陣營内における意見の不一致と、分裂とであり、その中のある者共は、恰も五カ年計畫が失敗したもののようについて、ソ同盟の壊滅を主張し、また他の者共は、五カ年計畫の成功によつて幾らかの利益にあずかりうるかもしれないということをおそらく期待して、ソ同盟との通商上の協力を、明かに主張しているのである。

五カ年計畫の問題に對する、ソ同盟における社會主義建設の成功問題に對する、資本主義諸國の勞働者階級の態度についての問題は、また特殊なものである。この點では、毎年々々ソ同盟にやってくる多數の勞働者代表團のうちの一つ、例えば、ベルギーの勞働者代表團の評言を引用するだけに局限してもよいであらう。この評言は、英國の、或はフランスの代表團について、ドイツの、或はア

メリカの代表團、或は他の國々の代表團についていうにしても、いずれにせよ、一つの例外もなしに、すべての労働者代表團にとって典型的なものであった。それは、次の如くである——

「吾々は旅行中、實際に見聞した巨大な建設に、全く恍惚とさせられた。モスクワにおいてまた同様に、マケエフカヤ、ゴルロフカ、ハリコフやレニングラードにおいても、吾々は、そこで、いかなる熱心さで仕事がなされているかということを確認することができた。機械はすべて、最新式の構造のものであった。工場内は清潔で、空氣の流通はよく、光線も十分であった。ソ同盟においては、労働者に對する醫療衛生上の援助がどんなふうに行われているかを、吾々は見えた。労働者の住宅は、工場の近くに建設されている。労働者住宅街には、學校と託兒所が設置されており、子供達は、極めて行きとどいた世話を受けている。吾々は、舊い工場と新しく建設された工場との間の、また舊い住宅と新しい住宅との間の差異を見ることができた。吾々が見たものはすべて共產黨の指導の下に、新しい社會を建設している勤勞大衆の、巨大な力ということについての、明白な觀念を吾々に與えた。他の國々では、すべての領域において衰頹が支配しており、失業が充満しているのに、ソ同盟においては、大なる文化的高揚のあるのを、吾々は實際に見聞したのであった。吾々は、ソヴェトの勤勞大衆が、その途上において、いかに甚だしい困難に遭遇しているかを目撃することができた。これによつて吾々は、彼等が、自分達の勝利を吾々に示すに當つてもつてゐる誇を、十分よく理解することができるのである。吾々は彼等が一切の障害を克服するであろう、という事を確信するものである」。

さて諸君、これが五カ年計畫の國際的意義なのである。吾々が僅に二——三年間、建設活動を遂行して、五カ年計畫の最初の成功を示すやいなや、全世界は直に二つの陣營に、即ち倦む事もなく、吾

吾に吼えつすけている人々の陣營と、五カ年計畫の成功によつて、喫驚させられている人々の陣營とに分裂されたのである。勿論、全世界に、吾々自身の陣營、即ち、ソ同盟の労働者階級の成功に驚喜し、全世界ブルジョアジーの心膽を寒からしめることにおいて、ソ同盟に支持を示す決意を有してゐるところの、資本主義諸國の労働者階級の陣營があり、かつそれが強化されつつある、ということはいうまでもないことである。

これは何を意味するか？

これは、五カ年計畫の國際的意義、五カ年計畫の成功とその獲得との國際的意義は、疑う餘地がないということの意味している。

これは、資本主義諸國が、内部にプロレタリア革命を孕んでおり、資本主義諸國がプロレタリア革命を孕んでいるからこそ、ブルジョアジーは、革命に反對する新しい論據を、五カ年計畫の失敗ということに見出さんことを欲したのであり、一方プロレタリアートは、反對に、革命のための、全世界のブルジョアジーに反對するための新しい論據を、五カ年計畫の成功ということに見出さんと努力し、また實際、見出してゐるということの意味している。

五カ年計畫の成功は、資本主義に反對して、萬國の労働者階級の革命的勢力を動員している。このようなのが、議論の餘地のない事實なのである。

五カ年計畫の國際的革命的意義が眞に測り難いほど大きなものであるということは、疑うことのできぬところである。

それゆえに、吾々は、五カ年計畫についての、五カ年計畫の内容についての、五カ年計畫の基本的諸任務についての問題に對して、さらに大いなる注意を拂わなければならないのである。

それ故に、吾々は、五カ年計畫の總結果を、五カ年計畫の實行とその實現の總結果を、一層大いなる慎重さをもつて詳細に分析しなければならぬのである。

二、五カ年計畫の基本的任務とその實現の道

五カ年計畫の本體問題に移ろう。

五カ年計畫とは何か？

五カ年計畫の基本的任務は、何であつたか？

五カ年計畫の基本的任務は、わが國を、後れた、往々中世紀的な技術をもつ國から、新しい、現代的技術の軌道に移すということにあつた。

五カ年計畫の基本的任務は、ソ同盟を、農業國、しかも微力な國、資本主義諸國の氣まぐれによつて左右される國から、工業國、しかも強力な國、完全に自主的な、しかも世界資本主義の氣まぐれによつて少しも煩わされぬ國に、轉化することにあつた。

五カ年計畫の基本的任務は、ソ同盟を工業國に轉化して、資本主義的要素を徹底的に驅逐し、社會主義的經濟形態の戰線を擴大し、ソ同盟における階級を根絶するための、社會主義社會の建設を完成するための、經濟的土台を築き上げることにあつた。

五カ年計畫の基本的任務は、全體としての工業だけでなく、運輸交通も、農業も、社會主義の土台の上に再整備し、かつ再組織する能力をもつ工業を、わが國に築き上げることにあつた。

五カ年計畫の基本的任務は、小規模な、かつ分散した農業を、大規模な集團經營の軌道に移し、それによつて、農村における社會主義の經濟的土台を保障し、かくしてソ同盟における資本主義復舊の可能性を絶滅することにあつた。

最後に、五カ年計畫の任務は、國外からの軍事的干涉のありとあらゆる企圖に對し、國外からの軍事的攻撃のありとあらゆる企圖に對して、決定的な反撃を組織する可能性を與える防衛力を、最大限に高めるために必要な、一切の技術的經濟的前提條件を、國內に築き上げることにあつた。

五カ年計畫のこの基本的任務は、何によつて指圖され、それは何に基礎をおいているか？

それは、ソヴェト同盟を惨めな存在に運命ずけているところのソヴェト同盟の技術的・經濟的おくれを絶滅することの必要によつて、先進的資本主義諸國に技術的・經濟的に追いつくのみではなく、時日の経過と共に、それを追い越すもする可能性を、國に與えるであろうような前提條件を國に築き上げることの必要によつてである。

ソヴェト權力は、おくれた工業を基礎としては、長期にわたつて維持できないし、資本主義諸國の工業に後れをとらないのみならず、時日の経過と共に、それを凌駕し得る現代的な大規模工業のみが、ソヴェト權力にとつての眞の、かつ信頼できる礎石として役に立つことができる、という考慮によつてである。

ソヴェト權力は、二つの對立的な基礎の上に、即ち資本主義的要素を根絶しているところの大規模な社會主義的工業と、資本主義的要素を絶えず發生させているところの小規模な個人農民經營とに、長期にわたつて基礎をおくことはできない、という考慮によつてである。

農業が、大規模な生産の基礎の上におかれなかり、小規模な農民經營が大規模な集團經營に合同されなかり、ソ同盟における資本主義復舊の危険は、おこり待べき一切の危険の内でも最も現實的な危険である、という考慮によつてである。

レーニンは次のように述べている——

「革命は、ロシアが、數カ月にして、その政治的制度的點で先進諸國に追いつくということ
をなし遂げた。

だがこれでは不十分である。戦争は假借なきものであり、戦争は容赦なき峻烈さで問題を立てる。即ち、滅亡するか、それとも經濟的にも先進諸國に追いつき、かつこれらの國を追い越すか。……滅亡するか、或はフル・スピードで前方に突進するか。歴史はこのように問題を立てている」。 (レーニン全集、第二一卷、一九一頁)

レーニンは次のように述べている——

「吾々が小農の國に生活している間は、ロシアにおける資本主義にとつては、共產主義にとつてよりも、もつと鞏固な經濟的土台があるのである。このことをよく記憶しておくことが必要である。都市の生活と比較して、農村の生活を注意深く觀察しているものはだれでも、吾々が資本主義の根を引っこ抜いてしまつてはいないし、また、國內の敵の土台を、基礎を掘り崩してしまつてはいないことを知つてゐる。國內の敵は、小規模經營に依據してゐる。そして、これを掘り崩すためには、一つの方法がある。即ち、農業をも含めて國の經濟を、新しい技術の基礎の上に、現代的大規模生産の技術の基礎の上に移すことである。……國が電化されるようになったときのみ、工業、農業、運輸交通が、現代的大規模工業の技術的基礎の上に据えられるようになる。

つたときのみ、即ち、ただその時にのみ、吾々は終極的に勝利することができるのである。」
(レーニン全集、第二六卷、四六——四七頁)

これらの命題は、五カ年計畫の作成に導き、五カ年計畫の基本的任務を決定させるにいたつたところの、黨の考慮の基礎ともなつていた。

五カ年計畫の基本的任務についての事情は、こんなふうになつてゐる。

だがこのような龐大な計畫の實現は、手當り次第に、でたらめに始めることはできない。このよ
うな計畫を實現するためには、何よりもまず、計畫の鎖の基本的環を見出すことが必要である。なせ
ならば、基本的な環を見つけて、それをつかみ得てのみ、計畫のその他のすべての環を引き出すこと
ができるからである。

五カ年計畫の鎖の基本的な環とは何であつたか？

五カ年計畫の鎖の基本的な環とは、機械製作工業を心髓とする重工業であつた。なせならば、重
工業のみが、全體としての工業も、運輸交通も、農業をも再建し、かつ獨り立ちのできるものたらし
める事ができるからである。五カ年計畫の實現は、重工業から始められなければならない。した
がつて、重工業の復興を、五カ年計畫實現の基礎におくことが必要であつた。

吾々はこの題目についても、レーニンの教示をもつてゐる——

「ロシアを救うということは、農民經營で良い收穫が得られるということだけではない——
これだけではまだ不十分だ——また、農民に日用品を提供している輕工業の状態が良好だとい
うことだけでもない——これだけでもまだ不十分である——吾々には重工業もまた必要なのであ
る。…重工業を救ふことなしには、それを復興させることなしには吾々は一つの工業といえども、

建設を完成し得ないであろうし、また、工業なしには、概して吾々は獨立國としては滅亡してしまふであらう。……重工業は國家からの補助金を必要とする。吾々がこの補助金を見出さないと、吾々は文明國家としては——社會主義國家としては——滅亡してしまふであらう。』（レーニン全集、第二七卷、三四九頁）

しかしながら、重工業の復興と發達とは、五カ年計畫の初期におけるわが國がそうであつたような、おくれた、かつ富裕でない國においては特に、最も困難なことである。なせならば重工業は、周知の通り、巨大な財政上の出費と、一定の最小限度の經驗ある技術上の人材が存在することを必要とするからである。しかしして一般的にいって、これを缺くときには、重工業の復興は不可能なことである。黨はこのことを知っていたか？ またこのことを明瞭に理解していたか？ 然り、知っていた。しかしして、ただ、知っていたのみでなく、このことを、誰にも聞えるように聲明した。黨は、イギリス、ドイツ、アメリカにおける重工業がどんな手段によつて建設完成されたかを知っていた。黨は、これらの國においては、重工業は多額の借款によるか、それとも他の國々を掠奪するかの手段によつて、或はまた、同時に兩方の手段を用うるかによつて建設完成された、ということを知っていた。黨は、わが國にとつては、これらの手段は、閉ざされているということを知っていた。では、黨は何を當にしていたか？ 黨はわが國自身の力を當にしていた。黨は、ソヴェト權力をもち、土地、工業、運輸交通、銀行、商業の國有化に立脚して、吾々が、重工業の復興と發展とによつて必要な、十分な資材を蓄積するために、極めて厳格な緊縮政策を實行することができらるであらう、ということを期待していた。黨は、この事業のためには非常に重大な犠牲を必要とするということ、また、目的を達成せんと欲するならば、吾々は、公然と自覺して、これらの犠牲をささげなければならない、ということ

とを、忌憚なく述べたのであった。黨は、この事業を、外國からの、奴役的なクレジットや借款を受
けずに、わが國内部の力によつて起そうと期待したのであった。

レーニンは、この點に關して次のように述べている——

「吾々は、労働者が農民に對する自己の指導を、自己に對する農民の信頼を保持し、かつ極
度の節約によつて、その社會的な諸關係から、どんなものであろうとも、奢侈のあらゆる痕跡を
驅逐してしまふであらうとこの國家を、建設完成するように努力しなければならぬ。

吾々は、わが國家機關を、最大限度に節約するところまで導いて行かなければならぬ。吾
吾は、國家機關から奢侈の痕跡全部を驅逐しなければならない。それらは、國家機關に、ツァー・
ロシアから、その官僚主義的・資本主義的機關から、非常に多く殘されているところのもので
ある。

これは、農民的狹隘性が風靡するところとならぬだろうか？

否、そんなことはない。もし、吾々が、労働者階級の手に、農民に對する指導を保持するな
らば、吾々は、わが國家の經濟を極度に節約することによつて、わが大規模な機械工業を發達さ
せるために、電化、水壓利用泥炭採取を發展させるために、ヴォルホフ水力發電所の工事の完
成、等々のために、あらゆる、極めて少額な貯蓄を保持することをなし得る可能性を得るであ
らう。

この點に、そしてただこの點にのみ、吾々の希望はあるであらう。その時においてのみ、譬
喻的にいえば、吾々は、一匹の馬から他の馬に、即ち、農民、百姓、貧窮という馬から、零落せる
農民國を當てにした節約という馬から、プロレタリアートが自己のために探しているし、また探

さなわけにはゆかないところの馬に、大規模な機械工業、電化、ヴォルホフ水力發電所建設、等々という馬に乗り換えることをなじうるであろう。〔レーニン全集、第二七卷、四一七頁〕
貧窮な百姓という馬から大規模な機械工業という馬に乗り換えること、これこそ、五カ年計畫を作成し、その實現を達成しようとする努力して、黨が追いもとめていくところの目的なのである。

最も厳格な緊縮政策を確立し、わが國の工業化に資金を供給するために必要な資金を蓄積すること、これこそ、重工業の創設と、五カ年計畫の實現とを達成するために進まなければならなかつたところの道なのである。

大膽な任務か？ 困難な道か？ しかしてわが黨は、だからこそレーニンの黨と稱されるのであり、わが黨は、困難を恐れる權利をもつていないのである。

それだけではない。五カ年計畫の實現の可能なことについての黨の確信と、労働者階級の力に對する信頼とは、黨が、この困難な事業を、五カ年計畫が要求しているように五カ年間にではなくて四カ年間に、嚴密にいつて、特別四半期を加えるときには、四カ年と三カ月で實現する任務を立てる可能性を得た程に強かつたのである。

この基礎の上に、「五カ年計畫を四カ年に」という有名なスローガンも生れたのである。
ところでどうなつたか？

事實は、その後、黨が正しかつたということを示したのである。

事實は、この大膽さと労働者階級の力に對する信頼なしには、黨は、吾々が現在正當に誇つてゐる勝利を、獲得し得なかつたであろう、ということを示したのである。

三、工業の領域における五カ年計畫を 四カ年に遂行した總結果

さて、五カ年計畫實現の總結果についての問題に移ろう。

工業の領域において、五カ年計畫を四カ年間に遂行した總結果は、いかなるものであるか？

吾々は、この領域において勝利を獲得できたか？

然り、獲得できた。しかし、ただ獲得できたのみならず、吾々自身が期待したものよりも、わが黨のうちで最も激しい熱血家達が期待できたよりも、多くのことをなす遂げたのであつた。このことは、現在では、敵でさえも否定しはしない。まして、吾々の友人達は、このことを否定することはできないのである。

わが國には、黑色冶金工業、即ち國の工業の基礎がなかつた。現在、わが國はそれをもっている。

わが國には、トラクター工業がなかつた。現在、わが國はそれをもっている。

わが國には、自動車工業がなかつた。現在、わが國はそれをもっている。

わが國には、工作機械製作工業がなかつた。現在、わが國はそれをもっている。

わが國には、本格的な、現代的化學工業がなかつた。現在、わが國はそれをもっている。

わが國には、現代的農業機械を生産する、眞の本格的な工業がなかつた。現在、わが國はそれをもっている。

わが國には、航空機製作工業がなかつた。現在、わが國はそれをもつてゐる。

電力生産の點においては、わが國は最下位を占めていた。だが現在では、わが國は最高位の一つを占めるまでになつた。

石油生産物と石炭との生産の點においては、わが國は下位を占めていた。だが現在では、わが國は最高位の一つを占めるまでになつた。

わが國は、吾々がやつとのことで物に仕上げたところのただ一つだけの石炭・冶金産業の基地をウクライナにもつていた。吾々は、この基地を發達させえたのみでなく、わが國の誇りとなつてゐるところの、新しい石炭・冶金産業の基地を、今一つ東部に築き上げることができたのであつた。

わが國は、ただ一つだけの纖維工業の基地をわが國の北部にもつていた。吾々は、近いうちに、二つの新しい纖維工業の基地を、中央アジアと西部シベリアにもつてあつた。わが國は、近いうちに、二つの新しい纖維工業の基地を、中央アジアと西部シベリアにもつてあつた。

そしてわが國は、單にこれらの新しい巨大な工業部門を築き上げ得たのみならず、これらの前にはヨーロッパにおける工業の規模と大きさといえども、顔色を失うであらうような規模と大きさで、わが國はこれらの工業部門を築き上げたのであつた。

しかしてすべてこれらのことは、資本主義的要素が終極的に、かつ決して恢復できないまでに工業から驅逐され、社會主義工業がソ同盟における工業の唯一の形態となるにいたつたという結果にまで導いたのであつた。

しかしてすべてこれらのことは、わが國が農業國から工業國となつたという結果にまで導いたのであつた。というのは、農業の産出高に對する工業生産高の比重は、五カ年計畫の初め（一九二

八年)における四割八分から、五カ年計畫の四年目の終り(一九三二年)には七割にまで高まつたからである。

しかしてすべてこれらのことは、五カ年計畫の四年目の終りに、吾々が五カ年間に對して當てられていた、一般工業生産のプログラムを、九割三分七厘、即ち工業生産物の量を、戦前の水準に比して三倍以上、一九二八年の水準に比して二倍以上に高めて、遂行することができたという結果にまで導いたのであつた。重工業の生産プログラムに關していえば、吾々は五カ年計畫を十割八分遂行した。

尤も、吾々は五カ年計畫の總プログラムを六分だけ未遂行に終つた。だがこのことは、隣接諸國がわが國と不侵略協約を締結することを拒絶したこと、また、極東における情勢が複雑化したために、吾々は、幾多の工場を、國防強化のために、國防のための現代的武器の生産に、急速に移しかえなければならなかつた、ということによつて説明されるのである。ところで、この移し替えのためには、或る準備期を経過することが必要であるために、これらの工場は四カ月間續けて生産物の生産を中止したというような結果に導いたのであつた。しかしてこの事は、一九三二年中の五カ年計畫の總體的生産プログラムの遂行に反映せざるを得なかつたのであつた。この工作は、國防能力の點における缺陷を、吾々がすつかり完全に補いえたという結果に導いたのであつた。しかしながら、この工作は、五カ年計畫に定められた生産プログラムの遂行上に、否定的な影響を及ぼさざるを得なかつた。この周圍の事情がなかつたならば、吾々は、單に五カ年計畫における生産全體の數字を遂行したのみならず、きつと超過遂行したに相違ないということは、一點の疑う餘地もあり得ないのである。

最後に、すべてこれらのことは、ソヴェト同盟が、弱い、防衛のために準備されていない國から、國防能力の點からいつて強力な國に、あらゆる突發的な事件に對して準備のできている國に、防

衛のための一切の現代的な武器を大量的規模で生産し、外國から攻撃された場合に、それらの武器を自國の軍隊に供給することをよくなし得る國に轉化した、という結果に導いたのであつた。

このようなのが、全體的にみた、工業の領域における、五カ年計畫を四カ年に遂行した總結果である。

すべて事實がこのようなものである以上、工業の領域における五カ年計畫の『失敗』についてのブルジョア新聞の駁辯が、何に價するかを、現在諸君自身で判断してくれ給え。

ところで現在、激烈な危機を體驗している資本主義諸國の事情は、彼等の工業生産高の増大という點からいつて、どんなふうになつてゐるか？

以下は、すべての人達に周知な政府筋の資料である。

ソ同盟の工業生産高が、一九三二年の終りにおいて、戦前の水準に比し、三十三割四分にまで増大したのに、北アメリカ合衆國の工業生産高は、同期間において、戦前の水準の八割四分にまで、イギリスは七割五分にまで、ドイツは六割二分まで低下したのであつた。

ソ同盟の工業生産高が、一九三二年の終りにおいて、一九二八年の水準に比し二十一割九分まで増大したのに、北アメリカ合衆國の工業生産高は、同期間において、五割六分、イギリスは八割、ドイツは五割五分、ポーランドは五割四分にまで低下したのであつた。

これらの資料は、工業の資本主義的制度がソヴェト的制度との勝負における試験に及第せず、工業のソヴェト的制度が資本主義的制度に對してすべての優越性をもつてゐるということを物語るものではなくて、一體何を物語るものであろうか。

次のように吾々にいう人達がある。多くの新しい工場は建設され、工業化の基礎は据えられ

た。これらはすべてよいことである。だが、工業化政策、生産手段の生産を擴大する政策をすて、或は少なくとも、もつと多くの更紗、靴類、衣類その他の日用必需品を生産するために、これらのことを後の方にひっこめる方が、遙によかつたであろう、と。

事實、日用必需品は必要な量よりも少なくしか生産されておらず、しかしてこのことは、或る程度の困難を生せしめる。だが、そのときには、工業化の任務を後の方に引き込めるようなそんな政策がいかなる結果に吾々を導いたであろうかということを知らなければならず、かつよく考慮しなければならぬのである。勿論、吾々は、この期間にわが重工業の設備のために費した正貨十五億ルーブルの内から、棉花、皮革、羊毛、ゴム、等々の輸入のためにその半分を取つて置くことができたであろう。その時には、わが國はもつと多くの更紗、靴類、衣類をもつたであろう。だがその時には、わが國は、トラクター製作工業も、自動車工業ももつていなかったであろうし、幾分たりとも本格的な黑色冶金工業ももつていなかったであろうし、機械を生産するための金屬ももつていなかったであろう。そして吾々は、新しい技術で武装された資本主義的圍繞に直面して、武装なき状態となつていたのであろう。

その時には、吾々は、農業にトラクターと農業機械とを供給する可能性を奪われていたであろうし、従つて、吾々は穀物なしになつていたのであろう。

吾々は、國內の資本主義的諸要素に對して勝利を得る可能性を奪われていたであろうし、従つて吾々は、資本主義の復舊のための機會を、信じ難いほどに多くしていたのであろう。

その時には、吾々は、現代的な國防裝備、即ちそれなしには國の國家的獨立性を保つことは不可

能であるし、それなしには、國は國外の敵の軍事的作戰の對象に轉化してしまふであらうところの現代的な國防裝備の一切をもつていなかたであらう。その時には、わが國の状態は、自身の重工業をもつていない、自身の軍事工業をもつていない、なまけものでないかぎりのすべての者から啄ばまれているところの、現在の中國と、多かれ少なかれ似なかつた状態になつていたのであらう。

つまり、吾々は、そのような場合には、軍事干渉を、不侵略協約ではなくて戰爭を、危険な、死を賭しての戰爭を、血みどろな、實力上での縣隔の甚だしい戰爭をもつていたのであらう。なせならば、吾々は、この戰爭において、攻撃のための現代的手段一切を自分の支配下にもつているところの敵に、殆ど武装せすに對することとなつたであらうからである。

同志諸君、事態はこういう工合に展開するのである。

自己を尊重する國家權力、自己を尊重する黨が、かかる破滅に導くような見地に立ち得なかつたということとは、明かなことである。

しかして、黨がかかる反革命的立場を拒否したからこそ、それだからこそ、黨は、工業の領域における五カ年計畫の遂行ということにおいて、決定的な勝利を獲得し得たのであつた。

五カ年計畫を實現し、工業建設の領域における勝利を組織して、黨は、最も急速なテンポで工業を發達させるという政策を實行したのであつた。黨は、いわば、國の駆け足前進を一層早めて、國を鞭撻したのであつた。

最も急速なテンポで進む政策を實行して、黨は正しく行動したのであつたか？
然り、もちろん正しく行動したので。

百年もおくれており、そのおくれの故に致命的な危険に脅かされている國を驅り立てないわけには行かないのである。かくしてのみ、新しい技術の基礎の上に急速に再整備し、最後に、廣汎な道に進み出る可能性を國に與えることができたのであつた。

さらに、吾々は、帝國主義者共が何時の日にもソ同盟を襲撃し、わが建設事業を中斷させるかを知ることができなかつたのに、彼等は、わが國の技術的・經濟的弱さを利用して、いつ何時でも襲撃することができたのだ。このことについては、疑うことはできないのである。だから、黨は、時を逸せず、徹底的に息つきを利用し、ソ同盟の威力の土台をなしている工業化の基礎を、ソ同盟に適時に築き上げるために、國を鞭撻することを餘儀なくされたのであつた。黨は、時期を待ち、かつ機動する可能性をもたなかつたし、かつ、黨は最も急速なテンポで進む政策を實行しなければならなかつたのだ。

最後に、黨は出来るだけ短期間に、國防の領域における國の弱さを根絶しなければならなかつた。時局的條件、資本主義諸國における軍備の増大、軍備縮小思想の崩壊、ソ同盟に對する國際ブルジョアジーの憎惡、すべてこれは、國の防衛力、國の獨立性の基礎を強化することを促進する方へ、黨を押しやつた。

しかし、黨は最も急速なテンポで進む政策を實現する現實的な可能性をもつていたのであろうか？ 然り、もつていた。黨がこの可能性をもつたのは、單に黨が、適時に、急速な前進の精神によつて、國を振り起たせることができたからだけでなく、何よりもまず、黨が、廣汎な新しい建設事業をなすにおいて、労働者並に技師・技術的成員によつて、十分わがものとされ、このゆえに、最も急速な發展テンポを實現する可能性を與えているところの、以前からある、或いは革新された工場に依據することができたからである。

これこそ、第一次五カ年計畫の時期に、わが國において新しい建設の急速な高揚、發展展開されたる建設においてみられる感激、新建設事業における英雄と突撃作業班員、凄じい發展テンポの實踐が成長したところの基礎なのである。

第二次五カ年計畫においても、これと全く同じ様な最も急速なテンポの政策を行わなければならなくなるであらうといつてもよいか？

否、そんなことをいうことはできない。

第一に、五カ年計畫を成功裡に實行した結果として、吾々は、五カ年計畫の主要な任務、即ち、工業、運輸交通、農業を新しい現代的な技術の基礎の上におくという任務を、大體においてすでに遂行した。これでもなお、國を鞭撻し、かつ驅り立てる必要があるか？ 現在、そんな必要がないことは明かである。

第二に、五カ年計畫を成功裏に實行した結果として、吾々は、國の防衛力を當然そうあるべき高度に高めることを、すでになすことができた。これでもなお、國を鞭撻し、かつ驅り立てる必要があるか？ 現在、そんな必要がないことは明かである。

最後に五カ年計畫を成功裡に實行した結果として、吾々は、新しい複雑な技術裝備をもつ、新しい大工場並に綜合企業を幾十幾百、建設完成することができた。このことは、第二次五カ年計畫における工業生産高の點で、主要な役割を演ずるのであるものは、第一次五カ年計畫においてみられたように、すでにわがものとなしえた技術をもつ舊い工場ではなく、まだわがものとなしえておらず、今後においてわがものとなせねばならぬところの技術をもつ新しい工場が、主要な役割を演ずるのである、ということの意味している。だが、新しい企業と新しい技術とをわがものとするということは、

すでにわがものとなし得た技術をもつ舊い、或は復興された諸工場を利用することよりも、遙にもつと困難なことである。このことは、労働者および技師・技術的成員の熟練程度を高め、かつ新しい技術を完全に利用するための新しい技能を獲得するためには、多くの時間を必要とするのである。すべて事實がこのようなものである以上、たとえ欲するからといって、吾々が、第二次五カ年計畫の時期に、特に第二次五カ年計畫の最初の二―三年間において、最も急速な發展テンポを期する政策を實現し得なかつたであらうことは、明かなことではないだろうか。

だからこそ第二次五カ年計畫に對しては、工業生産高の増加のテンポは、もう少し緩和されたテンポを、吾々は採用しなければならなくなるであらうと、私は考えるのである。第一次五カ年計畫の時期には、工業生産高の毎年の増加率は、平均二割二分であつた。第二次五カ年計畫に對しては、工業生産高の毎年の最低増加率を、平均一割三分乃至一割四分にしなければならぬであらうと、私は考えるのである。資本主義諸國にとつては、工業生産高増加のかかるテンポは、到底達しえられない理想なのである。そして、工業生産高増加のかかるテンポのみではなく、毎年の平均増加率五分でさえも、現在、資本主義諸國にとつては、到底達しえられない理想なのである。だが、とにかく、これらの國は資本主義國にはかならないのである。ソヴェト的な經濟制度をもつソヴェトの國は、これらの國とは全く異つた状態にある。わが經濟制度の下においては、吾々は、最小限として毎年一割三分乃至一割四分の生産高の増加を實現する完全な可能性をもっているし、また吾々はそれを實現しなければならぬのである。

第一次五カ年計畫の時期においては、吾々は、新しい建設に對する熱意、感激を高揚させることができたし、かつ決定的な成功を獲得することができた。これは非常によいことである。だが、現在

は、これだけでは不十分である。現在吾々は、新しい工場、新しい技術をわがものにせんとす、熱意、感激、労働生産能力の著しい高揚、生産原價の著しい低減によつて、このことを補足しなければならぬのである。

ここに、現在、主要な點が存するのである。

なせならば、この基礎の上に立つてのみ、吾々は、いわば、第二次五カ年計畫の後半の時期において、建設の領域においても、また、工業生産高の増加の領域においても、新しく力強い疾驅をすることができるようからである。

最後に發展のテンポそのものと、毎年の生産高の増加率について數言述べよう。わが國の産業に従事している人達は、この問題を十分に研究していない。ところが、これは非常に興味ある問題なのである。生産高の増加率とは何であり、また増加率の各々一分ということには、元來どういふ内容が藏されているか？ 例として復興期であつた一九二五年をとつてみよう。生産高の年増加は、當時六割六分であつた。そして、工業の生産總額は七十七億ルーブルであつた。ところで六割六分の増加は、當時、絶對數でいえば、三十億ルーブル以上であつた。従つて増加率各一分は、當時、四千五百萬ルーブルに相當した。今度は、一九二八年を例にとつてみよう。この年は、二割六分の増加、即ち、増加率からいえば、一九二五年の殆ど三分の一に過ぎぬ増加であつた。しかして、當時、工業の生産總額は、百五十五億ルーブルであつた。そして一年間における全増加額は、絶對數でいえば三十二億八千萬ルーブルであつた。従つて、増加率各一分は、當時一億二千六百萬ルーブルに、即ち、吾々が六割六分の増加をもつていた一九二五年におけるよりも、殆ど三倍に近い額に相當したのである。最後に、一九三一年を例にとつてみよう。この年には二割二分の増加、即ち、一九二五年の三分の一の増加が

あつた。工業の生産総額は、當時三百八億ルーブルであつた。そして全増加額は、絶対數でいえば、五十六億ルーブル餘であつた。従つて、増加率各一分は、二億五千萬ルーブル以上、即ち、吾々が六割六分の増加をもつた一九二五年におけるよりも六倍多く、吾々が二割六分餘の増加率をもつた一九二八年におけるよりも二倍多かつたのである。

すべてこれは何を物語っているか？ 生産高の増加テンポを研究するに當つては、増加率の總額だけを檢討することに制限してはならないということ——さらに、増加率の各一分には、どんな内容が藏されており、かつ生産高の年増加總額は、どうなつてゐるかということをも、よく知らなければならぬということをも物語つてゐる。例えば、一九三三年には、一割六分、即ち、一九二五年の四分の一の増加率があることとして、例にとらう。だがこのことはまた、この年の生産高の増加もまた、四分の一になるであろうということの意味してはいない。一九二五年における生産高の増加は、絶対數でいえば三十億ルーブル餘であつて、増加率各一分は、四千五百萬ルーブルに相當した。一九三三年の生産高の増加が、増加率一割六分として、これを絶対數でいえば五十億ルーブルより少くはなく、即ち、一九二五年の殆ど二倍であり、増加率各一分は、少なくとも三億二千萬乃至三億四千萬ルーブルに相當するであろうということ、即ち、一九二五年の増加率各一分に相當する金額、少なくとも七倍の金額となるであろうということは、疑う根拠を持たないのである。

同志諸君、もともと増加のテンポと増加率についての問題を、具體的に檢討するならば、問題はこういう工合に展開するのである。

工業の領域における五カ年計畫を四カ年に遂行した總結果についての問題は、こんなふうになつてゐるのである。

四、農業の領域における五カ年計畫を

四カ年に遂行した總結果

農業の領域における五カ年計畫を四カ年に遂行した總結果の問題に移ろう。

農業の領域における五カ年計畫は、集團化の五カ年計畫である。黨は、集團化を實行するに當り、何から發足したか？

黨は、プロレタリアート獨裁を鞏固化し、社會主義社會の建設を完成するためには、工業化の外に、小規模な個人農經營から、農村におけるソヴェト權力の唯一の堅牢な基礎としての、トラクター並に現代的農業機械を供給された大規模な集團的農業へ移行することが、今一つ必要であるということから發足したのであつた。

黨は、集團化なくしては、社會主義の經濟的土台を建設完成する廣道に、わが國を導いてゆくことは不可能であり、貧窮と無教育な状態から幾百萬の勤勞農民大衆を救い出すことは不可能である、ということから發足したのであつた。

レーニンは次のようにいつている――

「小規模經營をもつてしては窮乏から脱することはできない」。〔レーニン全集、第二四卷、五四〇頁〕

レーニンは次のようにいつている――

「もし吾々が、舊の如く、小規模經營のままでおさまつていたならば、たとえ自由な土地を耕す自由な市民であるとしても、どつちみち、吾々は不可避的な破滅に脅かされるであろう」。

(レーニン全集、第二〇卷、四一七頁)

レーニンは次のようにいつている——

「共同的な、アルテリのな、そして協同的な労働の援助によつてのみ、帝國主義戦争が、吾々を追い込んだ袋小路から、脱け出すことができるのである」。 (レーニン全集、第二四卷、五三七頁)

レーニンは次のようにいつている——

「大規模の模範經營における、共同耕作へ移行することが必要である。即ち、これなしには、ロシアが現在遭遇しているこの破滅から、この全くの絶望状態から、脱することはできない」。 (レーニン全集、第二〇卷、四一八頁)

これらのことから發足してレーニンは次のような基本的な結論に達した——

「公共的、集團的、協同的、アルテリの土地耕作の優越していることを、農民に事實上で示すことに成功できるような場合にのみ、また、協同的、アルテリの經營の方法によつて農民を援助することに成功できるような場合にのみ、その時にのみ、自己の手に國家權力を握つている労働者階級は、眞に、自己の正當さを農民に證明し、眞に、幾百萬という農民大衆をがっちりとかつ本當に自分の側に惹きつけることができるであろう」。 (レーニン全集、第二四卷、五七九頁)

農業集團化のプログラム、即ち、農業の領域における五カ年計畫のプログラムを實行するに當り、黨はレーニンのこれらの命題から發足した。

これと關連して、農業に對する五カ年計畫の任務は、トラクターと現代的農業機械を使用する可能性を全く奪われているところの分散された、小規模な個人農經營を、高度に發達した農業の一切の現代的農具によつて武装された大規模な集團經營に合同することであり、残りの空地は、模範的な國營農場、即ちソフホーズの所屬地となるようにすることであつた。

農業に對する五カ年計畫の任務は、ソ同盟を、小農的な、しかもおくられている國から、集團的勞働の基礎の上に組織され、かつ最大量の市場向穀物を生産できるところの、大規模の農業をもつ國に轉化するという點にあつた。

農業の領域において、五カ年計畫のプログラムを四カ年に實行して、黨は何を獲得できたか？

黨はこのプログラムを遂行したか、それとも失敗したか？

黨は約三年の間に、二十萬以上の集團農場と、約五千の穀物栽培並に家畜飼養のソフホーズとを組織することを得、そしてそれと同時に、四年間に播種面積を二千百萬ヘクター擴張することができたのであつた。

黨は、コルホーズをして現在、農民の手にある全耕地の七割以上を占めさせ、農民經營の六割以上を合同させることができた。これは、五カ年計畫を三倍超、遂行したことを意味している。

黨は個人農經營が壓倒的に多かつた時期に、調達し得た市場向穀物五億乃至六億ブードの代りに、現在、毎年十二億乃至十四億ブードの市場向穀物を調達する可能性をもつことができた。

まだ完全には撃滅されていないとはいへ、クラークを階級として壊滅させ、勤勞農民をクラークの奴役と搾取から解放し、そしてソヴェト權力の下に、農村において堅牢な經濟的基礎、即ち集團農場の基礎を据えることを、黨はなし得たのであつた。

黨は、ソ同盟を小農經營の國から世界中で最も大規模な農業をもつ國に、すでに改造することができた。

このようなものが、全般的にいつて、農業の領域における五カ年計畫を四カ年に遂行した總結果なのである。

すべての事實がこのようである以上、集團化の「破産」について、農業の領域における五カ年計畫の「失敗」についてのブルジョア出版物のおしやべりが、何の價值をもつかということ、今や諸君自身で判斷してくれ給え。

しかして、現在、激烈な農業危機を體驗している資本主義諸國における農業の問題は、どんなふうになつてゐるか？

次にあげるのは、すべての人達にとつて周知な官廳の資料である。

主要な穀物産出諸國の播種面積は、八分乃至一割縮小された。北アメリカ合衆國の棉花播種面積は一割五分、ドイツとチェッコ・スロヴァキアの砂糖大根の播種面積は二割二分乃至三割、リトヴァとラトヴィアの麻の播種面積は二割五分乃至三割縮小された。

アメリカ農業省の資料によれば、北アメリカ合衆國における農業の總産出價格は、一九二九年の百十億ドルから、一九三二年には五十億ドルに低下した。また同國において穀物の總産出價格は一九二九年の十二億八千八百萬ドルから一九三二年の三億九千百萬ドルに低下した。同國の棉花についていえば、一九二九年の十三億八千九百萬ドルから、一九三二年には三億九千七百萬ドルへの低下である。

すべてこれらの事實は、資本主義的農業制度に對するソヴェト的農業制度の優越性を物語るものではないだろうか？ これらの事實は、コルホーズが個人經營並に資本主義的經營よりも、もつと生活力をもつ經營形態であることを物語るものではないだろうか？

コルホーズとソフホーズは、十分に収益性のあるものではないし、これらは多額の資金を呑み込むし、こんな企業を保持しておく何等の理由もない。したがって、これらの内の収益性のあるものだけを殘して、これらを解體する方がもつと時宜に適したことであろう、という者がある。しかしながら、こんなふうにするのできるのは、國民經濟の諸問題、經濟學の諸問題について、何も分らない人達のみである。纖維企業の半分以上は、數年前には収益性のないものであつた。わが同志達の一部は、これらの企業を閉鎖するように、その當時吾々に提案したのであつた。もしも吾々が、彼等の言にしたがつて、そうしていたならば、吾々はどうなつていたのであろうか？ 吾々は國に對し、勞働者階級に對して、極めて大きな罪を犯すこととなつていたのであろう。なぜならば、吾々は、こうすることによつて、高揚しつつあつたわが工業を破滅させていたのであろうからである。吾々は當時どんなふうに行動したか？ 吾々は一年餘り待つた。そして全纖維工業が、収益性のあるものとなるようにすることができたのであつた。ところで、ゴリキー市のわが自動車工場はどうか？ これも目下のところ、収益性のないものではないか。この工場を閉鎖することを諸君は要求しないか？ 或は、また、同様に目下のところ収益性のないわが黒色冶金工業はどうか？ 同志諸君、これもまた閉鎖すべきではないだろうか？ もしもこんなふうには、収益のあるなしということによつて考察するならば、最も多くの利益を與え得る或る工業部門、即ち製菓工業、製粉工業、香料並に化粧品製造、メリヤス製造、子供用玩具製造工業、等々の或る工業部門のみを全力を擧げて發達させなければならなかつたであらう。

勿論、私はこれらの工業部門が発達するということに反対するものではない。反対に、これらもまた、住民にとつて必要なものであるから、これらは発達させられなければならないのである。だが、第一に、これらの工業部門は、重工業から受けうるところの諸設備と燃料なしには、発達するわけにはゆかないのである。第二に、これらの工業部門に工業化の基礎をおくことは不可能である。同志諸君、これが問題の存するところなのである。

収益のあるなしということ、目前だけの見地から、小商人的に見てはならない。収益のあるなしということは、數年間に亘る一般國民經濟の見地から取り上げなければならぬ。かような見地のみが、眞にレーニン主義的、眞にマルクス主義的見地と稱され得るものである。しかしてこの見地は、工業に對してのみでなく、コルホーズ並にソフホーズに對しても、さらに一層必要とされるものである。諸君は、ただ次のことを考えてみてくれ給え。およそ三カ年間に、吾々は二十萬以上のコルホーズと約五千のソフホーズとを創設した。即ち、吾々は、工業にとつての大規模な工場と同じ様な意義を、農業にとつてもつているところの、全く新しい大規模な企業を創設したのであつた。三年間に、新しい大規模企業を二十萬五千とまではゆかずとも、せめて二萬五千だけでも、かような企業を創設することのできた國の名を擧げてくれ給え。諸君はそんな名を擧げることとはできないであろう。なせならばそんな國は現在ないし、また前にもなかつたからである。だが吾々は、農業において、二十萬五千の新しい企業を創設した。そして、世の中には、これらの企業が直ちに収益のあるものとなることを要求し、しかしてもこれもそれらが直ちに収益のあるものにならない場合には、これらを破壊し、解體してしまふことを要求する者があるようである。ヘロストラタスの名聲は、これら奇怪以上ともいふべき人間共を、非常に羨望させているらしいということは明かではないか？

コルホーズ並にソフホーズの非収益性ということについては、それらすべてが、非収益性のものであるとは、私は決していいたくない。決してそんなことはない！すでに現在、高度の収益性のあるコルホーズとソフホーズが多くあるということは、すべての人達に周知なことである。わが國には、すでに現在、完全に収益を得ている幾千のコルホーズと幾十のソフホーズとがあるのである。これらのコルホーズとソフホーズとは、わが黨の誇りであり、ソヴェト權力の誇りである。コルホーズとソフホーズは、勿論、どこでも同じものではない。コルホーズとソフホーズの中には、舊いものもあれば、新しいものもあり、そしてまた全く出来たばかりのものもある。これはまだ弱く、まだ完全には形をととのえきつていない經濟的機構體なのである。それらは、わが國の諸工場が一九二〇年から一九二一年に體驗したと同様な時期を、自己の組織的建設上で、大體において體驗している。それらの大多數がまだ収益のあるものたり得ないであろうということは、わかりきったことである。だが、それらが二——三年の中に、わが國の諸工場が一九二一年以後に収益のあるものとなつたと丁度同様に、収益のあるものとなるであろうということには何等の疑いもあり得ないのである。現在の瞬間において、それら全部が収益のあるものではないということを根據にして、それらに對する援助と支持とを拒否するということは、労働者階級と農民とに對して極めて甚だしい大罪を犯すことを意味する。人民の敵と反革命家のみが、コルホーズ並にソフホーズの不必要ということについて問題を立てるのである。

農業についての五カ年計畫を實現しつつ、黨は、急速なテンポで集團化を實行した。急速なテンポによる集團化の政策を行い、黨は正しく行動したのであつたか？然り、たとえこの點において事態は、ある程度の熱中のあまりの行き過ぎなしにはすまなかつたとはいえ、無條件的に正しかつた。

階級としてのクラークの絶滅並にクラークの巢窟の根絶を實行するに當り、黨は半途に止まることはできなかつたし、黨はこの事業を最後までやり遂げなければならなかつた。

これは第一の點である。

第二に、一方では、トラクターと農業機械を持ち、他方土地の私有制の存在せぬこと（土地の國有化！）を利用して、黨は農業の集團化を強行するあらゆる可能性をもっていた。そして黨は、眞に、この領域において極めて偉大な成功を獲得したのであつた。というのは、集團化についての五カ年計畫のプログラムを、三倍も超過遂行したからである。

このことは、吾々が第二次五カ年計畫の時期においても、強行テンボの集團化政策を實行しなければならぬということを意味するだろうか？ 否、そんなことを意味しはしない。問題は、吾々がソ同盟の主要な諸地方の集團化を、大體においてすでに終えたということにある。従つてこの領域においては、期待し得たよりも多くのことをなす遂げたのであつた。しかして、大體において集團化を終えたというだけではない。吾々は、農民の壓倒的大多數に、コルホーズは最も歓迎すべき經營形態となつたと認識するにいたらせることができたのだ。同志諸君、これは非常に大きな獲得である。これでもなお急テンボの集團化ということについて大騒ぎする必要があるだろうか？ そんな必要のないことは明かである。

今や問題は、もはや急なテンボによる集團化についてではなく、况や、コルホーズ可否論ではない。この問題は、すでに肯定的に解決されている。コルホーズは鞏固化され、しかして舊い、個人經營への道は、終極的にとざされた。今や任務は、コルホーズを組織的に鞏固化し、コルホーズから妨害

工作をなすような分子を叩き出し、コルホーズのために本當の、十分審査されたボルシエヴィキのカードルを選び出し、かつコルホーズを本當にボルシエヴィキ的にし上げることにあるのである。

ここに、現在、主要な點が存するのである。

農業の領域における五カ年計畫を四カ年で遂行せる問題は、このようになっているのである。

五、労働者並に農民の物質的狀態改善の領域において五カ年計畫を四カ年に遂行した總結果

以上において、私は工業と農業の領域における諸成功について、ソ同盟の工業と農業との高揚について述べた。労働者と農民の物質的狀態の改善という見地からいつて、いかなる結果が、これらの諸成功によつて得られたか？ 勤勞大衆の物質的狀態の根本的改善という見地からいつて、工業と農業の領域における吾々の諸成功の基本的な結果は何であるか？

それらは第一に、失業を根絶したことと労働者の間における明日の日に對する確信の缺如という状態が全く除かれてしまったことにある。

それらは第二に、殆ど全部の貧農が、コルホーズ建設に加入するにいたつたこと、この基礎の上に、農民がクラークと貧農とに、階級分化することを内部から掘崩したこと、これらと關連して農村における窮乏と貧困とを根絶したことにある。

同志諸君、これは巨大なる獲得であり、こんな獲得については、一つのブルジョア國家も、たとえそれがいかに高度の「民主主義」國家であろうとも、夢想することのできないところのものである。

わが國、ソ同盟においては、労働者達はすでにすつと前に失業ということをおぼれてしまつてゐる。三年ほど前には、わが國には約百五十萬の失業者をもつてゐた。吾々が失業を根絶してから、すでに二年になる。しかして労働者は、この間に失業といふことを、失業の重壓を、失業の慘狀をすでに忘れてしまつた。失業が原因となつて、そこではどんな慘狀が起つてゐるか、資本主義諸國を見給え。これらの國々には、現在三——四千萬人を下らぬ失業者がある。これらの人達はどんな人か？ これらの人達のことを、通常世間では、彼らは「快復の望みなき人々」であるといつてゐる。

彼等は、毎日仕事をしようとする努力し、仕事を探し求め、仕事上の殆どどんな條件でも受け入れる覺悟をしてゐるのであるが、彼等は「餘分な」人々なのだから誰も彼等を仕事に採用しないのである。しかしてこのことは、巨大な量の商品と生産物とが運命の寵兒達の氣まぐれのために、資本家と地主の御曹司等のために浪費されてゐるその時に、起つてゐることなのである。

失業者達は食物を得ることができない。なせならば、彼等は食物のために支拂うべき何物をも持たないからである。彼等は寢場所を得ることができない。なせならば、彼等は家賃を支拂うべき何物も持たないからである。何を食ひ、何處に住んで彼等は生活してゐるか？ 失業者達は旦那方の食卓からこぼれ落ちる乏しい食物、腐つた殘飯を探し出し得る塵芥箱をほじくることによつて生命を繋いでおり、大都市の貧民窟に、そして、こわれた箱板や木の皮でぞんざいに建てた市外のみすばらしい

掘建小屋に最も多く住んでいる。だがこれですべてではない。失業で苦しんでいるのは失業者だけではない。仕事を持つている労働者達もまた、失業ということで苦しんでいる。大勢の失業者が存在するということは、生産における不安定な状態、明日の日に對する確信の缺如というような状態を作り出すが故で、そのために、労働者達は苦しんでいるのである。今日、彼等は企業で働いている、だが、明日目を醒ました時に、彼等自身すでに鹹首されたことを知らねばならないようなことはないという確信が彼等にはないのである。

五カ年計畫を四カ年間に遂行することによつて得た基本的な獲得の一つは、吾々が失業を根絶し、かつソ同盟の労働者達を失業の慘狀から救い出したことである。

農民についても同様なことを述べなければならない。彼等もまた、クラークと貧農とへの農民の分化ということ、クラークの側からの貧農に對する搾取ということ、毎年何十萬、何百萬という貧農を乞食にしていたところの零落を忘れてしまつたのだ。三十四年ほど前、わが國には、農民の間に、全農民人口の三割を下らない貧農がいた。それは、ほぼ二千萬人であつた。ところが、それよりも前、即ち十月革命前には、貧農は、農民人口の六割を下らない人數であつた。貧農とは何か？ それは、通常、種子が、或は馬が、それとも農具が、經營をやつて行くのに足りないとか、或はこれらの物が一切合切足りないというような人々である。貧農とは、食うや食わずに生活し、常則としてクラークの奴役となり、また舊時においてはクラークの奴役とも地主の奴役ともなつたような人達である。まだごく最近まで、二百萬以上の貧農が、毎年南の方、即ち北カフカズとウクライナへ、クラークのところへ雇われに、そしてもつと前には、クラークと地主のところへ雇われに出て行つた。さらにもつと多くの農民が、毎年工場の門前にやつて来て、失業者の隊伍を満して

行つた。而して、かかる望ましくない状態にあつたのは貧農だけではなかつた。中農の半分以上は、貧農と同様な困窮と缺乏の状態にあつたのだ。これらすべてのことを、農民はすでに忘れ去つてしまつたのだ。

五カ年計畫を四カ年に遂行したことは、貧農と中農の下層とに何を與えたか？ それは、クラークの奴役から貧農と中農の半分以上を解放して、階級としてのクラークを掘崩し、粉碎した。それは、彼等をコルホーズに引き入れ、彼等のために鞏固な地位を作り上げた。それは、そうすることによつて、搾取者、即ちクラークと被搾取者、即ち貧農とに農民が階級分化する可能性を根絶し、農村における赤貧状態を一掃した。それは、コルホーズ内の貧農と中農の下層とを、生活の保障された人の地位に引き上げ、そうすることによつて、農民が零落し、貧窮化する過程を根絶した。現在、わが國には、何百萬という農民が、毎年自分の處を去つて、遠い地方に出稼ぎに出て行くというような場合はすでない。農民を彼自身のコルホーズ外の、何處かへ仕事に引張り出すためには、現在では、コルホーズと契約を結ばなければならず、その上コルホーズ員に鐵道の無料乗車を保障しなければならぬ。もはや現在、わが國には、何十萬、何百萬という農民が破産し、そして工場に押しかけていつた、というような場合はないのである。こんなことは以前にはあつたが、それはもうすつと以前に、すでに消滅してしまつた。現在農民は、生活を保障された主人公、即ちトラクター、農業機械、種子の貯藏、豫備基金等々を、支配下にもつているところのコルホーズの一員である。

これこそ、五カ年計畫が、貧農と中農の下層とに與えたところのものである。

これこそ、労働者と農民の物質的狀態改善の領域における、五カ年計畫の基本的な諸獲得の本質の存するところである。

勞働者と農民との物質的狀態改善の領域におけるこれらの基本的な獲得の結果として、吾々は第一次五カ年計畫の期間に次の諸事實をもつてゐる——

イ、大規模な工業に従事する勞働者並に事務員數の増加は、一九二八年に比し二倍であり、これは五カ年計畫を五割七分超過遂行したことになる。

ロ、國民所得の増大、従つて、勞働者と農民の所得の増大は、一九三二年において四百五十一億ルーブルに達しており、これは一九二八年に比し八割五分増大したことになる。

ハ、大規模な工業に従事する勞働者と事務員の年平均勞働賃銀の増加は、一九二八年に比し六割七分であり、これは、五カ年計畫を一割八分超過遂行したことになる。

ニ、社會保險基金の増加は、一九二八年に比し二十九割二分であり（一九二八年の十億五千萬ルーブルに對して、一九三二年には四十一億二千萬ルーブル）これは五カ年計畫を十一割一分超過遂行したことになる。

ホ、決定的意義ある工業部門に従事する勞働者の七割以上を包括している公共食堂の増加、これは五カ年計畫を六倍超過遂行したことになる。

勿論、吾々は、勞働者と農民の物質上の要求を、完全に保障するといふところまでには、まだいたらなかつた。しかして、吾々は、最近の數年内には、おそらくこれを達成できないであらう。しかしながら、吾々は、疑いもなく、勞働者と農民の物質上の狀態をわが國において年々改善させたのであつた。このことを疑い得るのは、ソヴェト權力に對する不倶戴天の敵、或はたぶん、國民の經濟と勤勞大衆の狀態とを、いわばエチオピア王が高等數學を理解する以上には、到底理解し得ないであらうところの、ブルジョア新聞のある代表者達——そのうちには、このブルジョア新聞のモスクワ通信員の一部をも含めて——のみであらう。

ところで、資本主義諸國における労働者農民の物質的狀態に關する事情は、どんなふうになつてゐるか？

このようなものが政府筋の資料である。

資本主義諸國においては、失業者數は破局的に増大した。官廳の資料によれば、北アメリカ合衆國においては、加工工業一つだけで、就業労働者數は、一九二八年の八百五十萬人から一九三二年においては五百五十萬人に減少しており、アメリカ労働總同盟の資料によれば、北アメリカ合衆國の全工業における失業者數は一九三二年末に一千百萬人に達している。イギリスにおける失業者數は、官廳の統計資料によれば、一九二八年の百二十九萬人から一九三二年においては二百八十萬人に増加した。ドイツにおいては、官廳の資料によれば、失業者數は、一九二八年の百三十七萬六千人から一九三二年においては、五百五十萬人に増加した。同じ様な光景が、すべての資本主義國において看取される、しかして、官廳の統計というものは、常則として、失業者數に關する資料を控目にするものである。因に、資本主義諸國における失業者數は、三千五百萬人から四千萬人の間を動搖してゐるのである。

労働者の労働賃銀の引下げが系統的に行われてゐる。官廳の資料によれば、北アメリカ合衆國における一カ月平均の労働賃銀の引下げは、一九二八年の水準に比較して、三割五分に達し、イギリスにおいては、同期間に一割五分、しかして、ドイツにおいては、五割にさえ達した。アメリカの労働總同盟の計算によれば、一九三〇—三一年度における労働賃銀引下げの結果として、アメリカの労働者がうけた損害は、三百五十億弗以上であつた。

減少されることがなくとも僅かな額であるところのイギリスとドイツとにおける労働者保險基金も、著しく減少された。北アメリカ合衆國とフランスにおいては、いかなる形態にしろ、失業者保險

は、全く存在しないか、もしくは殆ど存在せず、これがために、住居を持たない労働者と浮浪兒の数が、特に北アメリカ合衆國において、大々的に増加している。

資本主義諸國における農民大衆の状態についての事情も、これより良くはなっていない。そこでは、農業危機が農民經營を根本から掘崩し、かつ幾百萬の零落した農民と農場經營者を乞食のような状態に追い込んでいるのである。

このようなのが、ソ同盟勤勞大衆の物質的狀態改善の領域において五カ年計畫を四カ年に遂行した總結果なのである。

六、都市と農村間の商品流通領域における 五カ年計畫を四カ年に遂行した總結果

さて、次に、都市と農村との間の商品流通の増大という領域における五カ年計畫を四カ年に遂行した總結果についての問題に移ろう。

工業並に農業生産高の夥しい増大、工業における、また同じ様に農業における市場向生産物餘剰量の増大、それから最後に、労働者と農民との需要の増大、すべてこれは、都市と農村間の商品流通を活潑ならしめかつ擴大させる結果に導かざるをえなかつたし、また實際に導いたのであつた。

都市と農村間の生産上における結合は、結合の基本的な形態である。だが生産上の結合一つだけでは不十分である。それを、都市と農村間の連繫を堅牢な、引離し得ざるものとするために、商

品關係における結合によつて補足しなければならない。このことは、ソヴェト商業を展開させることによつてのみ、達成し得るのである。ソヴェト商業を、何らか一つの手段によつて、例えば協同組合によつて展開し得ると考えることは、正しくないであろう。ソヴェト商業を展開させるためには、すべての手段、即ち協同組合網も、國營商業網も、コルホーズ商業をも利用することが必要である。

或る同志達は、ソヴェト商業を展開させること、特にコルホーズ商業を展開させることは、ネツプの第一段階への復歸であると考えている。これは全然正しくない。

コルホーズ商業をも含めて、ソヴェト商業とネツプの第一段階における商業との間には、根本的な差異が存在している。

ネツプの第一段階においては、吾々は資本主義が活氣づくことを許し、私營商業を許し、個人商人、資本家、關商人共の「活動」を許した。

これは、國家の調整活動によつてのみ制限されている、多かれ少なかれ自由な商業であつた。その當時、國の商品流通における私營資本主義的部面はかなり大きな部分を占めていた。その當時、わが國には、計畫によつて操業し、農産物並に都市製品の莫大な量の豫備を國家の支配下に與えているところの、現在のように發達した工業もなかつたし、コルホーズも、ソフホーズもなかつた、ということについては、私はもはや述べない。

現在吾々は、これと同様な状態にあるといつてもよいであらうか？ 勿論、そんなことをいつてはならない。

第一に、ソヴェト商業を、たとえ國家によつて調整できるものであつたとはいへ、ネツプの第一段階における商業と、同じものとして取扱つてはならない。ネツプの第一段階における商業が、

資本主義の活氣づくことと、私營資本主義的部面が商品流通においてその機能を果すことを許したとするならば、ソヴェト商業は、それらのいずれも存在せすまた否定されるということから發足しているのである。ソヴェト商業とは何であるか？ ソヴェト商業とは資本家——小資本家も、大資本家も——抜きの商業であり、闇商人——小闇商人も、大闇商人も——抜きの商業である。これは今まで歴史上においても前例がなかつたところの、かつ吾々が、ボルシェヴィキのみが、ソヴェト的發展の條件の下にそれを實行するところの特殊な商業である。

第二に、吾々は、現在、ソヴェト商業を展開させるために市場向農産物と工業製品との非常に莫大な量の豫備を國家に保障しているところの、かなり發達した國營工業とコルホーズとソフホーズとの全體系をもっている。こんなことはネツプの第一段階の條件下においてはなかつたし、またあり得なかつたのである。

第三に、吾々は、最近の期間に、商品流通の領域から、個人商人、大商人、あらゆる種類の仲買人共を完全に叩き出すことができた。勿論、このことは、隔世遺傳の法則によつて、個人商人と闇商人とが、彼等にとつて最も便宜な活動場面、即ちコルホーズ商業をこのために利用して、商品流通の場面に再び登場することができ得るであらうということとは全くあり得ることである。その上、コルホーズ員自身が、往々闇商人になることを辭さないものである。こんなことは、勿論、彼等の名譽になることではない。しかして、これらの不健全な現象に對し、わが國は、闇取引を阻止し、かつ闇商人を罰するための方策について、最近發布されたソヴェト權力の法律をもっているのだ。勿論、この法律が格別穩健に失するものではないということとは、諸君が知つてゐる。勿論、かかる法律は、ネツプの第一段階の條件の下においてはなかつたし、またあり得なかつたということとは、諸君は理解されるであらう。

すべて事實がこのようなものである以上、ネツプの第一段階の商業への復歸を云々することは、即ち、わがソヴェト經濟機構について何一つも、まったく何一つも、理解していないということを意味することを、諸君は知られるのである。

商業がソヴェト商業である場合でさえ、健全な貨幣經濟と健全な正貨とがなくては、商業を展開することは不可能だし、何よりもまず、貨幣經濟と恰も何等の價値をもつていないかのようなわがソヴェトの正貨とを、健全なものとしなければならぬと吾々にいう者がある。資本主義諸國の經濟學者達は、こんなふうな吾々にいうのである。これらのお歴々の經濟學者達は、經濟學を、例えば、カシタベリーの大主教が、反宗教の宣傳を理解し得る程度以上には、理解していない、と私は考へる。わがソヴェトの正貨がいかなる價値をもつていないなどということをして、どうして斷言することができ得るであろうか？ この正貨によつて吾々が、マグニトゴルスク鑛業所の建設、ドニエプル水力發電所の建設、クズネツク工業所の建設、スターリンград並にハリコフのトラクター工場、ゴリキー並にモスクワの自動車工場、幾十萬のホルホーズと數千のソフホーズとを築き上げた、ということとは、果して事實ではないだろうか？ すべてこれらの企業は、藁と粘土で建設され、一定の價値をもつているところの本物の材料で建設されたものでないとしても、これらの連中は考へてゐるのではなからうか？ もちろん、從屬的な意義しかもつていない組織されてゐない市場ではなく、國の商品流通上において決定的な意義をもつてゐる組織された市場を考慮に入れる場合には、ソヴェト正貨の安定性は、何によつて保障されるであろうか？ もちろん、金の豫備のみによるのではない。ソヴェト正貨の安定性は、何よりもまず、安定性のある値段で商品流通に供されるところの、極めて多量な商品が、國家の手中にあるということによつて保障されるのである。經濟學者の中の何者が、ソ同盟にのみ存

在してゐるところの、かような保障が、どんな金の豫備よりも、もつと正貨の安定性のための實際的な保障である、ということをご否定し得るであらうか？ 資本主義諸國の經濟學者達は、金の豫備をもつて正貨の安定のための「唯一」の保障であるとみなす理論によつて、彼等は、救い道のないほど混亂してしまつてゐるのだということをご何時か理解し得るであらうか？

ソヴェト商業の展開と關連せる問題に關する事態は、こんなふうになつてゐるのである。

ソヴェト商業の展開という領域において、五カ年計畫を實行した結果として、吾々は何を達成することができたか？

五カ年計畫の總結果として、吾々は次の諸點をもつてゐる——

イ、一九二八年に比し、十八割七分まで高まつた輕工業生産高の増大。

ロ、一九三二年の値段で、現在三百九十六億ルーブルとなつてゐる協同組合・國家經營の小賣商品流通の増大、即ち、小賣商業における商品量が、一九二八年の量の十七割五分に増加したこと。

ハ、一九二九年に比して、十五萬八千の大小の店舗をもつ國營・協同組合商業網の増大。

ニ、コルホーズ商業と、個々の國家的組織並に協同組合組織による農業生産物の調達との、益々擴大化されて行く發展過程。

このやうなものが諸事實である。

資本主義諸國內部の商品流通の状態は、全然異なる光景を呈してゐる。そこでは恐慌が、商業の破局的な縮小、企業の大量的閉鎖、小中商人の没落、大商業會社の破産、勤勞大衆の購買力の繼續的な低下による商事企業の在荷過剩に導いてゐる。

このやうなものが、商品流通發展の領域において、五カ年計畫を四カ年に遂行した總結果である。

七、敵對的諸階級殘存分子との鬭争の領域におい

て五カ年計畫を四カ年に遂行した總結果

工業、農業、商業の領域における五カ年計畫實現の總結果として、吾々は、國民經濟の全分野において、社會主義の原則を確立し、そこから資本主義的諸要素を追い出したのであった。

このことは資本主義的諸要素に對して、何をもたらさなければならなかつたか、また實際においてこれは何をもたらしたか？

このことは、死滅しつつある階級の最後の殘存分子、即ち個人産業家とその下僕、個人商人とその手代、舊貴族と僧侶、クラークとクラーク支持者、舊白軍將校と村の巡查、舊警官と憲兵、排外主義的意見を持つあらゆる種類のブルジョア・インテリとその他あらゆる反ソヴェト諸分子とが、その生活の軌道から叩き出されるという結果になつたのであった。

生活の軌道から叩き出され、かつ、ソ同盟全體の地面に散らばつた、これら過去の時代の人達は、わが工場に、わが諸機關と商業組織とに、鐵道並に水上運輸交通の企業に、そして主として、コルホーズとソフホーズともぐり込んだのであった。彼等は、「勞働者」や「農民」の假面を被つてそこにもぐりこみ、かつ隠れたのであった。しかして彼等の中の或者は、黨にさえ這い込みえたのであった。

これらの場所にもぐりこむときに、彼等は、何をいつしよにもちこんで來たか？ 勿論、ソヴェト權力に對する憎惡の感情、經濟、生活様式、文化の新しい形態に對する兇暴な敵意の感情をもつて、やつてきたのだ。

ソヴェト權力に對し眞向から攻撃を行うほどには、もはやこれらの連中は力をもっていない。彼等と彼等の階級は、かかる攻撃をすでに數回に亘つて實行したのであつたが、擊破され、蹴散らされたのであつた。それゆゑ、彼等に殘されているところの唯一のなほ得ること、それは、勞働者、コルホーズ員、ソヴェト權力、黨に卑劣な害を加え、かつ妨害工作をなすことである。しかして、彼等は、秘密破壊工作をやつて、できる限りの卑劣な害を加えているのである。倉庫に火を放ち、また機械を破壊している。サポタージュを組織している。コルホーズで、ソフホーズで、妨害工作を組織し、しかして彼等のうちのある者共、そのうちには、一寸した大學教授もいるが、彼等の妨害工作上における發作は、コルホーズとソフホーズとの家畜の間にペスト、炭疽熱病を流行させ、馬に腦膜炎の黴菌が傳播するように助成する、等々というところにもまで到つていたのである。

しかしながら、主要なことは、この點にあるのではない。これら過去の時代の人々の「活動」中主要なもの、彼等が國家の財産、協同組合の財産、コルホーズの所有物に對し、大規模な盗みと掠奪とを組織している、ということにあるのである。工場における盗みと掠奪、鐵道貨物の盗みと掠奪、倉庫と商業企業における盗みと掠奪、特にコルホーズとソフホーズにおける盗みと掠奪——このようなことが、これら過去の時代の人々の「活動」の基本的な形態なのである。彼等は、ソヴェト經濟の基礎は社會的所有制であり、ソヴェト權力に卑劣な害を加えるためには、この基礎をこそぐらつかせる必要があるということ、いわば、階級的本能によつて感知しているのであり、そして彼等は眞實、大規模な盗みと掠奪とを組織することによつて、社會的所有制をぐらつかせるように努力しているのである。

掠奪を組織するために、彼等は、昨日までは個人農であつたが、今はコルホーズの成員であると

ころのホルホーゾ員の個人所有者の慣習と舊習とを利用する。諸君はマルクス主義者として、人々の意識なるものは、その發展において彼等の實際的な状態よりもおくれる、ということを理解しなければならぬ。ホルホーゾ員は、状態からいへばすでに個人農ではなくて、集團化された農民である。だが彼等の意識は、今のところまだ舊い個人所有者のなものである。しかして、ここにおいて搾取階級の隊伍のうちの、過去の時代の人々は、社會的財産の掠奪を組織し、かつそうすることによつて、ソヴェト體制の基礎、即ち社會的所有制を動搖させるために、ホルホーゾ員の個人所有者の慣習を利用するのである。

多くのわが同志達は、大規模な盗みと掠奪の事實の意味と意義とを理解せず、このような現象を寛大に見ているのである。彼等は「このことには、特に變つたことは何もない」と考へて、まるで盲人のようにこれらの事實を見逃しているのである。だが、彼等即ちこれらの同志達は、甚しい思い違いをしてるのである。資本主義の基礎が私有制ということにあると丁度同じ様に、わが國の制度の基礎は社會的所有制である。もともと資本家共が、私有制を神聖にしてかつ不可侵なものであると宣言して、その當時、資本主義制度を鞏固化させることができたとするならば、吾々共產主義者は、生産と商業のすべての領域における經濟の新しい社會主義的形態を、それによつて鞏固化するために、社會的所有制を神聖にしてかつ不可侵なものであると、なおさら宣言しなければならぬのである。社會的財産の盗みと掠奪とを許すこと、——國家の財産についていわれようと、或は協同組合並にホルホーゾの財産についていわれようとおなじであるが——またこのような反革命的な不埒な行爲を見逃すことは、その基礎としての社會的所有制に立脚しているソヴェト制度を掘崩すことに協力することを意味するのである。最近、わがソヴェト政府が社會的所有制の保全についての法律を公布した時には、わ

がソヴェト政府はこのことから發足したのであつた。この法律こそ、現時期における革命的法律の基礎である。しかしてこの法律を最も嚴格に必ず實現することは、各共產黨員、各労働者、各コルホーズ員の最高の義務である。

現時期の革命的法律は、ネツプの第一期の革命的法律と少しも異りはしないし、現時期の革命的法律は、ネツプの第一期の革命的法律への復歸である、といわれている。これは全然正しくない。ネツプの第一期の革命的法律は、主として戦時共產主義の極端性に對し、「不法」な沒收と苛税とに對して、その銳鋒を向けたものであつた。それは、個人的經營者、個人農、資本家が、ソヴェトの法律を極めて嚴格に遵守するという條件で彼等の財産の保全を保障したのであつた。現時期における革命的法律についての事情は、全然それとは違つたふうになつてゐるのである。現時期における革命的法律は、その銳鋒を、もうずっと前になくなつたところの戦時共產主義の極端性に對してではなく、社會的經濟における盗人や妨害工作者に對して、無賴漢や社會的財産を掠奪する者に對して向けてゐるのである。現時期における革命的法律の基本的な配慮は、したがつて社會的財産の保護にあるのであつて、他の何もものかにあるのではない。

だからこそ、社會的財産の保護のための鬭争、ソヴェト權力の法律によつて、吾々の自由裁量にまかされてゐるところの一切の方策と一切の手段とによる鬭争は、黨の基本的な任務の内の一つなのである。

強力にしてかつ威力あるプロレタリアートの獨裁、これこそ、死滅じゆく階級の最後の殘存者共を完全に吹きとばし、かつ彼等の盗人的奸計を粉碎するために、吾々に現在必要なところのものである。

或る同志達は、階級の絶滅、階級のない社會の創設、國家の死滅についてのテーゼを、怠惰と寛大

ことを正當ずけるもの、階級闘争の消滅並に國家權力の弱化をとく、反革命理論を正當ずけるものとして理解した。かかる人々が、わが黨と何らの共通點をももち得ないということはいうまでもないことである。こんな人々は、黨から追つぱり出さなければならぬところの變心者であるか、それとも二枚舌すかいかである。階級の根絶ということは、階級闘争を消滅させることによってではなくて、階級闘争を強化することによつて達し得られるのである。國家の死滅は、國家權力の弱化ということによつてではなくて、死滅しつゝある階級の殘存分子を完全に粉碎し、まだまだ根絶されていず、かつまだそうすぐには根絶されないであろうところの、資本主義による圍繞に對して、防衛を組織するため、にゼヒ必要な國家權力の最大限度の強化、ということによつて達せられるであろう。

五カ年計畫の實現の結果として、吾々は敵對的な階級の最後の殘存分子を、彼等の生産的地位から終局的に叩き出し、クラークを壊滅させ、クラーク根絶のための地盤を準備することができたのである。このようなのが、ブルジョアジーの最後の部隊に對する闘争の領域における五カ年計畫の總結果なのである。だがこれだけでは不十分である。任務は、これら過去の時代の人々を、吾々自身の企業と機關とから叩き出し、徹底的に彼等を無害なものたらしめることにあるのである。

これらの過去の時代の人々が、ソ同盟の現状の下において、彼等の妨害工作者的盜人的奸計によつて、何等かの變化を生せしめることができるということとはできない。彼等は、ソヴェト權力の諸方策に反抗するためには、あまりに弱いし、かつ無力すぎるのである。だが、もしもわが同志達が、革命的警戒心をもつて自ら武装せず、また社會的財産の盜みと掠奪との事實に對する凡俗的・寛大な態度を實踐活動からすつかり振りすててしまわなければ、過去の時代の人々は、少なからず卑劣な害を加えることをしでかし得るであろう。

ソヴェト國家の威力の増大は死滅しつつある階級の最後の殘存分子共の反抗を強化するであろうということ念頭に入れて置かなければならない。彼等は死滅しつつあり、かつ斷末魔にあるからこそ、彼等は、住民中のおくれた層に訴え、かつソヴェト權力反對に彼等を動員して、一つの襲撃形態から他の一そう激烈な襲撃形態に移つて行くであろう。これら過去の人々が、ソヴェト權力反對に使用しないような、またそれを中心におくれた分子を動員しようと試みないような、卑劣な加害工作と中傷というものはないのである。エス・エル、メンシエヴィキの舊反革命諸黨の、中央並に邊境地方におけるブルジョア民族主義者共の粉碎された諸グループは、この地盤の上に復活し、かつ活動を始めることができるのである。またトロツキ派と右翼の偏向派中の反革命的分子の破片も復活し、かつ活動を始めることができるのである。これは、勿論、恐ろしいことではない。だが、もしも吾々が、これらの分子を迅速に、しかもこれと言う犠牲も拂わずに、徹底的になくしてしまふことを欲するならば、これらすべてのことを念頭に入れて置かなければならないのである。

だからこそ、革命的警戒心は、現在ボルシエヴィキに特に必要であるところの素質なのである。

八、一般的結論

このようなことが、工業と農業との領域における、勤勞大衆の生活状態改善と商品流通の發展との領域における、ソヴェト權力の鞏固化と、死滅しゆく階級の殘存分子と生残り分子とに對する階級闘争の展開の領域における五カ年計畫の實現の基本的な總結果である。

このようなことが、最近四カ年間に於けるソヴェト權力の成功と成果とである。

これらの成功を根據として、わが國では、萬事好都合に行つてゐると考へては間違ひであるだろう。もちろん、わが國では、まだ萬事が好都合に行つてゐるわけのものではない。吾々の活動中には、缺陷と誤謬とがかなり多くあるのだ。吾々の實踐活動中には、經營上の不條理と無秩序とがまだまだあるのである。残念ながら、私は缺陷と誤謬とについて述べることができない。というのは私に委託された總結果についての報告演説の範圍内では、これをなす餘裕が與えられていないからである。だが問題は、現在、このことにあるのではない。問題は、缺陷と誤謬とが存在するということは、吾々の中のだれ一人といえども否定することはできないが、それにもかかわらず、吾々は、全世界の勞働者階級の間に歡喜を呼びおこすような、かかる重大な諸成功を獲得し得たし、吾々は、眞に全世界的・歴史的意義をもつような、かかる勝利を獲得し得たということなのである。

誤謬と缺陷とがあつたにもかかわらず、それにしても黨は、五カ年計畫を四カ年で實現するといふことにおいて、決定的な勝利を獲得しえた、という點では、何が主要な役割を演ずることができ、また何が實際に主要な役割を演じたのであつたか？

どんな事情があるにせよ、この歴史的意義をもつ勝利を吾々に保障したところの、基本的な勢力は何であるか？

それは、何よりもまず、社會主義競争と突撃的勞働とを展開させる上に、技師・技術的働き手達と共に巨大な精力を發揮したところの幾百萬勞働者並にコルホーズ員大衆の活動力と獻身的精神、熱意と創意性とである。これらの事情がなかつたならば、吾々は目的を達し得なかつたであらうし、一歩も前進できなかつたであらう、ということとは疑い得ないのである。

それは第二に、前進するように大衆に呼びかけ、目的の途上に横たわる、ありとあらゆる困難を克服したところの、黨と政府との確乎たる指導である。

それは最後に、困難を克服するために必要な、巨大なる可能性をその中にもっているところの、ソヴェト的經濟制度の特別な長所と優越さである。

このようなのが、ソ同盟の歴史的意義ある勝利を條件つけたところの三つの基本的勢力なのである。

一般的結論——

一、五カ年計畫は、空想であり、謔言であり、實現不可能な夢であるというブルジョアジーと社會・民主主義者の活動家共の斷言を、五カ年計畫の總結果はひっくり返した。五カ年計畫の總結果はこの五カ年計畫がもうすでに實現されたことを示したのである。

二、労働者階級は、新しいものを建設する能力をもたず、労働者階級は、舊いものを破壊する能力だけをもっているという周知なブルジョアジーの「信條」を、五カ年計畫の總結果は粉碎した。五カ年計畫の總結果は、労働者階級が舊いものを破壊する能力をもっていると同様、新しいものをも立派に建設する能力をもっているということを示したのであった。

三、單獨で、一國だけで、社會主義を建設完成することは不可能であるという社會民主主義者共のテーゼを、五カ年計畫の總結果は粉碎した。五カ年計畫の總結果は、一國において社會主義社會を建設完成することは、全く可能であるということを示した。なせならば、かかる社會の經濟的土台は、ソ同盟においてすでに建設完成されているからである。

四、資本主義的經濟制度は、最も優秀な制度であり、他のあらゆる經濟制度は、堅固なものではなく、經濟的發展の困難に直面して、試験に合格する能力がないというブルジョア經濟學者其の斷言を、五カ年計畫の總結果はひつくり返した。五カ年計畫の總結果は、資本主義的經濟制度は破産者であり、堅固なものではないこと、それはすでに自己の生涯を終ろうとしており、かつ他の、もつと高度な、ソヴェト的社會主義的經濟制度に、自己の地位を譲らなければならないということ、恐慌を恐れず、資本主義にとつてはどうしても解決し得ない困難を、克服する能力をもつているところの、唯一の經濟制度、即ちそれはソヴェト的經濟制度である、ということを示したのである。

五、最後に、五カ年計畫の總結果は、もしも共産黨が、いかなる方向に事態を導くべきかをよく理解し、かつ困難を恐れないならば、共産黨は無敵なものであるということを示したのである。

（暴風のような、長く鳴り止まない拍手、大喝采となる。全員起立して同志スターリンに挨拶を送る。）

農村における活動について

ソ同盟共産黨（ボルシエヴィキ）中央委員會及び中央統制委員會の合同總會において一九三三年一月十一日に行われた演説

同志諸君！ 私は、發言者諸君が農村における黨活動の状態、その缺陷、その功績を、特にその缺陷を、正しく描き出したと考える。しかしそれにしても、彼等は農村における吾々の活動の缺陷についての最も主要なことを述べなかつたし、これらの缺陷の根源を發き出すことをしなかつた、と私には思われるのである。ところが、特にこの點こそ吾々にとつて最も甚大な利害關係のあるところなのである。そこで、農村における吾々の活動の諸缺陷について自分の意見を、ボルシエヴィキ特有なこの上ない率直さで述べることを許されたい。

去年、即ち一九三二年における農村で行われた吾々の活動のうちの主要な缺陷はどの點にあるか？

主要な缺陷は、今年の穀物調達がわが國においては、前年、即ち一九三一年よりも、もつと大きな困難の下に行われたということである。

このことを、收穫が不良であつたということによつて説明することは、どうしてもできない。なぜならば、わが國におけるこの年の收穫は、その前の年よりも悪くはなく、かえつてよかつたのだからである。一九三二年における穀物の總收穫高が、ソ同盟東北部の主要な五つの地區における早魃のために國內の穀物現有高を著しく減少させた一九三一年よりも多かつた、ということは何人も否定し得ないであろう。勿論、吾々は一九三二年にも、クバンおよびテレク、またウクライナの若干の地區においても、同様に不良な天候状態の結果、收穫上で幾らかの損害を受けた。しかしながら、これらの損害は、ソ同盟東北諸地區における早魃に原因して受けた一九三一年の損害の半分にもあつていないということを疑うことはできないであろう。したがつて、一九三二年においては、吾々は國內に、一九三一年よりも多くの穀物をもつていたのである。だがともかく、こんな事情にもかかわらず、一九三二年のわが國における穀物調達は、前年よりもつと大きな困難の下に行われたのであつた。

これはどうした事か？ 吾々の活動上におけるこの缺陷の諸原因は、何處にあるか？ このソゴは、何によつて説明することができるか？

一、これは何よりもまず、地方で働いているわが同志達、わが農村の働き手達が、穀物に對するコルホーズ商業許可によつて醸し出されたところの、農村における新しい情勢をよく考慮し得なかつたということによつて説明される。そして、彼等が新しい情勢をよく考慮しなかつたからこそ、それだからこそ彼等は、新しい情勢に適應させて、新しい調子に自分達の活動を建て直し得なかつたのであつた。穀物に對するコルホーズ商業が存在しなかつた時、國家が決定した値段と、市場における値段と、穀物に對して二様の値段がなかつた時には、農村における事情は一樣であつた。穀物に對するコルホーズ商業の許可に關する公告がされたことによつて事情は急激な變化を受けなければならな

かつた。なせならば、コルホーズ商業の許可に關する公告は、國家が決定した値段よりもずつと高いところの、市場における穀物の値段が合法化されることを意味しているからである。この情勢が、國家に穀物を供出するという事において農民の間に幾分か出し惜みをするような傾向をつくり上げざるをえなかつたことは、證明するまでもないことである。農民達は次のように胸算用した。「穀物に對するコルホーズ商業が許可されたし、市場における値段は合法化されたのだから、同量の穀物でも、國家にそれを供出するときよりも、もつと多い金をおれば市場で得ることができるわけだ。——したがつておれが馬鹿でないかぎり、おれは穀物をできるだけ手元に保有しておいて、それを國家には少な目に渡し、コルホーズ商業のためにより多く残しておき、こうして、同量の穀物を賣却して、もつと多くの金を手に入れ得るようになければならない」と。

これは、最も單純にして、しかも當然な論法である！

しかして、この點での不幸は、わが農村における働き手達が、ともかく彼等の内の多くが、この單純にして、しかも當然な事柄を理解しなかつた、ということにあるのである。ソヴェト權力が課した任務を失敗に歸せしめないために、共產黨員達は、この新しい情勢の下において、取入れの最初の日から、即ち、早くも一九三二年の七月に、彼等は穀物調達活動をあらゆる手段をつくして強化し、促進すべきであつたのだ。情勢がそうすべきことを要求したのであつた。ところで、彼等は實際においてどういふふうに行動したか？ 穀物調達の活動を促進する代りに、彼等は、コルホーズにおいてあらゆる種類の貯蔵を組織することを促進するようになり、これがために、國家に對する彼等の義務を履行するという事における、穀物供出者の出し惜みの傾向をさらに強めたのであつた。新しい情勢を理解せず、彼等は、穀物供出上における農民の出し惜みが穀物調達の活動を停滯させるか

もしれないということを恐れるのではなくて、農民達が、コルホーズ商業の線によつて、後で穀物を市場に搬出するために、穀物を手元に保有しておくことに考えつかず、そして、自分の穀物全部を、國家の穀物倉庫へ不意に持ちこんで渡してしまひはしないかということに恐れたのだ。

いいかえれば、農村で活動しているわが共産黨員達は、少なくとも彼等のうちの大多數は、コルホーズ商業をその肯定的な方面からのみ會得し、その肯定的な方面を理解し、かつ習得したが、コルホーズ商業の否定的な方面を全然理解せず、また習得しなかつたのである。つまり、彼等即ち共産黨員達が穀物取入れの最初の日から、穀物調達のカンパを全力をあげて促進することを始めないならば、コルホーズ商業の否定的方面が國家に大きな害を與えうるであろう、ということを理解しなかつたのである。

しかして、この誤謬を犯したのはコルホーズにおける働き手だけではなかつた。この誤謬はまた、ソフホーズの管理人達によつても犯されたのである。即ち彼等は、國家に渡さねばならないようになつてゐる穀物を、渡さずに犯罪的に手元に保有しておき、國家に渡すよりも、もつと高い値段で、この穀物を他へ賣却するようになったのであつた。

人民委員會議と黨中央委員會とは、コルホーズ商業を展開させるといふことについての周知なその決定において、穀物に對するコルホーズ商業と關連して生じたこの新しい情勢を考慮してゐたであろうか？ そうだ、考慮してゐた。この決定の中には、穀物調達の計畫がそつくり、しかも完全に遂行され、かつ播種用の種子の用意もできたであろう後においてのみ、穀物に對するコルホーズ商業を開始してもよい、ということが簡明に述べられてゐる。この決定には、穀物調達と種子の徵集が終つた後、大體一九三三年の一月十五日頃のみ、即ち、これらの條件が遂行された後にのみ、穀物に對する

コルホーズ商業を開始してもよいであろう、と簡明に述べられているのである。人民委員會議と中央委員會とは、これらの決定において、農村で活動しているわが働き手たちに、いわばつぎのように述べているのである。あらゆる種類の貯藏と豫備とに對する心ずかいはかり自己の注意をそらすな、主要な任務から脇道へそれるな、取入れの最初の日から穀物調達活動を展開し、かつこれを促進せよ、なせならば、第一の指圖は穀物調達の計畫を遂行することであり、第二の指圖は種子の徵集だからである。そして、これらの諸條件が遂行された後においてのみ、穀物に對するコルホーズ商業を開始し、かつ展開させることができるだろうからである。

黨中央委員會政治局と人民委員會議との誤謬は、これらが問題のこの方面を十分根氣すよく強調せず、コルホーズ商業に潜んでいる諸危険について、わが農村で活動している働き手遂に十分聲を高くして警告を與えなかつた、ということにあつたかもしれない。だが、黨中央委員會議政治局と人民委員會議とがこれらの危険について警告し、しかも、十分はつきりと警告したということ、——このことには何等の疑いもありえないのである。黨中央委員會議と人民委員會議とが、各地におけるわが働き手遂、地區の働き手のみでなく、多くの州の働き手遂のレーニンの鍛練の程度と炯眼さについて、幾分過大評價をしたということは認めなければならぬ。

穀物に對するコルホーズ商業の許可を公告すべきではなかつたのではなからうか？特にコルホーズ商業には、肯定的な方面ばかりでなく、幾分の否定的な方面も内部に含んでいる、という事情を考慮するならば、このことは誤謬だつたのではないだろうか？

否、このことは誤謬ではなかつた。ただ一つの革命的方策といえどもそれが正しく實行されないならば幾分の否定的方面を絶対に伴わないということを保障されてはいないのである。穀物に對するコ

ルホーズ商業についても、同じことがいわれなければならない。コルホーズ商業は、農村にとつても、また都市にとつても、労働者階級にとつても、また農民にとつても必要であり、かつ有利なのである。しかし、それが有利なものであるからこそ、それを實施することが必要であつたのである。

穀物に對するコルホーズ商業を實施するにあつて、人民委員會議と黨中央委員會とは、何を指導的根據としたのであつたか？

何よりもまず、都市と農村の間における商品流通を擴大し、かつ労働者には農産物の供給を、そして農民には都市製品の供給を改善するということによつてである。これをなすために、國營並に協同組合經營商業だけでは不十分であるというところは疑いなきところである。商品流通のこれらの諸通路は新しい通路、即ちコルホーズ商業によつて補足されることが必要であつた。しかし、吾々は、コルホーズ商業を實施することによつて、それを補足したのであつた。

さらに、人民委員會議と黨中央委員會とは、穀物に對するコルホーズ商業によつて、コルホーズ員に新しい所得の源泉を與え、かつ彼等の經濟状態を鞏固にすることをもつて、指導的根據としたのであつた。

最後に、人民委員會議と黨中央委員會とは、コルホーズ商業を實施することによつて、播種の方面においても、また取入れの方面においても、コルホーズの仕事を改善するための新しい刺戟を、コルホーズ員に與えるということをもつて、指導的根據としたのであつた。

人民委員會議と黨中央委員會とのこれらの考え全部が、最近におけるコルホーズの實生活中から得られた事實によつて、そつくり裏書されたことを、諸君は知つてゐる。コルホーズを鞏固化する過程を促進すること、コルホーズ脱退をなくすること、個人農民のコルホーズ加入の渴

望が益々つよくなつてゐること、注意深く選擇して、新コルホーズ員を採用しようとするコルホーズ員達の努力、——すべてこれらのことは、またこれらに類する多くのことは、コルホーズ商業がコルホーズの地位を弱めなかつたのみならず、かえつて強化し、かつ鞏固にしたということを、疑いもなく物語つてゐるのである。

したがつて、農村における吾々の活動の缺陷は、コルホーズ商業によつてではなく、必ずしも、それを正しく實行したのではなかつたということ、新情勢を考えに入れ得なかつたこと、穀物に對するコルホーズ商業許可についての公告によつて醸し出された新情勢に適應するように、自己の隊伍を再建し得なかつたということによつて説明されるのである。

二、農村における吾々の活動の缺陷の第二の原因は、各地において活動してゐるわが同志達が、——これらの同志達だけでもないが——主要な穀物生産諸地方におけるコルホーズの支配的地位が鞏固になつたことと關連して生じたところの、農村における吾々の活動上の條件の變化を理解しなかつた、ということにあるのである。吾々は皆、コルホーズ的經營形態が、わが穀物生産諸地方において、支配的形態となつたことを喜ぶものである。だが、この事態は、農業の發達上における吾々の配慮と吾々の責任とを軽減するものでなく、かえつて増大するものであるということ、皆が理解してゐるのではない。多くの者は、例えば、それぞれの地區、それぞれの州において、七割或は八割のコルホーズ化が達成されるやいなや、これでもうすべてのものは得られたのだし、また、コルホーズ化は、自身で自分のことをやり、自身で農業を高揚させるであらうと豫想して、吾々はこの仕事を自然のなりゆきのままにまかせておけばよいし、それを自然的發展にまかせておいてもよいのだ、と考へてゐる。だが、同志諸君、これは極めて甚しい思い違いである。實際において、支配的な經營形態としての、

集團的經營への移行は、農業についての吾々の配慮を低減するものではなく、かえってこれを増大するものであり、農業を高揚させることにおける共產黨員の指導的役割を低減するものではなく、かえってこれを増大するものである。自然的發展にまかせておくということは、農業の發展にとつて、現在、いかなる時よりも、ずつと危険なのである。現在、自然的發展にまかせておくということは、萬事を破滅させ得るであらう。

農村において個人的農業經營者が優位を占めていた間は、黨は、農業を發展させるための事業上におけるその關與の範圍を、援助、助言、警告というような個々の行爲に制限することができたのである。當時は、個人農自身が、自己の經營について面倒をみなければならなかつた。なせならば、彼等個人の經營にすぎなかつたところの、これらの經營に對しては、彼等は誰にも責任を負わすべき者ではなかつたし、また、自分自身の外には誰も當にする者がなかつたからである。當時、個人農は、もしも彼等が食すべき穀物もなく、かつ饑餓の犠牲になりたくなければ、播種についても、取入についても、また一般に農業労働の一切合切についても、自身で面倒をみなければならなかつた。事態は、集團經營への移行によつて本質的に變化した。コルホーズは個人的な經營ではない。コルホーズ員は今や、こんなふうについている。即ち「コルホーズはおれらのものであつて、おれらのものではない、コルホーズはおれらのものだが、同時にそれはイワン、フィリツプ、ミハイル、その他のコルホーズ員のものなのだ、コルホーズは、公共のものなのだ、」と。現在彼、コルホーズ員は、即ち昨日の個人農にして、今日の集團主義者、——彼は、今や、コルホーズは彼を穀物なしにすててはおかないということを知っており、他のコルホーズ員に責任を負つてもらうこともできるし、また彼等を當にすることもできるのである。それだから、彼の、コルホーズ員の配慮は、個人的經營の場合よりも、少な

くなつたのである。なせならば、經營のための配慮と責任とは、現在では全ホルホーズ員に割當てられるからである。

そこで、この結果としてどういふことになるか？ これによつて、經營をやつてゆくための責任の重心が、今では個々の農民からホルホーズの指導部に、ホルホーズの指導の中核に移行した、といふことになるのである。今や、農民達は、經營についての配慮、事業を賢明に遂行することを、自分達自身にはなくホルホーズの指導部に、或は、もつと正確に言えば、自分達自身に要求するよりも、もつと多くのものをホルホーズの指導部に要求しているのである。しかしてこのことは何を意味しているか？ このことは、黨が、農業發展の過程において、現在、個々の干渉行爲に、もはや局限しておくことができないうことを意味するのである。黨は、現在、ホルホーズの指導を自己の手に握り、仕事の責任を自ら引受け、かつ、科學と技術の成果を基礎として、その經營を前進させるように、ホルホーズ員を援助しなければならぬのである。

だが、これですべてではない。ホルホーズは大規模な經營である。しかして、大規模經營は計畫なことは管理することはできないのである。幾百、時には幾千という農家を抱擁している農業における大規模經營は、計畫的指導による方法によつてのみ、管理されることができ得るであろう。このことな中には、大規模經營は破滅し、崩壊しなければならぬ。諸君この點にこそ、個人的小規模經營を營む場合における條件と根本的に相違するところの、ホルホーズ制度の下におけるもう一つの新しい條件があるのである。かような經營の管理を、いわゆる自然の成行きにまかせ、即ち自然的發展にまかせておいてもよいであろうか？ そんなことをしてはならない、といふことは明かなことだ。かかる經營をやつて行くためには、ホルホーズに、經營を計畫立ててやつてゆき、かつ、經營を組織的にやつて行

く能力をもつ基礎的な教養のある人々を、一定最小限度に保障しなければならない。コルホーズ建設の事業に關してソヴェト權力からの系統的な干渉なくしては、ソヴェト權力の系統的援助なくしては、かかる經營を順調にやつてゆくことが不可能であることはわかりきつたことである。

ところで、この結果としてどういふことになるか？ これによつて、コルホーズ制度は、農業發展に對する黨と政府の配慮と責任とを低減させるものでなくて、増大させるものである、ということになるのである。これによつて、もしま黨がコルホーズ運動の指導を欲するならば、黨はコルホーズ生活並にコルホーズ指導についての一切の細部にまで立ち入らなければならない、ということになるのである。これによつて、黨はコルホーズと自分との連繫を弱くするのではなくて、もつと強くしなければならぬし、黨は、適時に、援助の手を延べ、コルホーズを脅している危険を警告するために、コルホーズ内における出來事のすべてを知らなければならぬ、ということになるのである。

しかして、實際において吾々はどんなことを見ているのであろうか？ 實際において吾々は、多くの地區並に州の組織が、コルホーズの生活と、またコルホーズの諸要求とは、全く切り離されてしまつていふことを見るのである。コルホーズの發展は、官僚的な事務所を素通りして進行している、ということに氣がつかず、人々は事務所に坐りこんで、得々として、じきりにペンを紙上に走らせているのである。個々の場合において、コルホーズとの離れ方は、地方組織の若干の委員達が、自分達の地方における諸コルホーズ内の事情を、官轄下の地區の組織からではなくて、モスクワの黨中央委員から聞いて知るにいたつた、という程度にまでたち到つていふのである。これは悲しむべきことではあるが、同志諸君、これは事實なのである。個人的經營からコルホーズへの移行は、必然的に農村における共產黨員の指導の強化ということに導かれなければならないなかつた。ところが實際には、多

くの場合、この移行は、共産黨員達が集團化の割合の高いことを誇つて、小成に安んじ、また事業を自然的發展にまかせておき、事業を自然のなりゆきのままにまかせておくという状態に導いたのであつた。コルホーズ經營を計畫的に指導するという問題は、必然的に、コルホーズにおける共産黨員の指導を強化するという結果にならなければならなかつた。ところが、實際には、多くの場合、共産黨員達はいずれに、コルホーズでは前の白軍將校、前のペトリューラの一味、しかして一般に労働者と農民の敵共が一切を支配している、という結果になつていたのである。

農村における吾々の活動上での缺陷の第二の原因についての諸問題は、このようになつてい

三、農村における吾々の活動上での缺陷の第三の原因は、わが同志達の多くが、新しい經營形態としてのコルホーズを過大評價し、しかして、遂にそれを聖像にしてしまつた、ということにあるのである。彼等は、社會主義的經營形態としてのコルホーズをもつているのであるから、これで一切のものは與えられたのだし、これでコルホーズ經營の正しい指導、コルホーズ經營についての正しい計畫を立て、コルホーズを模範的な社會主義經營に轉化させることは、すでに保障されたのだ、と決めてしまつた。彼等は、コルホーズがその組織的機構という點では、まだまだ弱いものであり、よく審査されたボルシエヴィキ的働き手をコルホーズに供給するという點からも、また同じ様に、コルホーズの仕事に對する日常當面の指導という點からも、黨の眞剣な援助を非常に必要とされているということを理解しなかつたのである。だが、これは、まだ全部ではないし、主要なものでもないのである。主要な缺陷は、わが同志達の多くが、農業の新しい組織形態としての、コルホーズそのものの力と可能性とを過大評價したということにあるのである。彼等は、コルホーズが社會主義的な經營

形態であるにもかかわらず、コルホーズそれ自體、あらゆる種類の危険と、あらゆる種類の反革命的諸分子が、コルホーズの指導部へもぐりこむことに對しては、まだまだ十分に保障されておらず、一定の條件下においては、コルホーズは、反ソヴエト的諸分子によつて、彼等の目的のために、利用されるということに對してはまだまだ十分に保障されてはいない、ということを理解しなかつたのである。

コルホーズとは、ソヴエトが政治組織の社會主義的形態であると丁度同じ様に、經濟組織の社會主義的形態である。コルホーズも、またソヴエトも、わが革命の極めて偉大な獲得物であり、勞働者階級の極めて偉大な獲得物である。だが、コルホーズとソヴエトは、組織の形態たるにすぎず、尤も社會主義的なるものではあるが、それにしても、組織の形態たるにすぎないのである。萬事は、この形態に、どんな内容が盛られるであらうか、ということにかかつてるのである。

吾々は、勞働者兵士代表ソヴエトがある期間、革命に反對して反革命を支持した場合を知つてゐる。わが國、ソ同盟においても、例えば、メンシエヴィキとエス・エルがソヴエトを指導しており、かつソヴエトが革命に反對して反革命を掩護していた、一九一七年の七月においては、事態はこのようであつたのである。社會民主黨員がソヴエトを指導していたとき、また彼等が革命に反對して反革命を掩護していた時である一九一八年末のドイツにおける事態は、このようであつたのである。したがつて、問題は、組織の形態としての——この形態そのものが極めて偉大な革命的獲得物であるとはいへ、——ソヴエトのみにあるのではない。問題は、何よりもまず、ソヴエトの活動の内容に、問題はソヴエトの活動の性格に、問題は正に何者がソヴエトを指導しているか、即ち革命家達か、それとも反革命家共かと

いうことにあるのである。實にこのことによつて、反革命家共は、必ずしもソヴェト反對の意見を述べたことではない、という事實が説明されるのである。例えば、ロシア反革命の頭目ミリュコフが、クロンシュタットの暴動の時に、ソヴェトには賛成だが、共産黨員のいないソヴェトに賛成だと述べたことは、周知のことである。「共産黨員のいないソヴェト」、これこそ、ロシア反革命の頭目ミリュコフが當時かかげたスローガンであつた。反革命家達は、問題は單にソヴェトそのものにあるのではなくて、何よりもまず、何者がソヴェトを指導するであろうか、という點にあることをよく理解していたのだ。

同様なことがコルホーズについてもいわねければならない。經營の社會主義的組織形態としてのコルホーズは、眞の革命家、ボルシエヴィキ、共産黨員達が、その先頭に立つて指導するならば、經濟的建設の奇蹟をあらわすことが出来るであろう。また反對に、もそもコルホーズにおいて、エス・エルやメンシエヴィキ、ペトリューラ一味の將校やその他の白衛軍人共、前のデニキン並にコルチャツクの一味が、一切を支配しているようならば、コルホーズは、ある期間、あらゆる種類の反革命的所業の掩護物に轉化することが出来るであろう。その上に、組織の形態としてのコルホーズは、反ソヴェト的分子がもぐりこむことに對して、保障されていないのみならず、最初の間反革命家共が、コルホーズを一時利用することによつて、幾分の便宜とさえなっている、ということ念頭に入れておかなければならない。農民達が個人的經營を営んでいた間は、彼等は互に分散させられ、また分離させられていたのだつた。そして、それがために、反ソヴェト分子の反革命的志向は、農民の間において大きな効果を収めることができなかつた。ところが、農民がコルホーズ經營へ移行したことによつて、それは全く異なつた光景を呈するにいたる。この場合において農民達は、コルホーズという形で大衆

的組織の出来上つた形態をすでにもつてゐる。それがために、反ソヴエトの分子がコルホーズへもぐりこむということ、彼等の反ソヴエト的活動とは、はるかに大きな効果を収めることができるのである。これらすべてのことを、反ソヴエトの分子が考えに入れてゐるということ、豫想しなければならぬ。反革命家の一部が、例えば、北カフカズにおいて、自分達の秘密組織のための合法的掩護物として、それを利用せんがために、何らかコルホーズに似たものを、自ら組織しようと努力してゐるということは周知のことである。反ソヴエトの分子が未だ暴露されず、壊滅させられていないところの、多くの地區においては、反ソヴエトの分子は、コルホーズの内部に反革命的活動にとつての巢窟を創り上げるために、進んでコルホーズに入つて行き、コルホーズを譽めそやしさえしてゐる、ということもまた、周知のことである。反ソヴエトの分子の一部分が、彼等自身、今やコルホーズに賛成するということも喋々してはゐるが、それは、コルホーズに共産黨員がいないことを條件としてだ、という事もまた周知のことである。「共産黨員のいないコルホーズ」、これこそ、反ソヴエトの分子の間において、今や成熟しつつあるスローガンである。したがつて、問題は、組織の社會主義的形態としての、コルホーズそれ自體のみあるのではなくて、何よりもまず、この形態にどんな内容が盛られてゐるかにあるのであり、つまり問題は何よりもまず、何者がコルホーズの指導部にあり、また何者がそれを指導してゐるかということにあるのである。

レーニン主義の見地から、コルホーズは、組織の形態としてとりあげたソヴエトと同じ様に、武器であり、然り武器であるのみである。一定條件の下においては、この武器を革命に反対して向けることができる。これを反革命に反対して向けることができる。この武器は労働者階級と農民の役に立つことができる。これはある一定條件の下においては、労働者階級と農民との敵の役に立つことができる。

る。一切の問題は、何人の手中にこの武器があり、だれに反対してこの武器が向けられるであろうかということにあるのである。

階級的本能によつて指導されているところの、労働者と農民との敵は、このことを理解し始めている。

残念ながら、若干のわが共産黨員は、このことをまだ理解しないのである。

しかして、若干のわが共産黨員がこの簡単な事柄を理解しなかつたからこそ、それだからこそ、吾々は今、多くのホルホーズにおいて、うまく假面を被つた反ソヴェト的分子が、ホルホーズ内で妨害工作やサボタージュを組織して、一切のことを支配しているというような光景を、もつていたのである。

四、農村におけるわが活動の缺陷の第四の原因は、各地で活動している多くのわが同志達がクラークに對する鬭争戦線をよく建て直しえなかつたことに、階級敵の面貌が最近變化し、農村における階級敵の戦術が變化したことを、そして成功を得るためには、これに適用させて自分の戦術を變えなければならぬということを理解しなかつたことにあるのである。敵は變化した情勢を理解し、農村における新しい制度の力と威力とを理解した。そしてこのことを理解するや、自分の戦術を建て直し、これを變更した。即ちホルホーズに對する直接の攻撃から、秘密な破壊工作に移つたのであつた。かかるに、吾々はこのことを理解せず、新しい情勢を注意してみなかつたのだ。そしてすでに階級敵がいなくなつているところで階級敵を探しつづけ、クラークに對する單純化された鬭争の舊い戦術を用い續けている、然るにそれは、即ちこの戦術そのものは、すでにすつと以前に古くさくなつていたのである。

人々はコルホーズ外で、階級敵を探し出そうとしており、彼等は、兇暴な相貌をした、巨大な歯をもつ、太い頸の、手に短い筒の銃を持った人間として、階級敵を探し出そうとしている。人々は、吾々がボスターの繪によつて知つてゐるような恰好のクラークを探し出そうとしてゐるのである。だがそのようなクラークはずつと以前にすでに表面にはなくなつてゐる。現在のクラーク並にクラークの擁護者、農村における現在の反ソヴェト的分子——この大部分は、「温容」、「好人物」、「聖人」に近いほどの人々である。コルホーズから遠く離れて彼等を探す必要はない、彼等はコルホーズそのものの中に坐りこんでおり、かつそこで倉庫係、經理部長、會計係、書記、等々の職務に従事している。彼等は「コルホーズを打倒せよ」などとは決していいはしない。彼等はコルホーズに「賛成」なのである。しかしながら、彼等はコルホーズの内部において、コルホーズにとつて甚だ迷惑至極な結果を齎らすようなサボタージュ的な活動や妨害工作的な活動を行つてゐるのである。彼等は、「穀物調達を打倒せよ」などとは決していいはしない。彼らは穀物調達に「賛成」なのである。彼等はデマを飛ばす「だけ」であり、そして實際に必要とするよりも三倍も多額の畜産のための予備を、コルホーズが組織すること、實際に必要とするよりも三倍も多額の保険基金を、コルホーズが組織すること、働き手一人宛に、一日六フントから十フント（一フントは約四一〇グラム——譯者註）の穀物を、公共食堂のためにコルホーズが支給すること、等々を要求する「だけ」である。かような「諸基金」が組織され、かつ公共食堂のための支給がなされた後、かような山師的なデマが飛ばされた後には、コルホーズの經濟力は當然掘り崩されなければならないし、かつ穀物調達などが行われる餘地がないということは、わかりきつたことである。

かような抜目のない敵をよく注意して觀察し、デマに引掛らないためには、革命的警戒性をもつ

ことを習得しなければならぬし、敵の假面を引剥し、かつ彼等の眞の面貌、反革命的な面貌をコルホーズ員達に示す能力を習得しなければならぬのである。しかして、吾々は農村にこれらの素質を十分に享有している共産黨員をたくさんもっているだろうか？ 共産黨員達は、往々、單にかような階級敵を暴露しないというだけではなく、かえつて、彼等の山師的デマに自ら引掛り、彼等の尻尾に隨き従つていたのである。

新しい假面をかぶつた階級敵に気がつかず、彼等の詐欺師的な奸計をよく暴露し得ず、すでにクラークは、この世には存在しないかのごとく考え、階級としてクラークの絶滅政策を行つた結果として、農村における反ソヴエトの分子はすでに根絶されたと考えて、それ故にボルシエヴィキ的でもなければ、反ソヴエト的でもないが、それら自身、いわば自然發生的に、ソヴエト権力側へ移行するであろうにちがいない「中立的な」コルホーズの存在は、許容してもよいのだということによつて、若干の同志達は往々自分を安心させているのである。だが同志諸君、これは甚だしい思い違いである。クラークは粉碎されたが、まだまだ完全に粉碎しつくされてはいないのである。それだけではない、もしも共産黨員が、クラークはいわば自然發生的な自己發展によつて自ら墓穴へ這入つて行くであろうと豫想して、ぼんやりとして暮し、いい氣持になつてゐるのであるならば、クラークはまだ、そう容易には完全に粉碎しつくされはしないであろう。「中立的な」コルホーズについていえば、そんなものは一般に存在しないし、また自然界にそんなものはあり得ないのである。「中立的な」コルホーズ、そんなものは、眼はあるが、盲目目である人々の幻想である。現在、ソヴエト國において吾々もつてゐるような、かかる尖锐な階級闘争の下においては、「中立的な」コルホーズなどのためには存在の餘地がなく、かかる情勢の下においては、コルホーズは、ボルシエヴィキ的か、或は、反ソヴエ

ト的か、いずれかであり得るのみである。しかして、吾々がいずれかのコルホーズを指導していないとすれば、このことは反ソヴエトの分子がこれらのコルホーズを指導しているということの意味しているのである。この点には、一點の疑いもあり得ないのである。

五、最後に、農村におけるわが活動の缺陷のもう一つの原因について。それは、即ちその原因は、コルホーズ建設の事業における共産黨員の役割と責任の過少評價、穀物調達の仕事上における共産黨員の役割と責任の過少評價ということにあるのである。穀物調達上における困難について述べる場合、共産黨員はそれはすべて農民の罪だと断言して、農民に責任を負わしてしまふのが常である。しかしながら、これは断然正しくないし、かついうまでもなく不正なことである。農民は、これに何も關係はない。もし問題が責任と罪の所在とについてであるならば、責任はそっくり共産黨員が負うべきであり、またここでは罪はすべて、吾々、即ち、共産黨員だけにあるのである。

わがソヴエト權力のような、強力な、しかも權威のある權力は、世界中どこにもないし、また前にもなかつた。わが共産黨のような、強力な、しかも權威のある黨は、世界中どこにもないし、また前にもなかつた。コルホーズの利益と國家の利益とが要求するように、吾々がコルホーズの經營をやつてゆくことを何人も邪魔しはしないし、また邪魔することはできない。しかして、レーニン主義が要求するように、吾々がコルホーズの經營を必ずしもうまくやつてゆき得ないような場合、吾々が往々多くの甚だしい、許すことのできない誤謬を、例えば穀物調達の方面において、犯すような場合には、この点において罪のあるのは吾々、そうだ、吾々だけである。

穀物に對するコルホーズ商業の否定的方面を注意してみず、かつ多くの極めて甚だしい誤謬を犯したという點に、吾々は罪があるのである。

多くのわが黨組織が、コルホーズから切り離され、小成に安んじ、かつ自然的發展のままにまかせたという點に、吾々は罪があるのである。

多くのわが同志諸君が、問題は、形態そのものにあるのではなく、自らコルホーズの指導を引き受け、そしてコルホーズの指導から反ソヴェト的分子をたたき出すことにあるのだということを理解せず、大衆組織の形態としてのコルホーズを、依然として過大評價しているという點に、吾々は罪があるのである。

新しい情勢を注意してよくみず、かつ秘密な破壊工作をやっている、階級敵の新しい戦術をよく會得しえなかつたという點に、吾々は罪があるのである。

一體農民はこのこととどんなにかかわりがあるか？ ひとつききたいものだ。

私は、發展し繁榮しており、國家が課した任務を正確に遂行しており、一日毎に經濟的に鞏固化している、多くのコルホーズのグループがあることを知っている。また他方においては、前に述べたコルホーズと隣接しており、それらのコルホーズと同じ收穫を上げ、かつ同じ客觀的條件をもっているにもかかわらず、だんだん衰微してゆき、かつ腐敗しているようなコルホーズをも私は知っている。原因は何處にあるか？ 原因は第一のグループのコルホーズをほんとうの共產黨員が指導しているのに、第二のグループのコルホーズを、やくざ者、尤も、ポケットに黨員證を持つてはいるが、それにしては、やくざ者たるにかわりはないところの者が指導しているという點にあるのである。

一體農民はこのこととどんなにかかわりがあるか？ ひとつききたいものだ。

共產黨員の役割と責任の過少評價の結果たるものは、しばしば、農村における吾々の活動の缺陷の原因を、探さなければならぬ處でない處で、それを探し出そうとじ、かつそのために諸缺陷は取り除かれずにそのままに残されているということである。

コルホーズ員・突撃作業班員たちの

第一回全同盟大會における演説

—一九三三年二月十九日—

男女コルホーズ員同志諸君！ 私は諸君の大會において演説をしようとは考えていなかった。述べなければならなかったことは、私より前に登壇した演説者たちによつて、すでに、みんな述べつくされ、しかもよく、かつ正確に述べられているので、私は演説しようとは考えなかつたのだ。それでもなお、演説する必要があるだろうか？ だが諸君は、私にせひ演説させようとしているし、しかして力は諸君の手中にあるのだから（長く、つすく拍手）、私はどうしても服従しなければならない。では、個々の問題について數言述べることとしよう。

一、コルホーズの道は唯一の正しい道である

第一の問題——コルホーズ農民が進んでいる道は正しいか、コルホーズの道は正しいか？

この問題は、いたずらな問題ではない。コルホーズの突撃作業班員である諸君は、コルホーズが正しい道に立っていることを、きつと疑われないに相違ない。それ故、この問題は、諸君にとつてあるい

は餘計なものであると考えられるかも知れない。しかしながら、すべての農民が諸君のように考えているというわけではない。農民の間には、そしてホルホーズ員達の間にも、ホルホーズの道が正しいということを疑っているような人々が少からずいるのである。そして、このことは、何ら驚くべきことではないのである。

事實上、何百年もの間、人々は昔風に生活し、舊い道を歩み、クラークや地主に、高利貸やヤミ商人に腰をかかめ頭をひくくしていたのであつた。この舊い、資本主義的道が、農民の賛成を得ていたということはできないのである。だが、それは、この舊い道は、踏みならされ、歩き慣れた道であり、しかして、どうにかしてちがつたふうにもつとよいふうに住生活することができるといふことを、まだ誰も實證しなかつたのである。いわんや、すべてのブルジョア諸國においては、まだまだ人々が昔風に生活しているにおいておやである……。そして突然、ボルシェヴィキが、この舊い、泥沼のよくな生活に闖入し、暴風雨のように闖入して、舊い道を振り捨てるときだ、新しいふうに、ホルホーズふうに住生活をはじめるときだ、ブルジョア諸國においてみんなが生活しているようにはなく、新しいふうに、アルテリアに生活をはじめるときだ、という。ところで、一體この新しい生活とは何であるか、誰だつてそんなことが分るものか。新しい生活が、舊い生活より悪くはならないであらう。いずれにもせよ、新しい道は、不慣れな道であり、踏みならされていない道であり、かつまだすつかりは踏査されていない道である。舊い道に踏みとどまる方がいいのではなからうか？ 新しい、ホルホーズの道へ移行することを待った方がいいのではなからうか？ 危険をおかしてまであえてなす價値があるだらうか？

これが、現今、勤勞農民達の一部を捉えているところの疑なのである。

われわれは、この疑を解かなければならないであろうか？ われわれは、これらの疑問そのものを白日下にさらして、そんな疑になんの價値があらうかということを示さなければならぬのか？ そうしなければならぬということは明かである。

従つて、以上に提起されている問題を、いたずらな問題ということとはできないのである。

では、コルホーズ農民が進みはじめた道は、正しい道であるか？

ある同志達は、新しい道、コルホーズの道への移行は、わが國においては、三年前にはじまつたのだと考えている。これは部分的にのみ正しいのである。もちろん、コルホーズの大量的な建設は、わが國では、三年前にはじまつたのであつた。この移行は、周知のように、トラクターの撃滅と幾百萬の貧農大衆および中農大衆のコルホーズ側への移動とによつて表示された。すべてこれは正しい。だが、コルホーズへのこの大衆的な移行を開始するためには、若干の前提條件、すなわち一般的にいつて、それがなくては、大衆的なコルホーズ化運動などは考えられないところの、若干の前提條件を手中にもつていなければならぬ。

何よりも先ず、農民がコルホーズの道を進むようになることをこれまでも援助し、かつ援助しつずけているところの、ソヴェト権力をもつていなければならぬ。

第二に、地主並に資本家共を追出し、彼らから工場と土地を取り上げ、それらを人民の所有物として宣言しなければならぬ。

第三に、トラクターを抑制し、かつ彼らから機械とトラクターを取上げなければならぬ。

第四に、コルホーズに團結した貧農と中農のみが、機械とトラクターを使用し得ることを、宣言しなければならぬ。

最後に、國を工業化し、新しいトラクター製作工業を創設し、コルホーズ農民にトラクターと機械を豊富に供給するために、新しい農業機械製作諸工場を建設完成しなければならなかった。

これらの前提条件なしには、三年前に始まったコルホーズの道への大衆的な移行などということは、考えも及ばなかったのである。

従つて、コルホーズの道へ移行するためには、何よりも先ず十月革命をやり遂げ、資本家と地主を打倒し、彼らから土地と工場とをとりあげ、新しい工業を創設しなければならなかった。

新しい道への、コルホーズの道への移行は實に、十月革命の時に始まったのであった。だが、この移行が、新しい力をもつて展開されたのは、やっと三年程前のことである。なせならば、この時期になつてのみ、十月革命の經濟的結果が、全幅的に現われたし、この時期になつてのみ、國の工業化を前方に押し進めることができたからである。

人民の歴史には、少からざる革命が記録されている。だが、これらの革命は、これらすべてが一方的な革命であつたという點で、十月革命とは異なつてゐる。勤勞大衆に對する搾取のある形態は搾取の他の形態と取りかえられはしたが、搾取そのものはいつも残つたのであつた。ある搾取者と抑壓者は、他の搾取者や抑壓者と入代りはしたが、搾取者と抑壓者そのものはいつも残つたのであつた。ただ十月革命のみが、あらゆる搾取を根絶し、ありとあらゆる搾取者と抑壓者を絶滅することを自己の目的としたのであつた。

奴隸の革命は奴隸所有者を絶滅し、かつ勤勞大衆に對する奴隸所有者的搾取形態を撤廢した。だが、この革命は、奴隸所有者と奴隸所有者的搾取形態の代りに、農奴所有者と勤勞大衆に對する農奴所有者的搾取形態とを据えた。ある搾取者が、他の搾取者と入代つたのだ。奴隸制度の下では、奴隸

所有者が奴隷を殺すことを「法律」が許した。農奴制度の下では、農奴所有者が農奴を賣ること「のみ」を、「法律」は許した。

農奴の革命は農奴所有者を絶滅し、かつ農奴所有者的搾取形態を撤廢した。だが、この革命は、農奴所有者と農奴所有者的搾取形態の代りに、資本家と地主を据え、勤勞大衆に對する資本家的、地主的搾取形態を据えた。ある搾取者が、他の搾取者と入代つたのだ。農奴制度の下においては、農奴を賣ることを「法律」は許した。資本主義的制度的の下においては、勤勞大衆を失業と貧窮に、破滅と餓死に運命づけること「のみ」を、「法律」は許しているのである。

わがソヴェト革命のみが、わが十月革命のみが、ある搾取者を他の搾取者と取替え、あるいは、ある搾取形態を他の搾取形態と取替えるのではなくして、あらゆる種類の搾取を根こそぎにし、古い者も新しい者も、ありとあらゆる搾取者、ありとあらゆる金持と抑壓者を根こそぎにするように、問題を立てたのであつた。（長く、つずく、拍手）

だからこそ、十月革命は、新しい、コルホーズの道への農民の移行にとつての前提條件であり、かつ必要な前提なのである。

農民が十月革命を支持したことは、正しい行動であつたか？ 然り、彼らは正しく行動したのだ。十月革命は、彼らが地主と資本家、高利貸とクラーク、商人とヤミ商人を肩から振りおとすことを援助したがゆえに、彼らは正しく行動したのだ。

だが、これは問題の一面のみである。抑壓者を追出し、地主と資本家を追出し、クラークとヤミ商人を抑制すること、——これは非常に結構なことである。だが、これだけでは十分ではない。古い桎梏から徹底的に解放されるためには、そのためには、搾取者を撃滅することだけでは不十分であ

る。そのためには、さらに、あたらしい生活をきずきあげ、勤勞農民が、自己の物質的ならびに文化的状態を改善し、自己を一日毎に、一年毎に向上させる可能性を彼らに與えるであらうような生活をきずきあげることが必要なのである。このためには、農村においてあたらしい制度、コルホーズの制度を築きあげなければならぬ。この點に問題の他の一面があるのである。

古い制度は、新しいコルホーズ制度とどの點において異なっているか？

古い制度の下においては、農民たちは一人ぼっちで働き、古い祖先傳來のやり方で、古い農具で働き、地主と資本家のために、クラークとヤミ商人のために働き、自分は食うや食わすの生活をし、他人を富ませるために働いたのであつた。新しい、コルホーズ制度の下においては、農民達は、共同して、アルテリ的な方法で働き、新しい農具、すなわちトラクターと農業機械を用いて働き、自分のために、自分のコルホーズのために働き、資本家や地主のいない、クラークやヤミ商人のいない生活をし、自己の物質的ならびに文化的状態を日ごとに改善するために働いているのである。古い制度の下においては、政府はブルジョア政府であり、この政府は、勤勞農民に反對して金持共を支持する。新しいコルホーズ制度の下においては、政府は、労働者・農民の政府であり、この政府は、ありとあらゆる金持に反對して労働者と農民を支持するのである。古い制度は資本主義へ導いて行く。新しい制度は社會主義へ導いて行く。

これが、諸君、二つの道、すなわち資本主義的道と社會主義的道であり、社會主義への前進の道と資本主義への後退の道なのである。

何らかの第三の道をとることができると考えている人々がある。コルホーズの道の正しさについて、まだ完全な確信をもっていないところの、動搖している若干の同志達は、この誰も知っていない

第三の道に、特に熱心にしがみついているのである。彼らは、われわれが古い制度に、個人經營に、ただ資本家と地主のいないそれに立歸ることを欲しているのだ。彼らはこの際、われわれが、クラークとその他の小資本家「だけ」を、わが經濟制度上の合法的な現象として許すことを欲しているのだ。實際においては、これは第三の道ではなくて、第二の、すなわち資本主義への道なのである。けれど、個人經營に立戻り、かつクラークを復興させるということは、何を意味するか？ それは、クラークのための奴役を復興させ、農民に對するクラークの搾取を復興させ、クラークに權力を與えることを意味している。しかしながら、クラークを復興させ、しかもそれと同時にソヴェト權力を保持することができるであろうか？ 否、そんなことはできない。クラークの復興ということは、クラーク權力の成立へ、ソヴェト權力の絶滅へ、當然導かなければならないし、従つて、それは、ブルジョア政府の樹立に導かなければならないのである。しかして、ブルジョア政府の樹立ということは、また、地主と資本家との復興に資本主義の復興に導かなければならないのである。いわゆる第三の道とは、事實上第二の道、すなわち、資本主義への復歸の道である。試みに農民達にたずねてみたまえ。クラークのための奴役を復興させ、資本主義に立歸り、ソヴェト權力を絶滅し、地主と資本家との權力を復興させることを、農民達は欲しているか？と。農民たちに先ずたずねてみたまえ。そうすれば諸君は、勤勞農民の大多數がどの道を唯一の正しい道とみなしているかを知られるだろう。

従つて、ただ二つの道、前進、繁榮、すなわち新しい、コルホーズ制度への道か、それとも、後退、没落、すなわち古い、クラーク的・資本主義制度への道か、この二つの道があるだけである。

第三の道はないのである。

勤勞農民は資本主義的道を却け、コルホーズ建設の道を取つて、正しく行動したのであつた。

コルホーズの道は正しい道だ、だが、それは困難な道だ、と言う者がある。これは部分的にのみ正しい。もちろん、この途上には困難がある。よい生活というものは、何の苦もなくえられるものではない。しかし問題は、主な困難はすでに突破され、現に諸君が直面している困難は、それらについて、眞面目に語るだけの価値もないものだということである。何れにもせよ、およそ十年乃至十五年前に労働者達が體驗した困難と比較すれば、コルホーズ員同志諸君、諸君の現在の困難は、子供の遊びごとのように思われる。諸君の發言者達は、ここで演説して、レニングラード、モスクワ、ハリコフ、ドネツ炭田地方の労働者を賞讃した。この人達は、かれら、すなわち、労働者たちは成果をもっているが、諸君は、すなわち、コルホーズ員達は、彼らに比してはるかに少い成果しかもっていないと述べた。諸君の發言者達の演説には、幾分の同志的羨望、すなわち、われわれコルホーズ員・農民も、レニングラード、モスクワ、ドネツ炭田地方、ハリコフなどの労働者たちがつているのと同じような成果をもっていたならば、それはどんなによいことであつたらうにという、羨望さえがほのかに見られたと私には思われるのである：

すべてこれはよいことである。ところで諸君は、レニングラードおよびモスクワの労働者達にとつて、これらの成果が如何に高價なものであつたか、最後に、彼らがこれらの成果を獲得するため、いかなる艱難をなめたか、ということを知っていられるだろう。私は、幾週間の間、肉類その他の食料品はおろか、一片のパンさえも労働者たちに給與できなかつた時の、一九一八年における労働者たちの生活の中の二——三の事實を、諸君に話し得るであろう。當時、レニングラードとモスクワの労働者達に、黒パン、それとても半分は豆粕の雜つたパンを一日に八分の一フント（五十グラム餘——譯者註）ずつ給與することのできた頃は、もつともよい時期であるともみなされたのであつた。

しかも、こんな状態は一カ月ではなく、半カ年でもなくて、まる二カ年間もついたのであつた。だが労働者達は、我慢したし、かつ意氣銷沈もしなかつた。なせならば、彼らをもつとよい時期が来るであろうということ、そして彼らは、決定的な成功を獲得し得るであろうということを知つていたからである。ところで、實際に、諸君は、労働者達が間違わなかつたということを見ているのである。諸君の困難や艱難を、労働者たちが體驗した困難や艱難と比べて見たまえ、そうすれば諸君は、諸君の困難と艱難については、眞面目に語るだけの價値もないことを見られるであろう。

コルホーズ化運動を一層前進させ、全力をあげてコルホーズの建設を徹底的に展開するためには、何を必要とするか？

そのためには、何よりもまず、コルホーズが、完全に確保された、しかも耕作に適當する土地をもつてゐることが必要とされる。諸君はかかる土地をもつてゐるか？ 然り、もつてゐる。もつともよい土地全部がコルホーズに譲渡され、かつコルホーズのものとしてしっかりと確保されていることは周知のとおりである。したがつて、コルホーズ員達は、土地が彼らの手から他人の手に移りはしないかなどということをおそれることなしに、この土地を思う存分に耕作し、かつ改良することができるのである。

そのためには、第二に、コルホーズ員達がトラクターと機械を利用し得ることが必要とされるのである。諸君は、トラクターと機械をもつてゐるか？ 然り、もつてゐる。わがトラクター工場並に農業機械製作工場が、コルホーズにすべての現代的農具を供給して、何よりもまず、そして主としてコルホーズのために作業してゐるということは、すべての人達に周知なことである。

そのためには、最後に、政府が、人力の點でも、財政の點でも、全力をあげてコルホーズ農民を支持し、敵對的な階級の最後の殘存分子に、コルホーズを腐敗させる餘地を與えないようにすることが

必要とされるのである。諸君はこのような政府をもっているか？然り、もっている。この政府は、労働者・農民ソヴェト政府と呼ばれている。政府が資本家や地主を、またクラークその他の金持を支持しないで、勤勞農民を支持しているような國の名を、私に言ってみてくれ給え。地球上に、そんな國は存在しないし、また存在したこともなかつたのだ。ただわが國、ソヴェト國においてのみ、すべての金持並に搾取者共に反對して、労働者とコルホーズ員である農民とを、都市並に農村の全勤勞大衆を、嚴然として全力をあげて擁護しているところの政府が存在しているのである。（長く、つすく、拍手）

したがって諸君は、コルホーズの建設を展開し、かつ古い桎梏からの完全な解放を獲得するために必要なすべてのものをもっているのである。

諸君に對しては、ただ一つのこと、すなわち實直に働き、コルホーズの所得を労働の量に従つて分配し、コルホーズの財産を大切にし、トラクターと機械を大切にし、馬をよく手入れするように手くばりし、諸君の労働者・農民の國家によつて課された任務を遂行し、コルホーズを強化し、かつコルホーズにもぐりこんだクラークとクラークの手先共をコルホーズからたたき出すことが要求されるのである。

諸君は、これらの困難を克服すること、すなわち、實直に働き、かつコルホーズの財産を大切にすることが、もはやそれほど困難ではないことについて、きつと私に同意されるに違いない。いわんや、現在諸君は、金持のためにはなく、また搾取者のためにでもなく、自分のために、自身のコルホーズのために働いているにおやである。

ここにおいて諸君は、コルホーズの道、社會主義の道は、勤勞農民にとつて唯一の正しい道であるということを見られるのである。

二、われわれの當面の任務は全コルホーズ員を裕福にすることである。

第二の問題——われわれは、新しい道、わがコルホーズの道において何を達成したか、また、われわれは、ここ二—三年のうちに、何を達成しようと考えているか？

社會主義はよいことである。幸福な、社會主義的生活は、たしかによいことである。だが、これらはすべて、將來のことである。現在主要な問題は、われわれが將來において何を達成し得るかという事ではない。主要な問題は、われわれが、現在において、すでに何を達成したかということである。農民は、コルホーズの道を進むようになった。これは非常によいことである。だが農民は、この道において何を達成したか？ コルホーズの道を進むことによつて、われわれは具體的に何を達成したか？

われわれが達成したことは、幾百萬の貧農大衆が、コルホーズに加入することを援助したということである。われわれが達成したことは、幾百萬の貧農大衆がコルホーズに加入し、そこで最良の土地と、最も優秀な生産用具とを使用して、中農の水準にまで向上したということである。われわれが達成したことは、以前には食うや食わずに生活していた幾百萬の貧農大衆が、現在コルホーズにおいて中農となり、生活を保障された人々となったということである。われわれが達成したことは、農民が貧農とクラークに分化することを断然なくし、クラークを粉碎し、貧農がコルホーズ内において自己の労働の主人公となり、中農となることを援助したということである。

四年ほど前、すなわち、コルホーズ建設が展開された頃までの事態は、どういふふうになつていたか？ クラークは富み、かつ榮えていた。貧農はクラークの奴役にされて、貧乏になり、零落していった。中農は、クラークの地位によじのぼろうとしてみたが、その度毎にすべり落ちて、クラークの物笑いとなり、貧農の隊伍を充じていった。すべてこれらの混亂によつて、クラークだけが、そして、たぶん裕福なものうちの何者かだけが、利益を得たといふことは、想像するに難くはないのである。農村における農家百戸ごとに、四戸乃至五戸のクラーク、八戸乃至十戸の裕福な農民、四十五戸乃至五十戸の中農、それから約三十五戸の貧農があると見積つてよかろう。したがつて最も少く見ても、全農家の三割五分は、クラークのための奴役の重荷を負うことを餘儀なくされている貧農なのである。中農の半分以上を構成しており、その境遇からいつて貧農と僅かな差異しかなく、かつ、クラークに直接依存している経済的に微力な中農のうちの層については、ここで改めていふまでもない。

コルホーズ建設を展開して、われわれが達成したことは、この混亂と不正とを根絶し、クラークのための奴役を粉碎し、この全貧農大衆をコルホーズに引きよせ、そこで彼らに保障された生活を授け、そして、コルホーズの土地を使用し、コルホーズに與えられた特惠を享有し、トラクター、農業機械を使用することのできる中農の水準にまで彼らを引上げたことである。

しかして、このことは何を意味するか？ このことは、二千萬を下らない農民人口、すなわち二千萬を下らない貧農が、貧窮と零落から救われ、クラークのための奴役から救われ、かつコルホーズによつて生活を保障された人たちになつたといふことを意味している。

同志諸君、これは大きな成果である。これは、まだこの世にあつたためじがなく、世界中一つの國家といえども、まだ到達しなかつたような、成果なのである。

諸君、これがコルホーズ建設の實際的、具體的な結果であり、農民がコルホーズの道を進み始めたことの結果なのである。

だが、これはただコルホーズ建設の途上におけるわれわれの最初の、一歩であり、われわれの最初の成果にすぎないのである。

われわれは、この最初の一歩で、この最初の成果で、踏み止まるべきである、と考えることは正しくないであろう。否、同志諸君、われわれはこの成果で踏み止まることはできない。さらに前進し、コルホーズを徹底的に鞏固化するためには、われわれは第二の、一歩を踏み出さなければならぬ。われわれは新しい成果を獲得しなければならぬのである。この第二の一歩とはなんであるか？それは、コルホーズ員を、すなわち以前の貧農も、以前の中農も、もつと高い水準に引上げることである。それは、全コルホーズ員を裕福な農民にすることである。そうだ、同志諸君、裕福な農民にすることである。(長く、つすく、拍手)

われわれは、コルホーズによつて貧農を中農の水準にまで引上げるということを達成した。これは非常によいことである。だが、これだけではまだ不十分である。われわれは今や、もう一歩前進して、以前の貧農も、以前の中農も、全コルホーズ員を援助して、裕福な農民の水準にまで引きあげなければならぬ。これは達成し得ることであるし、またどんなことがあつても、われわれは、これを達成しなければならぬ。(長く、つすく、拍手)

わが國は現在、このわれわれの目的を達成するために必要なすべてのものをもつてゐる。われわれの機械とトラクターは、現在よく利用されてはいない。わが國の土地は、あまりよく耕作されてはいない。機械とトラクターとの利用方法を改善しさえすれば、土地の耕作のやり方を改善しさえす

れば、われわれはわれわれの生産物の量を二倍、三倍に増大し得るのである。しかしこのことは、全ホルホーズ員を、ホルホーズの耕地を耕す裕福な労働者となすためには、全く十分なものである。

従来、裕福な農民についての事情はどんなふうになつていたか？ 裕福な農民となるためには、自己の隣人達に損害を與えなければならなかつたし、彼らを多少搾取し、彼らに高く賣りつけ、彼らからは安く買い、誰か作男を雇傭し、彼らをかなりひどく搾取し、資本を蓄積し、そして、自己の地位を鞏固化して、後にクラークになりあがるが必要であつた。實にこのことによつて、以前、個人的經營の下においては、裕福な農民が、貧農や中農の間で不信と憎惡を、なせ呼び起したかということが説明されるのである。だが、現在では事情は異なつてゐる。現在では、條件もまた別なものである。ホルホーズ員が裕福な農民となるためには、自己の隣人達に損害を與えたり、または、搾取したりすることを全然必要とはしないのである。しかし、わが國では、もはや土地に對する私有權も土地の賃貸借も存在しておらず、機械とトラクターは國家の所有するところであり、また資本を所有する人々などは、現在ホルホーズにおいては、はやつていないのであるから、何者かを搾取するなどということは、現在容易なことではないのである。過去にはそんなことがはやつた。だが、それは永久に消え去つてしまつたのだ。ホルホーズ員が裕福な農民となるためには、そのためには、現在一つのことだけが、すなわちホルホーズにおいて實直に働き、トラクターと機械とを正しく利用し、役畜を正しく使役し、土地を正しく耕作し、ホルホーズの所有物を大切に護ること、これだけが必要とされてゐるのである。

社會主義が存在しているのに、何のために、もつと精を出して働く必要があるか？ 今までわれわれは精を出して働いたし、現在も精を出して働いてゐる。こんなに精を出して働くことは、もう止め

てもよい時ではなからうか？と時々人々はいう。同志諸君、こんな説は根本的に間違つてゐる。これはなまけ者の哲學であつて、正直な勤勞者達の哲學ではない。社會主義は勞働することを決して否定しはしない。反對に、社會主義は勞働を基礎にして建設されるのである。社會主義と勞働とは、互に切離し得ないものである。

わが偉大な師であるレーニンは「働かざるものは食うべからず」と述べたのであつた。このことは何を意味しており、レーニンの言葉は誰に反對して向けられてゐるか？それは搾取者共に反對して、自身は働かずに、他の者を働かせ、他の者を犠牲にして自身を富ましている者共に反對して向けられてゐるのである。しかして、まだその他に何者に反對して向けられてゐるか？自身はのらくらと暮し、他の者を犠牲にして、うまいもうけをしようと欲じてゐる者に反對して向けられてゐるのである。社會主義は、のらくらと暮すようなことなく、すべての人々が實直に働き、他人のためにではなく、金持や搾取者のためにではなく、自分のために、社會のために働くことを要求するのである。しかして、われわれが實直に働き、自分のために、自分たちのコルホーズのために働くであろうならば、われわれは二—三年ほどの間に、以前の貧農も以前の中農も、全コルホーズ員を裕福な農民の水準にまで、豊かな生産物を享有し、十分に文化的生活を營むことのできる人達の水準にまで引上げるといふことを、なし遂げうるであらう。

この點に、現在、われわれの當面の任務があるのである。この任務をわれわれは達成することができるであらうし、またどんなことがあつても、これを達成しなければならないのである。(長く、つすく、拍手)

三、個々の注意事項

さてこれから、若干の個々の注意事項に移ることを許されたい。

まず第一に、農村におけるわが黨員達について。諸君の中には黨員がいるが、非黨員の方がもっと多い。非黨員が黨員よりも多く大會に集つたということは、非常によいことである。というのは、非黨員をこそ、まず何人よりも先に、わが事業に引入れることが必要だからである。非黨員のホルズ員達に、ボルシエヴイキ的態度で接する共產黨員がある。だがまた、自分が黨員であることを鼻にかけ、非黨員を自分の身近に寄せつけないような黨員もある。これは、よくないことであり、しかも害のあることである。ボルシエヴイキの力、共產黨員の力は、彼らが幾百萬の非黨員の積極的活動家達に、わが黨を圍繞させることを心得ていることにあるのである。われわれが黨に對する幾百萬の非黨員労働者、並に農民の信頼を獲得することと心得ていなかったならば、われわれボルシエヴイキは、現在もつているような成功をもつてはいなかつたであろう。ところでこのために、何が必要とされるか？ このためには、黨員が非黨員との間にへだてをつくらないこと、黨員が自分の黨という殻の中にとじこもらないこと、彼らが自分の黨員たることを鼻にかけず、非黨員の聲に耳を傾けること、黨員が非黨員に教えるだけでなく、非黨員から學ぶこと、これらが必要とされるのである。

黨員は天から舞いおりてくるものではないということをお忘れはならない。すべての黨員自身、かつては非黨員であつたということを記憶していなければならぬ。今日、彼らは非黨員であるが、明日は黨員になるであろう。一體、何を鼻にかけるのであろうか？ われわれ、老ボルシエヴイキの中には、黨内で、二十年乃至三十年間ほとんど働いているところの人々が少からず見出されるのである。

そして、われわれ自身もかつては同じ様に非黨員であつたではないか？ もし二十年乃至三十年ほど以前に、その當時の黨員がわれわれを虐待するに至り、そして黨によせつけなかつたならば、われわれはどうなつていたであらうか？ その時には、われわれは何年間も黨から切りはなされていたであらうという事は、大いにあり得ることである。しかして同志諸君、實にわれわれ老ボルシエヴィキこそは、役に立たない人達ではないのである。(愉快などよめき、長く、つすく拍手)

だからこそ、わが黨員達は、非黨員の前で時々横柄に構える現在の若い黨員達は、これらすべてのことを記憶していなければならず、高慢ということではなくて、謙遜なことが、ボルシエヴィキを美しく飾るのだということを経験していなければならぬ。

次に、婦人について、婦人、コルホーズ員について數言述べよう。同志諸君、コルホーズにおける婦人の問題は大きな問題である。私は、諸君の中の多くの者が、婦人を過少評價し、かつ彼女らを嘲笑さえて知っていることを知っている。だが、同志諸君、これは誤謬である、はなはだしい誤謬である。ここでは問題は、婦人が人口の半數を占めているということだけにあるのではない。問題は、何よりも先ず、コルホーズ化運動が、多くの立派な、そして才能ある婦人を、指導的職務に拔擢登用するにいたつたということにあるのである。この大會を、その構成をよく觀察してみたまえ。そうすれば諸君は、婦人がおくれたものとしての地位から先進的な者としての地位に、すでにすつと前に、前進していることを見られるであらう。コルホーズにおける婦人、これは大きな勢力である。この勢力をしまいこんでおくことは、罪を犯すことを意味するであらう。われわれの義務は、コルホーズにおける婦人を前面に押し進め、かつこの勢力を事業に引き入れることにあるのである。

もちろん、ソヴェト権力と婦人コルホーズ員との間に、ついこの間小さな行ちがあつた。問

題は牝牛にかんじてであつた。だが、現在では、牝牛にかんずる問題はかたがつき、したがつて行ちがいもなくつた（長くつすく拍手）。われわれは、コルホーズ員の大多数が、すでに各戸に、一頭ずつの牝牛をもつてゐるようになることができたのである。もう一——二年も経てば、自分の牝牛を持たないようなコルホーズ員を、諸君は一人も見出し得ないであらう。事實、われわれボルシェヴィキは、コルホーズ員全部が、わが國では牝牛を一頭ずつもちうるように努力するであらう。（長くつすく拍手）

婦人コルホーズ員たち自身にかんじていえば、彼女達は、婦人にとつてのコルホーズの力と意義とを記憶しておかなければならないし、コルホーズにおいてのみ、彼女たちは男子と對等な地位を得る可能性をもつのだということも記憶しておかなければならない。コルホーズなくしては平等はなく、コルホーズにおいては権利の平等があるのである。このことを、婦人コルホーズ員同志諸君は記憶しなければならず、かつ、コルホーズ制度をまなこのように大切に護らなければならぬ。（長くつすく拍手）

コルホーズにおける男女共産青年同盟員達について一言述べよう。同志諸君、青年はわれわれの將來であり、われわれの希望である。青年は、われわれ老人たちと交替しなければならぬ。青年は、勝利に輝く最後まで、われわれの旗幟を捧げつすけなければならぬ。農民の中には、古い重荷を負われ、古い生活の習慣と思ひ出で身動きのできない老人達が少からずいる。彼らが、必ずしも、黨およびツグエト権力と歩調を共にし得るものではないといふことは、わかりきつたことである。だが、わが青年はそうではない。青年は、古い重荷にわずらわされることは全くなく、かつ、彼らは、レーニンの遺訓を、何人よりもずつと容易に攝取しうるのである。しかして青年は、レーニン

の遺訓を、何人よりもすつと容易に攝取しうるからこそ、それだからこそ、彼らは、おくれているものと動搖しているものを、前進させることを使命としていたのである。もつとも、青年には知識がまだ十分でない。だが、知識は獲得しうるものである。今日彼らはそれをもつていなくとも、明日はそれをもつてあろう。ゆえに任務は、レーニン主義を學ぶことであり、そしてもう一度學ぶことにあるのである。男女共産青年同盟員同志諸君！ボルシエヴィズムを學びたまえ。そして動搖している人達を前進させたまえ！少くじやべり、多く働きたまえ。そうしたら諸君の仕事は、必ずうまく行くであらう。（拍手）

個人農について數言のべよう。この席上では、個人農については少ししか述べられなかつた。だがこのことは、世の中にもう個人農が存在しないということをも、まだ意味するものではない。否、そんなことを意味しはしない。個人農は存在しているし、かつ、彼らはわが未來のコルホーヅ員であるがゆえに、彼らを見無視することはできないのである。私は、個人農の一部が完全に墮落し、ヤミ取引に没頭したことを知っている。わがコルホーヅ員達が非常な嚴選の上で、個人農をコルホーヅの成員に採用し、また時には、全然彼らを採用しないということはおそろしくこれによつて説明されるのである。もちろん、これは正しいことであり、そこには何ら反對すべき點もあり得ないのである。だが、ヤミ取引もやらず、實直に勞働することによつて自己のバンをかせいでいるところの、個人農の、他のもつと大きな部分があるのである。これらの個人農は、恐らくコルホーヅに加入することをいとはしなかつたであらう。だが、一方においてはコルホーヅの道の正しさについての彼らの動搖、他方においては、現在、コルホーヅ員の間に存在する個人農に對する苛酷さが、彼らがコルホーヅに加入することを妨げているのである。

もちろん、コルホーズ員を理解し、かつ彼らの立場になつて考えることが必要である。この年月の間、彼らは、個人農の側からの少からぬ侮辱と嘲笑を十分たえ忍んできた。しかしながら、侮辱や嘲笑は、ここでは、決定的な意義をもつてはならないのである。侮辱されたことを忘れえず、自己の感情を、コルホーズの事業の利益よりも高くみるところの指導者は、悪い指導者である。もし諸君が指導者となることを欲するならば、諸君は個々の個人農が諸君にあげた侮辱を忘れなければならぬ。二年前に、私は、ヴォルガの寡婦の農民から手紙を受けとつた。彼女は、彼女をコルホーズに採用してくれないということを訴え、支持してくれるようにと私に要求したのである。私は、コルホーズに問合せた。コルホーズからは、彼女がコルホーズの集會を侮辱したので、彼らは、彼女をコルホーズに採用することができないのだ、と私に回答をよこした。これは一體どういうわけか？ それはこうだ。農民の集會で、コルホーズ員達がコルホーズに加入するように個人農に呼びかけた時に、當のこの寡婦は、この呼びかけに應じて立上り、裾を高くまくり上げ、ソラ、このコルホーズを受取つてくれといつてのけたのだ（愉快などよめき、哄笑）。彼女が正しからぬ行動をなし、かつ集會を侮辱したことは疑のないことである。だが、もしも一カ年後に、彼女が哀心から後悔し、自分のまがいを自認した場合にも、彼女をコルホーズに採用することを拒否してもよいであろうか？ 私は彼女を採用することを拒否してはならないと考える。私はこの由をコルホーズに書送つた。寡婦はコルホーズに採用された。さて、それからどうなつたか？ 彼女は、現在、コルホーズにおいて、殿ではなく最前列に立つて働いているのである。（拍手）

諸君、これこそ、もし指導者たちが、眞の指導者でありたいならば、彼らは、事業の利害がそれを要求する場合には、侮辱されたことなど忘れ去ることができなければならない、ということ物語る今一つの例である。

同じ様なことを一般個人農についてもいわなければならぬ。私は、嚴選してコルホーズに採用するというには反對しない。だが、私は、誰彼の差別なく、すべての個人農に對して、コルホーズへの道を閉鎖するということに反對である。これはわれわれの政策ではなく、ボルシェヴィキの政策ではない。コルホーズ員たちは、彼ら自身、最近まで個人農であつたことを忘れてはならない。

最後に、ベゼンチュクのコルホーズ員達の手紙について、數言述べよう。この手紙は公表されたから、諸君もそれを讀まれた筈である。手紙は論議の余地なく立派なものである。この手紙は、わがコルホーズ員達の中には、わが國の誇であるところの、コルホーズの事業に經驗のある、かつ階級意識のある組織者ならびに宣傳者達が少からずいるということを證言している。だが、この手紙には、どうしても同意することのできないところの正しくない箇所が一つある。問題はベゼンチュクの同志達は、コルホーズにおける自分達の仕事を、けんそんな、ほとんど取るにも足りない仕事として表現し、時々長廣舌を振る演説者や領袖の仕事を、偉大な、そして創造的な仕事であると表現していることである。これに同意することができるであろうか？ 否、同志諸君、どうしてもこれに同意することはできない。ベゼンチュクの同志達は、この點で一つの誤謬を犯しているのである。かれらはけんそんながゆえにこの誤謬を犯したのであるかも知れない。だが、そうだからといって、誤謬が誤謬でなくなるわけのものではない。領袖達が歴史の唯一の創造者と見なされ、労働者と農民が問題にされなかつた時代はすぎ去つた。國民と國家との運命は、今や領袖達のみによつて決定されるのではなく、何ものよりも先ず、そして主として幾百萬勤勞大衆によつて決定されるのである。さわざ立てず、口數少なく、工場を建設し、鑛山を開發し、鐵道を敷設し、コルホーズとソフホーズを建設し、生活上のあらゆる福祉を築き上げ、全世界に食物と衣服を與えている労働者と農民、この人々こ

を新しい生活における本當の英雄であり、かつ創造者なのである。わがベゼンチュクの同志達は、たぶんこのことを忘れていらっしゃるのだからである。人々が自分の力を過大評價し、かつ自分の功績を鼻にかげ始めるのはよろしくない。これは驕慢に導く。驕慢はよくないことである。だが、人々が自分の力を過少評價しはじめ、彼らの「けんそんな」、「目につかぬ」仕事が、實際においては歴史の運命を決するところの、偉大な、しかも創造的な仕事であるということを了解しないのは、もつと悪いことである。

私は、ベゼンチュクの同志達が、彼らの手紙に對する私のこの小さい訂正を承認されることを望むものである。

同志諸君、これで、私の演説を終りたいと思う。

（長く鳴り止まぬ拍手、やがて喝采となる。全員起立して、同志スターリンに挨拶を送る。「ウラー」の叫び。「同志スターリン萬歳、ウラー！ 先進的ホルホトズ員萬歳！ われらの領袖同志スターリン萬歳！」の叫び場内より響き渡る。）

ソヴェト同盟共産黨（ボルシエヴィキ）
中央委員會の活動に關する第十七回
黨大會への報告演説

——一九三四年一月二十六日——

一、世界資本主義のひき續く恐慌と
ソヴェト同盟の對外的地位

同志諸君！第十六回黨大會以來すでに三年餘を經過した。これは大して長い時期というのではない。だが、他のどんな時期よりも内容の豊富な時期であつた。最近十年間におけるいかなる時期も、この時期ほど諸事件に富んだ時期はなかつたと私は考へる。

經濟的領域では、これらの年はひき續く世界經濟恐慌の年々であつた。恐慌は工業を席捲したばかりでなく、全體として農業をも襲つた。恐慌は生産と商業の範圍内で荒れ狂つたばかりではなかつ

た。それはクレジットと貨幣流通の範圍にも及んで、各國間に設定されていたクレジット並に通貨關係をくつがえしてしまつた。従來、世界經濟恐慌は存在するか否かといふことが、まだあちこちで論争されていたとすれば、今ではもはやこのことを論争する者はない。なせならば、恐慌の存在とその荒廢的な作用とは、あまりにも明瞭だからである。今では論争はすでに他の問題、即ち恐慌からの活路は存在するか、それとも存在しないか、もし活路があるとすれば、將來どうすればよいか、ということについて行われているのである。

政治的領域では、これらの年は資本主義諸國間、また同様にこれら各國内部の諸關係が一層激化した年々であつた。極東における諸關係を激化させた日本の對中國戰爭と滿州占領、ヨーロッパにおける諸關係を激化させたドイツにおけるファシズムの勝利と復讐思想の勝利、軍備の増大と帝國主義戰爭準備とに新たな拍車を加えた日本及びドイツの國際連盟脱退、革命的危機が熟しつつあること、ファシズムは決して長続きするものではないことをさらにもう一度示したところのスペインにおけるファシズムの敗北、——このようなのが報告期間内におけるもつとも重要な諸事實である。ブルジョア的平和主義が、斷末魔に臨んで喘いでおり、軍備縮小の傾向が公然と、かつ端的に軍備充實擴張の傾向によつてとつて代られていることは何等不思議はないのである。

この經濟的動搖と軍事的政治的破局の荒れ狂う狂瀾怒濤の眞只中に、ソ同盟は、社會主義的建設の自己の事業と平和維持のための鬭争とをつすけながら、巖のようにひとり離れて毅然として立つている。彼方、即ち資本主義諸國において、今もなお經濟恐慌が荒れ狂つているのに、ソ同盟では、工業の領域においても農業の領域においても高揚が續いているのである。彼方、即ち資本主義諸國において、世界と勢力範圍との新再分割をめざす新しい戰爭への準備が熱病的に行われているのに、ソ同盟

は戦争の脅威に抗するまた平和のための系統的にして執拗な闘争を続けているのである。しかしこの領域でのソ同盟の努力が、何等の成功を収めなかつた、ということとはできないのである。

このようなのが、現時期における國際情勢の全貌である。

次に、資本主義諸國の經濟的・政治的情勢について、その基本的な資料の検討に移ろう。

一、資本主義諸國における經濟恐慌の動き

資本主義諸國における現在の經濟恐慌はともかく、この恐慌が最も長期にわたる、また最も長びいた恐慌であるという點で、同じ様なすべての恐慌とは異なっている。以前には恐慌は、一年乃至二年で終結したものであつたが、現在の恐慌はすでもう足かけ五年もつすいており、年と共に資本主義諸國の經濟を荒廢させ、その前の年々に溜めこんだ脂肪を消盡させているのである。この恐慌が、すべての恐慌中で最も激烈なものであるということに、何等の不思議もないのである。

現代の工業恐慌の、かつてないほど長続きしているこの性格は、何によつて説明されるか？

まず第一に、それは、工業恐慌が一つの例外もなくすべての資本主義諸國を襲つており、一國が他の國を犠牲として駆引することを困難ならしめていくということによつて説明される。

第二に、それは、工業恐慌が、例外もなくすべての農業國、半農業國を襲つた農業恐慌と絡み合つて、工業恐慌を複雑にし、深刻化せざるを得なかつたということによつて説明される。

第三に、それは、この時期に農業恐慌が激化して、牧畜をも含めた農業のあらゆる部門を襲い、農業を頽廢に導き、機械を使用した労働は手の労働にうつり、トラクターは役馬にとつて代えら

れ、人造肥料の使用は極度に縮減され、時としては全くこれを使用しないところまで立ち至り、このために工業恐慌は、さらに長引くに至つたということによつて説明される。

第四に、それは、工業に君臨している獨占カルテルが、高物價を維持しようと努力していること、即ち、恐慌を特に不健全ならしめ、在庫品の賣行きを妨げているところの、事情によつて説明される。

最後に、それは、——そしてこれが主要なものである——資本主義が主要な諸國家においても、諸植民地と諸隷屬國においても、もはや戦前と十月革命前に持つていたような力と牢固さを持つていず、また持つことができず、資本主義諸國の工業が、帝國主義戦争の遺産として、企業の慢性的操業不足と、もはや何とも始末することができない數百萬の失業者軍を受け繼いだところの、資本主義の一般、危機の情勢のもとに、工業恐慌が爆破したということによつて説明される。

このようなのが、現在の工業恐慌が非常に長びく性格を決定したところの事情なのである。

この恐慌が生産と商業の範圍内に局限されず、クレジット制度・通貨・債務の範圍等々をも襲い個々の國と國との間、また同様に個々の國における社會的諸グループ間に傳統的に制定されている諸關係を破壊したという事實もまた、これらの事情によつて説明されるのである。

この場合、商品の値段の下落が大きい役割を演じた。獨占カルテルの抵抗にもかかわらず、値段の下落は不可抗力によつて益々ひどくなつた。しかも値段は、組織化されていない商品所有者、即ち農民、手工業者、小資本家の商品においてまず第一に、かつ最もひどく下落し、そして、組織化された商品所有者、即ちカルテルに結合した資本家の商品の値段は、漸次に、かつより少ない程度においてのみ下落した。値段の下落は債務者（産業家、手工業者、農民等）の状態を堪え難いものとし、これ

に反して債権者の状態を前例のないほど特權的なものたらしめた。かかる状態は、會社や個々の企業家共の極めて大規模な破産に導かざるを得なかつたし、また事實破産に導いたのであつた。かくして最近の三年間に、北米合衆國、ドイツ、イギリス、フランスにおいて數萬という株式會社が、この原因によつて没落したのであつた。株式會社の破産について、通貨價格の下落が起り、これは債権者の状態を幾分か樂にした。通貨價格の下落について、對外債務並に國內債務の、國家によつて合法化された不拂が起つた。ドイツのダルムスタット、ドレスデン兩銀行、オーストリアのクレジット・アンシユタルトのような銀行、スエーデンのクロイガー・コンツェルン、北米合衆國のインスル・コンツェルン等のようなコンツェルンの瓦解は、何人にも知られているところである。

クレジット制度の土台を震撼させたこれらの現象について、クレジット並に外債に對する支拂の停止、連合國間の負債償還の停止、資本輸出の停止、外國貿易の新たな減退、商品輸出の新たな減退、外國市場獲得の鬭争の激化、各國間の商業戰、それからダンピング、これらが起らざるを得なかつたし、また事實起つてゐることは分りきつたことである。然り、同志諸君、ダンピングだ。私はここでは架空的なソヴェト・ダンピングについていつてゐるのではない。このソヴェト・ダンピングについては、ごく最近、ヨーロッパ及びアメリカのれつきとした議會の若干のれつきとした議員諸賢が聲をからしてわめきたたてたのであつた。ここで私は、現在殆どすべての「文明」諸國家がやつており、これについては、これら勇敢にしてれつきとした議員諸賢が、思慮深く沈黙を守つてゐる實際のダンピングのことをいつてゐるのである。

生産の圏外で起つたところの、工業恐慌に伴つたこれらの破壊的な現象が、こんどは工業恐慌を

深化せしめ、複雑ならしめるという意味で、工業恐慌の経過に反作用せざるを得なかつたということもまた、分りきつたことである。

工業恐慌の動向の全貌は以上の通りである。

次に報告期間における工業恐慌の動きを示す若干の數字を、政府発表の資料から舉げて見よう。

一九二九年に對する百分率で示した工業生産高（一九二九年を一〇〇として）

	一九三〇年	一九三一年	一九三二年	一九三三年
ソ 同 盟	一二九・七	一六一・九	一八四・七	二〇一・六
北米合衆國	八〇・七	六八・一	五三・八	六四・九
イギリス	九二・四	八三・八	八三・八	八六・一
ド イ ツ	八八・三	七一・七	五九・八	六六・八
フ ラ ン ス	一〇〇・七	八九・二	六九・一	七七・四

諸君も見られる通り、説明するまでもなく、この表自身が萬事を明かに物語っている。

主要な資本主義諸國の工業は、一九二九年の水準に比較して年々減退し、ただ一九三三年度においてのみ、やや恢復したが、まだ一九二九年の水準までは達していないのに、ソ同盟の工業は、年々成長して不斷の高揚の過程をたどっているのである。

主要な資本主義諸國の工業は、一九二九年の水準に比較して、一九三三年末のその生産高が平均二五%以上の減退を示しているのに、この時期におけるソ同盟の工業は、二倍以上即ち一〇〇%以上増大したのである。(拍手)

この表から判断して、これらの四つの資本主義國の中で、イギリスが一番具合のよい状態にあるように見えるかも知れない。だが、それは全く正しいとはいわれない。今吾々がこれら諸國の工業を取り、これを戦前の水準と比較するならば、やや異なつた情景がえられるのである。

次に、これに對應する表を掲げよう。

戦前の水準に對する百分率で示した工業生産高(一九一三年を一〇〇として)

					一九二九年	一九三〇年	一九三一年	一九三二年	一九三三年
ソ	同	盟			一九四・三	二五二・一	三一四・七	三五九・〇	三九一・九
北	米	合	衆	國	一七〇・二	一三七・三	一一五・九	九一・四	一一〇・二
イ	ギ	リ	ス		九九・一	九一・五	八三・〇	八二・五	八五・二
ド	イ	ツ			一一三・〇	九九・八	八一・〇	六七・六	七五・四
フ	ラ	ン	ス		一三九・〇	一四〇・〇	一二四・〇	九六・一	一〇七・六

諸君も見られるように、イギリスおよびドイツの工業は、依然としてまだ戦前の水準に達していないが、北米合衆国およびフランスは數パーセント戦前の水準を凌駕している。然るにソ同盟は戦前の水準に比較して、この期間に工業生産高を二九〇パーセント以上高めた、即ち増大したのだ。(拍手)だが、この二つの表からさらにもう一つの結論が引出される。

主要な資本主義諸國の工業が、一九三〇年以來、特に一九三一年以來常に減退し、一九三二年にはそのとん底にまで達したのに、一九三三年には、これらの國の工業は、やや恢復し上昇するにいたつた。もしも一九三二年および一九三三年の月別の資料をとつて見るならば、これらの資料はこの結論をもつとよく確證するであろう。何となれば、これらの資料は、これらの諸國の工業が一九三三年中を通じてその生産高の動搖があるにもかかわらず、一九三二年夏に到達したとん底の水準にまで下る傾向を示さなかつたことを物語つてゐるからである。

このことは何を意味してゐるか？

このことは、主要な資本主義諸國の工業は、見たところ、すでにとん底をつき、一九三三年中にも、再びこの底まではさがらなかつたことを意味してゐる。

若干の人々は、この現象を専ら軍事・インフレ景氣のような人爲的要因の影響に歸せしめようとしてゐる。軍事・インフレ景氣が、この場合少なからざる役割を演じてゐることは疑うことができない。

このことは、この人爲的要因が、若干の工業部門、主として軍事工業部門の多少の好況の、主要な、決定的な力をなしているところの日本に對しては、特に正しいのである。だが、すべてを軍事・インフレ景氣によつて説明することは甚だしい誤謬であろう。私が特徴つけた工業における若干の變動が、個々の

また偶然に取りあげた地方においてはではなく、すべての、もしくは通貨の安定している國も含めて殆どすべての工業國において見られるということからだけでも、かかる説明は正しくないのである。軍事・インフレ景氣と並んでここに資本主義の内部的經濟的力の作用もまた行われていることは明白である。

資本主義は、労働者を犠牲にすることによつて、即ち労働の強度を増大させて一層ひどく彼等を搾取することによつて、自作農を犠牲にすることによつて、即ち彼等の労働の生産物、食料品並に部分的には原料に對して出来るだけ低廉な値段をつけるという政策を遂行することによつて、植民地並に經濟的に弱い國の農民を犠牲にすることによつて、即ち彼等の労働の生産物、主として原料、そして次いでは食料品の價格をさらに大幅に引き上げることによつて、工業の状態をやや樂にすることに成功したのであつた。

このことは、吾々が恐慌から、工業の新たな高揚と新たな繁榮とをそのあとでもたらす普通の不況への過渡期に入つたことを意味するであろうか？ いや、そんなことを意味しない。いずれにしても現在においては、資本主義諸國における工業の高揚が始まりつつあることを物語るであろうような資料、即ち、直接或は間接の資料は存在しないのである。それのみではない。すべての點から判断して見るに、少くとも近い將來においてはこんな資料が出現する筈はない。それはありえないことである。なせならば、資本主義諸國の工業がいくらかでも目に見えて向上することができないようにして一切の不利な條件が作用し續けているからである。問題となつてゐるのは、資本主義のひき續く一般の危機、——この一般的危機の情勢の中で、經濟恐慌が進行してゐるのだ——、企業の慢性的操業不足、

慢性的な大衆的失業、工業恐慌と農業恐慌とが絡み合っていること、普通ならば高揚の開始を豫告する固定資本の多少とも目に見えた更新の傾向が存在しないこと、等々これである。

今や吾々が、最もひどい工業沈没から、工業恐慌のどん底から不況への過渡期にあること、だがそれは普通の不況ではなく、特殊な性格の不況、即ち工業の新しい高揚と繁榮とは導かず、また最もひどい沈没にも工業を引きもどさないような不況への過渡期にあることは明かなことである。

二、資本主義諸國における政治情勢の尖鋭化

長引く經濟恐慌の結果として、資本主義諸國の政治情勢は、これらの國の内部においてもまた相互關係においても、今までかつてなかつた程の尖鋭化を呈した。

外國市場獲得鬭争の尖鋭化、自由商業の最後の殘滓の根絶、禁止關稅、商業戦争、爲替戦争、デフリング及び經濟政策における極端な民族主義を表示する他の多くの類似の方策は、各國間の關係を極度に尖鋭化し、軍事的衝突の地盤をつくり、より強力な國家の利益のための世界並に勢力範圍の新再分割の手段としての戦争を日程にのぼせた。

中國に對する日本の戦争、滿洲の占領、日本の國際連盟脱退、中國北部への進軍等は、情勢をさらに一層尖鋭化した。太平洋覇權のための鬭争の激化と日本、北米合衆國、イギリス、フランスにおける陸海の軍備擴張とは、情勢のかかる尖鋭化の結果なのである。

ドイツの國際連盟脱退と復讐の幻影とは、ヨーロッパにおける情勢の尖鋭化と軍備擴張とに新しい衝動を與えた。

ブルジョア平和主義が、今やみじめな存在を辛うじて保つており、軍備縮小のおしやべりが軍備充實擴張についての「實務的な」論議によつてとつてかわられているということは、何等不思議ではない。

一九一四年におけると同じ様に、好戦的な帝國主義の諸政黨、戦争と復讐との政黨が、再び前面に進出してゐる。

事態は明かに、新しい戦争にむかつて進んでゐる。

これら要因の作用の結果として、資本主義諸國の國內情勢は、さらに一層尖鋭化してゐる。四年にわたる工業恐慌は労働者階級を疲弊させ、絶望に陥れた。四年にわたる農業恐慌は、主要な資本主義諸國のみならず、特に、隷屬國並に植民地における財産を持たない農民層を完全に零落させた。失業者数を控え目に示すことを目的としたありとあらゆる統計上でのごまかしがやられてゐるにもかかわらず、ブルジョア官廳の公けの資料によつても、失業者数は、ヨーロッパの他の諸國についてはすでにいうまでもなく、イギリスにおいては三百萬、ドイツでは五百萬、北米合衆國では一千萬に達してゐる、ということは事實である。これにその數、一千萬をこえる部分的失業者を加え、零落した數百萬の農民大衆を加えて見給え、そこで諸君は、勤勞大衆の窮乏と絶望との大體の情景を見ることができるのであらう。民衆は資本主義に對して強襲をなすまでにはまだ行つていない。だが資本主義に對する強襲の觀念が、大衆の意識の中に成熟しつつあるということ、それは恐らく疑うことができないであらう。例えばファシズム體制を倒したスペインの革命、中國のブルジョアジーと外國ブルジョアジーとの連合した反革命も、これを抑止することができなところの、中國におけるソヴェト地域の擴大のような事實だけでも、このことを雄辯に物語つてゐるのである。

資本主義諸國の支配階級が、壓迫者に對する労働者階級の闘争において、労働者階級が利用できらざらう議會政治とブルジョア民主主義との最後の殘滓を極力排除し、もしくは無に等しいものにしてしまひ、共産黨を地下に追い込み、自己の獨裁を維持するための公然たるテロ的手段方法をとるにいたつてゐる事實もまた、本來、これによつて説明されるのである。

對外政策の主要な要素としての排外主義と戦争準備、將來の戦線の後陣を堅固にするための必要手段としての國內政策の領域における労働者階級抑壓とテロ——これこそ今や現代の帝國主義的政治家の興味を特に惹いてゐるところのものである。

好戰的なブルジョア政治家連中の間で、ファシズムが今や最も評判の流行品になつてゐることは不思議なことではない。私はファシズム一般についていつてゐるのみではなく、どれよりも先ずドイツ型のファシズムについていつてゐるのであるが、それは、不正にも國民社會主義と、自稱してゐる。不正にも、というのは、最も注意深くしらべて見たところで、その中に社會主義の一原子すら發見することは出来ないからである。

これと關連してドイツにおけるファシズムの勝利をもつて、労働者階級の弱さの兆候であり、かつ、ファシズムに道を開いた社會民主黨の労働者階級に對する裏切行爲の結果であるとのみ見るべきではない。それは、ブルジョアジーの弱さの兆候として、ブルジョアジーが議會政治とブルジョア民主主義という古い方法では、もはや支配し得なくなり、その結果、彼等は、國內政策において、テロ的支配方法を取らざるを得なくなつた兆候として、即ちブルジョアジーが、もはや平和的な對外政策に基いては、現在の情勢からの活路を見出しえなくなつており、その結果、彼等が戦争政策を取らざるを得なくなつた象徴としても見なければならぬのである。

このようなのが、現在の情勢なのである。

諸君も見られるように、事態は現在の状態からの活路としての新しい帝國主義戦争にむかつて進んでいるのである。

勿論、戦争が眞實の活路をもたらすことができると考えらるべき根據は何等ないのである。反對に、戦争は情勢を一層混亂せしめざるを得ない。そればかりではない。戦争はたしかに革命を勃發せしめ、恰も第一次帝國主義戦争の進行過程に見られたように、幾多の國における資本主義の存在自體を危くするにいたるであらう。しかして、第一次帝國主義戦争の經驗があるにもかかわらず、もしもブルジョア政治家連が、溺るる者は藁をもつかむというたとえのように、それでもなお戦争にすがりつくとするならば、これは彼等が絶望的に混亂して、抜け路のない袋小路にはいり込み、眞つさかさまに深淵に飛び込むことをも辭さないということの意味する。

ゆえに現在ブルジョア政治家連の間でたくらまれているところの、戦争をでつち上げる計畫を、極く簡略に觀察してみること、別に妨げとはならないであらう。

あるブルジョア政治家連は、列強の内の一つに對して戦争をでつち上げなければならぬと考えている。彼等はこの國に破滅的な敗北を蒙らせて、この國の犠牲によつて自己の状態万端を調整しようと考えている。彼等がかかる戦争をでつち上げたものと同じよう。その結果はどうなるであらうか？

周知のように、第一次帝國主義戦争の時にも、列強のうちの一つ、即ちドイツを破滅させ、ドイツを犠牲として利益を得ようと彼等は欲したのだった。ところでその結果はどうであつたか？ 彼等はドイツを絶滅させることができず、かえつてドイツに、戦勝者に對する非常な憎惡の感情を植えつけ、復讐のための豊富な地盤をつくりあげた。この憎惡と復讐とは、彼等自ら料理したいかにもひどい雜炊

であるが、彼等は今までにもまだ嘍りつくすことができない状態であり、いやおそろくまだ急には嘍りつくすことは出来ないであろう。しかして、その代りに彼等はロシアにおける資本主義の破壊と、ロシアにおけるプロレタリア革命の勝利と、そして——當然の歸結として——ソヴェト同盟を得たのであつた。第二次帝國主義戦争が第一次帝國主義戦争よりも『よりよい』結果を彼等に與えるだろうという保障がどこにあるか？むしろ、その反對を豫想する方がもつと間違ひのないことではないだろうか？

第二のブルジョア政治家連は、軍事的には弱い、市場という點では廣大な國、例えば中國に對して戦争をでつち上げなければならぬと考へている。このような國は、そののみならず、本來の意味では國家と稱することができないものであり、むしろ『組織されていない地域』にすぎないものであつて、強力な國家によつて併合されることを必要としているとみなされている。彼等は、明かに中國を徹底的に分割し、中國の犠牲によつて自己の状態萬端を調整しようと欲しているのである。彼等がかかる戦争をでつち上げたものとしよう。その結果はどうなるであらうか？

十九世紀の始めには、イタリヤとドイツを、丁度現在中國に對するやうに、即ち國家としてではなく『組織されていない地域』として兩國をみなし、かつ奴隸化したといふことは周知のことである。ところでその結果はどうであつたか？周知のやうに、その結果は、ドイツ及びイタリヤの獨立戦争と、これらの國の獨立國家への結成といふことになつた。またその結果、これらの國の人民の心中に、壓迫者に對する憎惡を激成させることとなり、その結果は今までもまだ除去されておらず、かつ、おそろくまだ急には除去されないであろう。そこで、これと同じことが中國に對する帝國主義者の戦争の結果として起らない、という保障がどこにあるか？という問題がおこる。

第三のブルジョア政治家連は「高等な人種」例えばゲルマン「人種」は「下等な人種」、まず第

一にスラヴ人種に對して戰爭をでつち上げなければならぬ、かかる戰爭のみが活路をもたらしうことができる。なせならば、「高等な人種」は「下等な人種」を有爲のものたらしめ、これを支配すべき使命をもつてゐるからだ、と考へてゐる。まるで天と地ほども科學から遠く離れてゐるこの奇態な理論が、即ちこの奇態な理論が實踐に移されたとしておこす。その結果はどうなるであらうか？

古代ローマは現在のゲルマン人及びフランス人の祖先を、現在「高等人種」の代表者がスラヴ種族を視てゐると丁度同じようにみたということは周知のことである。古代ローマはゲルマン人及びフランス人を「下等人種」、「野蠻人」として鼻であしらひ、「高等人種」、「大ローマ」に永久に従屬すべく運命づけられたものだとしたことは周知のことである。尤もこれは、吾々の間だけの話であるが、古代ローマはこういうことをいう若干の根據をもつていたが、今日の「高等人種」の代表者達についてはそういうことができないのである（萬雷のよゝな拍手）。ところでその結果はどうであつたか？ 非ローマ人、即ちすべての「野蠻人」は結束して共同の敵に當り、強襲を以てローマを倒してしまふにいたつた。そこで、現代の「高等人種」の代表者等の過大要求が、これと同じみじめな結果に導かないという保障がどこにあるか？ ベルリンのファシストの文筆家たり、政治家たる連中がローマにおける老練の上ない征服者よりもつと幸福であらうという保障がどこにあるか？ むしろその反對を豫想する方が、もつと間違ひのないことではないだろうか？ という問題がおこる。

最後に、第四のブルジョア政治家連は、ソ同盟に對して戰爭をでつち上げなければならぬと考へてゐる。彼等は、ソ同盟を撃破し、その地域を分割し、それを犠牲として利益を得ようと思つてゐる。日本のある軍閥連中だけがこんなふう考へてゐるのだ、と推察することは誤謬であらう。ヨーロッパにおける若干の國家の政治的指導者の間にも、このような計畫がたくらまれてゐることをわれわれはよ

く知つてゐる。これらの紳士諸君が、言葉だけでなしに、それを行動に移すとしておこう。その結果はどうなるであろうか？

この戦争がブルジョアジーにとつて、もつとも危険な戦争であろうといふことは、何人も疑ふことのできないところであろう。この戦争は、ソ同盟の人民が革命の成果を守るために生命をなげ出して戦うであろう、ということからだけではなく、最も危険な戦争であろう。すなわち、それはさらに、戦争が戦線においてばかりでなく、敵の銃後においてもまた戦われるであろうといふことによつて、ブルジョアジーにとつて最も危険なものとなるであろう。ブルジョアジーは、ヨーロッパ及びアジアにおけるソ同盟の労働者階級の多数の友人達が萬國の労働者階級の祖國に對して犯罪的な戦争をはじめた自國の抑壓者を、背後から攻撃しようとする努力するだろうといふことをブルジョアジーは疑わないでよいのである。そしてかかる戦争の翌日に、今日「神の恵みによつて」無事に支配してゐるところの彼等に縁の近い若干の政府が、地上からその姿を消してしまつたからといつて、願くは、ブルジョアの紳士諸君が吾々にその罪をきせないことを（萬雷のような拍手）。

諸君も思ひ出すであろうが、ソ同盟に對するかかる戦争は、すでに十五年前にもあつた。周知のように、皆に祭り上げられてゐるチャーチルは、當時この戦争に詩的な言い現し方、即ち「十四國家の進軍」といふ名をつけたのであつた。諸君は勿論、この戦争がわが國のすべての勤勞者を、何物をも犠牲として顧みない戦士、外敵に對して生命を投げ出して自己の労働者農民の祖國を防衛した戦士としての統一された陣營を結集させたことを思ひ起すであろう。この戦争がどういふ風に終つたかを諸君は知つてゐる。この戦争はわが國から武力干渉者を驅逐し、ヨーロッパに革命的「行動委員會」を結成したことをもつて終つた。ソ同盟に對する第二の戦争が、攻撃者の完全な敗北に、ヨーロッパ並にア

ジアの幾多の國における革命とこれらの國のブルジョア・地主政府の壊滅に導くだろうということを疑うことができるであろうか。

このようなのが錯亂状態に陥つたブルジョア政治家連の戦争計畫なのである。

諸君も見られるように、彼等は頭腦もすぐれていなければ膽力もすぐれていないのだ。(拍手)
だが、ブルジョアジーが戦争の道を選ぶならば、四年間の恐慌と失業とによつて絶望状態に落ちこんでいる資本主義諸國の労働者階級は、革命の道を進むようになるであろう。このことは、革命的危機が成熟しつつあること、今後も成熟して行くであろう、ということの意味する。而してブルジョアジーが彼等の戦争の企圖に深く捲き込まれれば捲き込まれるほど、彼等が労働者階級並に勤勞農民に對してテロ的闘争手段を益々頻繁に取るようになるほど、革命的危機はより急速に成長増進するであろう。

ある同志達は、革命的危機が到来したため、ブルジョアジーは不可避的に活路のない状態に陥らざるを得ないし、したがつて彼等の末路は既に豫定されており、それゆゑに革命の勝利はすでに保障されており、彼等はブルジョアジーの倒壊を待ち、そして勝利の決議文を書くことだけをすればいいのだと考へている。これは甚だしい間違である。革命の勝利は決して自らやつて来るものではない。吾々はこの勝利を準備し、これを闘い取らなければならない。しかしてこの勝利を準備し、獲得するということとは、強力なプロレタリアの革命的黨のみがよくないし得るところのものである。情勢は革命的であり、ブルジョアジーの権力は全く根底からぐらついているにもかかわらず、大衆を指導し権力を奪取するため十分に強力な權威あるプロレタリアートの革命的黨が存在しないために、革命の勝利が来ないというようなきもある。これと同様な「場合」があり得ないと考へることは、愚かなことであろう。

これと関連して、コミンテルンの第二回世界大會で、レーニンがいつた革命的危機についての豫言者的な言葉を想起することも、むしろ餘計なことではないであらう——

「吾々は今や、わが革命的行動の基礎としての革命的危機についての問題にまで到達したのである。この點で吾々は、何よりもまず二つの一般に普及されている過誤を指摘しなければならぬ。一方、ブルジョア經濟學者達は、この危機を、イギリス人の上品な言い現わし方にならつて、單純な「不安」として片付けている。他方、革命家達は、危機からの活路は絶対にないといふことを證明しようと時には努力している。だがこれは間違ひである。絶対に活路のない情勢などというものはありえないことである。ブルジョアジーは、益々圖々しくなり、かつ途方にくれた強奪者のように振舞つて、馬鹿なことをあとからあとへとしでかし、情勢を尖鋭化させて自己の没落をはやめる。これはみな、そのとおりである。だがブルジョアジーにとつては、何らか小さい讓歩によつて被搾取者中のいずれかの少數者を眠り込ませ、被壓迫者及び被搾取者のいずれかの部分の何らかの運動もしくは蜂起を鎮壓すべき何等の可能性も、絶対にないといふことを「證明」することはできないのである。前以て「絶対に」活路のないことを「證明」しようとする試みるなどということは、これは空虚な術學であるか、または概念や言葉の遊戲であらう。この問題、またこれと同じ様な問題に對する眞實の「證明」は、ただ實踐のみが與えることができるのである。全世界のブルジョアの制度は、極度にひどい革命的危機を體驗している。今や、革命的諸黨の實踐によつて、これらの革命的黨には、この危機を革命的成功、革命の勝利のために利用できる意識性、組織性、被搾取者大衆との結合、決意性、能力、これらを十分にもつてゐることを「證明」しなければならぬ。」（レーニン全集、第二五卷、三四〇—三四一頁）

三、ソ同盟と資本主義諸國家との關係

ソ同盟が、軍事的企圖の毒氣の立ちこめているこの雰圍氣の中にあつて、自己の平和的政策を遂行することがいかに困難であつたかといふことは、容易に理解されるところである。

多くの國々を捲き込んだ戰爭を前にしてのこの狂氣じみた環境の中にあつて、ソ同盟はこの數年間、戰爭の脅威と闘い、平和維持のために闘争し、とも角、平和維持に賛成する諸國に呼應し、戰爭を準備しこれを挑發する國々を暴露してその假面を引き剥いで、確乎かつ毅然として平和的立場を守り續けたのであつた。

平和のためのこの困難にして複雑な闘争において、ソ同盟は何をたのみとしたか？ 即ち――

(イ) 自己の益々増大する經濟的、政治的力を。

(ロ) 平和の維持に最も強い利害關係を持つてゐる萬國勞働者階級の幾百萬の大衆の精神的支持を。

(ハ) 何等かの動機から平和が破壊されることを利益とせず、ソ同盟のような確實な取引先との通商關係を發展させることを欲してゐる國々の思慮分別を。

(ニ) 最後に、國外からの襲撃に對してわが國を防衛する決意を持つわが光榮ある軍隊を。

この基礎に立つて、隣接諸國家との不可侵協約並に侵略者決定に關する協約の締結をめざす吾々のカンバが起つたのであつた。このカンバが成功したといふことを諸君は知つてゐる。周知のように、不可侵協約は、西方並に南方にあるわが隣接諸國家の大部分――その中にはフィンランド及びポーランドもある――との間に締結されたばかりでなく、フランス、イタリアのような國とも締結された

し、そして侵略者決定に關する協約は、小協商國をも加えて、これらの隣接諸國家との間に締結された。

同じくこの基礎に立つて、ソ同盟とトルコとの間の友好關係は強化され、ソ同盟とイタリヤとの間の關係は改善され、疑いもなく満足なものとなり、フランス、ポーランドその他のバルチツク沿海諸國家との關係も改善され、北米合衆國、中國、等々との關係が復活されたのであつた。

ソ同盟の平和政策の成功を反映している幾多の事實の中から、疑いもなく極めて重大な意義をもつ二つの事實を、ここに取り出して、特に指摘しなければならぬ。

一、第一に、私は最近に起つたソ同盟とポーランド、ソ同盟とフランスとの間の關係の好轉を考慮していつているのである。周知のように、過去においては、わが國とポーランドとの間の關係は、あまりよくはなかつた。ポーランドでわが國家の代表者達が殺害された。ポーランドは、ソ同盟に對する西歐諸國家の堡塞だと自己をみなしていた。ありとあらゆる帝國主義者共は、ソ同盟に對する軍事的襲撃をする場合における先進部隊としてポーランドをたのみにしていたのだ。ソ同盟とフランスの關係も、これよりよくはなかつた。ソ同盟とフランスとの間の相互關係がどうであつたかという記憶を呼び起すためには、モスクワで行われた妨害工作者ラムジン一派の裁判における歴史中の諸事實を想起するだけで十分である。しかして、これらの望ましくない關係はしだいに消滅し始めた。これらの關係は親近關係という言葉以外では言い表すことのできない別な關係によつて取つて代わられた。

問題は、わが國がこれらの國と不可侵協約を締結したということのみにあるのではない。勿論、この協約それ自體も極めて重大な意義をもつてはいるが、何よりもまず大切なことは、相互の疑惑によつて毒されていた雰圍氣が、晴々とし始めたということである。勿論、このことは、起りかけた接

近の過程が、事業の終局的成功を保障するに足るほど十分堅實なものであると見なすことができるということを意味しはしない。例えば、反ソヴェト的氣分がまだまだ強いポーランドにおいて、思いがけない事件並に政策のジグザグが起り得ないことなどと決して考へてはならないのである。だが、將來における結果いかんは別として、吾々の關係が好轉したことは、平和の問題を改善するための一要因として指摘し、かつそれを前面に押し立てるに値する一つの事實である。

この轉換の理由はどの點にあるか？ またこれは何を動機としてゐるか？
何よりも先ずソ同盟の力と威力の増大によつてである。

現時においては、弱い者は重要視されないのが常であり、ただ強いものだけが重要視される。さらにドイツにおける復讐の氣分と帝國主義的氣分の増大を反映しているドイツの政策上における若干の變更によつてである。

あるドイツの政治家連は、この點に關連して、ソ同盟は今やフランスとポーランドの方への親善方針を取つてゐるとか、ソ同盟はヴェルサイユ條約の反對者から、その支持者になつたとか、この變化はドイツにファシスト支配が確立されたことによつて説明されるとかいつてゐる。だが、これはほんとうではない。勿論、吾々はドイツにファシストの支配が確立されたことを喜ぶものでは決してない。だがここでは、例えばイタリヤにおけるファシズムが、ソ同盟がこの國と最も親善な關係を確立することを妨げはしなかつたということからいつても、問題はファシズムにあるのではない。問題はまた、ヴェルサイユ條約に對する吾々の態度の假想的な變化などというところにあるのでもない。ブレスト媾和の恥辱を體驗した吾々にとつて、ヴェルサイユ媾和條約をほめあげるなどということのある筈はないのである。吾々は、この條約のために界世が新しい戰爭の深淵に陥れられることだけには賛成できない

のである。丁度同じことを、ソ同盟のありもしない方針の變更ということについてもいわなければならぬ。わが國はドイツを好みとする方針をとつたこともないし、それと同様に、わが國はポーランド並にフランスを好みとする方針をとつてもいない。吾々は過去において、ソ同盟を、じかりただソ同盟のみを好みとしてきたし、また現在においても好みとしているのだ（暴風のような拍手）。そしてもしソ同盟の利益が、平和の破壊を要望しないすれかの國との接近を要求するならば、吾々は躊躇せずまっすぐにこれらの國との接近の道を進むであらう。

いや問題はそこにあるのではない。問題は、ドイツの政策の變化ということにあるのだ。問題は、現在のドイツの政治家連がまだ政權につく前から、そして政權についた後には特に、ドイツにおいては二つの政治方針、即ち、ソ同盟とドイツとの周知の條約に反映されたところの古い政策と、一時ウクライナを占領し、レーニングラードへの進軍を企て、バルチック諸國にかかる進軍の足場に變えてしまつたドイツの舊カイザーの政策を大體において想起させるところの「新しい」政策との間に闘争が始まつたということにあるのである。しかしてこの「新しい」政策は、明白に古い政策に打ち勝つていたのである。「新」政策の主張者共が萬事に優勢を示し、古い政策の味方が不遇の地位に立たされていることを偶然と考えることはできない。フーゲンブルグのロンドンでの周知の演説もまた偶然ではない。それと同じく、ドイツにおける支配黨の對外政策の指導者であるローゼンベルグの同じほど周知の聲明も偶然ではないのである。同志諸君、これが問題のあるところである。

二、第二に、私はソ同盟と北米合衆國との正常的關係の復活ということを考慮していつている。このことが國際關係の體制全體にとつて極めて重大な意義をもつということは、何等疑うことはできない。だが問題は、この國交の復活が平和保持の公算を高め、兩國間の關係を改善し、兩國間の通商

關係を強化させ、相互的協力の土台をつくり上げるといふことだけにあるのではない。問題は、北米合衆國が色々の國で、ありとあらゆる反ソヴェト的傾向のための城塞とみなされていた舊時と、兩國の相互的利益へ導く道から、この城塞を自ら進んで取り除いた新しい時期との間に、このことが境界標を打ち建てたという點にあるのである。

これが、ソヴェト同盟の平和政策の成功を反映している二つの、最も主要な事實なのである。しかしながら、報告期間において、わが國では萬事が順調に進展したと考えることは正しくないであろう。否、わが國では、萬事が順調に進展したわけでは決してないのである。

英國が行つた壓迫、わが國の輸出に對する輸入禁止、わが國內問題に干渉し、それによつてわが國をさぐり、わが國の抵抗力を試め、うとした企てだけでも想起して見よ。尤もこの企てによつて何等得るところがなく、輸入禁止もやがて撤廢されたが、この襲撃の不愉快なあと味は、まだなお、英國とソ同盟との間の關係——通商條約についての交渉も含めて——についてのあらゆる問題上に感じられている。しかしながらソ同盟に對するこれらの襲撃を、偶然的なものと考えてはならない。英國の保守黨の一部が、かかる襲撃をやらすにはやつて行けないのだということは周知のことである。そしてかかる襲撃が偶然でないからこそ、將來においても彼等がソ同盟を襲撃し、ありとあらゆる脅威をかもし出し、ソ同盟に害をもたらずであろう等々ということを、吾々は考慮しなければならぬのである。

重大な改善を必要としているソ同盟と日本との間の關係もまた考慮しないわけにはゆかない。

日本がソ同盟に劣らざる必要としているところの不可侵條約の調印を、日本が拒否したことは、吾々の間の關係の領域において萬事好都合には運んでゐるわけではないことを、もう一度裏書している。東支鐵道に關する交渉の中絶についても——これは、ソ同盟の罪で起つたのではない、——また日本の手

先共が東支鐵道に對して許すべからざることをしでかし、不法にも東支鐵道のソヴェト従業員を逮捕した等々のことについてもおなじことをいわなければならぬ。日本軍部のある一部が、軍部の他の一部の明かな賛同を得て、ソ同盟に對する戦争と、沿海州の占領との必要なことを出版物上で公然と宣傳しており、一方日本政府は、戦争の點火者に警告を與える代りに、それは政府の關したことはない、という顔をしてゐることについては、私はもはや述べない。かかる事情が、不安と確信の缺如との雰囲気を生ぜざるを得ないことは了解に難くないことである。勿論、吾々は將來も執拗に平和政策を遂行し、日本との關係を改善できるように努力するだろう。なせならば、吾々はこれらの關係を改善することを欲しているからである。だがこの點では、萬事が吾々に依存してゐるわけではない。それ故に、吾々はそれと同時に不測の事件からわが國を防衛し、襲撃からわが國を擁護する用意が、いつでも出來てゐるようになるためには、あらゆる方策を講じなければならないのである。(暴風のよ
うな拍手)

諸君も見られる通り、わが平和政策の成功と並んで、吾々は幾多の惡現象にも直面してゐるのである。

このようなのが、ソ同盟の對外的情勢である。

わが國の對外政策は明瞭である。それは、すべての國との平和を保持し、かつ通商關係を強化するところの政策である。ソ同盟は誰かを威嚇しようなどと考へてゐないし、誰かを襲撃しようなどとはなほおさらのこと考へてゐない。吾々は平和を主張し、平和の事業を固守する。だが吾々は、威嚇を恐れないし、かつ戦争點火者の打撃に對して打撃を以て答える覺悟をもつてゐる。(暴風のような拍手)。平和を欲し、吾々と事務的關係をもとうと努力する者は、常に吾々の方よりの支持を受け得

るであらう。だが、わが國を襲撃しようとして試みる者は、今後わがソヴェトの菜園にその豚の鼻面を突き込むなんていうことは、懲りて決してしなくなるような破滅的な反撃をくらうであらう。(萬雷のよ、うな拍手)

このようなのが、わが國の對外政策である。(萬雷のよ、うな拍手)

吾々の任務は、將來においてもこの政策を最も頑強に、徹底的に實行することにあるのである。

一、ソ同盟國民經濟のひき續く高揚と國內情勢

ソ同盟の國內情勢についての問題に移らう。

ソ同盟の國內情勢の見地からいえば、報告期間は國民經濟の領域においても、また文化の領域においても益々展開し高揚する情景を呈している。

この高揚は、力の單なる量的集積だけではなかつた。この高揚は、それがソ同盟の構成に原則的な變化をもたらさし、わが國の相貌を根本的に變化させたということによつて、注目すべきものであつた。

ソ同盟は、この期間に時代おくれと中世の風貌をかなぐり捨て、根底から變化したのであつた。

ソ同盟は、農業國から工業國になつた。ソ同盟は、小規模の個人經營農業の國から、集團の大規模な機械化された農業をもつ國となつた。ソ同盟は、もうまい、無智な非文化的な國から、ソ同盟の各民族語で教授されている高等學校、中學校、小學校の廣大な學校網で覆われている、教養ある、文化的な國になつた、もつと正確に言えば、なりつつあるのである。

新しい諸生産部門が創設された。即ち、工作機械製作工業、自動車工業、トラクター工業、化学工業、モーター製作工業、飛行機工業、コンバイン（自動刈取打穀機）製作工業、強力なタービン並に發電機、良質鋼、鐵合金、合成ゴム、窒素、人造セン維の生産、等々等々である。（長くつづく拍手）

この期間に、完全に現代的な設備をもつ數千の新しい工場が建設されて、操業を開始した。即ち、ドネプロストロイ、マグニトストロイ、クズネツクストロイ、チエリヤブストロイ、ポブリキ、ウラルマシユストロイ、クラムマシユストロイのような巨大工場が建設された。何千という古い工場が、新しい技術を基礎として改造された。諸民族共和國及びソ同盟の邊境地方、即ち、ペロルシア、ウクライナ、北カフカズ、後カフカズ、中央アジア、カザヒスタン、ブリヤート・モンゴリア、タタリヤ、バシキリア、ウラル、東部並に西部シベリア、極東その他において、新しい工場が建設され、工業の根源地が築かれた。

二十萬以上のコルホーズと五千以上のソフホーズが、これらのための新しい地方的中心地と工業地點とを擁してつくられた。

殆ど何もなかつた地方に、尨大な人口をもつ新しい諸都市が生れた。古い都市や工業地點は、非常に擴張され發展した。

ウラル・クズネツク・コンビナート、即ちクズネツクのコークス用石炭とウラルの鐵鑛とを結合するコンビナートの基礎が据えられた。かくして、東部における冶金工業の新たな基點は、一つの夢から現實なものとなつたとみなすことができるのである。

ウラル山脈の西及び南の斜面地方、即ちウラル州、バシキリア、カザヒスタンに、新たな強大な石油基點の基礎が据えられた。

報告期間において六百億ルーブル以上となつているところの、國民經濟のすべての部門への國家の巨大な投資が、無駄にならず、すでにその結果を示し始めているということは明かである。

これらの成功した結果として、ソ同盟の國民所得は、一九二九年の二百九十億ルーブルから一九三三年においては五百億ルーブルに増加した。ところが、同期間において例外なくすべての資本主義諸國では、國民所得の甚しい低下が見られたのであつた。

これらすべての達成とこの高揚全部とが、ソ同盟の國內情勢の一層の強化に導かなければならなかつたこと、かつ實際に導いたということはわかりきつたことである。

技術的におくれ文化的におくれていた龐大な國家の領土において、約三—四カ年の間に、このすばらしい變化がどうして起ることができたか？ これは奇蹟ではないか？ もしこの發展が資本主義と個人的小經營を地盤として行われたものであつたならば、それはたしかに奇蹟であつたであろう。だが、この發展がわが國において、社會主義建設事業の展開してゐる基礎の上に行われたということを顧慮するならば、これを奇蹟と名づけることは出来ないのである。

この巨大な高揚が、ひとり成功的な社會主義建設の地盤の上で、數千萬の人々の社會主義的勞働の地盤の上で、資本主義的經濟制度と個人的農民經營に對して社會主義的經濟制度が優越してゐる地盤の上でのみ展開できたということは、わかりきつたことである。

それ故に、報告期間におけるソ同盟の經濟と文化のすばらしい高揚が、それと同時に、資本主義的要素の絶滅と個人的經營が後の方に押しつけられたことを意味したということとは不思議ではないのである。社會主義的經濟制度の比重が、工業の領域においては現在九九%であり、農業においては粒穀作物の播種面積をとつて見れば、八四・五%であるのに反して、個人的農民經營の占める割合は、

全體で一五・五%にしかならないということ、これは事實なのである。

かくして、ソ同盟における資本主義的經濟はすでに絶滅され、農村における個人的農民の部面は、すでに第二義的地位に押し下げられた、ということになるのである。

レーニンは、ネツプの實施にあつて、わが國には五つの社會的・經濟的形態が存在すると述べた。即ち、一、家長的經濟（自然經濟に殆ど近いもの）、二、小規模商品生産（穀物を賣却する農民の大多數）、三、私有經營資本主義、四、國家資本主義、五、社會主義これである。レーニンは、すべてこれらの形態の中、社會主義的形態が結局優越權を獲得せざるを得ないとみなしたのであつた。吾々は今や、第一、第三、第四の社會的・經濟的形態はすでに存在せず、第二の社會的・經濟的形態は、第二義的地位に押し下げられ、そして、第五の社會的・經濟的形態、即ち社會主義的形態が、全國民經濟において全一的に支配する勢力であり、かつ單一に指揮する勢力であるということができ、（暴風のような、長く、つすく、拍手）

このようなのが、總結果である。

この總結果に、ソ同盟の國內情勢の堅固さの基礎があり、資本主義による圍繞の情勢中にあつての、その前線並に後方陣地の堅固不動性の基礎があるのである。

さて、ソヴェト同盟の經濟的、政治的情勢の個々の問題に關する具體的材料の検討に移ろう。

一、工業の高揚

國民經濟の全部門中、わが工業は最も早く發達した。報告期間中に、即ち一九三〇年以降わが工業は二倍以上に即ち一〇一・六パーセントだけ増大した、そして戦前の水準と比較して、それは殆ど四倍に即ち二九一・九パーセントだけ増大した。

このことは、即ちわが國の工業化が全速力で進んだということである。
 工業化の迅速な進展の結果、全國民經濟の總生産高中、工業生産高が最上位を占めるに至つた。
 以上のことを表によつて示そう。

バーセンテージで示した國民經濟總生産高に對する工業の比重

(一九二六年——一九二七年の價格による)

	一九一三年	一九二九年	一九三〇年	一九三一年	一九三二年	一九三三年
一、工業(小工業を除く)	四二・一	五四・五	六一・六	六六・七	七〇・七	七〇・四
二、農業	五七・九	四五・五	三八・四	三三・三	二九・三	二九・六
總計	一〇〇・〇	一〇〇・〇	一〇〇・〇	一〇〇・〇	一〇〇・〇	一〇〇・〇

これは、即ちわが國が強固に決定的に工業國になつたということである。

工業發達の全範圍における生産用具及び生産手段の生産の發達は、工業化の事業において決定的な意義を持つてゐる。報告期間中の資料は工業の全容積に對するこの條項の比重が壓倒的な地位を占めたことを示している。

以上の事實を表によつて示そう——

巨大工業部門の二つの基本グループの生産高比重

(一九二六年——一九二七年の價格による)

總計	總生産高(單位一〇億ルーブル)			
	一九二九年	一九三〇年	一九三一年	一九三二年
全 巨 大 工 業	二一・〇	二七・五	三三・九	三八・五
その中で				
グループ(A)生産用具及び手段	一〇・二	一四・五	一八・八	二二・〇
グループ(B)一般日用品	一〇・八	一三・〇	一五・一	一六・五
比 重	パーセンテージで示すと			
グループ(A)生産用具及び手段	四八・五	五二・六	五五・四	五七・〇
グループ(B)一般日用品	五一・五	四七・四	四四・六	四三・〇
總計	一〇〇・〇	一〇〇・〇	一〇〇・〇	一〇〇・〇
				二四・三
				七・六

表はごらんの通り説明を必要としない。

技術關係において今なお若いわが國においては工業が特殊な任務を持つてゐる。工業は新しい技術的基礎によつて工業そのもののみでなく、工業の全部のみでなく、同時に輕工業、食料品工業、林業を再建しなければならぬ。工業はなおあらゆる種類の輸送機關及び農業の全部を再建しなければならぬ。しかし工業は工作機械製造工業——國民經濟再建の基本槓杆——がその中で壓倒的地位を占める場合にのみ、この任務を遂行することができる。報告期間の資料は、工作機械製作工業が、わが國工業の全範圍中指導的役割を獲得したことを示している。

以上のことを表によつて示そう（七六〇頁参照）

これは即ちわが工業が健全な基礎の上に發達しているということであり、また再建の鍵、即ち工作機械工業が全く吾々の手中にあるということである。そして唯それが巧みに合理的に利用されることが必要となつてゐる。

報告期間中の工業の發達は社會的分野毎に興味ある光景をくりひろげている。

以上の事實を表によつて示そう（七六一—七六二頁参照）

この表によつて工業における資本主義的要素は既に清算されて、社會主義的經濟制度が現在わが工業において、唯一の、獨占的の制度である、ということが明白にうかがわれる。（拍手）

然し報告期間中に獲得された工業のすべての成功の中、工業が幾千という新人及び工業の新指導者、新しい技師、技手の全層、新技術を習得し、わが社會主義的工業を前進させた幾十

全生産高別總計に對しパーセンテージで示した工業各部門の比重

	ソ 同 盟			
	一九一三年	一九二九年	一九三二年	一九三三年
石 炭	二・九	二・一	一・七	二・〇
ヨークス用石炭	〇・八	〇・四	〇・五	〇・六
石油採取	一・九	一・八	一・五	一・四
石油加工	二・三	二・五	二・九	二・六
黑色冶金	報告ナシ	四・五	三・七	四・〇
有色冶金	報告ナシ	一・五	一・三	一・二
工作機械製造	一一・〇	一四・八	二五・〇	二六・一
基礎的化學	〇・八	〇・六	〇・八	〇・九
綿 織 物	一八・三	一五・二	七・六	七・三
毛 織 物	三・一	三・一	一・九	一・八

社會的分野別巨大工業總生産高（一九二六年——一九二七年の價格による）

		總 生 産 高 （單位百萬ルーブル）				
		一九二九年	一九三〇年	一九三一年	一九三二年	一九三三年
全 生 産 高		二二〇二五	二七四七七	三三三九〇三	三八四六四	四一九六八
その中で						
（一）公有化された工業		二〇八九一	二七四〇二	報告ナシ	三八四三六	四一九四〇
その中で						
A 國 營 工 業		一九一四三	二四九八九	報告ナシ	三五五八七	三八九三二
B 協 同 組 合 工 業		一七四八	二四一三	報告ナシ	二八四九	三〇〇八
（二）私有經營工業		一三四	七五	報告ナシ	二八	二八
		パーセンテージで示すと				
全 生 産 高		一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
その中で						
（一）公有化された工業		九九・四	九九・七	報告ナシ	九九・九三	九九・九三

その中で					
	A 國營工業	九一・一	九〇・九	報告なし	九二・五二 九二・七六
	B 協同組合工業	八・三	八・八	報告なし	七・四一 七・一七
(二)	私有經營工業	〇・六	〇・三	報告なし	〇・〇七 〇・〇七

萬の若い熟練工をこの期間中に養成し鍛練することができたという事實を最も重要な成功とみなさねばならない。これらの人々なしに工業は現在持つている、また誇るに足る成功を収めることが出来なかつたであろうということは疑いもない。報告期間中に工業は職工學校から約八十萬の或る程度熟練した工員を生産に送り出したし、また高等専門學校大學、技術學校から、十八萬以上の技師、技手を生産に送り出したということを資料が物語っている。もしカードルの問題がわが發展の極めて重要な問題である、ということが眞實ならば、わが工業はこの問題を眞剣に捉え始めている、ということ認めねばならない。

わが工業の根本的成功はこのようなものである。

しかし工業がただ成功ばかりだと考えることは正しくないであろう。否、工業はそれ自體に缺陷をもつてゐる。その缺陷の主なものとは次の如くである——

(イ) 黑色冶金工業の連續的遲滯、

(ロ) 有色冶金工業の不整理、

(ハ) 國家の全燃料產出量に對する地方の石炭採掘高増大の最も重要な意義を過少評價していること(モスクワ近郊地區、カフカズ、ウラル、カラガンダ、中央アジア、シベリア、極東、北部邊境)、

(ニ) ウラル、バシキール、エムバ地區における新石油基地組織問題に對するしかるべき注意の缺如、

(ホ) 輕工業、食糧品工業並に林業における一般日用品生産の擴充に對する眞劍な配慮の缺如、

(ヘ) 地方工業發達の問題に對する然るべき注意の缺如、

(ト) 生産品の質的向上に關する問題についての全く許し難い態度、

(チ) 労働生産能力の高揚、原價の引下げ、獨立採算制施行の事業における連續的遲滞、

(リ) 今なお清算せられざる労働及び賃銀の惡制度、即ち作業における集團責任制、労働賃金均等支給制、

(ヌ) 諸經濟人民委員部及びその機關、その中で輕工業及び食糧工業人民委員部における未だ少しも清算されていない事務的官僚的指導方法。

これらの缺陷を急速に除去することの絶對的必要性を、さらに説明する必要があるまい。黑色及び有色冶金工業は周知の如く第一次五カ年計畫の期間中にその計畫を遂行しなかつた。それは第二次五カ年計畫第一年目にも同様に計畫を遂行しなかつた。もし黑色、有色冶金工業が將來においても遅れるならばそれは工業にとって妨害となり工業上の蹉跌の原因と化し得る。石炭及び石油工業の新基地創設に關してはこの當面の任務を果さずして、吾々は工業も運輸機關も坐礁させる事になる、ということとは理解するに難くない。一般日用品及び地方工業の發達に關する問題、同じ様に生産品の質的向上、

労働の生産能力の高揚、原價の引下げ、特別會計の施行に關する諸問題は同じ様に説明する必要はない。労働及び賃銀の惡組織及び事務所的官僚的指導方法に關してはドンバスにおける事件、同じく輕工業及び食糧工業企業における事件が示した様にこの危険な病氣が工業の全部門に巢食い、その發展を妨害している。もしこの病いが癒らなければ工業は歩行困難となるであろう。

なお當面の課題は次の如くである――

- (一) 工作機械製造工業をして工業組織中における現在の指導的役割を保持せしめる。
- (二) 黑色冶金工業の遲滯を清算する。
- (三) 有色冶金工業の整理。
- (四) すでに知られている全地區における地方石炭の採掘高を全力をあげて擴大し、石炭採掘の新區域を組織し(例えば極東のブレイスキー地區における)、クズバスを第二のドンバスと化する。(長、くつ、ず、く、拍、手)
- (五) ウラル山脈の西部及び南部斜面地方における石油基地組織化に眞剣に着手する。
- (六) すべての經濟人民委員部における一般日用品の生産を擴大する。
- (七) 地方ソヴェト工業を發展させ、それに一般日用品生産事業における主導性を發揮すべき可能性を與え、原料および資源において出来るだけの援助を示す。
- (八) 製品を質的に向上し、不揃いの生産品の製出を停止し、生産品の質及び完全に關するソヴェト政權の法律を犯し、これに抵觸する者は誰でも人物のいかんを問はず處罰する。
- (九) 労働の生産能力の系統的發達、原價の引下げ及び獨立採算制の施行を達成する。
- (十) 作業における個人責任分散制及び労働賃金均等支給制を徹底的に根絶する。

(十一) 各經濟人民委員部のすべての環における事務的官僚的指導方法を清算し、下級機關による指導的中心機關の決定及び指示の遂行を連續的に検査する。

二、農業の高揚

農業の領域における發達は幾分違つた方法で進んだ。工業におけるよりも何倍もゆつくりと、しかし報告期間中における農業の基礎諸部門の高揚は個人經營經濟の優勢な時代におけるよりは、やはりより早く發展した。畜産部門に關して吾々は反對の過程、即ち家畜頭數の減少さえも見た、が一九三三年においてのみ、それも養豚部門のみにおいて高揚の徴候を示した。

散在する小農家をコルホーズに合併することの非常な困難、殆ど荒地に多數の大規模穀物農業および畜産業を創設する困難な事業、および全般的に個人經營農業を新コルホーズ的軌道に移し再編成する改革の期間、これには多くの時間と大きな費用とを要するのであるが——すべてのこれらの要因によつて農業高揚の緩慢な速度並に家畜増加率減少の比較的長い期間が豫定されたことは一目瞭然である。

實質上においては報告の期間は農業にとつて、急速に高揚し力強く發達した期間であつたといふよりも、極く近い將來における急速な高揚と力強い發達のための前提條件作成期間であつたのだ。

もし全農産物の、ついで特に加工用農産物の播種面積擴充に關する資料を取るならば、報告期間における農業の發達は次表に示される。

ソ同盟における全農産物播種面積

單位一〇〇萬ヘクタール

全播種面積	一九一三年	一九二九年	一九三〇年	一九三一年	一九三二年	一九三三年
	一〇五・〇	一一八・〇	一二七・二	一三六・三	一三四・四	一二九・七

その中で

(A) 穀類	九四・四	九六・〇	一〇一・八	一〇四・四	九九・七	一〇一・五
(B) 加工用	四・五	八・八	一〇・五	一四・〇	一四・九	一二・〇
(C) 野菜甜瓜類	三・八	七・六	八・〇	九・一	九・二	八・六
(D) 飼料用	二・一	五・〇	六・五	八・八	一〇・六	七・三

ソ同盟における加工用農産物播種面積

單位一〇〇萬ヘクタール

棉花	一九一三年	一九二九年	一九三〇年	一九三一年	一九三二年	一九三三年
	〇・六九	一・〇六	一・五八	二・一四	二・一七	二・〇五

オ	リ	ー	ブ	二・〇〇〇	五・二〇	五・二二	七・五五	七・九八	五・七九
甜	菜			〇・六五	〇・七七	一・〇四	一・三九	一・五四	一・二一
亞麻（長莖種）				一・〇二	一・六三	一・七五	二・三九	二・五一	二・四〇

これらの表は農業における二つの根本方針を反映している。

(一) コルホーズが數萬創設され、それらのコルホーズが土地からクラークを放逐し、解放された土地を獲得してそれをわがものにしつつあつた農業再編成が酣の期間において播種面積をあらゆる手段を盡して擴充する方針。

(二) 播種面積の一括的擴充を拒否する方針、面積の一括的擴大から轉じて土地耕作の向上に、正しい轉耕播種および休耕地制の採用に、收穫量の向上に、實際に必要なならば現在の播種面積の一時的小縮少に移行する方針。

周知のように第二の方針即ち農業において唯一の正しい方針は、農業における再編成期間が終結に近ずき、收穫量の向上に關する問題が農業高揚の根本問題の一つとなつた年、即ち一九三二年に唱えられた。

しかし播種面積擴充に關する資料を農業發達の全く十分な指標だと考へてはいけなない。土地耕作が悪化し、單位面積に對する收穫量が減少したために面積は擴充されたが、生産高は増大しない、或は減少するということとはよくあることだ。そのためには面積に關する資料を總生産高に關する資料によつて補うことが必要だ。ここに相當する表を掲げる。

ソ同盟における穀類及び加工用農産物の總生産高

	單位一〇〇萬セントナー					
	一九一三年	一九二九年	一九三〇年	一九三二年	一九三三年	
穀類	八〇一・〇	七一七・四	八三五・四	六九四・八	六九八・七	八九八・〇
棉花(未加工品)	七・四	八・六	一一・一	一二・九	一二・七	一三・二
亞麻(纖維)	三・三	三・六	四・四	五・五	五・〇	五・六
甜菜	一〇九・〇	六二・五	一四〇・二	一二〇・五	六五・六	九〇・〇
オリーブ	二一・五	三五・八	三六・二	五一・〇	四五・五	四六・〇

農業再編成の最も熾烈な年、即ち一九三一年及び一九三二年は穀物生産高の最も減少した年であったということはこの表によつて明かである。

この表によれば、さらに棉花と亞麻の生産地方においては、農業は緩慢な速度で進んだのであったが、棉花と亞麻は殆ど損害を蒙らなかつた、そしてその發達の高い水準を維持しながら多かれ少かれ平穩に不斷の高揚に向つたということになる。

この表から第三に次のことが明かになる。オリーブ農産物が戦前の水準に比較して、その高い發達水準を維持しつつ、僅かな動搖のみを経験した。それと同時に甜菜生産地方においては農業再編成

が最高テンポで行われたことが觀察され、甜菜は他の農産部門に比して一番最後に再編成期間に入つたのであつたが、再編成最後の年、即ち一九三二年に最大の低落を経験し、生産高は戦前の水準よりさらに低下したのである。

最後にこの表から一九三三年即ち再編成期間終結後最初の年は、穀類産物及び加工用農産物の發達への轉換の年であるということがわかる。

これは即ち穀産物がまず第一に、それに續いて加工用農産物がこれから強固に確實に強力な高揚に向うということを示している。

農業の畜産部門は再編成期間を最も病的に過した。

ここにこれに相當する表を掲げる。

ソ同盟における家畜頭數

	單位 一〇〇萬頭					
	一九一六年	一九二九年	一九三〇年	一九三一年	一九三二年	一九三三年
馬	三五・一	三四・〇	三〇・二	二六・二	一九・六	一六・六
牛	五八・九	六八・一	五二・五	四七・九	四〇・七	三八・六
羊及び山羊	一一五・二	一四七・二	一〇八・八	七七・七	五二・一	五〇・六
豚	二〇・三	二〇・九	一三・六	一四・四	一一・六	一二・二

この表によれば、家畜の頭數に關してはわれわれは報告期間中に高揚でなしに、戦前の水準に比して相變らず繼續的に減少していることに直面しているのだ。一面には農業における畜産諸部門が大クラーク分子によつて最も多く充實されていたこと、他面には再編成年間において好都合の地盤を持つていた、クラークが家畜屠殺を猛烈に煽動したこと等がこの表に反映されたことは明白である。

さらにこの表によれば、頭數の減少が再編成の第一年目(一九三〇年)にもう始つて一九三三年に至る迄續いている。その際減少は初めの三年間に最大の割合に達したが、穀産物が高揚に向つた一九三三年に即ち再編成期間終了後最初の年に減少割合は最少限になつたということになる。

最後にこの表によれば、養豚に關しては反對の過程がすでに始つた、そして一九三三年に眞の高揚の兆候が既に見られたということになる。

これは即ち一九三四年が全畜産業における高揚への轉換の年とならねばならないし、またなり得るといふことである。

報告期間中にわが農業の集團化はいかに發展したか？

ここにこれに相當する表がある。

集團化

	一九二九年	一九三〇年	一九三一年	一九三二年	一九三三年
コルホーズ數 (單位一〇〇〇數)	五七・〇	八五・九	二二一・一	二二一・〇五	二二四・五
コルホーズにおける 戸數(單位一〇〇萬)	一・〇	六・〇	一三・〇	一四・九	一五・二
農家集團化の百分率	三・九	二二・六	五二・七	六一・五	六五・〇

だが部門別に穀類播種面積はいかに變化したか？
ここにこれに相當する表を掲げる。

部門別穀類播種面積

部門	穀類播種地單位一〇〇萬ヘクター					一九三三年の面積に對するパーセント
	一九二九年	一九三〇年	一九三一年	一九三二年	一九三三年	
1. ソフホーズ	一・五	二・九	八・一	九・三	一〇・八	一〇・六
2. コルホーズ	三・四	二九・七	六一・〇	六九・一	七五・〇	七三・九
3. 個人經營農民	九一・一	六九・二	三五・三	二一・三	一五・七	一五・五
ソ同盟に於ける全播種地	九六・〇	一〇一・八	一〇四・四	九九・七	一一〇・五	一〇〇・〇

これらの表は何を物語っているか？

それは、コルホーズとコルホーズ員の數が激烈なテンポを持って増加した農業再編成期間がすでに終つてしまつた、即ち早くも一九三二年に終つてしまつたことを物語っている。

従つて爾後の集團化過程は、個人經營農家の殘滓をコルホーズによつて絶えず吸収し再教育する過程である。

これは、即ちコルホーズが完全に徹底的に勝つた、ということである（嵐のようなく長く、長く、拍手）。表は、さらにソフホーズとコルホーズが共にソ同盟における全播種面積の八四・五パーセントを占めていることを物語っている。

これは、即ちコルホーズとソフホーズが共に全農業及び農業の全部門の運命を決定する力となつたということである。

表は、さらにコルホーズに統合された農家の六五パーセントとは全穀類播種面積の七三・九パーセントを占めており、然るに一方全農の三五パーセントを構成している。残餘の農民の個人經營の全群衆は總計で全穀類播種面積の一五・五パーセントを占めているに過ぎないということを物語っている。

もしこれに、コルホーズは一九三三年にあらゆる種類の納入で穀物一〇億ブード以上を國家に納めたが、完全に計畫を一〇パーセント遂行した個人經營農民は全部で一億三千萬ブードを納入した、然るに一方、一九二九年——三〇年に個人經營農民は約七億八千萬ブードを國家に納めたが、コルホーズは一億二千萬ブード足らずを納めたという事實を付け加えるならば、コルホーズと個人經營農民とは報告期間中に完全に役割を交換し、而してコルホーズはこの期間中に農業の支配的勢力となつた。そして個人經營農民はコルホーズ制度に従屬し順應せざるを得ない第二義的な勢力になつたということが全く明白になる。

勤勞農民、わがソヴェト農民は完全に徹底的に社會主義の赤旗の下に立つたということを認めねばならない。（長く、長く、拍手）

エス・エルⅡメンシエヴィキ的及びブルジョア・トロツキー派的饒舌家をして、農民は元來革命的だとか、農民はソ同盟において資本主義を復興する使命を持つているとか、農民は社會主義建設の事業において勞働者階級の同盟者ではあり得ないとか、ソ同盟においては社會主義を建設することは

出来ない、とかいうことを喋らせて置こう。これらの連中がソ同盟をもソヴェトの農民をも誹謗しているということは事實が物語っているのだ。わがソヴェトの農民が資本主義の岸から完全に離れて労働者階級との同盟に即ち社會主義に向つて前進したということは事實が物語っているのだ。吾々はすでにソ同盟において社會主義社會の土台を建設して、われわれにはその上部構造即ち社會主義社會の土台の建設と比べて疑いもなく容易な事業を完成することだけが残されているということを事實が物語っているのだ。

然しコルホーズ及びソフホーズの力はその播種面積と生産高の増大に止まらない。それはトラクターの擴充にもまたその機械化の發達にも同じ様に反映している。この關係においてわがコルホーズおよびソフホーズは著しい進歩を遂げた。

これを表によつて示そう。

ソ同盟農業におけるトラクター組數（消耗台數を考慮に入れて）

年	單位 一〇〇〇台					單位 一〇〇〇馬力				
	1929年	1930年	1931年	1932年	1933年	1929年	1930年	1931年	1932年	1933年
トラクター總數	34,9	72,1	125,3	148,5	204,1	391,4	1003,5	1850,0	2225,0	3100,0
その中で										
A機械トラクター配給所におけるトラクター	2,4	31,1	63,3	74,8	122,3	23,9	372,5	848,0	1077,0	1782,0
Bすべての系統のソフホーズにおけるトラクター	9,7	27,7	51,5	64,0	81,8	123,4	483,1	892,0	1043,0	1318,0

従つてコルホーズおよびソフホーズには二〇萬四千台のトラクターと三一〇萬馬力がある。御覽の通り、これは農村において資本主義のありとあらゆる根源を根絶するに足りるしまた根絶することが出来たる大きな力である。その力は、レーニンが遠い將來のように語つたトラクターの數を二倍に超過させている。

ソフホーズ人民委員部のソフホーズならびに機械トラクター配給所の農業機械數に關しては次の諸表における資料がある。

機械トラクター配給所所屬

	一九三〇年	一九三一年	一九三二年	一九三三年
コンバイン(單位一〇〇〇台)	〇・〇〇七	〇・一	二・二	一一・五
發動機及び移動機關車(單位一〇〇〇台)	〇・一	四・九	六・二	一七・六
組立及び半組立打穀機(單位一〇〇〇台)	二・九	二七・八	三七・〇	五〇・〇
打穀用電気機械裝置	一六八	二六八	五五一	一二八三
機械トラクター配給所における修理工場數	一〇四	七七〇	一二二〇	一九三三
貨物自動車(單位一〇〇〇台)	〇・二	一・〇	六・〇	一三・五
乗用車(單位一台)	一七	一九一	二四五	二八〇〇

ソフホーズ人民委員部のソフホーズ所屬

					一九三〇年	一九三一年	一九三二年	一九三三年	
					一・七	六・三	一一・九	一三・五	
					〇・三	〇・七	一・二	二・五	
					一・四	四・二	七・一	八・〇	
					四二	一一二	一六四	二二二	
					七二	一三三	二〇八	三〇二	
					七五	一六〇	二一五	四七六	
					二〇五	三一〇	五七八	一一六六	
					二・一	三・七	六・二	一〇・九	
					一一八	三八五	六二五	一八九〇	
乗用車(單位一台)	貨物自動車(單位一〇〇〇台)	(C) 應急修理工場	(B) 中修理工場	(A) 大修理工場	修理工場	電気機械装置	組立及び半組立打穀機(單位一〇〇〇台)	發動機及び移動機關車(單位一〇〇〇台)	コンバイン(單位一〇〇〇台)

これらの資料は説明する必要はないと私は思う。

農業高揚のために同じ様に機械トラクター配給所とソフホーズにおける政治部の成立及び農業に對する熟練労働者の補充が少からず意義をもっていた。政治部員がコルホーズ及びソフホーズの作業向上の仕事に大きな役割を演じたということは現在誰もが認めている。報告期間中に黨中央委員會が農業のカードル強化のために二萬三千人以上の共產黨員、その中三千人以上の農業従業員、二千人以上のソフホーズ従業員、一萬三千人以上の機械トラクター配給所の政治部員及び五千人以上のソフホーズ政治部員を農村に派遣した、ということは周知の通りである。

コルホーズとソフホーズに對する新しい技師、技手、及び農學専門家の補給についても同じことをいわねばならない。報告期間中にこのグループの働き手十一萬一千人以上を農業に派遣したことは周知の通りである。

トラクター運轉手、コンバイン運轉手、諸機械操縦者、自動車運轉手が報告期間中に養成されて、農業人民委員部系統だけでも百九十萬人以上が派遣されたのである。

同期間中にコルホーズ長及び幹部、耕作班長、畜産班長、會計班長が百六十萬人以上養成され、また再教育された。

勿論わが農業にとつて、これでは少い、然しこれでも可なりの數だ。

御覽の通り、國家はコルホーズおよびソフホーズ建設の指導において農業人民委員部及びソフホーズ人民委員部の諸機關の仕事を容易ならしめるために出来る限りのことをした。

これらの機會は適當に利用されたといひ得るか？
残念ながらそうはいひ得ない。

これらの人民委員部は、他の人民委員部より著しく仕事に對して官僚的事務的態度をとる病に感染しているということから始めねばならない。問題を解決するが、しかし實行を檢査し、諸指導機關の命令および指圖の違反者に警告を與え、誠實な正直な執務者を登用することを考えない。

龐大な數のトラクターや機械類があるゆえに農業諸機關はこれらの高價な諸機械を正常に保存し、適時にこれを修理し、作業でこれを多かれ少かれ合理的に利用しなければならぬであろうが、この領域において彼等は何をしてしているか？ 殘念ながら殆ど何もしていない。トラクター及び機械の保存は不十分である、修理も不十分である、何となれば今まで彼等の修理の基礎をなしているのは、應急修理及び中修理であつて大修理ではない、ということをも、未だ理解しようとしなからである。トラクター及び機械の利用に關しては、この仕事の不満足な状態を説明する必要がある程に明白であり周知のことである。

農業全部門に亘る正しい循環播種の實施、完全な休耕地の擴張、種子の改良は農業における當面の任務の一つである。この領域において何をしているか？ 殘念ながら今のところでは殆ど何もやつていない。穀類および棉花の種子問題は全く紛糾してこれが解決は前途遼遠である。

加工用農産物の收穫量向上のため有効な手段の一つはそれに肥料を供給することである。この領域において、何が行われているか？ 今のところでは殆んど何も行われていない。肥料はあるが、然し農業人民委員部の諸機關はそれをうまく用いることができない、また用いてもそれを適時適所に供給して、合理的に利用することについて配慮をしていない。

ソフホーズに關してはやはり自己の任務を十分に遂行していないことをいわなければならぬ。私は決してわがソフホーズの大きな革命的意義を輕視するものではない。然しもしソフホーズ

事業に對する國家の巨額な投資をソフホーズ作業の現在の實際の結果と對照するならばそこに大きな不釣合が生じ、それがソフホーズの弱點となつてゐる。この不釣合の主な原因は、わが穀物ソフホーズが餘りに嵩張つて支配人が巨大なソフホーズを巧みにやつて行つていないし、ソフホーズそのものが餘りに専門化されて、循環播種及び休耕地を持つておらず、その構成中に畜産の要素を持つていないといふ事情である。ソフホーズをより小さい規模のものに分割し、またそれを過度に専門化することをなくする必要があることは明瞭である。ソフホーズ人民委員部が、適時にこの問題を提出してそれを解決することに成功したと一寸考えることが出来る。然しこれは眞實でない。問題はソフホーズ人民委員部に何の關係もない人々の發意によつて提出され、そして解決されたのである。

最後に畜産に關する問題がある。私はすでに畜産の困難な状態について報告した。一寸考えると、わが農業諸機關は畜産の危機解消のために熱狂的な活動を示しており、農業諸機關が心配して働き手を動員し、畜産の問題に全力を注いでいると思われる。残念ながら、そんなことは起らなかつた。また起つていない。農業諸機關は畜産の困難な状態に關して心配してはいないばかりでなく逆に問題をこま化しようと努めている。そして時々、その諸報告において畜産の實際の状態を國家の世論から秘匿しようとさえしている。これはボルシェヴィキにとつては全く容認し難いことである。農業諸機關が畜産を常道に導き出し、申分のない程度に向上せしめるということを今後に期待することは、即ち空中に樓閣を築くに等しい。現在では畜産の問題は、成功のうちには解決された穀類問題の昨日と全く同じ状態にある。最重要な問題であるということを考慮に入れて、黨全體が、わが働き手が黨員も非黨員も畜産問題を自己の手にとらねばならない。目的達成への途次において一再ならず重大な障害を克服したソヴェトの人々がこの障害をも克服できるということについて證明するには及ばない。(萬雷のよゝな拍手)

清算しなければならぬ諸缺陷を簡単に、決して完全ではないが、列挙し、また最近中に解決しなければならぬ諸任務を列挙すれば、このようなものである。

然し問題はこれらの任務に盡きるのではない。農業の方針に關する他の諸任務がまだ存在する、そしてそれについて一言しなければならぬ。

それは、わが諸地方を工業地方と農業地方に分割する古い區劃がすでになくなつた、ということ、まず第一に考慮に入れなければならない。パンや肉や野菜を工業地方に供給していた單一農業地方はもう吾々には存在しない。と同じ様にあらゆる必要品を外部から他の諸地方から受取ることを當にし得た單一工業地方は吾々には存在しない。發達の結果、わが國ではすべての地方が多かれ少かれ工業的になりつつあり、また愈々大規模に工業的になるであらう。これは、即ちウクライナ、北カフカズ、中部黒土地方及び爾餘の從來の農業地方は以前に送り出していただけの生産品を他へ、工業の中心へもこれ以上送り出すことは出来ない、なせなら、自分自身の町及び量的に將來膨張する自分自身の勞働者を養わざるを得ないからである。然しこのことから各地方は自分の野菜、馬鈴薯、油、バター、牛乳を、またもし難境に陥りたくなければ、何とかして自分のパン、肉を保有するためにそれぞれの農業基地を自身に作らねばならない、ということになる。このことが十分に實施可能であり、そして現在すでに實施されている、ということを知つてゐる。

何はともあれ、この仕事を徹底的に完遂するということがある。

わが諸地方を消費地方及び生産地方に分割する周知の區劃も同様にその單一的な性格を喪失しつつあるということに注意を拂わねばならない。モスクワ州とゴリキー州のような「消費」諸州が今年中に國家に約八千萬プードの穀物を納めた。これは勿論小さなことではない。いわゆる消費地帯に

は灌木に覆われた約五百萬ヘクタールの未開墾地が存在する。この地域は氣候は悪くないし、降雨雪量は少くないし旱魃がないということは周知の通りである。もしこの土地から灌木を取り除き組織的な一連の對策を施せば、これらの地方においては普通の豐作條件の下で市場向の穀物を産出できる、巨大な穀物産出地方を得ることが出来るであろう、そしてその數量は現在ヴォルガ河下流及び中流域地方が産出するよりも少くないのである。これは北部の工業諸中心にとつて大きな援助となるであろう。

消費地帯の諸地方において穀産物の廣汎な播種地帯を設けるにある、ということが任務であることは一目瞭然である。

最後にヴォルガ河左岸における旱魃との鬭争に關する問題がある。ヴォルガ河左岸の東部地方における植林及び防風林地帯設置は大きな意義をもっている。この仕事は周知の通り、それが十分強力に行われているということが出来ないとしてもすで行われつつある。ヴォルガ河左岸地方の灌漑事業——これは旱魃との鬭争の見地より主要なものであるが——に關しては、この仕事が長く打棄つて置かれていたことを許容することは出来ない。なる程、この仕事は若干の外部的事情によつて幾分妨害され、そして多くの人力と資材が他に引き抜かれた。現在それをさらに放つて置く理由はもう存在しない。われわれは毎年約二億ブードの市場向け穀物を産出するヴォルガ河地方において、重要な天候の異變に無關係な全く安定した穀物生産基地を建設することなしには濟まされない。これはもし一面よりヴォルガ河地方の諸都市の發達を、他面より國際關係の領域における、ありとあらゆる紛糾を考慮するならば、全く必要なことである。

任務はヴォルガ河左岸地方の灌漑事業の組織化に關する重要作業に着手することにある。(拍手)

三、勤勞者の物質狀態及び文化の高揚

かくして吾々は報告期間におけるわが工業及び農業の狀態の發達、該時機におけるその狀態を叙述した。

結局吾々は、次の成果を收めた——

(イ)工業の領域ならびに農業の基本諸部門における生産の力強い高揚。

(ロ)この高揚に基ずく工業並に農業における社會主義的經濟制度の資本主義的經濟制度に對する完全な勝利、社會主義的制度が全國國民經濟の唯一の制度へ轉化したこと、國民經濟の全國内から資本主義的要素を締め出したこと。

(ハ)歴倒的大多數の個人經營農民が小商品的個人經營農業から完全に離脱したこと、集團勞働及び生産手段の集團的所有に基ずく集團經營へ彼等が結合したこと、小商品的個人經營農業に對する集團經營の完全な勝利。

(ニ)個人經營農業の犠牲によつてコルホーズが將來において益々擴大發達する過程、かくして個人經營農業は月を追うて數的に減少しつつあり、また本質的にはコルホーズとソフホーズの補助的勢力と化しつつある。

搾取者に對するこの歴史的勝利は、勤勞者の物質的状態およびあらゆる生活形態の根本的向上へと導かざるを得なかつたといふことは明白である。

寄生階級の絶滅は、人間による人間の搾取の消滅へと導いた。勞働者および農民の勞働は搾取から解放された。人民の勞働から搾取者によつて搾り取られていた收入は、現在では勤勞者の手中にあり、

一部は生産の擴充及び新勤勞者部隊を生産へひき入れるために利用され、また一部は勞働者および農民の收入を直接向上させるために使われている。

失業——勞働者階級の鞭——は消滅した、たとえブルジョア諸國家において幾百萬の失業者が仕事がないために困窮や苦難を蒙つていても、わが國には仕事と勞銀を持たないような勞働者はもう存在しない。

クラークに對する隷屬關係の消滅と共に農村では窮乏が消滅した。どんな農民でも、コルホーズ員でも、或は個人經營農民でも、もし彼がなまけず放浪せずコルホーズ財産を掠取せず、誠實に働こうとさえすれば、現在では人間らしく生活することが出来る。

搾取の根絶、都市における失業の根絶、農村における窮乏の根絶、即ちこれらは勤勞者の物質的狀態における歴史的な成功である。そしてかような成果についてどんな最も「民主主義的な」ブルジョア國家の勞働者及び農民も夢想だにすることが出来ないものである。

わが大都市と工業中心の風貌は一變した。ブルジョア諸國家における大都市の不可避的な特徴は貧民窟即ち街外れにあるいわゆる勞働者街である、そしてこの街は暗い濕つばい大部分穴藏式の、半分壊れかかった住宅の堆積であり、此所には普通無産大衆が塵埃の中に蠢き運命を呪いながら生活している。ソ同盟においては革命の結果、これらの貧民窟は吾々のもとから消滅した、貧民窟は新たに再建された立派な明朗な勞働者街と化し、そして多くの場合わが國では勞働者街の方が都市の中心より立派に見える。

農村の風貌はさらに大きく變化した。最も目立つ場所には教會、前景には村の警部、僧侶、クラークの立派な家、後景には百姓達の崩れかかった小屋——こういつた古い農村は消滅し始めている。そ

の場所には社會的經濟的諸設備のある、即ちクラブ、ラジオ、映畫館、學校、圖書館及び託兒所のある、トラクター、コンバイン、打穀機、自動車のある新しい農村が現われつつある。古い貴顯の人々、即ち搾取者たるクラーク、吸血鬼たる高利貸、闇商人、警部殿はなくなつた。現在では貴顯な人々はコルホーズ、ソフホーズ、學校、クラブの活動家達、トラクター運轉手及びコンバイン運轉手隊長、耕作及び畜産班長、コルホーズ農場の優秀な男女突撃隊員達である。

都市と農村間の對立が消滅しつつある。都市は農民の見た處では自分達に對する搾取の中心ではなくなりつつある。都市と農村間の經濟的文化的結合の糸は益々強固になりつつある。都市及び都市の工業から農村は現在援助を受けている。即ちトラクター、農業用諸機械、自動車、人材、資材である。そして農村そのものにも現在では機械トラクター配給所、修理工場、コルホーズの各種工業企業、小發電所等の形で農村自身の工業が存在する。都市と農村間の大きな文化的懸隔が狭められつつある。

勤勞者の物質的狀態、生活狀態、文化の領域における基本的成果はこのようである。

これらの成果に基いて報告期間中に吾々が收めたものは、次の通りである——

(イ)一九三〇年の三五〇億ルーブルより一九三三年の五〇〇億ルーブルに國民所得が増大した、その上に國民所得における利權所有者を含む資本主義的諸分子の分け前は現在〇・五パーセント足らずを構成するに過ぎないゆえ、殆んどすべての國民所得が勞働者、事務員、勤勞農民、協同組合と國家に配當されている。

(ロ)ソ同盟の人口は一九三〇年末の一億六千五百萬人より一九三三年末の一億六千八百萬人に増大した。

(ハ) 労働者、事務員の数は一九三〇年の一四五三萬人より一九三三年の二一八八萬三千人に増大した。而して筋肉労働者数は同期間に九四八萬九千人より一三七九萬七千人に上昇した。輸送労働者を含む大工業の労働者数は五〇七萬九千人より六八八萬二千人に上昇した、農業労働者数は一四二萬六千人より二五一萬九千人に、商業における労働者及び事務員数は八一萬四千人より一四九萬七千人に上昇した。

(ニ) 労働者及び事務員の賃銀基金は一九三〇年の一三五億九七百萬ルーブルより一九三三年の三四二億八千萬ルーブルに増加した。

(ホ) 工業労働者の年平均賃銀は一九三〇年の九九一ルーブルより一九三三年の一五一九ルーブルに増加した。

(ヘ) 労働者及び事務員の社會保險基金は一九三〇年の一八億一千万ルーブルより一九三三年の四六億一千万ルーブルに増加した。

(ト) 一切の地上工業の七時間労働制への切替え。

(チ) 國家が農民を援助するため二〇億ルーブルを投資して、二八六〇の機械トラクター配給所を組織した。

(リ) 國家が農民を援助するためコルホーズに對して一六億ルーブル程の資金を融通した。

(ヌ) 國家は農民に對する援助のための報告期間中に二億六二〇〇萬ブード程の穀物を種子用及び糧食用として貸附けた。

(ル) 國家は貧農援助のため三億七千萬ルーブル程度の租税の免除及び保險上の特惠をあたえた。國家の文化的發展に關しては報告期間中に吾々は次の成果を收めた——

(イ) 全ソ同盟に亘つて初等義務教育の普及が實施されて、文字を解する人々の率は、一九三〇年末の六七パーセントより一九三三年末における九〇パーセントまで高められた。

(ロ) 各級諸學校の就學者數は一九二九年の一四三五萬八千人より一九三三年の二六四一萬九千人まで増加した。その中で初等教育に關しては一六九萬七千人より一九一六萬三千人まで、中等教育に關しては二四五萬三千人より六六七萬四千人まで、高等教育に關しては二〇萬七千人より四九萬一千人までそれぞれ増加した。

(ハ) 學齡前の教育を受けた兒童の數は、一九二九年の八三萬八千人より一九三三年の五九一萬七千人まで増加した。

(ニ) 一般および特殊の高等專門學校、大學の數は、一九一四年の九一から一九三三年の六〇〇に増加した。

(ホ) 科學研究所の數は、一九二九年の四〇〇から一九三三年の八四〇に増加した。

(ヘ) クラブ式の諸機關の數は、一九二九年の三萬二千より一九三三年の五萬四千に増加した。

(ト) 映畫館、クラブの映寫機および移動映寫機の數は、一九二九年の九千八百から一九三三年の二萬九千二百に増加した。

(チ) 新聞の一回の發行部數は、一九二九年の一二五〇萬部から一九三三年の三六五〇萬部に増加した。

この外わが國では高等專門學校、大學就學者中労働者の比重は五一・四パーセントを構成し、勤勞農民の比重は一六・五パーセントを構成している。然るに一方、ドイツでは例えば高等專門學校、大學の就學者中労働者の比重は一九三二——三三學年度において全部で三・二パーセントを構成し、小

農民の比重は全部で二・四パーセントを構成していた、ということ強調するのはむしろ餘計なことではないであらう。

農村における喜ばしい事實並に文化發達の兆候、即ち社會的組織者的な仕事の領域における女子コルホーズ員の積極性の増大を力説しなければならぬ。例えば、女子コルホーズ員は現在コルホーズ長として約六千名、コルホーズ管理委員として六萬名以上、作業班長として二萬八千名、組のオルグ（組織者）として十萬名、コルホーズ商業部主任として九千名、トラクター運轉手として七千名が勤務していることは周知の通りである。

この資料が完全でないということを話す必要もない。然しこの不完全な資料における僅かな事項も、農村における文化の急激な發達について十分明かに物語っている。この事情が諸君、大きな意義を持つているのである。婦人がわが國の人口の半ばをなしており、巨大な労働者軍を構成しており、また吾々の子供を吾々の來るべき時代を即ち吾々の將來を養育する使命を帯びているが故に、この事情が大きな意義を持つているのである。これゆえに吾々はこの巨大な勤勞者軍が暗黒と無教育の境地に陥ることを許容することが出來ないのである！これゆえに吾々はわが文化發達の確實な前兆として女子勤勞者の増大しつつある社會的積極性及びその指導的地位への登用を歓迎しなければならぬ。（長く、續く、拍手）

最後にもう一つの事實、但しよくない事實を指摘しなければならぬ。私は師範學部及び醫學部がやはりわが國では輕視せられていゝという許し難い現象について考へている。これは國家の利益を侵害するに近い大きな缺陷である。この缺陷を必ず除去しなければならぬ。そしてこれが遂行は早ければ早い程良いであらう。

四、商品取引の高揚及び輸送

かくして吾々は次の諸現象を確認する——

(イ)工業生産高——一般日用品を含む——の増大。

(ロ)農業生産物の増大。

(ハ)都市及び農村の勤労大衆の農産物及び工業製品に對する需要の増大。

これらの諸條件を結び合せて全消費者大衆に必需工業製品及び農産物の獲得を確保するためには、さらに何が必要であるか？

諸君の中には國家經濟生活が十分活況を呈するためにはこれらの條件で十分だと考えている者もいる。これは大きな間違ひである。これらの諸條件は全部揃つていゝことを想像することができ。然しもし品物が消費者の手に入らなければ、經濟生活は十分活況を呈し得ないばかりか逆に、根本的に不規律にされ紊亂される。最後に品物は究極において生産のため生産されるのではなくして、消費者のために生産されるのであるという事を理解しなければならぬ。工業製品や農産物は十分にあつたがし、それが消費者の手に入らなかつたばかりでなく、官僚主義的迂回路、いわゆる商品輸送網を幾年も徘徊し続け、消費者はそれを見ることもできなかつた場合がわが國においてよくあつた。これら諸條件の下において工業や農業が生産擴充に對するあらゆる刺戟を喪失し、商品輸送網は輻輳したが、労働者や農民は工業製品及び農産物を手に入れることが出来なかつた、といふことは明白である。その結果として工業製品及び農産物があるにも拘らず、國家の經濟生活の混亂が起つた。國家の經濟生活が十分に活況を呈し得て工業及び農業が將來におけるその生産額の増大に對して刺戟を持つたために

はもう一つの條件、即ち都市と農村間、國家の諸地區間、諸州間、國民經濟の各種部門間に展開された商品循環が存在しなければならぬ。國家が商業基地、商店、小賣店の豊富な網によつて覆われることが必要である。これらの基地や商店や小賣店のルートに沿つて商品が生産地から消費者まで間斷なく流通することが必要である。國家商業網も協同組合商業網も地方工業もユルホーズも個人經營農民もこの仕事にひき入れられなければならない。

わが國においてこれは發達したソヴェト商業、資本家なき商業、闇商人なき商業と呼ばれている。ごらんの通り、ソヴェト商業の展開は最緊急の課題であり、これが解決なくしてさらに前進することは不可能である。

而してこの眞實は全く明瞭なるにもかかわらず、やはり黨は報告期間中にソヴェト商業の發達途上における多數の障害を克服しなければならなかつた。そしてこれについては、簡單に言えば一部共產黨員達がソヴェト商業の必要性と意義について錯覺に陥つた結果だ、ということが出来る。

まず最初に一部の共產黨員達が相變らず一般に商業に對して特にソヴェト商業に對して傲慢な輕蔑的な態度を持つてゐるということから話さねばならない。その名に相應しないこれらの共產黨員達はソヴェト商業を第二義的な無價値な仕事として、また商業従業員を全く役に立たぬ者とみなしてゐる。これらの黨員は、彼等がソヴェト商業に對する自己の傲慢な態度によつてボルシェヴィキ的見解を表明するのではなく、大に威張るが、何等の武装も持たないおちおちれた貴族の見解を表明してゐる、ということを理解してゐないのだ（拍手）。これらの人々はソヴェト商業が吾々と不可分の關係にあるボルシェヴィキの仕事であり、賣場事務員を含む商業従業員達はもし彼等が誠實に働きさえすれば、わが革命的ボルシェヴィキ的事業の先導者である、ということを理解してゐない（拍手）。黨がこれら

のいわゆる共産黨員達を少じやつつけて彼等の貴族的偏見を掃溜に捨ててしまわなければならなかつたという事は當然なことだ。(長く、續く、拍手)

さらに他の種類の偏見をも克服しなければならなかつた。つまりわが働き手達の一部の中に行われている左傾的饒舌のことだ。即ちソヴェト商業は恰もすでに経過した段階であり、吾々は生産品の直接交換制を實施しなければならぬ。貨幣は單なる勘定符號になつてしまつたから、間もなく廢されるであろう。もうすでに生産品の直接交換制の制定が肉迫しているから、商業を發達させる必要がない、というような左傾的饒舌家だ。ソヴェト商業の發達を破壊しようとする資本主義的分子に有利なこの左傾的ソブルジョアの饒舌は、『赤色教授連』の一部の中で行われているばかりでなく、若干の商業従業員の中でも行われている、という事を指摘しなければならぬ。勿論ソヴェト商業の最も簡単な問題をも解決する能力のないこれらの人々が、一層複雑な難しい生産品の直接交換制の問題を解決する自己の決意についておじやべりをする事は笑止千萬である。然しドン・キホーテ共は彼等が毫も實生活に對する感覺を持つていないが故にドン・キホーテと呼ばれもするのだ。マルクス主義から天と地程も遠く掛け離れているこれらの人々は、明かに貨幣がわが國においては共産主義の第一段階、即ち社會主義發展段階の完成に到る迄まだ長く殘存するであろうという事を理解していない。彼等は貨幣がブルジョア經濟の器具であり、それをソヴェト政權が掌握して全力をあげてソヴェト商業を發達させ、それによつて生産品直接交換制の諸條件を作るために、その器具を社會主義の利益に適應させたという事を理解しない。生産品交換制は完全に整備されたソヴェト商業と交換にのみ、またその結果としてのみ招來できる、そしてこのような完全に整備されたソヴェト商業はわが國には現在全く存在していないし、また中々やつて來ないであろうということが彼等には分らない。黨が發達したソヴ

エト商業を組織しようとしてこれら「左翼」の畸形兒共をやっつけ、また彼等の小ブルジョアの饒舌を吹き拂つてしまふことを必要としたのは當然なことだ。

さらに商品機械的に分配する商業従業員の不健全な習慣を克服し、品分けの要求及び消費者の要求に對する蔑視的態度を清算し、商品の機械的送込み及び商業における個人責任回避を絶滅しなければならなかつた。これらの目的のために州商業基地及び地區間商業基地が開かれ、數萬の新しい大小商店が開設された。

さらに市場における協同組合の獨占状態を清算しなければならなかつた。これと關連してすべての人民委員部をして、それぞれ所有の商品によつて商業を開始させ、配給人民委員部をして農業生産物によつて廣汎な商業を發達させなければならなかつた。その結果一面競争の方法で協同組合における商業を改善し、他面市場における價格を引き下げて市場状態の健全化を計ることになつた。

引き下げられた價格の食料品（「公共的食料品補給」）を賣捌く廣汎な食堂網を開設し、また大小工場に労働者給養部（「オルス」）を組織して、その工場に無關係の者に對して工場給養を停止した。而して重工業人民委員部の系統だけでも五〇萬人を下らない局外者に對し工場給養を停止することになつた。

短期貸附けの統一的集約的銀行、即ち地方において商業活動に資金を融通することができると二千二百の地區支店を持つた國立銀行を整理した。

これら諸施策の結果、吾々は報告期間中に次の成果を收めた——

（イ）商店及び小賣店網は一九三〇年の一八萬四六六二から一九三三年の二七萬七九七四に擴大した。

- (ロ) 新設の州商業基地網は一〇一一あり、新設の地區間商業基地網は八六四ある。
- (ハ) 新設の労働者給養部網は一六〇〇ある。
- (ニ) パン販賣店網は擴大して、現在では三三〇の都市に及んでいる。
- (ホ) 公共食堂網は擴大して、現在では利用者一九八〇萬人に及んでいる。
- (ヘ) 公共食堂を含む國立及び協同組合施設による商品取引は、一九三〇年の一八九億ルーブルから一九三三年の四九〇億ルーブルに増大した。

わが經濟の需要を満すにはこのようなソヴェト商業の發展のみで十分だと考えるのは間違いであらう。逆に商品取引の現状は吾々の需要を満すことが出来ない、ということとは従来よりも現今においてより明白になりつつある。従つて任務は、さらにソヴェト商業を發展させ、この仕事に地方工業を參加させ、コルホーズ農民的商業を強化して、ソヴェト商業の高揚の領域において新しい決定的成功を收めるべく努力するということにある。

然し問題はただソヴェト商業の發展のみに限定し得るものではないということを強調しなければならぬ。わが經濟の發展が商品取引の發達に、即ちソヴェト商業の發達に依存するとすれば、ソヴェト商業の發達は同様にわが輸送業の發達に即ち鐵道、水上並に自動車輸送業の發達に依存するのである。商品はあり、商品取引を發展させることが十分に出来るが、然し輸送が商品取引の發達に伴わず貨物を輸送することが出来ない、ということが起り得る。周知の通り、このようなことは本當にわが國では始終あることである。従つて、輸送機關が隘路であり、わが全經濟がまず第一にわが商品取引がそれに躓き得るし、而して恐らくもう躓き掛けているだらう。

なる程鐵道輸送業の貨物取扱ひ數は、一九三〇年の一三三九億トン・キロメートルから一九三三

年の一七二〇億トン・キロメートルに増加した。然しこれでは少い、吾々にとっては、わが経済にとつては余りにも少ない。

水上輸送業の貨物取扱い数は、一九三〇年の四五六億トン・キロメートルから一九三三年の五九億トン・キロメートルに増加した。然しこれでは少ない、わが経済にとつては余りにも少ない。

私はもう自動車輸送業に關しては語らない。が、自動車の總数は、一九一三年の八八〇〇台（貨物自動車及び乗用車）から一九三三年末の一萬七八〇〇台に増加した。これではわが國民經濟にとつて話すことさえも恥かしい程少い。

これらすべての種類の輸送業は、もし輸送諸機關が事務所的官僚的指導方法と呼ばれる周知の病氣にかからなかつたならば、遙かに良く仕事をする事が出来たであろうといふことは勿論である。従つて任務は人員及び資料を以て輸送業を援助する必要がある外に、輸送諸機關における仕事に對する官僚的事務所的な態度を根絶しそれらをより機動的にする、といふことにある。

同志諸君！吾々は努力の結果、工業の根本的諸問題の正しい解決を得た。工業は現在強固な足場をもつてゐる。吾々は努力の結果、農業の根本的諸問題の同様な正しい解決を得た。農業も——吾々はこのことを率直にいうことが出来る——同じ様に現在強固な足場をもつてゐる。然しもしわが商品取引がびつこになれば、而して輸送がわが國において足に附けた錘になるならば、吾々はこれらの成功を喪失してしまうのである。それ故に、商品取引の發達及び輸送業の決定的改善の任務は目下最緊急の任務であり、これが解決なくして吾々は前進することが出来ないのである。

二、黨

黨の問題に移ろう。

今度の黨大會はレーニン主義の完全な勝利の旗印の下に、反レーニン主義的グループ形成の殘滓清算の旗印の下に行われている。

トロツキストの反レーニン主義的グループ形成は粉碎され、四散された。このグループのオルガナイザー共は、今や國外においてブルジョア政黨の裏庭をほつつきまわっている。

右翼的偏向の反レーニン主義的グループは粉碎され四散された。そのオルガナイザー共はとつくの昔その見解を捨てて、今や彼等は黨の前に罪過をつぐなうためにありとあらゆる努力をなしている。

民族的偏向の色々なグループ形成は粉碎され、四散された。そのオルガナイザー共は或は終局的に武力干渉をたくらんでいる亡命者共と結合し、または公然と懺悔した。

これら反革命的グループの仲間の多數は、黨の方針の正しいことを認めざるを得なくなつて、黨の前に降服した。

第十五回黨大會においてはまた黨方針の正しさを證明し、一定の反レーニン主義的グループ形成に對する鬭争を遂行しなければならなかつたし、第十六回黨大會ではこれらのグループの最後の仲間を全く剿滅しなければならなかつたのであるが、こんどの黨大會においては、何も證明する必要がなく、恐らくやつつけるべき人もないだろう。すべての人々は黨の方針の勝利したことを見ているだ。(喝采の轟)

わが國の工業化の政策は勝利した。その結果は今日何人にも明かである。この事實に對していかなる異論をさしはさめるだろうか？

クラークの清算と全般的な集團農場化との政策は勝利した。その結果は同じく何人にも明かである。この事實に對していかなる異論をさしはさめるだろうか？

わが國の經驗を基礎として、單獨の一國において社會主義の勝利が全く可能であることが證明された。この事實に對して何の異論をさしはさむことができるだろうか？

これらすべての成功、まず第一に五カ年計畫の勝利が、あらゆる反レーニン主義的グループ形成を終局的に崩壊せしめ、全くこれを剿滅したことは明白である。

黨が今やいままでかつて見られなかつたほど一體として統一されていることは認めなければならぬ。(暴風のような長く、長く、喝采)

一、思想的・政治的指導の諸問題

だがこのことは、鬭争が終つて社會主義の今後の攻勢が無用なものとなつたことを意味するだろうか？

いや、そんなことはない。

このことは、わが黨内では萬事がうまく行つており、黨内には何等の偏向もはや起らないであろうし、従つて今や吾々は枕を高くして休んでもいいということの意味するだろうか？

いや、そんなことはない。

黨の敵、あらゆる種類の日和見主義者等、ありとあらゆる種類の民族的偏向者等を吾々は撃破した。だが、彼等のイデオロギーの残滓はなお個々の黨員の頭の中に巣くつていて、屢々現われてくる。黨を吾々は、これを取り巻く人間から切り離されているある物だと見なしてはならない。黨はこれを取り巻く環境の中に生きており、活動するのである。不健全な気分がしばしば外部から党内にはりこんでくることは何等不思議ではない。そしてこういう不健全な気分の基礎は、たとえわが國にはなお都市においても農村においてもまだ若干の中間層が存在していて、こういう気分に対する培養地をなすからであるに過ぎないとしても、疑いもなくわが國の中に存在するのである。

わが黨の第十七回黨會議は、第二次五カ年計畫實現にあたって最も基本的な政治的任務の一つは、「經濟と人間の意識とに存在する資本主義の残滓を克服する」ことであると宣明した。これは全く正しい思想である。だが、吾々がすでに經濟における資本主義のあらゆる残滓を克服してしまつたといひ得るだろうか？ いや、そういうことはできない。況んや、人間の意識内の資本主義の残滓を克服してしまつたなどとはなおさらのことである。これは、人間の意識がその發展において彼等の經濟的地位に遅れるからであるばかりでなく、ソヴェト同盟の經濟および人間の意識内の資本主義の残滓を復活させ、支持しようと努力している資本主義的包圍が今もなお存在しているからであり、これに對して吾々ボルシェヴィキは常に鬭争の準備を怠つてはならないのである。

この残滓がわが黨の個々の黨員の頭の中に、粉碎された反レーニン主義的グループ形成のイデオロギーを復活させるための適當な培養地たらざるを得ないことは、明白である。これにつけ加えて、わが黨の大部分の黨員のあまりに高くない理論的水準、黨機關の弱いイデオロギー的活動、わが黨役員

が純然たる實際的な仕事に追われている状態、——このために彼等は自己の理論的知識を豊富にする可能性を奪われている——を考えて見給え。しからは、しばしば吾々の出版物のうちに侵入し、粉碎された反レーニン主義的グループのイデオロギーの殘滓の復活を容易ならしめているところの、レーニン主義の多くの問題に對する個々の黨員の頭の中の混亂がどこから來るかを、諸君は理解するだろう。それだから鬭争は終つた、社會主義的攻勢の政策を遂行する必要はもはやない、などということではできないのだ。

吾々は一連のレーニン主義の問題を取り出し、これによつて粉碎された反レーニン主義的グループのイデオロギーの殘滓が若干の黨員の間にいかに生々と残つているかを例示することができ。

例えば階級なき社會主義社會の建設の問題を取り上げて見よう。第十七回黨會議は、吾々は階級なき社會主義社會の創造に向つて進んでいる、と聲明した。階級なき社會がひとりてにやつて來るものでないことは明かである。吾々はこれを戦い取り、すべての勤勞者の努力によつて建設しなければならぬ。即ちプロレタリアート獨裁の機關の強化によつて、階級鬭争の展開によつて、階級の廢止によつて、國內及び國外の敵との鬭争において資本主義的階級の殘滓を清算することによつて。

問題は明瞭であると思う。

だが、このレーニン主義の明瞭な、初歩的なテーゼの宣明が黨員の一部に少なからざる頭腦の混亂と不健全な気分とをひき起したことを誰が知らないであろうか？ スローガンとして掲げられた階級なき社會への吾々の前進のテーゼを、彼等は自然發生的な過程と理解した。そして彼等は考えた——階級のない社會を云々するなら、これは吾々が階級鬭争をもプロレタリア獨裁をも弱め、一般に國家

をも廢止してしまふことができるということの意味するわけだ。尤も國家はそうでなくてさえ近い將來に死滅するはずのものだがと。かくて、やがて階級はなくなる、——従つて階級鬭争もなくなる、従つて心配も不安もない、だから武器を捨てて階級の無い社會の來るのを待ちながら、安心して眠られる、こんなことを期待して彼等は馬鹿喜びをしたのだ。(會堂全體にドツと哄笑起る)

この頭腦の混亂とこの氣分とが右翼的偏向者の有名な見解と寸分違はず類似していることは、何等疑いはない。彼等右翼的偏向者の見解によつて、古いものはひとりでに新しいものの中へ成長伸入するだろう、そしてある日、吾々自身でも氣ずかないうちに、われらは社會主義社會に到達するだろうというのである。

諸君が見られる通り、擊破された反レーニン主義的グループのイデオロギイの殘滓は、十分復活可能であつて、その生活能力はまだなかなか喪失してはいないのである。

かかる見解の混亂とかかる非ボルシェヴィキ的氣分とがわが黨の多數を捕えたなら、その結果黨は動員解除され武装解除されるであらうということは明白である。

更に農業アルテリ(組合)と農業コンミュンの問題を取つて見よう。今ではすべての人が、アルテリが現在の情勢の下ではホルホーズ運動の唯一の正しい形態であることを認めている。そして次のことは全く明白なのだ——(一)アルテリはホルホーズ農民の個人的生活利益を正しく彼等の社會的利益と結びつける。(二)アルテリは個人的生活利益をうまい工合に社會的利益に適應させ、これによつて昨日の個人經營農民を集團主義の精神において教育することを容易ならしめる。

生産手段だけが社會化されているアルテリと違つて、コンミュンでは最近に到るまで生産手段のみならず、個々のコンミュン會員の生活條件も社會化されていた、即ちコンミュン會員はアルテリの

會員とちがつて、個人的所有として何等の家畜も、何等の小家畜も、牝牛も穀物も、菜園も持つていなかった。このことは、コンミュンにおいては會員の個人的生活利益があまり顧慮されずまた社會的利益と結びつけられず、むしろ個人的利益が小ブルジョアの支給均一化のための社會的利益によつて窒息させられていたことを意味している。これらの事情がコンミュンの最も大きな弱點である事は明かである。なせコンミュンがあまり大きく廣がらず、二三もしくは數十のコンミュンしか存在しないかは本來これによつて説明されるのである。同じ理由から、コンミュンはその存在を維持し、崩壊してしまわないためには、生活條件の社會化をやめざるを得なくなり、標準労働日制で仕事を始め、會員に穀物を渡し、家禽、小家畜、牝牛等々の個人的所有を許し始めた。だがこのことから、コンミュンは事實上アルテリになつてしまつたのだといふべきである。しかもこれは決して悪いことではない、何となれば、大衆運動としてのコルホーズ化の健全な發達の利益がこれを要求するからである。

このことは、勿論コンミュンが一般に必要なとか、もはやコルホーズ運動の最高形態でないとかいうことを意味しない。いや、コンミュンは必要である、それは、勿論コルホーズ運動の最高形態である。だがそれは、未發達の技術と生産物が不足している地盤の上に發生し、今やアルテリに變化しつつある現在のコンミュンではなく、より發達した技術と生産物の豊富な地盤の上に生れる未來のコンミュンである。現在の農業コンミュンは僅かしか發達していない技術と生産物が不足している地盤の上に發生した。かかるコンミュンが支給均一化をやり、會員の個人的生活利益を僅かしか顧慮しなかつたこと、それがために今やコルホーズ農民の個人的並に社會的利益が互に工合よく結合されているアルテリにならざるを得なくなつてゐることは、以上のことによつて本來説明されるのである。

將來のコンミュンは發達した裕福なアルテリから生れて來るであろう。將來の農業コンミュンは、アルテリの田畑や農場に穀物や家畜や家禽や野菜やその他すべての生産物があり餘る程出來るようになり、アルテリに機械化された洗濯所、近代的な料理場や食堂、パン工場等が生れ、コルホーズ農民が自己の牝牛や小家畜をもつてゐるよりも、農場から肉や牛乳を貰う方が自分に有利であることを悟り、コルホーズ農婦が食堂で食事をし、パン工場からパンを得、公共の洗濯所から洗濯された洗濯物を受け取る方が自分で食をつくつたり洗濯したりなんかするよりも利益であることを悟つた曉に生れてくるだろう。將來のコンミュンはより高度に發展した技術、より發展したアルテリ、生産物の豊富を土台として生れるであろう。いつこうなるだろうか？ 勿論すぐではない。だが、そうなるだろう。アルテリが將來のコンミュンへ轉化する過程を人爲的に促進することは罪惡だろう。かくするならばすべてを滅茶苦茶にし、吾々の敵の仕事容易ならしめるであろう。アルテリが將來のコンミュンに轉化する過程は、すべてのコルホーズ農民がこの轉化の必要を納得するに應じて、漸次的に行われるべきである。

このようなのが、アルテリおよびコンミュンに關する問題である。

萬事は明瞭で殆ど初步的である、と諸君は考えるだろう。

然るにこの問題について黨員の一部にはかなりの混亂がある。彼等はいふ、——黨はアルテリをコルホーズ運動の基本的形態であると宣言したのだから、黨は社會主義から離れたのだ、黨はコルホーズ運動の高度の形態であるコンミュンから低度の形態へ退却したのだ、と。なぜか？ という質問が起る。アルテリには、アルテリ會員の慾望や個人的生活状態に依然として相違が存在するから、そこには平等はない。然るにコンミュンには平等が存在している。何故ならここでは會員は慾望において

も個人的生活状態についても平等であるからだ、というのだ。だが第一に、慾望や個人的生活方法について平等化、支給均一化が行われているコンミュンは、わが國にはもはや存在していない。實踐は、もしコンミュンが支給均一化をやめて實際上アルテリにならなかつたならば、それは間違いなく崩壊しただろう、ということを示した。従つて現實にもはや存在しないものを引合に出すわけには行かない。第二に、すべてのレーニン主義者にとつて彼が眞實のレーニン主義者でさえあるなら、慾望や個人的生活状態の領域での均一化は反動的な、小ブルジョアのたわ言であり、何等かの原始的な禁慾宗にはふさわしいかも知らぬが、マルクス主義的に組織された社會主義的社會にはふさわしくないものであることが明かである。なぜならば、すべての人間が同じ慾望を持ち、同じ趣味を持ち、すべての人間がその個人的生活において同一の規範に従うことを何人も要求することはできないからである。最後に、労働者の間には、その慾望においても個人的生活方法においても依然として相違がありはしないだろうか？ だが、このことは労働者が農業コンミュンの會員よりも社會主義からより離れていることを意味するだろうか？

これらの連中は明かに、社會主義というものは社會成員の慾望や個人的生活状態の均一化、平等化、平均化を要求すると考えている。かかる見解がマルクス主義・レーニン主義と何等共通しないこととはいうまでもない。平等ということをもマルクス主義は個人的慾望と生活状態の領域における均一化と考へないで、階級の廢棄と理解する。即ち（一）資本家が倒壊され、收奪された後のすべての勤勞者の搾取者からの平等な解放、（二）生産手段に對する私有財産が全社會の財産になつた後、すべての人に對する生産手段の私有の平等な廢止、（三）自己の能力に應じて働くべき各人に對する平等の義務と、この労働に對してその働き高に應じて報酬を受くべきすべての勤勞者の平等な權利（社會主

義社會)、(四)萬人その能力に應じて働くべき平等の義務と、その勞働に對してその慾望に應じて報酬を受くべきすべての勤勞者の平等の權利(共産主義社會)。これに際してマルクス主義はその量においても質においても、人間の趣味と慾望とが社會主義の時代においても共産主義の時代においても同一乃至均一でなく、またそうではあり得ない、ということから出發してゐるのである。

これが平等についてのマルクス主義的見解である。

これ以外の平等をマルクス主義は認めなかつたし、また認めないのである。

以上のことから社會主義は社會成員の慾望の均一化、平等化、平均化、彼等の趣味と個人的生活状態の平均化を要求し、マルクス主義によれば、すべての人間は同じ着物をき、同じ食物を同じ量だけ食わなければならないという結論をひき出すことは、馬鹿々々しいことをしやべることであり、マルクス主義を中傷することである。

今やマルクス主義が均一化の敵であることをはつきり知るべき時である。すでに「共産黨宣言」の中で、マルクス及びエンゲルスは原始的な空想的社會主義を非難して、この空想的社會主義が「一般的禁慾主義と素朴な均一主義」を宣傳するという理由で、これを反動的だと名づけた。エンゲルスは「反デューリング論」の中で、デューリングがマルクス主義的社會主義に反對して提起したところの「過激な平等化的社會主義」に對する攻撃的批判に一章をささげた。

「プロレタリアの要求する平等の眞實の内容は階級廢棄の要求に歸結される。それ以上の平等の要求は不可避免的に沒常識に導くものである」とエンゲルスはいつた。

これと全く同じことをレーニンもいつている――

「エンゲルスが階級の廢棄以上に出る平等の概念は、極めて馬鹿々々しい不合理な偏見であると書いた時、彼は千度も正しかつた。ブルジョア教授連は吾々が人間を皆平等ならしめようと欲しているのだといって、平等の概念に關して吾々を攻撃しようと試みた。彼等自身が考え出したこのナンセンスを彼等は社會主義者に歸せようと努めたのだ。彼等は然しながら、その無智のために、社會主義者が、そして正に現代科學的社會主義の創建者であるマルクス及びエンゲルスが、平等ということ階級の廢棄と理解しないならば、平等は一つの空語である、と宣明したことを知らなかつた。吾々は階級の廢棄しようと欲している、この意味で吾々は平等に賛成である。だが吾々はすべての人間を均一化させようと欲しているのだ、と主張することは、無意味な言葉であり、インテリの馬鹿々々しいつくり話である。」（レーニンの演説「如何に彼等は民衆を自由と平等のスローガンで欺瞞するか」、第二四卷、二九三—二九四頁）

これは明瞭なことであると思う。

ブルジョア著作家連は好んでマルクス主義的社會主義をすべてが均一化の「原則」の下に従屬させられている昔のツァーの兵營であるかのように表現する。だが、マルクス主義者はブルジョア著作家連の無智と愚鈍とに對して責任を負うわけにはゆかない。

マルクス主義的社會主義と農業コンミュンの均一化傾向に對する熱中とについて二三の黨員中に見られるかかる見解の混亂は、かのわが黨内の「左翼的」な馬鹿者共の小ブルジョアの見解と符節を合せるように類似していることは、何等疑いのないところである。彼等「左翼的」馬鹿者共にあつては、一時農業コンミュンの理想化は、彼等が工場・製造所内にコンミュン——ここでは熟練労働者も未熟練労働者も各々その職をやりつつ勞賃を合せて平等に分配せねばならないのだ——を造ろうと企てる

迄にいたつたのである。「左翼的」馬鹿者の子供じみた均一化の練習がわが國の工業にいかなる損害を與えたかは何人にも周知のことである。

諸君が見られる通り、黨に敵對する擊破されたグループのイデオロギーの殘滓はかなり強い生活能力を持つていたのである。

この「左翼的」な見解が黨内で勝利を占めたならば、黨はマルクス主義的黨たることをやめ、コルホーズ運動が全く解體せしめられたであろうことは明かである。

話をかえて「すべてのコルホーズ農民を裕福ならしめよ！」というスローガンを取つて見よう。このスローガンはコルホーズ農民のみにあてはまるのではない。これはなお一層強く労働者にあてはまるのである。なせならば、われらはすべての労働者を裕福ならしめ、彼等を裕福な、眞に文化的な生活を送る人間にしようと欲じているからである。

諸君は問題は明瞭じやないかと考えるかも知れない。吾々がわが國ですべての人が裕福に生活するようにできないなら、一九一七年十月に資本主義を倒壊し、幾年かを費して社會主義を建設することに、何の意味があるだろうか？ 社會主義は困苦と窮乏とを意味しない。それは困苦と窮乏との廢止、社會のあらゆる成員に對する裕福な、文化的生活の創造を意味する。

然るにこの明瞭な、本質的にいえば、全く初歩的なスローガンは黨員の一部の中に多くの疑惑、混亂、混迷をひき起した。彼等はいふのだ、——このスローガンは昔の、黨から排撃された、「富め」というスローガンに歸するものではないか？ と。彼等は續けていふ——すべての人間が裕福になつて貧農が存在しなくなれば、吾々ボルシェヴィキは、その活動に當つて誰によりかかるとであろうか、どうして吾々は貧農なしに活動して行けるであろうか？ と。

こんなことをいうのは恐らく馬鹿げたことだろう。だが、かかる素朴な、反レーニン主義的見解が黨員の一部に存在していることは争うべからざる事實であつて、吾々はこれを考慮に入れなければならない。

この連中は確かに、「富め」というスローガンと「すべてのコルホーズ農民を裕福ならしめよ！」というスローガンとの間に大きな深淵が横たわつていることを理解していないのである。第一に自らを富ます事ができるのは個々の人間やまたはグループのみに過ぎないが、裕福な生活のスローガンは個々の人間やグループにあてはめられるのではなく、すべてのコルホーズ農民にあてはめられるのである。第二に個々の人間やグループは、外の人間を従属させ、これを搾取するために自らを富ますのであるが、コルホーズにおいて生産手段が社會化された場合でのすべてのコルホーズ農民の裕福な生活というスローガンは、一人の人間による他の人間の搾取のあらゆる可能性を排除するのである。第三に「富め」というスローガンはネットプの初期に、即ち資本主義が部分的に復活され、クラークは強く、国内には農民の個人經營が優勢を占めており、コルホーズはまだ胎兒の状態にあつた時に出されたのであるが、これに反して「すべてのコルホーズ農民を裕福ならしめよ！」というスローガンはネットプの末期、即ち工業においては資本主義的要素が廢棄され、農村においてはクラークが絶滅され、個人的農民經營はうしろにおしのけられ、コルホーズが農業の支配的形態になつた時に掲げられていたのである。「すべてのコルホーズ農民を裕福ならしめよ！」というスローガンは孤立的にかかげられたものでなく、「コルホーズをボルシェヴィキのコルホーズならしめよ！」というスローガンと切り離し難い關係においてかかげられたものであることについては、もはや語るまでもあるまい。

『富め』というスローガンがその實、資本主義を復活させる要求を意味しているのに反して、『すべてのコルホーズ農民を裕福ならしめよ！』というスローガンが、コルホーズの經濟力を強め、すべてのコルホーズ農民を裕福な勤勞者に變化させることによつて資本主義の最後の殘滓を完全に剿滅する要求を意味していることは、明かではないか？（叫び、全く正しい！）

この二つのスローガンは何等共通點を持たず、また持ち得ないことは明かではないか？（叫び、全く正しい！）

貧乏人がなければ、ボルシェヴィキ的活動も社會主義も考え得られない、という主張について見れば、こんなことは語るにさえ耐えられない位馬鹿々々しい話である。レーニン主義者は資本主義的諸要素が存在し、貧乏人が資本家に搾取される場合には、貧乏人に支持點を求め、だが資本主義的諸要素が擊破され貧乏人が搾取から解放された時には、レーニン主義者の任務は、その存在條件がすでに除去されたところの貧窮と貧乏人を永久ならしめ、維持することではなく、貧窮を廢棄し、貧乏人を富裕な生活へと導くことである。社會主義は困苦と窮乏と、個人的慾望を減縮し貧乏人の生活水準まで人間の生活水準を低下することによつて建設され得るのだと考えることは馬鹿々々しいことである。貧乏人自身がいつまでも貧乏でいることを欲しないし、裕福な生活へと努力しているのだ。誰がこんなエセ社會主義を必要とするだろうか？ それは社會主義ではなく、社會主義の戲畫である。社會主義は社會の生産力の急激な成長と、生産物と商品との豊富と、勤勞者の裕福な生活と、文化の急激な成長との土台の上のみ建設できるのだ。なせならば、社會主義、マルクス主義的社會主義は、個人の慾望の減縮を意味しないで、その全面的擴大と展開とを意味し、これらの慾望充足の制限または斷念を意味しないで、文化的に高度の段階に立つている勤勞者の、すべての慾望を全面的に、完全に充足させることを意味するからである。

貧窮と裕福についての個々の黨員の持つている見解のかかる混乱は、貧窮をあらゆる事情の下でのボルシェヴィズムの永久の支柱として理想化し、コルホーズを激烈な階級闘争の舞台の如くみなしている吾々の『左翼的』馬鹿者共の見解の反映であることは、何等疑いをさしはさみ得ないところである。

諸君が見られる通り、この場合においても、即ちこの問題においても、粉碎された反黨的グループのイデオロギーの残滓は、まだまだその生活力を失っていないのである。

かかる混乱した見解がわが党内で勝利したならば、コルホーズは、最近二年間に収めた成功を認め得ず、ごく僅かの時間の中にばらばらに崩壊したであろう、ということとは明かである。

次に例えば民族問題をとつて見よう。ここでも、即ち民族問題においても、他の問題と同じように、黨の一部に多少の危険を生む見解の混乱が存在している。私はすでに資本主義の残滓のねばり強いことについて語つた。なお指摘せねばならないことは、人間意識内の資本主義の残滓は、いかなる他の領域におけるよりも民族問題の領域では遙かにねばり強いということである。この残滓はヨリねばり強い、何となれば、それは、民族的ころもでよく身をかくす可能性を持つているからである。多くの人は信じている、スクリプニクの罪過は特殊の場合である、例外のことであると。だがそれは正しくない。スクリプニク及び彼のグループのウクライナでの罪過は決して例外ではない。これと同じ精神錯亂を吾々は他の民族共和国においても一部の同志の中に認めることができる。

大ロシア的民族主義的偏向であろうと、地方的民族主義的偏向であろうと、全く同じだが、民族主義的偏向とは一體何を意味するか？ 民族主義的偏向とは労働者階級の國際主義的政策をブルジョアジーの民族主義的政策に適應させることである。民族主義的偏向は、ソヴェト制度を掘り崩し、資本

主義を再建しようとする「自己の」、「民族的」ブルジョアジの企てを反映している。二つの民族的偏向の源は、諸君が見るように、同一である。それは、レーニン主義的國際主義からの轉向である。吾が以上二つの偏向を撃滅しようと思うならば、まず第一にこの源を撃たなければならない、即ちそれが地方的民族主義的偏向であろうと、大ロシア的民族主義的偏向であろうと、共に國際主義を捨ててこの源をである。（暴風のような喝采）

大ロシア民族主義的偏向と地方的民族主義的偏向とどちらが主要な危険であるかを人々は論争している。だが、現在の事情の下においてはこれは形式主義的な、従つて空虚な論争である。何が主要な危険で何が主要な危険でないかに関して、いずれの時、いずれの事情のもとでも用いられる、できあがつた處方箋を與えることは、馬鹿々々しいことであろう。こんな處方箋なんかは一般に現實世界には存在していない。吾々がこれに對して鬭争することをやめ、かくて國家に對する危険にまで増長せしめた偏向、——かかる偏向が主要な危険なのである。（長く、續く、拍手）

ウクライナではウクライナ民族主義的偏向はまだごく最近まで主要な危険ではなかつた。だが、これに對する鬭争をやめ、この偏向を、それが武力干涉者と共同の活動をする迄増大させた時、この危険は主要な危険となつた。民族問題における主要危険の問題は空虚な形式的な論争によつて決定されるものではなく、與えられたる瞬間における事態のマルクス主義的分析と、この領域で犯された誤謬の研究とによつて決定されるのである。

これと同じことを吾々は一般政治の領域での右翼的並に「左翼的」偏向についてもいわなければならない。この場合においても他の領域におけると同じように、一部のわが黨の黨員の見解には少なからぬ混亂が存在している。多くの場合右翼的偏向に對する鬭争をやる場合には「左翼的」偏向に對

して手をゆるめ、これに對する鬭争を弱めている。それは、彼等がこの「左翼的」偏向は何等の、もしくは僅かな危険でしかないと信じているからである。だがこれは、重大な、かつ危険な誤謬である。これは、黨員として許し難い、「左翼的」偏向に對する讓歩である。しかも最近においては「左翼」は終局的に右翼の地位に滑り落ち、その實右翼と何等相違しないにおいておやである。

吾々は絶えず聲明した、——「左翼」は右翼と全く同一であつて、彼等の右翼的正體を「左翼的」言葉で飾つていたのであると。今や「左翼」自身この吾々の聲明を證明している。去年のトロツキー主義者の「ブユレット」の各號を取つて見よ。トロツキストの紳士諸君はこの中で何を要求し何について書いているか？ 彼等の「左翼的」綱領は何であるか？ 彼等は要求する——採算がとれないという理由で、ソフホーズの解散を、それは人爲的にこねあげたものだからという理由で、コルホーズの大部分の解散を、クラーク清算政策の斷念を、利權特許の政策に戻り、而して採算がとれぬというのでわが國の大多數の工業經營の利權所有者への拂下をなすことを。

ここに諸君は輕蔑すべき卑怯者と投降者の綱領を、ソヴェト同盟において資本主義を復活しようとする反革命的綱領を見るのである！

この綱領は最右翼の綱領とどこで相違するか？ 何等相違がないことは明かである。かくして「左翼」は、右翼と共にブロックを造り、黨に對して共同の鬭争を遂行するために、公然と右翼の反革命的綱領に賛同したのである。

以上のすべての事實を見た後で、「左翼」は何等の危険を持つていないとかまたは僅かの危険にしかすぎないとか、どうしていえるであらうか？ こんな馬鹿々々しいことを喋舌る連中は、レーニン主義の不倶戴天の敵に加勢していることは明かではないか？

諸君が見られる通り、ここにおいても、即ち黨の方針からの偏向においてもまた——それが一般政治における偏向であろうと、民族問題における偏向であろうと——人間意識内にわが黨個々の黨員の意識内における資本主義の殘滓はかなり粘り強い生活力を持つていたのである。

以上諸君は、黨の個々の分子に不明確な見解、混亂、いやレーニン主義からの直接の偏向が存在してゐるところの、吾々の思想的・政治的活動の若干の重大な、緊急な問題を見たわけである。だが個々黨員の見解内の混亂を示すことができる問題は、これだけに限らない。

以上述べた事實を見た後でも、わが黨内では萬事が工合のいい状態にある、ということができるだけだろうか？

明かに否である。

思想的・政治的活動領域における吾々の任務は、従つて左の點にある——

- 一、黨の理論的水準を必要な高さに引きあげることに。
- 二、黨のすべての部分においてイデオロギー的活動を強化すること。
- 三、レーニン主義を黨の陣列内で倦まずたゆまず宣傳すること。
- 四、黨の組織及びこれを取り巻いてゐる非黨員の活動家をレーニンの國際主義の精神で教育すること。
- 五、若干同志のマルクス主義・レーニン主義からの偏向を糊塗せず勇敢にこれを批判すること。
- 六、レーニン主義に敵對的な潮流のイデオロギー及びその殘滓を系統的に暴露すること。

二、組織的指導の諸問題

私は吾々の成功について語つた。私は、國民經濟及び文化の領域においてもまた黨内の反レーニン主義的グループ形成克服の領域においても、黨の方針が勝利を獲得したことを語つた。私は吾々の勝利の世界史的意義について語つた。だがこのことは、吾々が到る處でまたすべての問題において勝利したことを意味しないし、すべての問題がすでに決定された、ということの意味するものではない。かかる成功や勝利は一般に現實には存在しない。わが國では依然として多くの解決されない問題や、ありとあらゆる缺陷が残つてゐる。吾々の前には解決されねばならない多くの任務がある。だが、このことは疑いもなく、緊急當面問題の大部分がすでに成功的に解決せられたことを意味し、この意味でわが黨の偉大な勝利は疑いをさしはさむ余地はない。

だが疑問が起る、即ちこの勝利はどうして得られるか？ この勝利は實踐的にはいかにしてもたらされたか？ いかなる闘争によつてか？ いかなる努力によつてか？

若干の人はこう考える、——勝利がいわばひとりで来るためには、正しい黨の方針を編み出し、これを全世界の前に宣明し、これを一般的テーゼ及び決議の形で書き現し、満場一致で承認すれば、それで十分であると。これは勿論正しくない。これは大きな誤解である。救い難い官僚主義者や役人根性の者のみがこんなことを考えるのだ。實際において、この成功と勝利はひとりで来たわけでは決してない。それは黨の方針遂行のための激烈な闘争において獲得されたものである。勝利は決してひとりでやつて来るものではない。それは通常苦闘の後にかちとられなければならない。黨の一般方針に對する立派な決議や聲明は、ただ仕事の端緒にすぎない、なせなら、それはただ勝利しよう

という希望を意味するだけのものであつて、勝利それ自身ではないからである。正しい方針、問題の正しい解決が與えられたならば、仕事の成功は組織的活動、黨方針遂行のための闘争の組織、人間の正しい選擇、指導機關の決議實行に對する検査に依存する。これがなければ、正しい黨の方針、正しい決議であつても重大な損害を受ける危険がある。いや、そればかりではない。ただしい政治的方針が與えられるならば、すべてが、即ち政治的方針の運命自身も、その遂行もしくは失敗も、すべてが組織的活動に依存するのである。

實際においては勝利は黨方針遂行の途上にあらゆる困難との系統的な、執拗な闘争によつて、これらの困難を克服することによつて、困難を克服するためには黨及び労働者階級を動員することによつて、困難を克服するための闘争を組織することによつて、無能な役員を罷免し、困難に對する闘争を遂行する能力をもつた優秀な人物を選抜することによつて、獲得されたのである。

それはいかなる種類の困難であるか、そしてどこにその困難があるか？

これらの困難は、吾々の組織的活動の困難であり、吾々の組織的指導の困難である。この困難は、吾々自身の中に、即ち吾々の指導的役員の中に、吾々の組織の中に、吾々の黨組織、ソヴェト組織、經濟機關、労働組合組織、青年組織及び他のあらゆる組織内にあるのである。

吾々は、わが黨組織、ソヴェト組織、經濟機關及び他のすべての組織とその指導者の力と權威とが非常に高まつたことを理解しなければならぬ。そしてまさしく、これらの力と權威とが非常に高まつたからこそ、今や萬事が、または殆ど萬事がこれら組織の活動に依存するのである。いわゆる客觀的事情を引き合いに出してくることは、全く正當でない。黨の政治的方針の正しいことが數年の經驗によつて證明され、この方針を支持しようという労働者及び農民の用意についてもはや何等疑いをさ

しはさむ余地がなくなつた今日、いわゆる客觀的事情の役割は最少限に減つてしまつた。これに反して吾々の組織とその指導者の役割とは決定的な、絶對的なものとなつた。だがこのことは何を意味するか？このことは、吾々の仕事の缺陷や不十分さに對する責任は今後十分の九まで「客觀的」事情にではなく、吾々自身、しかも、吾々自身のみを歸せらるべきものであるということの意味するのである。

吾々は黨内に二百萬をこえる黨員と候補者を持つてゐる。吾々は共産青年同盟に四百萬以上の同盟員と候補者を持つてゐる。吾々は三百萬以上の勞農通信員を持つてゐる。オンアヴィアヒム（ソ同盟國防飛行化學建設後援會の略稱）には吾々は一十二百萬以上の會員を、勞働組合には一千七百萬以上の會員をもつてゐる。吾々の成功は、これらの組織のおかげである。しかも成功の獲得を容易ならしめる、かかる組織と可能性とがあるにもかかわらず、もし吾々が仕事に少なからぬ不十分さと少なからぬ缺陷をもつてゐるなら、ただ吾々のみが、吾々の組織的活動、吾々の悪い組織的指導のみがその責めを負うべきものである。

吾々の行政機關内の官僚主義と役人根性、生々した、具體的な指導の代りに、「概括的な指導」云々のおじやべり、各組織の職能別構成と個人的責任の缺如、仕事における個人責任分散制と勞働賃金均等支給制、仕事の遂行に對する系統的な検査の缺如、自己批判に對する恐怖、——これらが吾々の困難の源であり、ここに現在吾々の困難がかくれているのである。

だが、かかる困難を決議文や決定を以て克服できるだろうと考えることは誠におめでたいといわなければなるまい。官僚主義者や役人根性のも共は、いかに言葉だけで黨及び政府の決定に對して忠誠を示し、しかも實際には決定をおつぱりだとしておくかという技術ではとうの昔一かどの腕前を獲得してゐるのである。この困難を除去するためには、黨は、黨の政治方針の要求にくらべて、吾々の組

織的活動の立遅れている状態を清算し、國民經濟のすべての領域において組織的指導の水準まで引きあげ、吾々の組織的活動が黨の政治的スローガンと決定との實踐的遂行を確實ならしめるようにしなければならなかつたのである。

この困難に打ち勝ち成功を収めるためには、これらの困難を克服するための闘争を組織し、労働者農民大衆をこの闘争に引き込み、黨自身を動員し、黨及び經濟的組織から信頼し難い、動搖的な、變心した分子を除去しなければならなかつた。

これがためには何が必要であつたか？

(一)、吾々は自己批判を展開し、吾々の活動の缺陷をあばき出さなければならなかつた。

(二)、黨組織、ソヴェト組織、經濟機關、労働組合及び青年の組織をこの困難に對する闘争に動員しなければならなかつた。

(三)、労働者農民大衆を黨及び政府のスローガン並に決定遂行のための闘争に動員しなければならなかつた。

(四)、勤勞者の中で社會主義的競争と突撃隊的活動を展開しなければならなかつた。

(五)、機械トラクター・ステーション及びソフホーズに廣大なる政治部網を造り、黨及びソヴェトの指導を農村に接近させなければならなかつた。

(六)、人民委員會、中央管理部およびトラストを分體整理し、經濟的指導を工場に接近させなければならなかつた。

(七)、仕事における個人責任分散制を除去し、労働賃金均等支給制を矯正しなければならなかつた。

(八)、「職能別制度」を除去し、個人の責任を強め、共同的指導制廢止の方針を取らなければならなかった。

(九)、遂行の検査を強め、この検査をもつと強める意味で、中央統制委員會と労働者農民監察院との組織替の方針をとらなければならなかった。

(十)、熟練した経験のある役員を事務室から生産地點に近ずけなければならなかった。

(十一)、救い難い官僚主義者と役人根性の連中を暴露し、行政機關から彼等を追い拂わなければならなかった。

(十二)、黨および政府の決定に違反する者、ほら吹、おしやべりをその地位から去らせ、その代りに新しい人物、即ちまかされた仕事の具體的な指導を保證し、黨及びソヴェトの規律を強める活動的人物を据えなければならなかった。

(十三)、ソヴェト機關及び經濟機關を清掃し、その人員を縮少しなければならなかった。

(十四)、最後に黨から信頼し難い、變心した人間を除去しなければならなかった。

以上が大體困難に打ち勝ち、吾々の組織的活動の水準を政治的指導の水準まで引き上げ、かくして黨方針の遂行を確保するために、黨が提起しなければならなかった方策であった。

わが黨の中央委員會が報告期間にそのすべての組織的活動を正しくこの意味で遂行したことは諸君の知るところである。

中央委員會は、この際、組織的活動の主眼は人物の選擇と遂行の検査とである、というレーニンの天才的思想に従つて行動した。

人物の選擇と役に立たない人間の罷免について私はなお二三言いたいと思う。

救い難い官僚主義者と役人根性のものの外に——かかる人間を罷免することについては吾々の間に何等意見の相違はない——なお、吾々の仕事を妨害し、吾々の仕事を邪魔し、吾々の前進を妨げる二つの型の役員がある。

この中第一の型の役員は、過去に多少の功勞があつて、高官になつた連中である。彼等は考える、黨やソヴェートの規則は彼等のためにつくられたものでなく、馬鹿者のためにつくられたものである。これは、黨や政府の決定を實行することを自分の義務と考えず、かくして黨およびソヴェートの規律の基礎をぶち壊している連中である。黨およびソヴェートの規則を破りながらしかも彼等は何を當てにしているのであるか？ 彼等はソヴェート權力が彼等の昔の功勞にめんじて彼等に手をつけはしないだろう、ということに當てにしているのだ。これらの傲慢不遜な高官共は、彼等はかけがえのない人間だ、それだから指導機關の決定を破つても罰せられないのだと信じている。こういう役員を一體どうすべきであるのか？ 吾々は昔の功勞などを顧慮せず、躊躇することなく指導的地位から彼等を罷免しなければならない（叫び聲、賛成！）。吾々は彼等を罷免し、彼等を低い地位に落とし、これを新聞に發表しなければならぬ（叫び聲、賛成！）。これは、こんな傲慢な高官の官僚主義者から彼等の自負心をたたき出し、而して彼等に適當な地位を與えるために必要である。これは吾のすべての活動において黨及びソヴェートの規律を強化するために必要である（叫び聲、賛成！、喝采）。

今や私は第二の型の役員に移ろう。これはおしやべり、そうだ、正直なおしやべりの型（哄笑）で、正直な人であり、ソヴェート權力に對して忠實であるが、指導する能力がなく、何事かを組織するなどという能力は少しも持つていない連中である。私は昨年一人のこんな同志と會談したことがあ

る。彼は非常に尊敬すべき同志ではあるが、どうにも手に負えないおじやべりで、彼にかかるとどんな重大な仕事も饒舌のためにだいなしになつてしまふのだ。私は、彼と次のような會話をした。

私、君の方では種蒔きはどうかだね？

彼、種蒔きですか、同志スターリン！僕達は動員されているんです。（哄笑）

私、そしてどうするのかね？

彼、僕達は問題を單刀直入に提出したんです。（哄笑）

私、うんそれから？

彼、同志スターリン、僕等は轉換期に直面しているのです、やがて轉換が起るでしよう（哄笑）

私、それでどうなるんだね？

彼、僕達の方ではもう變動が現われています。（哄笑）

私、君達の種蒔きはつまりどうだというのだね？

彼、同志スターリン、今のところ僕達の方では種蒔きはさつぱり駄目です。（會場一齊に

哄笑）

諸君はここにおじやべりの例を見るわけだ。彼等は動員されている、問題を單刀直入に提出し

た、轉換と變動とを見た、だが仕事はちつとも進まない。

ごく最近ウクライナの一労働者は、ある人が組織内に方針があるかどうかと聞いた時に、ちようどこれと同様なふうにもその組織の状態を述べた、——「方針かね、方針は勿論ありませう、だが活動

がさつぱり見えないだけなんです」(一、齊に哄笑)。この組織に正直なお喋舌りのいることは明かである。

もし吾々がこんなおしやべりをその地位から罷免し、出来るだけ彼等を工作的な仕事から遠ざけると、彼等はびつくりして、何が何だか譯が分らないというふうに質問する、——「なぜ僕達を免職するんだ？ 僕達は仕事に必要なものは皆やつたじやないか？ 僕達は突撃隊労働者の集會を組織したじやないか？ 僕達は突撃隊労働者の協議會で黨と政府のスローガンを宣明したじやないか？ 僕達は中央委員會政治局の全員を名譽主席團に選んだじやないか(一、齊に哄笑)、僕達は同志スターリンに挨拶文を送つたじやないか？ 一體何をもつとやれというんだ？」(一、齊に哄笑)。

こんな手に負えないおしやべりはどうすべきであるか？ 彼等を工作的仕事に置いておけば、彼等はあらゆる重大な仕事を内容のない、長つたらしい演説で台なしにしてしまうのだ。吾々が彼等を指導的な地位から退け、彼等に他の、非工作的な仕事を與えなければならぬことは明かである。工作的な仕事にはおしやべりに與える席は全然ない。(叫び聲、贊成！ 喝采！)

中央委員會がソヴェト及び經濟機關で人物の選擇をどういうふうにやつたか、どういうふうに決定の實行の検査を強化したか、このことについては、私はすでに簡単に述べた。詳細には同志カノグイチが黨大會日程の第三項で諸君に報告するだろう。

今後さらに決定實行の検査を強化することについて、私はなお二三言いたいと思う。

決定實行の検査を正しく組織することは、官僚主義及び役人根性に對する鬭争にとつて決定的な意義を持つてゐる。指導機關の決定が實行されているか、または官僚主義者及び役人根性の連中によつて放りばなされているか？ 決定が正しく實行されているかまたは歪曲されているか？ 機關が眞

面目にボルシエヴィキ的に活動しているかまたは従らにからまわりしているか？ すべてこれらの點は決定實行の検査がよく組織されている結果、はじめて適時に知ることができるのである。よく組織された決定實行の検査は、一つの機關の活動状態をいかなる時でも知り、官僚主義や役人根性の連中を白日の下に暴露するための探照燈である。吾々は確實にこういうことができる、——吾々の手落ちや缺陷の十分の九は、正しく組織された決定實行の検査がないことから説明されると。かかる決定實行の検査があるならば、手落ちや缺陷が確實に豫防されたであろうことは何等疑いもない。

だが、決定實行の検査がその目的を達するためには、少くとも二つの條件が必要である。即ち第一には、決定實行の検査が系統的であつて偶發的でないこと、第二には、黨、ソヴェト、經濟團體のすべての機關の決定實行検査の尖端には第二流の人物でなく、十分權威ある人物、組織の指導者自身が立つということである。

最大の重要性をもつものは、中央指導機關のための實行検査の正しい組織である。労働者農民監察院はその組織からいつて實行の検査を十分に行うという要求を充すことはできない。數年前經濟的領域でのわれわれの活動が簡單で不十分であつた時、またすべての人民委員會の活動とすべての經濟機關の活動とを検査する、可能性を期待することができた時には、労働者農民監察院は適切なものであつた、だが經濟的領域における吾々の活動が増大し、複雑となり、この活動を一つの中心點から検査する必要も可能性もなくなつて現在の現では、労働者農民監察院は改造されなければならない。吾々は現在何等の監察院をも必要としない。吾々は中央機關の決定の實行を検査することが必要である。今や吾々は中央機關の決定の實行に對する検査を必要とする。今や吾々はすべてを検査しようとする。

いう一般的な目的をその任務とせず、ソヴェト權力の中央機關の決定がいかにかに實行されているかを監督し検査することにその全注意を集中できるような組織を必要とする。かかる組織たり得るものは、人民委員會議の命令に従つて活動し、地方的組織から獨立した代表者を現地にもつているところの、ソ同盟人民委員會議所屬のソヴェト統制委員會のみであらう。だが、この統制委員會が十分の權威をもち、必要な時にはどんな責任ある役員をも糺弾できるためには、ソヴェト統制委員會の委員候補者が黨大會で決定され、人民委員會議及びソヴェト同盟中央執行委員會で確認されることが必要である。私にかかる組織のみがソヴェトの統制とソヴェトの規律を強化できると考える。

中央統制委員會についていうならば、この委員會は周知のように、第一に、また主に黨の分裂を防ぐためにつくられたものであつた。諸君は一時黨分裂の危険がわが黨に存在していたことを知つてゐる。諸君は中央統制委員會とその組織とが分裂の危険を防ぎ得たことを知つてゐる。だが、わが黨には現在分裂の危険はもはやない。だが、その代りに吾々は黨及び黨中央委員會の決定實行の検査に主要注意を集中できる組織を非常に必要としてゐる。かかる組織たり得るものは、ただ黨及び黨中央委員會の命令で活動し、地方組織から獨立した代表者を現地にもつてゐるソヴェト同盟共産黨中央委員會所屬の黨統制委員會のみである。かかる責任ある組織が大きい權威をもつていなければならぬことはいふまでもない。だが、この組織が十分な權威をもち、何らかの罪を犯したものはどんな責任のある役員でも——これには中央委員も入る——これを糺弾し得るためには、この黨統制委員會の委員が黨の最高機關、即ち黨大會のみによつて選定、罷免され得るものであることが必要である。かかる組織が眞に黨中央機關の決定遂行の検査を確保し、黨の規律を強化できるだろうといふことは何等疑いない。

以上が組織的指導の問題についてである。

組織的活動の領域での吾々の任務は次の點にある――

一、將來においても吾々の組織的活動を黨の政治的方針の要求に追いつかせ、またさきだたせること。

二、組織的指導を政治的指導の水準まで引きあげること。

三、組織的指導が黨の政治的スローガン及び決定の遂行を保證するまでに到らしめること。

* * *

同志諸君！ 私の報告演説は終りに近ずいた。

以上の報告からいかなる結論が出てくるか？

現在すでにすべての人は、吾々の成功が素晴らしいものであり、異常なものである事を認めている。わが國は比較的短期間において工業化と集團農場化の軌道の上に引き入れられた。第一次五カ年計畫は成功的に遂行された。この事實は吾々の役員の間には誇りの感情と自分の力に對する信頼の念とを呼び起している。

これは勿論いいことである。だが、成功は時としてまた悪い反面をももっている。成功は時として若干の危険、即ちこれを發展させるならば、全事業を崩壊せしめ得るような若干の危険を生むのである。例えば、若干の吾々の同志がかかる成功によつて有頂天になる危険がある。かかる事件は諸君も知っている通り、わが黨にもあつた。吾々の若干の同志が勝利に眩惑してついに御得意になり、例えば、「矢でも鐵砲でもやつて來い」、「吾々はどんな敵でもやすやすとやつつけてしまふのだ」などと大言壯語を事とするようになる危険がある。同志諸君、こんなことは全然あり得ないとは

いえないのだ。こんな気分ほど危険なものはない。なせなら、こんな気分は黨を武装解除せしめ、その陣列を動員解除せしめるからである。もしこんな気分がわが黨内に優勢を占めるならば、吾々のすべての成功が全く破壊される危険が起るだろう。

たしかに吾々は第一次五カ年計畫を成功的に遂行した。これは間違いないことだ。だが同志諸君、これだことが終つたのではなく、終るわけのものでもない。吾々の前には第二次五カ年計畫があり、これを吾々は同様に遂行、しかり成功的に遂行しなければならぬ。諸君は知つてゐる、計畫はいろいろの困難に對する闘争において、困難を克服する過程において初めて實現されるということ。これは今後いろいろの困難があるということ、困難に對する闘争があるだろうということ、意味する。同志モロトフと同志クイヴィシエフは、第二次五カ年計畫について諸君に報告するだろう。そして彼等同志の報告から、諸君はこの偉大な計畫を實行するに當つて如何に大きい困難を克服しなければならぬかを知るだろう。だから吾々は黨を眠り込ますべきではなく、その警戒性を鋭くしなければならぬ。吾々は黨を眠らすべきでなく、これを戦闘準備の状態に保たなければならぬ、吾は黨を武装解除すべきではなく、これを武装すべきであり、動員解除すべきでなく、黨を第二次五カ年計畫遂行のために動員状態に保たなければならぬ。

以上のことから第一の結論が生れてくる、即ち吾々は獲得した成功に眩惑され、高慢になつてはならない。

吾等は、吾々が指針として正しい黨方針をもち、この方針を遂行するためには大衆を組織することを理解していたからこそ、成功を収めたのである。これらの條件なくしては、吾々が現在獲得し、これを正當にも誇りとしてゐる成功を獲得できなかったであろうということは、改めていうまでもな

い。だが、正しい政策をもち、これを遂行することを理解しているということは、支配的地位にしている。だが、正しい政策をもち、これを遂行することを理解しているというものは、支配的地位にしている。だが、正しい政策をもち、これを遂行することを理解しているというものは、支配的地位にしている。

わが國を取り巻いている諸國を一通り見まわして見よ、正しい方針をもち、これを遂行している支配的地位にある多くの黨があるだろうか？　こういう黨は現在では世界中にないのである。なぜなら、これらの黨はすべて何等の見透しもなく、恐怖の混沌の中にまごついており、泥沼からはい上る道を知らないからである。ひとりわが黨のみがどの方向に活動を進めなければならぬかを知っており、その事業を成功的に遂行している。この優越性をわが黨は何によつて得ているのであるか？　これはわが黨がマルクス主義的黨であり、レーニン主義的黨である、という事實によるのである。わが黨は、これらのことを、黨がその活動に當つてマルクス・エンゲルス・レーニンの教義によつて指導されている事實によつて得ているのである。吾々がこの教義に忠實である限り、吾々がこの羅針盤をもつている限り、吾々がその仕事に成功を収めるだろうというものは何等疑いないことである。

西歐において、若干の國ではマルクス主義は、すでに絶滅されたと言張されている。彼等のいうところによれば、ファシズムと稱せられているブルジョア民族主義的潮流がマルクス主義を絶滅したというのだ。これはいうまでもなく馬鹿々々しい話である。こんなことは歴史の知識をもたない人のみかしゃべることができることである。マルクス主義は労働者階級の根本的利益を科學的に表現したものである。マルクス主義を絶滅するためには、労働者階級を絶滅しなければならぬ。だが、労働者階級を絶滅することはできない。マルクス主義が登場してから、すでに八十年以上を經過した。この間何十何百というブルジョア政府がマルクス主義を絶滅しようと試みた。だが、その結果はどうであつたか？　ブルジョア政府が來た、そしてじび去つた、だが、マルクス主義は亡びなかつた（暴風のように

な喝采)。いやそればかりではない、マルクス主義は地球の六分の一で完全に勝利を得た、しかもマルクス主義がこの國では終局的に絶滅されたと人々が考えた國においてである(暴風のような喝采)。マルクス主義が完全に勝利した國が今や世界中で恐慌も失業をも知らぬ唯一の國であり、これに反してすべての外の國ではフアシズムの國においても同じく、すでに四年の間恐慌と失業が荒れ狂つてゐることを、偶然と考えることはできない。然り同志諸君、これは決して偶然ではないのだ。(喝采なりもやまず)。

然り同志諸君、吾々は吾々の成功を、吾々がマルクス・エンゲルス・レーニンの旗の下に働き闘争して來たという事實によつて得たのである。

これから第二の結論が生れる、即ち吾々は最後までマルクス・エンゲルス・レーニンの偉大なる旗に忠誠を守るといふことが。(喝采)

ソヴェト同盟の労働者階級の力は、闘争の試練を経たレーニン主義的黨をもつてゐるといふ點ばかりにあるのではない。さらにこの力はソヴェト同盟の労働者階級が數百萬の勤勞農民によつて支持されてゐるといふ點ばかりにあるのでもない。その力はまた、世界のプロレタリアートがそれを支持し助けてゐるといふ點にあるのである。ソヴェト同盟の労働者階級は世界プロレタリアートの一部分であり、その前衛であり、わが共和國は世界プロレタリアートの創作である。もしソヴェト同盟の労働者階級が資本主義諸國の労働者階級の援助を受けなかつたならば、彼等は權力をその手中に確保しなかつたし、社會主義建設のための諸條件を創造せず、したがつて現在彼等がもつてゐるような成功もおさめなかつたであろうといふことは何ら疑いをさしはさみ得ないことである。ソヴェト同盟の労働者階級と資本主義諸國の労働者との國際的結合、ソヴェト同盟の労働者と萬國労働者との同胞的

盟、——これこそはソヴェト共和國の力の黒柱である。西歐の労働者は、ソヴェト同盟の労働者が世界プロレタリアートの突撃隊であるといつてゐる。これは非常にいいことだ。これは、世界のプロレタリアートが將來においても、全力を挙げ、あらゆる方法を以て、ソヴェト同盟の労働者階級を支持する覺悟をもつてゐることを意味する。だが、これは吾々に重大な義務を課するものである。即ちこのことは、吾々が吾々の仕事によつて萬國のプロレタリアの突撃隊である、という名譽ある名をはずかじめてはならないということの意味する。これは、吾々に、わが國における社會主義の終局的勝利のため、すべての國における社會主義の勝利のためにより一層よく活動し闘争する義務を課してゐるのである。

このことから第三の結論が生ずる、即ち吾々は最後までプロレタリア國際主義に、萬國プロレタリアの同胞的同盟に忠誠を守るだろう、という結論が。(喝采)

これが結論である。

マルクス・エンゲルス・レーニンの、打ち破ることのできない、偉大な旗、萬歲！(満堂をゆるがす萬雷のような喝采鳴りもやまず。黨大會は同志スターリンに起立の撈袂を送る。「インターナショナル」の合唱。歌が終つてから歡呼喝采は新たな勢を得て再び起る。「スターリン、ウラト！」、「スターリン萬歲！」、「中央委員會萬歲！」の叫び)。

結語の代りに

一九三四年一月三十一日

同志諸君！ 黨大會の討論は、所詮あらゆる黨政策の問題でわが黨の指導的黨役員の見解が完全に一致している事を示した。異論は諸君も知つている通り、報告に對してはなされなかつた。こうしてわが黨陣列の思想的・政治的並に組織的の非常な強固さがここに現わされたのである。(喝采)にもかかわらず結語を述べる必要があるだろうか？ 私はその必要はないと考える。だから、諸君、結語をやめることを許して頂きたい。(暴風のような歡呼、代議員は席から立つ、萬雷のようなウララの叫び、「スターリン萬歳！」の一齊の叫び、代議員は起立のまま「インターナショナル」を歌う、「インタールナショナル」の歌が終つてから歡呼喝采が再び起る、「ウララ！」、「スターリン萬歳！」、「中央委員會萬歳！」の叫び)

クレムリン宮殿における赤軍大學卒業式 において行われた演説

——一九三五年五月四日——

同志諸君！ 最近吾々が、建設方面でも、また行政方面でも大なる成果をもつたということを否定することはできないのである。このことに關連し、わが國においては、指導者の功績について、領袖の功績についてあまり多く述べられている。わが成果のすべてが、殆どすべてが、彼等の功績に歸されている。勿論、そんなことは、本當ではなく、また正しからぬことである。問題は領袖にのみあるのではない。だが、私が今日述べたいと思うのは、このことについてではない。私は、カードルについて、わがカードル一般について、そして特にわが赤軍のカードルについて數言述べたいのである。

諸君は、吾々が技術的におくれた半ば乞食的な荒廢した國を、舊時代から遺産として受け継いだ、ということを知っている。まず四カ年に亘る帝國主義戰爭によつて荒廢させられ、またまた三カ年に亘る國內戰爭によつて荒廢させられた、半文盲の住民、低級な技術、零細な農民經營の大海の中に没し去っている、點々たる工業のオアシスをもっている國、これが、吾々が過去の時代から遺産として

受け継いだところの國なのである。任務は、この國を、中世紀的な、暗黒未開な軌道から、現代的な工業と機械化された農業との軌道へ移しかえることにあつた。任務は、見られるように、眞剣なものであり、しかも困難なものである。問題は、吾々がこの任務を最短期間内に解決し、かつわが國において社會主義を鞏固にすることができうるか、それとも、吾々は、それを解決し得ないか、そして、後者の場合には技術的に貧弱な文化的に暗黒未開であるわが國は、自己の獨立性を失い、帝國主義列強の勝負事の對象物に轉化してしまふであらう、というふうに立てられていた。

わが國は當時、技術の領域において、極めて甚だしい缺乏の時期を體驗していたのであつた。工業のための機械が足りなかつた。農業のための機械がなかつた。運輸交通のための機械がなかつた。ごく初歩的な技術的土台、即ちそれなしには、國の工業的な再建など考えることも出来ないところの、ごく初歩的な技術的土台がなかつたのだ。かような土台を築き上げるための、個々の前提條件だけがあつたのである。最高級の工業を築き上げることが必要であつた。しかしてこの工業が、ただ工業だけでなく、農業をも、またわが鐵道運輸をも技術的に改造する能力をもち得るように、この工業を指導しなければならなかつた。しかして、そのためには、進んで犠牲をはらい、あらゆる點において峻烈きわまる節約をしなければならなかつたし、工業を築き上げるために必要な資金を蓄積するため、食糧の點でも、學校の經費の點でも、衣服物に對しても節約しなければならなかつたのである。技術の領域における甚だしい缺乏を除去するためには、これ以外の方法はなかつたのである。レーニンは吾々にこのように教えたし、吾々はこの點でレーニンの跡に従つて行つたのであつた。

かかる大きな困難な事業において、全面的なしかも迅速な成果を期待してはならなかつたということ、わがかりきつたことである。かかる事業においては、成果は數年を経て後にのみ、顯れ得るのである

う。それゆえに、最初の失敗を克服し、かつ自己の隊伍内において動搖と不確信の存在することを許さず、偉大な目的に向つて確乎として前進するために、強い神経、ボルシェヴィキ的忍耐、ねばり強い我慢すよさをもつて武装されることが必要であつた。

吾々がこの事業を、實にこんなふうにごを實行した、ということを知っている。だが、わが同志達のすべてが、かかる神経、我慢すよさ、忍耐を十分にもつていたのではない。わが同志達の中には、最初の困難にぶつつかるや、退却をとなえだした人々があつた。「古いことをとやかくいうものは、鬼に食われろ」ということがある。これは、勿論正しい。だが、人間には記憶ということがあり、吾々の活動の總括をするにあたり、不本意ながらも過去について思い出すものである。（場内に愉快などよめきおこる）。さてこんなふうには、困難に出あつて仰天して、退却することを黨に呼びかけたところの同志達が、吾々の間にあつたのである。彼等は、『君達の工業化、集團化、機械、黑色冶金工業、トラクター、コンバイン（合成刈取打穀機）、自動車、吾々にとつて何になるか？なるべく多くの布類を與えてくれた方がもつとよいし、日用必需品生産のための原料をなるべく多く買つてくれた方がよいし、人々の生活を楽しくさせるようなこまごましたものすべてを、なるべく多く住民に與えてくれた方がもつとよいのだ。わが國のようにおくれた條件の下で、工業を、しかも、最高級の工業を建設することなどは、危険な夢である』といった。

勿論、吾々は、峻烈きわまる節約によつて得て、わが工業の建設のために費消した三十億ルーブルの正貨を、原料の輸入のために、また、日用必需品の生産を増強するために使用することができたであらう。これもまた、一種の「プラン」である。だが、かような「プラン」の下では、吾々は、冶金工業も、機械製作工業も、トラクターも、自動車も、航空機も、戦車ももつていなかつたであらう。吾々

は武装せず外敵に直面することとなつていたであらう。吾々は、わが國における社會主義の根本原則を掘り崩してしまつていたであらう。吾々は國內並に國外のブルジョアジーの虜になつていたであらう。

明かに、二つの計畫の内の何れかを、即ち、社會主義の敗北に導いたであらうし、また導かざるを得なかつたところの、退却の計畫か、それとも、わが國において、社會主義の勝利に導いたであらうし、また諸君も知るように、すでに導いてきたところの、攻勢の計畫か、何れかを選ばなければならなかつた。

吾々は、攻勢の計畫を選び、どうにかこうにか、自分の鼻の先のことだけは見るが、わが國の近い將來に對して、わが國における社會主義の將來に對しては眼を閉じているところの人達として、これらの同志達を後の方におき去りにして、レーニンの道を前進して行つたのであつた。

しかして、これらの同志達は、必ずしも批判や消極的な反抗だけに止まつたのではなかつた。彼等は、中央委員會に反對して、黨内に暴動を起すという事で吾々を脅かした。それのみではない。彼等は、吾々の中の或る者を銃弾をもつて脅かした。彼等は、吾々を驚愕させて吾々に、レーニンの道から外れることを餘儀なくさせることを期待したのだ、ということは明かである。これらの人々は、明かに、吾々ボルシェヴィキが特殊な型の人間であるということを忘れたのである。彼等は、困難によつても、脅威によつても、ボルシェヴィキを驚愕させ得ないということを忘れたのであつた。彼等は、鬭争において恐れということを知らず、かつ恐れなるものを認めもしなかつたところの、偉大なレーニン、われらの領袖、われらの師、われらの父が、吾々を鍛え上げたのだということを忘れたのであつた。彼等は、敵が激しく狂亂すればするほど、黨内における敵のヒステリーをおこすこと

がひどければひどいほど、ボルシエヴィキは新しい闘争のために張りきつた気分となり、ボルシエヴィキはより猛烈に前進するということを忘れたのであつた。

吾々が、レーニンの道から横道へ方向を變えようなどと考えもしなかつたということはわかりきつたことである。その上、この途上において自己をさらに強化させて、途上からありとあらゆる障礙物を一掃しつつ吾々は一層猛烈に前進したのである。もつとも、この際に、途上において、吾々は、これらの同志達のある者にげんこつを食わせなければならなかつた。だがそんなことは、何ともいたじ方のないことだ。私もまた、このことに手を下したということを、自認しなければならぬ。(暴風のような拍手、「ウララ」の叫び)

然り、同志諸君、吾々はわが國の工業化と集團化の道を、確信を以て、猛烈に進んで行つた。そして現在この道はすでに通過せるものとみなしてもよいのである。

現在では、吾々がこの道によつて、非常に大きな成功を獲得し得た、ということをも、すでにすべての者が認めている。現在では、吾々が、すでに強力な、しかも最高級の工業、強力な、しかも機械化された農業、益々發展し、繁榮におもむいている運輸交通、よく組織され、素晴しく裝備された赤軍をもつていふことを、すべての者が認めている。

このことは、吾々が技術の領域における甚だしい缺乏の時期を、大體において、すでに経過したということの意味するものである。

だが、技術の領域における甚だしい缺乏の時期を経過して、吾々は新しい時期に、技術を自由自在に制御して、それを前進せしめることをよくなし得る人々の領域における、カードルの領域における、働き手達の領域における、甚だしい缺乏の時期と私がよぶところの時期に入つた。問題は、わが國に

は工場、コルホーズ、ソフホーズ、運輸交通、軍隊があり、すべてこれらのことのための技術はあるが、技術から搾りとることのできる最大限量を、技術から搾りとるために必要な経験を十分にもつている人々が、不足しているということにあるのである。以前、吾々は「技術がすべてを決定する」といつていた。このスローガンは、吾々が技術の領域における甚だしい缺乏を絶滅し、わが國の人々を最高級の技術で武装するために活動の全分野において最も廣汎な技術的基礎を創設し得た、という點で吾々を助けた。これは非常によいことである。しかし、これだけではまだまだ非常に不十分である。技術を活躍させ、トコトンまでそれを利用するためには、技術を習得した人々が必要であり、技巧の全法則を活用してこの技術をわが物となし、かつ利用する技能をもつカードルが必要である。技術を習得した人々を伴わぬ技術は、死物も同然である。技術を習得した人々を先頭にもつて技術は、奇蹟を行うことができるし、また行い得る筈である。もしもわが最高級の工業に、わがソフホーズとコルホーズに、わが運輸交通に、わが赤軍に、この技術を完全に使いこなし得るカードルが十分な人数だけあつたならば、わが國は、現在わが國がもつていよりも、三倍も四倍もの効果をあげ得ていたであろう。だからこそ、技術を習得した人々に對して、カードルに對して、働き手達に對して、現在、特別な注意が拂われなければならないのである。だからこそ、わが國は、技術の領域において、甚だしい缺乏があつたところのすでに経過した時期の反映たる「技術がすべてを決定する」という舊いスローガンを、今や、新しいスローガン、即ち「カードルがすべてを決定する」というスローガンによつて取替へなければならぬのである。この點が、現在重要な點なのである。

わが國の人々は、この新しいスローガンの偉大な意義を完全に理解し、自覺しているといつてよいであろうか？ 私はそうはいわないであろう。もしそうでないならば、吾々が吾々の實踐活動

において往々見受けるところの、人々に對する、カードルに對する、働き手達に對するふらちな態度は存在しなかつたであらう。「カードルがすべてを決定する」というスローガンは、わが指導者達が、わが働き手達に對し、即ち、「小さな」働き手に對しても、「大きな」働き手に對しても、彼等がいかなる部門で働いているかを問はず、極めて深い配慮を示し、よくいたわつて彼等を養成し、彼等が支持を必要としている時には彼等を援助し、彼等が最初に成功を示した場合には彼等を激勵し、彼等を昇進させること、等々を要求する。しかるに、實際において吾々は、多くの場合に、働き手達に對して冷淡で官僚主義的な、しかも全くふらちな態度を示している諸事實をもつのである。元來、人々を研究し、よく研究した後にのみ彼等を部署につける代りに、往々將棋の歩を扱うように、人々を無難作に扱つてゐるといふことも、これによつて説明されるのである。機械を尊重し、かつわが國は、工場に幾台の機械類をもつてゐるといふことについて報告することは、よく學び得た。だが、これこれの期間に、吾々は幾人を養成したとか、彼等が仕事の過程において成長し、鍛え上げられるように、吾々は人々をいかに援助したか、といふことについて、同じ様な熱心さで報告したというような、一つの場合をも、私は知らないのである。 こういうことは何によつて説明され得るか？ これは、吾々が人々を尊重し、働き手達を尊重し、カードルを尊重することをまだよくは學ばなかつた、といふことによつて説明されるのである。

私がいばらく流刑されていたシベリアにおける一つの出來事を私は思い出す。それは春の氾濫時のことであつた。三十人ばかりの人達が、荒れ狂つた大河に流されて來た木材を集めて引上げるために河に出て行つた。夕方彼等は村に歸つて來たが、一人の仲間が足りなかつた。三十人目の者はどこにいるかといふ質問に對し、彼等は、平然として、三十人目の者は「むこうに残つてゐるんだ」と答え

た。「残つてゐるつて、どういうわけだ？」という私の質問に對し、彼等は、やはり平然として「何だつてしつこく聞くのだ、勿論、溺死したんだ、」と答えた。丁度その時彼等の内の一人が「牝馬に水を飲ませに行かにやならぬ」といつて、どこかへ急いでかけて行つた。彼等は一人の人間よりも家畜を大事がつてゐる、と私が非難したのに對して、彼等の内の一人は、爾餘の人々一般の賛同を得て、「何のためにおれらは彼等を、つまり人間を大事にしなければならぬか？ おれらは何時でも人間をこさえることができる、だが、牝馬は……、牝馬を一つ作つてみてくんか、」と答えた。（場内におこる全體的どよめき）諸君、これこそ、取るに足らぬものではあるかも知れない、が非常に特徴的な一例である。人々に對する、カードルに對する、或るわが指導者達の冷淡な態度、並に人々を尊重することを心得ないということは、たつた今私が話した遠いシベリアの一挿話において物語られてゐるところの、人が人に對するこの奇怪な態度の殘存物である、と私は思うのである。

さて、同志諸君、もし吾々が人材の領域における甚だしい缺乏を成功裡に除去し、技術を前進せしめ、それを活用せしめる能力をもつてゐるカードルを、わが國が十分な人數だけもつことができるようにしたいならば、吾々は何よりもまず、人々を尊重し、カードルを尊重し、吾々の共通な大業に利益をもたらす能力のあるところの、各々の働き手を尊重することをよく學ばなければならない。最後に、世界中にあるすべての貴重な資本のうちでも、最も貴重な、最も決定的な意義をもつ資本は、人々であり、カードルであるということを理解することが必要である。わが國現在の條件の下においては、「カードルがすべてを決定する」ということを理解することが必要である。わが國が、工業に、農業に、運輸交通に、軍隊に良いカードルを、しかも多人數のカードルをもつようになるなら

ば、その時こそ、わが國は無敵の國となるであらう。わが國が、かかるカードルをもたないであらうならば、兩足でびつこを引くこととなるであらう。

演説を終るに當り、赤軍におけるわが大學學生・卒業生達の健康と大なる成功とのために乾盃したい！ わが國の防衛をよく組織し指導することにおいて、彼等の成功を希望する！

同志諸君！ 諸君は、最高の學校を卒業し、かつそこで最初の鍛錬を受けた。だが學校というものは、準備の段階に過ぎない。カードルの眞の鍛錬は、實際の仕事において、學校の外で、困難との闘争において、困難を克服することにおいて得られるのである。同志諸君、困難を恐れず、困難から逃げかくれせず、逆に、困難を克服し、かつ絶滅するため、困難にぶつつかつて行くところのカードルのみが、良いカードルなのだということを記憶すべきである。困難に對する闘争においてのみ、本當のカードルは鍛え上げられるのである。しかして、もしもわが軍隊が、本當に鍛え上げられたカードルを十分な人數だけもつならば、わが軍隊は無敵な軍隊たり得るであらう。

同志諸君、諸君の健康のために！（満場に暴風のような拍手。全員起立し「ウラー」の叫び聲高く、同志スターリンに挨拶を送る。）

スタハーノフ運動者第一回全同盟會議

における演説

——一九三五年十一月十七日——

一、スタハーノフ運動の意義

同志諸君！スタハーノフ運動者達については、ここで、この會議の席上で非常に澤山、また非常によく述べられたので、實をいえば、私には僅かじかいうことはない。それにしても、こうして演壇に呼出された以上は、一言述べなければならぬであろう。

スタハーノフ運動を男女労働者の普通の運動と見てはならない。スタハーノフ運動は、わが社會主義建設の歴史に、その最も輝かしい一頁として記されるような、男女労働者の運動なのである。

スタハーノフ運動の意義はどの點にあるか？

それは、何よりも先ず、スタハーノフ運動が社會主義競争の新たな高揚、社會主義競争の新しいヨリ高度の段階を表現しているという點にある。なせそれは新しい段階であり、なせヨリ高度の段階であるか？なせならば、スタハーノフ運動は、社會主義競争の表現として、社會主義競争の

古い段階に比してすぐれた特徴をもっているからである。三年ほど前の過去においては、すなわち社會主義競争の第一段階の時期には、社會主義競争は必ずしも新しい技術と結びつけられてはいなかつた。實際、當時わが國には、實のところ、新しい技術というものは殆どなかつた。しかるに社會主義競争の現段階、すなわちスターノフ運動は、それとは反對に、新しい技術と必ず結びついている。スターノフ運動は、新しい、ヨリ高度の技術なしには、考えられないであろう。諸君の前にスターノフ、ブスイーギン、スメターニン、クリヴオノス、ブローニン、ヴィノグラードワ姉妹の同志達、その他のような多くの入々、自分の専門の技術に完全に習熟し、技術を巧に使いこなして前進させた男女労働者の新しい人達がいる。こういう人々は三年ばかり前には、わが國にいなかつたか、または皆無に近かつた。これは新しい、特殊な人々なのだ。

次にスターノフ運動は、現在の技術的規準定量を克服し、現存する計畫生産能力を克服し、現存する生産計畫と生産收支計算とを克服することをその目標としているところの、男女労働者の運動である。なせ克服するかといへば、これらの規準定量そのものが、今日となつては、わが新しい人々にとつて、もはや古くさいものとなつたからである。この運動は技術にたいする古い見解、古い技術的規準定量、古い計畫生産能力、古い生産計畫を打ちこわしつつあり、しかして、新しいヨリ高度の技術的規準定量、計畫生産能力、生産計畫を創造することを要求している。この運動は、わが國の工業に革命を起すことを使命としている。それだからこそ、スターノフ運動は、その基本において、極めて革命的な運動なのである。

新しいヨリ高度の技術的規準定量の表現としてのスターノフ運動が、資本主義によつては得られず、ただ社會主義によつてのみ得られる高度な労働生産能力の模範であることは、すでにここ

で述べられた。これは全く正しい。なぜ資本主義は封建制度を打破り、これを克服したか？ なぜならば、資本主義は労働生産能力のヨリ高度の規定量をつくりあげ、封建制度の下で得られた量とは比較にならぬ程多くの生産物を得る可能性を社會に與えたからである。なぜならば、資本主義は社會をヨリ富裕なものとしたからである。なぜ社會主義は、資本主義經濟制度をうち負かすことができ、うち負かさなければならず、また必ずうち負かすのであろうか？ なぜならば、社會主義は、資本主義經濟制度よりもヨリ高度の労働の模範、ヨリ高度の労働生産能力を與えることができるからである。なぜならば、社會主義は資本主義經濟制度よりも一そう多くの生産物を社會に與えることができ、社會をヨリ富裕なものとなすことができるからである。

ある人たちは、貧乏人の生活水準を基礎として、人間を物質的に幾分均等化することによつて社會主義を鞏固にすることができると考えている。これは正しくない。これは社會主義についての小ブルジョアの考えかたである。事實上、社會主義はただ高度の労働生産能力の基礎に立つて、すなわち資本主義の下におけるよりもヨリ高度の労働生産能力の基礎に立つて、食料品やあらゆる種類の日用品が豊富にあるという基礎に立つて、社會の全成員の裕福な文化的な生活という基礎に立つてのみ、勝利することができるのである。だが、社會主義がこの自己の目的を達成し、わがソヴェトの社會を最も裕福な社會となし得るためには、先進資本主義諸國の労働生産能力を凌駕するような労働生産能力を國內にもつていえることが必要である。これがなければ、食料品やあらゆる種類の日常必需品が豊富にあるということは、考えることさえできないのである。スタハーノフ運動の意義は、この運動が古い技術的規定量を不十分なものとして打ちこわし、多くの場合において、先進資本主義諸國の労働生産能力を凌駕し、かくしてわが國における社會主義をヨリ鞏固にすることを實際

に可能にし、わが國を最も裕福な國に轉化することを可能にするような運動であるという點にある。

だがスターハーフ運動の意義は、これで言いつくされたわけではない。この運動の意義は、さらにこの運動が社會主義から共產主義へ移るための條件を準備するものであるという點にある。

社會主義の原則は、社會主義社會では各人がその能力に應じて働き、各自の欲求に應じてではなく、彼が社會のためになした勞働に應じて日常必需品を受けるといふ點にある。このことは、勞働者階級の文化的・技術的水準がおまだ高くなく、頭腦勞働と筋肉勞働との對立がひきつずき存在しており、勞働生産能力が日常必需品を豊富にすることを保障するほど高くなく、そのために社會は、社會の成員の欲求に相應してではなく、彼らが社會のためになした勞働に相應して日常必需品を分配することを餘儀なくされる、ということの意味している。

共產主義はヨリ高度の發展段階をなしている。共產主義の原則は、共產主義社會では、各人がその能力に應じて働き、彼らが行つた勞働に應じてではなく、文化的に發達した人間として彼らがつている欲求に應じて日常必需品を受けるといふ點にある。このことは、勞働者階級の文化的・技術的水準が頭腦勞働と筋肉勞働との對立の基礎を掘りくすすほど十分に高度となり、頭腦勞働と筋肉勞働との對立がすでに消滅してしまい、勞働生産能力が、もつとも豊富な日常必需品を保障できる程高い程度に高まり、そのために社會は、これらの日常必需品を社會の成員の欲求に相應して分配する可能性をもつということを意味している。

ある人達は、頭腦勞働と筋肉勞働との對立を根絶するということは、技師、技手、頭腦勞働者の文化的・技術的水準を、中程度の熟練工の水準まで引下げ、頭腦勞働者と筋肉勞働者とを、文化的・技術

的に幾分均等化することによつて達成し得ると考えている。これは全然正しくない。共産主義についてこのように考える者は、小ブルジョアの饒舌家共だけである。事實上、頭脳労働と筋肉労働との對立の根絶は、労働者階級の文化的・技術的水準を技師・技術家達の労働の水準まで高揚させることによつてのみ達成し得るのである。かかる高揚は實現不可能であると考えるのは笑うべきことであるだろう。かかる高揚は、國の生産力が資本主義の桎梏から解放され、労働が搾取の抑壓から解放され、労働者階級が權力をもつており、労働者階級の若い年代のものたちが、十分な技術的教育を受けるあらゆる可能性を保障されているソヴェト制度の條件の下では、完全に實現できることである。労働者階級のかかる文化的・技術的高揚のみが、頭脳労働と筋肉労働との間の對立の基礎を掘崩すことができるといふこと、この高揚のみが、社會主義から共産主義へ移りはじめるといふために必要となるころの、高度の労働生産能力と、日常必需品の豊富に存することとを保障できるといふことは、何ら疑うべき根據がないのである。

従つてスタハーノフ運動は、この運動がわが國の労働者階級のまさにかような文化的・技術的高揚の最初の端緒——もつとも、まだ弱くはあるが、いずれにしても端緒をその中に含んでいるという點で、特に意義があるのである。

論より證據、スタハーノフ運動者諸君をよく見てくれたまえ。彼らはどういふ人達であるか？ 彼らは概して若い、または中年の男女労働者であり、文化的なまた技術によく通曉した人々であり、仕事にかけて精密にして正確であるという點で範をたれる人々であり、仕事において時間の要因を尊重することを心得ており、時間を分ではかりでなく、秒でかぞえることをよく習得している人達で

ある。彼らの大多数は、いわゆる技術智識のミニマム*を習得しており、自分の技術的教育を充實させることをつづけている。彼らは、ある技師や技手や経営家が持つていような、保守主義と無氣力を少しももつていない。彼らは古くさくなつた技術上の規準定量を打ちこわし、新しい、ヨリ高度の規準定量をつくりだしつつ邁進している。彼らはわが國の産業の指導者たちが作成した計畫生産能力や經營計畫に修正を加え、たえず技師や技手の缺陷を補い、匡正し、しばしば彼らに教え、彼らを前進させている。なせならば、彼らスターハーフ運動者は、自分の専門の技術を完全に習得し、技術から搾り出しえるものを最大限に搾り出すことを心得ている人々だからである。今日のところ、スターハーフ運動者はまだ少い。だが、彼らが明日十倍も多くなるであらうということを疑いえるものがあるか？スターハーフ運動者たちはわが國産業の革新者であるということ、スターハーフ運動はわが國産業の未來を代表するものであるということ、この運動は労働者階級の將來の文化的・技術的高揚の種子をその中に含んでいるということ、この運動は、社會主義から共產主義に移行するために、また頭腦労働と筋肉労働との對立を根絶するために必要な、労働生産能力の高度な指標を達成し得るところの、唯一の道をわれわれのために開くものであるということは、明かではないか？

同志諸君、このようなのが、わが社會主義的建設の事業においてスターハーフ運動の持つ意義なのである。

スタハーフとブスイーギンが古い技術的規準定量の打ちこわしにとりかかつた時、彼らはスタ

* 社會主義企業に働く労働者のために制定された、せひ必要な技術的智識の水準であつて、労働者は、各企業に組織された講習會でこれを習得することができ。——譯者註

ハーノフ運動のこの偉大な意義について考えたであろうか？ もちろん考えはしなかつた。彼らには彼ら自身の心配があつたのだ。すなわち、彼らは、計畫不遂行の状態から企業を救い出し、經營計畫を超過遂行することに努力していたのであつた。しかし彼らはこの目的を達しようと努力する一方、古い技術的規定量を打破り、先進資本主義諸國を凌駕した高度の労働生産能力を發揮しなければならなかつた。だが、この事情によつて、スタハーノフ運動者の運動の偉大な歴史的意義が、たとえ幾分かでも減せられるかも知れないと考えることは、笑止千萬なことである。

おなじことを、一九〇五年にわが國ではじめて労働者代表ソヴェトを組織した労働者達についても、いうことができる。彼ら労働者は、もちろん、労働者代表ソヴェトが社會主義制度の基礎となることができようとは考えはしなかつた。彼らは、労働者代表ソヴェトをつくつて、ツァー制から、ブルジョアジーから自分を守つただけである。だが、この事情は、一九〇五年に、レーニングラード及びモスクワの労働者によつて始められた労働者代表ソヴェトをめざす運動が、結局、世界の六分の一の一地域における資本主義の壊滅と社會主義の勝利とに導いたという、疑ない事實と少しも矛盾するものではない。

一、スタハーノフ運動の根源

われわれは現在スタハーノフ運動の搖籃、その源の傍に立つてゐる。

そこでスタハーノフ運動の二三の特徴點を指摘しなければならぬであらう。

この運動はいかにも自分勝手に、ほとんど自然發生的に、下から、わが企業の管理部から何らの壓力もくわえられないことなじにはじまつた、という事實が何よりもまず眼につく。そればかりではな

い。この運動はある程度まで、わが企業の管理部の意志に反して、むしろ管理部との闘争においてさえ生れ、かつ展開するにいたつたのだ。同志モロトフは、アルハンゲルスクの製材工同志ムシンスキーが経営機關に秘密に、検査員に秘密に、新しい、ヨリ高度の技術的規準定量を研究し完成した時、どんな苦しみをなめなければならなかつたかを、すでに諸君に話した。スターノフ自身の運命も、これよりよかつたわけではない。なせならば、スターノフは、彼が前進するに當つて、ある管理部員達にたいしてのみでなく、スターノフの「新機軸」を嘲笑し、彼をいじめたある労働者達に對しても防禦に出なければならなかつた。ブスイーギンはどうかといえ、彼がその「新機軸」のために、危く工場の仕事を失おうとしたこと、そして職場長の同志ソコリンスキーの斡旋によつてのみ、やつと工場にとどまる事ができたということは、周知のことである。

見られるように、わが企業の管理部から何らかの働きかけがあつたとすれば、それは、スターノフ運動を助けたのではなく、それにさからつたのであつた。従つて、スターノフ運動は、下から起つた運動として生れ、また展開したのであつた。そしてこの運動が自分勝手に生れ出たからこそ、それが下から起つてゐるからこそ、スターノフ運動は、現代の最も生々した、何ものにも克服されない運動なのである。

次に、スターノフ運動のもう一つの特徴點について述べなければならぬ。それは、この特徴點は、スターノフ運動がわがソヴェト同盟全土にだんだんと廣まつたのではなく、タイ風のようになんだかかつてみたこともないような早さで廣まつたということである。ことの始まりはなんであつたか？ スターノフは石炭採掘の技術的規準定量を、少くとも五倍もしくは六倍引きあげた。ブスイーギンとスメターニンも、一人は機械製作工業の方面で、今一人は製靴工業の方面で同様なことを

なしとげたのであつた。諸新聞はこれらの事實を報道した。ところが、突然、スタハーノフ運動の焰は、全國に燃え擴がつた。これは一體どうしたことか？ スタハーノフ運動の傳播がこういう早さを示したのは、どういう理由であるか？ スタハーノフとブスイーギンは、ソヴェト同盟の各州や各郡に廣い連絡をもつてゐる優れた組織者であつて、彼ら自身がこれを組織したのであるか？ いや、もちろんそうではない！ スタハーノフとブスイーギンは、わが國の偉大な人物にならうという抱負をもち、みずからスタハーノフ運動の火花を全國にまき散らしたのであるか？ そんなこともまた正しくない。諸君はここでスタハーノフとブスイーギンを見られた。彼らはこの會議で演説をした。彼らは全ソヴェト的な人物という榮譽を獲得しようというような抱負はすこしも持つていない、單純な、つまじやかな人達である。私には、むしろ、彼らが、彼らの期待に反して、わが國に廣まつた運動の規模に、多少迷惑を感じてゐるようになさえ思われる。それにもかかわらず、スタハーノフとブスイーギンが投じたマッチの火が、なおこの運動が焰となつて燃えあがるに十分であつたとすれば、それはスタハーノフ運動が完全に熟していたものであることを意味してゐる。完全に熟しており、自由燃え上るための刺戟をまつてゐるような運動のみが、ただこういう運動のみが、かくも急速に廣まり、かつなだれのように大きくなつてゆくことができたのである。

スタハーノフ運動が完全に熟してゐた運動であつたということは、何によつて説明されるだろうか？ この運動がかように急速に廣まつた原因はどこにあるか？ スタハーノフ運動の根源は何であるか？

その原因は少くとも四つある。

一、スタハーフ運動の基礎として役立つたのは、何よりも先ず、労働者の物質的状態が根本的によくなつたことである。同志諸君、生活は一段とよくなつた。生活は一段と愉快になつた。そして愉快に生活すれば、仕事ははかどる。そこで仕上げ高の規準定量がウンと高度になつたのだ。そこで男女の労働の英雄が出てきたのだ。スタハーフ運動の根源は、何よりも先ずここにある。もしわが國に恐慌があつたなら、もしわが國に労働者階級の禍患である失業があつたなら、もしわが國の生活が悪く、おもしろくなく、愉快でなかつたなら、わが國にはどんなスタハーフ運動も起らなかつたであらう（拍手）。わが國のプロレタリア革命は、その政治的結果のみでなく、物質上の結果をも人民に示し得た、世界で唯一の革命である。すべての労働者革命のうちで、辛うじて權力を獲得し得た革命をわれわれはただ一つ知つてゐる。それはバリ・コンミュンである。だが、それは、ながくは存続しなかつた。尤も、バリ・コンミュンは、資本主義の桎梏を打破しようと試みたが、その存続期間内にこれを打破してしまふことはできなかつたし、革命のよい物質的結果を人民に示すことは、なおさらできなかつた。わが國の革命は、資本主義の桎梏を打破し、人民に自由を與えたのみでなく、さらに裕福な生活のための物質上の條件をも人民に與えることのできた唯一の革命である。ここにわが國の革命の力と無敵な強さがあるのである。資本家を追つ拂い、地主を追つ拂い、ツアアの家來共を追つ拂い、權力を獲得し、自由を得るといふことは、もちろんよいことだ。これは非常によいことだ。だがいかながら、自由だけではまだまだ不十分である。パンが足らず、バターや脂肪が足らず、衣服類が足らず、住宅が悪いというような状態では、自由だけがあつたところで、決してよい結果が得られるものではない。同志諸君、自由一つだけで生きてゆくことは非常に困難なことだ（賛成の叫び、拍手）。よく、そして愉快に生活できるようにするには、政治的自由の福祉

が、さらに物質的福祉によつて補足されることを必要とする。わが國の革命の特徴的な特殊性は、この革命が人民に、自由を與えたばかりでなく、物質的福祉をも、裕福に文化的に生活する可能性をも與えたということである。だからこそ、わが國では、生活が愉快になつたし、そしてかような地盤の上こそ、スタハーノフ運動は成長するにいたつたのである。

二、スタハーノフ運動の第二の源泉は、わが國に搾取が存在しないことだ。わが國では人々は搾取者のために働いているのではなく、寄生者を富ませるために働いているのではなく、自分のために、自己の階級のために、労働者階級の優れた人々が権力についている自分のソヴェト社會のために働いているのだ。ゆえにわが國では労働は社會的な意義をもっており、労働は名譽な、光榮なことなのである。資本主義の下では、労働は私的な、個人的な性格をもっている。多く働いたのなら、多く貰えばよい。そして自分でできるだけの生活をしろ。誰もおまえを知っていないし、また知ろうとも欲しない。おまえは資本家のために働いており、お前は資本家を富ましているのではないか？ だが、それ以外に方法があろうか？ 搾取者を富ませようとして、人々はお前を雇つたのだ。お前がそれに不同意なら、失業者の仲間に入れ、そしてお前の好きなように無爲な生活をやつて行け。おまえ達以外のもつとおとなしい労働者を見つけよう、というようなぐあいなのだ。それだからこそ、人間の労働は資本主義の下では高く評價されはしないのだ。こういう條件の下でスタハーノフ運動が起り得ないということは、明かなことである。だが、ソヴェト制度の條件の下では、全くこれと異なっている。ここでは働く人は尊敬されている。ここでは働く人は搾取者のためではなく、自分のために、自分の階級のために、社會のために働いている。ここでは働く人は、追つぱり出された、ひとりぼっちな者である、という感じをいだくことはない。わが國では、それと反對に、働く人は自分の國の自由な

公民、一種の社會的活動家として自己を感じている。そして、彼がよく働いて、與え得るものすべてを社會に與えているならば、彼は勞働の英雄であり、光榮に輝いているのである。ただかような條件の下でのみスターハーフ運動が生れ得たということは、わかりきつたことである。

三、わが國に新しい技術があるということ、スターハーフ運動の第三の源泉と見なさなければならぬ。スターハーフ運動は新しい技術と有機的に結びついている。新しい技術がなかつたならば、新しい工場がなかつたならば、新しい設備がなかつたならば、わが國にはスターハーフ運動は生れえなかつたであろう。新しい技術なしには、技術的規定量を一一二倍引上げることはできるのであるが、それ以上引上げることが出来ない。スターハーフ運動者たちが技術的規定量を五倍あるいは六倍に引上げたことは、彼らが、そつくり完全に新しい技術に立脚していることを意味する。かようにしてわが國の工業化、わが國諸工場の再建、新しい技術と新しい設備との現存が、スターハーフ運動を生み出した原因の一つとなつたということになるのである。

四、だが、新しい技術だけでは、大した結果が得られるものではない。最高級の技術、最高級の工場をもつことはできるのであるが、この技術を巧に使いこなせる人々がいなかつたならば、技術はただの技術としてとどまるだろう。新しい技術がその成果をおさめえるためには、なお、技術の先頭にたち、技術を前進させることのできる人達、男女勞働者をもたなければならぬ。スターハーフ運動が生れ、成長しているということは、わが國ではすでに、男女勞働者の中にかようなカードルが生れたということの意味している。二年ほど前に黨は、われわれが新しい工場を建て、わが企業に新しい設備を與えたことは、わずかに事業の半分にすぎない、といつた。またその當時黨はいつた。新しい工場を建設しようという熱意は、これら新しい工場によく習熟しようという熱意をもつて補足しなけ

ればならない、かくしてのみはじめて事業を最後まで貫徹することができると。この二カ年間に、この新しい技術がわがものとされ、新しいカードルが生れているということは、明かなことである。わが國が加よなカードルをすでもつてゐることは、現在あきらかなことだ。かよなカードルがなくて、この新しい人々がなくて、わが國には決してスタハーノフ運動がおこらなかつたであろうということは、わかりきつたことだ。かくして新しい技術をわがものとした男女労働者中の新しい人達が、スタハーノフ運動をつくりあげ、前進させたところの力となつたのであつた。

このようなのが、スタハーノフ運動を生み、前進させた諸條件なのである。

三、新しい人々——新しい技術的規準定量

スタハーノフ運動は、だんだんと發展したのではなく、何かの堤防を突破つた爆發のようなくぐりに發展した、と私は述べた。スタハーノフ運動が何らかの障害を克服しなければならなかつたことは、あきらかである。誰かがこの運動を妨害し、誰かがこの運動を抑えていたのである。そして、スタハーノフ運動は、力を蓄積して、これらの障害を突破し、全國にあふれ出たわけである。

これはどうしたことか？ 誰が—たい妨害していたのであろうか？

古い技術的規準定量と、この規準定量を固執していた人達とが妨害したのである。數年前に、わが國の技術家並に經營家達が、わが國の男女労働者の技術的におくれている状態に適應できる、一定の技術的規準定量を作成した。その時から數年たつた。この期間に、人々は成長し、技術に通曉した。だが、技術的規準定量は、變えられずにそのまま残つていた。これらの規準定量が今やわが國の

新しい人々にとつて古くさいものとなつてしまつたことは、わかりきつたことだ。現在では、すべての人々が現在用いられている技術的規準定量を非難している。だが、この規準定量といえども、何も天から降つてきたわけのものではない。そして問題は、この技術的規準定量がその當時低すぎた規準定量として作成されたということにあるのでは決してない。これらの規準定量がすでに古くさいものとなつた現在、この規準定量を時勢に適した規準定量として主張しようと試みているということが、何よりも先ず問題なのだ。わが國の男女労働者が技術的におくれていることにかじりつき、このおくれに調子を合せ、このおくれということから出發して、ついにはこのおくれをもてあそび始めるところにまで事態は立ちいたつたのである。ところで、もしこのおくれということが過去のものとなりつつあるとすれば、どうなるか？ われわれはわれわれのおくれということの前に跪いて、これを聖像とし、偶像とするであらうか？ 男女労働者が成長し、技術に通曉することをすでになじ得たとすれば、どうなるか？ 古い技術的規準定量が、現實に相應しなくなつて、わが國の男女労働者が、事實上、この規準定量を五倍も十倍も凌駕することがすでにできたとすれば、どうなるか？ われわれはわれわれのおくれということに操を守るとしても、いつか誓をたてたのであらうか？ そんな誓をわれわれはやらなかつたと私は思うが、どうだろう、同志諸君？（全場哄笑）。はたしてわれわれは、わが國の男女労働者が永久におくれたままにとどまつているだろう、ということから發足したであらうか？ われわれはそんなことをしなかつたように思うがどうだろうか（全場哄笑）。それなら一體どうしたことか？ わが國のある技師や技手の保守主義を打ちこわし、古い傳統と規準定量を打ちこわし、労働者階級の新しい力に活動の自由を與えるだけの勇氣が、われわれには足りないのであらうか？

科學を云々する者がある。科學の論據や技術必携や技術上の規則にある論據は、新しい、ヨリ

高度の技術的基準定量に關するスタハーノフ運動者達の要求と矛盾しているというものがある。だが、一體ここではないかなる科學のことをいつているのであるか？ 科學の論據は、常に實踐によつて、經驗によつて検査された。實踐との結びつき、經驗との結びつきを斷つた科學、それは一體どういふ科學であろうか？ もし科學が、二——三のわが保守的な同志達が描いているようなものであつたならば、そんな科學はずつと前に人類に不用なものとなつたであらう。科學は偶像を認めず、陳腐となつたもの、古いものに打撃を加えることを恐れず、經驗、實踐の聲に鋭敏に耳を傾けるからこそ、科學といわれるのである。もしも事態がそうでなかつたならば、われわれは一般に科學をもつていなくなつたであらうし、例えば、われわれは天文學を持つていないで、依然として腐朽した天動説に満足していたことであらう。またわれわれは生物學を持つていないで、依然として人間創造の物語に満足していたことであらうし、われわれは化學をもつておらず、依然として鍊金家の豫言に満足していたことであらう。

だからこそ、私は、スタハーノフ運動からすでにかなりおくれでしまつたところの、わが技師・技手および經營家達が、もしも古い技術的規準定量にかじりつくことをやめて、本當に、科學的に新しく、スタハーノフ式に自分達をたて直すならば、よかつたろうに、と思うのである。

そこでわれわれにいうだろう。——それはよいことだ。だが、一般に技術的規準定量をどうすればいいか？ これらの規準定量は工業に必要であるか、それとも全然何らの規準定量なしにやつて行けるのではないかと。

ある人達は、われわれにはもはやなんらの技術的規準定量も必要でないという。同志諸君、これは正しくない。正しくないのみでなく、これは愚かなことだ。技術的規準定量なしには、計畫經濟は

不可能である。なおその外に、技術的規準定量は、おくれた大衆を先進的な者の水準にまで引上げるために必要なのである。技術的規準定量、これこそ生産において労働者階級の先進的分子のまわりに廣汎な労働大衆を組織する大きな調節力である。したがって、われわれには技術的規準定量が必要である。しかしわれわれが必要とするのは、現に存在するような規準定量ではなくて、もつと高度の規準定量なのである。

また他の人達は、技術的規準定量は必要だ、だが、現在では規準定量を、スタハーノフ、ブスイーギン、ヴァイノグラドワ姉妹のような人達が達成した成果の水準にまで引上げなければならないという。これもまた正しくない。かような規準定量は、現在においては現實的なものではないだろう。なせならば、スタハーノフ、ブスイーギンのような人達にくらべて技術にそう熟達していない男女労働者は、こういう規準定量を遂行することはできないであろうからである。われわれには現在の技術的規準定量とスタハーノフ、ブスイーギンのような人達によつて達成された規準定量との間の、どこかにある技術的規準定量が必要なのである。例えば砂糖大根の栽培で有名な記録をたてたマリア・デムチエンコを例にとつて見よう。彼女は一ヘクター（一ヘクターは一町余——譯者註）から砂糖大根五百セントナー以上（一セントナーは一〇〇キログラム——譯者註）の收穫を得ることができた。この達成を、例えばウクライナのすべての砂糖大根農場の收穫度の規準定量とすることができようか？ いやそんなことはできない。これを云々するのは、今のところまだはやい。マリア・デムチエンコは、一ヘクターから五百セントナー以上を收穫することができた。だが、砂糖大根の平均收穫は、例えば、今年のウクライナでは一ヘクター當り百三十乃至百三十二セントナーである。諸君が見られる通り、この差は小さくない。砂糖大根の收穫度の規準定量を、四百あるいは三百セントナーに

きめることができるであろうか？ その道の識者はみんな、當分の間そういう規準定量をきめることはできないといつてゐる。ウクライナにおける、一ヘクター當りの收穫度の規準定量として、一九三六年には二百乃至二百五十セントナーとしなければならぬと思われるのである。しかしてこの規準定量は小さくはない。なせなら、この規準定量が遂行されたならば、われわれは一九三五年の二倍の砂糖を得ることができからである。これと同じことを工業についてもいわなければならぬ。スタハーノフは現存する技術的規準定量を、たぶん、十倍あるいはそれ以上をさえ凌駕した。この達成を壓搾空氣鑽孔機を用いて働いてゐる者すべてのための、新しい技術的規準定量となすと宣言することは、不合理なことであろう。現存する技術的規準定量と同志スタハーノフによつて實現された規準定量との間のどこかにある規準定量を定めなければならないということは明かなことである。

いずれにしても、次のことは明かだ。すなわち現在の技術的規準定量はもはや現實に相應しないし、それはおかれてしまつており、わが國の工業にとつてのブレーキとなつてしまつた。しかして、わが國の工業の發展にブレーキを掛けないためには、現在の規準定量を新しいヨリ高い技術的規準定量にかえることが必要である。新しい人間、新しい時代、それは新しい技術的規準定量を要求する。

四、當面の任務

スタハーノフ運動の利益という點から見て、われわれの當面の諸任務は何であるか？ 問題を散漫にしないために、これを二つの當面の任務にまとめよう。

第一に、任務は、スタハーノフ運動者が一そうスタハーノフ運動を展開させ、ソヴェト同盟のす

べての州と地區とにこの運動を廣く普及させるように援助することである。これは一方における任務である。しかして他方においては古い物事に頑固にかじりついて、前進することを欲せず、スタハーノフ運動の展開を系統的に阻止する經營家、技師・技手の分子全部を制御することである。スタハーノフ運動をわが國全土に、全力をあげて普及させるためには、そのためには、スタハーノフ運動者だけではもちろん不十分である。わが黨組織がこの事業にはいりこんで、この運動を最後まで遂行させるように、スタハーノフ運動者を助けることが必要である。この點では、ドネツ州黨組織は疑もなく、大きな發意性を現わした。この意味で、モスクワ州およびレニングラード州の黨組織は、よく活動している。ところで他の諸州はどうであるか？ これらの州は、今なお「動き出そう」としてるところらしい。例えばウラルについては、周知の通り、ウラルは巨大な工業の中心地ではあるが、なぜか何もきかれないし、またきかれたところで、非常に僅かである。西シベリア、クズネツク炭田地方についても、同じことをいわなければならぬ。この地方では「動き出そうとすること」さえまだなし得ていないように見える。とはいえ、わが黨組織がこの事業に取りかかり、スタハーノフ運動者を助けて、困難を克服させるであろうことは、疑問の餘地がないのである。問題の他の面すなわち經營家や、技師・技手中に頑張つている保守主義者共を制御することについていえば、この點では問題はもうすこし複雑であろう。先ず最初に、工業におけるこれらの保守的分子に對して、スタハーノフ運動が進歩的なものであること、スタハーノフ式に自己を建て直すことが必要であることを忍耐強く、同志的に説得しなければならぬであろう。だが、説得の方法が役に立たなければ、もつと斷乎たる手段を取らなければならぬであろう。例えば交通人民委員部を例にとつて見よう。この人民委員部の中央機關には、最近まで、博士、技師、その他この道の識者達のグループがあつた。彼らの中

には、共產黨員もいたのだ。このグループの人達は一時間十三—十四キロメートルの貨車運行速度は、「運輸學」に反對することを欲しないなら、これ以上に出てはならないし、また出ることができない限界であるということを、すべての人に斷言していた。彼らはかなり權威のある連中で、彼らは自分達の見解を口頭であるいは出版物上で説教し、交通人民委員部の當該諸機關に指令をあたえ、運輸方面の働き手達の間では、一般に「思想の支配者」であつたのだ。われわれはこの道の識者ではないが、鐵道事業の多くの實際家の提案に基いて、自ら進んでこの權威ある博士達に、十三乃至十四キロメートルを限界とすることはできないこと、仕事を一定に組織すれば、この限界を擴張することができることを斷言した。ところで、このグループはそれに答えて、經驗と實踐との聲に耳を傾け、仕事に對する自分の態度を再檢討する代りに、鐵道方面の進歩的分子に對する鬭争をおつ始め、自己の保守的見解の宣傳を一そう強めたのであつた。われわれがこれら尊敬すべき御歴々に手柔かに一撃を加えて、交通人民委員部の中央機關から鄭重に御退去を願わなければならなかつたことは、明かである（拍手）。それからどうなつたか？ われわれは現在一時間十八乃至十九キロメートルの貨車運行速度をもっているのである（拍手）。同志諸君、萬一の場合には、頑張つている保守主義者共が、スタハーノフ運動を妨害し、邪魔することを止めないならば、もちろんわが國の國民經濟の他の領域においてもまたこの方法に訴えなければならぬと思われるのである。

第二に、任務は、スタハーノフ運動を妨げようと欲せず、この運動に同情はしているが、まだ自己を建て直すことができず、まだスタハーノフ運動の先頭に立つことができなかった經營家、技師、技手をして、自己を建て直しスタハーノフ運動の先頭に立ちうるように助けることである。同志諸君、かかる經營家、技師、技手を、わが國は少からずもつてゐる、ということを私はいわなければな

らない。そしてわれわれがこれらの同志を援助するならば、疑もなく、これらの同志はわが國に一つ多敷となるだろう。

もしもこれらの任務をわれわれが遂行するならば、スターハーフ運動はぐんぐんと展開してゆき、わが國のすべての州、すべての郡をまき込み、われわれに新しい成果の奇蹟を示すであろうと、私は考えるのである。

五、數言

この會議につき、この會議の意義について數言を述べよう。労働者及び農民を教えることを心得ているばかりでなく、彼らから學ぶことをも心得ている指導者のみが、本當の指導者・ボルシエヴィキとなることができるのだ、とレーニンは教えた。ボルシエヴィキの中のある者には、このレーニンの言葉が氣に入らなかつた。だが、歴史は、この點でもレーニンが百パーセントに正しかつたことを示している。實際のところ、幾百萬の勤勞者、労働者、農民は働き、生活し、闘争している。これらの人々が無駄に生活しているのではないこと、これらの人々が生活し、闘争しつつ巨大な實踐的経験を積みかさねていることを、誰が疑うことができようか？ これらの経験を無視する指導者達は、ほんとうの指導者と見なすことはできないということ、疑つてもよいであろうか？ したがつて、われわれ、黨ならびに政府の指導者達は、労働者に教えるばかりでなく、労働者から學ばなければならないのである。この會議の参加者たる諸君が、この會議においてわが政府の指導者達から何かを學んだということ、それを私は否定はしない。だが、われわれ、政府の指導者達もまた、諸君から、スターハーフ

運動者達から、この會議の參加者達から、多くのことを學んだということもまた否定することはできない。こんな次第で、同志諸君、教えてくれたことに對して、諸君にお禮をいう。大へん有難う！（嵐のような拍手）

最後に、この會議をいかに記念すべきかについて一言する。われわれはここで、會議役員會で相談した上で、政府の指導者とスタハーノフ運動の指導者たちとの會議を、なんらかの方法で記念すべきであると決した。そしてわれわれは、諸君の中から百人乃至百二十人に最高の表彰を與えるように提議すべきであるという決定に達した。

聲あり。全く正しい決定だ（嵐のような拍手）。

スタトリン。同志諸君、諸君が賛成ならば、われわれはこれを實行しよう。

（スタハーノフ運動者會議の參加者達は、同志スタトリンに嵐のような、感激に満ちた歡呼を送る。全會場に拍手の音が響き渡り、力強い「ウラト」の叫び聲は會場を揺り動かす。黨の領袖同志スタトリンを歡迎する無数の絶叫が會場のいたるところから響き渡る。歡呼は力強い「インタナショナル」の合唱となり、三千の會議參加者はこのプロレタリアの歌を歌う。）

ソ同盟憲法草案について

一九三六年十一月二十五日第八回臨時全同盟ソヴェト大會における報告演説

同志スターリンが演壇に現われるや、場内の全員は長く、續く嵐の如き歡呼を以てこれを迎える。場内の全員起立す。四方八方から「同志スターリン、ウラー！」「同志スターリン、ウラー！」「同志スターリン、ウラー！」「偉大なるスターリン、萬歳！」「偉大なる天才、同志スターリン、ウラー！」「ウー、イヴァート！」「ロート・フロント！」「同志スターリンに光榮あれ！」の絶叫響き渡る。

一、憲法制定委員會の形成とその任務

同志諸君！

本大會で審議されるために提出されている草案を起草した憲法制定委員會は、周知の通り、ソ同盟第七回ソヴェト大會の特別決定によつて組織されたのであつた。この決定は、一九三五年二月六日に採用されたのであつて、それは次のようなものである——

「一、ソ同盟の憲法を左の方針によつて改正すること。

イ、未だ完全には平等でない選舉を平等選舉に、多數段階制選舉を直接選舉に、公開選舉を無記名の選舉に代えるという意味において、選舉制を一層民主化する事。

ロ、憲法をソ同盟における諸階級勢力の現在における相互關係（新しい社會主義工業の創建、クラークの壊滅、ユルホーズ制度の勝利、ソヴェト社會の基礎としての社會主義的所有制の確立等々）に適させる意味において、憲法の社會的・經濟的基礎を一層的確に定義づける事。

二、憲法制定委員會を選出し、この委員會に、右第一項に示された原則に基いて、憲法の修正條文を作成し、右條文を、ソ同盟中央執行委員會會議の確認を得るために提出するよう委任することを、ソ同盟中央執行委員會に提案すること。

三、ソ同盟におけるソヴェト權力諸機關の次回定期選舉は、新選舉制に基いて施行さるべきこと。

これは、一九三五年二月六日のことであつた。この決定が採用された翌日、即ち一九三五年二月七日には、ソ同盟中央執行委員會の第一次會議が開かれ、ソ同盟第七回ソヴェト大會の決定を履行して、三十一人からなる憲法制定委員會を組織した。そしてこの第一次會議は、憲法制定委員會にソ同盟修正憲法草案の作成を委任したのであつた。

以上が、正式な根據であり、かつソ同盟最高機關の指令であつて、これらに基いて、憲法制定委員會は、その活動を展開すべきであつた。

かようにして、憲法制定委員會は、ソ同盟の生活の上で、一九二四年以來今日に到るまでの時期に實現されたところの、社會主義の方への動きをその際に考慮して、一九二四年に採用された現行憲法に改正を加えなければならなかつた。

二、一九二四年から一九三六年に到るまでの期間 中においてソ同盟生活上に生じた諸變化

一九二四年から一九三六年に到るまでの期間中に生じ、憲法制定委員會がその憲法草案の中に反映すべきものとされたところの、ソ同盟の生活上における諸變化とは、何か？

これらの變化の本質は、何であるか？

一九二四年におけるわが國の状態は、どうであつたか？

一九二四年は、ソヴェト權力が全力を擧げて社會主義を發展させるにあたり、資本主義が幾分か活氣づくことを許し、資本主義經濟と社會主義經濟との、二つの經濟制度の競争の進行過程において、資本主義制度に對し社會主義制度を優勢ならしめることをソヴェト權力が豫期した、ネツプの第一期であつた。任務は、この競争の進行過程において社會主義の陣地を固め、資本主義的諸要素を絶滅することを得、國民經濟の基本的制度としての、社會主義的制度的勝利を完成することにあつた。

わが工業は、その當時、甚だかんばしからぬ状態を呈しており、特に重工業においてそうであつた。もつとも、工業は少しずつ復興はしていた。だがまだまだその生産高を戦前の水準に引上げるまでにはいかなかつた。工業は、舊い、おくれた、貧弱な技術を基礎としていた。もちろん、工業は社會主義の方へ發展していたし、わが國工業の社會主義的部面の比重は、當時およそ八割を占めていた。しかして、資本主義的部面は、依然として工業の二割を下らぬ部分を占めていたのであつた。

わが國の農業は、さらに一層おもしろからぬ状態を呈していた。尤も、地主の階級はすでに清算されてはいたが、しかしその代り、農業資本家の階級、即ちクラークの階級はまだかなり著しい勢力をなしていた。全體として見れば、農業は、當時、おくれた中世紀的な技術による個人的小農經營の茫漠たる大洋を思わせるものがあつた。そしてこの大洋の中に、個々の點や小島の形で、コルホーズとソフホーズとが存在していたのであつて、これらは、本來からいえば、わが國民經濟中、まだ何ら重大な意義をもつてはいなかつた。コルホーズとソフホーズとは弱く、クラークはまだ勢力をもつていた。吾々は當時、クラークを絶滅することについては語らず、その抑制について語つていたのであつた。

國內の商品流通についても、これと同じことをいわなければならぬ。商品流通における社會主義的部面は、約五―六割で、それ以上ではなく、残りのすべての部分は、大商人、闇商人、その他の個人企業家達によつて占められていた。

このようなのが、一九二四年におけるわが國民經濟の全貌であつた。

さて、現在、即ち一九三六年においては、どうなつてゐるか？

その當時が、ネツプの第一期であり、ネツプの始めであり、資本主義が幾分か活氣づいた時期であつたとすれば、現在は、ネツプの最終の時期であり、ネツプの終りであり、國民經濟のあらゆる分野における資本主義の完全な絶滅の時期である。

わが工業が、この期間に巨大な力に發展したということを先ず第一に挙げよう。現在わが國の工業を、貧弱な工業、技術的に劣悪な裝備をもつた工業だということはもはやできない。いな、反對に、それは今や、非常に發達した重工業と、それよりもつとよく發達した機械製作工業とをもつ新しい、

豊富な、現代的な技術に基礎をおいている。しかして最も重要なことは、わが工業の分野から資本主義が全く駆逐され、社會主義的生産形態が、今やわが工業の領域において畫一的に支配している體制である、ということである。わが國の現在の社會主義工業がその生産高の大きさからいって、戦前の時期の工業を七倍以上も凌駕しているというこの事實を、取るに足らぬこととみなしてはならない。

農業の領域では、貧弱な技術をもち、トラクターが壓倒的に勢力をもっている個人的な小農經營の大洋の代りに、吾々は、今やすべてを包括するコルホーズとソフホーズの體制という形態で、世界中で最も大規模な、機械化された、新しい技術を以て裝備された生産をもっているのである。農業においてトラクターが絶滅されてしまい、おくれた、中世紀的な技術による個人的小農經營の部面が、今や取るに足らぬほどの部分を占め、しかして農業におけるこの個人的小農經營の比重が播種面積の大きさからいって、二―三分を超えないということは、周知のことである。今やコルホーズが、總力量五百七十萬馬力、三十一萬六千台のトラクターをその使用にあてており、しかもソフホーズの分と合すれば、總力量七百五十八萬馬力、四十萬台以上のトラクターをもっているという事實を、指摘しないわけにはゆかないのである。

國內の商品流通についていえば、大商人および闇商人はこの領域から全く駆逐されてしまった。今や商品流通全部が、國家、協同組合、コルホーズの手にあるのである。新しいソヴェト商業、即ち闇商人のない商業、資本家抜きの商業が生れ、發達するにいたつた。

かようにして、國民經濟のすべての分野における社會主義的制度的の完全な勝利ということは、今や事實なのである。

しかして、これは何を意味するか？

これは、人間による人間の搾取が根絶され、絶滅され、生産用具と生産手段との社會主義的所有制がわがソヴェト社會の確乎不動の基礎として確立されたということを意味している。(長く、續く拍手)

ソ同盟の國民經濟の領域におけるこれらのすべての變化の結果として、吾々は今や、恐慌と失業とを知らず、貧窮と零落とを知らず、市民に、裕福な文化的生活をするための一切の可能性を與えるところの、新しい社會主義的經濟機構をもっているのである。

かくの如きが、大體において、一九二四年から一九三六年までの期間に、わが國經濟機構の領域に生じた變化なのである。

ソ同盟經濟機構の領域におけるこれらの變化に適應して、わが國社會の階級構成もまた變化した。

周知の如く、地主階級は、國內戰爭が勝利を以て終結した結果として、すでに絶滅されてしまつた。その他の搾取階級についていえば、これらの階級は、地主階級と運命を共にしたのであつた。

工業の領域では資本家階級がなくなつた。農業の領域ではクラークの階級がなくなつた。商品流通の領域では大商人及び闇商人がなくなつた。かようにして、搾取階級のすべてが絶滅されてしまうことになつたのである。

労働者階級が残つた。

農民階級が残つた。

インテリゲンチヤが残つた。

だが、これらの社會グループは、この期間中に何らの變化も蒙らなかつたとか、これらのグループは、たとえば資本主義の時期においてそうであつたと同じく、舊態のままであると考えることは、誤りであろう。

たとえば、ソ同盟の労働者階級を例にとつて見よう。人々はしばしばこの階級を、古い習慣に従つて、プロレタリアートと呼んでいる。だが、プロレタリアートとは何か？ プロレタリアートとは、生産用具と生産手段が資本家の手にあり、資本家階級がプロレタリアートを搾取するような經濟制度の下において、生産用具と生産手段とを奪い去られている階級である。プロレタリアートは、すなわち、資本家に搾取されるところの階級である。しかるに、わが國では周知のように、資本家階級はすでに絶滅され、生産用具と生産手段とは資本家から取り上げられて、労働者階級がその指導的勢力をなしている國家に引き渡された。従つて、労働者階級を搾取し得るであろうところの資本家階級なるものは、すでにないのである。従つて、わが國の労働者階級は、生産用具と生産手段とを奪い去られていないばかりでなく、反對に、この階級は、全國民と一緒にそれらを所有しているのである。そして労働者階級が生産用具と生産手段とを所有し、また資本家階級が絶滅されてしまつた以上、労働者階級を搾取する可能性は、全然除去されてしまつたのである。これでもまだ、わが國の労働者階級をプロレタリアートと呼んでもよいであろうか？ そう呼んではならないということは明かなことである。マルクスはつぎのように述べている。自己を解放するためには、プロレタリアートは資本家階級を撃滅し、資本家から生産用具と生産手段とを取上げ、プロレタリアートを生み出すところの生産上の諸條件を根絶しなければならぬ、と。ソ同盟の労働者階級は、すでにこの自己解放の諸條件を實現したといつてもよいであろうか？ もちろんそういつてもよいし、またそういわなければ

ならない。ところで、これは何を意味するか？ これは、ソ同盟のプロレタリアートが全く新しい階級、即ち資本主義的經濟制度を根絶し、生産用具と生産手段の社會主義的所有制を確立し、ソヴェト社會を共產主義の道に沿つて導いていくところの、ソ同盟の労働者階級に轉化したということを意味している。

見られるごとく、ソ同盟の労働者階級は搾取から解放された、全く新しい労働者階級であり、これと同じ様な労働者階級は、人類の歴史上にいまだかつて例を見ざるところのものである。

農民の問題に移ろう。農民は、その成員が細分され、國全體に亘つて分散しており、おくれた技術を以て、單獨で自分の小經營をほじくりまわしており、私有制の奴隷であり、地主、クラーク、大商人、闇商人、高利貸等々から、ほしいままに搾取されている、といったような小生産者の階級である、といわれるのが慣例になつてゐる。そして實際に、資本主義諸國の農民は、その基本的大衆についていえば、まさしくこういう階級なのである。だが、わが國の現在の農民、ソヴェト農民は、大衆的にこれとよく似た農民であるといつてもよいであらうか？ いや、そんなことをいうことはできない、そういう農民は、わが國にはもはやいないのだ。わがソヴェトの農民は、全然あたらしい農民なのだ。わが國には、農民を搾取し得るような地主やクラーク、大商人や高利貸はもういないのだ。したがつて、わが國の農民は、搾取から解放された農民なのである。さらに、わがソヴェト農民は、その壓倒的大多數が、コルホーズ農民である。すなわちソヴェト農民は、彼等の仕事とその資産との基礎を、個人的労働とおくれた技術とにはなく、集團的労働と現代的技術とにおいてるのである。最後に、わが國農民經營の基礎となつてゐるものは、私有制ではなく、集團的労働の土台の上に成長した集團的所有制である。

見られる如く、ソヴェト農民は、全く新しい農民であり、これと同じ様な農民は、人類の歴史に
にまだかつて例を見ざるところのものである。

最後に、インテリゲンチヤの問題、すなわち、技師・技術上の働き手、文化戦線における働き手、
一般事務員、等々の問題に移ろう。インテリゲンチヤも同じく、過去の期間に大きな変化を受けた。
それは階級の上に超然たる者たらんと試みはしたが、事實上、その大多数が地主と資本家に奉仕し
たところの、古い、陳腐なインテリゲンチヤではもはやない。わがソヴェトのインテリゲンチヤ
は、労働者階級並に農民と、全根底において連繫されているところの、全く新しいインテリゲンチヤ
なのだ。第一に、インテリゲンチヤの構成が變化した。貴族やブルジョアジー出身の者は、わがソヴ
エト・インテリゲンチヤのうちの、僅かな割合しか占めていない。ソヴェト・インテリゲンチヤの八
割は、労働者階級、農民および他の勤勞者層の出身者である。最後に、インテリゲンチヤの活動の
性質そのものも變化した。かつては、インテリゲンチヤは金持の階級に奉仕しなければならなかつ
た。というのは、彼等にはこれより他に、活路がなかつたからである。いまや彼等は、人民に奉仕し
なければならぬ。なせなら、搾取階級はもはや存在しなくなつたからである。そして、それだから
こそインテリゲンチヤは今や、ソヴェト社會の平等の權利をもつ成員であり、労働者、農民と共に、
彼等と肩を並べて、新しい、階級のない社會主義社會の建設に従事しているのである。

諸君が見られる通り、それは全く新しい勤勞インテリゲンチヤであつて、こういうインテリゲン
チヤを諸君は地球上のいかなる國にも見出し得ないであらう。

以上が、過去の期間にソヴェト社會の階級構成の領域に生じた變化である。
これらの變化は、何を物語つているか？

それは、第一に、労働者階級と農民の境が、同じくこれらの階級とインテリゲンチヤとの境が洗
い去られてゆき、古い階級的排他は消滅してゆくということを物語つてゐる。それは、これらの社會
的グループの間の距りがますます少なくなつてゆくということを意味してゐる。

それは、第二に、これらの社會的グループ間の經濟的矛盾が凋落し、洗い去られてゆくといふこ
とを物語つてゐる。

それは、最後に、これらのグループ間の政治的矛盾もまた凋落し、洗い去られてゆくといふこと
を物語つてゐる。

ソ同盟の階級的構成の領域における變化は、かういふ状態である。

だが、もしももう一つの領域における變化について數言を述べないなら、ソ同盟の社會生活上にお
ける變化の全貌は、明かにし盡されたものとはならないであらう。私はソ同盟各民族の相互關係の領
域のことをいつてゐるのである。周知の通り、ソヴェト同盟には、およそ六十の民族、民族グループ
および諸族が加盟してゐる。ソヴェト國家は、多民族からなる國家である。だから、ソ同盟内の諸民
族間の相互關係という問題が、吾々にとつて第一義的な意義をもたざるを得ないことは、分りきつた
ことである。

ソヴェト社會主義共和國同盟は、周知の通り、一九二二年、ソ同盟のソヴェト第一回大會におい
て創立された。それは、ソ同盟の諸民族の平等と自由意志の原則に基いて、創立された。一九二四年
に採擇された現行憲法は、ソ同盟の最初の憲法である。それは、諸民族間の關係がまだ十分に圓滿に
なつておらず、大ロシア人に對する不信の殘滓がまだ消滅するに到らず、遠心力がまだまだ作用しつ
ずけていた時期であつた。これらの條件下において、多民族からなる一つの同盟國家に諸民族を結合

して、經濟的な、政治的な、軍事的な相互援助に基いて、これら民族間の同胞的協力を調整しなければならなかつたのである。ソヴェト權力は、この事業が困難なものであることを認めぬわけにはゆかなかつた。ソヴェト權力は、ブルジョア諸國において、多民族からなる國家の成功しなかつた経験を目の前に見ていた。ソヴェト權力は舊オーストリア・ハンガリアの失敗に歸した経験を目の前に見ていた。だがそれにもかかわらず、ソヴェト權力は、多民族からなる國家を建設するという實驗に着手した。というのは、社會主義を基礎として生れた、多民族からなる國家は、ありとあらゆる試練に堪えおおせるにちがいないということを、ソヴェト權力は知つていたのである。

その時以來、十四年過ぎた。これは、實驗の結果をしらべるには十分な期間である。で結果はどうか？ 過去の時期は、社會主義を基礎としてつくり上げられた多民族からなる國家を組織するといふ實驗が、完全に成功したことを一點の疑問の餘地のないほど明白に示したのである。これは、レーニンの民族政策の疑う餘地のない勝利である。(永く、續く、拍手)

何によつて、この勝利を説明すべきであらうか？

民族間の争闘の主たる組織者であるところの擄取階級がないということ、相互の不信を植えつけ、民族主義的激情をかきたてる擄取がないということ、あらゆる抑壓の敵であり、インターナショナルイズム思想の忠實な擔い手である労働者階級が權力を握つているということ、經濟的・社會的生活の全領域において、諸民族の相互援助が實際に實行されているということ、最後に、形式からいえば民族的で、内容からいえば社會主義的な、ソ同盟諸民族の民族文化が榮えているということ——これらおよびこれらと同様なすべての要因が、ソ同盟の諸民族の相貌を根本的に變化させ、彼らのいたっていた相互間の不信の感情を消滅させてしまい、彼らの中に相互的親睦の感情を發展させ、かように

して一つの統一同盟國家の體系内での諸民族の、ほんとうの同胞的協力を調整させるにいたつたという結果をもたらしたのである。

その結果として吾々は、今や完全に出來上り、そして、あらゆる試練に堪えおさせた多民族からなる社會主義國家をもっているのであつて、その鞏固さは、世界のいかなる部分の、一民族からなるいかなる國家をも羨望させずにはおかないところのものである。(暴風のような拍手)

以上が、過去の期間に、ソ同盟において、各民族の相互關係の領域に生じた變化である。

以上が、一九二四年から一九三六年までの期間に生じた、ソ同盟における經濟的、社會的、政治的生活の領域での變化の總決算である。

二、憲法草案の基本的特質

ソ同盟の生活上に見られるこれらすべての變化は、新憲法草案にどういふふう反映されているか？

言葉を変えていえば、本大會の審議を受けるため提出されている憲法草案の基本的特質は、何であるか？

憲法制定委員會は、一九二四年の憲法の條文に改正を加えることを委任されたのである。憲法制定委員會の活動の結果として、憲法の新しい條文、ソ同盟新憲法草案ができあがつた。憲法制定委員會は、新憲法草案を作成するに當つて、憲法を綱領と混同してはならぬということを出發點とした。これは、綱領と憲法との間には本質的な相違があるということを意味している。綱領が

まだないもの、將來においてさらに獲得し、闘いとらなければならぬものについて述べるものであるのに、憲法はこれとは反対にすでにあるもの、現在すでに獲得され、闘いとられているものについて述べなくてはならない。綱領は、主として將來のことを、憲法は現在のことを取扱つていのである。

これをわかりやすく説明するために、二つの例をあげよう。

わがソヴェト社會は、すでに基本的に社會主義を實現し、社會主義制度を創建し得た。即ち、マルクス主義者が別名、共產主義の第一段階もしくは最低の段階と呼んでいるものを實現するに到つた。つまり、わが國にはもはや根本的において、共產主義の第一段階、すなわち社會主義が實現されているのである（永く、續く、拍手）。共產主義のこの段階の根本原則は、周知の通り、「各人からはその能力に應じて、各人にはその勞働に應じて」という公式である。わが憲法は、この事實を、社會主義が闘い取られたという事實を、反映しなければならぬであろうか？ わが憲法は、この獲得に基礎をおかなければならぬであろうか？ 無論、そうでなければならぬ。社會主義が、ソ同盟にとつては、すでに獲得され、闘い取られたものであるから、そうでなければならぬのである。

だがソヴェト社會は、將來において、共產主義の高度の段階の實現達成をその目標としていませよ、「各人からはその能力に應じて、各人にはその要求に應じて」という公式が支配的な原則となるところの、共產主義の高度の段階を實現するところまでまだ達成してはいない。わが憲法は、まだないところの、また、まだこれから戦い取らなければならぬところの、共產主義の高度の段階に基礎をおくことができるであろうか？ いやできない。なせなら、共產主義の高度の段階は、ソ同盟にとつては、まだ實現されていないものであり、將來實現しなければならぬものだからである。憲法が綱領

もしくは將來の獲得についての宣言となつてしまふことを欲しないならば、そんなことはできないことである。

これが現在の歴史的瞬間におけるわが憲法の限界である。

かようなわけで、新憲法の草案は、踏み越えて來た道の總決算であり、すでに達成した獲得の總決算である。従つて、それは、すでに實際に獲得され、鬭い取られたものの記録であり、これを立法によつて確保したものである。(暴風のような拍手)

ここに、ソ同盟新憲法草案の第一の特質がある。

次に、ブルジョア諸國の憲法は、通常資本主義制度が確乎不動のものであるという確信から出發している。これらの憲法の主要な基礎をなすものは、資本主義の諸原則であり、その基本的な大黒柱、即ち土地、森林、工場その他の生産用具と生産手段の私有、人間による人間の搾取と、搾取者と被搾取者の存在、社會の一方の極には勤勞する大多數の者の生活不安と、他の極には働かないで、しかも樂な生活を保障されている少數者の豪華、等々である。これらの憲法は、これら及びこれらと同様の、資本主義の大黒柱に立脚しており、これらの大黒柱を反映し、これを立法手段によつて確保しているのである。

これらブルジョア憲法と異なつて、ソ同盟新憲法草案は、ソ同盟において資本主義制度が根絶されたという事實から、ソ同盟において社會主義制度が勝利したという事實から、出發している。ソ同盟新憲法草案の主要な基礎をなすものは、社會主義の諸原則、すでに戦い取られ、實現されている社會主義の基本をなす大黒柱、即ち土地、森林、工場その他の生産用具と生産手段の社會主義的所有、搾取と搾取階級との清算、多數者の窮乏と少數者の豪華というようなことの清算、失業の清算、「働

まだないもの、將來においてさらに獲得し、闘いとらなければならぬものについて述べるものであるのに、憲法はこれとは反對にすでにあるもの、現在すでに獲得され、闘いとられているものについて述べなくてはならない。綱領は、主として將來のことを、憲法は現在のことを取扱つていのである。

これをわかりやすく説明するために、二つの例をあげよう。

わがソヴェト社會は、すでに基本的に社會主義を實現し、社會主義制度を創建し得た。即ち、マルクス主義者が別名、共產主義の第一段階もしくは最低の段階と呼んでいるものを實現するに到つた。つまり、わが國にはもはや根本的において、共產主義の第一段階、すなわち社會主義が實現されているのである（永く、續く、拍手）。共產主義のこの段階の根本原則は、周知の通り、「各人からはその能力に應じて、各人にはその勞働に應じて」という公式である。わが憲法は、この事實を、社會主義が闘い取られたという事實を、反映しなければならぬであろうか？ わが憲法は、この獲得に基礎をおかなければならないであろうか？ 無論、そうでなければならぬ。社會主義が、ソ同盟にとつては、すでに獲得され、闘い取られたものであるから、そうでなければならぬのである。

だがソヴェト社會は、將來において、共產主義の高度の段階の實現達成をその目標としていかにせよ、「各人からはその能力に應じて、各人にはその要求に應じて」という公式が支配的な原則となるところの、共產主義の高度の段階を實現するところまでまだ達成してはいない。わが憲法は、未だないところの、また、まだこれから戦い取らなければならぬところの、共產主義の高度の段階に基礎をおくことができるであろうか？ いやできない。なせなら、共產主義の高度の段階は、ソ同盟にとつては、まだ實現されていないものであり、將來實現しなければならぬものだからである。憲法が綱領

もしくは將來の獲得についての宣言となつてしまふことを欲しないならば、そんなことはできないことである。

これが現在の歴史的瞬間におけるわが憲法の限界である。

かようなわけで、新憲法の草案は、踏み越えて來た道の總決算であり、すでに達成した獲得の總決算である。従つて、それは、すでに實際に獲得され、鬪い取られたものの記録であり、これを立法によつて確保したものである。(暴風のような拍手)

ここに、ソ同盟新憲法草案の第一の特質がある。

次に、ブルジョア諸國の憲法は、通常資本主義制度が確乎不動のものであるという確信から出發してゐる。これらの憲法の主要な基礎をなすものは、資本主義の諸原則であり、その基本的な大黒柱、即ち土地、森林、工場その他の生産用具と生産手段の私有、人間による人間の搾取と、搾取者と被搾取者の存在、社會の一方の極には勤勞する大多數の者の生活不安と、他の極には働かないで、しかも樂な生活を保障されている少數者の豪華、等々である。これらの憲法は、これら及びこれらと同様の、資本主義の大黒柱に立脚しており、これらの大黒柱を反映し、これを立法手段によつて確保してゐるのである。

これらブルジョア憲法と異なつて、ソ同盟新憲法草案は、ソ同盟において資本主義制度が根絶されたという事實から、ソ同盟において社會主義制度が勝利したという事實から、出發してゐる。ソ同盟新憲法草案の主要な基礎をなすものは、社會主義の諸原則、すでに戦い取られ、實現されてゐる社會主義の基本をなす大黒柱、即ち土地、森林、工場その他の生産用具と生産手段の社會主義的所有、搾取と搾取階級との清算、多數者の窮乏と少數者の豪華というようなことの清算、失業の清算、「働

かざるものは食うべからず」の公式に従つて、働く能力のある各市民の本務並に名譽な義務としての労働である。それは、労働の権利、即ち保障された仕事を受け得る各市民の権利、休息の権利、教育を受ける権利等々である。新憲法草案は、これら及びこれらと同様の、社會主義の大黒柱に立脚しており、これらを反映し、これらを立法手段によつて確保しているのである。

これが、新憲法草案の第二の特質である。

さらに、ブルジョア憲法は、暗黙の中に、社會は對抗的な階級から、即ち富を所有している階級と富を所有しない階級からなっており、いかなる黨が政權につきうとも國家による社會の指導（獨裁）は、ブルジョア階級に屬さなければならぬものであり、憲法は有産階級に都合よく、また有利な社會秩序を確保するために必要である、という前提から出發している。

ブルジョア憲法と異なつて、ソ同盟の新憲法草案は、社會にはすでに對抗的な階級はなく、社會は相互に親睦の關係にある二つの階級、即ち労働者と農民からなっており、正にこれらの勤勞階級が權力の地位についており、國家による社會の指導（獨裁）は、社會の先進的階級である労働者階級に屬しており、憲法は勤勞者に都合よく、また有利な社會秩序を確保するために必要である、ということから出發している。

これが、新憲法草案の第三の特質である。

さらに、ブルジョア憲法は、暗黙の中に、各民族、各人種は平等の権利を持ち得ない、完全な権利を享受している民族と完全な権利を享受していない民族があり、なおその外、たとえば植民地においては、完全な権利を享受していない民族よりもつと少い權利しかもたぬところの、第三の部類に屬すべき民族もしくは人種があるという前提から出發している。このことは、これらすべての憲法が、

その根本において、民族主義的なもの、即ち支配民族の憲法であるということを意味している。

これらの憲法と異なつて、ソ同盟の新憲法草案は、反對に、極めてインターナショナル的である。新憲法草案は、すべての民族及び人種が同權であるということから出發している。新憲法草案は、皮膚の色や言葉、文化水準や國家的發達水準の差異は、民族および人種間における他のいかなる差異とも同様に民族による權利の不平等を正當化するための根據にはなり得ないということから出發している。新憲法草案は、すべての民族並に人種は、その過去及び現在の狀態のいかにかわらず、またその強いか弱いかに関せず、社會の經濟生活、社會生活、國家生活、文化生活のあらゆる分野において平等の權利を享受しなければならない、ということから出發している。

これが、新憲法草案の第四の特質である。

新憲法草案の第五の特質は、その徹底的な、終始一貫した民主主義である。民主主義の見地から、ブルジョア憲法を二つのグループに分けることが出来る。即ち、一つのグループの憲法は、市民の權利の平等と民主主義的自由とを公然と否定するか、もしくは事實上これを無に歸してしまつてゐる。今一つのグループの憲法は、民主主義の原則を進んで受け容れ、これをかつぎ廻つてさへいるが、その際、民主主義的權利や自由が全く不具になつてしまふような留保や制限を加へてゐる。これらの憲法は、全市民の平等な選舉權ということを云々するが、それと同時に定任期間により、教育程度により、資産による法定資格によつてさえ、この權利を制限する。これらの憲法は、市民の平等の權利ということを云々するが、それと同時に、このことは婦人には關しないとか、もしくは婦人には部分的にしか關しないとかいつて留保を加へてゐる。その他等々。

ソ同盟新憲法草案の特質は、それがこういう留保、制限を全くもたないという點にある。新憲法草案にとつては、積極的の市民もしくは消極的の市民というようなものではなく、すべての市民が積極的の市民である。新憲法草案は、男子と婦人、「定住する者」と「定住しない者」、財産をもつ者ともたない者、教育のある者となない者によつて、何ら権利の相違を認めない。新憲法草案にとつては、すべての市民は同権である。資産状態や民族的所屬や性別や、職務上の地位ではなくて、各市民の個人としての能力と個人としての勞働とが、その市民の社會における地位を決定するのである。

最後に、新憲法草案のもう一つの特質がある。ブルジョア憲法は、通常、市民の公式的な権利を記録するに止り、それらの権利を實現するための條件、この實現の可能性、その實現の手段については配慮しない。市民の平等ということをや々するが、もし雇主と地主が富と社會における政治的勢力とをもつており、勞働者と農民がその何れをも奪われているとすれば、またもし前者が搾取者であつて後者が被搾取者であるとすれば、雇主と勞働者、地主と農民の間には、眞の平等はあり得ないということも忘れてゐる。それからまた、言論、集會、出版の自由を云々しているが、もし勞働者階級が集會を開くための適當な會堂、完備した印刷所、十分な量の印刷用紙等々をもつ可能性を奪われているとすれば、すべてこれらの自由は勞働者階級にとつて無意味な文句にかわつてしまふということを忘れてゐる。

新憲法草案の特質は、それが市民の形式上の権利を記録するだけに局限せず、これらの権利を保障するという問題に、これらの権利を實現する手段の問題に、重心を移している點にある。新憲法草案は、單に市民の権利の平等を宣言してはならず、搾取制度が清算されたという事實、市民があらゆる搾取から解放されているという事實を、法律の制定により確保することによつて、この權

利の平等ということを保証してもいるのである。新憲法草案は、單に労働の権利を宣言しているのみではなく、ソヴェト社會には恐慌がないという事實、失業が根絶されてしまつたという事實を法律の制定により確保することによつて、この労働の権利を保障してもいるのである。新憲法草案は、單に民主主義的自由を宣言しているのではなく、一定の物質的手段により、法律の制定ということをしてこれらの自由を保障してもいるのである。それゆえ、新憲法草案の民主主義が「普通」、「一般に認められた」民主主義一般ではなく、社會主義的民主主義であることは、わかりきつたことである。

以上が、ソ同盟新憲法草案の基本的な特質である。

以上が、一九二四年から一九三六年までの期間に實現された、ソ同盟の經濟的、社會的・政治的生活における進展と變化の、新憲法草案への反映である。

四、憲法草案に對するブルジョア的批判

憲法草案に對するブルジョア的批判について、數言を述べよう。

外國のブルジョア新聞雜誌が憲法草案に對していかなる態度をとつているかという問題は、疑いもなく、ある程度興味のある問題である。外國の新聞雜誌がブルジョア諸國の各種住民層の世論を反映している限り、吾々は、これらの新聞雜誌がわが憲法草案に反對して、展開した批判に觸れずにはすますわけにはゆかない。

外國の新聞雜誌が憲法草案に對して反應した最初の兆候は、一定の傾向、即ち憲法草案を默殺するという傾向において現われた。私はこの場合、最も反動的な、ファシストの新聞雜誌のことをいつ

ているのだ。この批判者のグループは、草案なんかなかったかのように、また、そんなものは、概してこの世にないかのように、問題をみせかけて、憲法草案をあつさり黙殺してしまふのが最もよいとみなした。黙殺は批判ではないということができるかも知れない。だが、これは正しくない。黙殺の方法は、特別な無視手段として、やはり批判の一形態である。なるほど、愚劣な、笑うべき形態ではあるが、ともかくにも、批判の一形態なのだ（全堂哄笑、拍手）。だが黙殺の方法では、どうも彼等が望んだようなうまい結果がえられなかった。それで結局、彼等はやむを得ず、堅くむすんだ口を開いて、いかに悲しむべきことであつても、ソ同盟憲法草案がとも角にも存在しており、そして存在しているばかりではなく、人心に悪影響を與え始めていると世間に報道しないわけにはゆかなくなつた。そして、それ以外にはなりようがなかった。というのは、とに角世の中には世論というものがあつて、事實について本當のことを知りたいと望んでいる讀者があり、生きた人間がおり、こういう人々を長く欺瞞のしめ木の中に押しつけておくことは、決してできないことだからである。欺瞞では、十分な結果は得られるものではない……

批判者の第二のグループは、憲法草案が實際この世に存在しているということを認めている。だが、彼等は、草案は大きい興味を惹くほどのものではない、なせなら、それは、實際のところ、憲法草案ではなくて一片の紙きれであり、一定のかけ引をやつて、人々を欺瞞しようと期待した空虚な約束にすぎないのだから、と考へている。そしてその際に、彼等はつけ加えていう、ソ同盟そのものが國家ではなく、ほんの地理的概念（全堂哄笑）にすぎないのだから、もつといい草案をつくることも出来なかつたんだ、しかも國家でない以上、その憲法もほんとうの憲法ではあり得ないんだ、と。この批判者のグループの典型的な代表者は、奇怪なことだが、ドイツの半官報『ドイツシエ・デイブ

ロマチツシエ・ポリチツシエ・コレスボンデンツ』である。この雑誌は、率直に、ソ同盟憲法草案は空虚な約束であり、欺瞞であり、『ボチヨムキン村』である、といつてゐる。この雑誌はきつぱりとした次のように聲明する。ソ同盟は國家ではない、ソ同盟は、『正確に規定し得る地理的概念に外ならない』（全堂哄笑）、それだから、ソ同盟の憲法は、眞の憲法とは認められないものである、と。

失禮ながら、こんな批判者については、何と御挨拶したらいいだろうか？

偉大なロシアの作家シチエドリンは、その寓話的物語の一つに、非常に偏狭で、かつ愚鈍ではあるが、極端に自惚がつよく、がむじやらな、頑固頭の官僚の一つのタイプを描いてゐる。この官僚先生、自分の『管轄下にある』州で、何千という住民をみな殺しにし、何十という町を焼き拂つて、『安寧秩序』を確立してから、さてまわりを見まわして、地平線の彼方にアメリカを見つけた。即ち、もちろんよくは知られていないのだが、そこには國民をまどわす何かしら自由というものがあり、ちがつた方法で國家を統治してゐる國を見つけた。官僚先生、アメリカを見つけて、憤慨した。なんたる國だ、どこからでてきたんだ、何の理由があつてこんな國が存在してゐるんだ？（全堂哄笑、拍手）勿論、アメリカは數世紀前に偶然に發見され、開かれたんだが、アメリカのあの氣も残らないように、これを再び閉じてしまふことが出来ないわけがあるか？ と。（全堂哄笑）。そしてこういつて、彼は、『アメリカを再び閉じること』という決議を書いたのだ！（全堂哄笑）

私には、『ドイツシエ・デイプロマチツシエ・ポリチツシエ・コレスボンデンツ』の紳士はこのシチエドリンの描いた官僚先生に全く瓜二つであると思える（全堂哄笑、賛成の拍手）。この紳士連には、ソ同盟がもうずつと前から眼ざわりになつてしまふやうがないのだ。ソ同盟は、全世界の労働者階

級に解放の精神を吹き込み、労働者階級の敵共に氣違ひじみた激怒をひきおこさせて、すでに十九年、燈台のようにつつ立つている。しかもそれは、このソ同盟は、ただ存在しているばかりでなく、成長發展さえしており、かつ成長發展しているばかりでなく、益々繁榮さえしており、益々繁榮しているばかりでなく、新憲法草案を、人間の頭腦に刺戟を與え、被壓迫階級に新しい希望を植えつけているこの草案を作成さえしているのだ（拍手）。これではドイツの半官報の紳士連も、どうして憤慨しないでいられようか？ で、彼等は金切聲を擧げて叫ぶのだ——これは何たる國だ、何の理由があつて存在しているのだ（全堂哄笑）。一九一七年十月にこの國が開かれたとすれば、全く片影も残さぬように、これを再び閉じてしまうことができないわけがあるか？ と。そして、こういつてから、彼等はこう決定したのだ。ソ同盟を再び閉じること、そしてソ同盟は國家としては存在しない、ソ同盟は單なる地理的概念に外ならないと、おおびらに宣言すること——（全堂哄笑）。

アメリカを再び閉じることという決議を書いたシチエドリンの官僚は、てにおえない頓馬ではあつたが、それでも、實際を理解する頭が少しはあつたので、すぐ獨語してこういつた——「だが、これは自分の手ではどうにもならないらしい」と。（愉快な爆笑、暴風のような拍手）。紙の上だけであれこれの國家を『閉鎖する』ことは、勿論ドイツ半官報の紳士連にだつてやれることだが、眞劍にいうとすれば、『それは彼等の手ではどうにもならない』ということに思いつくだけの智恵が彼等にあるかどうか、私は知らない……（愉快な爆笑、暴風のような拍手）。

ソ同盟の憲法は、まるで空虚な約束のようなものだとか、「ボチヨムキンの村」のようなものだから、等々の言葉については、私はそれ自身まことを雄辯に物語っている幾多の、動かさ難い事實を引證したいと思う。

一九一七年に、ソ同盟の諸民族は、ブルジョアジーを打倒して、プロレタリアートの獨裁を樹立し、ソヴェト權力を樹立した。これは事實であつて、約束ではない。

次に、ソヴェト權力は地主階級を根絶して、以前の地主の土地、官有地、修道院の土地一億五千萬ヘクター以上を農民に渡した。これは從來農民の手にあつた土地以外のものである。これは事實であつて、約束ではない。

次に、ソヴェト權力は資本家階級を收奪し、彼等から銀行、工場、鉄道その他の生産用具と生産手段とを奪取し、これらを社會主義所有として宣言し、これら企業の指導者として、労働者階級の最もすぐれた人々を据えた。これは事實であつて、約束ではない。(永くつすく拍手)

次に、新しい社會主義的原則に基き、新しい技術的基礎をもつ工業と農業とを組織して、ソヴェト權力は、いまソ同盟の農業が戦前よりも一倍半多く生産物を出し、工業は戦前よりも七倍多く製品を生産し、一方、國民所得は戦前に比して四倍に増大したという成功を獲ち得た。これはみな事實であつて、約束ではない。(永くつすく拍手)

次に、ソヴェト權力は、失業を絶滅し、労働の權利、休息の權利、教育を受ける權利を實現し、労働者、農民、インテリゲンチヤにヨリよい物質的、文化的條件を保障し、市民の、無記名投票による普通、直接、平等の選挙權の實施を保障した。これはみな事實であつて、約束ではない。(永くつすく拍手)

最後に、ソ同盟は、約束ではなくて、これら周知の事實を記録し、立法によつて保障したものであり、すでに獲得され、闘い取られたものを記録し、立法によつて確保したものである新憲法草案を與えた。

そこでこうなつた以上、問題は、ドイツの半官報の紳士連の「ポチヨムキンの村」云々のおしゃべりは、彼等がソ同盟についての眞實を人民にかくし、人民を惑わし、人民を欺瞞することを目的として立てたのではないということになれば、そもそも何に歸着するかということだ。

事實はこのとおりである。そして、世間でいわれる通り、事實は頑固なものだ。ドイツの半官報の紳士連は、事實だからこそなおさら悪いというかも知れない（全堂哄笑）。だがその時には、周知なロシアの諺を以て「馬鹿のためには法律は書かれていない」と彼等に答えていいのだ。（愉快な笑聲、永く、つずく拍手）

批判者の第三のグループは、憲法草案が、いくらが良いところをもっているということに異存がなく、かつ彼等は、憲法草案を肯定的な意義をもつた現象だとみなしている。だが、彼等は草案のいくつかの原理が實現できるかどうかを非常に疑っている。なぜなら、彼等は、これらの原理は總じて實現不可能なものであつて、ただ紙に書かれただけにとどまるにちがいないと信じさせられているからである。これは、手柔かにいつて、懐疑論者である。これらの懐疑論者共は、すべての國に存在しているのだ。

吾々がこれらの懐疑論者に出あうのは、初めてのことでないということはいわなければならぬ。ボルシエヴィキが一九一七年に權力をとつたとき、懐疑論者共はこういつた——ボルシエヴィキは恐らく悪い人間ではなからう、だが、彼らは權力をとつても、それをうまくやつてゆくことはできない、ボルシエヴィキは失敗するだらう、と。だが、実際には、失敗したのはボルシエヴィキではなくて、懐疑論者共だつた。

國內戦争と外國の武力干涉の時期には、懐疑論者のこのグループは、次のようにいつた。ソヴェ

ト権力は、勿論、悪いものではない。だが、デニキンとコルチャツクに外國の武力干涉者共も加えたら、彼らは、たぶんソヴェト権力をやつつけてしまふだろう、と。だが、實際には、この點でも誤算したのは、懷疑論者共であつた。

ソヴェト権力が第一次五カ年計畫を發表した時、懷疑論者共はまた舞台に現われ出て、こういつた。五カ年計畫は勿論、いいことにちがいない。だがはたしてこれは實現できることだろうか。ボルシエヴィキは五カ年計畫をうまくやつてゆくことはできないものと豫想しなければならぬ、と。だが、事實は、懷疑論者共がまたもやしくじつたこととなつた。五カ年計畫は四カ年で實現された。

これと同じことを、新憲法草案とこれに對する懷疑論者共の批判とについていわなければならぬ。草案が發表されるや否や、批判者のこのグループは、そのうつとうしい懷疑説をもつて、憲法のある條文が實現されえないだろうという疑念をもつて、また舞台に現われた。懷疑論者共がこの場合にも失敗するだろうということ、彼等が過去に幾度となく失敗したように、この場合にもまた失敗するだろうということは、疑うべき何らの根據もない。

批判者の第四のグループは、新憲法草案を攻撃しつつ、これを「右への移動だ」、「プロレタリアート獨裁の拒否だ」、「ボルシエヴィキ政治制度の清算だ」、と性格すけている。「ボルシエヴィキは右の方へ傾いた、これは事實だ」——と、彼等は、様々な口調でしゃべりたてている。この點では、あるポーランドの新聞および部分的にはアメリカの新聞が、特に熱心である。

失禮ながら、これらの批判者について、何といつたらいいだろうか？

もし労働者階級の獨裁の基礎が擴大し、獨裁が一層屈伸性のある、従つて、一層強力な、社會に對する國家による指導の制度に轉化するとすれば、彼等にとつては、労働者階級の獨裁の強化と

してではなく、その弱化もしくは労働者階級の獨裁の拒否とさえ解釋されるとすれば、一體、この紳士連は、労働者階級の獨裁とは何か？ ということを、それでも知つていいのか、と質問してもいいのだ。

もし社會主義の勝利を立法によつて確保することが、工業化・ホルホーズ化・民主化の成功を立法によつて確保することが、これら批判者のところでは「右への移動」と名づけられているとすれば、一體、この紳士連は、左と右の相違を知つていいのか？ と、質問してもいいのだ。(全堂哄笑、拍手)

この紳士連が新憲法草案に對する彼等の批判で全く混亂し、そして、混亂した擧句、右と左をごつちやにしてしまつたのだということは、疑いえないことである。

この場合、ゴゴリの「死せる魂」に出てくるお邸の「小婢」ペラゲヤを思い出さないわけにはゆかない。ゴゴリの叙述によれば、ペラゲヤはある時、チチコフの馭者のセリファンに道を教えてやろうとしたが、道の左側と右側とを區別することが出来なかつたので、まごついて、きまりの悪い立場に陥つてしまつた。ポーランドの新聞の吾々に對する批評家たちは、その自負のつよさにもかかわらず、「死せる魂」に出てくるお邸の「小婢」ペラゲヤの理解の水準とあまり遠くはへだたつていないことを認めなければならぬ(拍手)。諸君が思い出されるなら、馭者のセリファンは、右と左を混同したペラゲヤに小言を浴せかけてやらねばならないと考へて、こういつた……「やーい、この田舎者……どつちが右か、どつちが左か知らねえのか」。吾々も同様に、吾々に對する不連な批評家達に小言を浴せて、こういわなければならぬように思う。やーい、なさけない批評家諸君……諸君はどつちが右か、どつちが左かも知らないんだ、と。(永く續く拍手)

最後に、批判者のもう一つのグループがある。前のグループが、憲法草案は労働者階級の獨裁を拒否したといつて非難しているとすれば、このグループは、反對に、憲法草案はソ同盟の現存状態を少しも變更しない、労働者階級の獨裁に觸れず、諸政黨の自由を許さず、ソ同盟における共產黨の現在の指導的地位を保存しているということで、これを非難している。この場合、この批判者のグループは、ソ同盟で諸政黨の自由がないことは、民主主義の原則が侵害されている兆候であるとみなしている。

私は、新憲法草案が労働者階級獨裁の制度をほんとうにそのままにしておき、また同じくソ同盟共產黨の現在の指導的地位を何らの變更なしに保存していることを認めなければならぬ（暴風のよいうな拍手）。もし尊敬すべき批評家たちがこれを憲法草案の缺陷だとみなすなら、ただ遺憾と思う外はない。だが、吾々ボルシェヴィキは、これを憲法草案の長所とみなすのだ。（暴風のような拍手）

色々な政黨の自由ということについていえば、吾々は、この問題について少しちがった見解をもっている。黨は階級の部分であり、その先進的部分である。いくつかの黨は、したがって諸政黨の自由は、その利害が敵對的で和解し得ない對抗的階級が存在し、例えば資本家と労働者、地主と農民、クラークと貧農等々がいるような社會のみに、存在し得るのである。だが、ソ同盟にはすでに、資本家、地主、クラーク等々のような階級はもはやない。ソ同盟には、ただ二つの階級、即ち労働者と農民があるのみであり、彼等の利害は敵對的でないばかりか、反對に友誼的なのである。したがって、ソ同盟にはいくつかの黨が存在するための地盤はないし、かくてこれらの黨の自由のための地盤もないのである。ソ同盟には、一つの黨、即ち共產黨が存在するための地盤だけがあるのである。ソ同盟には、果敢にして、最後まで労働者および農民の利益を擁護するただ一つの黨、即ち共產黨のみが存在し

得るのである。そしてこの黨が、これらの階級の利益を相當よく擁護しているということ、これについては、恐らく何らの疑問もあり得ないであらう。(暴風のような拍手)

人々は、民主々義制度について云々している。だが、民主々義制度とは何か？ 對抗的な階級がある資本主義諸國における民主々義制度は、結局のところ、強いもののための民主々義制度であり、有産少数者のための民主々義制度である。ソ同盟における民主々義制度は、これと反對に、勤勞者のための民主々義制度、とりもなおさず、全體の人達のための民主々義制度である。しかしてこの結果として民主々義の原則は、ソ同盟の新憲法草案によつてではなくブルジョア憲法によつて侵害されているということになるのである。それだからこそ、私は、ソ同盟の憲法は世界において唯一の、徹底的に民主々義的な憲法である、と考える。

ソ同盟新憲法草案に對するブルジョアの批判については、以上のようなありさまである。

五、憲法草案に對する修正案並に追加案

草案についての全人民的討議の際に市民達から提案された、憲法草案に對する修正案並に追加案に關する問題に移らう。

憲法草案の全人民的討議によつて、周知の通り、かなり澤山の修正案や追加案を得ることができた。これらは、みな、ソヴェトの新聞雜誌に發表された。この修正案は、その種類が非常に多種多様であり、その價值も同一でないので、これを三つの部類にわけざるべきだと私は思う。

第一の部類の修正案の特徴は、これらの修正案が憲法の問題を取扱っているのではなく、將來の立法機關の日常立法活動の諸問題を取扱っている點である。保險についての個々の問題、コルホーズ建設の若干の問題、産業建設の若干の問題、財政方面の諸問題——こういうのが、これらの修正案の題目である。これらの修正案の提案者は、憲法上の問題と日常の立法の問題との差異をはつきりと會得しなかつたらしい。だからこそ、彼等は憲法にできるだけ澤山の法律を入れて、憲法を一種の法律全書にかえようとしてるのである。だが、憲法は法律全書ではない。憲法は根本法であり、實に根本法たるのみである。憲法は、將來の立法機關の日常立法活動を除外するものではなくて、これを豫想している。憲法は、かかる機關の將來の立法活動のために法的基礎を與えるのである。だから、かような種類の修正案や追加案は、憲法に直接關係しないものとして、國の將來の立法機關に送付さるべきものである、と私は考える。

第二の部類に入れるべきものは、憲法に歴史的な資料たる要素、またはソヴェト權力がまだ獲得していない、また將來獲得しなければならぬものについての宣言的な要素をとり入れようとして、修正案並に追加案である。憲法に、黨、労働者階級及びすべての勤勞者が、長い期間にわたり、社會主義の勝利のための闘争においていかなる困難を克服して來たかを書きとどめ、また、憲法に、ソヴェト運動の終局目標、即ち完全な共產主義社會の建設完成ということを示すこと——このようなことが、これらの修正案の題目であつて、それがいろいろと異なつた言い現じ方できりかえされているのである。私は、こういう修正案並に追加案もまた、憲法に直接關係をもたないものとして、問題外にしておくべきものだと思う。憲法とは、すでに戦い取られ、保障された獲得を記録したものであり、立法によつて確保したものである。もし吾々が憲法のこの基本的性質を歪曲することを欲しない

なら、吾々は過去のことに関する歴史的な資料、またはソ同盟の勤勞者の將來の獲得に關する宣言を以て、憲法を充たすべきではない。そのためには、わが國は別な方法と別な諸文書とをもつてゐる。

最後に、第三の部類に入れるべきものは、憲法草案に直接關係をもつ修正案と追加案である。

この部類の修正案のかなりな部分は、字句の訂正を必要とする性質のものである。それだから、これは、本大會によつて組織され、それに、新憲法原文の最終編集をなすべき任務を與えるであろうと、私が考えるところの、本大會の編集委員會に渡していいだろう。

第三の部類に屬する爾餘の修正案についていえば、これらはもつと本質的な意義をもつており、私の考えでは、これについてここで少し述べなければならぬと思う。

一、まず第一に、憲法草案第一條に對する修正案について。この點では四通りの修正案がある。ある人々は、「労働者農民の國家」という言葉の代りに、「勤勞者の國家」と述べることを提案してゐる。他の人々は、「労働者農民の國家」という言葉の中の農民の次に、「及び勤勞インテリゲンチヤ」を加えることを提案してゐる。第三の人々は、「労働者農民の國家」の代りに、「ソ同盟の領土に居住するすべての人種、すべての民族の國家」と述べることを提案してゐる。第四の人々は「農民」という言葉を「コルホーズ員」という言葉、または「社會主義農業の勤勞者」という言葉にかえることを提案してゐる。

これらの修正案を採用すべきであろうか？ 私は、採用すべきではないと考える。

憲法草案の第一條は、何についていつてゐるか？ それは、ソヴェト社會の階級構成についていつてゐるのである。吾々マルクス主義者は、憲法の中で、わが社會の階級構成の問題に觸れずにはすま

とができるだろうか？ いや、できない。ソヴェト社會は、周知の通り、二つの階級によつて、即ち、労働者と農民によつて、組成されている。憲法草案の第一條は、まさにこのことについていつているのである。従つて、憲法草案の第一條は、わが社會の階級構成を正しく表現しているのである。そこで人々は訊ねるであらう、では勤勞インテリゲンチヤは？ と。インテリゲンチヤは、かつて一度も階級であつたことはないし、また階級たり得ないのだ。またインテリゲンチヤは、その成員を社會のすべての階級からよせ集めている中間層であつたし、現在も依然として中間層のままである。舊時代には、インテリゲンチヤは、貴族、ブルジョアジーの間から、部分的には農民の間から、そしてごく僅かの程度でだけ労働者の間から、その成員をよせ集めていた。だが、わがソヴェトの時代には、インテリゲンチヤは、主としてその成員を労働者および農民の間からよせ集めている。だが、どんなふうにもその成員をよせ集めようと、またいかなる性質をもつていようと、インテリゲンチヤは依然として中間層であつて、階級ではない。

この事情は、勤勞インテリゲンチヤの權利を傷けはしないだろうか？ 少しも傷けはしない！ 憲法草案の第一條は、ソヴェト社會の各種の層の權利について述べているのではなく、この社會の階級構成について述べているのである。勤勞インテリゲンチヤの權利をも入れて、ソヴェト社會の各種の層の權利については主として、憲法草案の第十章および第十一章に述べられている。これらの章によつて、労働者、農民、勤勞インテリゲンチヤは、國の經濟的・政治的・社會的・文化的生活のあらゆる分野で完全に平等の權利をもつていことが明かである。従つて、勤勞インテリゲンチヤの權利が傷けられるなどということは、問題にもなり得ないのである。

これとおなじことを、ソ同盟の成員となつてゐる民族並に人種についていかなければならぬ。憲法草案の第二章にはすでにソ同盟は平等の権利をもつ諸民族の自由な同盟であると述べられてゐる。この定義すけを、ソヴェト社會の民族的構成を取扱つてゐるのではなく、その階級構成を取扱つてゐる憲法草案の第一條でもう一度くりかえす必要があるだろうか？ そんな必要のないことは明らかである。ソ同盟の成員となつてゐる民族並に人種の権利についていえば、それは、憲法草案の第二章、第十章および第十一章において述べられてゐる。これらの章によつて、ソ同盟の民族並に人種は、國の經濟的・政治的・社會的・文化的生活のあらゆる分野で平等の権利を享有するということが明らかである。従つて、民族の権利が傷けられるなどということは問題にもなり得ない。

「農民」という言葉を「コルホーズ員」もしくは「社會主義農業の勤勞者」という言葉を以てかえることも、同じく正しくはなからう。第一に、農民の中には、コルホーズ員の外に、まだ百萬戸を越える、コルホーズ員でない農民がいる。彼等はどうなるか？ この修正の提案者達は彼等を計算外におこうと思つてゐるのであらうか？ それは不合理なことであらう。第二に、もし農民の大多數がコルホーズ的經營をやり始めたとしても、これはまだ彼等が農民ではなくなつた、彼等はもはや自分の個人の經營、個人の世帯をもつてゐない等々ということを意味しない。第三に、そうするならば「勞働者」という言葉もまた「社會主義的工業に働く人」という言葉をもつてかえなければならぬ。最後、だが、修正の提案者たちは、何故かそうすることを提案してゐない。最後に、わが國では勞働者階級と農民階級というものがもはや消滅してしまつたのであらうか？ そして、もし消滅してしまつてゐないとすれば、彼等のために決められていた名稱を、辭書から削除してしまふ必要があるだろうか？ 修正の提案者たちは、たぶん、現在の社會ではなく、階級がもはやなくなり、勞働者と農民

とが統一された共產主義社會の働く人になつてしまふであらう將來の社會のことをいつているのである。従つて、彼等は、明かに先つぱりしてゐるのである。だが憲法を作成する場合には、將來を出發點とするのではなくして、現在を、すでにあるものを出發點としなければならぬ。憲法は先つぱりすることはできないし、またしてはならない。

二、それから憲法草案第十七條に對する修正案がある。この修正案は、同盟構成共和國はソ同盟から自由に脱退する權利を保持するということを述べてゐる第十七條を、憲法草案から全く取り去ることを提案するのである。私は、この提案は正しくなく、従つて大會はこれを採用してはならないと考える。ソ同盟は、平等の權利をもつ同盟構成共和國の自由意志的同盟である。ソ同盟から自由に脱退する權利について述べてゐる條項を憲法から除き去ることは、この同盟の自由意志的な性質を侵害することを意味する。吾々はこれに賛成することができらうか？ 吾々はこれに賛成することはできないし、またしてはならないと、私は考える。ソ同盟には、ソ同盟から脱退することを望むような共和國は一つもない、だから第十七條は實際的な意義を持つていないと、人々はいふ。わが國にはソ同盟から脱退することを望むような共和國が一つもないといふことは、勿論正しい。だが、このことから、吾々がソ同盟から自由に脱退する同盟構成共和國の權利を憲法の中に記録してはならないといふ結論は、決して出て來ない。また同様にソ同盟には、他の同盟構成共和國に重壓を加えることを望むような同盟構成共和國もない。だがこのことから、同盟構成共和國の權利の平等を取扱つてゐる條項をソ同盟憲法から取り除かなければならないといふ結論は、決して出て來ない。

三、更に、憲法草案の第二章に、自治ソヴェト社會主義共和國は、適當な程度の經濟的・文化的發達水準に達した場合、これを同盟構成ソヴェト社會主義共和國に改組され得る、といふ事に歸着す

る内容をもつた、新しい條項を追加しようという提案がある。この提案を採用し得るだろうか？採用すべきではない、と私は考える。この提案は、その内容からばかりでなく、その提出の動機からいつても正しくない。これら自治共和國が經濟的・文化的に成熟しているということ、自治共和國を同盟構成共和國の地位に移すための理由にすることはできない。またこれと同じく、共和國が經濟的にもしくは文化的におくれているということ、これをいすれかの共和國が自治共和國の名簿の中にのこつてゐることの理由とすることもできない。これは問題に對するマルクス主義的な態度ではなく、レーニンの態度ではない。例えば、タタール共和國は自治共和國として残つてゐるが、カザヒ共和國は同盟構成共和國となつた。だがこれは、カザヒ共和國が、文化的・經濟的發展の見地から見、タタール共和國よりも高い程度にあるということを意味するわけではない。事實は、正に反對である。これと同じことを、例えばヴォルガ流域ドイツ人自治共和國とキルギズ同盟構成共和國についてもいわなければならない。この二つの共和國の中、前者は自治共和國としてとどまつてゐるとはいえ、文化的・經濟的には、後者よりも發達の程度は高いのである。

よからば、自治共和國を同盟構成共和國の地位にうつす根據を與え得るところの、標識とはどんなものであるか？

この標識は三つある。

第一には、その共和國が國境に接してゐて、全周圍をソ同盟の領土で圍繞されてはいないという事が必要である。何故か？ なせならば、もし同盟構成共和國がソ同盟から脱退する權利を保持するとすれば、同盟構成共和國となつたこの共和國が、論理的にまた實際的に、ソ同盟から脱退する問題

を立てる可能性をもつということが、ゼヒ必要だからである。ところで、こういう問題は、たとえば何れかの外國と境を接して、従つて全周圍をソ同盟の領土で圍繞されていらないような共和國だけが立て得るのである。勿論、わが國にはソ同盟から脱退する問題を、實際的に立てるような共和國はない。だが、同盟構成共和國にとつてソ同盟から脱退する権利が保存されている以上、この権利が空虚にして、無意味な紙片になつてしまわないように、このことを取極めなければならない。例えばバシキールもしくはタタール共和國を例にとつて見よう。かりにこれらの自治共和國が同盟構成共和國の地位に移されたとする。これらの共和國は、ソ同盟から脱退するという問題を論理的に、實際的に立て得るだろうか？ いや、できないだろう。なぜか？なぜならば、これらの共和國は全周圍をソヴェト諸共和國や諸地方によつて圍繞されており、かつ、實をいえば、どの方向へにしろ、ソ同盟から脱退することはできないからだ（全堂哄笑、拍手）。だから、こういう共和國を同盟構成共和國の地位にうつすことは、正しくはないであらう。

第二に、ソヴェト共和國に自己の名を附している民族が、その共和國で多かれ少なかれ密集せる大多數をなしているということが必要である。例えば、クリミア自治共和國を例にとつて見よう。この共和國は國境にある共和國ではあるが、クリミアのタタール人はこの共和國では大多數を構成してはいず、反對にそこの少數をなしている。従つて、クリミア共和國を同盟構成共和國の地位にうつすことは、正しくなく、かつ非論理的であらう。

第三に、その共和國がその人口數からいつて餘り小さいものではなく、まず百萬以下でなく、せめて百萬以上の人口をもつていことが必要である。なぜか？なぜならば、最少限の人口と僅かな軍隊しかもたない小さいソヴェト共和國が獨立國家としての存在を期待できると豫想することは、正

しくないだろうからである。帝國主義的野獸共が即座にこの共和國を自分のものにするだろうということは、恐らく疑う餘地のないことである。

この三つの客觀的な標識がなくては、現在の歴史的瞬間に、それぞれの自治共和國を同盟構成共和國の地位に移すという問題を立てることは、正しくないだろうと私は考える。

四、さらに、第二十二條、第二十三條、第二十四條、第二十五條、第二十六條、第二十七條、第二十八條、第二十九條における、同盟構成共和國を地方および洲に分ける行政・地域的區分の詳細な列擧を削除せよという提案がある。私はこの提案も採用できないものであると考える。ソ同盟には、非常に熱心に、また倦むことなく、地方や州の區分けがえをしようと待ちかまえている連中がおり、これがために仕事における混亂と、確信をもてない状態とをもち込んでゐる。憲法草案は、これらの連中にくつわをはめるものである。そしてこのことは非常にいいことだ。というのは、わが國には、他の多くの方面でもそうだが、この點でも確信をもつという雰圍氣が要求されており、安定と明朝さが要求されているからである。

五、第五の修正は、第三十三條に關するものである。修正の提案者は、二つの議院を設置することは合目的でないと考えて、民族ソヴェトをなくしてしまふことを提案してゐる。私はこの修正案もやはり正しくないと思う。一院制は、もしソ同盟が一民族國家であつたならば、二院制よりもいいだろう。だが、ソ同盟は一民族國家ではない。ソ同盟は、周知の通り、多くの民族からなる國家である。わが國は、民族の如何とは關係なしに、ソ同盟のすべての勤勞者の共通の利益が代表される最高機關をもつてゐる。これは、同盟ソヴェトである。だが、ソ同盟の民族は、共通の利益の外に、なお彼等の民族的特殊性と關連してゐる各自の特殊な、特有的な利益がある。これらの特有的な

利益を閑却してもよいだろうか？いや、できない。この特有的な利益をこそ反映するような、特別の最高機關が必要であるだろうか？もちろん必要である。こういう機關なしには、ソ同盟のような多民族からなる國家を統治する事が不可能であることは、疑う餘地のないことである。こういう機關たるべきものが、第二の議院、即ちソ同盟民族ソヴェトである。

人々はヨーロッパやアメリカの諸國家における議會制度の歴史を引合に出し、これらの國における二院制は、缺陷のみを示したし、第二の議院は、通常、反動の中心に、また前進運動を妨げるブレーキになりかわつていゝことを引證する。これはみな正しい。だが、これは、これらの國においては、兩院の間に平等がないということから起るのである。周知の通り第二院には、しばしば第一院よりもつと大きな權利が與えられており、そうして常則として、第二院は非民主主義的な方法で、またしばしば、その代議員を上から任命するという方法で組織される。もし兩院を平等にし、かつ第二院を第一院と同様に民主主義的に組織するならば、これらの否定的な結果が生じないであろうといふことは疑いがない。

六、さらに、憲法草案に對して、兩院の議員數を同數にすることを要求する追加案が提案されている。この提案は採用していいだろう、と私は考える。この追加案は、兩院の平等といふことを強調しているから、明白な政治的な好結果をもたらさず、と私は思う。

七、さらに、同盟ソヴェトと同様に、民族ソヴェトにも直接選舉によつて議員を選舉することを提案しているところの、憲法草案への追加案がある。この追加案もまた採用していいだろう、と私は考える。尤も、これは選舉の際に多少の技術上の不便が生じるかも知れない。だが、その代りに、大き

な政治的利益を興えるであらう。なせならば、それは、必ずや民族ソヴェトの權威を高めるに相違ないからである。

八、さらに、第四十條に對する追加案がある。この案は、最高ソヴェト常任委員會に臨時法令を發布する權利を賦與することを提案するのである。私は、この追加案は正しくなく、大會はこれを採用してはならないと考える。いずれか一つの機關ではなく、いくつかの機關が立法權をもっているという状態を、この際だん然やめなければならぬ。こういう状態は、法律の安定性という原則に反するものである。しかも法律の安定性は、現在、從來のいかなる時よりもずっと吾々に必要なのである。ソ同盟における立法權は、ただ一つの機關、即ちソ同盟最高ソヴェトによつてのみ、實現されなければならぬ。

九、さらに、憲法草案の第四十八條に對する追加案が提案されている。この案は、ソ同盟最高ソヴェトの常任委員會議長はソ同盟最高ソヴェトによつてではなく、國の全住民によつて選舉されることを要求する。この追加案は正しくないと私は考える。というのは、この案はわが憲法の精神に相應しないからである。わが憲法の體系によれば、ソ同盟には、最高ソヴェトと同じく、全住民によつて選舉され、かつ自己を最高ソヴェトに對置させ得る一個人としての大統領があつてはならないのである。ソ同盟における大統領は、合議制的なものである、即ちそれは、全住民によつて選舉されるのではなく、最高ソヴェトによつて選舉され、最高ソヴェトに從屬する、最高ソヴェト常任委員會議長をも含めた最高ソヴェト常任委員會である。歴史上の經驗は、最高機關のかような構造は最も民主的なものであり、望まじからぬ偶發事件から國を保障するものであることを示している。

十、さらに同じ第四十八條に對する修正案がある。これはこうである——各同盟構成共和國が一人

の副議長をもち得るようになるために、ソ同盟最高ソヴェト常任委員會の副議長の數を十一人まで増加すること、この修正案は採用していい、と私は考える。というのは、それは、一つの改善であり、ソ同盟最高ソヴェト常任委員會の權威をたかめるだけだからである。

十一、さらに、第七十七條に對する修正案がある。これは、新しい、全同盟的人民委員部、即ち國防工業人民委員部の組織を要求している。この修正案も同じく採用すべきだ、と私は考える（拍手）、というのは、わが國防工業を分離し、これに、適當な人民委員部としての組織形態を與えるべき時期が熟しているからである。これは、わが國の國防事業を専ら改善し得るのみであらう、と私は思われる。

十二、さらに、宗教的儀式の舉行を禁ずるといふ方針で、憲法草案第二百二十四條の變更を要求する修正案がある。この修正案は、わが憲法の精神に相應しないものとして、拒否すべきだ、と私は考える。

十三、最後に、多かれ少なかれ實質的な性質をもつ、もう一つの修正案がある。私は、憲法草案第三百三十五條に對する修正についていつていたのである。この修正案は、祭司、僧侶、かつての白系分子、從來の搾取階級及びその手先であつたもの、社會のために有益な労働に従事していない連中に選舉權を與えないか、もしくはは少くとも、この部類の人々の選舉權を制限して、ただ選舉する權利のみは與えるが被選舉權を與えないようにすることを、提案している。私は、この修正案も同じく拒否されるべきだと考える。ソヴェト權力は、勤勞者でない搾取者の分子から、永久にではなく、一時的に、一定の時期まで、選舉權を奪いとつたのである。これらの分子が人民に反對して公然たる戰爭を行い、ソヴェトの法律に反對抗争していた時代があつた。彼等から選舉權を奪うというソヴェトの

法律は、この反対抗争に對するソヴェト權力の返答であつた。その時以來、少なからぬ時が過ぎた。この期間に、吾々は、擄取階級を絶滅してしまふことができた、一方、ソヴェト權力は、打負かじ得ない力に轉化した。この法律を再検討する時が來たのではないだろうか？ 私は、その時が來たと考へる。だがそれは、國の最高機關へ、ソヴェト權力に敵對心を抱いている分子、かつて白系分子、クラーク、僧侶などであつた何人かかもぐりこむことがあり得るから危険だ、と人々はいつてゐる。だが一體、その點で何が恐ろしいのであるか？ 狼を恐れていては、森の中には行かれまい（會堂に愉快なざわめき起る。暴風のような拍手）。第一に、以前のクラークや白系分子、僧侶がみな、ソヴェト權力に敵對的であるわけではない。第二に、もし國民がどこかで敵對的な人間を選擧するようなことでもあるとすれば、それは吾々の煽動活動が全く拙劣に行われたからであつて、吾々は全くそういう恥辱をうけるに値するということになるし、もし吾々の煽動活動がポルシエヴィキ的に行われるであろうならば、國民は敵對的な人々を自分の最高機關に入れるようなことはしないであろう。つまり、活動すべきであつて、めめめと泣言をいうべきではないのだ（暴風のような拍手）、活動すべきであつて、萬事が行政上の處置によつて、すつかり出來上つた形で、自分の前に提供されるのを待つていてはならないのだ。レーニンは、すでに一九一九年、ソヴェト權力が何等の制限もない普通選舉權を實施することを有益であるとみなす時も遠くはないと語つた。何等の制限もないという點に注意を拂われない。レーニンがこう語つたのは恰も外國の軍事干涉がまだ根絶されておらず、しかもわが國の工業と農業とが慘憺たる状態にあつた時であつた。その時から、すでに十七年が経過した。同志諸君、今やレーニンの指示を遂行すべき時ではないだろうか？ 私は、その時だと考へる。

一九一九年、レーニンはその著「ロシア共産黨（ボルシエヴィキ）綱領草案」の中で、こう述べた。讀み上げること許して頂きたい——

「ロシア共産黨は、過渡的な歴史的必要を不正に一般化することをさけるために、市民の一部から選舉權を奪うことは、ソヴェト共和國においては、ブルジョア民主主義的共和國の大多數においてそうであつたように、一生涯權利をもたない者と宣言された市民の一定部類にあてはまるものでは決してなく、ただ擯取者に、ただ社會主義ソヴェト共和國の基本法律に反抗して、頑強に自己の擯取者としての地位を固守し、資本主義的諸關係を保持しようとする人間のみにあてはめられるものであるということを、勤勞大衆に説明してやらなければならぬ。したがつて、ソヴェト共和國においては、一方では、日に日に、社會主義が鞏固となり、擯取者としてとどまり、もしくは資本主義的諸關係を保持する可能性を客觀的にもつている人間の數が減するに従つて、選舉權を奪われている人々の百分率も自ら減するのである。恐らく、現在ロシアでは、この百分率は二——三パーセントを越えまい。他方では、極めて近い將來において外敵の侵入がなくなることに、收奪者の收奪が完成することによつて、一定の條件の下で、プロレタリア國家權力が、擯取者の抵抗を彈壓する他の方法をえらび、何等の制限もない、*普通選舉を實施する情勢をつくり出し得るのである」。——（レーニン全集、第二四卷、九四頁）

これは明瞭なことだろうと思う。

ソ同盟憲法草案に對する修正案並に追加案については以上の通りである。

* 傍點は私による。——イ・スタヴリン

六、ソ同盟新憲法の意義

殆ど五カ月にわたった全人民による討議の結果によつて判断すれば、憲法草案は本大會によつて確認されるものと、豫想できる。(暴風のような拍手、拍手は歡呼となる。議場の全員起立す)

數日後には、ソヴェト同盟は、完全に發展した社會主義的民主主義の原則に基いて創り上げられた、新しい社會主義的憲法をもつことになるであろう。

それは、簡潔に、殆ど議事録に近い文體で、ソ同盟において社會主義が勝利した事實を、ソ同盟の勤勞者が資本主義の奴隸制度から解放された事實を、完全に發展した、あくまで徹底的な民主主義制度がソ同盟において勝利した事實を、述べている歴史的意義をもつ文書となるであろう。

それは、資本主義諸國の幾百萬の誠實な人々がかつて夢想し、また現在も夢想しつつやっていることがすでにソ同盟において實現された、ということを立てている文書となるであろう。(暴風のような拍手)

それは、ソ同盟で實現されたものは他の國々においても完全に實現できるものである、ということを立てている文書となるであろう。(暴風のような拍手)

しかし、このことから、ソ同盟新憲法の國際的意義は、いかにこれを高く評價するも評價しすぎるといふことはあり得ないであろう、ということになる。

今やファシズムの濁流が勞働者階級の社會主義運動を汚辱し、文明世界の最も優秀な人々の民主主義的志望を泥まみれにしている時に當つて、ソ同盟の新憲法は、社會主義と民主主義制度とが打ち破り得ないものであることを物語るところの、ファシズムに對する公訴狀となるであろう(拍

手)。ソ同盟の新憲法は、現在ファシズムの野蠻性に反對して鬪争しているすべての人にとつて、精神的な援助となり、實際的な支持となるであらう。(暴風のような拍手)

ソ同盟新憲法は、ソ同盟の諸民族にとつては、さらにもつと大きな意義をもつている。資本主義諸國の國民にとつて、ソ同盟憲法が行動の綱領として意義をもつていとすれば、ソ同盟の諸民族にとつては、それは人類解放の戦線における彼等の鬪争の總決算、彼等の勝利の總決算たる意義をもつている。鬪争と艱難の道を踏み越えて來た結果、吾々の勝利の成果を語つている自己の憲法をもつということは、愉快なことであるし、喜ばしいことである。吾々の仲間が何のために鬪つてきたか、いかに彼等が全世界的・歴史的意義をもつ勝利を獲得したかを知ることが、愉快なことであるし、喜ばしいことだ。われわれの仲間が夥しく流した血汐が無駄でなかつたこと、それがその結果をもたらしたことを知ることは、愉快なことであるし、喜ばしいことである(永く、續く拍手)。それは、わが労働者階級、わが農民、わが勤勞インテリゲンチヤを精神的に武裝するものである。それは、正當な誇の感情を前進させ高めるのである。それは自分の力に對する確信を鞏固にし、共產主義の新しい勝利を戦いとるための新しい鬪争に動員するのである。(歡呼の嵐、全堂總立となる。萬雷のような「ウラー」の叫び。四方八方から「同志スターリン萬歲!」の絶叫、大會の全員は起つて、「インターナショナル」を歌う。「インターナショナル」の合唱が終つてからまた歡呼。「ウラー!」の叫び「吾々の領袖、同志スターリン萬歲!」の叫び)

辯證法的及び史的唯物論について

(一九三八年九月)

辯證法的唯物論は、マルクス主義的・レーニン主義的黨の世界觀である。それが辯證法的唯物論と稱される理由は、この世界觀の、自然現象に對する態度、自然現象の研究方法、これらの現象の認識方法が辯證法的であつて、自然現象のその解釋、自然現象のその理解、その理論が唯物論的だからである。

史的唯物論は、辯證法的唯物論の原理を社會生活の研究へ擴張適用させたものであり、辯證法的唯物論の原理を、社會生活の現象へ、社會の研究へ、社會歴史の研究へ適用させたものである。

マルクスとエンゲルスが、彼等の辯證法的方法について述べる場合、辯證法の主要特徴を定義づけた哲學者としてのヘーゲルに言及するのが常である。しかしながら、このことは、マルクスとエンゲルスの辯證法がヘーゲルの辯證法と同一であるということを意味してはいない。事實において、マルクスとエンゲルスは、辯證法に現代的科學的形態を與えるために、ヘーゲルの辯證法からその「理性的核心」のみをとり、ヘーゲルの觀念論的外殻をとり去り、かつ辯證法を一層發展させたのであつた。

マルクスは、次のようにいつている——

「自分の辯證法的方法は、その基礎において、ヘーゲルの方法と異なるだけでなく、まさにその正反對である。ヘーゲルにとつては、彼が理念と名ずけて、獨立の主體にさえしている思惟過程は、ただ理念の外面的現象であるに過ぎないと、現實的なもののデミウルグ（造物主）である。これに反して自分にとつては、理念的なものは、人間の頭腦に移植され、そこで變形された、物質的なものにはかならぬ」。〔カール・マルクス、「資本論」第一卷、ドイツ語第二版跋文〕

マルクスとエンゲルスが、彼等の唯物論の特徴を説く場合、唯物論の權威を回復した哲學者としてのフオイエルバッツハに言及するのが常であつた。しかしながら、このことは、マルクスとエンゲルスの唯物論がフオイエルバッツハの唯物論と同一であるということの意味してはいない。事實において、マルクスとエンゲルスは、フオイエルバッツハの唯物論からその「基本的な核心」をとり、それを唯物論の科學的・哲學的理論に一層發展させ、その觀念論的、宗教的・倫理的雜物を除き去つたのであつた。フオイエルバッツハは、本來唯物論者ではあつたが、唯物論という名稱に反對したのだ、ということには周知のことである。エンゲルスは一再ならず言明した、フオイエルバッツハは「彼の唯物論的根據にもかかわらず、古い觀念論的桎梏から未だ抜け出しきつていなかつた」とし、また「フオイエルバッツハの實在的觀念論は、吾々が彼の倫理學と宗教哲學に觸れるとき直に明瞭になつてくる」と。〔カール・マルクス——エフ・エンゲルス、全集、第一四卷、六五二——六五四頁〕

辯證法（デアアレクチック）は、ギリシヤ語の「デアレゴ」に由來しており、對話し、討論するということ意味である。古代にあつては、辯證法とは、論敵の論旨の矛盾を暴露し、これらの矛盾を克服

することによつて、眞理に到達するための技巧である、と考えられた。古代の或る哲學者達は、思惟上の矛盾を暴露し、反對論を對立させることが、眞理を發見するための最善の方法であると考へていた。その後、自然現象に對しても擴張適用されたこの思惟の辯證法的方法是、自然認識の辯證法的方法となつた。この辯證法的方法是、自然現象を、不斷に運動し、不斷に變化しているものとして觀察し、また自然の發展を自然における矛盾の發展の結果として、自然における對立する勢力の相互作用の結果として觀察した。

辯證法はその根本において、形而上學とは正反對のものである。

(一) マルクス主義的辯證法的方法の主要特徴は次の諸點にある。即ち、

(イ) 形而上學とは反對に、辯證法は、自然を相互關連なく、互に孤立し、互に獨立した事物、現象の偶然的な集積とはみないで、事物、現象が互に有機的に關連し、互に限定し合い、互に制約し合うところの相關的な全一體とみる。

ゆえに、辯證法的方法是次のように主張する。即ち、いかなる自然現象も、それが四圍の現象と關連せず、孤立した形で取上げられるならば、理解し得ないであろう。なせならば、自然のいかなる領域におけるいかなる現象も、それが四圍の諸條件との關連なしに、これらと切り離されて觀察されるならば、無意味なものとなつてしまふだろうからであり、また逆に、いかなる現象も、それが四圍の現象とその不可分的關連において、それを圍繞する現象によつて制約されたものとして、觀察されるならば、理解し、論證することができらうからである。

(ロ) 形而上學とは反對に、辯證法は、自然なるものを、靜止と不動、停滯と不變の状態として

ではなく、不斷の運動と變化、不斷の更新と發展の状態として、そこでは常に何物かが發生し發展しており、常に何物かが崩壊し衰亡しつつあるものとしてみる。

ゆえに辯證法的方法は、現象がその相互的關連や相互的制約の見地からだけでなく、その運動、その變化、その發展の見地から、その發生、その死滅という點からも觀察されることを要求する。

辯證法的方法によつて何よりも重要なものは、一定の瞬間において、一見堅牢に見えても、すでに滅亡し始めているようなものではなくて、一定の瞬間において、一見堅牢に見えなくとも、發生し、發展しつつあるようなものである。けだし、辯證法的方法によつては、發生し發展するもののみが、征服したいものであると考えられるからである。

エンゲルスは、次のようにいつている——

「全自然は、最小のものから最大のものにいたるまで、砂粒から太陽にいたるまで、原生生物（原生細胞——イ・スタールン）から人間にいたるまで、恒常的な發生と消滅、不斷の流動、倦むことなき運動と變化の状態にあるのである」。（前掲書、四八四頁）

また、エンゲルスはいつている。それゆえに、辯證法は「事物とその概念的な諸映像を、主としてそれらの相互關連において、それらの連鎖において、それらの運動において、それらの發生と消滅とにおいて把握する、」と。（カール・マルクス——エフ・エンゲルス全集、第一四卷、二二三頁）

（ハ）形而上學とは反對に、辯證法は發展過程を、量的變化が質的變化をもたらしなないところの、單純な成長過程とはみないで、些細な目にもつかぬ量的變化から、明白な變化に、根本的な變化に、質的變化に轉移するような發展、即ち、質的變化が漸進的に起らずに、急速に、突然に、一つの狀態から他の狀態への飛躍的轉移の形をとつて起るような發展、質的變化が偶發的ではなくて、規則正し

く起るような發展、氣すかれない程の、漸進的な量的變化の集積の結果として起るような發展としてみる。

ゆえに、辯證法的方法是、次のように主張する。發展の過程は、循環運動としてではなく、また、過ぎ去つたことの單純な繰返しとしてではなくて、前進的な運動として、上向運動として、古い質的狀態から新しい質的狀態への轉移として、單純なものから複雑なものへ、下級なものから上級なものへの發展として、解釋さるべきである、と。

エンゲルスは、次のようにいつている——

「自然は辯證法の試金石である。そして、この試験のために極めて豊富な、日々に増大されてゆく材料を提供しているところの現代的自然科学は、それによつて、自然にあつては結局すべてが辯證法的に行われるのであつて、形而上學的に行われるのではないこと、また自然は永久に一様で絶えず反復される迴轉輪のように動くのではなくて、現實の歴史を體驗するものであることを實證した。この點については、誰よりもまず、ダーヴィンの名をあげなければならぬ。彼は、現代の全有機界、即ち、動植物、したがつて人間もまた、幾百萬年の星霜を経た發展過程の一產物であるということを実證し、これによつて自然に對する形而上學的の見解に最も激烈な打撃を與えたのである」。〔前掲書、二三頁〕

量的變化から質的變化への轉移として辯證法的發展を特徴つけて、エンゲルスは、次のようにいつている——

「物理学においては、……各々の變化は、量から質への轉移、即ち、物體に内在するところの、或は物體に傳達されたところの、或る形態の運動量の量的變化の歸結である。例えば、水の

温度は最初の間、水の液體狀態に對しては何等の意義をもつていない。だが、やがて液體の水の温度が上昇または下降するうちに、一定點に達する。そのときには、水の凝集狀態は變化し、そして水は、一つの場合には水蒸氣に轉化し、他の場合には冰に轉化する。……また、電燈のプラチナ線を發光させるには、一定の最小限量の電流を必要とするし、それぞれの金屬は各自の鎔解熱度をもつてゐるし、それぞれの液體もまた、吾々が吾々の用いうる裝置で所要の温度を得ることができるかぎりにおいて、一定の壓力の下における冰點と沸騰點とをもつてゐるし、最後に、それぞれの氣體も、適度の壓搾と冷却とによつて、それを液體狀態に轉化させうるところの、臨界點をもつものである。……物理學のいわゆる常數（一つの狀態から他の狀態に轉移する點——*イン・スターション*）というものは、大部分運動の量的（變化）増加または減少が、當該物體の狀態のうち質的變化をひきおこすところの、したがつて、量が質に轉移するところの結節點を表現してゐるに他ならないのである」。（前掲書、五二七——五二八頁）

「化學を、量的構成の變化の影響によつて生ずる物體の質的變化に關する科學なりということが出来る。このことはすでにヘーゲル自身が識つていた。……酸素を例に取ろう。酸素の分子は普通二個の原子を含むのであるが、もしも三個の原子を含む時には、吾々はオゾンを得る。即ち、そのニオイと機能との點で普通の酸素とは決定的に異なる一物體を得るのである。そして、酸素が窒素または硫黄と化合する場合の色々な比率、その比率の差異によつて、それぞれ爾餘の一切のもの質的に異なる物體が生ずるところの、色々異なる比率については、いまさらいうまでもないことである！」（前掲書、五二八頁）

さて、最後に、全力をあげてヘーゲルを嘲罵しながら、無感覺界から感覺界へ、無機界から有機界への轉移は、新しい状態への飛躍であるという有名な命題を、ヘーゲルからひそかに剽窃しているデューリングを批判して、エンゲルスは、次のようにいつている——

「これは正しくヘーゲルの質量關係の結節線である。ここでは、純粹に量的な増大或は減少が、特定の結節點において質的飛躍をよび起すのである。例えば、水が熱せられ、もしくは冷却される場合には、沸騰點並に氷結點がこの結節點であつて、ここでは、新しい凝集状態への飛躍が——通常の壓力の下では——行われ、そこではしたがつて、量は質に轉移するのである」。

(前掲書、四五——四六頁)

(ニ)形而上學とは反對に、辯證法は、内在的矛盾というものは自然の事物と現象とに必ず内在するものであることを出發點としてゐる。なせならば、それらのすべては、その否定的面と肯定的面とをもち、その過去と將來とをもち、その衰亡しつつあるものと發展しつつあるものをもつてゐるからであり、それらの對立物間の鬭争、古いものと新しいものとの間の鬭争、死滅しゆくものと生れ出するものとの間の鬭争、衰亡してゆくものと發展してゆくものとの間の鬭争が、發展過程の内的内容を、量的變化の、質的變化への轉化の内的内容を構成してゐるといふことを出發點としてゐる。

ゆえに、辯證法的方法は、下級なものから上級なものへの發展過程は、現象の調和した展開としてではなく、事物に、現象に内在するところの矛盾の發現として、これらの矛盾に基いて作用する對立諸傾向の「鬭争」の形で行われる、と主張する。

レーニンはいつている——

「辯證法とは、本來の意味では、事物の本體そのものにある矛盾の研究ということである」。

(ヘーゲル、「哲學ノート」、二六三頁)

そしてさらにいつている――

「發展は反對物間の「闘争」である、」と。(ヘーゲル、全集、ロシア語版、第一三卷、三〇一頁)

このようなのが、簡略に述べたマルクス主義的辯證法的方法の主要な諸特徴である。

それで、辯證法的方法の原理を、社會生活の研究や社會史の研究にまで擴張することが、いかに絶大な意義をもっているか、またこれらの原理を社會史に對し、プロレタリアート黨の實際活動の上に適用することが、いかに絶大な意義をもっているか、ということは、容易に理解しようところである。

もじも世界に孤立した現象がなく、一切の現象が互に關連し、互に制約し合つてゐるならば、史上にある各々の社會制度や各々の社會運動は、しばしば史家によつてなされるごとく、「永遠の正義」とか、その他何らかの先入觀念をもつて評價されるべきではなくて、この制度や、この社會運動を生み出した諸條件や、それらが關連してゐる諸條件の見地から評價されなければならないのである。

奴隸制度は、現代の諸條件の下においては、無意味なものであり、不自然な馬鹿げたものである。しかし、解體しゆく原始共同體制の諸條件下における奴隸制度は、全く當然な、合法的な現象である。なせならば、それは原始共同體制にくらべて一步前進を意味してゐるからである。

例えていえば、一九〇五年のロシアにおけるように、ツァー制とブルジョア社會の存在した條件

下において、ブルジョア・民主主義的共和國制を要求することは、全く當然な、正しい、革命的な要求であつた。なせならば、ブルジョア共和國制は、その當時においては一步前進を意味したからである。ところで、ソ同盟の現在の条件下において、ブルジョア・民主主義的共和國制を要求することは、無意味な、反革命的な要求である。なせならば、ブルジョア共和國制は、ソヴェト共和國制にくらべて一步後退だからである。

すべてのことは、その條件、その場所、その時に依存しているのである。

社會現象に對して、かかる歴史的な扱い方をせずには、歴史についての科學の存在と發展があり得ないということはわかりきつたことである。なせならば、かかる扱い方のみが、史學が事變の渾沌たる寄せ集めに轉化し、甚だ馬鹿げた間違ひの堆積に轉化することから、この科學を救い出すことができるからである。

さらに、もし世界が不斷の運動と發展の状態にあり、またもし古いものが死滅して新しいものが成長増進することが發展の法則であるならば、「不變な」社會制度、私有財産や搾取についての「不滅の原則」、農民の地主への隸屬や、労働者の資本家への隸屬についての「不滅の思想」というものが、もはやありえないということは明かなことである。

即ち、資本主義制度がかつて封建制度に取り代つたように、資本主義制度もまた、社會主義制度によつて取り代えられることができるのである。

即ち、現在においては支配的勢力をなしてはいるが、これ以上發展しないところの社會層に立脚するのではなくて、現在においては支配的勢力をなしてはいないが、しかし發展をつずけており、かつ將來をもつているところの社會層に立脚しなければならぬのである。

前世紀の八十年代、マルクス主義者とナロードニキとの闘争時代において、プロレタリアートは、ロシアでは人口の大多数を占めていた個人農民にくらべて、極く少数を占めるに過ぎなかつた。しかしながら、プロレタリアートは階級として發展してはいたが、農民は階級としてはじだいに崩壊してはいた。しかし、プロレタリアートが階級として發展してはいたからこそ、マルクス主義者達は、プロレタリアートに立脚したのであつた。はたして、彼等は誤らなかつたのだ。なせならば周知のごとく、プロレタリアートは、その後些々たる勢力から最高級の歴史的、政治的勢力に成長したのであつた。

即ち、政策上においてあやまきをおかさぬためには、後方を見るのではなく、前方を見ることが必要なのである。

さらに、緩慢な量的變化が急激にして突然な質的變化に轉移することが發展の法則であるならば、被壓迫階級によつて決行される革命的諸變革は、全く當然にして必然的な現象であることは明らかである。

即ち、資本主義から社會主義への轉移や資本主義の壓迫からの労働者階級の解放は、緩慢な變化によつてではなく、改良手段によつてではなくて、資本主義制度の質的變化によつて、即ち革命によつてのみ實現されるのである。

即ち、政策上においてあやまきをおかさぬためには、改良主義者ではなく、革命家でなければならぬのである。

さらに、發展が内的矛盾の發現によつて、また、これらの矛盾を克服するという條件で、これらの矛盾を基礎とする對立諸勢力間の衝突によつて行われるものであるならば、プロレタリアートの階級闘争が全く當然にして、必然的な現象たることは明かである。

即ち、資本主義制度の矛盾を隠蔽するのではなく、それを發き、解きほどかなければならぬ、階級闘争を鎮めるのではなく、それをとことんまで導いてゆかなければならぬのである。

即ち、政策上においてあやまをおかさぬためには、非妥協的な、階級的、プロレタリア的政策を遂行すべきであつて、プロレタリアートの利益とブルジョアジーの利益とを協調させようとする改良主義政策をとつてはならない、資本主義の社會主義への「成長伸入」というような妥協政策をとつてはならないのである。

マルクス主義の辯證法的方法を、社會生活に適用し、社會史に適用するならば、以上の如くになつていたのである。

さて、マルクス主義の哲學的唯物論についていえば、その本質上、それは哲學的觀念論の正反對である。

(二) マルクス主義的哲學的唯物論の主要特徴は次の諸點である——

(イ) 世界が「絶対理念」、「宇宙の精神」、「意識」を體現するものと見なしている觀念論とは反對に、マルクスの哲學的唯物論は、次のことを出發點とする。即ち、世界はその本性において物質的であり、世界における多種多様の現象は、運動する物質の種々様な形態であり、辯證法的方法によつて制定されうる現象の相互關連と相互制約とは、運動する物質的發展法則であり、世界は物質の運動法則に従つて發展し、「宇宙の精神」などを少しも必要としないということを出發點とする。

エンゲルスはいつている——

「唯物論的世界觀とは、何ら外からの附加なしに自然をありのままにみた、單なる自然概念に外ならない」。(カール・マルクス——エフ・エンゲルス全集、第一四卷、六五一頁)

「全體の統一されたものであるところの世界は、いかなる神によつても、またいかなる人間によつても創造されたものではない。それは、合法的に燃え上り、かつ合法的に消えてゆくところの、永久的生命の火であつたし、現在もそうであり、將來もそうであるだろう」と説いた古代の哲學者ヘラクリトスの唯物論的觀點に言及して、レーニンは「辯證法的唯物論の原理の、非常にすぐれた叙述」であると述べた。(レーニン、「哲學ノート」、三一八頁)

(ロ) 吾々の意識のみが現實に存在し、物質世界、存在、自然は、吾々の意識のうちのみ、吾々の感覺、觀念、理解のうちのみ存在すると斷定する觀念論とは反對に、マルクス主義の哲學的唯物論は、物質、自然、存在は、吾々の意識の外に、意識から獨立して存在するところの客觀的現實であり、物質は感覺、觀念、意識の源泉であるから、物質こそが第一次的のものであり、意識は物質の反映であり、存在の反映であるから、それは次生的なものであり、派生的であり、思惟はその發展において高度の完成の域に達した物質の產物、即ち頭腦の產物であり、その頭腦は、思惟の器官であること、ゆえに、重大な誤謬におちいることをのぞまないならば、思惟を物質から分離してはならないということを出發點とするのである。

エンゲルスはいつてゐる——

「存在に對する思惟の關係、自然に對する精神の關係に關する問題は、全哲學上の最高問題である。……哲學者達は、彼等がこの問題に與えた回答の如何によつて、二大陣營に分裂した。

精神が自然よりも前に存在したと主張した人々は、……觀念論の陣營を形成した。これに對し自

然を本源的なものとみなした人々は、唯物論の種々様々な學派に所屬した」。〔カ・マルクス選集、第一卷、三二九頁〕

そしてさらに、

「吾々自身が屬している物質的な、感性的に知覺しうる世界が、唯一の眞實な世界である。

吾々の意識と思维とは、それがいかに超感性的に見えようと、一個の物質的な、肉體上の器官、即ち頭腦の所産である。物質が精神の所産ではなくて、精神自體が物質の最高所産たるにすぎないのである」。〔前掲書、三三二頁〕

物質と思维との問題に關してマルクスは、次のようにいつている——

「思维するところの物質から、思维を分離することはできない。物質はすべての變化の主體たるものである」。〔前掲書、三〇二頁〕

マルクス主義の哲學的唯物論を性格ずけて、レーニンは次のようにいつている——

「唯物論は一般に、意識、感覺、經驗とは全く關係のない客觀的に實在する存在（物質）を認める……。意識は……存在の反映にすぎないものであり、最善の場合でも、眞實に近い（妥當な、理想的で、正確な）存在の反映である」。〔レーニン全集、第一三卷、二六六——二六七頁〕そしてさらに、

——「物質とは、吾々の感覺器官に作用して、感覺をおこさせるものである。物質は感覺において吾々にあたえられた客觀的現實である……。物質、自然、存在、物理的なものが、第一次的のものであつて、精神、意識、感覺、心理的なものは次生的なものである」。〔前掲書、一一九——

——「世界の畫像は、いかに物質が運動し、いかに「物質は思惟する」かを描きだした畫像である」。(前掲書、二八八頁)

——「頭腦は思想の器官である」。(前掲書、一二五頁)

(ハ)世界とその合法性を識る可能性を論駁し、吾々の知識の確實性を信せず、客觀的眞理を認めず、そうして世界は、科學によつて決して識りえないところの「物自體」によつて充滿していると主張するところの觀念論とは反對に、マルクス主義の哲學的唯物論は、次のことを出發點とする。即ち、世界とその合法性とは、完全に識ることのできるものであり、經驗と實踐とによつて審査された自然の合法性に對する吾々の知識は、客觀的眞理の意義をもつ確實な知識であり、世界には識ることのできないものはなく、やがて科學と實踐との力によつて明かにされ、識られるであろうところの、未だ識られていないものがあるだけであるということを出發點とする。

世界は不可知なものであり、不可知な「物自體」があるという、カントその他の觀念論者の命題を批判し、吾々の知識が確實なものであるということについての、周知の唯物論的命題を擁護して、エンゲルスは次のように書いてゐる——

「他の一切の哲學的狂想に對すると同様に、これらに對する最も決定的な反證は、實踐、即ち、實驗と産業である。吾々自身が自然現象を作り、これをその諸條件から引き出し、その上、それを吾々の目的に役立つようにさせ、かくして吾々が當該自然現象に對する吾々の理解の正しさを證明することができるならば、その時こそ、カント流のつかみどころのない「物自體」等というものは終末をつげるであらう。動植物の體内で作り出された化學的物質は、有機化學がそれらを次々に生産し始めるまでは、かかる「物自體」としてとどまつたが、それが生産されるよう

になつてから、「物自體」は、吾々のための物となつたのである。たとえば、茜の色素であるアリザリンなどがそれである。現在吾々は、これを野原に生長する茜の根から得るのではなくて、はるかに廉價で、もつと簡單に、コルタールから製造しているのである。コペルニクの太陽體系は、三百年の久しきにわたつて、最も眞實性の多い假説とされてきたが、それにしても、假説にはちがひなかつた。しかるに、レヴェルリエーが、この體系によつて與えられた原則に基き、一つの未知の惑星が存在すべきであることを證明したのみならず、この惑星の天空における位置をも算定した時に、そして次いで、ガッレルがこの惑星を實際に發見した時に、コペルニクの體系は立證されたのであつた」。(カト・マルクス選集、第一卷、三三〇頁)

レーニン、ボグダノフ、バザロフ、ユシユケヴィチ、その他マツハの追従者を、信仰哲學(科學よりも信仰を重んずる反動的理論)を奉ずるものとして難詰し、自然の合法性に對する吾々の科學的知識こそが、確實な知識であり、科學上の諸法則こそが客觀的眞理を代表するものであるという唯物論の周知の命題を固守して、次のように述べている――

「現代信仰哲學は、少しも科學を排斥しないのである。科學の「法外な自惚」、即ち、客觀的眞理に對する科學の自惚をのみ排斥するのである。もし客觀的眞理が存在するならば(唯物論者が考へるように)、そして自然科學のみが、外的世界を人間の「經驗」中に反映して、客觀的眞理を吾々に與へることができるとするものであるならば、あらゆる信仰哲學は絶對的に排斥されるものである」。(レーニン全集、第一三卷、一〇二頁)

このやうなものが、簡略にいつた、マルクス主義の哲學的唯物論の諸特徴點である。それ故、哲學的唯物論の原理を社會生活の研究や社會史の研究に擴張適用することが、いかに巨

大な意義をもっているか、またこれらの原理を社會史やプロレタリアート黨の實踐活動の上に適用することか、如何に巨大な意義をもっているかということ、容易に理解し得ることである。

もし自然現象間の關連と、それらの相互制約とが、自然發展の合法性であるならば、このことから社會生活諸現象の關連と相互制約もまた、偶發的なものではなく、社會發展の合法性であるということになるのである。

即ち、社會生活、社會史は、「偶然事」の集積ではなくなる。なせならば、社會史は、法則に從う社會の發展となり、社會史の研究は科學となるからである。

即ち、プロレタリアート黨の實踐活動は、「傑出した個人」の善意の願望、「理性」、「一般的道德」等の要求ではなく、社會發展の諸法則とこれらの法則の研究とに立脚すべきである。

さらに、もし世界が、知覺し得られるものであり、かつ自然の發展法則についての吾々の知識が、客觀的眞理の意義をもっている確實な知識であるならば、このことから社會生活、社會の發展もまた、知覺し得られるものであり、社會の發展法則に關する科學の資料もまた、客觀的眞理の意義をもっている確實な資料である、ということになる。

即ち、社會生活現象のあらゆる複雑性にもかかわらず、社會史の科學は、例えば、生物學のような正確な科學となれるのであり、社會發展の法則を實際的適用のために利用することのできる科學となれるのである。

即ち、プロレタリアート黨は、その實際活動をゆきあたりばつたりにはなくて、社會發展の法則にしたがつて、これらの法則からの實際的演繹にしたがつて行うべきである。

即ち、社會主義は、人類のためのよりよき未來についての夢想から、一個の科學に轉化するのである。

即ち、科學と實踐活動との結びつき、理論と實踐との結びつき、これらの統一は、プロレタリアート黨を導く明星とならなければならない。

さらに、もし自然、存在、物質世界が第一次的なものであつて、意識、思惟は次生的なものであり、派生的なものであるならば、もし物質世界が人間の意識とは無關係に存在する客觀的現實であり、意識はこの客觀的現實の反映であるとするならば、このことから社會の物質生活、その存在もまた第一次的なものであつて、社會の精神生活は次生的なものであり、派生的なものであるということになり、かつまた、社會の物質生活は人間の意志とは關係なしに存在する客觀的現實であり、社會の精神生活は、この客觀的現實の反映であり、存在の反映であるということになるのである。

即ち、社會の精神生活を形成する本源、社會思想、社會理論、政治的見解、政治機關の本源は、思想、理論、見解、政治機關自體の中に求められるべきではなくて、社會の物質生活の諸條件の中に、社會的存在の中に求められるべきであつて、この社會的存在の反映こそがこれらの思想、理論、見解、その他なのである。

即ち、社會史上のそれぞれ異つた時期において、それぞれ異つた社會思想、理論、見解、政治機關が見られるならば、また、奴隸制度の下においては或る種の社會思想、理論、見解、政治機關に出あい、封建制度の下ではまた別のものに、資本主義制度の下ではさらに異つたものに出あうとするならば、このことは思想、理論、見解、政治機關そのものの「本性」ではなく、即ち「個性」によつて

ではなくて、社會の發展のそれぞれ異つた時期における社會の物質生活の、それぞれ異つた條件によつて説明されるのである。

社會の存在がいかなるものであるか、社會の物質生活の條件がいかなるものであるか、ということによつて、その社會の思想、理論、政治的見解、政治機關も決まるのである。

この點に關して、マルクスは次のように述べている——

「人間の意識が人間の存在を決定するのではなくて、逆に、人間の社會的存在が人間の意識を決定するのである」。(カト・マルクス選集、第一卷、二六九頁)

即ち、政策上においてあやまりをおかさぬためには、かつ下らない夢想家の立場に陥らぬためには、プロレタリアート黨は、自己の活動を抽象的な「人間理性の原則」などによらず、社會發展の決定的な力としての、社會の物質生活の具體的諸條件によつて律すべきであり、また「偉人」の善意な願望などによらず、社會の物質生活の發展上における現實の要求によつて律すべきなのである。

ナロードニキ、無政府主義者、エス・エルをも含む思想家共の没落は、何はさておき、次の事實によつて説明される。即ち、彼らは社會の物質生活の諸條件が社會發展において演ずる第一次的役割を認めず、かつ觀念論に陥つて、彼等の實際活動を、社會の物質生活の發展の要求を基礎とせず、これらの要求とは無關係に、かつこれらに反して、社會の現實生活から全く遊離した「理想的計畫」とか、「すべてを包含する諸設計」とかを基礎として立てたのである。

マルクス主義・レーニン主義の力強さと生活力は、それが、自己の實際活動において、社會の現實生活から斷じて引離されず、實に社會の物質生活の發展の諸要求にこそ立脚した、ということにあるのである。

しかしながら、マルクスの言葉からも、社會思想、理論、政治的見解、政治機關は、社會の生活上において意義をもつていないということにならないし、またそれらが社會的存在や社會生活の物質的條件の發展の上に、反作用を惹きおこさないということにはならない。吾々は、ここで、社會思想、理論、見解、政治機關の起原について、それらの發生の仕方について、社會の精神生活は、社會の物質生活の諸條件の反映であるという事實について、今までは語つたのであつた。社會思想、理論、見解、政治機關の意義に關し、史上におけるそれらの役割に關しては、史的唯物論はこれを否定しないばかりでなく、反對に、社會生活上における、社會史上におけるそれらの重大な役割と意義とを強調するのである。

種々様々の社會思想と理論とがある。時勢におくれ、かつ衰滅してゆく社會勢力の利益に奉仕している古い思想と理論とがある。これらの意義は、これらが社會の發展、社會の前進を妨げているということにある。ところがまた、社會の先進的諸勢力の利益に奉仕している新しい先進的な思想と理論ともあるのである。これらの意義は、これらが社會の發展、社會の前進を容易にしており、しかも、これらが社會の物質生活の發展の要求を正確に反映していればいるほど、大きな意義をこれらは獲得するにいたるといふことにあるのである。

新しい社會思想と理論とは、社會の物質生活の發展が社會の前に新しい任務を課した後に始めて生れるものである。だが、これらがひとたび發生した後には、これらは、社會の物質生活の發展によつて課せられた新しい任務の解決をたやすくし、社會の前進をたやすくする最も重大な力となるのである。この點にこそ、新思想、新理論、新政治的見解、新政治機關の偉大な、組織的、動員的、改革的意義が現われているのである。新しい社會思想と理論が生れるのは、正にそれらが社會に必要

であるからであり、また、その組織的、動員的、改革的活動なしには、社會の物質生活の發展の當面した任務を解決することは不可能だからである。社會の物質生活の發展によつて課せられた新しい任務に基いて生れてきた新しい社會思想と理論とは、自己の進路を切り開き、人民大衆の所有となり、衰滅してゆく社會勢力に對抗して彼等を動員し、彼等を組織し、かくして社會の物質生活の發展を妨げている衰滅してゆく社會勢力の倒壊を容易にするのである。

このようにして、社會思想、理論、政治機關は、社會の物質生活の發展、即ち社會的存在の發展という當面せる任務に基いて發生し、社會の物質生活の緊切な任務を、徹底的に遂行し、その生活一層の發展を可能にするために必要な諸條件を作り出しつつ、それ自身、社會的存在に、社會の物質生活に影響を與えている。

この點に關連して、マルクスは次のように述べている——

「理論は、大衆をつかむやいなや、一個の物質的力となる」。——（カト・マルクス——エフ・エングルス、全集、第一卷、四〇六頁）

即ち、社會の物質生活の諸條件に影響を與え、その諸條件の發展を促進し、その條件の改善を促進する可能性を持つためには、プロレタリアート黨は、社會の物質生活の發展の要求を正しく反映し、そうすることによつて廣汎な人民大衆を連動にひき入れることができ、大衆を動員し、かつ、これらの大衆をもつて、反動的勢力を粉碎し、社會の先進的な勢力に進路を打開する準備のできているプロレタリアート黨の偉大な軍隊を組織することのできるような、社會理論、社會思想に立脚しなければならぬのである。

「經濟主義者」やメンシェヴィキの没落は、何はさておき、彼等が先進的理論、先進的思想

の動員的、組織的、改革的役割を認めず、かつ俗悪な唯物論に陥つて、これらの役割を殆ど無にしてしまひ、したがつて、黨を不活潑なものとし、無氣力なものにしようとしたということによつて、説明されるのである。

マルクス主義・レーニン主義の力強さと活動力とは、それが社會の物質生活の發展の要求を正しく反映している先進的理論に立脚しており、理論をそれに相應した高さに引きあげており、この理論の動員的、組織的、改革的力をとことんまで利用することを自己の義務とみなしているということにあるのである。

このように史的唯物論は、社會的存在と社會的意識との關係、社會の物質生活の發展諸條件と社會の精神生活の發展との關係についての問題を解決しているのである。

(三) 史的唯物論。

そこで、次の問題を明かにするということが残つてゐる。即ち、社會の相貌、その思想、見解、政治機關等々を結局において決定するところの「社會の物質生活の諸條件」を、史的唯物論の見地から、何と理解すべきか？ である。

つまり、そのような「社會の物質生活の諸條件」とは何か？ その特徴點とはどんなものか？ ということである。

「社會の物質生活の諸條件」という概念の中には、先ず第一に、社會を取りまく自然、即ち、社會の物質生活における必要にして、かつ恆常的な諸條件の一つであつて、もちろん、社會の發展に影響を與えているところの地理的環境が含まれてゐるのは、疑いのないことである。では、社會の發展上においてはたす地理的環境の役割は、いかなるものであるか？ 地理的環境が社會の相貌、人間社會制

度の性格、一つの制度から他の制度への轉移、これらを決定するところの主要な力ではないであらうか？

史的唯物論は、この質問に對して否と答える。

無論地理的環境は、社會發展の恆常的で、必要な諸條件の一つであり、かつ、勿論それは社會發展に影響を與える。つまり社會的發展の進行をはやめたり、或はおそくさせたりするのである。しかし、地理的環境の影響は、決定的な影響ではない。というのは、社會の變化と發展は、地理的環境の變化と發展にくらべて、比較にならぬほど急速に進行するからである。三千年の間に、ヨーロッパでは原始共同體制、奴隸制度、封建制度という三種の社會制度が入れ代つたのであつたが、東ヨーロッパ、即ち、ソヴェト同盟では、四種の社會制度が取り代えられたのであつた。しかるに、この期間にヨーロッパにおける地理的諸條件は、全然變化しなかつたか、それとも地理學がそれに注意を與えることをさえしないほど些少な變化しかしなかつた。そして、このことは、甚だ當然のことである。地理的環境にいくらかでも重大な變化が起るためには、幾百萬年を必要とするのであるが、人々の社會制度にとつては、極めて重大な變化が起るためにさえ、數百年もしくは數千年もあれば、十分なのである。

このことから、地理的環境は社會發展の主要原因、決定的原因とはなれないということになるのである。なせならば、何萬年の間にも殆ど變化しないものが、數百年の間に根本的變化を遂げるものの發展の主要原因とはなれないからである。

さらに、「社會の物質生活の諸條件」という概念の中には、人口の増加、人口の疎密ということもまた含まれていることは勿論である。なせならば、人口は、社會の物質生活諸條件の缺くべからざ

る要素であり、一定最小限の人間の存在なしには、社會のいかなる物質生活もあり得ないからである。人口の増加は、人間社會制度の性格を決定する主要な力ではないであろうか？

史的唯物論は、この質問に對してもまた、否と答える。

もとより、人口の増加は、社會の發展に影響を及ぼし、社會の發展を容易にし、或はおくらせはするが、それは社會發展の主要な力とはなれないし、かつ社會發展に對するその影響も決定的な影響とはなれないのである。というのは、人口の増加それ自身は、なせ、甲の社會制度は、他の制度でなく、間違いなしに乙の新制度によつてこそ取り代えられるのであるか？ なせ、原始共同體制は奴隸制度によつて、奴隸制度は封建制度によつて、封建制度はブルジョア制度によつて間違いなしに取り代えられ、決して他の制度によつてはとり代えられないのであるか？ ということの説明する手引を與えないからである。

もし人口の増加が社會發展の決定的力であるとするならば、人口密度が高度であるときには、必ず社會制度もまた、それに相應して高度の型を生み出さなければならぬ筈であつた。ところが實際には、そのようにはなつていないのである。中國の人口密度は、アメリカ合衆國にくらべて四倍も高いのであるが、社會發展の程度という見地からいえば、アメリカ合衆國は中國よりも高い地位にある。なせならば、中國には、なお半封建制度が支配しているに反し、アメリカ合衆國はずつと以前に、すでに資本主義制度の最高の發展段階に達しているからである。ベルギーの人口密度は、アメリカ合衆國のそれよりも十九倍も高く、ソヴェト同盟のそれよりも二十六倍も高い。だがアメリカ合衆國は社會發展の程度という見地からいつてベルギーの上位にあり、また、ベルギーはソヴェト同盟より歴史上一

時代おくれている。なせなら、ベルギーでは、なお資本主義制度が支配しているに反し、ソヴェト同盟はすでに資本主義制度を一掃してしまひ、社會主義制度を自國に打ち建てたからである。

しかして、以上の事情により、人口増加は、社會發展の主要な力、社會制度の性格、社會の相貌を決定する力ではないし、またそうはなれないということになるのである。

(イ)では、社會の物質生活の諸條件の體系内にあつて、社會の相貌、社會制度の性格、一つの制度から他の制度への社會の發展を決定する主要な力は何であるか？

史的唯物論は、この力こそは、人類の生存に必要な生活資料を獲得する方法、すなわち、食物、衣類、履物、住居、燃料、生産用具、等のような、社會が生活し發展するために缺くべからざる物質的財貨の生産方法であるとみなしている。

生きるためには、人々は食物、衣類、履物、住居、燃料、等々をもたなければならぬ。これらの物質的財貨をもつためには、これらのものを生産しなければならぬ。これらを生産するためには、食物、衣類、履物、住居、燃料等を人々が生産するに必要な生産用具をもたなければならぬし、これらの用具を製造し、利用することができなければならぬ。

物質的財貨を生産するに必要な生産用具、一定の生産上の經驗や仕事に對する熟練をもつていることによつて、生産用具を使用し、物質的財貨の生産を行う人々……これらすべての要素が相寄つて社會の生産力を構成するのである。

しかしながら、生産力は、生産の僅な一面、物質的財貨の生産に利用しうる目的物及び自然力と人との關係を表現している生産方法の僅な一面にすぎない。生産の他の方面、生産方法の他の方面を

構成しているのは、生産過程における人と人との相互関係、即ち人々の生産関係である。人間は自然との闘争を遂行し、自然を物質的財貨の生産のために利用するが、その場合に、互に孤立したり、互にはなればなれになつた一人ぼつちの者としてそれを行うのではなくして、共同して、集團をなして、團體を作つて行うのである。ゆえに、生産というものは、いつでもまたいかなる條件の下においても、社会的生産なのである。物質的財貨生産を實現するにあつて、人間は、生産内で種々の相互関係に入り、種々の生産関係に入る。その関係は、搾取から解放されている人々の間の、協力と相互扶助の關係にもなり、または支配と隷屬の關係にもなり、最後にまた、それは生産關係の甲の形態から乙の形態への過渡的關係にもなる。しかしながら、生産關係が、いかなる性格をもつものであつても、それはいつでも、また、あらゆる制度の下において、社會の生産力のように、生産の必要な一要素をなしているのである。

マルクスは次のように述べている——

「生産において、人間は自然に對してのみ作用するのではなく、彼等相互の間でも作用し合うのである。人間は、共同で働き、かつその活動を相互に交換するために、一定の方法で團結せずには生産することはできない。生産するためには、人々は、相互の間に一定の連絡と關係とを持つようになり、そしてこれらの社會的連絡と關係とに依つてのみ、彼等の自然に對する關係が存在し、生産が行われるのである」。(カト・マルクス——エフ・エンゲルス全集、第五卷、四二九頁)

したがつて、生産、生産方法は、社會の生産力も人間の生産關係をも包含し、かくして物質的財貨の生産過程におけるこれら二つのものの統一を體現しているのである。

(ロ)生産の第一の特徴は、生産が長期にわたつては決して一カ所に停止せず、常に變化と發展の状態にあること、しかも生産方法の諸變化は、全社會制度、社會思想、政治的見解、政治機關の變化を必然的に誘發すること、すなわち、生産方法の變化は社會的、政治的形態全體の再編成を誘發するということである。それぞれ異なる發展段階において、人々はそれぞれ異なる生産方法を用いる。あるいは、より大まかにいえば、それぞれことなる生活様式をとる。原始共同體の下ではある生産方法があり、奴隸制度の下では他の生産方法があり、封建制度の下ではまた別の生産方法があり、またつぎには何々という具合である。そして、これらにしたがい、人間の社會制度、人間の精神生活、人間の見解、人間の政治機關もまたそれぞれことなつてくるのである。

社會の生産方法のいかんによつて、社會自體も大體においてそのようにちがつてくるし、社會の思想と理論、その政治的見解と政治機關も、そのようにちがつてくるのである。

或は、より大まかにいえば、人間の生活様式のいかんによつて、人間の考え方もそのようにちがつてくるのである。

このことは、社會發展の歴史とは、まず第一に生産發達の歴史であり、數世紀の間に次から次へと替る生産方法の歴史であり、生産力と人間の生産關係との發展の歴史であるということを意味する。

即ち、社會發展の歴史とは、同時に、物質的財貨の生産者それ自體の歴史であり、生産過程における主要勢力であり、かつ、社會の存在に必要な物質的財貨の生産を行っているところの勤勞大衆の歴史である。

もし歴史科學が眞實の科學たらんと欲するならば、歴史科學は、社會發展の歴史を、國王や司令官の行動、國家の「征服者」と「鎮壓者」の行動などに歸着させてしまうことは、もはやできないこ

とであり、しかして、何よりも先ず、物質的財貨生産者の歴史、勤勞大衆の歴史、人民の歴史に當てられるようにしなければならぬ。

即ち、社會の歴史法則研究のための鍵は、人間の頭腦の中に、社會の見解や思想の中に求められるのではなくて、當該歴史の各時期において、社會で實際に行われている生産方法の中に、即ち社會の經濟機構の中に求められることが必要なのである。

即ち、史學の第一に主要な任務は、生産の法則、生産力と生産關係との發展の法則、社會の經濟的發展の法則を研究し、明かにすることである。

即ち、もともとプロレタリアート黨が眞實の黨たらんと欲するならば、何よりもまず、プロレタリアート黨は、生産發展の法則に關する知識、社會の經濟的發展の法則に關する知識を習得しなければならぬ。

即ち、政策上においてあやまりをおかさぬためには、プロレタリアート黨は、その綱領作成にあつても、その實際行動の上においても、何よりもまず、生産發展の法則、社會の經濟的發展の法則を出發點としなければならぬのである。

(ハ) 生産の第二の特徴は、生産の變化と發展とが生産力の變化と發展とをもつて、何よりもまず、生産用具の變化と發展とをもつて常に始まるということである。したがつて、生産力は、生産の最も可動的で革命的な要素なのである。まず最初に、社會の生産力が變化し、發展する。それから、これらの變化に従ひ、これらの變化に適應して、人間の生産關係、人間の經濟的關係が變化する。しかしながら、このことは、生産關係が生産力の發展に影響を與えず、また生産力が生産關係に制約されないということを意味してはいない。生産力の發展に制約されて發展する生産關係が、こんど

は、生産力の發展を早め、あるいはおくらせて、生産力の發展の上に作用するのである。この際、次のことが注意されなければならない。即ち、生産關係は、餘り長い間、生産力の成長におくれ、これと矛盾する状態に止まることはできない。なせならば、生産力は、生産關係が生産力の性格、その状態に適應し、生産力を思うままに發展させるならば、その時にはじめて全速力で發展することができからである。故に、生産關係が生産力の發展にどんなにおくれていても、おそかれはやかれ、生産力發展の水準に、生産力の性格に適應して來なければならぬし、また、實際に適應してくるのである。ところで、これと反對の場合には、生産の體系内における生産力と生産關係との統一は根底から破られ、生産全體の破裂、生産の危機、生産力の破壊が起るのである。

生産關係が生産力の性格に適應しない例、兩者が衝突した例は、資本主義諸國における經濟恐慌であつて、そこでは生産手段の資本主義的私有制は、生産過程の社會的性格、即ち生産力の性格と、甚だしい不適應に陥るのである。この不適應の結果として、生産力の破壊に導く經濟恐慌が起るのである。しかして、この不適應そのものが社會革命の經濟的基礎をなしており、その革命の使命は、現存している生産關係を破壊し、生産力の性格に適應した新しい生産關係を創り出すことである。

しかしてこれと反對に、生産關係が生産力の性格と完全に適應した場合の例は、ソヴェト同盟における社會主義的國民經濟であつて、そこでは生産手段の社會的所有制が生産過程の社會的性格と完全に適應し、かつそこでは、それがために、經濟恐慌もなく、生産力の破壊もないのである。

したがつて、生産力は、生産の最も可動的で革命的な要素であるのみではない。生産力は、それと同時に生産發展上における決定的な要素なのである。

生産力の如何によつて、生産關係もまたそのようにちがわなければならないのである。

いかなる生産用具をもって人間は自分に必要な物質的財貨を造るか？ という問題に對して、生産力の状態が回答を與えるとすれば、生産關係の状態は、他の問題、即ち、誰が生産手段（土地、森林、水利、地下埋藏物、原料、生産用具、生産用建物、交通通信機關等々）を所有し、誰が生産手段を支配しているか、社會全體であるか、それとも他の個人、他の集團、他の階級を擯取するためそれを利用するところの個人、集團、階級であるか？ という問題に對して回答を與えるのである。

このようなのが、古代から現代にいたるまでの生産力の發展を示す概観である。粗雑な石器から弓矢への移行と、これに關連して、狩獵生活様式から動物の飼養と原始的な牧畜への移行。石器から金屬製器具（鐵製の斧、鐵の及先をくつつけたスキ等）への移行と、これに適應して、植物の耕作と農業への移行。材料加工のための金屬製器具の一層の改良、鍛冶用ファイゴへの移行、陶器生産への移行、しかしてこれに適應しての、手工業の發達、手工業の農業からの分離、獨立した手工業の發達と、それに次ぐマヌファクチュア（工場制手工業）生産の發達。手工業生産用具から機械への移行と、手工業・工場制手工業生産から機械による工業への移行。機械制度への移行と現代的大規模機械化工業の出現。このようなことが、人類史を通じての社會の生産力發達の、甚だ不完全ではあるが、一般的な相貌である。この際、生産用具の發達と改良は、生産に關與している人々によつて實現されたものであつて、人々に無關係に行われるものではないということ、したがつて、生産用具の變化と發達とにつれて、生産力の最も重要な要素としての人間も變化し發展し、彼等の生産上の經驗、その勞働の熟練、その生産用具操縦の技能も變化し、發展したということは、わかりきつたことである。

歴史上における社會の生産力の變化と發展とに適應して、人間の生産關係、人間の經濟關係も變化し、發展した。

生産關係に五種の基本的型のあることが史上に知られている。即ち、原始共同體型、奴隸制型、封建制型、資本主義型、社會主義型、これである。

原始共同體の下における生産關係の基礎は、生産手段に對する公共的所有制ということである。このことは、この時期の生産力の性格に、大體において適應している。石器、またその後に出現した弓矢をもつてしては、人間はひとりひとりの力で自然力や猛獸と闘うことは全く不可能であつた。もともと人間が、飢死したり、猛獸や近隣の部落の犠牲となることを欲しないならば、森林で果實を採集し、水中の魚を捕獲し、或る種の棲家をつくるために、人間はどうしても共同して働かねばならなかつた。共同労働は、生産手段の共有制、同様に生産物の共有制をもたらし、猛獸に對する防護手段にも併用されるような、或る種の生産用具の個人的所有ということを考慮しないならば、ここでは、まだ生産手段の私有という觀念は存在しなかつた。ここでは、搾取ということはなく、階級もなかつたのだ。

奴隸制度の下における生産關係の基礎は、奴隸所有者が生産手段と生産に従事する働き人、即ち奴隸とを所有するということにある。奴隸所有者はこの奴隸を家畜に對する様に、賣買し、或は殺すこともできるのである。かような生産關係は、大體において、この時期の生産力の状態に適應するものである。今や人間は石器の代りに、金屬製器具を自由に使用する。牧畜も農業も知らなかつたみすばらしい原始的な獵師の經濟の代りに、牧畜、農業、手工業、これらの生産部門間の分業等が出現し、そして、個人の間におけるまた團體の間における生産物交換の可能、少數の人達の手中への富の集積の可能、少數者の手中への生産手段の實際的な集積、少數者に對する多數者の從屬と多數者の奴隸への轉化の可能が出現した。ここでは、生産過程における社會の全成員の間の、共同的にして自由な労働というものは、すでにないのである。即ちここでは、勤勞しない奴隸所有者によつて搾取されている奴隸の

強制労働が専ら行われているのである。ゆえに、ここでは生産手段の共有もなければ、また同様に生産物の共有もないのである。共有は私有によつて代えられる。ここでは、奴隷所有者は、第一位の主要な完全な財産所有者なのである。

富んだ者と貧乏な者、搾取者と被搾取者、完全な権利をもつ者と権利を持たない者、これらの二者の間における激烈な階級闘争、このようなのが奴隷制度の相貌なのである。

封建制度の下における生産関係の基礎は、生産手段に對する封建領主の所有制と、生産に従事する働き人、即ち農奴に對する封建領主の不完全な所有制ということにある。そして封建領主は、この農奴を殺すことはもはやできないが、賣買することはできるのである。封建的所有と並んで、生産用具と私的經營とに對する農民及び手工業者の個人的所有、即ち本人の労働に基礎をおいた個人的所有が存在する。かかる生産関係は、大體において、この時期における生産力の状態に適應するものである。鐵の鎔解や加工の—そう改良、鐵製鋤や織機の普及、農業、野菜栽培、葡萄酒釀造、製油の——の發達、手工業、職場と並んで工場制手工業企業の出現、——このようなのが、生産力状態の特徴點である。

新しい生産力は、働き人が生産上において何らかの創意性、労働意欲、労働に對する利害關係をもつことを要求する。ゆえに、封建領主は、労働に利益關係をもたず創意を全く缺く働き人としての奴隷をしりぞけて、自分の經營と自分の生産用具とをもち、かつ、土地を耕作し、自己の收穫物から現物で封建領主に支拂うために缺くべからざるものであるところの、労働に對するある程度の利害關係をもっている農奴を相手とすることをえらぶのである。

ここでは、私有財産制はさらに一段と發展する。そして搾取は、奴隷制度の場合と殆ど變らずひ

といものであり、ただ、ほんのわずか緩和されたに過ぎない。搾取者と被搾取者との間の階級闘争は、封建制度の基本的な特徴である。

さて、資本主義制度の下における生産關係の基礎は、資本家が生産手段を所有するが、生産に従事する働き人、即ち賃銀労働者を所有しないということにある。資本家はこれらの賃銀労働者を殺したり、賣つたりすることはできない。なせならば、賃銀労働者は個人的な隷屬關係を全くもっていないからである。しかし、彼等は生産手段を奪われているので、飢死しないためには、自己の労働力を資本家に賣ること、搾取の桎梏を背負うことを餘儀なくされているのである。生産手段に對する資本主義的所有と並んで、農奴的隷屬から解放された農民と手工業者の生産手段に對する個人的所有、即ち、本人の労働に基礎をおいた個人的所有が存在し、かつ初期には廣く普及していたのである。手工業職場や工場制手工業企業の代りに、機械を据えつけた巨大な工場が出現した。原始的な生産農具で耕作した貴族の領地の代りに、農業技術に基いて經營され、農業機械を供給されている大規模の資本主義的農場が出現した。

新しい生産力は、生産に従事する働き人が虐げられた蒙昧無智な農奴よりも文化的で、理解力の高いことを要求し、彼等が機械をよく理解し、機械を正しく取扱う技能をもつことを要求するのである。ゆえに、資本家は農奴制の羈絆から解放され、かつ機械を正しく取扱得るだけの十分教養のある賃銀労働者を相手とすることをえらぶのである。

しかしながら、生産力を龐大な規模に發展させた資本主義は、それにとつては解決のできない矛盾にひつかかつてしまった。資本主義は益々多量の商品を生産し、その値段を下げて競争を激化し、中小の私有財産所有者の大衆を零落させ、彼等をプロレタリアにし、彼等の購買力を減退させるに

いたり、その結果、生産された商品の賣行は不可能になつてくるのである。資本主義は、また生産を擴大し、大工場に幾百萬の労働者を集中して、生産過程に社會的性格を與え、これによつてそれ自身の土台を掘り崩すのである。なせならば、生産過程の社會的性格は、生産手段の社會的所有を要求するにもかかわらず、生産手段は依然として、生産過程の社會的性格と兩立しない資本主義的私有的として残つてゐるからである。

生産力の性格と生産關係との間のかかる相容れない矛盾は、生産過剰による週期的恐慌として現われる。そのとき、資本家は、自ら作り出した住民大衆の零落のために、自己の商品に對して支拂能力のある需要を見出すことができず、その結果、生産物を焼き、製品を破毀し、生産を停止し、生産力を破壊することを餘儀なくされているのに、その時、幾百萬の住民は商品の不足からではなく、商品の過剰生産のために、失業と饑餓に苦しまなければならぬのである。

このことは、資本主義的生產關係が社會の生産力の状態に適應しなくなり、かつそれと到底相容れない矛盾におちいつたということを意味する。

このことは、資本主義が現在の、生産手段に對する資本主義的所有制を、社會主義的所有制によつて取りかえることを使命とする革命を胚胎することを意味する。

このことは、搾取者と被搾取者間の最も尖锐な階級闘争が資本主義制度の主要特徴であることを意味する。

社會主義制度は、現在のところ、ソヴェト同盟においてのみ實現されているのであるが、その制度の下における生産關係の基礎は、生産手段に對する社會的所有制ということである。ここでは、もはや、搾取者もないし被搾取者もない。生産物は、「働かざる者は食うべからず」という原則に

従つて、遂行された労働に應じて分配される。生産過程における人々の相互關係は、ここでは、搾取から解放された働き人の同志的協力と社會主義的相互扶助とを特徴とする。ここでは生産關係は生産力の状態に完全に適應している。なせならば、生産過程の社會的性格が、生産手段に對する社會的所
有制によつて、補強されているからである。

それゆえに、ソヴェト同盟における社會主義的生産は、過剰生産による週期的恐慌も、それと關連して起る不合理も知らないのである。

それゆえに、ここでは生産力は急速度で發展している。なせならば、生産力に適應する生産關係が、生産力にかかる發展を思う存分にできるようにさせているからである。

このようなのが、人類史上における、人間の生産關係の發展概況である。

このようなのが、生産關係の發展が、社會の生産力の發展、何よりもまず生産用具の發展に依存することを示すものであつて、その依存性のために、生産力の變化と發展は、生産關係のしかるべき變化と發展を、おそかれ早かれもたらすのである。

マルクスは、次のようにいつている——

「労働用具*の使用と製作とは、或種の動物も萌芽の形で有するものであるとはいへ、それは人類の労働過程に特有な性格となつているのである。そこで、フランクリンは人間を、道具を造る動物である、と定義したのであつた。絶滅した動物種屬の身體組織を研究するために、

* マルクスは「労働用具」を主として生産用具の意味に解釋しているのである。——

いゝ、ス、ター、リン、

その遺骨の構造が重要であると同様に、労働用具の遺物は、すでに廢絶した社會・經濟形態を研究する上に重要な手懸りとなるのである。經濟上の各時代を區別するものは、何が造られるかということではなく、いかにして造られるかということである……。労働用具は、單に人類の労働力の發達尺度であるばかりでなく、またその労働が遂行される社會的關係の指標でもあるのである」。(カト・マルクス、「資本論」、第一卷、一二一頁、一九三五年版)

さらに次のようにいつている——

——「社會關係は、生産力と密接にむすびついている。新しい生産力の獲得と同時に、人間は生産方法を變更し、しかして、生産方法の變更、自己の生活保障方法の變更と共に、彼等はその社會關係すべてを變更する。手挽臼はシューゼレン(封建領主——イ・スターリン)の支配する社會を君達に與え、蒸氣臼は産業資本家のいる社會を與える」。(カト・マルクス——エフ・エ、ンゲルス全集、第五卷、三六四頁)

——「生産力の成長の動き、社會關係の破壊、觀念の形成が間斷なく行われている。恆久不變なもの、動きの抽象觀念、これあるのみである」。(前掲書、三六四頁)

エンゲルスは、「共産黨宣言」の中で定義づけられている史的唯物論を性格つけて、次のように述べている——

「あらゆる歴史的時代の經濟的生產並びにこれから必然的に生れ出る社會の構成は、それらの時代の政治的並びに智的歴史の基礎を形成する……。従つて、原始的共同體的土地の所有が壊滅して以來、一切の歴史は、階級闘争、即ち社會發展の種々なる段階における被搾取者と搾取者との闘争、被支配階級と支配階級との闘争の歴史であつた……。しかし、今やこの闘争は、搾取さ

れ抑壓されている階級（プロレタリアート）は、同時に、全社會を、搾取、抑壓、階級闘争から永遠に解放することなしには、もはやプロレタリアートを搾取し、抑壓する階級（ブルジョアジー）から、解放されることはできないという一つの段階にまで達したのであつた……」。

（『共産黨宣言』、ドイツ版へのエンゲルスの序文）

（ニ）生産の第三の特徴は、新しい生産力と、これに適應した生産關係の發生が舊制度と無關係ではなく、舊制度の消滅の後にはなくて、舊制度の内部で起るといふこと、また、人間の豫め熟慮された活動、意識的活動の結果としてでなく、自然發生的に、無意識的に、人間の意志とは全く無關係に起るといふことである。それが自然發生的に、人間の意志とは全く無關係に起るについては、二つの理由があるのである。

第一に、人間は、生産方法をあれこれと選ぶ自由をもつていないからである。なせならば、各々新しい世代が生活を始める時には、過去の世代の活動の結果としてすでにでき上つている生産力と生産關係に出あい、そのために、新しい世代は、先ず初期に、生産の領域においてでき上つた形態で出あうものすべてを採用し、かつ物質的財貨を生産し得るためには、それに順應しなければならぬからである。

第二に、人間は、それぞれの生産用具、生産力のそれぞれの要素を改良する時には、その改良がいかなる社會的結果に導くかといふことを、悟りもせず、理解もせず、よく考えてもみず、しかしてただ自己の日々の利害關係や、自己の勞働を輕減し、自己にとつて、何らかの直接、有形の便益を獲得しようとすることだけを考へるからである。

原始共同體社會の或る成員達が徐々に、そして暗中摸索的に、石器の使用から鐵製器具の使用に

移行した時に、勿論彼等は、この革新がいかなる社會的結果に導くかということを知らなかつたし、よく考えてもみなかつた。また彼等は金屬製器具への移行が生産上の大變革を意味することや、それが結局奴隸制度に導くということを、理解しなかつたし、悟りもしなかつた。彼等は、自分達の勞働を輕減し、當面の、有形の便益を獲得しようということばかり欲したのである。そして、彼等の意識的活動は、右のごとき日常の私的な便益という狭い範圍内に限られていた。

封建制時代においては、ヨーロッパの新興ブルジョアジーは、小規模の職人組合の職場とならんで、大規模な工場制手工業企業を建設するにいたり、こうして社會の生産力を前進させたが、その時にも、勿論、彼等はこの革新がどんな社會的結末に導くかということを知らなかつたし、よく考えてもみなかつた。また、この「ちつぽけな」革新が、帝王——彼等は帝王の恩寵に隨喜の涙を流していたのだ——の權力に反對し、また貴族——彼等の一流の代表者達はしばしば貴族の列に加えられることを夢想したのであつた——に反對する革命に終らなければならないような、社會的諸勢力の再編成に導くということを、彼等は悟りも、理解もしなかつた。彼等はただ、商品の生産費をもつと安くし、アジア並に最近發見されたばかりのアメリカの諸市場に、多量の商品を送りこみ、できるだけ多くの利潤を得るということをのぞんだだけであつた。即ち彼等の意識的活動は、右のような日常の實際的活動の狭い範圍内に限られていたのであつた。

ロシアの資本家たちがツァー制には一指も觸れず、また農民を地主の餌食にさせておきながら、外國資本家と協力して、ロシア内に現代的な大規模の機械化された工業を全力をあげて創設したときにも、彼等は、勿論、生産力のかかる重大な成長がいかなる社會的結末に導くかということを知らなかつたし、よく考えてもみなかつた。また、彼等は社會的生産力の領域におけるこの大飛躍がプロレタリ

アートの、農民と連合し、必勝的社會主義革命を執行する可能性を與えるような、社會的諸勢力の再編成に導くということ、悟りもせず、理解もしなかつた。即ち、彼等はただ、工業生産を極點まで擴大し、龐大な國內市場を領有し、獨占者となり、國民經濟からできるだけ多くの利潤を搾り取ることをのぞんだだけであつた。即ち、彼等の意識的活動は、彼等の日常の、頗る實際的な利害關係より一步も外に出なかつたのである。

このことに對してマルクスは、次のようにいつている——

「人間は、その生活の社會的生產において、（即ち、人間生活に必要な物質的財貨の生産において——*ハ・スタールン*）一定の、必要缺くべからざる、彼等の意志とは無關係な、*諸關係*、即ち、彼等の物質的生產力の一定の發展段階に適應するところの、生産關係に入りこむ」。

（*カール・マルクス選集*、第一卷、二六九頁）

しかしながら、このことは、生産關係の變化や舊い生産關係から新しい生産關係への移行が衝突なしに、震動なしに、圓滑にはこぼれるということを意味しない。反對に、このような移行は、舊い生産關係の革命的顛覆と新しい生産關係の確立という方法で行われるのが普通である。一定の時期までは、生産力の發展と生産關係の領域における變化は、人間の意志とは無關係に、自然發生的に進行する。だが、それはただ一定の時機までのことであり、發生し、發展しつつある生産力が適宜の成熟状態にとどくまでのことである。新しい生産力が成熟してしまつた後には、現存生産關係とその保持者たち、即ち支配諸階級は、「克服しがたい」障害となる。この障害は、新興の諸階級の意識的活動に

* 傍點は私による。——*ハ・スタールン*、

よつてのみ、これらの階級の強力行動によつてのみ、革命によつてのみ、はじめて途上から除去できるものである。この點において、舊い生産関係を強力によつて撤廢することを使命とする新しい社會思想、新しい政治機關、新しい政治權力の巨大な役割が特にはつきりと現われているのである。新生産力と舊生産關係との衝突から、また社會の新しい經濟的要求の基礎の上に、新しい社會思想が發生し、新しい思想は大衆を組織し、動員し、大衆は新しい政治的軍隊に結合され、新しい革命的權力を樹立し、かつ、生産關係の領域における舊い制度を強力によつて撤廢し、新制度を確立するために、この權力を利用する。自然發生的發展過程は、人間の意識的活動に地位をゆすり、平和な發展は暴力的大變革に地位をゆすり、進化は革命に地位をゆすりるのである。

マルクスは、次のようにいつている——

「プロレタリアートは、ブルジョアジーとの鬭争において、必然的に、階級として自らを結成し……、それは革命によつて、自己を支配する階級となし、かつ支配する階級として舊生産關係を力をもつて撤廢する」。〔「共產黨宣言」、一九三八年版、五二頁〕

さらに次のようにいつている——

——「プロレタリアートは、一步一步、ブルジョアジーから全資本を奪い取り、すべての生産用具を國家の手中に、即ち、支配する階級として組織されたプロレタリアートの手中に集中し、しかして生産力の總量をできるだけ急速に増大するために、その政治的支配を利用するであろう」。

（前掲書、五〇頁）

——「暴力とは、新たなるものを孕んでいるあらゆる舊い社會のための助産婦である」。〔マルクス、「資本論」、第一卷、六〇三頁、一九三五年版〕

次に示すものこそ、一八五九年に、マルクスが、彼の名著「經濟學批判」の歴史的意義ある「序文」において與えた、史的唯物論の精髓の卓絶した定義すけなのである——

「人間は、その生活の社會的生産において一定の、必要缺くべからざる、彼等の意志とは無關係な諸關係、即ち、彼等の物質的生産力の一定の發展段階に適應するところの生産關係に入りこむ。これらの生産關係の總體は、社會の經濟的構造、即ち現實的土台を構成し、その上に法律的及び政治的上部構造が聳え立ち、そしてその土台に社會的意識の一定の諸形態が適應するのである。物質的生活の生産方法は、社會的、政治的、精神的生活過程一般を制約する。人間の意識が彼等の存在を決定するのではなくて、反對に、彼等の社會的存在が彼等の意識を決定する。社會的物質的生産力は、その發展のある段階にとどくと、現存生産關係との矛盾におちいる——またはこれを單に法律的に表現すれば、——所有關係の内部で今まで發展してきたところの社會的物質的生産力は、この所有關係との矛盾におちいる。これらの關係は、生産力の發展形態であることから、その桎梏に轉化する。その時に社會革命の時代が始まるのである。經濟的基礎の變化と共に、巨大な上部構造全體において、多かれ少なかれ急激に大變革が生ずる。かかる大變革を考察するにあつては、物質的な、自然科学的な精確さを確認できる生産の經濟的諸條件の下における變革と、法律的、政治的、宗教的、藝術的、哲學的、約言すれば、人間がその衝突を意識し、それと闘争するところの觀念上の諸形態とは、常に區別することが必要である。個々の人間について、その人自身が自分について考えているところに基づいて判断してはならないのと丁度同様に、かかる變革の時代を、その時代の意識に基づいて判断する事はできないのである。反對に、この意識を物質的生活の諸矛盾ということによつて、社會的生産力と生産關係との現存する

衝突ということによつて説明しなければならぬのである。どのような社會形態であつても、それによつて、發展する自由を十分に與えられて一切の生産力が發展し終るよりも前には、決して破滅するものではない。また、新しいヨリ高度の生産諸關係は、その生存の物質的諸條件が舊い社會そのものの胎内で成熟し終るよりも前には、決して出現するものではないのである。されば、人類は、自ら解決できるような任務のみを常に自己の任務となすのである。なせならば、ヨリ嚴密に考察するときには、任務そのものはこの任務の解決に必要な物質的諸條件がすでに存在するか、或は少くともその生成の過程にある時にのみ、發生するのが常だからである。』

（カト・マルクス選集、第一卷、二六九——二七〇頁）

マルクス主義的唯物論を社會生活に適用し、社會史に適用するならば、それは以上のようになつているのである。

このようなのが、辯證法のおよび史的唯物論の主要な諸特徴である。

ソ同盟共産黨（ボルシェヴィキ）中央委員會の活動に關する第十八回黨大會における報告演説

——一九三九年三月十日——

一、ソヴェト同盟の國際的地位

同志諸君！ 第十七回黨大會以來五カ年を經過した。見られるように、短い期間ではない。この間に、世界はかなり著しい變化を體驗した。諸國家と諸邦、それらの相互關係は、多くの點で全く面目を一新するにいたつた。

では、この期間に、國際情勢上において、いったいどんな變化があつたか？ わが國の對外的ならびに國內的狀態において、いったい何が變化したか？

資本主義諸國にとつて、この時期は、經濟的領域においても、また政治的領域においても、最も深刻な震動をうけた時期であつた。經濟的領域においては、これらの年は不景氣の年であり、こかにて、その後には、一九三七年の後半期からはじまつた新しい經濟恐慌の年々であり、アメリカ合衆國、

イギリス、フランスにおける、新たな産業低下の年々であり、従つて新たな経済的紛糾の年々であつた。政治的領域においては、これらの年は、深刻な政治的紛議と震動の年々であつた。上海からジブラルタルに至る龐大な地域で行われ、五億以上の人口を捲き込んだ新帝國主義戦争は、もはや二年目である。ヨーロッパ、アフリカ、アジアの地圖は、強制的に塗り替えられている。いわゆる平和體制と呼ばれている戦後の一切の制度は、根底から震撼されてしまつた。

ソヴェト同盟にとつては、反對に、これらの年は、その成長と繁榮の年々であり、その一そのの経済的並に文化的向上の年々であり、その政治的軍事的威力の一そのの成長の年々であり、全世界における平和保全のための、ソ同盟の奮闘の年々であつた。

このようなことが全般的情景である。

では、國際情勢上における諸變化についての、具體的事實を検討してみよう。

一、資本主義諸國における新經濟恐慌、販賣市場、原料資源、世界新再 分割をめざす鬭争の尖鋭化

一九二九年後半期に、資本主義諸國ではしまつた經濟恐慌は、一九三三年末まで繼續した。その後、恐慌は不景氣に移り、しかる後に、産業のある程度の活潑化と、そのある程度の高揚とがはまつた。だが、この産業の活潑化は、活潑化の時期に通常起るように、繁榮へは移行しなかつた。反對に、一九三七年の後半期から、先ずアメリカ合衆國を、ついでイギリス、フランス、その他幾多の諸國を襲うにいたつた新しい經濟恐慌が始まつた。

かくして、資本主義諸國は、最近の經濟恐慌の打撃から、まだ恢復しきらないうちに、また新しい經濟恐慌に直面したのであつた。

この事態は、當然、失業の激増に導いた。資本主義諸國における失業者数は、一九三三年の三千万人から、一九三七年には一千四百萬人に減少したのであつたが、今や再び、新恐慌の結果として、一千八百萬人に増加した。

新恐慌の特徴は、それが前の恐慌とは多くの點で相違しており、しかも、その相違がよい方ではなく、悪い方に向けられていくということである。

第一に、新恐慌は、一九二九年におけるように、産業の繁榮の後に始まらずに、不景氣とある程度の活潑化——だが、繁榮へは移行しなかつたところの——の後に始まつた。このことは、現在の恐慌が前の恐慌にくらべて、より激烈であり、克服がより困難であるだろうということを意味している。

さらに、現在の恐慌は、平和の時期にはなく、すでに、第二次帝國主義戰爭が始まつている時期、即ち、もはや中國との交戦二年目になる日本が、廣大無邊な中國の市場を攪亂し、この市場を諸外國の商品が殆ど入りがたいものにしていく時、イタリアとドイツが、その國民經濟をすでに戦時經濟の軌道におき換え、そのために、その原料と正貨の豫備を濫費している時、その他の大資本主義列強のすべてが、戰爭基調に建て直しはじめたその時に、勃發したのである。このことは、資本主義は現在の恐慌から正常にぬけたすための財源を、前の恐慌期よりも遙に少なくもつだろう、ということを意味する。

最後に、前の恐慌とはちがつて、現恐慌は、一般的ではなく、今のところでは、經濟的に強力な、戦時經濟の軌道にまだ移行していない諸國を主として襲つていく。日本、ドイツ、イタリアのよいうな、すでに各自の經濟を戰爭基調に建て直した侵略諸國についていえば、これらの國は、その軍需産

業を猛烈に發展させ、恐慌に近ずきつつあるとはいいながら、生産過剰による恐慌の状態をまだ體驗してはいない。このことは、經濟的に強力な、非侵略諸國が恐慌の圏内から脱け出しはじめらるるときには、侵略諸國は、戰爭熱にかられて、各自の金貨と原料との豫備を蕩盡して、最も激烈な恐慌の圏内に踏み込まざるを得ないであろうということの意味している。

このことは、資本主義諸國における、公稱金準備額に關する次の資料によつて、明かに説明されている。

資本主義諸國における公稱金準備額（單位舊貨 * 百萬金ドル）

	一九三六年末	一九三八年九月
總額	一二、九八〇	一四、三〇一
アメリカ合衆國	六、六四九	八、一二六
イギリス	二、〇二九	二、三九六
フランス	一、七六九	一、四三五
オランダ	二八九	五九五
ベルギー	三七三	三一八
スペイン	三八七	四〇七
ドイツ	一六	一七
イタリア	一二三	一二四
日本	二七三	九七

* 純金一オンス（約七匁半餘）は、舊貨では二十ドル六十七セント、新貨では三十
五ドル——譯者

この表によれば、ドイツ、イタリヤ、日本の金準備額は、全部をいつしよにひつくるめても、ただスイス一カ國の金準備額よりも少額であることがみられる。

次に、最近五カ年間の資本主義諸國における産業の恐慌状態と、ソ同盟における産業高揚の動きとをありありと描き出している若干の統計資料がある。

一九二九年に比較した工業生産高（一九二九年を一〇〇として）

	一九三四年	一九三五年	一九三六年	一九三七年	一九三八年
アメリカ合衆國	六六・四	七五・六	八八・一	九二・二	七二・〇
イギリス	九八・八	一〇五・八	一一五・九	一二三・七	一一二・〇
フランス	七一・〇	六七・四	七九・三	八二・八	七〇・〇
イタリヤ	八〇・〇	九三・八	八七・五	九九・六	九六・〇
ドイツ	七九・八	九四・〇	一〇六・三	一一七・二	一二五・〇
日本	一二八・七	一四一・八	一五一・一	一七〇・八	一六五・〇
ソ同盟	二三八・三	二九三・四	三八二・三	四二四・〇	四七七・〇

この表によれば、ソヴェト同盟は、恐慌を知らず、かつその産業が恆常的に向上しているところの、世界で唯一の國であるということがみられる。

さらに、この表によつて、アメリカ合衆國、イギリス、フランスにおいては、深刻な經濟恐慌が、すでに始まつており、かつ發展しつつあるということが見られる。

さらに、この表によつて、ドイツよりも前に、その國民經濟を戰時經濟の軌道におきかえたイタリアと日本では、産業下向の時期が、すでに一九三八年にはじまつたということがみられる。

最後に、この表によつて、イタリアや日本よりおかれてその經濟を戰爭基調に建て直したドイツでは、今のところ、まだ産業は、ある程度の、もつとも、僅かな程度ではあるが、とにかく、日本やイタリアで、最近までそうであつたと丁度同じ様に、向上の状態を體驗していることがみられる。

何か豫見できないようなことが起らない限り、ドイツの産業も、日本やイタリアがたどつたとおなじ下向の道をたどらざるを得ないことは、疑うことができないところである。けれど、國の經濟を、戰時經濟の軌道におきかえるということは、何を意味するか？ このことは、産業に一方的、軍事的方向を與え、民衆の消費には關係のない、戰爭に必要な軍需品の生産をできるだけ擴張し、民衆の日常消費物品の生産を、特にその市場への供給をできるだけ縮少し、従つて民衆の消費を減らし、國を經濟恐慌に直面させることを意味する。

このようなことが、資本主義諸國における新經濟恐慌の、動向の具體的な情景である。

このような經濟事情の凶惡な轉換が列強間の關係を尖鋭化せざるを得なかつたのはわかりきつたことである。すでにこの前の恐慌によつて見込が外れ、販賣市場のための、原料資源のための鬭争が尖鋭化したのであつた。日本による滿洲および北部中國の占領、イタリアによるエチオピアの占領、これらはすべて、列強間の鬭争の尖鋭さを反映したものであつた。新經濟恐慌は帝國主義的鬭争の一層の尖鋭化に導かざるを得ないであらうし、また、眞實それに基づきつつあるのである。問題は、もはや市場

における競争でも、商業戦争でも、またダンピングでもない。これらの闘争手段は、すでに、ずつと前から不十分なことが認められている。今や問題は軍事行動による、世界、勢力範囲、植民地の新再分割ということである。

日本は、自己の侵略行動を、次の如き理窟で辯解はじめた。即ち、九カ國條約が締結されるに際して、日本は不當に少い分配しか受けず、かつ、イギリスとフランスが龐大な植民地を領有しているのに、日本には、中國を犠牲にして、自己の領土を擴張することを得させなかつたというのである。イタリアは第一次帝國主義戦争の戦利品の分配に際して、同國は不當に少い分配しか受けなかつたこと、しかして、イギリスとフランスの勢力範囲を犠牲にして同國は賠償されるべきである、ということを思い出した。ドイツは、第一次帝國主義戦争とヴェルサイユ媾和の結果として、ひどく苦まされており、日本及びイタリアと結託して、ヨーロッパにおける自己の領土の擴大と、第一次帝國主義戦争の戦勝國がドイツから奪い取つた植民地の返還とを要求した。

かくして、三侵略國家のブロックが構成されるにいたつた。
戦争手段による世界の新再分割の問題が、日程にのぼされるにいたつた。

二、國際政治情勢の尖鋭化、平和條約の戦後體制の崩壊、

新帝國主義戦争の開始

次に述べるのは、新帝國主義戦争が開始されることとなつた、報告期間内における最も重大な出来事を列挙したものである。一九三五年に、イタリアはエチオピアを襲撃し、それを占領した。一九

三六年の夏には、ドイツとイタリアは、スペインで軍事干渉をやりだし、しかして、ドイツは北部スペインとスペイン領モロッコに、そして、イタリアは、南部スペインとバレアル諸島に據點を得た。一九三七年、日本は、滿洲占領後、北部中國および中部中國を侵略し、北京、天津、上海を占領し、占領地域から、その競争相手の外國を追い出しはじめた。一九三八年の初めには、ドイツはオーストリアを、そして、一九三八年の秋には、チェッコスロヴァキアのズデーテン州を占領した。一九三八年末には、日本は、廣東を、そして、一九三九年の初めには、海南島を占領した。

かくして、戦争は、全く氣すかれないように諸民族に忍び寄り、天津、上海、廣東から、エチオピアを経て、ジブラルタルにいたる廣大な地域に、その行動範圍を擴大し、五億を超える人口をその軌道に引っぱりこんだ。

第一次帝國主義戦争の後、戦勝國家、主としてイギリス、フランス、アメリカ合衆國は、諸國間の關係に新體制、即ち戦後の平和體制を樹立した。この體制の主たる基礎は、極東においては九カ國條約であり、ヨーロッパにおいてはヴェルサイユ條約、その他、多くの條約であつた。國際連盟は、諸國家の統一戦線と國家の集團安全保障に基いて、この體制のわく内で諸國間の關係を調整することを使命としたのであつた。しかしながら、三侵略國家とこれらの國家によつてははじめられた新帝國主義戦争とは、戦後平和體制というこの制度をすっかり顛覆させてしまつた。日本は九カ國條約を、ドイツとイタリアはヴェルサイユ條約を破棄した。自由勝手に振舞うために、これらの三國家は全部、國際連盟を脱退した。

新帝國主義戦争は、事實となつた。

現時期においては、いろいろな性質の條約を考慮せず、また世論を考慮せずに、いきなり羈絆を

断ち切つて、戦争へ真直ぐに突入することは、そう容易なことではない。ブルジョア政治家共には、このことが十分よくわかつているのだ。このことはまた、ファシスト親分共にもわかつているのだ。ゆえに、ファシスト親分共は、戦争に突入する前に、然るべき方法で世論を作り上げること、いいかえれば、世論を誤らせ、それを欺瞞することを決意したのであつた。

ドイツとイタリアの軍事プロックは、ヨーロッパにおけるイギリスとフランスの利益に反するものか？とんでもない、一體、これがどんなプロックだというのか？「吾々」はいかなる軍事プロックももつていない。「吾々」がもつているのは、一切合切で、無害な「ベルリン——ローマ樞軸」、つまり、樞軸に關する幾何學上の或る公式だけである。（哄笑）

ドイツ、イタリア、日本の軍事プロックは、極東における、アメリカ合衆國、イギリス、フランスの利益に反するものか？ 決してそんなことはない！ 「吾々」はいかなる軍事プロックももつてはいない。「吾々」がもつているのは、一切合切で、無害な「ベルリン——ローマ——東京の三角」、つまり、幾何學に對するほんのたしなみにすぎない。（満場哄笑）

イギリス、フランス、アメリカ合衆國の利益に反對する戦争か？ なんて馬鹿なことを！ 「吾々」はコミンテルン反對の戦争はやつているが、これらの國家に對する戦争なんかやつていはいしない。もし信用しないならば、イタリア、ドイツ、日本の間に締結された「反コミンテルン協約」を讀んで見給え。

この假面をかぶつた拙劣な芝居が見えすいたうそだということを了解するのは難くはないが、侵略者紳士諸君は、こういうふうな世論を作り上げること考えたのだ。けど、コミンテルンの「根源

地」を蒙古の沙漠や、エチオピアの山嶽や、スペイン領モロッコの荒野で探すなんて、笑止千萬なことではあるまいか。(哄笑)

しかし、戦争そのものはハッキリしたものだ。それはどんな覆いをもつてしても隠すわけにはゆかない。というのは、いかなる「樞軸」、「三角」、「反コミンテルン協約」をもつてしても、この期間内に、日本が中國の龐大な領土を占領し、イタリアがエチオピアを占領し、ドイツがオーストリアとズデーテン州を占領し、ドイツとイタリアがいつじよになつてスペインを占領したこと、そして、これらすべてが、非侵略國家の利益を無視して行われるという事實を隠すことはできないからである。戦争は依然として戦争だし、侵略者の軍事ブロックは軍事ブロックに相違ないし、侵略者は依然として侵略者たるに變りはないのである。

新帝國主義戦争の特徴は、それが全般的な世界戦争にまだなつていないことだ。戦争は、侵略國家が、非侵略國家、どこよりもまず、イギリス、フランス、アメリカ合衆國の利益を様々な方法で侵害してやつているのであるが、後者、即ち非侵略國家は、侵略者に對して讓歩につぐ讓歩をして、後退し、退却している。

かくして、吾々の眼前では、非侵略國家の側から、なんらの反撃の試みもなされず、ある種の黙認さえ得て、非侵略國家の利益を犠牲にして、世界と勢力範圍の公然たる再分割が行われているのである。

これは信じがたいことだ、だが事實である。

新帝國主義戦争の、このような一方的な奇妙な性格は、何によつて説明されるか？

巨大な可能性をもつている非侵略國が、かくもやすやすと反撃もせず、侵略國に有利なように、自己の地位と自己の義務を放棄するというようなことが、どうして起り得たか？

非侵略國家が弱いということ、これを説明することはできないか？ 勿論できない！ 非侵略的民主主義國家は、全部ひつくるめてみれば、經濟的にも、軍事的にも、ファシスト諸國家よりも強力だということは、議論の餘地はない。

そうならば、侵略者に對するこれらの國家の系統的に行われている讓歩は何によつて説明されるか？

それは、例えば、非侵略國家が戰爭に参加し、そして戰爭が世界的性格をもつ場合に、勃發するおそれのある革命を危懼していると説明することができるであろう。ブルジョア政治家共は、第一次世界帝國主義戰爭が最大國の一つで革命を勝利させたことを、勿論知つている。彼等は、第二次世界帝國主義戰爭も、同じ様に、一國或は數カ國で革命を勝利させるかも知れないということを恐れているのである。

しかしながら、このことは、現在、唯一の、または主要な原因とはなつていない。主要な原因は、非侵略國の大多數、どこよりもまず、イギリス、フランスが集團安全保障政策や、侵略者に對する集團反撃政策を放棄して、不干渉の態度に、「中立」の態度に、彼等が移行したことにあるのである。

不干渉政策は、形式的には、次のように性格すけてよからう。即ち「各國自身に、好きなように、また可能なように、侵略國から防護させておけばよい。われわれの關することではない。われわれは、侵略者とも、またその犠牲者とも取引するだろう」と。しかしながら、實際には不干渉政策は、侵略を默認し、戰爭を誘發することを、従つて、戰爭を世界戰爭に轉化させることを意味している。不干渉政策には、侵略者が惡事を働くのを妨げまいとすること、即ち、いわば、日本が中國と——

ではなくてソヴェト同盟となら、なおいいが——戦争をやりあうことを妨げないこと、いわば、ドイツが、ヨーロッパの問題に首をつつこんだり、ソヴェト同盟と戦争をやりあつたりすることを妨げないこと、すべての戦争参加者を、戦争の泥濘深く足をつつこませ、このことにおいて、こつそりと彼等を勇氣すけること、彼等を互に弱らせて、疲弊させること、そして、その後、彼等が十分弱るであろう時に、潑刺たる勢力をもつて舞台に登場すること、勿論「平和のために」登場すること、そして、弱つた戦争参加者達に、自己の条件をおしつけること、こんな渴望、希望が、チラチラとのぞいて見えるのである。

一舉兩得だ！

例えば日本を例にとつてみよう。日本が北部中國に侵略を開始する前に、有力なフランスとイギリスの全新聞が、中國の弱いことを、中國の抗戦力のないことを、日本はその軍隊をもつて、二——三カ月のうちに中國を征服できるであろうということを、大聲をあげて叫んだことは、特徴的である。その後、歐米の政治家達は、何かを待ち受け、監視するようになった。だがその後、日本が軍事行動を展開した時には、中國における外國資本の心臓ともいうべき廣東を譲りわたし、海南島を譲り渡し、香港を包圍させた。これらすべては、もつともつと戦争に深入りせよ、そこでどんなふうになるかはまあ見ていよう、といつて、侵略者を勇氣すけていることと非常によく似ているではないか。

或は、ドイツを例にとつてみよう。オーストリアの獨立を擁護すべき義務が存在したにもかかわらず、オーストリアをドイツに譲りわたし、ズデーテン州を譲りわたし、ありとあらゆる義務を破棄

して、チエツコスロヴァキアを、運命のなりゆきのままに放棄し、しかる後に、ドイツ人をもつと東の方に押しやり、容易に手に入る獲物を約束し、諸君はただボルシェヴィキと戦争を始めさえすればよい、それから先は、萬事うまくゆくだろうといひ足して、出版物上では、「ロシア軍隊の脆弱」について、「ロシア空軍の崩壊」について、ソヴェト同盟における「騷擾」について、口やかましくウソをつきだした。このこともまた、侵略者を突つつき、勇氣をつけていることに、非常によく似ているということを認めなければならない。

ソヴェト・ウクライナに關して、英・佛と北米の新聞雜誌上で持ち上つた騷ぎは特徴的だ。これらの新聞記者たちは、ドイツ人がソヴェト・ウクライナに向つて進みつつあるとか、彼等は人口約七十萬を數えられている、いわゆるカルバト・ウクライナを、今や手に入れつつあるとか、ドイツ人は、おそくとも今春には、三千萬以上の人口をもつソヴェト・ウクライナを、いわゆるカルバト・ウクライナに併合するだろうとか、聲が加れるまで喚き立てたのだ。この怪しげな騷ぎは、ドイツに對するソヴェト同盟の憤激を高め、雰圍氣を毒し、はつきりした根據もなしに、ドイツとの紛争をおこすように煽動することを恰も目的としているようである。

勿論、象を、即ちソヴェト・ウクライナをてんとう蟲にも比すべき、いわゆるカルバト・ウクライナに併合することを夢みているような狂人がドイツにいるだろうといふことは、全くあり得べきことである。そして、眞實に、彼處にこんな狂人がいるとすれば、こんな狂人に必要な拘束衣は、わが國にはいくらでも入用なだけもつていふことは疑わなくともよいのである（萬雷のよゝな拍手）。しかし、狂人にはかまわずにうつちやつておいて正常な人間に向きなやつてみる

ならば、ソヴェト・ウクライナを、いわゆるカルバト・ウクライナに併呑することを、眞面目に話すなどということは、明かに、笑止千萬な、馬鹿げたことではないか？　まず考えても見てくれ給え。てんとう蟲が象のところへやつてきて、兩手を腰にあて、そり返つて、さて彼にいうよう、「オイ、兄弟、僕は君がともかわいそうなんだ……。君は地主も、資本家も、民族的抑壓も、ファシストの親方もなしくらしているが、一體それは何というくらじだ……。僕はそんな君を見て、注意してやらすにはいられないんだ。實際、君は僕のところへ併呑される以外には、救われる道はないんだ……。〔満場哄笑〕何、かまうものか、仕方がない、僕の廣大無邊な領土へ、君のちつぽけな領土を合併させてやるよ……。〕〔満場哄笑して拍手〕

もつと特徴的なのは、歐米のある政治家と新聞記者たちが「ソヴェト・ウクライナへの進軍」を待ちきれないで、不干渉政策の眞の内幕を、自らさらけ出し始めたことである。彼等は、ドイツ人がソヴェト同盟に向つて、もつと東方へ動き出さずに、西方に轉じ、植民地を要求して彼等を酷く「失望させた」ことを露骨に語り、きつぱりと明白に書いている。ソヴェト同盟と戦争を始める義務を負う代償として、チエッコスロヴァキアの諸地方がドイツ人に與えられたが、ドイツ人は、今や、この約束手形を支拂うことを拒否して、使喚者たちに肘鐵砲を食わしていると考えることができるであらう。

不干渉政策に關して道德的解釋を下して、叛逆、裏切行爲、その他等々について語ろうとは、私は毛頭考えていない。人道をわきまえない人々に、道德を講釋するなどということは、あまりに子供じみた考え方である。年寄の鐵面皮なブルジョア外交家がいつているように、政治は政治である。しか

し、ここに指摘しておかなければならないことは、不干渉政策の支持者達が始めた、大きな、危険な政治バクチは、彼等にとつて重大な失敗に終るであろうということである。

以上が、現在を主導している不干渉政策の真相である。

以上が、資本主義諸國における政治的情勢である。

三、ソヴェト同盟と資本主義諸國

戦争は、諸國間の關係上に、新情勢を創り上げた。戦争は、この關係へ恐慌と不安の空氣を與えた。戦争は、戦後の平和體制の基礎を掘り崩し、國際公法の初歩的概念を覆えて、國際條約と義務の貴さを疑わしめるにいたつた。平和主義と軍備撤廢案は、墓穴へ埋葬されてしまつた。熱病的な軍備擴張がそれらにとつて代つた。不干渉政策を採つてゐる諸國をも第一に含めて、小さな國家も大きな國家もすべての國家が軍備擴張をやりはじめた。侵略者に與えたミュンヘンの讓歩とミュンヘンの協定が、「平和」な新時代の端緒を開いたという、甘い空言を信するものは、もはや誰一人もない。ミュンヘン協定の参加者、イギリスとフランス自身さえも、そんなことは信じていない。これらの國は、他國に劣らず、各自の軍備を擴張しはじめた。

ソ同盟がかかる脅威的事件を看過できなかつたことは、わかりきつたことである。どこか世界の遠い片隅で侵略者をはじめたいかなる戦争も、それがいかに小さいものであろうとも、平和を愛する國にとつては危険千萬なものであるということとは疑いのないことである。况や、アジア、アフリカ、ヨーロッパの五億以上の人口を、すでにその軌道に引つぱりこんだ新帝國主義戦争は、さらに、もつ

と危険なものである。ここにおいて、わが國は、平和維持政策を終始一貫して實行すると共に、わが赤軍とわが赤色海軍の戦闘準備の強化のために、眞剣な活動を展開したのであつた。

それと共に、自己の國際的地位の強化のために、ソヴェト同盟は、若干の他の方策をも採用することを決意した。國際連盟が、微力にもかかわらず、侵略者を暴露する場所として、また弱いとはいへ、戰爭の勃發を阻止することができる、ある平和の用具として、とにかく役立つことができると思つたので、わが國は、一九三四年末に、國際連盟に加盟した。ソヴェト同盟は、このような物騒な時世には、國際連盟のような、微力な國際機關でさえも、輕視すべきではないと考へたのである。一九三五年の五月には、あり得べき侵略者の攻撃に對抗する相互援助に關して、フランスとソヴェト同盟間に條約が締結された。これと同時に、チエツコスロヴァキアとも同じ様な條約が結ばれた。一九三六年三月、ソヴェト同盟は、蒙古人民共和國と相互援助條約を結んだ。一九三七年八月には、ソヴェト同盟と中國共和國との間に相互不可侵條約が締結された。

このような困難な國際情勢において、ソヴェト同盟は、平和維持の大業を固守して、自己の對外政策を遂行した。

ソヴェト同盟の對外政策は、明瞭かつ平易である。即ち、

一、吾々は、平和およびすべての國との事務的關係を強化することを固守する。即ち、これらの國が、ソヴェト同盟と同様な關係を維持し、彼等がわが國の利益を毀損しようと試みざるかぎり、吾等は右の立場を固守し、また將來も固守するであらう。

二、吾々は、ソヴェト同盟と共通の國境をもつ一切の隣接國と、平和的な、親密な、そして善隣的な關係を保つことを固守する。即ち、これらの國が、ソヴェト同盟と同じ様な關係を維持し、彼等が

直接あるいは間接に、ソヴェト國家の國境の保全と不可侵性とを、毀損しようと試みざる限り、吾々はこの立場を固守し、また將來も固守する。

三、吾々は、侵略の犠牲となり、かつ、自己の祖國の獨立のために鬭争している民族を支持することを固守する。

四、吾々は、侵略者の威嚇を恐れず、かつ、ソヴェト國境の不可侵性を毀損しようと試みる戦争挑發者の攻撃に對しては、二倍の打撃をもつてこれに酬いる用意がある。

以上が、ソヴェト同盟の對外政策である。(暴風のような、なりもやまぬ拍手)
自己の對外政策において、ソヴェト同盟は、次の諸點に立脚している。即ち、

一、その成長しつつある經濟的、政治的、文化的威力に、

二、わがソヴェト社會の、精神的・政治的統一に、

三、わが國諸民族の友誼的親睦に、

四、その赤軍と赤色海軍に、

五、その平和政策に、

六、平和を維持することを切實に利益とする萬國勤勞大衆の精神的支持に、

七、何らかの理由によつて、平和攪亂を望まぬ國の思慮分別に。

*

*

*

對外政策の領域における黨の任務は、次の點にある――

- 一、平和政策ならびに、すべての國々との事務的關係を強化する政策を、今後とも實行すること、
- 二、用心深く注意して、燒粟は他人に拾わせ、自分は甘い實を食う事を常習としてゐる、戰爭挑發者をして、わが國を紛争の渦中に引っぱりこまさないようにすること、
- 三、わが赤軍と赤色海軍の戦闘力を、できる限り強化すること、
- 四、諸國民間の平和と親睦とによつて利益を得るところの、萬國勤勞大衆との友誼の、國際的連けいを強化すること。

二、ソヴェト同盟の國內情勢

わが國の國內情勢に移ろう。

ソヴェト同盟の國內情勢という點から見ると、報告期間は、全國民經濟の一そうの高揚、文化の興隆、國の政治力の強化という情景を呈している。

報告期間内の、國民經濟發展の領域における最も重要な結果として認めなければならぬのは、工業と農業との新しい現代的な技術に基く再建設の完成ということである。わが國には時代おくれの技術をもつ舊式な工場や、世紀前的設備をもつ舊式な農民經營は、すでに全く、或は殆ど全く跡を絶つた。わが工業と農業とは、今や新しい、現代的技術の基礎の上に立っている。生産技術の點から、また新しい技術をもつて裝備された工業と農業の飽和度という點からいえば、わが國は、舊式な設備

が生産上の足かせとなり、新技術を廣くしつかりと適用するということを妨げている、他のどの國とも比較して、最も先進的な國であると、誇張なしにいうことができる。

國の社會的・政治的發展の領域における、報告期間内の最も重要な獲得物として認めなければならぬことは、搾取階級の殘滓の徹底的絶滅、労働者、農民、インテリゲンチヤの一つの總體的勤勞戦線への結集、ソヴェト社會の精神的政治的統一の強化、わが國諸民族の友誼的親睦の強化、そしてすべてこれらの結果としての、國の政治生活の完全な民主化、新憲法の制定ということである。わが國の憲法が、世界中で最も民主的なものであり、またソ同盟最高ソヴェトの選舉の結果、そして全く同じ様に同盟構成共和國最高ソヴェトの選舉の結果が、最も模範的なものであることを、敢て反駁できるものは一人もあまい。

すべてこれらの總結果として、吾々は、國內情勢の完全な確乎不動さと、世界中のどの政府も羨むような権力の堅固さとを、國內にもっているのである。

次に、わが國の經濟的・政治的狀態についての、具體的資料を檢討してみよう。

一、工業と農業との一層の高揚

(イ)工業。報告期間内のわが國工業の動向は、眞直ぐな高揚一路の情景を呈している。この高揚は、ただ一般に生産高の増大のみでなく、何よりもまず一方では、社會主義工業の繁榮、他方は、私營工業の壞滅を反映している。

これについての表を次に示そう。

一九三四年——一九三八年の間におけるソ同盟工業の増大

		一九三三年	一九三四年	一九三五年	一九三六年	一九三七年	一九三八年
		單位百萬ルーブル（一九二六年——二七年度の價格による）					
總生産額		四二、〇三〇・五〇	四七、七六二、一三七・八〇	九二、九九〇、一六六、一〇〇、三七五			
(イ)	社會主義工業	四二、〇〇二・五〇	四四、三六二、一一四・八〇	八九、八九〇、一三三、八〇〇、三四九			
(ロ)	私營工業	二八	三四	二二	三一	二八	二六
		前年度に對する百分比					
總生産額		一九三四年	一九三五年	一九三六年	一九三七年	一九三八年	一九三三年に對する一九三八年の百分比
(イ)	社會主義工業	一一〇・一	一一三・一	一一三〇・二	一一一・四	一一一・三	二三八・八
(ロ)	私營工業	一一一・四	一二三・一	一三〇・二	一一一・四	一一一・三	二三八・九

百分比

	一九三三年	一九三四年	一九三五年	一九三六年	一九三七年	一九三八年
總生産額	一〇〇・〇〇	一〇〇・〇〇	一〇〇・〇〇	一〇〇・〇〇	一〇〇・〇〇	一〇〇・〇〇
(イ) 社會主義工業	九九・九三	九九・九三	九九・九六	九九・九六	九九・九七	九九・九七
(ロ) 私營工業	〇・〇七	〇・〇七	〇・〇四	〇・〇四	〇・〇三	〇・〇三

この表によれば、わが工業が報告期間内に二倍以上も成長し、しかも生産の増大はことごとく社會主義的生産においてであつたことがみられる。

さらに、この表によつて、社會主義制度が、ソ同盟における工業の唯一の制度であることがみられる。

最後に、この表によつて、私營工業の徹底的破壊は、今では、盲人でさえも否定できない事實であることがみられる。

私營工業の破壊を、偶然的なものと考えてはならない。私營工業は、何よりもまず、社會主義經濟制度が資本主義經濟制度と比較して、より勝れた制度であるがゆえに、破壊したのであつた。それは、第二に、社會主義經濟制度が新しい現代的技術に基いて、わが社會主義工業全部を、數カ年内に新裝備する可能性を吾々に與えたがゆえに、破壊したのであつた。資本主義經濟制度は、かかる可能性を與えないし、かつ與えることはできない。生産技術の點から、また新技術をそなえた工業生産の飽和度の大きさの點からいえば、わが工業が世界で第一位にあるということは、事實である。

もしも、わが工業発展のテンポを、戦前の水準に對する百分比で見、かつ主要資本主義諸國の工業発展の速度と比較して見るならば、次のような情景がえられる。

一九一三年——一九三八年の間におけるソ同盟並に主要資本主義諸國の工業の増大

	一九一三年	一九三三年	一九三四年	一九三五年	一九三六年	一九三七年	一九三八年
ソ 同 盟	一〇〇・〇	三八〇・五	四五七・〇	五六二・六	七三二・七	八一六・四	九〇八・八
アメリカ	一〇〇・〇	一〇八・七	一一二・九	一二八・六	一四九・八	一五六・九	一二〇・〇
イギリス	一〇〇・〇	八七・〇	九七・一	一〇四・〇	一一四・二	一二一・九	一一三・三
ドイツ	一〇〇・〇	七五・四	九〇・四	一〇五・九	一一八・一	一二九・三	一三一・六
フランス	一〇〇・〇	一〇七・〇	九九・〇	九四・〇	九八・〇	一〇一・〇	九三・二

この表によれば、わが國の工業は、戦前の水準に比べて九倍以上も増大しているのに、一方主要資本主義諸國の工業は、戦前の水準のあたりに足踏みをつずけて、すべてで、僅かに二——三割の増大以上にはでなかつたことがみられる。

このことは、成長テンポの點では、わが國の社會主義工業は世界で第一位にあることを意味している。

かくして、わが工業の生産技術と成長テンポとの點では、吾々はすでに主要資本主義諸國に追いつき、追い越したといふことになる。

では、どの點で吾々はおくれているのか？ 吾々は、經濟關係の點で、即ち、人口一人當りのわが工業生産量という點で、依然としておくれているのである。わが國は、一九三八年に約一千五百萬トンの銑鉄を生産したが、イギリスは七百萬トンを生産した。これは、一見したところ、わが國の方がイギリスよりもよい状態にあるように思われるかも知れない。しかしこの銑鉄のトン數を人口數で割つてみるならば、一九三八年に、イギリスでは、人口一人當り、銑鉄百四十五キログラムに相當するが、ソ同盟では僅に八十七キログラムにすぎない。或は、もう一つの例をとれば、一九三八年に、イギリスは、一千八十万トンの鋼鉄と約二百九十億キロワット時（電力生産）を生産したが、ソ同盟は一千八百萬トンの鋼鉄と三百九十億キロワット時以上を生産した。一見したところ、わが國の方がイギリスよりもよい状態にあるように思われるかも知れない。しかし、これらのトン數とキロワット時すべてを、人口數で割つて見るならば、一九三八年に、イギリスでは、人口一人當り、二百二十六キログラムの鋼鉄と六百二十キロワット時に相當するが、一方、ソ同盟では、人口一人につき僅に百七キログラムの鋼鉄と、二百三十三キロワット時に相當することとなるのである。

問題はどこにあるか？ それは、わが國の人口がイギリスの人口よりも數倍多く、したがつて、需要もイギリスよりも多いからである。即ち、ソヴェト同盟の人口は、一億七千萬だが、イギリスは四千六百萬を超えてはいない。工業の經濟力は、國の人口と無關係に、總體的に見た工業生産高の大きさによつて表現されるのではなくて、人口一人當りのこの生産物の消費量と直接關係させてとり上げた、工業生産高の大きさによつて表現されるのである。人口一人當りの工業生産高が多ければ多いほど、その國の經濟力は高度であり、反對に、人口一人當りの生産高が少なければ少いほど、その國とその工業との經濟力は低いのである。したがつて、その國における人口が多ければ多いほど、その國

における消費物品に對する要求も多く、したがつて、かかる國の工業生産の大きさは、より大でなければならぬのである。

例えば、銑鉄の生産を例にとつてみよう。銑鉄の生産額が一九三八年には、七百萬トンに達したイギリスを、銑鉄の生産の領域で經濟的に追い越すためには、わが國は毎年、二千五百萬トンの銑鉄を精鍊しなければならぬ。一九三八年に、全部で一千八百萬トンの銑鉄を生産したドイツを、經濟的に追い越すためには、わが國は毎年四千萬——四千五百萬トンの銑鉄を精鍊しなければならぬ。しかして、アメリカ合衆國が全部で一千八百八十萬トンの銑鉄を生産した恐慌の年である一九三八年の水準ではなく、アメリカ合衆國に工業の高揚があり、約四千三百萬トンの銑鉄がそこで生産された、一九二九年の水準を考慮して、この國を經濟的に追い越すためには、わが國は、毎年、五——六千萬トンの銑鉄を精鍊しなければならぬ。

鋼鉄、展鉄の生産についても、機械製作その他等々についても、同じ様なことを述べなければならぬ。それは工業のこれらすべての部門、並に殘餘の部門も同じ様に、結局において銑鉄の生産に依據しているからである。

吾々は、生産技術と工業の發展テンポとの點において、主要な資本主義諸國を追い越した。これは非常によいことである。しかし、これだけでは不十分である。彼等を經濟的關係においてもまた、追い越さなければならぬ。吾々はこれをやりとげることができると、また吾々はそれをやりとげなければならぬ。主要資本主義諸國を經濟的に追い越した場合にのみ、吾々は、わが國が消費物品で完全に飽和され、吾々は、豊富な生産物をもつことを期待できるであらうし、そして吾々は、共產主義の第一發展段階から、その第二の發展段階へ移行する可能性を得るであらう。

主要資本主義諸國を、經濟的に追い越すためには、何が要求されるか？ それがためには何よりもまず、前進しようとする眞剣な毅然とした要望、わが社會主義工業をできるかぎり擴張するために、犠牲となる覺悟、莫大な資金を投ずる覺悟が要求される。わが國は、これらの條件をもっているだろうか？ いうまでもなくもっている！ さらに、それがためには、高度の生産技術と高度の工業發展テンポが存在することを必要とする。わが國は、これらの條件をもっているだろうか？ いうまでもなくもっている！ 最後に、それがためには、時日が必要だ。そうだ、同志諸君、時日だ。新しい工場を建設しなければならぬ。工業のための新しいカードルを鍛え上げなければならぬ。しかし、そのためには時日が、しかも少なからぬ時日が必要だ。二——三年間で、主要資本主義諸國を經濟的に追い越すことは不可能だ。それがためには、もう少し長い時日が要求される。上述の銑鉄とその生産を例にとつて見よう。どれほどの繼續期間で銑鉄生産の領域において、主要資本主義諸國を經濟的に追い越すことができるか？ 國家計畫委員會の舊成員のある働き手達は、第二次五カ年計畫の作成に當つて、第二次五カ年計畫の終りににおける銑鉄の生産額を六千萬トン程度に計畫を立てることを提案した。これは、彼等が銑鉄精練の一年間の平均増加が一千万程度に可能であるということから發足したことを意味している。勿論こんなことは、よくいつて空想であつた。なおその他に、これらの同志は、ただ銑鉄生産の領域においてのみ、空想に耽つたのではなかつた。例えば、彼等はこの第二次五カ年計畫の期間中の、ソ同盟における毎年の人口増加は三——四百萬人か或はそれ以上でさえなければならぬと考へた。これもまた、よくいつて空想であつた。しかし、空想家はまずうちやつておいて、現實的根據に立つたならば、完全に可能なものとして、銑鉄精練技術の現状を以て、年平均二百萬乃至二百五十萬トン程度の銑鉄精練の増加量を採用することができる。主要資本主義諸國

における、またわが國における工業の歴史も、毎年この増加基準量は、非常に緊張を要するものではあるが、しかし十分到達できるものたることを示している。

従つて、主要資本主義諸國を經濟的に追い越すためには、時日が、しかも少なからぬ時日が必要だ。わが國の勞働生産能力が高度であり、わが國の生産技術がより完成されればされるほど、この最も重要な經濟任務をより急速に遂行することができるであろうし、またこの任務の遂行期間を、一そう短縮することができらるであろう。

(ロ) 農業。農業の發展も、工業の發展と同じ様に、報告期間内においては、高揚の線をたどつた。この高揚は、ただ農業生産高の増大においてのみならず、何よりもまず、一方では、社會主義農業の成長と強化とにおいて、他方では、個人農經營の壊滅においてもまた表現されている。コルホーズにおける穀物播種面積が、一九三三年の七千五百萬ヘクタール（一ヘクタールは一町二十五歩——譯者註）から、一九三八年における九千二百萬ヘクタールに増大しているときに、個人農の穀物播種面積は、この期間内に、一千五百七十萬ヘクタールから六十萬ヘクタールに、即ち、全穀物播種面積の六厘にまで縮少された。個人農經營の役割がゼロに低下してしまつた加工用作物の播種面積については、私にはもはや述べない。その上に、今や一千八百八十萬の農家、即ち、漁業並に手工業コルホーズを勘定に入れないで、全農家の九割三分五厘がコルホーズに結合されたということは、周知のことだ。

このことは、コルホーズが徹底的に確立され、鞏固なものとなり、そして、社會主義的經濟制度が今や、わが國農業の唯一の形態であることを意味している。

もしも報告期間内の全作物の播種面積の動きを、革命前の時期の播種面積の廣さと比較してみるならば、次のような情景を見ることができらる。

ソ同盟全體における全作物播種面積

		單位百萬ヘクタール									
播種總面積		一九一三年	一九三四年	一九三五年	一九三六年	一九三七年	一九三八年	一九一三年に對する一九三八年の百分比			
(イ)	穀類	九四・四	一〇四・七	一〇三・四	一〇二・四	一〇四・四	一〇二・四	一〇八・五			
(ロ)	加工用作物	四・五	一〇・七	一〇・六	一〇・八	一一・二	一一・〇	二四四・四			
(ハ)	野菜・甜瓜類	三・八	八・八	九・九	九・八	九・〇	九・四	二四七・四			
(ニ)	飼料	二・一	七・一	八・六	一〇・六	一〇・六	一四・一	一六七・一			

この表によれば、播種面積は、わが國では全作物にわたつて、その中でも特に、飼料、加工用作物、野菜及び甜瓜類の方面において、増大したことが見られたのである。

このことは、わが農業がより高級なものとなり、より生産的なものとなり、また正しい循環播種を慣行するための現實的基礎が出来あがつたことを意味する。

報告期間内における、わがコルホーズ及びソフホーズに對する、トラクター、コンバイン（自動刈取打穀機）その他の機械の裝備が、いかに増大したかということに對しては、次の表が答えている。

(一) ソ同盟の農業におけるトラクター總台數

	1933年	1934年	1935年	1936年	1937年	1938年	1933年に 對する 1938年の 百分比
(イ) トラクター數 (單位 1000 台)							
トラクター總數	210,9	276,4	360,3	422,7	454,5	483,5	229,3
イ. M. T. S. (註) のトラクター	123,2	177,3	254,7	328,5	365,8	394,0	319,8
ロ. ソンホーズ並に副 次的農業企業にお けるトラクター	83,2	95,5	102,1	88,5	84,5	85,0	102,3
(ロ) 動力 (單位1000馬力)							
全トラクター動力	3.209,2	4.462,8	6.184,0	7.672,4	8.385,0	9.256,2	288,4
イ. M.T.S. のトラクター の動力	1.758,1	2.753,9	4.281,6	5.856,0	6.679,2	7.437,0	423,0
ロ. ソンホーズ並に副次 的農業企業における トラクターの動力	1.401,7	1.669,5	1.861,4	1.730,7	1.647,5	1.751,8	125,0

(註——機械・トラクター・ステーションの略稱——譯者)

(二) ソ同盟の農業におけるコンバイン並にその他の機械總台數

(單位 1000 台、年末現在)

	1933年	1934年	1935年	1936年	1937年	1938年	1933年に對する1938年の百分比
コンバイン	25,4	32,3	50,3	87,8	128,8	153,5	604,3
内燃機關並に移動蒸氣機關	48,0	60,9	69,1	72,4	77,9	83,8	174,6
複雜並に半複雜な打穀機	120,3	121,9	120,1	123,7	126,1	130,8	108,7
貨物自動車	26,6	40,3	63,7	96,2	144,5	195,8	736,1
乗用自動車(單位一台)	3,991	5,533	7,555	7,630	8,156	9,594	240,4

も、これらの數字に、報告期間内に、機械・トラクター・ステーションの數が、わが國では一九三四年の二千九百カ所から、一九三八年には六千三百五十カ所に増加した事實をつけ加えるならば、これらの資料を基礎として、新しい現代的な技術に基く、わが國農業の再建設は、すでに、大體において完成されたと、確信をもつていふことができるのである。

従つて、わが國の農業は、他のいかなる國の農業よりも、最も大規模にして、かつ最も機械化されたものであり、つまり、市場向の率の最も高い農業であるというだけでなく、現代的な技術で最も裝備された農業である。

もじも、報告期間内における穀物ならびに加工用作物の産額増加の動きを、革命前の時期と比較してみるならば、資料は、次のような情景を呈している。

ソ同盟における穀物並に加工用作物の總産高

	單位百萬ツエントネル(註)							一九一三年 に對する一 九三八年の 百分比
	一九一三年	一九三四年	一九三五年	一九三六年	一九三七年	一九三八年	百分比	
穀物	八〇一・〇	八九四・〇	九〇一・〇	八二七・三	二〇二・九	九九四・九	九一・八	六
棉(原棉)	七・四	一一・八	一七・二	二二・三	九	二五・八	二六・九	三六三・五
亞麻(纖維)	三・三	五・三	五・五	五・八	五・七	五・四	六・一	六五・五
砂糖	一〇九・〇	一一三・六	一一六・二	一二六・八	三	二一八・六	一六六・八	一五三・〇
油性植物	二一・五	三六・九	四二・七	四二・三	五	五一・一	四六・六	二一六・七

(註)——ツエントネルは百キログラム——譯者)

この表によれば、一九三六年と一九三八年の東部並に東南部地方の旱魃にもかかわらず、また一九一三年が未曾有の豊年であつたということにもかかわらず、穀物並に加工用作物の總産額は、わが國では、一九一三年の水準に比して報告期間において、上向の一路をたどつていふことが見られる。

コルホーズとソフホーズの穀物生産の市場に向ける率についての問題は、特に興味深いものである。有名な統計家、同志ネムチノフは、戦前の時期の穀物生産額、五十億ブード(一ブードは、一六・三八キログラム——譯者註)のうち、約十三億ブードの穀物が市場に出されており、この當時の穀物生産の市場向の率は、二割六分にあつていと算定した。同志ネムチノフは、大規模

生産としてコルホーズ並にソフホーズ生産の市場向の率は、例えば一九二六年——一九二七年においては、總生産額の約四割七分であつたが、個人農經營の市場向の率は、約一割二分であつたと計算した。もしも、一そう慎重にこの問題を取扱い、一九三八年におけるコルホーズとソフホーズ生産のうち市場向の率を、總生産額の四割として見るならば、わが社會主義的穀物農業は、この年に、約二十三億ブードの市場向穀物、即ち、戦前の穀物生産よりも十億ブード多くの市場向穀物を、外へ出すことができる筈だつたし、また、實際に出したということになるのである。

従つて、ソフホーズとコルホーズ生産の市場向の率の高度なことは、國內供給のために、重大な意義をもつところの、その最も重要な特質なのである。

コルホーズとソフホーズのこの特質にこそ、穀物の問題を、廣大な國に、市場向穀物を十分に供給するという問題を、わが國が、かくも容易に、かつ迅速に解決することに成功できた祕密があるのである。

最近の三カ年間に、わが國では、毎年の穀物準備高が、穀物十六億ブード以下に低下したことはなく、時には、例えば、一九三七年には十八億ブードにまでも高まつたということを特記しなければならぬ。もしも、これに、國家による年々の穀物買入れ高、約二億ブードおよび、コルホーズの穀物賣買の線による數億ブードを附加するならば、吾々は總じて、以上述べたような、コルホーズとソフホーズによつて、外へ出すことのできる、市場向穀物の總額を得るであらう。

さらに、最近の三カ年間に、市場向穀物の本場が従來わが國の穀倉と考えられていたウクライナから北方と東方へ、即ち、ロシア・ソヴエト連邦社會主義共和國へ、移動したことに注意するのは、興味深いことである。最近の二——三年間、ウクライナが毎年、全部で四億ブードの穀物を調達して

いたときに、ロシア・ソヴェト連邦社會主義共和國は、これらの年々に毎年十一億乃至十二億ブロードの市場向穀物を調達しているのは、周知のことである。

穀物生産に關する問題は以上のようなものである。

畜産についていえば、農業の、最もおくれたこの部門においても、最近の數年間に、著しい前進が認められた。もつとも、馬匹の頭數と牧羊の點では、吾々はまだ革命前の水準に達していないが、牛類と養豚においては、吾々はすでに、革命前の水準を越したのである。

次に、この點に關する資料がある。

ソ同盟の家畜頭數（單位 百萬頭）

	每 年 七 月 現 在								1938年の百分比	
	1916年（ 全國家畜 調査資料 による）	1933年	1934年	1935年	1936年	1937年	1938年	1916年の 調査に對 する	1933年に 對する	
馬 匹	35,8	16,6	15,7	15,9	16,6	16,7	17,5	48,9	105,4	
牛	60,6	38,4	42,4	49,2	56,7	57,0	63,2	104,3	164,6	
羊・山羊	121,2	50,2	51,9	61,1	73,7	81,3	102,5	84,6	204,2	
豚	20,9	12,1	17,4	22,5	30,5	22,8	30,6	146,4	252,9	

馬匹飼育と牧羊の領域におけるこのたちおくれが、極めて短期間に絶滅されるであらうといふことは、疑うことのできないところである。

(ハ) 商業、交通運輸。工業および農業の高揚と共に、國の商業も成長した。國家並に協同組合による商業の小賣網は、報告期間に二割五分増加した。國家並に協同組合による商業の小賣高は、十七割八分増大した。コルホーズ市場での賣上高は、十一割二分増大した。

以上の事情に對應する表を左に掲げよう。

商 業

	1933年	1934年	1935年	1936年	1937年	1938年	1933年に對する1938年の百分比
1. 國家並に協同組合による小賣網(店舗と屋台店) ——年未現在	285,355	286,236	268,713	289,473	327,361	356,930	125.1
2. 國家並に協同組合による商業の小賣取引額(公共食堂を含めて)——單位百萬ルーブル	49,789.2	61,814.7	81,712.1	106,760.9	125,943.2	138,574.3	278.3
3. コルホーズ市場の賣上額 ——單位百萬ルーブル	11,500.0	14,000.0	14,500.0	15,607.2	17,799.7	24,399.2	212.2
4. 食料、輕工業、重工業、林業、各人民委員部並に各同盟構成共和國の地方工業人民委員部の販賣のための州商業基地數——年未現在	718	836	1,141	1,798	1,912	1,994	277.7

國內における商業が貨物輸送のある程度の成長なごには、こんなに發展しえなかつたにちがいないことは、わかりまつたことである。そして、眞實、貨物の輸送は、報告期間内に、すべての各種類

の交通運輸にわたり、特に鉄道ならびに航空運輸において、成長發展したのであった。貨物の輸送は、水上運輸の方面でも發展はしたが、甚だしく不定であり、一九三八年の水上運輸による貨物の輸送は、遺憾ながら、前年度に比して幾分低下したのであった。

以上の事情に對應する表を左に掲げよう。

貨物輸送量

	1933年	1934年	1935年	1936年	1937年	1938年	1933年に對する1938年の百分比
鐵道(單位十億トン・キロメートル)	169,5	205,7	258,1	323,4	354,8	369,1	217,7
河海運輸(單位十億トン・キロメートル)	50,2	56,5	68,3	72,3	70,1	66,0	131,5
民間航空隊(單位百萬トン・キロメートル)	3,1	6,4	9,8	21,9	24,9	31,7	1022,6

一九三八年における水上運輸の若干のおくれが、一九三九年において根絶されるであろうということは、疑うことのできないところである。

二、國民の物質的並に文化的狀態の一層の向上

工業と農業との引續く高揚は、國民の物質的並に文化的狀態の新たな増進に導かざるを得なかつたし、また實際にそれへ導いたのであつた。

搾取の根絶、國民經濟における社會主義制度の強化、失業と、失業に伴つて起る都市および農村

における貧窮とが全く存在しないこと、工業の巨大な擴張と労働者數の不斷の増大、労働者とコルホーズ農民の労働生産能力の増進、コルホーズに對する永久土地使用の確保、コルホーズへの、最高級のトラクターや農業機械の夥しい數量の供給、——これらはすべて、労働者と農民の物質的狀態を一そう向上させるための、現實的條件を創り上げた。労働者と農民のこの物質的狀態の改善は、當然、わが國におけるかなりな勢力であり、かつ労働者と農民の利益のために奉仕している、インテリゲンチヤの物質的狀態の改善をもたらした。

今や、すでに、問題は、農村を離れて飢餓の脅威の下に生活していた、職も家もない農民を、同情を以て救い上げ、何とかして工業の方面で仕事につけてやるというようなことではない。こんな農民は、すでにずつと前から、わが國にはいなくなつてゐる。そしてこのことは、勿論わが農村の裕福さを證明してゐるのであるから、よいことに相違ない。だが、今では問題はただ、コルホーズが吾々の頼みをきき容れて、益々發展する工業のために、若いコルホーズ農民を、毎年約百五十萬人ほどでもよいから、吾々の方へ提供してほしいと、コルホーズに提議することなのである。すでに裕福になつたコルホーズは、彼等の側からのかかる援助なしには、わが工業をもつと擴張することは、非常に困難なことであり、また、工業を擴張せずには、日用消費物品に對する、益々増大する農民の需要を満足させられないであらうということも、考慮に入れなければならぬ。コルホーズがもつてゐる豊富な技術は、農村における働き手の一部を解放しており、工業に引き入れられたこれらの働き手達には、わが國民經濟全體に巨大な利益をもたらすことができただであらうから、コルホーズは、この吾々の願いを満足させる可能性を十分もつてゐるのである。

この結果として、吾々は、報告期間内における労働者と農民の物質的狀態の改善について次のような指標をもつてゐる——

一、國民所得は、一九三三年における四百八十五億ルーブルから、一九三八年には一千五十億ルーブルに増大した。

二、労働者並に事務員の數は、一九三三年の二千二百萬人餘から、一九三八年には二千八百萬人に増加した。

三、労働者並に事務員の労働賃銀の基金年額は、三百四十九億五千三百萬ルーブルから、九百六十四億二千五百萬ルーブルに増大した。

四、一九三三年には、一千五百十三ルーブルであつた、工業労働者の一カ年の平均労働賃銀は、一九三八年には、三千四百四十七ルーブルに増加した。

五、コルホーズの収入金額は、一九三三年の五十六億六千九百九十萬ルーブルから、一九三七年には百四十一億八千十萬ルーブルに増加した。

六、コルホーズ農家一戸に對する、穀物栽培地方の穀物平均給與高は、一九三三年の六十一ブドから、種子や、種子保險のための積立、公共家畜のための飼料積立、穀物納入、機械トラクター・ステーションの作業に對する現物での支拂額、これらを勘定に入らずに、一九三七年には、百四十四ブドに増加した。

七、社會的・文化的諸方策のために、國家が振當てた豫算額は、一九三三年の五十八億三千九百九十萬ルーブルから一九三八年には三百五十二億二百五十萬ルーブルに増大した。

國民の文化狀態についていえば、その向上は、國民の物質的状態の向上のあとにすぐひきつういておこつた。

國民の文化的發展という點からいえば、報告期は、眞に、文化革命期であつた。ソ同盟の各種民族語による普通義務初等教育の實施、各種程度の學校數と學生生徒數の増加、最高學府を卒業した專

門家數の増加、新しいソヴェト・インテリゲンチヤの創生と強化、——このようなのが、國民の文化的向上の一般的情景である。

この點に關する資料を、次に掲げる。

(一) 國民文化水準の向上

表 示

各種程度の學校の學生生徒總數	算定の單位	1933-34年度	1938-39年度	1933—34年度に對する1938—39年度の百分比
(イ) 初等教育	單位—千人	23,814,0	33,965,4	142,6
(ロ) 中等教育(一般並に専門)	同	17,873,5	21,288,4	119,1
(ハ) 高等教育	同	5,482,2	12,076,0	220,3
ソ同盟における被教育者(各種各様の教育一切を含めて)	同	458,3	601,0	131,1
公衆圖書館數	單位—千カ所	—	47,442,1	—
公衆圖書館の藏書冊數	單位—千カ所	40,3	70,0	173,7
クラフゾの他の施設數	單位—千カ所	86,0	126,6	147,2
劇場數	單位—カ所	61,1	95,6	156,5
活動寫眞裝置數(小型裝置を含まず)	單位—台	587	790	134,6
そのうちのトーキー裝置數	同	27,467	30,461	110,9
農村における活動寫眞裝置數(小型裝置を含まず)	同	498	15,202	三十一倍
そのうちのトーキー裝置數	同	17,470	18,991	108,7
新聞年發行部數	單位—百萬部	24	6,670	二百七十八倍
		4,984,6	7,092,4	142,3

(二) ソ同盟において一九三三年より一九三八年に至る間に建設された學校數

年次	學校數		總計
	都市及び町における	村落地方における	
一九三三年	三二六	三、二六一	三、五八七
一九三四年	五七七	三、四八八	四、〇六五
一九三五年	五三三	二、八二九	三、三六二
一九三六年	一、五〇五	四、二〇六	五、七一一
一九三七年	七三〇	一、三二三	二、〇五三
一九三八年	五八三	一、二四六	一、八二九
一九三三年より一九三八年までの總計	四、二五四	一六、三五三	二〇、六〇七

(三)一九三三年より一九三八年に至る間に大學及び高等專門
學校を卒業した青年専門家數(單位一千人)

	1933年	1934年	1935年	1936年	1937年	1938年
ソ同盟全體における總人員數(軍事専門家は算入せず)	34,6	49,2	83,7	97,6	104,8	106,7
1. 工業並に建築技師	6,1	14,9	29,6	29,2	27,6	25,2
2. 交通運輸並に通信技師	1,8	4,0	7,6	6,6	7,0	6,1
3. 農業の機械化のための技師、農業技師、獸醫、動物技師	4,8	6,3	8,8	10,4	11,3	10,6
4. 經濟學者と法律家	2,5	2,5	5,0	6,4	5,0	5,7
5. 中學校、勞働者豫備校、技術學校の教師及び藝術に従事する働き手をも含めた教育事業におけるその他の働き手	10,5	7,9	12,5	21,6	31,7	35,7
6. 醫者、藥劑師並に體育専門家	4,6	2,5	7,5	9,2	12,3	13,6
7. その他の専門家	4,3	11,1	12,7	14,2	9,9	9,8

これらすべての、龐大な文化活動の結果として、わが國では、労働者階級、農民、ソヴェト的事務員の陣列から生れた、わが人民の血であり肉である多數の新しいソヴェト・インテリゲンチヤが、即ち搾取の桎梏ということを知らず、搾取者を憎み、誠實に、ソ同盟の諸民族に奉仕しようとする覺悟のできているインテリゲンチヤが生れ、形成された。

私は、この新しい、民衆的、社會主義的インテリゲンチヤの出生は、わが國における文化革命の、最も重要な成果の一つであると考える。

三、ソヴェト制度の一層の鞏固化

報告期間内の最も重要な成果の一つは、國內状態の一層の鞏固化、ソヴェト制度の一層の鞏固化をもたらしただことである。

これ以外には、なりようがなかった。國民經濟の全部門にわたる社會主義制度の確立、工業並に農業の高揚、勤勞大衆の物質的状态の向上、國民大衆の文化水準の向上、彼等の政治的活動性の向上、——これらはすべて、ソヴェト權力の指導下に成就されたものであつて、ソヴェト制度の一層の鞏固化に導かざるを得なかつた。

現時期のソヴェト社會の特殊性は、いずれの資本主義社會とも異なり、この社會には、もはや、對立的な、敵對的な階級がなく、搾取階級は絶滅され、ソヴェト社會を構成している労働者、農民、インテリゲンチヤは、友誼的協力の原則によつて生活し、働いているという點にある。資本主義社會が、労働者と資本家、農民と地主との間の到底和解されない矛盾によつて引裂かれ、これが國內状態を、

不安定なものたらしめていたにたいし、搾取の軛から解放されたソヴェト社會は、かかる矛盾を知らず、階級間の衝突などは絶對になく、かつ、労働者、農民、インテリゲンチヤの友誼的協力の情景を示しているのである。この公共性の基礎の上に、ソヴェト社會の精神的・政治的統一、ソ同盟諸民族の親睦、ソヴェト愛國主義のような推進力もまた展開されたのであつた。また、この同じ基礎の上に、一九三六年十一月に採用されたソ同盟の憲法並に國の最高機關選舉の完全な民主化が生れたのであつた。

國の最高機關の選舉そのものについていえば、それは、わが國內状態の特徴をなしているソヴェト社會の統一そのものと、ソ同盟諸民族の親睦そのものとを如實に示す、輝かしいデモンストレーションとなつたのであつた。周知のように、一九三七年十二月に行われたソ同盟最高ソヴェトの選舉では、殆ど九千萬の選舉人、即ち、全投票者の九割八分六厘が、共産黨員と非黨員とのブロック（連合）に投票したし、一九三八年六月に行われた諸同盟構成共和國最高ソヴェトの選舉には、九千二百万の選舉人、即ち全投票者の九割九分四厘が、共産黨員と非黨員とのブロックへ投票したのであつた。これが、ソヴェト制度の鞏固化の根據と、ソヴェト政權の無限の力の源泉の存するところである。ところで、このことは、戰爭の場合において、わが軍の銃後並に戦線がその全く同質なことと、内部が統一されていることとのために、他のいかなる國よりも強いということを意味しており、これは外國の好戰主義者たちによつて、よく記憶されなければならないことである。

ある外國新聞記者は、トロツキー、ジノヴィエフ、カメネフ、ヤキール、トハチエフスキー、ローゼンホルツ、ブハリンその他の兇漢共のような、スパイ、人殺し、妨害工作者をソヴェト組織から一掃してしまつたことを目して、恰もソヴェト制度が「ぐらつかされた」かのようにまたその「腐敗」を齎したかのように、たわごとをいつている。この下劣なたわごとは、嘲笑するだけでよいのであ

る。ソヴェトの諸組織から有害な敵對的な分子を一掃したことが、どうして、ソヴェト制度をぐらつかせたり腐敗させたりすることができるのか？ 外國に對して叩頭し、どんな外國のお役人に對してもへつらう奴隷根性で満され、諜報者として奉仕するために、いつでも彼等のところへ馳せ參する用意のできているスパイ、人殺し、妨害工作者たるトロツキー・ブハリンの一團——資本の鎖から解放されている一介の平凡なソヴェト市民でさえも、資本主義の奴隷制度の重荷を頸に引きすつている外國のいかなる高位のお役人よりも、一頭地を抜いていることを理解できなかつた連中の一團、この見下げ果てた、自分自身を賣つた奴隷の徒黨が、一體誰に必要なのか、それは民衆にとつて、一體どんな價值があるのか、またそれは、一體、だれを『腐敗』させることができるのか？ 一九三七年には、トハチエフスキー、ヤキール、ウボレグヴィツチ、その他の兇漢に對する銃殺の判決があつた。そのあとで、ソ同盟最高ソヴェトの選舉が行われた。選舉では、全投票の九割八分六厘が、ソヴェト權力に賛成投票した。一九三八年の初めには、ローゼンホルツ、ルイコフ、ブハリンその他の兇漢に對する銃殺の判決があつた。そのあとで、同盟構成各共和國の最高ソヴェトの選舉が行われた。選舉では、全投票者の九割九分四厘、ソヴェト權力に賛成投票した。一體どこに『腐敗』の徴候があり、またなせ、この『腐敗』が、選舉の結果に現われていないのか？ とききたいものだ。

これら外國の饒舌家のいうことを聞けば、もじも、スパイ、人殺し、妨害工作者に何等の制裁も加えず、彼等が妨害工作をなし、人を殺し、スパイをすることを阻止しなかつたならば、ソヴェトの組織は、遙にもつと鞏固に、もつと安定していただろうという結論に到達することができるのである（哄笑）。これらの紳士諸君は、こうもあつかましく、スパイ、人殺し、妨害工作者を擁護して、あまり早く、自分の正體をすつかり暴露しているではないか？

スパイ、人殺し、妨害工作者をソヴェト諸組織から一掃したことは、これら組織を一そう強化に導く筈であるし、また實際に導いたという方が、もつと間違ひのないことではないだろうか？

例えば、ハサン湖事件（張鼓峯事件——譯者註）が、ソヴェト組織からスパイや妨害工作者を一掃してしまふことは、ソヴェト組織を強化させるための最も確實な方法であるということを物語つていないとするならば、何を物語るものであるか？

* * *

國內政策の領域における黨の任務は、次のようである。

一、生産技術と工業の發展テンポとの領域で、主要な資本主義諸國をすでに追い越した後に、最近十年乃至十五年間に、經濟的にもこれらの國を追い越すために、わが工業の高揚、労働生産能力の増進、生産技術の完成を一そう展開させること。

二、最近の三——四年間に、一ヘクター當り十二——十三ツェントネルの平均收穫で、毎年八十億プードの穀物生産を獲得し、加工用作物の生産を、平均三割乃至三割五分増大し、羊及び豚の頭数を二倍に、牛の頭数を約四割、馬匹頭数を約三割五分増大するために、わが農業と畜産業の一そうの高揚を展開させること。

三、労働者、農民、インテリゲンチヤの物質的、文化的状態を引きつすき一そう改善すること。

四、わが社會主義的憲法を、着々と實行にうつすこと、國の政治生活の民主化を、徹底的に實現すること、ソヴェト社會の精神的・政治的統一と、労働者、農民、インテリゲンチヤの友誼的協力を

強化すること、ソ同盟の諸民族の親睦をできるかぎり強化すること、ソヴェト愛國主義を發展させ培養すること。

五、資本主義諸國によつて圍繞されていることを忘れてはならないこと、外國の諜報機關は今後もわが國に、スパイ、人殺し、妨害工作者を潛入させるだらうということをおぼれぬこと、このことをおぼれぬに、わが社會主義國の諜報機關を強化し、これを系統的に援助して、人民の敵を壊滅させ、根こそぎにすること。

二、ソ同盟共產黨(ボルシエヴィキ)の一層の強化

政治的方針と日常の實踐活動という見地からいえば、この報告期間は、わが黨の一般方針が完全に勝利を得た時期であつた。(暴風のような、長くつづく拍手)

全國民經濟における社會主義制度の確立、工業と農業の新しい技術を基礎とする再建設の完成、工業方面において第二次五カ年計畫を期限よりも早く遂行した事、七十億ブードの水準に達する穀物年産額の増大、貧窮と失業との根絶、國民の物質的・文化的状態の向上、——このようなのが、わが黨政策の正しさ、黨指導の正しさを如實に示している基本的業績である。

これらの巨大な業績に直面して、わが黨一般方針の敵、各種の「左翼的」、「右翼的」思潮、トロツキー・ピヤタコフ的、ブハリン・レイコフ的、あらゆる變節漢共は、小さな塊にちじこまり、自己の陳腐な「政綱」を仕舞い込み、そして潛行運動の方法にいでざるをえなくなつた。彼等は、人

民の意志に従う勇氣をもたず、メンシエヴィキ、エス・エル、ファシストと融合し、外國の諜報機關の奉公人となり、スパイとして雇われ、わが國をバラバラにし、わが國に資本主義的奴隸制度を再興させて、ソヴェト同盟の敵を援助する義務を負う方を選んだ。

以上が、後で人民の敵となつたわが黨方針の敵の、不名譽な末路である。

人民の敵を壊滅させ、黨とソヴェト諸組織から變節漢を一掃して、黨は、その政治的、組織的活動において、ますます統一されたものとなり、黨は、その中央委員會の周圍にますます緊密に結集するにいたつた。(暴風のような拍手。全代議員は起立し、立つて報告者に挨拶をおくる。「同志、スターリン、ウラー！同志、スターリン、萬歲！わが黨中央委員會萬歲！ウラー！」の叫び)

報告期間内の黨の内部生活の發展に關する、また黨の組織活動と宣傳活動とに關する具體的な資料を檢討することによよう。

一、黨成員の改善策。組織の細分。指導機關の下部活動への一層の接近。

黨と黨指導機關の強化は、報告期間内には、まず最初に次の二つの線に沿つて實現された。即ち、黨成員の整理、信頼できない分子の放逐と最も優秀な分子の選抜という線に沿い、また、組織の細分、組織の大きさの縮小、實踐的具體的の下部活動への、指導機關の一そうの接近という線に沿つて實現されたのである。

第十七回黨大會には、百八十七萬四千四百八十八人の黨員が代表されていた。この資料をその前の、即ち、第十六回黨大會に代表されていた黨員數についての資料と比較してみると、第十六回黨大

會から、第十七回黨大會までの期間に、六十萬人の新しい黨員が、黨へ入つたこととなるであろう。一九三〇年から一九三三年に至る期間の條件の下で、このような黨への大衆的殺到は、その成員の不健全な、望ましくない膨脹であることを、黨は感得しないわけにはゆかなかつた。黨陣列内には、正直な、忠實な人々だけではなく、偶然にまぎれこんだ人々も、自己の私的的目的のために黨の旗幟を利用しようとする野心家たちも入つてきていることを、黨は知つていた。黨はただ黨員の数が多しということによつてのみ強いのではなく、何よりもまず、その質が良いということによつて強いのだ、ということをも、黨はしらないわけにはゆかなかつた。これらのことと関連して、黨成員整理の問題が起つた。すでに一九三三年に始まつていた黨員と黨員候補者の清掃を繼續することが決定され、そしてそれは、實際に、一九三五年の五月まで繼續されたのであつた。さらに、新黨員の黨への採用を停止することが決定され、そしてそれは、實際に、一九三六年の九月に至るまで停止されたのであつた。而して、新黨員の黨への採用は、一九三六年の十一月一日にいたつて、はじめて再開されたのであつた。さらに、黨内には疑わしい分子が少なからず存在することを證明したところの、同志キロフの兇惡極まる殺害と関連して、黨員證の審査と交換とを實行することが決定され、しかして、この兩方ともが、ようやく終つたのは一九三六年の九月であつた。ただそのあとでのみ、新黨員と新黨員候補者の黨への採用が開始された。これら一切の方策がとられた結果として、黨はその陣列から偶然にまぎれこんだ、消極的な、野心的な、また明かに敵對的な分子をきれいに掃除し、最もじつかりとした、忠實な人々を選抜することに成功した。だがこの清掃が、重大な誤謬を犯すことなしに遂行されたということはできない。遺憾ながら、誤謬は、豫期することができたよりも、もつと大きいものであつた。大衆的清掃の方法を、吾々がこれ以上用いる必要がないであろうということは、疑いのないこと

ろである。しかしながら、一九三三年から一九三六年にわたる清掃は、やはり不可避的なものであつたし、またそれは、大體としてよい結果を興えた。現に行われている第十八回黨大會には、約百六十万の黨員、即ち第十七回黨大會におけるよりも二十七万人少い黨員が代表されている。だが、このことは、少しもわるいことではない。反對に、これには、さらによい方向に向うものだ。なせならば、黨は汚物を一掃することによつて、強化されるからである。吾々の黨は、黨員數こそ幾分少くなつたが、その代り、黨は、質においては前よりよいのである。

これは大きな功績である。

黨指導が下部活動へ接近し、黨指導を一そう具體化することによつて、日常の黨指導を改善するという點についていえば、組織の細分と組織の大きさの縮小とが、これらの組織に對する黨機關の指導を容易にし、指導そのものが具體的に、生々と、行動的に遂行されるための最もよい方法であるという結論に黨は到達した。細分は、人民委員部の方面でも、また行政的地域的組織、即ち同盟構成共和國、地方、州、地區等々の方面でも行われた。諸方策採用の結果として、吾々は現在、七同盟構成共和國の代りに十一の同盟構成共和國を、十四のソ同盟人民委員部の代りに三十四の人民委員部を、七十の地方と州の代りに百十の地方と州を、二千五百五十九の市區と農村地區の代りに三千八百十五のそれらをもつてゐる。これらの細分に對應して、黨の指導機關系統は、現在、ソ同盟共産黨（ボルシェヴィキ）中央委員會を先頭とする十一の黨中央委員會、六つの黨地方委員會、百四の黨州委員會、三十の黨縣委員會、二百十二の黨全市委員會、三百三十六の黨市區委員會、三千四百七十九の農村地區委員會、十一萬三千六十の最下部組織をもつてゐる。

組織細分の仕事は、すでに終つたということではできない。細分が、もつとつすけて行われるであろうということは、何よりも確實である。しかし、何はともあれ、それは、諸活動に對する日常の指導を改善する上にも、指導自身を、下部の具體的活動に接近させる上にも、すでによい結果を與えている。組織の細分が、何百何千という新しい人々を指導的仕事に昇進させる可能性を與えたことについては、私はもはや述べない。

これもまた、大きな功績である。

二、カードルの選抜、彼等の昇進、彼等の配置

黨成員の整理と指導機關を下部の具體的活動へ接近させることは、黨とその指導とを一そう強化するための、唯一の方法ではなかつたし、またそうであることはできなかつた。報告期間内における、黨強化のための他の方法は、カードルに對する活動の根本的改善、カードルの選抜、その昇進、その配置、仕事の過程でのその點檢、これらの仕事の改善であつた。

黨のカードル——それは、黨の指揮的成員であり、しかして、わが黨は、權力を握っているものなるがゆえに、彼等は、また、指導的國家機關の指揮的成員でもあるのである。實踐活動によつて審査された正しい政治方針が作成された後には、黨のカードルは、黨並に國家の指導の、決定的な力となる。正しい政治方針をもつということ、これは勿論、第一にしかも最も重要なことである。しかしこれだけでは、まだ不十分である。正しい政治方針は、聲明のために必要なのではなく、實行するためには必要なのである。しかして、正しい政治方針を現實化するためには、黨の政治方針を理解し、それを

自己本來の方針として把握し、それを實行にうつす準備があり、それを實踐にあてはめることを心得ており、かつそれに對して責任をもち、それを擁護し、そのために鬭争することのできるようなカードルが必要であり、人々が必要なのである。これなしには、正しい政治方針も、空文化する危険があるのである。

ここにおいてこそ、カードルの正しい選抜、カードルの養成、新しい人々の昇進、カードルの正しい配置、すでに行われた活動による彼等の審査についての問題が起つてくる。

カードルを正しく選抜するということは、何を意味するか？

カードルを正しく選抜するということは、自分の周圍に多くの代理や助手を寄せ集め、事務室を設けて、ここから種々の指令を連發することを決して意味していない（哄笑）。これはまた自分の職權を濫用し、無益に、何十何百人の人々を、この場所からあの場所へ、それからまたその反對に、轉々と移動させ、はてしない「再組織」をやることを意味するのでもない。（哄笑）

カードルの正しい選抜ということとは、次のことを意味する。

第一に、カードルを黨と國家の財寶として尊重し、彼等を大切にし、彼等に對して尊敬をもつこと。
第二に、カードルをよく知り、カードルの働き手一人一人の長所と短所とを綿密に研究し、どんな地位におくのが、最も容易にその働き手の能力を發揮させられるかを知ること。

第三に、注意深くカードルを養成し、ドンドン伸びてゆく働き手の一人一人の向上發展を助け、かかる働き手のために根氣よく「奔走」し、彼等の成長を急速ならしめるためには時を惜しまぬこと。

第四に、新しい、若いカードルを、適時に、かつ勇敢に昇進させ、彼等を舊い一つの場所にいつまでもおきつばなしにしたり、彼等をくさらせたりしないこと。

第五に、働き手の一人一人が、自分にびつたりあてはまつた働き場所だ、と感じ得るように、働き手の一人一人が、一般に自分個人の能力上で寄與できる最大限を、吾々の共同の大業に寄與することができるよう、カードル配置の仕事の一般方向が、政治方針の實行のために、この配置が行われるように、政治方針の要求と完全に合致するように、働き手をそれぞれの地位に配置すること。

新しい若いカードルの大膽で適時な昇進に關する問題は、この點において、特別な意義をもつてゐるものである。わが人々は、この問題をまだ完全にはつきりと了解してゐないと私は考へる。ある者は、人々の選抜に當つては、主として老カードルに對して行ふべきだと考へてゐる。ところが反對に、他の者は、主として若いカードルに對して行ふべきだと考へてゐる。私は、どつちも誤りだと考へる。もちろん、老カードルは、黨と國家にとつて大きな富である。彼等は、若いカードルがもつてゐない指導についての大きな經驗、マルクス主義的・レーニン主義的原則上における修練、事物についての知識、方針を決定する能力をもつてゐる。しかし第一に、老カードルは、いつも少数しかないので、入用な數に満たず、かつ彼等は部分的には、自然の法則どおりに、戦列から退き始めている。第二に、老カードルの一部には、過去を執拗に回顧し、過去に拘泥し、古いことに拘泥して、生活における新しいものを看取しない傾向が時々ある。これは、新しいものに對する感覺の喪失となすけられるものである。これは、非常に深刻な、かつ危険な短所である。若いカードルについていえば、勿論、彼等は、老カードルが習得してゐるような經驗、修練、事物についての知識、方針を決定する能力をもつてゐない。しかし、第一に、若いカードルは、絶對多數を構成してゐること、第二に、彼等は若く、今のところ、戦列から退くというような危険にもまだ瀕してゐないこと、第三に、彼等は、ボルシェヴィキたる各々の働き手の貴重な資格である、新しいものに對する感覺を十

分にもつてゐる。そして第四に、彼等は、老いた人達に追いつき、老カードルと肩を並べて、立派な交替者となることができる時も、そう遠いことではないほど、速かに成長し、啓發され、それほど彼等は熱心に上部へ迫つてゐる。従つて、任務は、老カードルに向けて行ふとか、新しいカードルに向けて行ふとかいうことではなくて、黨と國家との指導活動の一つの合奏團における老カードルと若いカードルとの組合せへ、彼等の團結へ針路を向けることにあるのである。(長く、續く、拍手)

だからこそ、若いカードルを指導的地位に、適時に、しかも大膽に昇進させる必要があるのである。報告期間内における黨指導の強化という活動での黨の重大な功績の一つは、黨がカードル選抜の領域において老カードルと若いカードルの組合せという方向に、特にこの針路を、下から上まで、成功裡に遂行したということであつた。

黨中央委員會は、報告期間内に、黨が、黨員及び殆ど黨員に等しい五十萬以上の若いボルシエヴイキ——その中の二割以上は婦人であるが——を國家と黨との兩方面にわたつて指導的地位に、昇進させ得たことを知り得る資料をもつてゐる。

では、今や、任務は何であるか？

任務は、下から上までのカードル選抜の仕事を一手に完全に握り、それを科學的、ボルシエヴイキ的の當然な高さにまで高めることである。

それがためには、カードルをよく研究し、昇進させ、選抜する仕事を、各種の課や部に分割することをやめて、一つの場所に集中することが必要である。

ソ同盟共産黨(ボルシエヴイキ)中央委員會内のカードル統轄局およびこれに對應する共和國、地方、州の各黨組織内のカードル課が、かかる場所とならねばならない。

三、黨の宣傳。黨員並に黨カードルのマルクス主義・レーニン主義的教育

もう一つ黨活動の領域がある。それは、非常に重要な、そして非常に責任のあるものであり、報告期間内に、その線によつて黨と黨の指導機關とを強化したところのものである。即ち、それは、口頭の、或は印刷物による黨のアジ・プロであり、マルクス主義・レーニン主義的精神による黨員並に黨カードルの教育上の活動であり、黨と黨の働き手の政治的理論的水準を高めるための活動である。

黨の宣傳事業、わが働き手達をマルクス主義・レーニン主義的に教育する事業の極めて重大な意義を、今さらいいたてる必要はないであろう。私は、ただ、黨機關の働き手だけを考慮に入れていたのではない。私は、共産青年同盟、労働組合、商業・協同組合、經濟、ソヴェト、教育、軍事、その他の組織の働き手達をも考慮に入れていたのである。黨成員の整理と、黨の指導機關を下部活動へ接近させる仕事は、満足できるように行われるであろうし、カードルの昇進、彼等の選抜、彼等の配置の仕事は、満足できるように行われるであろう。だが、すべてこれらを行うに際し、何かの理由でわが黨の宣傳が跛を引き始めるならば、わがカードルのマルクス主義・レーニン主義的教育事業が衰弱し始めるならば、これらのカードルの政治的理論的水準を向上させる吾々の事業が弱められ、そして一方、カードル自身が、これらと關連して、わが前進の見透しに興味をもつことをやめ、吾々の大業の公正さを理解することをやめ、かつ、上部からの指令を盲目的に、機械的に遂行する、大局の見えない、こせこせした事務家に轉化してしまふならば、わが國家と黨の活動はすべて、必ず病弱になつてしまわねばならない。また、國家および黨活動の、すべての部門における働き手の政治的水準と、マル

クス主義・レーニン主義的自覺とが、高ければ高いほど、活動それ自身が高度で、より成果のあるものとなり、また活動の結果はより効果的なものとなることを自明の理として認めなければならぬ。そしてこれと反對に、働き手の政治的水準とマルクス主義・レーニン主義的自覺とが、ひくければ低いほど、活動における過誤と失敗が一そう起りやすくなり、働き手自身がよいよつまらぬちつぽけなものとなり、物識りぶる、こせこせした事務家へのその變性が一そう起りやすくなり、彼等の變質が一そう確實となることを自明の理として認めなければならぬ。もしも、吾々が、活動の全部門のわがカードルを、思想的に訓練し、かつ、彼等が國內並に國際情勢に即して、自由に方針を定めることができるであらう程度に、彼等を政治的に鍛練することをよくできるならば、また、もしも吾々が彼等を、國の指導の問題を重大な誤謬なしに決定する能力をもつ、完成されたマルクス主義者・レーニン主義者にすることができるとすれば、吾々の全問題の十分の九は、すでに解決されたものと考えられる一切の根據を、吾々は有するということ、確信をもつて述べることができるのである。そしてこの任務を解決するということはいうまでもなく、吾々はできるだろう。なせならば、この任務を解決するために必要な、一切の手段と可能性とを、吾々はもっているからである。

若いカードルの養成と編成とは、わが國では、科學と技術の個々の部門によつて、即ち各専門によつて、普通行われている。これは必要なことだし、また目的に適つたことである。醫學の専門家が、同時に物理學や植物學の専門家である必要もないし、或はこの逆である必要もない。しかしながら、科學の全部門に働くボルシエヴィキが、義務としてその知識をもつていなければならぬところの科學の一部門がある。それは社會、社會の發展法則、プロレタリア革命の發展法則、社會主義建設の發展法則、共産主義の勝利に關するマルクス主義・レーニン主義の科學である。けだし、レーニン

主義者だと自稱してはいるが、自己の専門に閉じこもり、例えば數學、植物學、或は化學に閉じこもつて、自己の専門以外のことは、何一つ見ない人間を、眞のレーニン主義者のうちにかぞえることはできない。レーニン主義者は、ただ彼が好んで選んだ科學の部門の専門家としてのみ存在することはできない。即ち彼は、それと共に、自國の運命に切實な興味をもち、社會の發展法則によく通曉し、これらの法則を用うることができ、國の政治的指導に、積極的に參加することを熱望している、政治家・社會活動家でなければならぬ。このことは、勿論、ボルシエヴィキ専門家達にとつては、一つの附けくわえられた負擔であらう。しかし、これは、その結果として、大きな利益に値するような負擔であらう。

黨宣傳の任務、カードルのマルクス主義・レーニン主義的教育の任務は、社會の發展法則に關するマルクス主義・レーニン主義的科學を習得せうるようになり、全活動部門のわがカードルを援助するこゝとである。

宣傳事業の改善と、カードルのマルクス主義・レーニン主義的教育との方策についての問題は、各方面の州黨組織の宣傳者たちの參加を得て、ソ同盟共産黨（ボルシエヴィキ）中央委員會が再三審議した題目であつた。一九三八年九月における「ソ同盟共産黨（ボルシエヴィキ）歴史小教程」の出版は、この點について考慮された。「ソ同盟共産黨（ボルシエヴィキ）歴史小教程」の出版は、わが國におけるマルクス主義・レーニン主義的宣傳の、新しい發展規模の土台をおいたものであるといふことが確定された。ソ同盟共産黨（ボルシエヴィキ）中央委員會の活動の結果は、「ソ同盟共産黨（ボルシエヴィキ）歴史小教程」の出版と關連する、黨宣傳の方法について」という中央委員會の周知の決定として發表されている。

この決定により、かつ一九三七年のソ同盟共產黨（ボルシエヴィキ）中央委員會三月總會の「黨活動の諸缺陷について」の周知の決定に鑑み、ソ同盟共產黨（ボルシエヴィキ）中央委員會は、黨宣傳の領域における缺陷を除去することと、黨員並に黨カードルの、マルクス主義・レーニン主義的教育事業の改善とについて、次のような主要方策を樹てた。

一、黨のアジ・プロの仕事を一カ所に集中し、アジ・プロ課と出版課をソ同盟共產黨（ボルシエヴィキ）中央委員會内の一つのアジ・プロ統轄局に結合し、かつ各共和國、地方、州の黨組織内に、これに對應するアジ・プロ課を組織すること。

二、研究サークルによる宣傳制の偏重を正しくないものとして認め、マルクス主義・レーニン主義の根本原則の、黨員による個人的研究を、もつと適當した方法とみなして、出版物による宣傳に、講義制宣傳の組織に、黨の注意を集中すること。

三、各州の中心地に、わが下層カードル組のために、一カ年終了の再教育の講習會を組織すること。
四、わが國の多くの中心地に、わが中層カードル組のために、二カ年終了のレーニン主義學校を組織すること。

五、資格を備えた理論的にしつかりした黨カードルを養成するために、三カ年終了のソ同盟共產黨（ボルシエヴィキ）中央委員會所屬のマルクス主義・レーニン主義の高等學校を組織すること。

六、わが國の多くの中心地に、宣傳者と新聞の働き手との再教育のための一カ年終了講習會を創設すること。

七、マルクス主義・レーニン主義の高等學校に所屬させて、大學校と高等専門學校のマルクス主義・レーニン主義の講師の再教育のために、六カ月終了の講習會を創設すること。

すでに實行されつつあるが、まだ十分に遂行されていない、これらの方策の實現が、遠からず、そのよい結果をもたらすであらうということは、疑いのないことである。

四、理論についての若干の問題

重要な、實際的意義をもつ若干の理論の問題について、わが同志達の間には完全な明白さを缺き、これらの問題について、若干の混亂が存在することもまた、わが宣傳的、思想的活動の缺陷の中に算えることが必要である。私は概して國家について、特にわが社會主義國家についての問題と、わがソヴェト・インテリゲンチヤの問題とを考慮に入れているのである。

時々、次のような質問が出される。「わが國においては搾取階級は根絶されているし、もはや國内に敵對的階級はないし、壓迫すべき何者もない。このことは、これ以上國家の必要はないし、國家は死滅しなければならぬことを意味している、——それなのに、なぜ吾々は、わが社會主義國家の死滅しゆくことを助成しないのか？ なぜ吾々は、國家が終熄してしまふように努力しないのか？ この國家機構のガラクタをみんな、どこかへ打ちやるべき時期ではないか？」と。

或はまた、「搾取階級は、わが國においてすでに根絶されてしまった。社會主義は、大體として建設完成され、吾々は共產主義へ向つて進みつつある。しかし、國家に關するマルクス主義の教義は、共產主義の下では、どんな國家も存在してはならないと述べている。それなのに、なぜ吾々は、わが社會主義國家の死滅しゆくことを助成しないのか？ 古美術品博物館に國家を送り込むべき時期ではないか？」と。

これらの質問は、質問の提出者が國家についてのマルクスとエンゲルスの教義の、個々の命題を正直に暗誦したのだということを證明している。しかして、これらの質問はまた、これらの同志がこの教義の本質を理解せず、この教義の個々の命題がどんな歴史的條件の下に作り上げられたかということをよく研究せず、そして特に、現在の國際的情勢を理解せず、資本主義による圍繞の事實及びこのことから生ずる社會主義國にとつての諸危険の事實を見落していることを示している。これらの質問には、資本主義による圍繞という事實の過少評價が透いて見えるのみではない。これらの質問には、わが國に、スパイ、人殺し、妨害工作者をこつそり送りこみ、かつ、わが國に對する武力攻撃のためは、好機を捉えようと一生懸命になつてゐるブルジョア國家とその諸機關との役割と意義の過少評價が透いて見えるし、また、全くそれと同様に、わが社會主義國家と、社會主義國を外部よりの攻撃から防護するために必要な、わが社會主義國家の軍事的、懲罰、諜報諸機關の役割と意義との過少評價が透いて見えるのである。この過少評價ということには、上述した同志達のみが罪を犯してゐるのではないことを認めなければならぬ。これには、ある程度、吾々ボルシェヴィキ全部、例外なしに全部にも、罪があるのである。トロツキストとブハリン一味の上層部のスパイと陰謀工作を、資料によつてもわかるように、これらの紳士諸君が、すでに、十月革命の最初の日から、外國諜報機關のスパイとなり、陰謀活動を行つていたのである。即ち一九三七年、一九三八年に、はじめて知ることができたということは、はたして驚くに足らぬことだろうか？ どうして、吾々は、こんな重大な問題を見落すことができたのであろうか？ この失策は何によつて説明されるか？ この質問に對しては、通常次のように答えられている。即ち、吾々は、これらの人々がこうもドン底まで轉落できるとは豫想しえなかつたのだ、と。しかし、これは説明にもならぬし、况や辯明にもならない。けた

し、失策の事實は事實として残っているからである。では、かかる失策は何によつて説明されるか？この失策は、わが國を圍繞するブルジョア國家機構と、そのブルジョア國家の諜報機關の力と意義の過少評價によつて説明される。これらの諜報機關は、人々の弱さ、彼等の強い功名心、彼等の無定見を利用して、これらの人々を自己のスパイ網にたぐり込み、彼等によつてソヴェト國家機構を包圍しようとする努力しているのである。この失策は、わが社會主義國家機構と、その諜報機關の役割と意義の過少評價によつて、ソヴェト國家の下における諜報機關はまったく下らぬものであり、ソヴェト諜報機關は、ソヴェト國家を自身と同様に、まもなく古美術品博物館に送り込まれるものだというおしやべりによる、この諜報機關の過少評價によつて説明される。

どんな根據によつて、この過少評價が吾々の間に生じ得たのであるか？

それは、國家についてのマルクス主義の教義の一般的命題のあるものが完全に研究され盡しておらず、かつ不十分だということに基いて生じた。それは總括的な理論のために豊富な材料を與えたところの二十年にわたる國家的活動の實際經驗を吾々がもっていたにもかかわらず、希望をもつてこの理論的不足を好結果に補う可能性を、吾々がもっていたにもかかわらず、國家理論の問題に對する、吾々の許しがたい、不注意な態度の結果として普及されることになつたのだ。吾々は、マルクス主義の理論を、さらに研究して完成することを使命とする、ロシア・マルクス主義者の負うべき理論的義務に關する、レーニンの最も重要な教示を忘れたのだ。次に掲げるのが、この點に關してレーニンが述べているものである——

「概して、吾々はマルクスの理論を、何か、完成された、不可侵なものとしては見えていない。反對に、この理論は、社會主義者が現實からおいてけぼりになることを欲しないならば、

それらは、あらゆる方面においてさらにもっと進めなければならぬところの科學の基石のみを据えたものであることを、吾々は確信している。ロシアの社會主義者にとつて、マルクスの理論の獨立的な研究完成が特に必要だ、と吾々は考える。なせならば、この理論はイギリスでは、フランスと異なつたふうには、フランスではドイツと異なつたふうには、ドイツではロシアと異なつたふうには、特に適用されるところの、一般的指導命題のみを與えるからである」。ヘルト、ニン、全集、第二卷、四九二頁)

例えば、エンゲルスによつて與えられた、社會主義國家の發展理論の模範的定義すけを例にとつてみよう——

『屈服させておかねばならない社會階級がなくなるであらうとき、一階級の他の階級に對する支配と、生産上における現代の無政府状態に根を下している生存競争がなくなるであらうとき、ここから發生するところの衝突と暴力とが除去されるであらうとき、その時には、もはや壓迫し抑制すべき何者もなくなり、この機能を現在執行している國家權力の必要は消滅するにいたる。國家が全社會の、眞の代表者として出現する最初の行爲、即ち、生産手段の社會的所有への轉化は、國家の資格で行う最後の獨立行動となるであらう。社會關係における國家權力の干涉は、しだいに餘計なものとなり、かくしてひとりで止んでしまふであらう。人に對する支配は、物に對する支配と生産行程の指導とによつてとつて代わられる。國家は「廢止」されるのではなくて、それは死滅するのである。』。(エフ・エンゲルス、「反デューリング論」、黨出版所發行、

一九三三年版、二〇二頁)

エンゲルスのこの命題は正しいか？

そうだ、正しい。ただし、次の二つの条件のうち、どつちか一つの場合においてただしい。(イ) 國際的要因から豫め自己を隔離し、研究の便宜上、國と國家を國際的環境から孤立させて、た國の内部的發達という見地からのみ、社會主義國家を研究する場合、或は、(ロ) 社會主義がすべての國で、もしくは大多數の國ですでに勝利し、資本主義による圍繞の代りに、社會主義による圍繞が存在し、外部からの攻撃の脅威はもはやなく、軍隊と國家との強化の必要も、もはやないと假定する場合である。

ところで、もしも、社會主義が、單獨に、ある一國だけで勝利し、そのために、國際的情勢から自己を隔離することが、どうしても不可能なときには、——こんな場合には一體、どうなるか？ エンゲルスの定義すけは、この問題に對して答えを與えていない。エンゲルスは、本來、かかる問題を自ら提起してはいない。従つて、彼にはこの問題に對する答えのある筈はなかつたのである。エンゲルスは、社會主義はすでに、すべての國で、或は大多數の國で、多かれ少なかれ同時に勝利したという假定から出發している。従つて、エンゲルスは、ここでは、ある一國の、ある具體的な社會主義國家を考察しているのではなくて、大多數の國における社會主義の勝利という事實の存在を假定して、社會主義國家一般の發展を考察しているのである。これを定義すければ、「社會主義が、大多數の國で勝利したとしておこう。そこで問うが、かかる場合に、プロレタリア的、社會主義的國家は、どんな變化を蒙らねばならないであろうか？」ということになる。問題の、これらの一般的、抽象的性質によつてのみ、社會主義國家に關する問題を考察するにあつて、エンゲルスが國際情勢、國際環境というような要因から、全く自己を隔離しているという事實を説明することができるのである。

しかして、このことから、社會主義國家一般の運命に關するエンゲルスの一般的定義すけを、單獨に、ある一國だけにおける、即ち自己の周圍に、資本主義による圍繞が存在し、外部からの軍事攻撃の脅威に曝されており、それがために、國際的環境から自己を隔離することができず、かつよく訓練された軍隊とよく組織された懲罰機關と、強力な諜報機關とを、自己の統制下にもたねばならず、従つて、外部よりの攻撃から、社會主義の獲得物を防護する可能性をもつために、十分強力な自己の國家をもたねばならぬ國における、社會主義の勝利の、特殊な、具體的な場合にまで及ぼしてはならないということになるのである。

吾々の時代から、四十五年乃至五十五年もへだたつてゐるマルクス主義の大家達に對して、遠い將來における、個々別々の國の歴史の有爲轉變の、ありとあらゆる場合を豫見することを要求することはできない。マルクス主義の大家達が吾々のために、個々別々の國で、五十年乃至百年後に發生するかも知れないところのありとあらゆる理論上の問題に對して、出來上つた解決案を作成し、それによつて、吾々マルクス主義の大家達の後裔は、圍爐裏ばたに安閑と寢そべり、出來上つた解決案を鵜呑みにする可能性をもちうるように要求するなどは笑止なことであろう。(満場哄笑)。しかし、吾々は、現代のマルクス主義・レーニン主義者に、彼等が、マルクス主義の個々の一般的命題の暗記に制限しないように、また、かれらがマルクス主義の本質を深く究めるように、彼等が、わが國における二十カ年の社會主義國家の存在の經驗を顧慮することをよく學ぶように、最後に、彼等が、この經驗に立脚して、マルクス主義の本質から出發し、マルクス主義の個々の一般的命題を具體化し、それらをよりの確に表現し、よりよくするように要求することができると、また要求せねばならない。レーニンは一九一七年八月、即ち十月革命とソヴェト國家樹立の數カ月前に、彼の卓越した書「國家と

革命」を著した。この書の主要な任務を、レーニンは、日和見主義者側の歪曲と俗悪化から、國家に關するマルクスとエンゲルスの教義を擁護することにあるとした。レーニンは、「國家と革命」の第二部を書こうと準備した。その中で、レーニンは、一九〇五年と一九一七年のロシア革命の經驗の、主要な總括をしようと期していたのであつた。レーニンが彼の著書の第二部で、わが國におけるソヴェト權力の存在の經驗に立脚して、國家理論を一層深く研究完成させ、かつ一層發展させることを考慮していたということは、疑い得ないのである。しかし、死が彼にこの任務を遂行させなかつたのであつた。しかして、レーニンが果し得なかつたことは、當然彼の弟子達が果さなければならぬ。

(暴風のような拍手)

國家は、敵對的諸階級への社會の分裂という基礎の上に發生し、少數なる搾取者の利益のために、搾取される大多數を拘束するために發生した。國家權力の武器は、主として、軍隊に、懲罰機關に、諜報機關に、監獄に集中されている。國家の活動を性格づける二つの基本的機能、國內的（主要なもの）な機能は、搾取されている大多數を拘束することであり、國外的（主要ではない）な機能は、他國家の領土を犠牲として、自己の支配階級の領土を擴張し、或は自己の國家の領土を他國家側の攻撃から防護することである。奴隸所有制と封建制度の下においては、事情はこのようであつた。資本主義の下においては、事情はこのようなのである。

資本主義を打倒するためには、單に、ブルジョアジーを權力的地位からひきおろし、資本家を收奪するのみならず、ブルジョアジーの國家機關、即ち、その舊軍隊、その官僚主義的官吏群、その警察を殘らず破砕し、そして、その代りに、新しいプロレタリア國家制度、新しい社會主義國家を樹立することが必要であつた。周知のように、ボルシェヴィキは、實にこのように行動したのであつた。し

かじ、それだからといって、新しいプロレタリア國家は、プロレタリア國家の要求に適應できるように變えた舊國家のある機能を保持し得ないということには決してならない。それだからといって、わが社會主義國家の形態が、いつまでも不變のままではなければならぬとか、わが國家の一切の本源的な機能が、將來においても、そつくり保存されねばならないということには、なおさらならないのである。事實、わが國家の形態は、わが國の發展と國外の環境の變化とに従つて、變りつつあるし、またこれからも變るであらう。

レーニンが次のように語つてゐるのは、全く正しい——

「ブルジョア國家の形態は非常に種々雜多であるが、しかしその本質は一つに歸する。即ちこれらの國家はすべて、それぞれ異なるようでも、終局においては、必ず、ブルジョアジエの獨裁である。資本主義から共産主義への過渡には、勿論、非常に豊富な、かつ、種々様々の政治形態を創り出すにはおかないが、それにもかかわらず、本質は必然的にただ一つ、即ちプロレタリアートの獨裁である」。——（レーニン全集、第二一卷、三九三頁）

十月革命以來、わが社會主義國家は、その發展において、二つの主要な段階を經過した。

第一の段階、これは、十月革命から搾取階級の絶滅にいたるまでの時期であつた。この時期の基本的任務は、打倒された階級の反抗を彈壓し、干涉軍の攻撃から國を防衛することを組織し、工業と農業を復舊させ、資本主義的分子の絶滅のための條件を準備することであつた。右に應じて、わが國家は、この期間内に、二つの基本的機能を實行した。第一の機能は、國內の打倒された階級に對する彈壓である。この點では、わが國家は、屈服しないものを彈壓することを機能としたところの從來の諸國家と、外見上類似しているように思われるが、しかし、それは、わが國家が勤勞する大多數の者の

利益のために、搾取する少数の者を壓迫しているのに、從來の諸國家は、搾取する少数の者の利益のために、搾取される大多数の者を壓迫したという、根本的な差異をもつての上のことである。第二の機能は、外部の攻撃から國を防禦することである。この點でもまた、わが國家は、武器をとつて自國を防禦した從來の諸國家と、外見上類似しているように思われるが、しかしそれは、わが國家が勤勞する大多數の者の獲得物を、外部の攻撃から擁護しているのに、從來の諸國家は、かかる場合に、搾取している少数の者の富と特權とを擁護したという、根本的な差異をもつての上のことである。もう一つここに第三の機能があつた。それは、わが國家機關の經濟的・組織的活動と文化的・教育的活動とであつて、新しい社會主義的經濟の芽生えを發展させ、社會主義の精神で、人々を再教育することをその目的としたものであつた。しかし、この新しい機能は、この期間内に、重大な發展をこなかつた。

第二段の段階、これは、都市および農村の資本主義分子の絶滅から、社會主義的經濟制度の完全な勝利と新憲法の採用にいたるまでの時期であつた。この時期の基本的任務は、全國にわたつて社會主義經濟を組織することと資本主義分子の最後の殘滓を絶滅すること、文化革命を組織すること、國防のために、完全に現代的な軍隊を組織することであつた。これに應じてわが社會主義國家の機能も變化した。國內における軍事的壓迫の機能は消滅し、死滅した。なせならば、搾取は根絶され、もはや搾取者はなく、抑壓すべき何者もないからである。抑壓の機能の代りに、國家は人民の財産を盜む者と着服する者から社會主義的財産を保護する機能をもつようになった。外部からの攻撃から國を軍事的に防衛する機能は完全に保存され、従つて、赤軍と赤色海軍、そしてまた、外國諜報機關によつて、わが國にこつそり送り込まれるスパイ、人殺し、妨害工作者を狩りつくし、罰するために必要な懲罰機

關と諜報機關も全く同様に保存された。國家機關の經濟的・組織的活動と文化的・教育的活動の機能も保存され、かつ完全に發展することができた。今や、國內におけるわが國家の基本的任務は、平和的な、經濟的・組織的活動と文化的・教育的活動ということである。わが軍隊、わが懲罰機關、わが諜報機關についていえば、それらは自己の銳鋒を、すでに國內にではなく國外に、即ち外敵に向けかえている。

知られるように、今や吾々は、歴史上かつてみなかつたところの、そして、その形態と機能とにおいて、第一段階の社會主義國家とは著しく相違する、全然新しい社會主義國家をもつている。

しかし、發展は、この點でふみ止まっていることはできない。吾々は、さらに前へ、共產主義に前進しつゝある。さて、わが國は、共產主義の時期にも、國家を保存するだろうか？

然り、資本主義による圍繞が絶滅されない限り、外部からの軍事的攻撃の危険が根絶されてしまわない限り、國家は保存される。しかも、わが國家の形態が國內並に國外の環境の變化に對應して、再び變化するであろう、ということとは、わかりきつたことだ。

否、もしも、資本主義による圍繞が絶滅されるならば、資本主義による圍繞が、社會主義による圍繞によつてとつて代られるならば、國家は保存されず、かつ死滅してゆくであろう。

社會主義國家に關する問題についての事情は、このようである。

第二の問題、それはソヴェト・インテリゲンチヤについての問題である。

この問題にも、丁度國家に關する問題と同じ様に、若干の不明確さと混亂とが、わが黨内に存在している。

ソヴェト・インテリゲンチヤの問題に對する黨の立場が全く判然としていられるにもかかわらず、わが黨内には、依然としてソヴェト・インテリゲンチヤに對する敵對的な、黨の立場に合致しない見解が普及されている。周知のように、これらの間違つた見解を懐いている人たちは、ソヴェト・インテリゲンチヤを異分子的勢力、労働者階級と農民に敵對的な勢力とさえみなして、彼等に對して蔑視的な横柄な態度を常にとつてゐる。實際インテリゲンチヤは、ソヴェトの發展期間内に、その構成の點でも、またその状態の點でも、人民に接近し、人民と忠實に協力して、根底から變化してしまひ、それによつて舊ブルジョア・インテリゲンチヤとは根本的に相違してゐる。しかし、これらの同志にとつては、そんなことは何の關りもないように思われる。彼等は、インテリゲンチヤが地主と資本家の奉公人であつた舊い時代に根據をもつていた見解と態度を、ソヴェト・インテリゲンチヤに對して、不正にも、そのままうつし、古い笛を吹きつづけているのである。

古い、革命前期の、資本主義の條件下では、インテリゲンチヤは、先ず第一に有産階級の人々、即ち、貴族、工業家、商人、クラーク等々で構成されてゐた。インテリゲンチヤの陣營内には、町人、小役人出身のもの、また農民と労働者出身の者もあつたが、彼等は、インテリゲンチヤの間で、決定的な役割を演じてはゐなかつたし、また演ずることもできなかつた。全體としてインテリゲンチヤは、有産階級に養われ、これらの階級に奉仕した。それゆゑに、わが國の革命的分子、第一に労働者がインテリゲンチヤに對して、しばしば憎しみに轉化する不信を抱いたということはわかりきつたことである。實際、舊インテリゲンチヤの間からも、労働者階級の立場に立ち、最後まで、自分の運命を労働者階級の運命と結びつけた、勇敢で、革命的な人々が、ごく少數に、または幾十人かは

あつた。しかし、これらの人々はインテリゲンチヤの間では、あまりに少なかつたし、また彼等は、全體としてのインテリゲンチヤの相貌を變えることはできなかつた。

しかしながら、インテリゲンチヤに關する事情は、十月革命の後、外國の武力干涉が壞滅された後、特に、搾取の根絶と社會主義經濟制度の確立とが新憲法を國に與え、それを實現する現實的可能性を創り上げたときである、工業化と農業の集團化との勝利の後には、根底から變化した。舊インテリゲンチヤの中の、最も影響力をもち、最も勝れた熟練をもっている部分は、すでに十月革命の最初の日に、インテリゲンチヤの爾餘の大多數からはなれて、ソヴェト權力に對する鬭争を聲明し、サボタージユをはじめた。この部分は、この行爲に相應する懲罰を受け、ソヴェト權力の機關によつて粉碎され、蹴散らされた。その後、彼等のうちで生残つた大多數は、インテリゲンチヤの陣列から、自ら自己を抹殺し、妨害工作者として、スパイとして、わが國の敵に徵募されたのであつた。上述のものよりは熟練の程度は低い、もつと數の多い舊インテリゲンチヤの他の部分は、「もつとよい時期」の到來するのを待つて長い間、おなじ場所をうろついていたが、その後、諦めて、勤め人になることに決定したらしく、ソヴェト權力と平和に暮すことを決意した。舊インテリゲンチヤのこのグループのかなりな部分は、すでに老いぼれてしまひ、現役から去りはじめてゐる。舊インテリゲンチヤの第三の部分、主として通常のインテリ、第二の部分よりもさらに低い熟練しかもつていない部分は、民衆に結合し、ソヴェト權力の側に来た。この部分にとつては、學習を完成することが必要であり、そして實際この部分は、わが最高學府で學習を完成させはじめたのであつた。しかし、舊インテリゲンチヤの分化と瓦解のこの苦難な過程と並んで、新しいインテリゲンチヤの形成、動員、勢力集結の急激な過程が行われた。労働者階級、農民、勤勞インテリゲンチヤ陣列からの出身者である幾

十萬の青年達が、大學校、高等専門學校または技術専門學校に入學し、學校を卒業してかえり、インテリゲンチヤのやや稀薄になつた陣列を補充した。彼等は、インテリゲンチヤに新しい血を注入し、かつそれを、新しいふうに、ソヴェト的に潑刺とさせた。彼等は、インテリゲンチヤの全相貌を自分と同じふうに、根本的に變えてしまつた。舊インテリゲンチヤの殘滓は、新しいソヴェト的民衆的インテリゲンチヤの内部深く、溶けこんでしまつた。かくして、人民と密接に結びつき、その大多數が、誠實と忠誠をもつて人民に奉仕しようとする覺悟のできた、あたらしいソヴェト・インテリゲンチヤができたのである。

以上の結果として、ブルジョアの舊インテリゲンチヤとは、その構成においても、またその社會的・政治的相貌においても、根本的に相違する非常に多くの、新しい民衆的な社會主義的インテリゲンチヤを、今や吾々はもっているのである。

インテリゲンチヤに對する不信と彼等との鬭争の必要を教示していたインテリゲンチヤに關する古い理論は、地主と資本家に奉仕していたところの、革命前の舊インテリゲンチヤに對しては、完全に適當していた。だが今や、この理論は時代おくれであり、それはわが新しいソヴェト的インテリゲンチヤに對しては、もはや適當なものではない。新しいインテリゲンチヤのためには、労働者階級と農民の利益のために、彼等に友誼的に對し、彼等をよくいたわり、彼等を尊敬し、彼等と協力する必要を教示するところの、新しい理論が必要なのである。

たぶんこれで、明白になつたであらうと考える。

况や、インテリゲンチヤの状態における、これら一切の根本的變化があつた後にも、ブルジョア・インテリゲンチヤに反對して向けられた古い理論を、その根本上において社會主義的インテリゲンチ

ヤとしてのわが新しいソヴェト・インテリゲンチヤに、適用しようとして企圖する人々が、まだわが黨内にいるという事は、驚くべく、かつ奇怪なことである。これらの人々は、ごく最近まで工場やコルホーズで、スタハーノフ運動者のに働いていた労働者と農民達が、その後、教育を受けるために大學校や高等専門學校に入つて學習すると、それがために、ホン物の人間でなくなり、第二流の人間になると確言しているわけになる。これでは、教育とは、有害にして、かつ危険なものであると結論せざるを得ない（哄笑）。吾々は、全労働者、全農民を、文化的な、教育あるものになりたい、そして、吾々はそれを、今にやりとげるだろう。しかし、これらの奇怪な同志達の見解によれば、この種の思いつきは、それ自身の中に、大きな危険をふくんでいることになる。なせならば、労働者農民が文化的になり、教育のあるものになるであろう後には、彼等は、第二流の等級に屬する人間に編入される危険に直面するかも知れなくなるからである（満場哄笑）。これら奇怪な同志達が、今に時代おくれや、無智蒙昧、暗愚、迷蒙を稱讚するところまで轉落するにいたるであろうということは、大いにありうることである。これもまた、わかりきつたことだ。理論的踏みはずしは、決してよい方に導きもしなかつたしまた導くことはできない。

わが新しい社會主義的インテリゲンチヤについての問題は、このようになっていたのである。

* * *

黨の一そのの強化という領域における吾々の任務は、次のようである。

一、黨員の意識水準を高め、よく審査され、共産主義の大業に忠實な同志達のみを、個人的選別の方法で入黨させて、黨の成員を系統的に改善すること。

二、黨指導機關の指導的活動を、もつともつと實行的に、具體的に、できるだけ會合式や事務室式でなくするために、指導機關を下部活動に接近させること。

三、カードル選抜の仕事を中心集中化し、カードルを注意深く養成し、働き手の長所と短所を念入りに研究し、若い働き手達を勇敢に昇進させ、カードルの選抜と配置の事業を、黨の政治方針の要求に適應させること。

四、黨のアジ・プロの事業を中央集中化し、マルクス主義・レーニン主義思想の宣傳を擴大し、わがカードルの理論的水準と政治的鍛練とを向上させること。

* * *

同志諸君！ 私は今、この報告演説を終ろうとしている。

私は、報告期間内に、わが黨がたどつてきた道を、概括的に敘述した。この期間内における黨と黨中央委員會との活動の結果は、周知のとおりである。吾々は缺陷と誤謬とをもつていた。黨と黨中央委員會とは、それらを隠蔽しなかつたし、かつ、それを矯正することに努力した。また、吾々を有頂天にさせかねない重大な成功と大きな功績もあつた。

主要な總結果は、わが國の労働者階級が人間による人間の搾取を根絶し、社會主義制度を確立して、自己の大業の公正さを、全世界に證明したことである。ここに、主要な總結果があるのである。なせならば、それは、労働者階級の力と労働者階級の終極的勝利の必至とに對する確信を強化させたからである。

全世界のブルジョア階級は、人民は資本家と地主なしには、商人とクラークなしにはやつてゆけない、と斷言した。わが國の労働者階級は、人民は擯取者なしに立派にやつてゆけることを事實をもつて證明した。

全世界のブルジョア階級は、舊ブルジョア秩序を破壊した労働者階級はこの古いものの代りになる、どんな新しい秩序の建設も、完成する能力をもつていないと斷言している。わが國の労働者階級は、彼等が古い制度を破壊できるのみならず、新しい、もつとよい、社會主義制度、しかも、恐慌も失業も決して知らないような制度の建設を完成することが完全に出来るということを、事實をもつて證明した。

全世界のブルジョア階級は、農民は社會主義の道を進む能力がないと斷言した。わが國のホルホーズ農民は、彼等が立派に社會主義の道を進むことができると、事實をもつて證明した。

全世界のブルジョア階級とその改良主義的腰巾着共が特に獲得しようと努力している主要なもの、それは、労働者階級から、自己の力に對する確信、彼等の勝利の可能なことと必至であることに對する確信を根こそぎに引きぬき、そうすることによつて、資本主義の奴隸制度を永遠なものとするものである。なせならば、ブルジョア階級は、資本主義がまだ打倒されずに、依然として存在をつすけていられるとすれば、それは決して、資本主義自身の質が良いからではなくて、プロレタリアートが自己の勝利の可能なことについて、まだ十分な確信をもつていないからなのだ、ということを知っているからである。この方向におけるブルジョア階級の努力が全く不成功に終るにきまつているということはできない。ブルジョア階級とその労働者階級内の手先とが、疑惑と不信の毒素をもつて、労働者階級の精神をある程度に中毒させ得たことを認めることが必要である。もしも、わが國労働者階級

の諸成功が、その闘争と勝利とが、資本主義諸國の労働者階級の意氣を高め、自己の力に對する確信と自己の勝利に對する確信とを、彼等の間に強化するに役立つならば、わが黨は、黨の活動は無益ではなかつたといふことができよう。そして、必ずそうなるであろうといふことは疑わなだけでよからう。
 (暴風のような、長くつづく拍手)

勝利に輝くわが労働者階級萬歲！ (拍手)

勝利に輝くわがコルホーズ農民萬歲！ (拍手)

わが社會主義的インテリゲンチヤ萬歲！ (拍手)

わが國諸民族の偉大なる親睦萬歲！ (拍手)

ソ同盟ボルシエヴィキ共産黨萬歲！ (拍手)

(全代議員起立して、長くつづく拍手をもつて、同志スターリンに挨拶を送る。「ウラト！同志スターリン萬歲！偉大なスターリン、ウラト！われらの敬愛するスターリン、ウラト！」の叫び)

註解

一、クラークとは、作男を使用するとか、或る高利をもつて金を借すとかして他人の努力を苛酷に搾取する富農である。レーニンの言葉によると、「クラークは、他國の歴史の上で、一度ならず地主、皇帝、僧侶、資本家たちの權力を復興させた、最も野獸的な、最も暴虐な、最も野蠻的な搾取者である」と。レーニンはいふ——「同志労働者諸君！最後の決戦へ進もう！」（レーニン選集一九四三年版、第二卷、三一七頁）（本文五五頁参照）

二、「シブカ丘静穩、萬事異常なし」——一八七七年——一八七八年における露土戦争の話に關連をもつロシアの言い現し方である。シブカ丘での戦で、ロシア軍は莫大な損失を蒙つた。しかるに、ツアー軍隊の司令部は、その公報で、「シブカ丘静穩、萬事異常なし」と報道したのであつた。（本文六六頁参照）

三、カデット——「人民自由」黨とも自稱した、ロシアの自由主義・君主主義的ブルジョアジエの「立憲民主」黨の略稱。カデットの黨は、一九〇五年十月に創立された。（本文七八頁参照）

四、召還主義（オトゾヴァーチ——召還するの意——というロシア語を語源とする）。反動時代（一九〇八年——一九一二年）に、ボルシェヴィキ黨陣營内に生じた日和見主義的小ブルジョア思潮。召還主義者は國會から社會民主黨の議員を召還し、労働組合その他合法的労働團體内での活動を拒否することを要求したのであつた。（本文一一四頁参照）

五、マニロフ主義——お人好しでなまけもので空想的なこと。マニロフというのは、ゴーゴリの作品「死せる魂」に登場する人物中の一人である。（本文一二六頁参照）